

博士学位請求論文

指導教員 門 田 誠 一 教授

論 題 「伊勢斎宮の基礎的研究」

佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻

田 阪 仁

伊勢齋宮の基礎的研究

目次

序章・研究の目的と方法	(4)
第一部・中国古代における「齋宮」の特質	
第一章 中国古代の民間祭祀にみる齋宮	
第一節 はじめに	(25)
第二節 河伯娶婦と齋宮	(26)
第三節 神祭りと犠牲	(29)
第四節 婦女犠牲伝承と齋宮	(32)
第五節 結びにかえて	(34)
第二章 中国古代の皇帝祭祀と齋宮	
第一節 はじめに	(47)
第二節 齋戒とその場所	(47)
第三節 「齋宮」関係記事の概説	(50)
第四節 その他の「齋宮」	(58)
第五節 まとめ	(60)
第二部・「齋宮」の日本的受容と展開	
第一章 『日本書紀』に見える齋宮とその意味	
第一節 はじめに	(74)
第二節 『日本書紀』に見える齋宮	(75)
第三節 まとめ	(82)
第二章 天武紀七年の齋宮	
第一節 はじめに	(86)
第二節 天武親祭の齋宮	(87)
第三節 先行研究にみる解釈	(89)
第四節 早魃下における天武親祭	(92)
第五節 まとめ	(100)
第三章 伊勢齋内親王の呼称をめぐって	
第一節 はじめに	(107)
第二節 「齋内親王」の正統性	(108)
第三節 呼称の使い分け	(114)
第四節 初齋宮と初齋院	(115)
第五節 むすび	(117)
第三部・伊勢齋宮史の基本的用語	
第一章 齋内親王の「退下」と「帰京」	
第一節 はじめに	(125)
第二節 定義の再確認	(125)
第三節 初齋院・野宮の場合	(130)

第四節	まとめ	(131)
第二章	忌詞と「御汗殿」	
第一節	はじめに	(135)
第二節	両説の比較	(136)
第三節	『大神宮諸雑事記』の記事	(140)
第四節	むすびにかえて	(141)
第三章	「別れの御櫛」考	
第一節	はじめに	(148)
第二節	発遣儀礼に見る髪上げと小櫛	(149)
第三節	神婚儀礼から小櫛へ	(153)
第四節	「むらに別れ」の櫛と呪力	(155)
第五節	むすび	(160)
第四部	伊勢斎宮史における諸問題	
第一章	伊勢斎宮の立地とその歴史的背景	
第一節	はじめに	(170)
第二節	先行研究の概要と疑問点	(170)
第三節	伊勢斎宮の立地条件と背景	(172)
第四節	まとめ	(184)
第二章	伊勢河口頓宮考	
第一節	はじめに	(194)
第二節	河口頓宮を経由した斎王	(194)
第三節	「関宮」をめぐる旧説(江戸・明治期)	(199)
第四節	「関宮」をめぐる旧説(昭和期)	(199)
第五節	伊勢河口頓宮跡の推定地	(203)
第六節	むすび	(206)
第三章	伊勢斎宮における墳墓の削平と方格地割	
第一節	はじめに	(212)
第二節	都城建設にみる勅の背景と中国思想の影響を探る	(212)
第三節	平城京の建設事業と古墳の削平	(215)
第四節	墳墓の削平と方格地割	(220)
第五節	「六基」の古墳の削平時期とその背景	(231)
第六節	むすび	(234)
第四章	「神火」と伊勢斎宮の焼亡事件	
第一節	はじめに	(245)
第二節	天火から神火へ	(245)
第三節	伊勢斎宮の移転と氏子内親王	(249)
第四節	伊勢神郡内における諸矛盾の表面化	(250)
第五節	九世紀前半代の火災と社会情勢	(255)
第六節	まとめ	(259)

第五章 九世紀齋宮寮における「目代」再考

第一節 はじめに (271) 第二節 墨書の積文と土器の年代 (271) 第三節 「目代」墨書土器の使用実年代 (274)

第四節 伊勢齋宮寮における「目代」 (278) 第五節 「棕人」、「蔵長」墨書土器 (280)

第六節 むすび (282)

終章 本研究の成果と今後の課題 (288)

表および図版

・表一…歴代齋戒規定抄	(49)
・表二…天武朝～文武朝の災異記事	(94)
・表三…齋宮齋院呼称一覧	(111)
・表四…退下と帰京関係記事	(127)
・表五…齋宮跡の時代別遺構件数	(185)
・表六…平城京における古墳の削平	(216)
・表七…齋宮跡における墳墓の削平	(223)
・第一図…齋宮の位置と地理的環境	(175)
・第二図…史跡内を走る古道(官道)	(185)
・第三図…伊勢川口地区地形図	(200)
・第四図…川口頓宮(関宮)推定地	(205)
・第五図…方格地割を囲む古墳群	(222)
・第六図…SX4310出土須恵器長頸壺	(222)
・第七図…目代・少允殿墨書土器	(273)
・第八図…主要遺構の配置と変遷(第八三～八四次調査)	(276)
・第九図…棕人・蔵長墨書土器と遺構図(第八二～一一次調査)	(273)

序章 研究の目的と方法

(一) はじめに

伊勢斎宮の研究にとって最も基礎的な諸問題について、いくつかの観点から考察するために本論文においては大きく四つの主題を掲げた。その第一部「中国古代における斎宮の特質」では、わが国における「斎宮」の原点ともいえるべき中国の祭祀儀礼に登場する「斎宮」の特質を本論文の冒頭にあたって明らかにしようと考えた。そのために、民間信仰(第一章)と皇帝祭祀(第二章)との両面からその課題に取り組んでいる。第二部「斎宮の日本の受容と展開」では、その中国からの外来漢語「斎宮」をわが国の古代においてはいかに摂取・受容し、その後どのように展開・変容して定着していったかを『日本書紀』における具体的な用法事例、斎内親王に対する呼称などを中心に考察し、多様性を持った「斎宮」が徐々に伊勢斎宮に専用の日本語として形成されていく跡をたどる(第一章～第三章)。

以上のような基本的認識を踏まえた上で、実際に伊勢斎宮の研究をすすめるに当たっての留意すべき問題点を改めて大きく二部(第三部・第四部)に分けて考察しようと考えた。

第三部「伊勢斎宮史の基本的用語について」は、実際の伊勢斎宮の歴史や制度などを種々考察する上で、これまでややもすると誤解されがちでもあった基本的な二、三の用語概念について、その語義や問題点を明らかにして提示することに努めた(第一章～第三章)。そして最後の第四部「伊勢斎宮史における諸問題」では、伊勢斎宮の立地問題、河口頓宮の所在地、方格地割計画素案の初現時期、伊勢斎宮における神火と焼亡事件、九世紀斎宮寮における「目代」の実像など五項目の課題にしばって、主に国史跡斎宮跡の発掘調査成果などを生かしながら、またみずからのフィールドワークの成果も一部採り入れて論述し、従来の説を批判的に継承しつつ、将来への課題へと繋げるべく卑見を述べようとしたものである(第一章～第五章)。

総じて、あくまでも基礎的な研究ではあるが、なお未解決の課題等も含まれており、これを今後の研究発展に向けた礎とするものである。

(二) 各論の目的と研究方法

第一部 中国古代における「斎宮」の特質

第一章…中国古代の民間信仰にみる斎宮

本章は、同名のタイトルで『佛教大学大学院紀要』^①に発表したものに、その後の知見も加え、論旨を変えずに部分的に改訂増補したものである。

中国では戦国時代をさかのぼる古い時代における「斎宮」の存在を実証する史料(例えば甲骨文字や金石文など)は今の所は知られていな

い³³⁾。したがって現状では、戦国時代魏の鄴における民間の巫術的な河神祭祀の伝承記事に登場する「斎宮」が『国語』周語の「斎宮」とならんで古いものである。本章では『史記』滑稽列伝（猪少孫後補部分）に見えるその事例を唯一の直接的史料とし、本朝における伊勢斎宮との比較を念頭におきつつ、当時の「斎宮」の実態を記述に即して解明することを主たる目的としている。そのため、滑稽列伝の当該記事を出来る限り忠実に読み解くことを前提に作業を進めた。

これまで該故事は「河伯娶婦」とか「西門投巫」³⁴⁾などの名称でも広く親しまれて来たものであるが、一方では、単に文学的方面のみならず、歴史学の分野においても研究対象にされてきたものである³⁵⁾。しかしその議論の性格上、「斎宮」自体を中心に捉えたものは少なく、副次的に言及されることが多かった。ここではその点を克服しようとして、中国古代における他の民間祭祀事例との比較や、より広く外国の民俗事例にも類例を渉猟して、鄴における斎宮の実態だけにとどまらず、その祭祀伝承記事における虚構性についても考察を深めるよう努めた。そういう作業の過程で参考になった研究の一つは、岡本秀典氏の中国における墳墓の発掘調査成果にもとづく階層性の分析結果であった³⁶⁾。中国古代の王権祭祀における具体的な動物ないし人身犠牲の問題からは、本章で採り上げた民間祭祀の人身犠牲についてもより具象的な見通しをえることができ、当該列伝の記事などを批判的に訓むのにも役立ったからである。

併せて、不十分なが本朝の「斎宮」との共通点や相容れない相違点にも言及して、可能な範囲で相互の比較もおこなった。その結果、戦国魏の「斎宮」には宗教儀礼のプリミティブな次元における諸要素（例えば、若き女性が主人公、沐浴潔斎、一定期間の忌み籠もり、衣裳など）において、伊勢斎宮にも付随する要素を僅かながら認め得ると考えた。なお、故事における「斎宮」の語自体は、前漢平帝〜成帝代に補筆された可能性もこれを否定できないとの見通しをもっている。

第二章・中国古代の皇帝祭祀と斎宮

本章は、かつて『斎宮歴史博物館 研究紀要三』誌上に発表した初歩的な旧稿「中国の斎宮に関する予備調査」³⁷⁾を全面改訂して、新たに書き直したものである。旧稿では「藉田儀礼の斎宮」だけを取り扱ったが、今回は皇帝祭祀のほぼ全般を対象としている。

この章では民間信仰ではなく、各種の皇帝祭祀の記事に散見されるそれぞれの「斎宮」の実態を解明することが第一の目的である。もとより、中国には日本の「斎王制度」に相当する制度はないが、親祭か有司撰事かにかかわらず、皇帝に直接かかわる祭祀である点ではわが伊勢斎宮を考察する上でもやはり重要なフィールドである。各種の皇帝祭祀における斎宮の性格や役割など、その特質を抽出できれば、日本に輸入・摂取された初期「斎宮」の語の多様性や性格をより明確に映し出すにも役立つのではないかと考え、対象とする時期を唐代までに限定して、祭祀ごとに斎宮に関係する具体的な記述を求めてその特徴を概観した。ただ多くの場合、建物の規模や構造などより具体的、詳細な情報

はないため、今後の現地における発掘調査等の成果をまつ以外には術がないというのが現実であるように思う⁶⁰。

そこで、祭祀前におこなわれる斎戒（散斎・致斎）が「斎宮」に直接関係するのは明らかなので、漢代から唐代に至るまでの斎戒期間の変遷やその場所に関して史料を渉猟し、一覧表にまとめて参考に供し、執筆の便宜をも図った。それによると、斎戒日数は漢代以来十日（散斎七・致斎三）だったが、隋代に七日（散斎四・致斎三）に短縮された。それは大祀・中祀・小祀の三分の成立と軌を一にしている。但しその同じ発想の起点は後漢末にもあったことを仲長統らの議論を紹介して考察してみたところである。なお、『大唐開元礼』にいう「致斎」一日を行宮（斎宮）で行うというような規定が実際に行用されるのはその成立から数十年後のこと⁶¹であったという。

これらを踏まえて、便宜的に皇帝親祭による（ア）籍田儀礼、（イ）封禪儀礼、（ウ）祀天祭地、（エ）宗廟儀礼、および（オ）その他の斎宮に分けて直接斎宮に言及している史料を各三件に限定し、順次その内容を検討しながら、それぞれの斎宮の実態解明に努めた。もともと、その作業を進めるに当たっては、主に金子修一氏の業績⁶²に依拠しなければならない面が多々あり、同氏の論考およびそこに引用されたその他の関係論文等から得た知識も援用したのは当然である。その過程で、それら定期的ないし恒例の祭祀儀礼とは別に、旱魃等の非常時における臨時の親祭にも「斎居於斎宮（斎宮ニ斎居ス）」という事例のあることを確認しえたことが、第二部第二章で天武紀七年にみえる倉梯斎宮の性格などを考察するうえでも大いに役立ったのは幸いであった。

第二部 「斎宮」の日本の受容と展開

第一章…『日本書紀』にみえる斎宮とその意味

第一部で概観した「斎宮」の語が、少なくとも『日本書紀』成立以前には日本へも輸入・摂取されている。そこで、わが国の六国史の筆頭に位置する『日本書紀』の中では、果たして外来語「斎宮」は当初どのような意味において使用されているのかを明らかにしようと考えた。歴史記述におけるその原初的な現れ方を検証するために、垂仁紀二十五年三月丁亥朔丙申条、神功皇后紀九年春二月および三月壬申朔条、天武紀二年夏四月丙辰朔己巳条、同三年冬十月丁丑朔乙酉条、のそれぞれに登場する「斎宮」について改めて各条文の訓みと解釈とを確認しなおすと共に、それぞれの「斎宮」がどのような性格・機能をもつ施設として描かれているのかを明らかにすることが本章の目的である。（ただし、天武紀七年の斎宮だけは従来から問題が多く、次章に単独で取り扱うことにした。）

この目的を達成するために不可欠の前提は、つとに国文学者の西宮一民氏が「斎宮の訓義」⁶³によって明らかにされたように、「斎宮」には複数の訓義があるという研究成果であった。即ち、「斎宮」はそれを（一）「イハヒノミヤ」と訓む時は、（A）「穢れを去り、清浄にされた神殿」、または（B）「伊勢の神宮（内宮）」の意味である。そして、（二）「イツキノミヤ」と訓む場合には、（C）「斎王の御殿」という意味

になる。それゆえ、西宮氏の言われる複数の「訓義」をもとに各条文にいうそれぞれの「斎宮」を検証した。その結果、垂仁紀二十五年三月丁亥朔丙申条の「斎宮」に関してはこれを「伊勢神宮」の謂に解するしかなく、西宮氏の結論とは異なる結果にならざるをえなかった。

従って、本稿の当該条文に対する解釈を以てすれば、谷川士清、河村秀根・益根三氏の説^{二二}を踏襲することはできず、屋代弘賢、藺田守良両氏の説^{二三}に従わざるを得なかった。それ以外の条文については、西宮氏の結果と同じであることを自分なりに再確認できた。いずれにしても、『日本書紀』成立のころの日本では、「斎宮」の語を以て複数の意味に使用していることは言うまでもなく、そこに当時の国情に応じた漢語の輸入・摂取の在り方の一端を具体的に窺えた。

第二章・天武紀七年の斎宮

『日本書紀』天武七年是春条に登場する「倉梯斎宮」に関して言及した従来の見解は、大きく二系統に分けることができる。同四月癸巳平旦を以て天武が天神地祇を祠るためにその倉梯斎宮へ出立しようとした時、十市皇女が宮中に病を發して急逝したため、直ちに鹵簿は停止して祭祀は中止になった。この記事から、一つはその「倉梯斎宮」へは急逝した十市皇女が実は赴くことになっていたのだとする見解である。橘守部や北山茂夫氏らの説^{二四}がこの系統に属している。今一つは、直接には十市皇女の事には触れずに、天武が祠ろうとした「天神地祇」祭祀を天武朝に始まる新しい神祇制度の整備・改革という歴史的な流れのなかに当該条を位置付けて考察しようとするもので、虎尾俊哉氏や三橋正氏に代表される立場である^{二五}。

私は以前から、十市皇女の急逝はその天神地祇祭祀が中止になった直接的理由として述べられているに過ぎず、本文から読み取れるのは天武自身が倉梯斎宮へ赴こうとしていたのであって、祭祀主体は天武天皇にあり十市皇女ではありえないと考えてきた。そもそも十市皇女に祀らせようとしていたなら（本文には決してそう書いてはいないのだが）、何ゆえ天皇が一緒にいて行く必要があるのか、全く理解できないからである。当該本文をどの角度から読んでみても、それは天武親祭以外の何物でもない。主人公の天武のことはそっこのので、十市皇女にばかり気を取られてしまう読み方は、「斎宮」Ⅱ「皇女」でなければならぬという固定観念に邪魔されているからである。

中国における種々の皇帝祭祀を概観して判ることは、例えば自然災害時に蠲免施策の一環として皇帝自らが斎宮、ないしはそれに相当する施設で天下国家の安寧を祈るという政治的パフォーマンスも有り得るという事実であった。斎宮に斎居して神に祈った後に、人民への蠲免策を下すという方式である。本朝において、七世紀段階にはまだ「斎宮」の語は複数の訓義のもとに使用されていた（第二部第一章参照）事実を考えれば、天武紀七年の倉梯斎宮を十市皇女に拘泥せずに解釈するのが本文に沿った自然な読み方であろう。

従って、本章では倉梯斎宮での天神地祇祭祀は、当時における早天下での天武親祭であったことを考証するのが目的である。

そのため、近年の古代気候学の成果に先ずは目を向けて、天武朝から持統・文武朝にかけての頃、すなわち七世紀後半代から八世紀初頭のころの気候状況がいかなるものであったのかを一瞥することから始めた。大きくはまだ「古墳寒冷期」と称される時代に入っているが、八世紀初頭にはじまる温暖期を目前にひかえて、古気温曲線はこの七世紀後半代に気温が急上昇していることが解っている^{二五}。つまり温暖期に向けてのきわめて不安定な気候変動期にあったということである。

そこで天武期から文武期にかけてのいわゆる「災異」関係の記事を時系列で表にまとめ、それぞれにどのような対応を取ってきたかを丁寧に観察した。対象とした全期間にわたって、早天・祈雨(雨乞い)の記事が連年のように続き、慢性的な五穀不登と百姓飢餓に悩まされていた。しかも加えて地震の多さである。朱鳥元年十二月まで続く地震のなかで、天武十三年の本震までに十五回の大地震が記録されている。持統五年と六年には一転して大水・洪水被害に見舞われ、文武朝に入って特に顕著な記事が「飢餓」と「疫病の蔓延」であった。

そのような状況下で、慶雲二年三月癸未に文武天皇は「倉橋離宮」に御幸し、翌四月壬子に詔を發して蠲免救民策を打ち出している。詔の文言は明らかに中国皇帝に比擬した内容であるが、この詔が倉橋離宮への御幸と無関係でないことは、唐代宗の「齋居於齋宮」^{二六}に比して明らかである。つまり、文武は度重なる自然災害がもたらした人民の危機的状況に対処すべく蠲免施策を行うにあたり、かつて天武が齋宮を建てたその倉橋(倉梯)の離宮においてまずは神(天神地祇)に自ら祈ったのである。

この文武の事例から逆に、天武紀七年の「倉梯齋宮」において祠らんとした「天神地祇」祭祀も、天武五年以降すでに続いていた大旱魃、不登、百姓の飢餓、大地震といった自然災害による世情不安に対処するために天武自らが行なおうとした蠲免施策の一環であったということが浮かび上がってきた。ここに、「倉梯齋宮」とは天武親祭のために用意された祈りの施設であったと推断できるまでに至った。

第三章・伊勢齋内親王の呼称をめぐる

本来は「建物・施設」を指した「齋宮」という用語が、いつの頃からか齋内親王その人を指す避称語として定着していったが、実際にはいつ頃から、いかなる理由でそのような変化が生じたのか、また一般的な呼称として使用されて来た「齋王」との関係はどういうものであったのかを解明したいというのが本章の第一の目的である。先行して榎村寛之氏の研究があり、重要な指摘はすでになされている。とりわけ、選ばれた皇女が内親王の場合には「齋内親王」と称し、「女王」であった場合に「齋王」と呼んだが、これは「齋女王」の謂であることを最初に指摘したのが榎村論文であった^{二七}。ただ、ここでは「齋宮」の称については論及されておらず、また考証に使われた史料も正史と『延喜式』が中心であった。そこで、本稿では平安時代の公家による日記類をできる限り援用して所期の目的に迫ることにした。

選ばれた皇女が内親王か女王かによってその呼称にも「齋内親王」か「齋(女)王」かの区別があったということになれば、彼女が選定さ

れる段階での最初の呼称に、当時の朝廷関係者らの意識がもつとも端的に現れるのではないかと考え、特に選定・卜定時の呼称記事に注目して一覽表の作成を試みた。法令・有職書も参考にはしたが、主に使用したのは正史類はもとより公家の日記である。『延喜式』などは当然重要な史料ではあるが、日記のようにその都度のエピソードなどを含む生の情報が逐一には伝わってはこない欠点がある。しかも賀茂の齋院が併設されて以降では、『延喜式』には両者の呼称に関して明確な区別はなく、当時の筆録者には自ずから別の表記を工夫する必要に迫られたに違いない。次に注目したのは「宣命」類である。なぜなら、すべての事象は不可逆的な歴史的時間のなかで生起するが、そういう中に在って神事や儀式に伴う所作や宣命・告文などは時間を超えて反復される循環的・回帰的時間観念によって支配されるからである²⁴。回帰的時間観念において発せられる宣命等の詞章は不変性を保つため、彼らが最も理想とする形がそこに凝縮・保存されるのではないかとすれば、そこで使用された呼称にこそ正統性があると考えた。その結果、宮中での正式な称呼は一貫して「齋内親王」であつたと判る。それと「齋王」とを無秩序に並記する『延喜式』だけでは当時の日本人の意識を知るには必ずしも十分ではない。

とまれ、今回試作してみた一覽表から判ったことは、概ね九世紀代には「伊勢齋」と「齋内親王」は内親王を卜定した場合に限られ、女王の場合は「齋王」とする意識―原則的な規制(ないし慣習)が働いていたようであつた。さらに十世紀に入って柔子以降の伊勢齋宮の卜定時における呼称を追って行くと、途中に八例ほど該当しないように見えるものもあるが、おおむね十二世紀前半代(康治元年)の妍子女王に至るまで、親王宣旨の有無にかかわらず、あくまでも「原則的に」ではあるが女王の場合には「齋王」が、内親王の場合には「齋宮」がそれぞれ最初の呼称になっているという、元初回帰的な意識の根強さに驚いた。結局、伊勢齋宮の場合は、九世紀前半代の仁明天皇朝で初出した避称「齋宮」が十世紀、十一世紀を通じて汎称「齋王」と並存しながら用いられ、十二世紀半ば以降の段階において、それまでの「齋王」に代わる汎称として確実に定着をみるに至るのである。これが今回の表から窺える伊勢齋内親王の呼称をめぐるおおよそその変遷の経緯であつた。加えて、『延喜式』では伊勢齋宮でも賀茂齋院でも区別のない「初齋院」だが、少なくとも村上天皇朝には卜定後に始まる潔齋期間を過ぎず建物を指して伊勢齋宮の場合は「初齋宮」と呼び、賀茂齋院の場合は「初齋院」と呼んで両者の混同を避けて区別すべく工夫するようになったことも指摘しておきたい。

第三部 伊勢齋宮史の基本的用語

第一章…齋内親王の「退下」と「帰京」

本稿は、かつて『齋宮歴史博物館 研究紀要四』(一九九五年)誌上に研究ノートとして発表した同名の旧稿に少し手直しをして再説するものである。旧稿に使用した一覽表も改訂の要はないと判断し、今回もそのまま用いている。

いまから三十年ほど前までは、伊勢斎宮と言っても現在ほどには周知されていなかったが、その当時には斎宮研究の基本的用語の一つである「退下」と「帰京」との概念規定も曖昧なまま、時には無節操な使用例があったために、何とかしなければならぬとの念いが筆者にはあった。同じ斎宮研究に従事する者が、共通して使用する同一のテクニカルタームについて各自が異なる概念で用いていたのでは、研究の発展にも支障が生じるからである。従って、本章での唯一の目的は、「退下」と「帰京」との概念規定を改めて明確にし、両語の使用において混乱のないようにすることに尽きる。

「退下」とは何らかの事由により斎内親王としての任を解かれ、そのために斎内親王が斎宮内院の本座を降りて別の建物に遷ることを言い、その後何ヶ月かを経たのちに前斎内親王として都に帰るのが「帰京」である。そのことを一目瞭然で判るようにするために、関係する諸史料から該当記事を時系列的に抄出し、そこで用いられている表記例（退出・下坐・帰京など）をまとめて一覧表によって示した。

細部には異同はあるが、八世紀から十世紀の間は「退出・帰京」が多く、十一世紀に入ってから「下坐・帰京」への変化をみせ、十二世紀代に「下坐」とともに「退下」の用例が増える傾向にあった。野宮で解任された場合、野宮は通常は京外にあったと考えられるので、やはり「帰京」になることを定家の『明月記』^{二〇}も援用して本文中には記しておいた。

第二章・忌詞と「御汗殿」

従来から「御汗殿（ミアセノトノ）」か「御汗殿（ミケガレノトノ）」かで悩ましい論争があり、今も結論は出ていない。問題の核心は、さまざまな古文書が伝写されてくる間に、どうしても避けられない「汗」字と「汗」字との誤読等による誤写があり、問題を複雑にしている点にある。一般に刊行されている諸史料刊本の編纂段階で、関係者は原本（底本）に忠実に翻字されており、それを問題にしても解決はしないのである。古代以来、日本人がこの似て非なる紛らわしい両文字の違いをどれほどの人が熟知し、また書写してきたか、という点に行き着く難問である^{二一}。その上、毛筆で書く場合により注意していなければ、一文中において両文字を明確に書き分けながら綴るのはかなり難しいこともある。そのため、刊本の上でその可否を議論するのには初めから限界がある。

従って、本稿では従来からある「汗（アセ）」説と「汗（ケガレ）」説を比較した上で、卑見としては「汗（ケガレ）」説に賛意を表しつつも、将来においてその解決のカギを握るのは『中右記』と『壬生家文書』^{二二}であることを指摘・表明するのを主たる目的とした。

まずは両説の基本的な考え方を知るために、度会常彰および菌田守良両氏の「汗（アセ）」説^{二三}と、御巫清直氏に代表される「汗（ケガレ）」説^{二四}とをそれぞれ紹介して、それへの卑見を述べた。伊勢斎宮の忌詞に「血」を「阿世（アセ）」というのを根拠とした「アセ」説は、「阿世」という忌詞を女性の月事のみ結びつけた狭い観念論に思える。伊勢斎宮の忌詞に「月事稱阿世」とは規定しておらず、「阿世」に

は男女、動物を問わず切傷や鼻血、あるいは灸なども含む広義の血を指しているからである。もし忌詞にこだわれば、内七言には「経」に対する「染紙」、「寺院」に対して「瓦葺」、「塔」に対しては「阿良良岐」などがある。こうした忌詞は、神事に伴い忌避すべき対象物（実体）がまずあって、それを直接表現するのを忌避したために別途考案された表現である。つまり、「阿世」がもし「血」を忌避した限定表現であるならば、仮にも「ミアセノトノ」というような忌避表現（呼称）が生まれるためには、それに対応する実体としての「御血殿」という建物が存在していなければ成立しない道理であろう。「汗（アセ）」説のロジックにはその点に観念論的な飛躍があると考ええる。

一方、「汗（ケガレ）」説の拠って立つ根拠は『太神宮諸雜事記』永承三年九月八日条にある。それはすなわち、「竹河乃御祓之後。斎王俄御汗ニ御坐了。因之斎宮西鳥居許ニ暫御興ヲ奉下居天。中納言殿并左少弁近江守藤原朝臣泰憲。此由ヲ議定給天。直御汗殿ニ御興ヲ可奉仕之由被定之處。寮頭被申云。御汗殿如此非常乃御汗御遷座之由云々。而何事乃最初ニ先穢所殿ニ着御哉。於事尤有憚。猶今日許御殿乃内令入座給天。以明日御汗殿可遷座之由具也。依件定着給。以十四日卯時。御汗殿移坐給已了。」^{二四}とみえるものである。京を立てて漸く斎宮の地に到着した斎内親王が竹河での禊祓をおえた後に事が生じた。中納言と左少弁近江守藤原泰憲は直ぐに「御汗殿」に移御すべきだとしたが、寮頭は到着した早々から「穢所殿」に着御するのは事において尤も憚りがあるので、今日のところは御殿の内に入座され、明朝に改めて「御汗殿」に遷座すべきを主張し、そのように取り計らったというのである。

この条文の重要なポイントは寮頭が「御汗殿」を指して「穢所殿」とも言っている点にある。「汗（ケガレ）」説を主張する論考では必ず引用されるものである。しかし従来から、別途その『太神宮諸雜事記』への信憑性に対する評価の問題があるため、本章ではその疑義のあることを認めた上で、南勢地域における歴史および（平安時代の気象学をふくむ）地理学的研究においても不可欠の側面をもつ点を評価した。また、個別条文の内容は、六国史等の他書の記事との整合性などを検討しつつ、そこに明らかな矛盾のないものに関して、当面それを活用することは許されるであろうとの立場を表明しておいた。

いずれにしても、現行刊本の『中右記』と『壬生家文書』に「御汗時」や「野宮汗殿」との記述表記がある以上、「汗（ケガレ）」説は完全な支持を得られない現状をもって、将来への課題とせざるを得なかった。

第三章…「別れの御櫛」考

斎内親王の小櫛にこれほど多くの誤解を与え続けてきた名称はない。「別れの御櫛」が決して正式な名称ではないことは、すでに榎村寛之氏も指摘した^{二五}とおりでである。この「小櫛」にこめられていたであろう本来の意味が忘れ去られて久しい後代、末法思想の高揚を背景に巧みに考案された俗称に過ぎない。まずはその誤解を解かなければ前に進まない。更には、櫛に「縁切り」だの「絶縁」だのといったさして根

拠があるとも思えない呪術性を認めようとする説も根強く、この点でも齋内親王の小櫛について原初的、宗教的な意味を模索する際の妨げにもなっている。本章では、恐らくは後代に付加されたであろうそのような余計な俗信の類を一切排除して、各地の古墳から出土した櫛の使用形態や『風土記』から類推される男女神職者による神婚儀礼などの古い民俗儀礼に依拠して、深夜の大極殿で伊勢に向かう齋内親王の額髪に挿着された小櫛（額櫛）の原初的な意味を説明しようとしたものである。

『延喜式』は勿論、各種の有職故実の書にも、日記類にも「別れの御櫛」なる表記はないことを確認すると共に、古墳石室の構造に即した伊弉諾命の黄泉国訪問神話の考古学的解説^{②③}や古墳内での櫛の出土状況の実態^{②④}など、近年の科学的根拠にもとづいて「投げ櫛」^{②⑤}「縁切り（絶縁）」^{②⑥}というような呪術が成り立ちえないことも例証した。そして、大極殿での発遣儀礼に焦点を当てるために、『西宮記』、『江家次第』、『法性寺殿御記』、『玉葉』など^{②⑦}に拠って関係記事を解説することにより、「額櫛」とも称されるその櫛は本来的には髪上げ可能な適齢期（十三歳前後）の内親王を前提にしたものであったことを確認した。併せて、宮崎県の上ノ原九号墓（五世紀後半～六世紀前半）から出土した大・小の堅櫛を挿着した男女遺骨の事例から、その人物像に『風土記』に登場する九州地方の土蜘蛛のような社会的存在を想定するとともに、義江明子氏が解明された豪族祭祀成立の背景にあった共同体的祭祀^{②⑧}を念頭におきつつ、そういう特別な場における男女の予祝儀礼としての神婚儀礼に「額櫛（小櫛）」のもつ最も原初的意義を見出そうとした。従って、律令天皇制以前の神祭りにおける古い習俗（神婚儀礼）を律令制国家における新しい神祇制度の創成に合わせて歴史的に止揚して成った複合的な儀式が大極殿での齋内親王発遣の儀式であった、と考えるようになった。

そして最後に、かつて折口信夫氏が提唱した沖繩先島辺りの婚礼習俗における「むらに別れ」の櫛をめぐる^{②⑨}は、中国文化の直接的な影響を考慮する視点が欠けていることなどを指摘しておいた。挿す側の人間こそ逆転してはいるものの、中国にあった「嫁迎え」の習俗においては婿方の人間（親族・母親）が嫁方の家に行き、気に入ればその嫁の冠に簪を挿してやる。これを「挿釵子（チャーチャイズ）」^{③①}と言ったが、先島のむらに別れの櫛はその挿釵子（チャーチャイズ）が文化変容した後代の姿ではないかと考えるなど、他の民俗信仰（「振り返ってはならない」や「絶縁の呪術」）も併せて、折口説をそのままでは受け入れられないとの卑見を併せて述べた次第である。

第四部 伊勢齋宮史上における諸問題

第一章…伊勢齋宮の立地とその歴史的背景

本稿は、本学『大学院紀要文学研究科篇』（第四二号、二〇一四年所収）に掲載されたものに論旨を変えずに若干手を加えたものである。伊勢齋宮の置かれた場所は、伊勢大神宮（内宮）から直線距離にして約十数キロも離れており、これは神郡の最西端部にあたっている。何ゆえ

かくも遠く離れたところに設置されたのか、これまで異口同音に疑問視され、その理由についてさまざまな視点からの見解が公表されてきたところである。しかし、それらの立地論はたいてい太陽信仰に規定された方位論であったり、実証することが到底不可能な女性祭司の地方放擲論など、どちらかと言えば「形而上学的な」論評が目立った。本章ではできるだけ「形而下」の視点から南伊勢平野において現齋宮跡の土地がいかに条件に適した選ばれた土地であるかを証明しようとした。しかも、設置に至る背景にはヤマトの王権との政治・経済的な関係構築の歴史もあつたことを在地古墳からの出土遺物などを手がかりにして立証しようと考えた。そのため、本章では、相互に不可分の四つの要件から分析をおこなうものである。

一は「最も安定した土地」…伊勢神宮祭祀のために恒常的な潔斎施設を置くには、洪水等の水害によって流される心配のない安定した土地が求められる。南勢地域には現・祓川（旧多気川）と宮川とに挟まれた広義の明野ヶ原洪積台地が広がっている。祓川左岸側と宮川右岸側は共に両河川の氾濫原として洪水害の絶えない低湿地であつた。従って、この洪積台地上に在ることが第一条件であつた。

二は「河川に近接した場所」…齋内親王は定期的な神宮祭祀に向けて禊をすることが定められている。従って、近くに禊の出来る適切な河川が必要であつた。

三は「外港の発達した水陸交通の要衝」…かつて多気川の河口付近には万葉集にも歌われた「的形津」があり、伊勢湾の航行には不可欠の外港であつた。宮川河口にも現在の有滝港の前身になる外港があつた。多気川右岸と宮川左岸の洪積台地縁辺部はともに条件を満たす場所である。その上、齋宮跡の発掘調査によって史跡内の北西方向から南東方向に幅員約九メートルの直線道路（奈良古道）が走っていたことも判明している。少なくとも、神郡の西端部に位置する多気川右岸の台地上は、水路によって伊勢湾の海運にも通じる水陸交通の要衝の地であつたことは間違いない。しかしなぜ宮川左岸でなく多気川右岸であつたのかは次の要件により説明できる。

四は「王権による土地開発」…壬申の乱に勝利し即位した天武天皇は、即位後間もない天武二（六七三）年に伊勢国から墾田地六六二町を父舒明発願の百済大寺を引き継ぐ新たな高市大寺（のちの大官大寺・大安寺）造営のために寄進したことが判っている。この六六二町のうちの八〇町が実に多気川下流域に展開した飯野郡中村野からの施入であつた^{三三〇}。大海人皇子は即位段階ですでに舒明一族の土地を多気川下流域一帯に所有できていたのである。

併せて、齋宮跡の北にある坂本一号墳（七世紀前半）^{三三一}からは金銅装頭椎太刀^{三三二}が出土しており、その被葬者は舒明一族（天智・天武）との政治的関係を持つ者であつたと考えられる。なぜなら、大海人皇子の妃である尼子娘を出した北九州は胸形氏の奥津城、宮地嶽古墳（七世紀前半代）^{三三三}からも、大型の西国では珍しい金銅装頭椎太刀が出土しているからである^{三三四}。古墳の規模や太刀の長さは異なるものの、同じ

金銅装頭椎太刀を王権から下賜されて、ほぼ同時代を生きた東西の被葬者である。坂本一号墳の被葬者は、東国への海の玄関口である要津を管轄した在地有力者である。宮地嶽古墳の被葬者胸形君徳善^{三三}は朝鮮半島への海上交通の所管を担うとともに、沖ノ島祭祀にも関与した豪族であった。両者は恐らく舒明皇統から東西の海の要津を管轄するべく相似形の役割を期待されていた人物であつたらう。伊勢斎宮とは、そういう諸条件をすべて兼ね備えた絶妙の位置に置かれていたことが判る。

第二章・伊勢河口頓宮考

本章は、かつて発表した拙稿「聖武天皇の伊勢国行幸と関宮跡について（上・下）」^{三六}及び「聖武天皇の伊勢行幸と関宮について」^{三七}をベースにしており、今回はその中心の論旨を変えずに「河口頓宮推定地」に特化して書き直したものである。

伊勢斎内親王の群行および帰京に加え、聖武天皇の行幸（天平十二年）の往路にも位置した伊勢河口の頓宮（行宮）や河口関の想定地をめぐっては、江戸時代の『三国地誌』（一七六三年）以来現代にいたるまで凡そ二五〇年間もの間にいくつもの地誌や歴史地理学の論文などに言及されて来たが、そのほとんどすべてが十八世紀前半代にそれまでの十七ヶ村が合併して史上初めて成立した「川口村」の範疇においてそれを考証しているため、正鵠を射ることがなかった。とりわけ「河口関」に至っては、誰もかれもが異口同音に御城村の切通し（与五郎坂）に比定して疑うことさえもないという情けない事情がある。関は「奈良時代の河口」に在つてこそ「河口関」である。中世の関所跡を探しているわけではないのに、以後はこの非歴史地理学的見解が全ての「河口関比定地」説の始まりとなった。また、聖武行幸時の河口頓宮を「関宮」とも称したが、「関の宮だから関に隣接すべし」との正しい判断をしながらも、しかし肝心の関を与五郎坂（切通し）に比定したために、それに近接した医王寺の山上に求めてしまうという誤謬を重ねたうえに、現地には石碑まで建つてしまい現在に至っている。唯一、『三国地誌』だけが関宮跡の旧地を御城村の乾六町許（北西約六百数十メートル）の所（隠田或は王住）にあつて、堀や築地が残存していたという貴重な情報をも書き残してくれたにも拘わらず、今にいたるまで誰一人その伝承を顧みる者はいなかった。

本稿は、以上のような経緯を踏まえ、夙に谷川士清氏が教示してくれた伊勢「河口」^{三八}の原点にかえつて、『三国地誌』にいう「隠田或は王住」と推定される平地に少なくとも明治十九年までは遺つていた小字名から「伊勢河口頓宮」跡の確実な候補地を提示すると共に、それが従来ほとんど論じられることの少なかった斎内親王の河口頓宮跡でもあつたことを考察・提示するものである。

聖武の関宮ほどには脚光を浴びて来なかったが、本来の河口頓宮は伊勢斎内親王の群行および帰京路にあたり、その中継地としての役割が大きかった。そこでまず、田中君於氏の研究^{三九}と甲田利雄氏作成の「斎王覚書別覧表」^{四〇}とによって、伊勢河口頓宮を利用・通過した斎内親王の延べ人数を単純計算で割り出してみた。その結果、実に延べ六十人を超す斎内親王および前斎内親王が当地を通過し、恐らくその大

半は当該頓宮で休憩をして行ったものと推測される。従って、河口頓宮の痕跡は現地に強く刻まれていてもおかしくはない。

そこで近世以降の地誌類の記述や郷土史家の論考内容を時系列的に検討したが、誰一人として往時の「河口」を正確に捉えもしくは認識していることはなかった。ところが、『日本書紀通証』において土清氏は「蘆杵河」に注して「疑フラクハ即チイマ謂フ所ノ家城河ニシテ、一志郡ニ属セリ。(略)河ニ勝景ノ有リテ、湍門淵ト名ヅク。河口ノ関ト隣比スルナリ。○続日本聖武紀ニ曰ク、伊勢ノ国ハ一志郡ノ河口ノ頓宮ニ到ル、之ヲ関ノ宮ト謂フ也。河口トハ蓋シ蘆杵河ノ河ノロナリ。今、河口村有リテ、属邑ニハ御城、馬場、的場、算所、御衣田等ノ名有リ」と、明確に「河口」および「関」について解説している。

平凡社刊『三重県の地名』²⁶⁾の巻末所収の「行政区画変遷・石高一覧」で一志郡を見ると、「元禄郷帳」(一七〇〇年)ではまだ右記「御城」以下の十七ヶ村が分立しているが、「天保郷帳(一八三四年)」ではそれらが合併して「川口村」になっている。郷帳は年毎に異動を記して代官所が進達したもののゆえ、右記『通証』(一七四八年)の段階ではすでに「河口村」とあれば、御城以下の十七ヶ村は一七〇〇年以降一七四八年までの間に合併した事が判明する。それより以前に行政単位としての「川口村」という名称はなかったのである。十七ヶ村分立時代にも川口村はなく、「湍門淵(瀬戸ヶ渚)」を上流に望む蘆杵河(家城川。現・雲出川のこと)の口にあたる両岸地域一帯(算所村)の通称が「河口」であったと了解される。少なくとも聖武天皇の時代にはこの両岸(河口の渡河点)に近接した「川のほとり」に有名な「河口関」や恐らくはその「関屋」も置かれていたと認識しなければならない。頓宮(関宮)もそれに隣接して在ったはずである。

ところで、幸いなことに明治十九年に作成された『伊勢国一志郡川口村全図』(六千分の一)を三重県史編纂室が所蔵しており、それは当時の川口村戸長をはじめ隣接村戸長七名と測量兼図面調整人ら全員が署名捺印した行政公図である²⁷⁾。字界と小字名も記入されており、しかも明治四十一(一九〇八)年の当地における合祀以前に在った神社の位置情報なども判るきわめて貴重なものであった。そこには「宮ノ後」「宮ノ西」「宮ノ前」、「下田尻(おそらく宮ノ東)」という小字名とそれに囲まれた中央部に崩れた方形の土地のあることが判る。それこそが我々の目指す「宮」跡の推定地に他ならなかった。『三国地誌』が伝える「穏田或は王住」とはその地域を指していたに違いない。実際に、この下田尻の付近に田圃を所有していた方からの聞き取りでは、大きな堀があつて水がそこへ流れ込む地形で、地元の農家では「田尻」と呼んでいた由を教えられた²⁸⁾。『三国地誌』という「堀」の一部はなお久しく生き続けていたことが十分に推測された。

更に、三重県神社庁(津市鳥居町)で『一志郡合祀済神社明細帳』なども調査させてもらった。川口村にあつた合祀前の無格社十四社のうち、大角(王住)には八幡神社があつたが、右の『川口村全図』によると川口八幡神社の位置は、小字名にある「宮ノ後」よりも北方で雲出川右岸に接近した所に印があるため、図上で到達した「宮」跡と八幡神社の「宮」とは無関係であることも一目瞭然であつた。因みに、八幡

神社の祭神はやはり品陀和氣命で、由緒は不明であった（併せて一志郡内に今ものこる他の八幡神社を別途調べたが、すべて中・近世以降の勧請である）。品陀和氣命（應神）が難波「大隅宮」に居したとの伝承⁴⁰に基づき、聖武行幸の伝承とも相俟ってここ「王住」の地名はできたに違いない。従って、それは当地へ八幡神を勧請して以降に出来た地名に他ならないことも付け加えておきたい。

第三章・伊勢斎宮における墳墓の削平と方格地割

本章は本学大学院の定期研究発表時の素原稿をもとに、平成二十七（二〇一五）年年七月に「三重大学人文学部考古学教室三十周年記念論集」（仮題・刊行未定）への原稿として作成し投稿したものであるが、その後、論旨を変えることなく若干の手直しをしている。

国史跡斎宮跡の発掘調査で明らかになってきている方格地割（東西七区画×南北四区画）の平面プラン上に、弥生・古墳時代以降、現代までの間に種々の原因・理由により削平・破壊された墳墓の周溝跡の位置情報をドットで落してみると、大変に興味深いことが見えてくる。それは、史跡中央部から東部に広がる方格地割の内部には、現在までのところ墳墓跡は全部で四基（弥生一基、古墳三基）しかないという事実であった。しかも、方格地割の外側の北辺から西辺側へと大きくL字形の帯状におおむね二十六基の古墳周溝跡が取り囲むように分布することである（この中には戦中、戦後に破壊・削平された古墳も含まれる可能性はあるが特定できない）。それらの周溝から出土した遺物は少ないものの、その中の六基の古墳周溝埋土からは七世紀末〜八世紀初頭頃の須恵器や土師器が出土するという共通点も指摘できるのである。

かつて、「古墳時代の遺物が出土していないから」との強硬な意見が所内の一部にあったために、「奈良時代の円形・方形周溝」⁴¹などという報告を強いられたこともあったが、それは全体を見通せない愚案に過ぎなかった。少数ながらその埋土から出土した遺物こそが、それら古墳の破壊・削平時を考察するための貴重な根拠にもなり得たのである。従って、少なくとも六基の古墳が削平された時期を推定することによって、そもそも方格地割造営のための初期の計画案がいつ頃から存在したのか、という根本的な問題にもつながる視点をもつことができる。六基の被削平古墳を中心にした周溝群と方格地割との相関関係から方格地割そのものの初現的計画立案の時期を考えてみようとするのが本稿の目的である。

問題の方格地割は一三七ヘクタールもある斎宮跡全体のなかで最も墳墓の少ないエリアに造営されている。これは難波長柄豊碕宮造営、あるいは藤原京や平城京を造営するにあたって、時の天皇が示した「暴露に瀕する遺骨の埋瘞を命ずる」姿勢が伊勢斎宮の造営にあたって反映されていることを示すものであると考え、元明天皇による和銅二年冬十月癸巳条の勅を根拠に、その思想的背景を中国周の文王（姫文）の故事に求めた。そのために、天平五年の対策文の内容から推して当時の知識人には周文王の骸骨埋瘞伝説を十分に知っていたことを例証した。

次に、平城京内における発掘調査の実績等から、削平された古墳や削平されずに残された古墳のあることを整理・把握し、伊勢斎宮跡における墳墓削平の実態を考察した。その結果、先述したL字形の帯状に分布する古墳周溝跡から出土した遺物の時代的共通性からそれらの古墳削平が聖武天皇朝において実施されたことを考証し、随って方格地割の当初の造営計画プランがその当時からあり、実際の造営までに時間を要したことを明らかにしたつもりである。この方格地割の造営時期は、平安時代初期の交通制度改革^④と軌を一にしていたと考えられ、実際にそれまで史跡内を貫通していた直線道路（奈良古道）は完全に寸断された格好になり、方格地割を構成する道路がそれに代わるようになったことから了解されることである。

しかし一方では、新たに平安時代初期前後から徐々に顕著になる院宮王臣家ないし寺院による土地開発^⑤は伊勢神郡にも押し寄せたと考えられる。当然のことながら郡司層をはじめ在地有力者の協力なしには為し得ぬことであつたが、「奈良古道（官道）」を寸断して新たな政治的実現形態を確立せんとしていた方格地割造営においてもそれは同じであつただろうとの視点からも論じている。

第四章・「神火」と伊勢斎宮の焼亡事件

本章は、すでに『鷹陵史学』誌上に掲載された拙稿^⑥を用いている。ただ今回は、先年発表された久禮旦雄氏の「賀茂斎院・伊勢斎宮の淳和天皇朝における存廃について」^⑦で、氏子内親王の当時に淳和天皇が斎宮廃止の意向をもっていたことを知り、その研究成果を生かして離宮移転の説明に補訂をおこなったほか、一、二の新たな知見を加え、論旨を変えずに書き直している。

伊勢斎宮を度会離宮へ移転させる詔の出た天長元（八二四）年から、承和六（八三九）年に彼の地で焼け出されて再び多氣の旧地へ戻るまでの十五年間は、国司と大神宮司らの間に田租検納等を含む神郡雑務執行の主導権をめぐり確執、緊張関係が最も先鋭化した時期であつた。大神宮の神祇行政の本拠地たる度会離宮への移転は斎宮寮の権能に乗じた監視体制の地理的側面からの強化も意味した。そこで伊勢斎宮が遭遇した焼亡事件の背後には利害を異にする人間の動きもあると考え、承和六年の焼亡事件が「神火」であつたことを証明しようとした。

中国古代においては災異説に伴う譴告・戒めとしての「天火」の事例が多く見られたが、日本の古代では「天火」よりも「神火」の方が主流になっていく。日本では国郡司らが自らの不正などを隠へいすべく密かにおこなつた官倉への放火を「神火」と称して虚偽の報告をしたからである。そこには、中国の皇帝制度と日本の天皇制度との間の根本的な相違が横たわっている点を最初に指摘した。

その上で、伊勢神郡内での諸矛盾が表面化した延暦十年代から弘仁年間にかけての時期と、東国を中心に連綿と起こっていた「神火」問題に朝廷が頭を悩ませていた時期とが重複し、また連続してもいる点に注目した。主として『類聚三代格』から伊勢神郡関連の記事を時系列に従って並べ神郡内で生じた問題を整理し、神事と行政との間に生じた対立軸的な構造と諸矛盾が嵯峨天皇朝にかけて鮮明化した様子を明ら

かにした。そして同時に神郡内の田租検校等の雑務執行を巡る国司側と太神宮司側との主導権争いともいえる攻防が繰り返されていたことも明確にした。時を同じくして淳和天皇朝に起きた伊勢斎宮の度会離宮への移転は、結果的には大神宮司への監視体制の地理的強化と捉えた。その度会離宮での斎宮焼亡事件（承和六年）は、利害を異にする神郡内の何者かによる放火の可能性という政治的要因の強い人災（神火）であったと捉えた。それを補強する裏付けとして、八世紀後半代の神火事件と九世紀前半代の火災の社会的・政治的背景には、「早魃・飢饉・疫病」と「連続する地震・飢饉」という通底する社会情勢があったこと、また当時における火災記事の類型的整理からみても、伊勢斎宮の一件は神火事件と記事の書式が同じであり、伊勢斎宮をとりまく前掲諸史料の分析からもそれが放火（＝神火）であった可能性は否定できないとの結論をえたものである。

焼け出された離宮斎宮が多気郡の旧地に戻ってのち、承和十二（八四五）年に出された勅で「大神宮ならびに多気度会両神郡の雑務検校を今後は斎宮寮頭ならびに助に行わせる」^{五〇}とした施策は、伊勢国守兼斎宮権頭であった長峯宿祢高名の建言によるものと推定したが、この雑務検校事務の執行のために「目代」の出現もあったと考えた。その「目代」については次章で再考している。

第五章・九世紀斎宮寮における「目代」再考

本章は、かつて本学史学科創設三十周年記念『史学論集』に投稿した拙稿^{五一}を全面的に改訂したものである。旧稿執筆の当時は、「目代」についての十分な知識が筆者には欠けており、ただ斎宮跡出土の「目代」墨書土器自体の考古学的年代観から、九世紀代の斎宮頭と国守との兼務事例を手がかりに、その私的代理人としての「目代」を想定して書いてしまった経緯がある。しかし、九世紀代にはまだ受領クラスのような目代は存在しない由、早くから個人的に指摘を受けていたが、怠慢に着手しえぬまま今日に至ってしまっていた。しかし、近年公表された吉永壮志氏の「八・九世紀の目代」^{五二}に接したことをきっかけにして、改めて関連する他の墨書（惊人・蔵長）土器とも併せて論じ直すことにしたものである。

旧拙稿とも一部重複するが、当該墨書「目代」の訓み（釈文）、および当該墨書土器自体の考古学的な年代観の再確認をまずは行うことを第一の前提にした。そして、その考古学的年代観にもとづき、それが実際に斎宮寮で使用された、いわば消費実年代を他の共伴遺物や掘立柱建物、およびそれが出土した井戸の変遷等を勘案して推定すること、それが二番目である。そしてその上に立って、第三に、斎宮寮の置かれていた当時の状況等を背景にして当該「目代」のより具体的な人物像に迫ることを主たる目的とした。

まず「目代」の訓みについては、遺物写真を提示することで異論はないはずである。当該墨書土器が愛知県猿投山西南麓古窯跡群に特徴的な黒笹十四号様式の灰釉陶器皿であることから、従来の考古学的年代観をめぐる諸説を再度紹介し、さらに旧稿には触れ得なかった高橋照彦

氏の施釉陶器に関する研究成果^{〔五五〕}に依拠して、その操業年代を九世紀前半代（八一五年以降）に位置付けることを確認した。従って、旧稿と同様に当該墨書土器もそれと同じ時期に生産されたものとして確定した。

次に、「目代」墨書土器の使用実年代を承和六（八三九）年に度会離宮での焼亡事件（神火）により再び多気の旧地に戻って以降、それが廃棄されるまでの間と推定した。その理由を次の三点に求めた。（一）承和十二（八四五）年の勅で「斎宮寮頭と助に太神宮と多気度会両神郡の雑務を檢校させる」ことになった結果、代務者としての「目代」の出現する蓋然性が一番高いこと。（二）当該墨書土器が出土した井戸（SE5850）は、第八十三次調査区内の建物遺構の三期にわたる変遷過程において、その第二期（八二〇～八五〇年頃）に相当する時期から使用された遺構であり、そして第三期（八五〇～九〇〇年）には埋没していること。（三）同じ井戸から出土した墨書土器「少允殿」（九世紀後半代）と一定期間ほぼ同時期に使用された可能性が高いこと。つまり「目代」墨書土器は、生産地とのタイムラグを考慮すると、度会離宮から多気に戻って以降九世紀の五十年代前後の頃までその使用・廃棄の中心的時期はあった、と考えたのである。

以上の考古的な諸要件を前提にした時、吉永壮志氏のいわれる八・九世紀の目代は「単に実務能力だけではなく、彼を代理人とする本人とは同等の階層・身分の、それにふさわしい人間であった」との点を考慮すれば、斎宮寮における大属・少属の、つまりは「少允殿」よりは下位の官人の代務者としての「目代」であったとするのが第一義的な解釈であろうということを可能性の一つとして提案した。

旧拙稿で、国守兼斎宮寮権頭であった長峯宿祢高名の「目代」と推定したのは大きく異なるが、現段階では吉永氏の見解に沿った形で当時の斎宮寮における「目代」を想定し直した結果である。他に、「惊人」や「蔵長」などの墨書土器の出土（第八十二次調査区）もあり、伊勢斎宮における寮庫の物品管理等について、太神宮や神郡司との関係などにも波及させて考察すべき多くの課題も今後に残すものである。

【註】

第一部第一章

（一）…『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』、第四十四号、二〇一六年三月、五三～六九頁所収。

（二）…赤塚忠氏は「殷王朝における上帝祭禮の復原」において、「殷代にも、斎宮があったか否かは明記がないが、禰に祈ることはあった」とのべている（同氏著『中国古代の宗教と文化―殷王朝の祭祀―』、研文社、一九九〇年復刻版、五四八頁）。

（三）…『日本書紀』には「河伯」を述べる部分もあり（皇極天皇元年秋七月戊寅条）、少なくとも書紀編纂段階には本朝でもこの話を知っていたと思われる。後には「勸学院のスズメは蒙求をさえずり」（『宝物集』続群書類従第三十二輯下、雑部所収、一八六頁上段）との諺もあるほどに、『蒙求』の「西門投巫」は

広く親しまれてきたに違いない。

- (四) …たとえば好並隆司著『秦漢帝国史研究』(未來社、一九八四年第一版第二刷)や豊島静英著『中国における国家の起源』(汲古書院、一九九九年)など。
(五) …岡村秀典著『中国古代王権と祭祀』(学生社、二〇〇五年)。

第一部第二章

- (六) …『齋宮歴史博物館 研究紀要三』、一九九四年三月所収(一〜三〇頁)。
(七) …清朝の新しい「齋宮」に関しては、石橋丑雄氏に貴重な業績があり、また北京天壇公園に行けば現存する「齋宮」も見学できる。その点に関しては、かつて右前掲拙稿「中国の齋宮に関する予備調査」において紹介、詳述した。
(八) …内藤乾吉「唐六典の行用について」『東方学報 京都』第七冊、一九三六年所収、一一六〜一一七頁、一二三頁、一二八〜一三〇頁。
(九) …金子修一著『古代中国と皇帝祭祀』(汲古書院、二〇〇一年)、および同『中国古代皇帝祭祀の研究』(岩波書店、二〇〇六年)ほか。

第二部第一章

- (一〇) …西宮一民『『齋宮』の訓義』(『皇学館大学研究紀要』第六号、一九六八年所収)、その後、同氏著『上代祭祀と言語』(桜楓社、一九九〇年)に再録。
(一一) …谷川士清著・小島憲之解題『日本書紀通証』一(臨川書店、一九八八年再版)、五七七頁。訓みは「イツキノミヤ」としている。および河村秀根・益根編著・阿部秋生解題・小島憲之本文補注『書紀集解』二(臨川書店、一九八八年)、四二八頁。訓みは「イハヒノミヤ」としている。
(一二) …屋代弘賢著『古今要覧稿』第一卷(原書房、一九八一年覆刻)、巻第十一、神祇部、百八十九頁。および藺田守良著『神宮典略』前編(神宮司庁編纂太神宮叢書、臨川書店、一九七六年所収)、殿舎考六、齋宮寮、三二二頁。

第二部第二章

- (一三) …橘守部『萬葉集檜婦手別記』(橘純一編『橘守部全集』第四、国書刊行会、一九二二年所収)、二五五〜二五七頁。および北山茂夫著『万葉集とその世紀』上、(新潮社、一九八五年六刷)第六章「天武・皇后の共治のもとに」、二〇七〜二二二頁、「十市皇女の悲恋」参照。
(一四) …虎尾俊哉「大化改新後の国造―特にその職掌と設置の時期について―」『芸林』第四巻四号、一九五三年所収、特に二二(二四二)頁。および三橋正著『日本古代神祇制度の形成と展開』(法蔵館、二〇一〇年)、特に第一章第一節「律令祭祀形成への道程」(二六〜四二頁)参照。
(一五) …吉野正敏著『古代日本の気候と人びと』(学生社、二〇一一年)、四四頁。初出は二〇〇九年『地学雑誌』一一八(六)号所収論文「四〜十世紀における気候変動と人間活動」(二二二頁)。及び阪口豊「日本の先史・歴史時代の気候―尾瀬ヶ原に過去七六〇〇年の気候変化の歴史を探る―」(『自然』、中央公論社、一九八四年五月号所収)。

(一六)：『旧唐書』二(中華書局、一九七五年)、卷十一、代宗本紀(二六七～三二八頁)、特に三〇〇頁及び三一二頁)。代宗が大暦七年五月に「齋宮に別居して、神明に禱り」神の嘉応を得んとしたのも、やはりその前年まで地震に加え、度重なる大旱や連雨により秋稼は害され米価の高騰を招いていた時期に当たっており、その五月にも「天下諸州に時雨を失い宿麥未だ登らざる」状況下での臨時の親祭があった。そしてその月に天下に大赦を実施している。彼はその五年後の大暦十二年六月にも「齋居祈祷」を行った。本朝天武紀七年の齋宮もこういう事例から類推すべきであり、「齋宮」が複数の訓義を以て通行しているわが国の七世紀代にあつては、「齋宮」即ち「皇女」という固定觀念からの脱却が求められている。

第二部第三章

(一七)：榎村寛之「『齋王』という称の成立について」『伊勢齋宮の歴史と文化』、塙書房、二〇〇九年、一〇九～一四二頁所収。初出は『ヒストリア』第一五一号、大阪歴史学会、一九九六年所収。

(一八)：こういう考え方を小南一郎氏の論著から学んだ。同氏「楚辞の時間意識―九歌から離騷へ」『楚辞とその注釈者たち』、朋友書店、二〇〇三年所収、第一章、三五～一七二頁。初出は『東方学報』京都、第五十八冊、一九八六年所収)の特に第二節「終古の語義―永遠について」(四一～八〇頁)。

第三部第一章

(一九)：『明月記』第一(国書刊行会、一九一一年)、正治元年四月十八日条(九十二頁上段)および同十二月六日条(一一九頁上段)、正治二年三月廿四日条(二五五頁上段)、同十一月十八日(二八八頁下段)など参照。

第三部第二章

(二〇)：この両文字は中国においてもよく間違えられやすく、古来注意を喚起されてきた経緯がある。清・阮元校刻『十三經注疏附校勘記上冊』(中華書局出版、一九九一年第五次印刷)所収、『禮記正義』卷二、第十四頁(二二四二頁)。陸徳明撰・張一弓點校『經典釋文』(上海古籍出版社、二〇一二年)、二五六～二五七頁など参照。

(二一)：増補史料大成第十二卷『中右記』四(臨川書店、一九八〇年第三刷)、三～四頁。および宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 壬生家文書 九』(明治書院、一九八七年)、伊勢齋宮文書一、「二三九七・弁官宣旨案」、一一八頁。

(二二)：度会常彰輯録『齋居通 卷下』(大神宮叢書『神宮隨筆大成』前篇、臨川書店、一九七〇年復刻)、五四五～五四六頁上段。藺田守良著『神宮典略』前篇(大神宮叢書、臨川書店、一九七一年復刊)、神宮典略五、殿舎考六、三二六～三二七頁。『同』中篇(同上、一九七〇年復刊)、神宮典略十七、齋忌・忌詞、三〇五頁。『同』後篇(同上、一九七六年復刊)、神宮典略三十四、神祇人倫、齋王御汗殿例、四七六～四七八頁。

(二三)：御巫石部清直著『神宮神事考證』中篇(大神宮叢書、臨川書店、一九七〇年復刊)、「齋宮寮考證」御汚殿、一四二～一四三頁。

(二四) …『大神宮諸雜事記』二(『群書類従』第一輯・神祇部、続群書類従完成会、一九八三年訂正三版第五刷)、一一三頁下段～一一四頁上段。

第三部第三章

(二五) …榎村寛之著『律令天皇制祭祀の研究』(塙書房、一九九六年)、第二章第二節「斎王發遣儀礼の本質について」(一八二～二二五頁)。氏は「別れの御櫛」の初見記事は『大鏡』長和三年九月条にあると指摘し、総じて「文学的修辭ともいうべき用語」に過ぎないとする(二八八頁)。

(二六) …白石太一郎「こととわたし考―横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐる―」(『橿原考古学研究所編『橿原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』、吉川弘文館、一九七五年所収)。氏は「コトドワタシ」の意味について、国文学者鈴木重胤氏の「現世と黄泉国の別処の宣言であり、巨石をもってその別処を明確にする行為をさす」との説を支持している。

(二七) …亀田博「堅櫛」(『末永先生米寿記念献呈論文集 乾』、同記念会、一九八五年所収)、四八五頁。同氏はまた、「櫛に特別な呪力があるとする従前の考え方は特に論拠がないと考えられる」(四八六頁)とも述べている。

(二八) …改訂増補故実叢書七卷『西宮記』第二(明治図書出版、一九九三年)、巻八(斎宮三度禊、入野宮、群行)、および改訂史籍集覧編外一『西宮記』(臨川書店、一九八四年)、巻十七、臨時五。また(財)神道大系編集会編『神道大系 朝儀祭祀編二 西宮記』、一九九三年、臨時五「斎宮」。尊經閣善本影印集成三『西宮記』三(財・前田育徳会尊經閣文庫、八木書店、一九九四年)、巻八、臨時乙、斎宮三度禊 群行・斎王入京事。増訂故実叢書『江家次第』(吉川弘文館、一九九九年)巻第十二、斎王群行。宮内庁書陵部編『九条家本 法性寺殿御記』(八木書店、一九八九年)に付属の「解題 釋文」。高橋貞一著『訓読玉葉』第七卷(高科書店、一九九〇年)。

(二九) …義江明子著『日本古代の祭祀と女性』(吉川弘文館、一九九六年)。

(三〇) …孟元老著、入矢義喬・梅原郁訳注『東京夢華録―宋代の都市と生活―』(岩波書店、一九八三年)、巻五、一八二～一九三頁(特に一八三頁)。吳自牧著、梅原郁訳注『夢梁錄―南宋臨安繁昌記』(平凡社、二〇〇〇年)、巻二〇、三三二～三三五頁(特に三三二頁)。

第四部第一章

(三一) …『群書類従』第二四輯・釋家部(続群書類従完成会、一九八三年訂正三版第五刷)、巻第四三五所収『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、三八九頁。

(三二) …『三重県史・資料備考古一』(二〇〇五年)、第四章、五一四頁「坂本一号墳」(中野敦夫氏執筆)。

(三三) …岩原剛氏は「古代の東国へのルート上の諸豪族へ配布された飾大刀だった」と意義付けし、TK二〇九段階(ほぼ推古朝に相当)の「王権が東海により広い地域を戦略的に統括しようとしていたのではないか」との指摘もした。伊勢を起点にした東国への海路が重要視されたことを示す貴重な遺物である。同氏「東海の飾大刀」(立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集Ⅱ』、二〇〇一年)、一八三頁。同氏「東海地域の装飾付大刀と後期古墳」(島

根県教育庁古代文化センター・同埋蔵文化財センター編『装飾付大刀と後期古墳―出雲・上野・東海地域の比較研究―』、二〇〇五年所収、四八頁。

(三四) …福岡県教育委員会篇『福岡県重要文化財解説 国宝篇』、一九五二年、五四頁。

(三五) …津屋崎町教育委員会編『津屋崎古墳群Ⅰ』(町文化財調査報告書第二〇集) 二〇〇四年、五八〜七〇頁。

第四部第二章

(三六) …拙稿「聖武天皇の伊勢国行幸と閑宮について(上)」『斎宮歴史博物館 研究紀要(十)』、二〇〇一年所収(九〜一七頁)、および「聖武天皇の伊勢国行幸と閑宮について(下)」『斎宮歴史博物館 研究紀要(十一)』、二〇〇二年所収(五九〜七四頁)。

(三七) …拙稿「聖武天皇の伊勢行幸と閑宮について」(坂本信幸編『聖武天皇の時代』、高岡市万葉歴史館、二〇一三年三月所収、二六〜四六頁。

(三八) …谷川士清著・小島憲之解説『日本書紀通証』二(臨川書店、一九八八年再版)、一一五五頁。

(三九) …田中君於「斎宮群行道並びに入京道について」『国学院高等学校紀要』第十五号、一九七三年十二月所収。

(四〇) …甲田利雄著『平安朝臨時公事略解』、続群書類従完成会、一九八一年、二七七〜三二五頁。

(四一) …日本歴史地名大系第二四卷、平松令三監修『三重県の地名』(平凡社、一九八三年)、一〇〇〇〜一〇〇三頁。

(四二) …三重県史編纂室(当時)の吉村利男氏のご好意により閲覧させて戴き、該当箇所をコピーさせてもらった。記して深甚の謝意を表したい。

(四三) …二〇一二年八月廿一日火曜日、午後十九時〜於川口公民館であった郷土史研究会にて園浦氏より聴取。

(四四) …日本古典文学大系六七『日本書紀』上(岩波書店、一九七一年第五刷)、三八〇〜三八一頁。

第四部第三章

(四五) …『史跡斎宮跡発掘調査概報』(三重県教育委員会、三重県斎宮跡調査事務所、昭和六二(一九八七)年三月)、第六五次調査、四〜一五頁。

(四六) …中村太一著『日本の古代道路を探す―律令国家のアウトバーン』、平凡社、二〇〇〇年、四三頁、五三頁、五六頁など参照。

(四七) …吉川真司「院宮王臣家」(同氏編著『日本の時代史』5、平安京、吉川弘文館、二〇〇二年所収)。

第四部第四章

(四八) …拙稿「神火」と伊勢斎宮の焼亡事件」『鷹陵史学』第四十号、二〇一四年所収。

(四九) …久禮旦雄「賀茂斎院・伊勢斎宮の淳和天皇朝における存廃について―狩野本『類聚三代格』天長元年十二月二十九日太政官符の評価をめぐって―」『続日本紀研究』第四〇九号、二〇一四年四月所収。

(五〇) …新訂増補国史大系『続日本後紀』(吉川弘文館一九八七年)、巻十五、一七八頁、承和十二年六月癸未条。

第四部第五章

(五一) …旧拙稿「九世紀斎宮寮における目代の可能性―兼官事例を手がかりにした場合―」(『史学論集―佛教大学文学部史学科創設三十周年記念―』創設三十周年記念論集刊行会、一九九九年三月、一〇―一一頁所収)。

(五二) …吉永壮志「八・九世紀の目代」(『続日本紀研究』第三八四号、二〇一〇年所収)。

(五三) …高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」(『史林』第七七卷第六号、一九九四年)、同氏「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第六〇集、一九九五年)、および「平安期施釉陶磁器研究の現状と課題―緑釉・灰釉陶器を中心に―」(日本中世土器研究会編『中世土器の基礎研究XV』、二〇〇〇年)。

第一部 中国古代における「齋宮」の特質

中国には日本の齋王制度に該当する制度は認められないが、史籍中に「齋宮」の語が散見されることは周知の事実である。その記述は例え、籍田、宗廟、封禪、祀天祭地（南北郊）など、いわゆる皇帝祭祀の儀礼における齋戒時の施設名として登場している。一方、民間信仰における水神（河伯）祭祀においてもやはり「齋宮」の語を伴う故事があることもまた広く知られているところである。

後述するように、『日本書紀』等の諸書に見えるわが国「齋宮」の語は、複数の訓義をもつ汎用語だが、もとよりそれは中国から輸入摂取された漢語の一つであった。以下に、中国古代の民間信仰や皇帝祭祀に現れる「齋宮」関係の記事から、わが国へ受容される以前の、漢土における原「齋宮」がどのようなものであったのかを、まずは確かめることから始めようとする。併せて、これをわが国「齋宮」との比較を試みるための基礎的作業の一環と位置付けるものである。

第一章 中国古代の民間信仰にみる齋宮

（一）はじめに

問題とする「齋宮」の語は、『史記』滑稽列伝（褚先生補部）の西門豹故事（河伯娶婦、西門投巫とも）^①に見える。それは「監河侯」^②の名でも知られる戦国魏の文侯（前四三七～前三九五）^③の時代に、鄴令となった西門豹が水神祭祀「河伯娶婦」^④の弊習に苦しむ人民をその呪縛から解放し、漳水を引く灌漑事業で人々の生活を豊かにした功績を伝える話である^⑤。その故事後段にいう灌漑事業に限っては既に司馬遷が「西門豹ハ漳水ヲ引キテ鄴ニ漑ギ、以テ魏ノ河内ヲ富マシム」^⑥と記したところである。

しかしながら『呂氏春秋』や『漢書』溝洫志ではそれを、文侯の曾孫襄王（前三二八～前二九六）の時の鄴令史起の事績^⑦とし、「終古ノ舄鹵ニヤ稻、梁生エテ」（同上）との民歌も伝える。それゆえ「豹が漳水を引き鄴に漑いだというのは誤りだ」^⑧との見解もある。好並隆司氏は『呂氏春秋』楽成篇をステップとした『史記』河渠書から『漢書』溝洫志への移行、即ち記述が史起の事績へと変化したのは「君主のための治水灌漑」から「民の要望を汲みとる」べく「地方官等の灌漑を豪族との関係で」^⑨扱おうとした著者班固の意志が背景にあったとし、そこには「前漢中期以後の在地豪族の成長」（同上）により、民の利益を考慮した治水灌漑へという政策の変化があったからである（同上）と分析された。

後漢孝安帝の元初二（一一五）年春正月には「修理西門豹所分漳水為支渠、以漑民田」^⑩と、豹が主導して造った漳水支渠を修理し民田を灌漑している。左思が『魏都賦』に「西門ソノ前ヲ漑ギ、史起ソノ後ヲ灌グ。澄流（水路）十二ハ、同源ニシテ異口ナリ」^⑪と詠み、『水經注』も「昔魏ノ文侯西門豹ヲ以テ鄴令ト為スヤ、漳ヲ引キテ以テ鄴ニ漑グニ、民其ノ用ヲ頼メリ。其ノ後、魏ノ襄王ニ至リ、史起ヲ以テ鄴令ト為シ、又漳水ニ堰シテ以テ鄴ノ田ニ灌グニ、ミナ沃壤ト成レバ、百姓モ之ヲ歌ヒヌ」^⑫とするのを本稿では是として進めたい。因みに、近年公刊されている水利史関係の研究^⑬でも鄴令西門豹が十二渠建設により漳水を引き灌漑事業を主導した事を史実として取り扱って

いることも付言しておく。

「齋宮」は輸入漢語の一つ^{二五}であるが、中・日の齋宮を比較検討する足がかりを得るため、まずは中国古代の民間信仰にみる「齋宮」を題材に、わが国へ受容される以前の漢土における原「齋宮」がどういうものであったのかを確かめてみようと思う。

(二) 河伯娶婦と齋宮

そもそも水は天地万物に集まるゆえに神であつた^{二六}が、河伯は「川の中の長者という意味」^{二七}で、黄河の神を意味した^{二八}。『山海経』の郭璞注などという河伯憑夷の信仰は早く「殷の先公時代に河北省黄河流域に起こつた」^{二九}との見解もある。また、「河神を河伯と称するようになったのは戦国以後のこと」^{三〇}だともいう。自らの領内河川を祭るのが古制ゆえ、領域外の黄河の神から禍福を受ける筋合いはないとて「河神を祭らず」^{三一}とした楚昭王の例もあるが、一般的に「河伯は黄河流域一帯に広く祀られた神であつた」^{三二}という。通常、この神には牛や羊、豚などの動物犠牲が奉げられ、周辺諸国へもその習俗の影響はさまざまな形をとって波及した^{三三}。古代東アジアにおける殺牛祭祀の特質やその系譜についてはすでに門田誠一氏が文献・考古資料を渉猟整理して、分析されている^{三四}。下つてわが平安時代は十二世紀半ば頃の記録^{三五}にも「河伯」の語が登場するにまで至っている。

いま求める「齋宮」は河伯への人身犠牲が行われたという鄴の旧弊を長老が豹に訴える件に登場する。これは李冰の「江君退治」^{三六}と共に有名だが、改めてその全容把握のため、森三樹三郎氏や澤田瑞穂氏をはじめ先学諸氏の研究成果^{三七}に導かれつつ、冗長かつ変則的ながら『戦国策』所載の関係記事も併せ取って原文を掲げ、後に意識を付すことにする。

(A) 西門豹為鄴令。而辭乎魏文侯。文侯曰。「子往矣。必就子之功。而成子之名。」西門豹曰。「敢問。就功成名。亦有術乎。」文侯曰。「有之。夫鄉邑老者。而先受坐之士、子入而問其賢良之士。而師事之。求其好掩人之美。而揚人之醜者。而參驗之。夫物多相類而非也。幽莠之幼也似禾。驪牛之黃也似虎。白骨疑象。武夫類玉。此皆似之而非者也。」^{三八}

(B) (略) 豹往到鄴、會長老、問之民所疾苦。長老曰「苦為河伯娶婦、以故貧。」豹問其故、對曰「鄴三老、廷掾常歲賦斂百姓、收取其錢得數百萬、用其二十萬為河伯娶婦、與祝巫共分其餘錢持歸。當其時、巫行視小家女好者、云是當為河伯婦、即娉取。洗沐之、為治新繒綺縠衣、閒居齋戒、為治齋宮河上、張緹絳帷、女居其中。為具牛酒飯食、十餘日。共粉飾之、如嫁女床席、令女居其上、浮之河中。始浮、行數十里乃没。其人家有好女者、恐大巫祝為河伯取之、以故多持女遠逃亡。以故城中益空無人、又貧困、所從來久遠矣。民人俗語曰「即不為河伯娶婦、水來漂没、溺其人民」云。西門豹曰「至為河伯娶婦時、願三老、巫祝、父老送女河上、幸來告語之、吾亦往送女。」皆曰「諾。」^{三九}

(C) 至其時、西門豹往會之河上。三老、官屬、豪長者、里父老皆會、以人民往觀之者三二千人。其巫、老女子也、已年七十。從弟子女十人所、皆衣繒單衣、立大巫後。西門豹曰「呼河伯婦來、視其好醜。」即將女出帷中、來至前。豹視之、顧謂三老、巫祝、父老曰「是女子

不好、煩大巫嫗為入報河伯、得更求好女、後日送之。」即使吏卒共抱大巫嫗投之河中。有頃、曰「巫嫗何久也？弟子趣之。」復以弟子一人投河中。有頃、曰「弟子何久也？復使一人趣之。」復投一弟子河中。凡投三弟子。西門豹曰「巫嫗弟子是女子也、不能白事、煩三老為入白之。」復投三老河中。西門豹簪筆磬折、嚮河立待良久。長老、吏傍觀者皆驚恐。西門豹顧曰「巫嫗、三老不來還、柰之何？」欲復使廷掾與豪長者一人入趣之。皆叩頭、叩頭且破、額血流地、色如死灰。西門豹曰「諾、且留待之須臾。」須臾、豹曰「廷掾起矣。狀河伯留客之久、若皆罷去歸矣。」鄴吏民大驚恐、從是以後、不敢復言為河伯娶婦。（同上）

（D）西門豹即發民鑿十二渠、引河水灌民田、田皆溉。當其時、民治渠少煩苦、不欲也。豹曰「民可以樂成、不可與慮始。今父老子弟雖患苦我、然百歲後期令父老子孫思我言。」至今皆得水利、民人以給足富。十二渠經絕馳道、到漢之立、而長吏以為十二渠橋絕馳道、相比近、不可。欲合渠水、且至馳道合三渠為一橋。鄴民人父老不肯聽長吏、以為西門君所為也、賢君之法不可更也。長吏終聽置之。故西門豹為鄴令、名聞天下、澤流後世、無絕已時、幾可謂非賢大夫哉。（同上）

次に、主として好並隆司氏や豊島静英氏らの先行研究（註二十七前掲）に依拠しつつ意識を掲げる。

（A）鄴令を拝した西門豹が文侯を辞する際、功名を立てよと言われ、その術を問う豹に対し、侯が『之あり。夫れ郷邑の老若もしくは先づ坐を受くるの士には、子、入りて其の賢良の士を問うて、之に師事せよ。』と勅す（戦国策）。

（B）赴任した豹が土地の長老に民の疾苦する所を問うと、河伯娶婦のために苦しむという。即ち、鄴の三老や廷掾らは毎年百姓に課税し錢数百万を収め取るが、そのうちの二三十萬で河伯の為に婦を娶り、残余を祝巫らと山分けする。その時に当たり、巫が小家の女好（貌好きむすめ）を河伯の婦として娉取する。之を沐浴させ、新しい装束を着せて河のほとりに設けた「齋宮」で齋戒させる。齋宮には黄赤色の帷を張り、彼女に牛酒飯食を具えること十日余りの後に、化粧をさせて婚礼の席のように設え、その上に居らしめて河中に浮かべて流す。数十里も行くと水没する。貌好き女を持つ家々ではこの旧習を恐れ、女を連れて逃亡するので、城中の人口は減り、また貧困である。河伯に婦を娶らなければ、洪水が起こり人民を漂没させてしまう、皆そう信じていると。聞き知った豹はその日が来たら、自分も行つてその女を送ると約束し、承諾を得る（史記）。

（C）祭祀当日、鄴令豹が三老、官属、豪長者、里の父老らと河のほとりに会する。見守る民衆は三二千人。老巫女の齢は既に七十で、後ろに弟子の巫女十人を従えている。豹が「婦となる女をこれへ呼べ、その好醜を視たい」と、帷から連れて来させる。女を視た豹は振り向いて三老、巫祝、父老にいう、「このむすめは貌がよくない。大巫嫗よ、更に貌好きむすめを探して後日お送りすると、入つて河伯殿に申し上げて来い」と。そして部下らに大巫嫗を河中に投げ込ませる。暫くして、「はて、巫嫗めなかなか戻つて来ぬぞ、今度は弟子に行つてもらおう。」と、弟子の一人をまた河中へ投げ込ませる。同様にして三人の弟子、また三老をも河中へ投げ込む。驚恐とする長老らを顧みて豹が「巫嫗も三老も還つて来ぬな、どうしたものか？」ならば今度は廷掾と豪長者一人に行つて来てもらおうかという、皆、何度も地に叩頭し

て額から血を流し、顔色は死灰のごとくになった。それを見て豹が「よろしい、しばらく留まり待ってやろう」と。暫くして、「廷掾よ起て。かく河伯殿は客を留むるに久しい、汝らは皆罷めて帰れ。」と豹がいう。鄴の吏民らは大いに恐懼し、これ以後河伯娶婦をいう者はついになかった（史記）。

(D) 豹は人民を徵發して十二渠を鑿ち、河の水を民田に注ぐ灌漑工事をする。当初人民はそれを望まず、豹が「今、父老子弟が我を憎んだとしても、百年後の父老子孫に我が言を思わしめよ。」と説き、その結果今に至るも皆水利を得て豊かになった。十二渠は馳道を経絶していたので、漢代に長吏が十二渠に橋をつくり馳道を渡そうとしたができず。そこで馳道に至れば三渠を合して一橋を造るとしたが、鄴の民人父老らはこれ西門君の為せしところ、賢君の法式は変えてはならぬと肯んぜず、終にそのままに置かれたと。かく鄴令としての西門豹の名声は天下に聞こえて後世にまでやむことがない、どうして賢大夫に非ずなどいえるようか（史記）。

こうして段落に分けてみると、まるで四幕の寸劇を観るかのようである⁽¹¹⁰⁾。褚少孫が古伝に基づき補筆したとはいえ、内容があまりにも詳しすぎて（特にBとC）、果たしてどこまでが史実でどこが粉飾（虚構）部分なのか見極めは難しい。

古賀登氏は、「この話はかなり古くからあったものだと思う。しかし褚先生補文は、漢の元帝・成帝時に作られたものであり、当時の人々に受けるように、話を作りかえてあるふしがある。だから、ここに三老の名がみえるからといって、魏の文侯時に三老があったとはいえない。おそらく、郷三老は、秦がこれを設置し、漢がそれを継承したものであろう。」⁽¹¹¹⁾と指摘した。また中鉢雅量氏は別の角度から、「河伯娶婦の話も、本来は河上に設けられた齋宮で三老と巫祝とがそれぞれ河伯とその婦とに扮して神婚儀礼を執り行い最後に彼らは水に浴することによって、彼らの扮する神々が水中の常居に帰ることを表現した」⁽¹¹²⁾が、「説話化する過程で、話の主題が西門豹の治政に移動し、それにつれて彼らも西門豹によって次々と河中に投ぜられるという筋に変わったのであろう。いかに人権が重視されなかった古代とはいえ、年毎の祭祀に一人一人身を犠牲にしていたら、その祭祀を維持すべき共同体自体が成り立たなくなるのは明らかである。」（同上）とした。

魏文侯から漢成帝までには凡そ四百年ほどの歴史が流れている。宮崎市定氏によると、「戦国から漢初にかけて、当時の大都市を中心として（後の宋代と）同じような有閑階級が存在して（カッコ内は引用者）」⁽¹¹³⁾おり、「閑つぶしの娯楽が当時の社会に要求されていた」（同上）という。更にまた「戦国・秦漢代の都会における市では、市民が集まると、其中の二人、乃至三人が役者となり所作事を演じ、科白を述べて、物語を進行させて、民衆の喝采のうちに時間を潰した。これを偶語と称した。」⁽¹¹⁴⁾ともされた。いわば中国版の「にわか」である。すると上引説話の特に西門豹が大巫姫らを次々と河中へ投げ込むあたりの掛合いを中心とする（C）、またその前提となる（B）の件などは、いかにも観衆を意識した「偶語」劇には相応しく、そもそも褚少孫が扱った資料自体すでにその時代的な影響を色濃く反映したものだっただけではないだろうか、と推測される⁽¹¹⁵⁾。また近時、小南一郎氏はアンネリーゼ・ビューリング氏やこの宮崎市定氏の研究などを踏まえて、「漢代の画像石や画像磚」にみえる図象の分析をされ⁽¹¹⁶⁾、当時「舞台上で歴史的な故事が上演されていた」（同上）可能性を指摘し、『史記』において「歴

史的に重大な場面に登場する人物の所作が詳しく書かれている」(同上)のは、その「舞台上の俳優たちの所作を写したもの」(同上)だったからではないか、と提唱された。もともと、「漢代の演劇は、一幕ものであるに止まり、一つの物語をいくつもの幕を重ねて上演するものではなかったであろう」(同上)とも言われる。

中国では伝統的に祠廟の装飾として様々な石刻絵図を施すことが行われた^{三三}という。「西門豹故事」の具体的な図象^{三四}にも疎い門外漢の私には到底説明は出来ないが、西門豹は後代において信仰の対象^{三五}にもなっている事実からして、彼の治績がさまざまな伝承のうちに語り継がれたことは確かである。従って褚少孫の後補時点までにはすでに相応の粉飾も加わっていたのではないかと推考するが想像の域をでない。いずれにしても、この故事が後補された前漢の後半代は、最後に触れるように政治的な礼制改革のあった時期と重なっており、そういう時代的背景を抜きには語れないだろうと今は推測するばかりである。

さて、ここに登場する齋宮を観察すると、それは河伯にめあわせるべく選ばれた城中の「かおよき女」が、沐浴した後、新しい衣裳に身を包み、齋戒をする(「之ヲ洗沐シ、為ニ新タナ繪綺縠衣ヲ治シ、閒居齋戒セシム」)ために入る臨時の建物(「為ニ齋宮ヲ河ノホトリニ治ス」)であり、いま強いて日本語に類例を求めれば「齋屋」「いもゐの屋」^{三六}に相当しよう。黄赤色の帷を張り巡らしてその中に齋居させた(「緹絳ノ帷ヲ張り、女ヲ其中ニ居ラシム」)もので、文字どおり「河上(河のほとり)」に用意されたことが判る。建物の規模や構造などは全く不明だが、「かおよき女」を河へ流すに当たっては花嫁と同じような扱い(「共ニ之ヲ粉飾シ、嫁女ノ床席ノ如クス」)のうちに事を進めたことも読み取れる。

時代も社会的諸条件等も異なるので無機質断片的な単純比較になるが、若い女性、沐浴、衣裳、齋戒、齋居といえれば日本の齋内親王にも付随する文化的諸要素でもあり、その点に限定すると、右例にいう齋宮とわが国齋王制度上の施設としての齋宮とは、仮に宗教的には異質な面を認めたとしても、各々の構成要素が果たす機能的側面には類似する部分もあった、と言えるかも知れない。ただ、根本的な相違点がある。当該祭礼の主催が民間にあり、それが王権にかかわる行事ではないこと、従って、選ばれる「好女」も城内の一般市民(と本文にはいう)であることは決定的に異なること、いわゆる「齋王制度」成立以前の五十鈴河畔における豪族祭祀には別途私案^{三七}もあるが、少なくとも律令制下において独自に創始された伊勢齋内親王が「水神」への犠牲として、洪水を恐れて発遣されるものではなかったことなど、どの観点からみても、伊勢齋宮が上記「河伯祭祀」の「齋宮」の影響下に考案されたとは考えられないものであった。

(三) 神祭りと犠牲

河神祭祀は殷代にもあった^{三八}が、関係資料は王や諸侯の祭祀が中心にならざるを得ない。赤塚忠氏は、「河神を迎えて賓饗するのは、王の聖務」^{三九}で、「沈禮の犠牲には、(略)多くの場合が牛」(同上)であり、「人身犠牲には主として被征服民の羌族が捕らえられて用いられた」が「常例であったとは見えない」(同上)とした。白川静氏も、殷王陵墓における「多数の殉殺者は奴隸ではなく、(羌南等の)異族犠牲

であり」^{四六}、そのため羌人は「しばしば捕獲の対象」(同上)になったとし、「河水の祟を禦ぐに三十羌を用ひた」^{四七}とのト辞も紹介している。

岡村秀典氏は、殷墟西北岡王墓から出土した「人頭骨の形質人類学的な分析では裏付けられていない」^{四八}としつつ、「羌や京など異民族人牲の多い王墓の祭祀は全体的に軍事的色彩が強い」(同上)とした。岡村氏は王権祭祀における用牲の序列化や時代的変遷などを出土遺物に即して分析されたが、戦国期楚の上層貴族間であった「大水(水神)」^{四九}祭祷の供犠に羊や佩玉等が用いられていた事も解明された。前引「楚昭王、遂不祭」の例(前掲註二二)でも、王の寝疾の原因が「河為祟(河、崇リヲ為セリ)」と卜占に出ると、大夫は「請用三牲」^{五〇}(請フ三牲ヲ用ヰムコトヲ)《どうか三牲―牛・羊・豕―を黄河の神に捧げてお祭りください》^{五一}と進言している。戦国魏(鄴)に行われた巫女による一般民衆の河神祭祀に伴う供犠内容も、今の所はそういう事例から敷衍して類推するしかないのではないかと思う。

『周禮』春官大宗伯には「狸沈ヲ以テ山林川澤ヲ祭ル。鬴辜ヲ以テ四方ノ百物ヲ祭ル」^{五二}として山林川沢の祭祀を一括するが、後漢の鄭玄は「山林ヲ祭ルヲ埋(狸)ト曰ヒ、川澤(ヲ祭ル)ヲ沈ト曰ヒテ。其ノ性(物の本質)ノ含藏ニ順フナリ」^{五三}と分けて説いた。唐の賈公彦は「山林には水が無いゆえ之に埋め、川澤には水あるゆえ之に沈める。だから性の含藏に順うと言うのだ。」(同上)と疏解した。一方、『爾雅』は「川ニ祭ルヲ浮沉ト曰フ」^{五四}とし、晋の郭璞が「水中ニ投祭スレバ、或ハ浮カビ或ハ沈ムナリ。」(同上)と註した。郭璞の註はさも河伯娶婦を想起させるが、『淮南子』説山訓にいう所は「犠牲とするに可能な牛」^{五五}である。また「牛ヲ殺スハ必亡ノ数ナリ」(同上)とし、高誘は「牛ハ穀ヲ植ウル所以ノ者ニシテ、民ノ命ナリ、是レ王法ヲ以テ殺牛ヲ禁ズナリ。民ノ禁ヲ犯シテ之ヲ殺ス者アラバ誅ス、故ニ必亡ノ数トイヘリ」(同上)という。このように沈祭には牛を用いたとするも、それが戦国鄴の一般庶民に供犠可能な家畜であったか否かはなお疑問であろう。牛の継続的飼育には一定の経済力が必要で、秦漢時代でも民間の祭祀における犠牲は豕や羊だった^{五六}からである。

漢武帝(元封二年四月)や、あるいは成帝代(前三三―前七年)に東郡太守であった王尊などは、黄河決壊地点の瓠子で河伯に白馬を投沈している^{五七}。後漢建武廿九(後五三)年には、「会稽の俗、淫祀多く、卜筮を好む。民は常に牛を以て神を祭り、百姓の財産は之を以て困匱」^{五八}す見え、時の太守第五倫は牛の犠牲を禁じている。あるいは北魏肅宗(孝明帝)の熙平元(五一六)年夏には炎旱が続き、「苗稼ハ萎悴シ」^{五九}、瀛州の民に飢饉もあり「倉ヲ開キテ賑恤」(同上)しなければならなかった。その秋七月庚午には「重ねて」殺牛の禁止令を出している。民衆の間に祈雨のための殺牛祭祀(水神祭祀)が絶えなかったのである。また遙か後世になるが、「宋代(少くとも十三世紀)を通じて水旱祈求の地として信仰されてきた祠山廟の祭り」^{六〇}では、再三にわたる禁令措置にもかかわらず耕牛を屠殺して神への牲とする風習は止まなかった(同上)。旱魃であれ多雨洪水であれ、非情の自然が数多の農民にもたらすものは飢餓と疫病である^{六一}。耕牛を水神へ供犠したのは、少なくとも宋代ではそれが農民の貴重な栄養補給源でもあったからに違いない。神事ゆえに牛を殺せたのであり、時代は隔絶するが動物犠牲に普遍性を認め得る所以は多分ここにもある。「現実の民衆生活を描く最初の歳時記」^{六二}たる『荊楚記』には三月三日に「流杯曲水

の飲」をいうが、もとより水浜での祓禊と先秦時代の河伯祭祀との関連性の有無などは杳として知れない。いずれにせよ、独り鄴の河神祭祀だけが城中の女性を犠牲にしえた必然性を見出すのは難しい。

尤も、戦国秦の河神祭祀を『史記』は次のように記す。即ち、秦の靈公八（前四一七）年に「城塹河瀕。初以君主妻河（城塹ハ河瀕ニアリ。初テ君主ヲ以テ河ニ妻ハス）」^{（六三）}と見え、司馬貞（索隱）は「謂初以此年取他女為君主、君主猶公主也。妻河、謂嫁之河伯、故魏俗猶為河伯取婦、蓋其遺風。殊異其事、故云「初」（同上）」とした^{（六四）}。都城を巡る水堀が黄河のほとりに在ったがために、その洪水被害を畏れた靈公が河伯を祀ったのである。「初テ此年を以テ他女ヲ取リテ君主ト為スヲ謂フ、君主トハ猶ホ公主ノゴトキナリ」といえば、その時犠牲となつたのは「君主」でも「公主」でもない、実に「他女」^{（六五）}である。彼女を河伯祭祀用の君主（公主）と見なすべく「身代わりの王」として偽装し（仮王）、「河に妻せた」というのである。「河ニ妻ハストハ、之ヲ河伯ニ嫁ガセルヲ謂フ。」とあり、それは『莊子』人間世の「河にとつぐ」^{（六六）}と同義である。晋の司馬彪が「謂沈人於河、祭也（人ヲ河ニ沈メテ、祭ルヲ謂フナリ）。」^{（六七）}とする人身犠牲を伴う水神＝河伯祭祀である。しかも貞は続けて、「故ニ魏ノ俗猶ホ河伯ノ為ニ婦ヲ取ルハ、蓋シ其ノ遺風ナリ」という。前引魏（鄴）の河伯娶婦の習俗はこの戦国秦の靈公による河伯祭祀の遺風だというのである。

インドやヨーロッパでも一般的に神饌に用いる動物は主として牛・馬や子山羊などであったが、処女犠牲の伝説も遺っていたらしい。かつてS・A・B・メルセル氏が、「ローマではテベレ河へ、インドではガンジス河へ、エジプトにおいては特に少女たちがナイル河へ捧げられた。それゆえ、祭壇（供物台）として（水神に）好まれる場所はナイル河の堤防（土手）の上であった。」^{（六八）}といい、E・O・ジェイムス氏もそれには「水の精霊（水神）の妻とするために少女を捧げる実際の習俗が反映されている可能性が高い」^{（六九）}とした。真偽のほどは不明というしかないが、カイロにあったというカリージの「花嫁」の伝説^{（七〇）}にも通底しあう古い習俗の一種と解されよう。こういう見地に立つならば、いかにも中国の河伯は、ベンガルのグジャラートなどで海、河、池、泉（湧水地）あるいは井戸などに棲む「水の王者」として崇められ、かつ古代においては人身犠牲も受けたと伝承される水神ヴァルナ^{（七一）}に相当するような印象をさえ受ける。

しかしここでの問題は、右記戦国秦の事例も君主の河神祭祀であり、鄴における庶民のそれとは違う。かつ身代わりの「他女」を用いるが、それは一種のスケープゴートに他ならなく、しかも「初テ」あった異例の犠牲を指すようで、必ずしも毎年の恒例行事ではない。通例は動物犠牲のほずで、よしんばその「他女」が沈祭されたにせよ、殷代以来の知恵を以てすれば異族犠牲などであった蓋然性が高い。かつて志田不動麿氏^{（七二）}が『春秋左氏伝』から引用された幾つかの神事例でも「俘虜」を用いた事が明らかで、『公羊伝』昭公十一年冬条の滅ぼされた蔡の世子有の事例（同上）にしても、犠牲となった有は楚師に捕らえられた俘虜であり、罪なき一般市民の例ではない^{（七三）}のである。

いま他国の一般的な宗教儀礼で人身犠牲を伴う特異な事例に目を向けてみると、例えば、古くバビロンのサカエア祭で殺されたのはゾガネスの称号をもつ擬王として選ばれたが、彼は囚人犠牲であった^{（七四）}という。古代ギリシャのアテナイでは「墮落した無用の人間を公費で養つ

ていた」^{七四}といい、疫病の蔓延や旱魃、飢饉といった社会的災厄に直面したとき、そうした賤民の中から選んで犠牲として神に捧げたと言
う(同上)。また、かつてメキシコの九月の大祭でトウモロコシの女神チコモコワトルに献げられる十二、三歳の少女は「最も美しい奴隷か
ら」選ばれた^{七五}のであった。

一方、わが国にも人身御供や人柱に関する高木敏雄氏や柳田国男氏らの研究成果^{七六}がある。ここには詳述し得ないが、(加藤玄智氏を別
して)両大家はともにその否定的結論に至っている^{七七}。もともと、津田左右吉氏は当該「滑稽列伝」に触れて、「人間を犠牲にすることの起
源・由来や、それと殉死及び家畜を牲にすることとの関係などは、今ここで説く違は無く、また中国の文献に於いてそれを説明するに足る材
料を発見することも出来ないようであるが、兎も角もこういう事実はある。」^{七八}としている。

以上、いささか乱暴な選択ながら、これらの断片的な情報を以てしても、鄴の河伯祭祀における年毎の継続的な城中婦女の犠牲には疑義が
生じるに十分であろう。そうした段階から、更に「短い在任期間が終わったあともはや殺されることはない」^{七九} 仮王へと、徐々にではあれ
総じて神祭りの歴史は進んできたのではないだろうか。かつて山口昌男氏は「フレイザーは」単に王殺しのみにこだわっていたわけではな
い^{八〇}として深い洞察を加え、特にカーニヴァルにおいて追放される擬王の習俗などに注目し考察されたのである。

フレイザー氏も言うように、「文化の進歩につれて、無罪の人物を犠牲とすることは一般の感情に合わぬこと」^{八一}であった。異族犠牲では
あれ、岡村氏も殷墟王墓の祭祀に「時期が下るにつれ人性数が減少する」^{八二}傾向を指摘する。前引中鉢氏の「年毎の祭祀に一人身を犠牲
にしていたら、その祭祀を維持すべき共同体自體が成り立たなくなる」のは、洋の東西を問わず自明の理である。「秦の遺風」というも鄴の
河伯祭祀における「貌よき女」の一件は、それが史実としてもせいぜいが賤民や囚人等から選んだ蓋然性が高く、通常は豕、鶏、犬などの動
物犠牲であったと考えたい^{八三}。前引(B)で縷々説明される「貌よき女」の件には、(C)で「投巫」(最大の見せ場)の前提となる「豹が
女の好醜を視る」場面を引き出すべく、あるいは「偶語」的影響なども受けつつ、歳月を経て徐々に加筆粉飾されてきた部分があるのではな
いか、と疑うものである。

(四) 婦女犠牲伝承と斎宮

明末清初の顧炎武は「河伯」についての小論に「大抵傳える所は各々異にす。而れども河神に夫人有ると謂うは。亦秦人の君主を以て河に
妻はし、鄴巫の河伯の為に婦を娶るの類のみ。」^{八四}とした。河が異なるためかそこでは李冰の「江君退治」には言及されなかったが、その話
は『風俗通義』逸文^{八五}に見えている。

かつて黄芝崗氏はこの「江神、河伯は中国の伝説上に在って仏教がまだ中国に伝入する以前の時代の龍王である」^{八六}とし、澤田瑞穂氏も
「河伯とは黄河を支配する水神で、その名は憑夷または冰夷、すなわち後世にいう龍王である」^{八七}との認識を示された。それは水中に棲み
雲雨(水旱)を支配する水神で、「江水有神、歳取童女二人以為婦、不然、為水災(もし童女二人をして長江の神に妻せなければ水災をなす)」

(註八五所引)と恐れられた。ここでも婦女犠牲が前提である。しかもこの江神は蒼牛の姿をとって現われ^{八五}、それと戦う李冰自身もまた牛に変身して彼を退治する。河神伝説における牛と龍(ないし大蛇)とは同じものの化身だと黄氏も言い^{八六}、石田英一郎氏は「その根底はいずれも牛の多産豊饒呪能にあること、東南アジアから地中海にいたる一帯の農耕文化圏にみられる」^{八七}とした。

一九七四年三月三日に、四川省は灌県城の西にある都江堰で建寧元(西暦一六八)年の紀年銘のある李冰の石像が発見されたことは、日本では林巳奈夫氏も紹介し^{八八}、李冰治水伝説の背景を鶴間和幸氏が専述している^{八九}。問題の李冰石像は灰白色砂岩製で、その身高は二・九メートル、肩寛(肩幅)〇・九六メートル、肩から足までの高さ一・九〇メートルあり、重量は約四トンという^{九〇}。この衣襟と左右の袖の上に隸書体で題記三行が浅刻されていて(文字溝の内に朱色の充填がある)、胸部に当たる襟の中間に「故蜀郡李府君諱冰」^{九一}とありその石像が李冰であることを表す。左袖上に「建寧元年閏月戊申朔廿五日都水掾」(同上)、右袖上に「尹龍長陳壹造三神石人琺水万世焉」(同上)とあり、「珍は鎮に通じるので珍水は鎮江を寓意したものだ」(同上)という。

李冰が三石人を造り、それを水中に立て、「後世浅無至足、深無至肩(後世マデ浅クトモ足ニ至ルコト無ク、深クトモ肩ニ至ルコト無カレ)」と、江神に誓願した所謂「誓水碑」のことは『華陽國志』や『集古録』にみえるが^{九二}、題記にあるように発見された李冰石像が後漢靈帝の建寧元(一六八)年に当時の都水掾であった尹龍と都水長の陳壹による造立だったことから、徐光煦、劉固盛両氏は劉琳氏の説をもって次のように推理した。「思うに李冰は始め三石人を立てて江水を鎮め、兼ねて水測(器)ともした。後世それを踏襲したが、しかし李冰が神と(して崇められるように)なると、彼の石像を刻してもとの石人を取り替えたのではなからうか(拙訳)」^{九三}と。いずれにもせよ、李冰が造った石人も尹龍、陳壹らが造った石人も「水位計測の為の水測器」^{九四}であった。水旱への脅威がこうした信仰文化を育んだのである。

同様の祭祀伝承は河だけではなく、岳神娶婦の例もあった^{九五}。虞世南が「西門投巫」と対比して「宋均為唐山娶巫家女。」^{九六}と掲げる一件は、『後漢書』宋均伝のほか、『東觀漢記』や『風俗通義』など^{九七}にも記される。それは、(安徽省)浚縣にある唐、后二山の神祀りに、衆巫が百姓の男女を取って山公・山嫗となし、毎歳交代させる習わしだった。公・嫗となった男女は嫁娶するを得ず、それゆえ百姓たちはこの旧弊に苦しんだが、九江太守の宋均が「今自り以後、山ノ為ニ娶ラン者ハ皆ナ巫ノ家ヨリ娶リ、良民ヲ擾ガスコト勿レ」^{九八}と命を下してその旧弊を絶ち、百姓らの窮状を救ったという話である。地方行政官の長として赴任した主人公(宋均)が淫祀に苦しむ土地の弊習を断って百姓を救うという筋立ては、西門豹や李冰の話と殆んど軌を一にしている。

婦女の犠牲では、『搜神記』^{九九}に見える李誕六女の末娘(季女) 寄が大蛇を退治する話はスサノオの八岐大蛇退治の類話として夙に有名で、従来から「バビロニアやギリシャをはじめ、東は日本列島ーベトナムから西はスカンディナヴィア、スコットランドをふくむほとんど全ヨーロッパにわたって伝播し、さらにアフリカのニグロ、カビレ、アメリカのインディアン、エスキモーなどの諸種族のあいだにも見出される」^{一〇〇}という、所謂「ペルセウスⅡアンドロメダ型」神話の一類型に属すとされてきた。ただ金関丈夫氏は早くから「外婚的双分制社会」

の問題としてこれら同類説話の再解釈を試み、そういう従来からの神話学の通説に対し異議を唱えて来られた²⁰⁴点だけは留意しておかねばならない。

一般的に水神は牛形のほか、「蛇形や龍の姿をとる」²⁰⁵とされ、いま『搜神記』の話では河伯や岳神に代わり大蛇が娘を要求する。即ち、「東越国閩中郡に庸嶺という山あり。山の西北の洞穴に長さ七、八丈の大蛇。毎年八月一日の祭日に、十三歳の少女を食べたいと村人に要求。既に九人の少女が人身御供に。十年目に、李誕の家の六人娘の末子の寄なる娘が犠牲の募集に応じた。役人に切れる剣と蛇を噛む犬を用意させ、祭の当日、洞穴近くの「廟」の中に座り、用意した団子を穴の前に置いて待ち、犬と一緒にその大蛇を退治した。」²⁰⁶という。早川光三郎氏は『今昔物語集』（巻二六ノ八）の「飛驒國猿神止生贅語」や『宇治拾遺物語』（十ノ六）の「吾婦人止生贅事」はこの話の翻案と推断している（前掲『蒙求』下、八九〇頁）。

見てきたように季女大蛇退治には辛うじて「便詣廟中坐」（註一〇二所引本文）との表現はあるものの、秦の靈公八年の記事にも李冰の「江君退治」にも、そして宋均の「為唐山娶巫家女」にも文字表記として「齋宮」の語は現れない。民間信仰において今それが登場するのはやはり西門投巫の故事だけであった²⁰⁷。

（五）結びにかえて

戦国時代魏の鄴における河神祭祀の一面を伝える西門投巫の故事では、河伯娶婦のために選ばれた「小家女好」が、沐浴後に新しい衣裳に身を包み、齋戒をするために入る、河のほとりに立てられた臨時の建物を「齋宮」と称している。それはわが国の「いもひ屋」に相応する。ただ、その故事文言に部分的ではあれ後世の創作性を疑う立場からは、その「齋宮」の語が戦国魏の民間に通行していたのか否かの判断は難しいところであった。

あらゆる諸条件が違うので語彙上の単純比較にはなるが、祭祀に臨む若い女性と沐浴、衣裳、齋戒、齋居と言えはわが齋王制度にも付随する文化的諸要素であり、その点にのみ限定すると、西門豹故事における齋宮と齋王制度上の施設としての齋宮とは、仮に宗教的に異質な面があったとしても、それら構成要素が果たす宗教機能的側面においては似通った面もあると言えなくはない、と考えた。しかし、今回取り上げた河伯祭祀は飽くまでも中国古代の民間祭祀であり、そもそものが王権（皇統）の正統性を保障する齋王制度（齋内親王による天照大神への定期的奉祀の繰返し）とは根本的に異質である。従って、日本の齋内親王は京内の一般女性ではあり得ないし、もとより「水神」への犠牲として、洪水を恐れて発遣されるものでもなかったのである。

殷代以来、王権の河神祭祀における沈礼には牛や羊が用いられたが、人性には捕獲した羌族など異族を用いた。『金枝篇』にも種々の祭祀に囚人や奴隸等を犠牲に用いた事例がある。また、考古学の調査成果を駆使した岡村秀典氏による精緻な研究成果から、戦国時代楚の上層貴族間においてさえ、彼らが行った水神への祭祷に用いた供犠は羊や佩玉等であったこと、秦漢時代の民間祭祀の犠牲には豕や羊が用いられて

いた事実などを知ることができた。また、後漢時代に長江河口にもほど近い會稽の俗は、「淫祀多く、卜筮を好む。民は常に牛を以て神を祭り、百姓の財産は之を以て困匱」すといひ、建武廿九年、時の太守第五倫は牛の犠牲を禁じている。農民には「牛ハ穀ヲ植ウル所以」（高誘）の貴重な家畜だったからであろう。

このような歴史的前提を踏まえ、「秦の遺風」たる戦国魏の河伯祭祀に仮王としての「他女」を重ねたとき、それが史実としても、やはり犠牲となる婦女にはせいぜい賤民や囚人等を想定するのが妥当ではないかと考える。通常に行われる民間祭祀であれば、より現実的には豚や羊、ないし鶏、犬などの動物犠牲が本来の姿であつたろうと推測する。従つて、例えば伝の内容が時代を経ると共に詳しく長くなったように、勿論それと趣旨は異なれども、西門豹故事の（B）にいう「貌よき女」の件も、（C）での意表を突く「投巫」に至る滑稽を一層効果的に演出すべく、あるいは宮崎氏の研究にある「偶語」など演劇的な即興文化やさまざまな伝承の影響をも受けつつ、元帝・成帝時代（前四八〜前七年頃）頃までには徐々にその内容は粉飾加増されたものではないかと、疑わざるを得なかった。

その上で今、それが補筆された時代の政治的背景を考慮すれば、次のようなこともまた言いうるかも知れない。即ち、漢の高祖は天下を平定すると秦時代の祝官らに従前からの祀祠を掌らせたが、その中には臨晋（もとの大荔）の河巫もあつた²⁰⁴。これは四大河のうちの黄河（の神）を祠るもので河水祠²⁰⁵に属していた。前漢代にはそういう既存の祭祀所においてそれぞれの巫者らによる伝統的な方術・巫術要素が完全に活動は存続していたと思われる²⁰⁶。武帝の時に「儒学の官学化」²⁰⁷がなされたが、それによつて諸祭祀における方術・巫術的要素が完全に払拭されたわけでは勿論ない。武帝以来の伝統的な甘泉泰畤の祭祀は宣帝や元帝、成帝代にも存続している²⁰⁸。しかしすでに明らかにされているように²⁰⁹、宣帝・元帝および成帝から王莽にかけての前漢後半〜末期代は、従来の呪術的要素の強い皇帝祭祀を見直して儒家の礼書に基づく制度へと切り替えようとした前漢礼制改革（宮川尚志氏の言葉を借りれば「儒家と巫祝・方士との抗争」）のさなかにあつた、と理解している。大まかに言えば、旧来の方術・巫術的要素は儒家の礼説によつて王朝の祭祀儀礼の主流から除外されんとする過程にあつたといえよう²¹⁰。従つて、右先学諸氏の研究成果を踏まえると、少なくとも褚少孫が滑稽列伝に西門豹故事を補筆した当時の時代的背景には、そのような祭祀儀礼をめぐる教義上の政治的な変革・潮流があつたと見なければならぬ。補筆された西門豹故事には劇場型ともいうべき「投巫」という形で象徴的に淫祀廃絶を強調することによつて、伝統的な巫祝祭祀に対しての痛烈な批判の意志ないしは否定的態度の表明がそこには込められて、改革派儒家の精神が端的に表現されたものではなかったか、との感懷をもつのである。

最後に、河神岳神を問わず中国古代の民間信仰における人性説話は戦国魏の河伯娶婦以外にもあるが、李誕六女の末娘寄の大蛇退治には「便詣廟中坐」との表現はあるものの、秦の靈公八年の記事や李冰の「江君退治」にも、そして宋均の「為唐山娶巫家女」にも、求める「斎宮」の語は現れず、それが登場するのは西門豹の故事に限られた。魏文侯の時代から約四百年の時を経て褚少孫が補筆した元帝〜成帝の頃には、秦漢の皇帝祭祀儀礼を通じて「斎宮」の語はすでに知識人には周知されていたであろう。それ故、冒頭の記事にみる「斎宮」の語もそのまま

戦国魏の時代からすでに通行していたというよりも、褚少孫の補筆時点ないしそれまでの間に加筆されたのではないかと考えるに至った。詮索すればなお、所掲の(B)に「・・女居其中。為具牛酒飯食、十餘日。」とある「十余日」にしても、少なくとも漢代には明らかな「斎戒十日」^(二五)のごとき上層階級における社会的通念がその背景に働いていはいはなかったのかと、今は推測している。

【註】

- (一) : 言語学者 B. Karlgren が復元した中古音は Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese. Origin. Paris 1923. (Republ.ish. Taipei. 1973) に表示。阿辻哲次著『漢字学』東海大学出版会、一九九二年、二〇一頁の註、及び白川静著『文字道遥』平凡社、一九九四年、三二二頁も参照。
- (二) : 『史記』(中華書局、一九八九年) 列伝第六六(三二二―三二四頁)。褚少孫は漢元帝・成帝時代(前四八―前七年頃)の博士。武帝代に「各地で盛んにおこなわれた灌漑用の渠の工事」費用の国家財政への「負担が大きいことに危惧の念を」持っていた司馬遷も、「とりわけ戦国時代から秦代にかけての」灌漑事業は高く評価した(佐藤武敏『史記』河渠書を読む、森田明編著『中国水利史の研究』国書刊行会、一九九五年所収)という。なお、武宗会昌中の晋陽令狄惟謙は、効驗なき女巫を鞭打ち潭水に投げ込んだあと、湯王の故事を彷彿させるような「焚躬祈雨」をおこない、勅書中に「類投巫於鄴縣」として西門豹故事と対称せらる。『劇談録』(中華書局、叢書集成初編、一九九一年所収) 卷上、四八―五三頁。『太平廣記』(中華書局、一九八一年第二次印刷) 卷三九六(三一六―三七頁)に『劇談録』を引く、周勳初校證『唐語林校證』(中華書局、一九八七年) 卷一(七六―七七頁)、劉大鵬遺著『晋祠誌』(山西人民出版社、一九八六年) 第十八卷(四七一―四七三頁) 参照(文字の異同あり)。
- (三) : 福永光司著『莊子』雑篇・上(朝日新聞社、一九七八年)、外物篇第二十六(二四三―二四五頁)。氏は「黄河の水利を監督する諸侯の意か」とす。劉向撰『説苑』は「魏文侯」と記す(明嘉靖廿六年何良俊序、新安程榮校、日本橋須原屋茂兵衛版、卷十一、十三―十四葉。趙善詒『説苑疏證』、華東師範大學出版社、一九八五年、卷十一、三一六―三二七頁)。陸徳明撰、張一弓點校『經典釋文』(上海古籍出版社、二〇一二年)、外物第二十六(六〇〇頁)。
- (四) : 平勢隆郎編著「表Ⅱ新六國年表」『新編史記東周年表』、東京大学出版会、一九九五年) 一四〇―一五二頁に依拠。以下、西暦年表示は逐一断らないが、当該年表に依拠する。
- (五) : 早川光三郎著『蒙求』下(明治書院、二〇〇七年)、「西門投巫」八八七―八九〇頁(早川氏はこの故事は『今昔物語集』十ノ三三「立生賛国止此平国語」に翻訳されたとす)。
- (六) : 豹は淫祀を廃した上に、民に蓄積して燕を撃ち、侵地回復の功あり『淮南子』人間訓、及び『晋書』卷八十六、張駿伝)。漳水を引く灌漑事業は魏の富国強兵策の一環で、『冊府元龜』(卷七〇二「能政」)に「河内稱治、名聞天下。」と評す。鄴の故城は河南省臨漳県の西方二十里、漳河北岸にあった(『讀史方輿紀要』第三冊、中華書局、一九五五年、二二二七頁等)。日本にも筑後守首名の治績など類似の話がある(『続日本紀』、養老二年四月乙亥条。『文徳天皇実録』、仁寿二年二月壬戌条、同仁寿三年十二月丁丑条。『続群書類従』第八輯上所収「故左金吾兼野州太守平公墳記」など)。津田左右吉氏は下道君首名の記事に「及卒百姓祠之」とあるのは「中国の史筆の模倣に過ぎなからう。(略) かういふ記事がただ一つのみであることから、かう考えられる。」とした(『津田左右吉全集』第九卷、岩波書店、一九六四年所収、「日本の神道」第三章、五七―五八頁)。

- (七) …前掲『史記』河渠書、一四〇八頁。酈道元著・陳橋驛校證『水經注校證』（中華書局、二〇〇七年）卷十、二五八頁。恐らく、灌漑による塩類集積の問題など到底及びもつかぬ時代のことであつたろう。
- (八) …『呂氏春秋』（国民文庫刊行会、一九二四年）卷十六、先識覽第四、樂成三一四～三一七頁。『漢書』六（中華書局、一九八三年）、卷二十九、溝洫志第九、一六七七頁。天野元之助著『中国農業史研究』（御茶の水書房、一九六二年）、一七八～一七九頁。顔師古は「鹵は塩分を含有した荒地」であるとす（右掲『漢書』一六七八頁）。
- (九) …王文錦等點校『通典』一（中華書局、一九八八年）、食貨二、水利田、三三頁。
- (一〇) …好並隆司著『秦漢帝国史研究』（未來社、一九八四年）、第四篇第一章、三六五～三八八頁。
- (一一) …『後漢書』（中華書局、一九九一年）孝安帝紀第五、二二二頁。『玉海』（江蘇古籍出版、上海書店、一九九〇年）卷二、魏十二渠・漳渠、四一四頁…『漢安帝紀元初二年春正月、修理西門豹所分漳水為支渠、以溉民田注渠、今在相州鄴縣西。』、また同書卷二、四二四頁にも「安帝紀元初二年春正月、修理西門豹所分漳水為支渠、以溉民田注。（略）」とす。
- (一二) …『六臣注文選』上冊（中華書局、一九八七年）、一二七頁。陳奇猷『呂氏春秋新校釋』下冊（上海古籍出版社、二〇〇二年）卷十六の註三九（一〇〇九～一〇一〇頁）。陳氏も豹の灌漑を史実とす。
- (一三) …前掲『水經注校證』卷十、濁漳水、二五八頁。武志遠・任常中「西門豹治鄴与《西門大夫廟記》碑」（『文物』一二三三号、一九七四年）。木村正雄氏も「彼が水利事業に先鞭をつけたことは間違いない」（『中国古代帝国の形成』不味堂書店、一九六五年、一七六頁。該説初出は「中国古代国家成立過程における「治水灌漑」の意義」（『東洋史学論集』清水書院、一九五三年所収）とする。
- (一四) …武漢水利電力学院・水利水電科学研究院《中国水利史稿》編写組『中国水利史稿』上冊（水利電力出版社、一九七九年）、六五～六六頁。孟昭華編著『中国災荒史記』中国社会科学出版社、一九九九年、第五章第三節、九七頁。鄴連第主編『中国水利百科全书』水利史分冊、中国水利水电出版社、二〇〇四年、九頁、三二頁。姚漢源著『中国水利發展史』上海人民出版社、二〇〇五年、三五頁。張芳著『中国古代灌漑工程技术史』山西出版集团・山西教育出版社、二〇〇九年、四八頁、一六二～一六三頁、など。
- (一五) …山田孝雄著『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館出版、一九九四年、第六章、三三三頁。
- (一六) …公田連太郎訳註『管子』（国訳漢文大成經子史部第十九卷、国民文庫刊行会、一九二四年）、卷第十四、水地第三十九、四四二頁。「集於天地。而藏於萬物。産於金石。集於諸生。故曰水神（天地ニ集マリ、而シテ萬物ニ藏セラレ、金石ニ産シ、諸生ニ集マル。故ニ曰ク、水ハ神ナリト）」。
- (一七) …森三樹三郎著『支那古代神話』（大雅堂、一九四四年）、二三九頁。章宗源稿本・馬國翰輯『玉函山房輯佚書』（文海出版社、民国五十六年）所収、宋均注「孝經緯援神契」卷上・九葉（二一四七頁）に「河者、水之伯、上應天漢（河ハ水ノ伯ニシテ、上ハマサニ天漢ニ応ズベシ）」とする。
- (一八) …郭鄂著『山海經注証』（中国社会科学出版社、二〇〇四年）第七章第三節「海内北經」、七二三頁所引『抱朴子釋鬼篇』（今本无）に「河伯蓋古黄河水神（河伯ハ蓋シ古ノ黄河ノ水神ナリ）」とある。「河」は本来「水の流れ」の通称だが、黄河流域の文化が最も早く発展したために「河」といえば専ら「黄河」を

指すようになった(岑仲勉著『中外史地攷證』上冊、太平書局出版、一九六六年、『穆天子伝』征西地理概測(二)、一三〇一四頁)という。なお、岑氏が『元和郡縣図志』巻四〇から引く「甘州白亭海」は正しくは「肅州白亭海」であろう(李吉甫撰『元和郡縣図志』、中文出版社、一九七九年三版、五五九〜五六〇頁参照)。

(一九) 森安太郎著『黄帝伝説』(朋友書店、一九七〇年)、三二〜四〇頁「河伯憑夷」(三六頁)。

(二〇) 星川清孝著『楚辭』(明治書院、一九九九年)、九四頁。

(二一) 『公羊伝』僖公三十一年に「諸侯山川有不在其封内者、則不祭也」とす(『十三經注疏』一七・春秋公羊伝注疏上、新文豐出版公司、二〇〇一年、四八四頁下段)。鎌田正著『春秋左氏伝』四(明治書院、一九九三年)、哀公六年、一七六七頁。前掲『史記』五、楚世家第十、二十七年十月条(二七一七頁)。許維通校釋『韓詩外傳集釋』(中華書局、二〇一二年)巻三第八章(九〇〜九一頁)、『説苑』(巻一、君道篇)、前掲須原屋版では十三葉、疏證本は二三〜二四頁。服部宇之吉校訂『淮南子 孔子家語』(富山房、二〇〇四年)、『家語』巻第九、四〇頁等参照。

(二二) 中鉢雅量著『中國の祭祀と文學』(創文社、一九八九年)第一部第五章、一二七頁。

(二三) 朱蒙伝説に河伯見ゆ。『魏書』列傳第八十八、高句麗傳(二二二〜二二四)、『周書』列傳第四十一・異域上、高麗傳(八八四頁)、『隋書』列傳第四十六、東夷・高麗(二八一三頁)。その他『北史』巻九十四、『通典』巻一百八十六、『文獻通考』巻三百二十五、『太平御覽』巻七八三、『冊府元龜』巻九五六など。『日本書紀』仁徳天皇十一年十月条に河伯に犠牲を流す記事あり、『政事要略』巻五十四にも同条を引用。皇極天皇元年七月戊寅条「村々の祝部の所教の随に、(略)、或は河伯を禱る。既に所効無し」と(下出積与「皇極朝における農民層と宗教運動」『史学雑誌』六十七編九号、一九五八年、二四〜四六頁)。ワルター・ハイシツヒ著・田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』(岩波書店、一九六七年)は、モンゴル年代記(十七世紀)のタングート王妃グルベルジン・ゴアの黄河投身自殺を指して「すでに紀元前三世紀に伝えられている、黄河での処女供養のはるか後代のなごりであると解釈されるようになって」(二二九〜一四一頁)とする。

(二四) 門田誠一「東アジアにおける殺牛祭祀の系譜―新羅と日本古代の事例の位置づけ―」(佛敎大学『歴史学部論集』創刊号、二〇一一年所収)、一五〜三二頁。

(二五) 康治二(一一四三)年五月五日の朝、禁裏清涼殿の東庭から南殿馳道辺り一帯にまで鴨川の水が押し寄せた。撰政忠通が近衛第に潺湲を楽しみんと鴨水を引決したのが原因で、堰堤が敗れた。編者の通憲は「蒼波渺焉。如河伯對東海。」と評している(『本朝世紀』吉川弘文館、一九六四年、四二八頁)。

(二六) 黄芝崗著『中国的水神』、上海生活書店、民国二三年(故森鹿三氏旧蔵書を利用して戴いた。深謝申し上げる)。石田英一郎著『新版河童駒引考』東京大学出版会、一九七五年(全集5に収録)。袁珂著・伊藤敬一ほか訳『中国古代神話』2、みずす書房、一九七四年(三三頁〜三七頁に西門豹、一〇四頁〜一〇八頁に李冰と二郎)。四川省灌県文教局「都江堰出土東漢李冰石像」及び、王文才「東漢李冰石像与都江堰水測」(『文物』一九七四年第七期・総二一八号)。林巳奈夫著『中国古代の生活史』(吉川弘文館、一九九二年)、七一〜七二頁。テリー・クリーマン著・遊佐昇・山田利明共訳「川主―正統的地方信仰(上)」『東方宗教』八〇号、一九九二年。鶴間和幸「古代巴蜀の治水伝説の舞台とその背景―蜀開明から秦李冰へ―」(註二前掲『中国水利史の研究』、三七〜七二頁。同氏『秦帝国の形成と地域』汲古書院、二〇一三年再録)など。

(二七) …森三樹三郎氏前掲書、二三九～二四二頁。澤田瑞穂著『中国の民間信仰』（工作舎、一九八三年）、二五四～二六〇頁。殊に好並隆司氏前掲書、一三八～一五八頁及び三六五～三八八頁、及び豊島静英著『中国における国家の起源』（汲古書院、一九九九年）、二九三～三五二頁、から多くを学んだ。逐一は断らなかつたが、意識には、ほとんど右記の研究書に依拠したことを記して謝意を表するものである。

(二八) …宇野哲人譯並註『国譯戰國策』（国民文庫刊行会、一九二〇年）、巻七上、三八七～三八八頁。『戦国策』（古本不伝）の編者劉向の『説苑』にも略同内容の記事あり（前掲須原屋版『説苑』、第四冊巻七、九葉左。前掲『説苑疏證』巻七、一八五～一八六頁）。

(二九) …前掲『史記』巻一百二十六、三二二頁（B）。三二二頁（C）。三二二頁（D）。

(三〇) …遙か後世の宋代長江沿岸に在った水神祠廟への「供え物の内訳は、屠殺した猪または生魚・鮓・醴など」で、祠廟には「祈祷をつかさどる廟祝・祝史があり、そこへの供え物は当然、彼らの収入になった」（古林森廣「宋代の長江流域における水神信仰」、前掲『中国水利史の研究』、二九一～二九三頁所収）。南宋福建地方の迎神祭では災を攘い福を祈る名目で一千文もの金銭を強要した事例がある（中村治兵衛著『中国シャーマニズムの研究』刀水書房、一九九二年、一七四～一七五頁）。また、民国二十九年春、江蘇省無錫縣劉巷孔山にあつた猛将廟（虫除け神）での迎神賽会でも三十箇村から二百二十元余の寄付金を集めてい（天野元之助著『支那農村棟記』生活社、一九四二年、一〇四頁）、同三十年に山東省歷城縣冷水溝莊であつた祈雨行事は、内田智雄著『中国農村の家族と信仰』（清水弘文堂書房、一九七〇年、二〇七頁～二二七頁）に現地報告がある。

(三一) …森三樹三郎氏は「かかる風習を利用して私腹を肥やす巫祝や俗吏があつた。西門豹の態度は良二千石の典型を示す。神を信じない支那の知識人の伝統を遺憾なく發揮したもの」とした（『支那の神々の性格』（二四二頁）、『支那学』第十巻特別号、一九四二年所収。同氏前掲書『支那古代神話』に再録）。中国の巫の史的变化を追った賈艶紅氏は、巫の地位が戦国時代に急速に衰落した証左に本例を掲ぐ（馬新氏ほか共著『中国古代民間信仰』上海人民出版社、二〇一〇年、七九～九四頁）。

(三二) …中華民国二十二（一九三三）年に全四幕の歌劇（續武作『河伯娶婦』）があつた（澤田氏前掲書、二五四頁）という。

(三三) …古賀登著『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』（雄山閣、一九八〇年）第五章、三二三頁。「郷三老」の議論は櫻井芳朗「漢代の三老について」（『加藤繁博士還暦記念東洋史集説』富山房、一九四二年）や宮崎市定著『アジア史研究』第一（同朋舎出版、一九八八年）、讀史劄記、三・漢代の郷制（四二三～四二四頁）等に。

(三四) …中鉢雅量氏前掲書、一五六頁。小南一郎氏は『楚辞』九歌中の河伯篇につき「男神である河伯（黄河の神）との遊（遊行）を、それを共にした女性祭祀者（女巫）の視点で描写したものである」とする（同氏著『楚辞とその注釈者たち』朋友書店、二〇〇三年、二六九～二七〇頁）。

(三五) …宮崎市定著『中国古代史論』（平凡社、一九九二年）、「身振りと文学」一八一～一八二頁。

(三六) …宮崎氏前掲書『中国古代史論』所収、「史記李斯列伝を読む」二二二頁。

(三七) …志田不動磨氏は「滑稽には諷刺性が重要」と説いた（同氏「滑稽といふこと」『和田博士還暦記念東洋史論叢』講談社、一九五一年）。大室幹雄氏は「戦国期第一流の土木専門家西門豹の精神に体现された知識社会の都市的合理性が、巫女集団を中心に農民たちが形成していた村落共同体の呪術―宗教的世界を

打破した見事な例」とする（同氏著『滑稽 古代中国の異人たち』岩波書店、二〇〇一年、「都市的人間」注八（三三八頁）。

（三八）…小南一郎「漢代における演劇の可能性」『桃の会論集』六集、小南一郎先生古稀記念論集、二〇一三年所収、四一～五三頁。当該論文は滑稽列傳やまして褚少孫候補部分について言及されたものではない。

（三九）…魯迅著、今村与志雄訳『中国小説史略』上（筑摩書房、一九九七年）、第二篇、四三頁。

（四〇）…靈太后を廃すべく元叉と共謀し斬刑に処された奚康生（四七二～五二五年）がまだ撫軍將軍、相州刺史であつた時の事である。「在州、以天旱令人鞭石虎畫像；復就西門豹祠祈雨、不獲、令吏取豹舌。未幾、二兒暴喪、身亦遇疾、巫以為虎、豹之祟（州ニ在ルトキ、天旱ナルヲ以テ人ヲシテ石虎ノ画像ニ鞭打タセ；マタ西門豹祠ニオモムキ雨ヲ祈ラシムモ、獲ザレバ、吏ヲシテ豹ノ舌ヲ取ラシム。イマダ幾バクモセザルニ、二兒ニハカニ喪セ、身モ亦疾ニ遇フナリ、巫オモエラク虎、豹ノ祟リナリト）。」「魏書」卷七十三、列伝第六十一、奚康生傳（二六三～二頁）という。「舌を取る」というのであるから、祠廟には西門豹の石像があつたと想像される。なお、後趙石虎（季龍）の画像にも無案内だが、『魏略』逸文に田豫の死去に伴い画像を作つた事が見える。石虎の顯原陵にも彼の画像があり康生はそれに鞭打たせたか。後周（十世紀半ば）の青州北海県令だつた李元懿の祈雨でも土龍を作つて雨を求め、応驗無ければ之に答打たせたのを中村治兵衛氏の論考「宋朝の祈雨について」『中国シャーマニズムの研究』、刀水書房、一九九二年所収、一五〇頁で知つた。鄴に遷都した石虎はある時沙門呉進の言を信じ、近郡の男女十六萬を徵發して華林苑と長牆を鄴北に築かせ、三門に漳水を通すなど昼夜を徹した工事中、遂に暴風雨で死者數萬人を出す。また北城を鑿ち漳水を華林苑に引く工事でも城が崩れ壓死者百余人に上る等の惡政所業が有名。西門豹とは別の意味で鄴及び漳水には所縁のある人物だつた（『晋書』卷一百七、載記第七、石季龍伝下、二七八二頁ほか参照）。その他、河南省博物館、武志遠・任常中「西門豹治鄴与『西門大夫廟記』碑」『文物』第十二期總二三三號、一九七四年十二月、二五～三〇頁所収）も参照した。

（四一）…三国魏の曹操・太祖武帝（一五五～二一〇年）と同じく魏に清約儉素で知られた田豫（二七一～二五二年）は自分の墳墓を西門豹廟の近接地に求めた。鄴での豹の功績と当時における豹への信仰を背景としていよう（『三国志』、中華書局、一九九二年第十一次印刷、卷一、魏書一、武帝紀第一、五一～五三頁。及び卷二十六魏書、田豫伝の註に引く『魏略』等参照）。また、前秦王苻堅（三三八～三八五）の出生譚では、西門豹祠が「子授け」の神にも変貌していたことが判る（『晋書』、中華書局、一九九一年第四次印刷、卷一百十三、載記第十三、苻堅上、二八八三頁。『三十國春秋輯本』、天津・二〇〇九年所収『秦書』一八五頁・2では「苻堅母荀氏浴漳水、經西門豹祠、歸、夜夢若有龍蛇感己、遂懷孕而生堅。」とす。『太平御覽』、中華書局、一九六三年、第二次印刷、卷一二二、卷三六〇も参照）。北魏の頃から隋代にかけて、西門豹や史起に対し「民に功績のあつた者として、廟堂を修飾する」など顕彰を加える事があり、旱天時には西門豹祠が祈雨祈禱の対象にもなつていた（『魏書』中華書局、一九九二年第四次印刷、卷五十三、列伝第四十一、李孝伯傳、一一七六頁に子安世「出為安平將軍、相州刺史、假節、趙郡公。敦勸農桑、禁斷淫祀。西門豹、史起、有功於民者、為之修飾廟堂。」と見える）。北齊の顯祖文宣帝は天保九（五五八）年夏四月辛巳、「大赦。是夏、大旱。帝以祈雨不應、毀西門豹祠、掘其冢。」と。既に神格化されて久しい西門豹の祠も北魏、北齊時代には、権力者が「祈雨」の対象として崇め、また靈驗なければ手荒い仕打ちを受けることもあつた（『北齊書』中華書局、一九七三年第二次印刷、卷四、帝紀第四、文宣、六四頁。『資治通鑑』、中華書局、一九七一年重印、卷一百六十七、陳紀一、五一七五頁に「齊主以旱祈雨於西門豹祠、不應、毀之、

并掘其冢。(胡三省の註に、戦国時魏以西門豹為鄴令、鑿十二渠以利民、故祠、冢皆在鄴。)」とす。隋代には、「祈禱には九有り」といい、南郊や社稷などと並び九番目に西門豹廟の名も掲げ、「水旱癘疫、皆有事焉。」という(『隋書』中華書局、一九八七年第三次印刷、卷七、志第二、禮儀二、一二七頁)。豹廟は洪水、旱魃、流行り疾病などの時、祈禱を行う祭祀対象の一つとして皇帝公認の廟になっていた。それはすでに西門豹故事から数えて凡そ千年の歳月を経た後のことである。

(四二) 崇光天皇の貞和五(一三四九)年六月、月次、神今食、春宮御神事に重喪中の徽安門院同宿の是非が問題になり先例を尋ねる。別殿に御す前例を陳べる中に「伊勢公卿勅使并役夫工初、齋宮已下上卿辨、以棟別之屋、被構齋屋之例繁多候也(伊勢公卿勅使并ビニ役夫ノ工ヲ初メ、齋宮已下ノ上卿ヲ辨チテ、棟別ノ屋ヲ以テ、イモヒノ屋ヲ構ヘラルルノ例ハ繁多ニ候ナリ)」と見える(岩橋小弥太・齋木一馬校訂『園太暦』卷三、続群書類従完成会、一九七一年、七〇頁)。また、後水尾院御作『布勢屋乃塵』(『続群書類従』第十八輯下、一九八〇年、卷五百二十所収)、千百五頁の「きりかけだつ物の事」に、「あるは両宮の齋王おらる々時のいもの屋などしつらひかこふものにして」とある。中世以降に仮名遣いの乱れがあつたようで、「いもひの屋」が正しい。

(四三) 拙稿「櫛物語」別れの御櫛十一」及び「同④「別れの御櫛最終回」(『龍』岡山龍短歌会、二〇一〇年二月号及び三月号所収)。

(四四) 赤塚忠著『中国古代の宗教と文化』(研文社一九九〇年)所収「殷王朝における河の祭祀」二七〜七三頁。島邦男著『殷墟卜辞研究』(汲古書院、二〇〇四年)、第三章第二節「自然神」二一九〜二三三頁。白川静著『漢字の世界1 中国文化的原点』(平凡社、一九九二年)、第三章、一三二〜一四四頁(『著作集2』平凡社、二〇〇〇年、一〇四〜一三三頁収録)、及び同氏『著作集4』、五五〜五九頁など。

(四五) 赤塚氏前掲書『中国古代の宗教と文化』、四八頁、五二頁、五五〜五六頁等。

(四六) 白川静「殷代の殉葬と奴隸制」『立命館大学人文科学研究紀要』第二号、一九五四年、一二五〜一三六頁。同氏「羌族考」『甲骨金文学論集』(朋友書店、一九九六年所収)、五三七〜六一四頁。

(四七) 白川氏前掲論文「羌族考」、五七一頁。「殷に人性が用いられた証明は存しない」とする島邦男説(同氏前掲書、三三三〜三四〇頁)への反論は、白川氏註四六前掲論文(一二二〜一二三頁)や上引「羌族考」六一五〜六一七頁など。

(四八) 岡村秀典著『中国古代王権と祭祀』(学生社、二〇〇五年)、八七頁、一八五頁、二〇二頁。四四六〜四五六頁など。

(四九) 「三牲」は牛・羊・豕の事。神靈に供える最高の犠牲形式で「大牢」とも言う。諸侯、卿大夫の場合は羊と豕の二牲(少牢)、一般家庭で三牲はあり得ない(加地伸行著『孝經』、講談社、二〇〇七年、七六〜七七頁)という。『十三經注疏下冊』(中華書局、一九九一年第五次印刷)所収『孝經注疏』卷第六、紀孝行章第十、邢昺注疏、二五五五頁下段〜二五五六頁上段。秦の文公十年に鄜の祭壇で白帝を祭った時、本紀は「用三牢」、封禪書は「用三牲」として両者は同義である(前掲『史記』卷五、一七九頁、及び卷二十八、一三五八頁)。

(五〇) 註二一前掲史料に同じ。なお、先には断らなかったが、『韓詩外傳』は「莊王」の事とするも『左氏伝』や『史記楚世家』などは昭王の事とし、また、「請用牲」を『說苑』君道篇が「請用三牲」とするのに従った。

(五一) 『斷句十三經經文』(臺灣開明書店、民国六十年)所収、『周禮』、二十九頁。

- (五二) 清・阮元校刻『十三經注疏 附校勘記』上冊(中華書局、一九九一年)所收、鄭氏注・賈公彥疏『周禮注疏』卷十八、第一百二十頁(總通七五八頁)。
- (五三) 晋郭璞註・宋邢昺疏『爾雅註疏』(萬歷二十一年刊、版元・発行者不詳)卷五、二十五葉右頁。虞世南撰・孔廣陶校註『北堂書鈔』(中文出版社、一九七九年)卷八十八、禮儀部九、祭祀惣上十八、七葉左頁(三九一頁上段)。
- (五四) 後藤朝太郎訳註『国訳淮南子』(国民文庫刊行会、一九二一年)、四二八頁、四三〇頁。『淮南子集釋』(中華書局、一九九八年)下、卷第十六、一一三九頁、一一四三頁。灌漑や山林敷沢の問題は先秦時代デイスポテイズ成立の経済的基盤にも関わる(増淵龍夫著『中国古代の社会と国家』岩波書店、一九九六年)。牛犁耕の展開も重要で、その初現時期には諸説がある。「先秦以前だが戦国初期以前には非ず」(徐中舒「耒耜考」『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』第二本第一分、一九三〇年所収、五八頁)、「戦国時代」(天野元之助氏註八前掲書、七三三〜七三六頁)、「遅くとも戦国末期」(宮川尚志氏前掲論文、二八頁)、「春秋後期〜春秋戦国の境界時期」(咎林森・李斌成主編『中華牛文化』中国農業出版社、二〇一二年、三五〜三七頁)等である。近時、岡村秀典氏は「黄河流域での牛耕のはじまりは戦国時代、江南では六朝代に下るであろう」(同氏前掲書、一一五頁)とした。牛犁自体は「兩漢を通じて周辺地区へと伝播した」(天野氏前掲書七五一頁)。しかし、王の親耕儀礼においては長く踏鋤が保存され、牛耕犁への転換時期は隋から唐初までの約一世紀半の間に求められるという(Derk Bodde: *Festivals in Classical China*, 1975, Princeton U.P.; IX PLOWING「第九章 農耕」, P.238.)。
- (五五) 岡村秀典氏註四八前掲書、四四頁。
- (五六) 前掲『史記』四、卷二十九、河渠書第七、一四二〜一四一三頁。前掲『漢書』一、卷六、武帝紀第六、一九三頁。同上『漢書』六、卷二十九、溝洫志第九、一六八二頁。同上『漢書』十、卷七十六、王尊伝、三三三七頁。なお、瓠子で決壊した時、九匹の子龍を連れた蛟龍が出現し噴上げた水沫が数千里にも及ぶ波浪になったという神話伝承もある(曹海東注訳・李振興校閲『新訳西京雜記』、三民書局、二〇一二年二版一刷、卷二、八八頁「河決龍蛇噴沫」)。より古くは秦の二世皇帝(胡亥)も夢占に「涇水為祟」と出た時、四白馬を沈祭し涇水に祠っている(前掲『史記』一、卷六、始皇本紀、二七三〜二七四頁)。「初学記」(中華書局、一九八五年)卷二十九に「神馬者。河之精也(神馬ハ河ノ精ナリ)。」(七〇二頁)という。
- (五七) 前掲『後漢書』列伝第三十一、第五倫伝、一三九七頁。吉川忠夫訓注『後漢書』第五冊(岩波書店、二〇〇三年)、五〇六頁。『礼記』(曲礼下)に「問庶人之富、数畜以對」とす。宮川尚志氏は「耕牛保護の目的に出たもの」とす(『漢代の家畜(下)』『東洋史研究』十一、一九四七年、二九頁)。
- (五八) 魏收『魏書』一(中華書局、一九九二年第四次印刷)、卷九、肅宗本紀、二二四頁。
- (五九) 中村治兵衛氏前掲書所収「宋代広徳軍祠山廟の牛祭について」(特に一六二〜一七〇頁)。
- (六〇) 例えば天野元之助「支那農業に於ける水の意義(二)」『満蒙』、一九三六年九月号、七七頁。またそれゆえにこそ呪術者らが活動しうる余地もあったといえよう(佐藤智水著『北魏仏教史論考』、岡山大学文学部、一九九八年、一七八〜一八五頁参照)。
- (六一) 守屋美都雄著『中国古歳時記の研究』帝国書院、一九六三年、二二六〜二四一頁。同氏訳注・布目潮風補訂『荊楚歳時記』平凡社、一九九三年、一一三〜一二六頁。
- (六二) 前掲『史記』二、卷十五、六國年表第三(七〇五頁)。

- (六三) : この件は澤田瑞穂氏に詳しい解説がある(同氏前掲書、「神婚伝説」二五六頁)。
- (六四) : 前掲『史記』五、卷三七の衛康叔世家第七には、周武王の同母弟「康叔(名は封)」を「衛」君に封じて以降の家門盛衰を叙述する。一五代目宣公(桓公の弟晋)の十八年、太子伋が娶るべき齊女を公が横取りし、「更ニ太子ノ為ニ他女ヲ取リヌ」(二五九三頁)という。文字どおり「別の女性」と解する。
- (六五) : 福永氏前掲書『莊子』内篇(二〇六〜二〇七頁)に「故解之以牛之白羖者。與豚之亢鼻者。與人有毒病者。不可以適河。此皆巫祝以知之矣。所以為不祥也。此乃神人之所以為大祥也。」とある。
- (六六) : 前掲『經典釋文』第二十六、莊子音義上、五五四頁下段。
- (六七) : Encyclopaedia of Religion and Ethics, vol. 12; Edited by James Hastings. (Printed in Great Britain by Morrison and Gibb Limited for T. & T. Clark Edinburgh. Latest Impression 1974.) ; > p. 710. (Water, Water—Gods (Egyptian)) by S. A. B. Mercer.
- (六八) : ibid., p. 708. (Water—Spirits and water—gods.) by E. O. James.
- (六九) : J・G・フレイザー著・永橋卓介訳『金枝篇』(三)、岩波書店、一九六七年、九五頁。フレイザー氏はその古い習慣の意図を「男性の力とみなされた河を、その水によって間もなく豊饒多産にされるはずであった花嫁としての耕地と結婚させること」にあり、「この儀式は農作物の生育を確かならしめるための呪術であった」という。
- (七〇) : ibid., p. 717. (Varuna) by W. Kroeke. インドの河の女神サラスヴァティーは日本では弁才天になったという(植木雅俊著『仏教、本当の教え』中央公論新社、二〇一三年七版、一五四頁)。
- (七一) : 同氏「古代支那に於ける人身犠牲の習俗に就いて」『立正史学』第九号、一九三七年、六四〜六九頁。
- (七二) : 後代の唐開元二十七年に、(武后以来の経緯は略すが)明堂を改作しようとした時、「政府は小児を取って明堂の下に埋め、厭勝とせんため、田舎の童児を山谷に隠しているらしい」との流言が飛び交い、都城は騒然として、みな「戦争が始まるのだ」と口々に言い合ったりもした(旧唐書卷九、玄宗本紀)という。こういう記事を読むと、民衆の間には「人身御供」の発想が永く命脈を保ったかにも思える。玄宗帝はこの流言を嫌い、主客郎中の王伋を東都、諸州に遣わし百姓を宣慰し、それを鎮静化させている。
- (七三) : 前掲『金枝篇』(二)、第二十四章、二五六〜二五七頁。なお、メアリ・ダグラス著『汚穢と禁忌』(塚本利明訳、思潮社、一九九五年)にはフレイザーの学問に対する批判がなされているが、本稿ではそれには関わりなく、飽くまで具体的な類例の参考資料として引用するものである(以下同じ)。
- (七四) : J・G・フレイザー著吉岡晶子訳『図説金枝篇』下(講談社、二〇一一年)、一五三〜一五四頁。
- (七五) : 前掲『金枝篇』四、第五十九章「メキシコの神殺し」、二〇七〜二〇八頁。
- (七六) : 高木敏雄著『人身御供論』(宝文館出版、一九九〇年)。柳田国男著『妹の力』特に「人柱と松浦佐用媛」(定本『柳田国男集』第九卷、筑摩書房、一九七九年所収)。
- (七七) : 栗原朋信氏もそのような習俗の存在には躊躇の姿勢を示した(「犠牲礼についての一考察」『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館、一九七八年、三九八頁)。

W・エバーハルト氏は人身供犠を史実とした（同氏著、白鳥芳郎監訳『古代中国の地方文化』六興出版、一九八七年、一五四～一六四頁）。

（七八）…同氏「上代支那人の宗教思想」（『津田左右吉全集』第二十八卷、岩波書店、一九六六年所収）、三「犠牲」、二〇〇頁。

（七九）…前掲『図説金枝篇』上、第三部第三章「王殺しに代わる慣習」、二五七頁。

（八〇）…山口昌男著『天皇制の文化人類学』（立風書房、一九九〇年）、九五頁ほか。

（八一）…前掲『金枝篇』（二）、第二十四章、二五八頁。

（八二）…岡村氏註四八前掲書、八六頁。

（八三）…前掲『漢書』卷二十二礼楽志、郊祀歌景星に「河伯に鯉を供える」（一〇六三頁）と見える。

（八四）…顧炎武著、黄汝成集釋『日知錄集釋』（上海掃葉山房、一九二四年石印）、卷二十五、河伯（二二三葉）。

（八五）…前掲『風俗通義校注』下、五八三頁に「秦昭王聽田貴之議、遣李冰為蜀郡太守、開成都兩江、溉田萬頃、無復水旱之災、歲大豐熟。江水有神、歲取童女二人以為婦、不然、為水災。主者白出錢百萬以行聘、冰曰：『不須、吾自有女。』到時、裝飾其女、當以沈江水、徑至神祠、上神坐、舉酒酹曰：『今得傳九族、江君大神、當見尊顏、相為進酒。』冰先投杯、但澹澹不耗、冰厲聲曰：『江君相輕、當相伐耳。』拔劍、忽然不見、良久、有兩蒼牛鬪於岸旁、有間、冰還、流汗、謂官屬曰：『吾鬪大極、當相助也、若欲知我、南向腰中正白者、我綬也。』主簿乃刺殺北面者、江神遂死、後無復患。（以下略す）」。

（八六）…黄芝崗氏前掲書『中国的水神』第三章、十九頁。

（八七）…澤田瑞穂氏前掲書『中国の民間信仰』、二五四頁。

（八八）…E・A・ガードナー氏は馬や雄牛を海に投げ込みポセイドンに捧げられたことに関連して「河神がしばしば人頭牛身の姿をとることに気付く」とす

（Ibid., p. 713. 〈Water, Water—Gods〉 I. Greek by E. A. Gardner.）。四川では牛が河神の事が多いという（エバーハルト氏前掲書、三三二頁）。

（八九）…黄芝崗氏前掲書『中国的水神』、二四頁。氏は石犀を用い水怪を厭すは「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」にも似るとし、『集古録』を引く。

（九〇）…同氏著「新版河童駒引考」（『石田英一郎全集』5、筑摩書房、一九七〇年所収）、一四四頁。

（九一）…林巳奈夫氏註二六前掲書、七一～七二頁。テリー・クリーマン氏にも言及あり（註二六前掲論文、四九頁の註一八）。徐光煦、劉固盛撰「英雄神話傳說」（劉重來・徐適端主編『華陽國志研究』四川出版集團巴蜀書社、二〇〇八年）第六章、二四七～二四八頁、及び任乃強校注『華陽國志校補圖注』（上海古籍出版社、二〇〇九年）、一三七頁。先の註一四前掲『中国水利史稿』上冊、第二章第二節中の「都江堰」（六六～七四頁）にも東漢李冰石像につき詳細なレポートがある。

（九二）…鶴間和幸氏前掲論文「古代巴蜀の治水伝説の舞台とその背景」、三七～七二頁。

（九三）…註二六前掲『文物』（総二二八号）所収論文（四川省灌県文教局「都江堰出土東漢李冰石像」（二七頁）及び、王文才「東漢李冰石像与都江堰水測」。当該『文物』資料は、現地にその石像を実見された三重大学人文学部特任教授山中章氏より提供を受けた。謝意を表したい。

（九四）…前掲四川省灌県文教局「都江堰出土東漢李冰石像」二八頁。因みに、後漢靈帝の建寧元年閏三月廿五日は壬寅に当たる（内務省地理局編纂『新訂補正三

正綜覽』藝林舎、一九七三年、八一頁。

(九五)：常璩撰、錢穀鈔校『景明摹宋嘉泰本華陽國志』上冊（世界書局印行、民國五十一年）卷三・蜀志、六八頁。欽定四庫全書（史部地理類）所收の祝穆撰『方輿勝覽』卷五十四、「古跡誓水碑」に「集古錄載、秦李冰為蜀守、鑿山導江、以去水患。其神怒、化為牛、出沒波上。君操刀、入水殺之。因刻石以為五犀牛、立之水旁、與江誓曰、『後世淺無至足、深無至肩』。謂之誓水碑、立在彭州。」（臺灣商務印書館、民國七十五年、九六四頁）と見える。

(九六)：前掲『華陽國志研究』二四八頁。両氏が引用の劉琳校注『華陽國志校注・蜀志』を未見でいる。

(九七)：王文才氏前掲論文「東漢李冰石像与都江堰水測」、三〇頁。

(九八)：澤田瑞穂氏前掲書所収「神婚伝説」三（二六一～二六三頁）、「神婚伝説・補遺」（二七五～二七七頁）に『堅瓠廣集』卷五「娶巫女」を引く。

(九九)：前掲『北堂書鈔』卷三十九、政術部十三、一五四頁上段（七葉左右）。

(一〇〇)：前掲『後漢書』列傳第三十一の宋均傳（一四一三頁）。劉珍等撰、吳樹平校注『東觀漢記校注』下（中華書局、二〇〇八年）、卷十六、六九三頁、及び前掲『風俗通義校注』卷九、四〇〇頁等。

(一〇一)：註五七前掲吉川忠夫氏訓注『後漢書』第五冊、五四三頁。

(一〇二)：『新輯搜神記』（晉・干寶撰、李劍國輯校、中華書局、二〇〇七年）上、卷一七、二八九～二九〇頁、「二二〇・李寄」：「東越閩中有庸嶺、高數十里。其下北隙中有大蛇、長七八丈、圍一丈。土俗常病、東冶都尉及屬城長吏多有死者。祭以牛羊、故不得福。或與人夢、或下喻巫祝、欲得啖童女年十二三者。都尉令長並共患之、然氣厲不息。共請求人家生婢子、兼有罪家女養之、至八月朝、祭送蛇穴口。蛇輒夜出、吞嚙之。累年如此、前後已用九女。一歲、將祀之、復預募索、未得其女。將樂縣李誕家有六女、無男、其少女名寄、應募欲行、父母不聽。寄曰：『父母無相、唯生六女、無有一男、雖有如無。女無緹縈濟父母之功、既不能供養、徒費衣食。生無所益、不如早死。賣寄之身、可得少錢、以供父母、豈不善耶？』父母慈憐、終不聽去。寄自潛嚴、不可禁止。寄乃行告貴、請好劍及咋蛇犬。至八月朝、便詣廟中坐、懷劍將犬。先作數石米糞、用蜜灌之、以置穴口。蛇夜便出、頭大如困、目如二尺鏡。聞糞香氣、先啖食之。寄便放犬、犬就嚙咋、寄從後斫、得數創。創痛急、蛇因踴出、至庭而死。（以下略す）」。

(一〇三)：ibid, p. 408; The serpent and the waters, by J. A. Macculloch. 石田英一郎氏前掲書、九八頁。

(一〇四)：金関丈夫著『木馬と石牛 民族学の周辺』（角川書店、一九七六年）所収、「やまとたける」（二八～四三頁）、「箸・櫛・つるぎ」（一四九～一五八頁）。

(一〇五)：石田英一郎氏前掲書、九七頁など。水神娶婦は「河泉や雨水の多産豊饒力にたようとする農耕民の呪術的儀礼にその起源を求むべきだ」（九七～九八頁）とする。

(一〇六)：干寶著、竹田晃訳『搜神記』（平凡社、二〇〇〇年）、五六九頁の四四〇「大蛇を退治した娘」。

(一〇七)：十四世紀の孔子廟での祖先祭祀にも「齋宮」が見える。王昶撰『金石萃編未刻稿』（金石史料新編第一輯）卷下・「代祀祀」（二三四八年）に、「遂會孔氏族黨、饗胙于齋宮、與坐（？）者五十餘人」とある。孔氏の族党五十余人が与に孔子廟の齋宮に（坐）して饗胙した。『宋書』卷五の文帝本紀元嘉十九（四四二）年十二月丙申条には、「魯郡上民孔景等五戸居近孔子墓側、蠲其課役、供給洒掃、并種松栢六百株。」とある。曲阜孔子廟の齋宿所は、奎文閣

(北宋創建)の東南と西南側にある(馬場春吉著『孔子聖蹟志』、大東文化協会、一九三三年、二一八頁。及び『曲阜―孔子の故郷』北京文物出版社、一九九〇年)が、そこを「齋宮」と称した時代もあったか。孔子廟ではないが、二十世紀に至るも年毎の宗祠祭祀には族長主祭の下に一族が参列し、盛大に饗宴のあった事は、天野元之助氏に現地調査報告がある(註三〇前掲『支那農村襍記』「宗祠と其の役割」一六一―一七四頁)。

(二〇八)：『史記』卷二十八、封禪書、一三七八―一三七九頁(『漢書』卷二十五上、郊祀志、一二一〇―一二二一頁も略同文。狩野直禎・西脇常記訳注『漢書郊祀志』平凡社、一九八七年、八一頁)。

(二〇九)：前掲『漢書』卷二十五上、郊祀志、一二〇六頁。前掲訳注『漢書郊祀志』、七二頁。前掲『漢書』卷二十八上、地理志、一五四五頁。

(二一〇)：林富士著『漢代的巫者』(稲郷出版社、中華民國八八年、一九九九年)、一七八―一七九頁参照。

(二一一)：富谷至「儒教の国教化」と「儒学の官学化」(『東洋史研究』第三七卷四号、一九七九年所収)。宮川尚志著『中国宗教史研究』第一(同朋舎、一九八三年)所収「前漢時代の神仙方術」、三六頁。武帝と方術との関係を知る上でも宮川氏の論文には多くを学ばせていただいた。

(二一二)：嫡子に恵まれないのを神々の咎めとして成帝は一度廃した甘泉泰畤を復活している(永始三年)。祭祀にはなお皇帝の私的要求在先と優先されることと無縁ではなかったことが窺える。

(二一三)：板野長八「前漢末に於ける宗廟・郊祀の改革運動」(『中国古代における人間観の展開』岩波書店、一九七二年所収。宮川尚志「前漢時代の神仙方術」『中国宗教史研究』同朋舎、一九八三年所収。保科季子「前漢後半期における儒家礼制の受容」『方法としての丸山真男』青木書店、一九九八年所収、及び金子修一著『中国古代皇帝祭祀の研究』岩波書店、二〇〇六年、第四章。前掲林富士氏著『漢代的巫者』、九六―九七頁も参照。専制君主たる皇帝権力にはむしろ呪術的権威が必要とされる側面のあったことは板野長八氏に指摘がある(同氏上掲論文、五五八―五五九頁)。

(二一四)：馬新氏も「武帝以後に、儒家の学説が尊重されるようになると、政府内で活動した巫者の呪術は次第に排斥されるようになり、後漢時代に儒家の礼制に従い国家の祀典が確定すると、前漢時代に巫が天地、鬼神を祠っていた状況は改変された(意識)」―由を述べている(註三一前掲『中国古代民間信仰』第三章(三)「秦漢時期的巫与巫術」、一六六頁)。林富士氏前掲書『漢代的巫者』にも漢代巫術の変遷と儒家礼制を論じる(第五章「漢代巫術的觀念基礎」等参照)。

(二一五)：註一六前掲公田連太郎訳註『管子』、卷八、中匡第十九、一二三五頁。竹内照夫著『礼記』中(明治書院、一九九〇年十二版)、祭統第二十五、七三五―七三六頁。王應麟著、張三夕・楊毅點校『漢制考』(中華書局、二〇一一年)、卷三、七八頁、など。

第二章 中国古代の皇帝祭祀と齋宮

一．はじめに

中国皇帝の祭祀儀礼でも、沐浴・齋戒等の行為は全体の中での重要な一階梯だったはずだが、それはしかし儀礼の中心場面（所謂「ハレ」の場）ではなく、また当然すぎる事柄でもあるためか、齋戒用施設としての「齋宮」そのものに関する記述には具体的に詳細なものは見出せず、どれも断片的であった。しかし、管見の及ぶ範囲でそれらの情報を分類・整理し、僅かでもその実態に迫る努力はしてみようと考えた。そこで、皇帝祭祀における齋戒期日とその場所について諸史料から判明するところを纏めて整理し、その上で具体的な事例として（ア）藉田、（イ）封禪、（ウ）祀天祭地、（エ）宗廟などの祭祀儀礼における「齋宮」関係の記事を限定的ながら概観してみたい。

それぞれの祭祀儀礼の沿革や変遷等に付随する諸問題に関しては既に金子修一氏に代表される詳細な專著^①がある。総じて右記（ア）～（エ）等の祭祀は、相互に政治的意味合いをもちながら皇帝の即位に伴う一連の行事として執行される側面があった。ただ本稿ではその種の本質的な問題には言及できないので、事に応じて本稿の目的に沿う範囲内でそれらの先行研究成果に依拠し、活用させて戴くことにしたい。なお、「中国古代の」と冠したが、ここでは便宜上、唐代に至るまでの王ないし皇帝の祭祀儀礼に付随して登場する「齋宮」を採り上げていることも予めお断りしておく^②。

二．齋戒とその場所

齋戒に関して『周易正義』（注疏）には、「齊戒其身、洗心曰齋、防患曰戒（ソノ身ヲ齊戒ストハ、心ヲ洗フヲ齊ト曰ヒ、患ヲ防グヲ戒ト曰フ）」^③とみえ、『礼記正義』（礼器）にいう「三月繫、七日戒、三日宿、慎之至也。」^④にも孔穎達は、「三月繫グトハ、祭前三月ニ牲ヲ牢ニ繫グヲ謂フナリ。七日戒ストハ祭前十日ニシテ七日ハ之ヲ散齋ニ中テ戒慎スルヲ謂フナリ。三日宿ストハ祭前三日ハ而チ嚴宿シテ以テ致齋スルヲ謂フナリ。」^⑤と疏解する。従って「七日戒、三日齊」^⑥とあれば、都合十日間の齋戒のうち、七日は「戒」に、あとの三日を「齋」に充てるのであり、前者を散齋、後者を致齋として心身を清め「慎みの至り」に達するのが祭前に行うべき齋戒であった^⑦。日本では、『養老令』に齋戒規定（表一参考）があるが、それぞれ「荒忌み」と「真忌み」とに相応するであろう^⑧。

さて、管見に触れた齋戒関係の記事から取って簡略にまとめてみたのが表一である。すでに『論語』には「齊必有明衣、布（齊スレバ必ず明衣有リ、布ヲス）」^⑨といい、宋の邢昺によれば（略）「將祭而齊則必沐浴、浴竟而著明衣、所以明絜其體也。明衣以布為之。故曰齊必有明衣布也（將ニ祭ラントシテ齊スレバ則チ必ずヤ沐浴ス。浴竟ハレバ而チ明衣ヲ著ク、其ノ體ヲ絜メシコトヲ明ラカニスル所以ナリ。明衣ハ布ヲ以テ之ヲ為ル。故ニ齊ニ必ず明衣有リ、布ヲス、ト曰フナリ）。」^⑩と疏解している。それゆえに、齋戒といえれば必ず沐浴が付随したはずであったが^⑪、逐一の事例についてその詳細を知り得なかったのが表には省かざるをえなかった^⑫。

まず齋戒期日についてその表一から判るのは、『続漢書』礼儀志の事例を除くと、少なくともおおむね漢代以降には散齋七日、致齋三日が

通例で、それが隋代に至ると散齋四日、致齋三日となって唐代に入ることである⁽¹¹⁾。金子修一氏によれば『周禮』春官肆師に準じて大祀・中祀・小祀に分類されるようになったのは隋代が最初である⁽¹²⁾とされたが、それと齋戒期日の短縮（散齋七日→四日）とは軌を一にするかのようにみえる。

表中で梁の例は、天監十三（五一四）年二月丁亥に武帝が初の親耕藉田を実施した⁽¹³⁾が、その前年に藉田実施の時期を正月から二月に改定し、齋戒も散齋七日、致齋三日にすべきことを指示しているのに拠った。また北魏の例は、孝明帝（肅宗）の神龜一（五一九）年八月、永寧寺に行幸した靈太后が自ら九層の寺塔に登らんとするのを諫めた崔光の上表に拠ったが、それは『禮記』にいう散齋致齋の期日を引いているので、そこからの類推である。

ところで、祭祀礼制にも時代的変遷があるのは当然だが、前漢と後漢とでは対照的な記事が残っている。そこで、その両者の対比から先の『統漢書』礼儀志にみる齋戒期日の短縮と祭祀の大・中・小三分類設定の背景を推測できないかを考えてみたい。

漢代祭祀の厳格さは既に指摘⁽¹⁴⁾されるが、程樹德氏も「漢律考」⁽¹⁵⁾に「不齋」をめぐるその二事例を掲げている。一つは、相国蕭何（文終侯）の曾孫にあたる蕭勝が「中元二年」⁽¹⁶⁾に父の嘉を嗣いで武陽侯になるが、「二十一年」を経て「坐不齋、耐為隸臣。師古曰…謂當侍祠而不齋也（齋セザルに坐シ、耐シテ隸臣ト為ス。師古曰ク…當ニ侍祠スベキナレドモ齋セザルヲ謂フナリ）」⁽¹⁷⁾という。勝は景帝に侍祠すべきなのに齋戒しなかったために罪に問われ隸臣にまで貶されたという。尤も、蕭何伝には「後有罪免（後ニハ罪アルモ免ズ）」⁽¹⁸⁾とあるので、恐らく数年後には赦されて、同じく曾孫である蕭慶の紹封（元狩三年）へとつながったのであろう。もう一つは、元狩三（前一二〇）年の事として『漢書』百官公卿表に、「衛尉充國、三年、坐齋不謹棄市（衛尉充國ハ、三年、齋ニ謹マザルニ坐シ棄市サル）。」「⁽¹⁹⁾とある事例である。それは「齋不謹」による棄市すなわち「斬首之刑（さらし首）」⁽²⁰⁾という厳しい処罰であった。以上は前漢代のことに属する。

これに比べると、後漢末期にあつた議論には隔世の感を禁じ得ない。『昌言』⁽²¹⁾を撰したことでも知られる仲長統⁽²²⁾らに散齋期間中における宴樂の可否についての議論があつたことを杜佑が『通典』⁽²³⁾に記している。それによると、仲長統は「散齋期間中に宴樂するを可とする」由、また同時代の御史大夫郗慮も、国家の齋戒につき古制によるのを改めんとして奏上し、散齋致齋の期日内に嘉慶事のあつたときどうすべきかを問題にしたようである。齋戒の弛緩については、すでに孔子の言として「三日齋シテ、一日之ヲ用フルモ、猶ホ敬アラザランコトヲ恐ル。二日鼓ヲ伐ツハ何ゾヤ」⁽²⁴⁾と伝えるところであつたが、右の杜佑によれば尚書令荀爽らは議して次のように述べている。

「散齋則是事之漸。然則散齋未絶外内與宴樂之事。今一歳之内、大小祭祀齋、將三百日。如此、無復用樂之時。古今之制、當各從所宜。若外張多日而内實犯禮、乃所以廢齋也。散齋宜從得會宴樂（散齋ハ則チ是レ事ノキザシナリ。然ラバ則チ散齋ハ未ダ外内トモニ宴樂ノ事ヲ絶タザルナリ。今一歳ノ内ニ、大小祭祀ノ齋ハ、將ニ三百日ニモナラントス。此ノ如クンバ、復タ樂ヲ用フルノ時無シ。古今ノ制ハ、當ニ各ノ宜シキ所ニ從フベシ。若シ外ニ張クルコト多日ニシテ、内実ニ礼ヲ犯サバ、乃チ齋ヲ廢ス所以ナリ。散齋ニハ宜シク會宴樂スヲ得ルニ從ルベシ）。」「⁽²⁵⁾と。

表一：歴代齋戒規定抄

時代	対象	祭祀	散齋	場所	致齋	場所	典拠	備考	
秦	(子嬰)	(即位)	齋宮（事前の齋戒五日？）				史記卷六		
漢	君子	(齋戒)	七日		三日	外	礼記祭統・ 周禮注疏卷二		
	夫人				内				
	皇帝	迎春東郊	七日		三日		礼記注疏 卷十四		
		先立春	七日		三日		漢制考卷三		
後漢	皇帝	天地	七日				禮統 漢書 志上		
		宗廟山川	五日						
		小祠	三日						
宋	皇帝	南郊	七日		三日	大極殿 幄坐殿	宋書禮志四		
		殷祠							
梁	武帝	籍田	七日		三日		隋書礼儀志	天監十三年	
魏	(肅宗)	(宗廟)	七日		三日		魏書崔光伝	礼記を引用	
隋	(齋宣)	大祀	四日		三日		隋書禮儀志	大中小祀有	
唐	高宗	封禪	四日	行宮	三日	行宮	旧唐書禮儀志	乾封三年正	
		封禪	四日	後行宮 殿前	三日	供帳前殿	旧唐書卷八 元禮儀志三・開 卷六十三	開元十三年 十一月	
		九宮貴神	四日		三日		旧唐書禮儀志	本紀・天寶 三載十二月 甲寅親祀	
唐	皇帝	親祭大祀	四日	別殿	三日	宣政殿室内	大唐郊祀録		
		冬至圜丘	四日	別殿	三日	一日大極殿 一日行宮	開元禮卷四		
		祈穀圜丘	四日	別殿	三日	一日大極殿 一日行宮	開元禮卷六		
		孟夏雩祀	四日	別殿	三日	一日大極殿 一日行宮	開元禮卷八	如冬至之儀	
		大享明堂	四日	別殿	三日	一日大極殿 一日行宮	開元禮卷十		
		夏至方丘	四日	別殿	三日	一日大極殿 一日行宮	開元禮卷廿九		
		時享太廟	四日	別殿	三日	大極殿	開元禮卷三七	祫享禘享同	
		封祀泰山	四日	後行宮 殿前	三日	同前殿	開元禮卷六三	禪社首山同	
		春分朝日	三日		二日		開元禮卷廿四	如圜丘之儀	
		春秋大社	三日	別殿	二日	一日大極殿 一日行宮	開元禮卷三三	如方丘之儀	
		先農耕籍	三日	別殿	二日	一日大極殿 一日行宮	開元禮卷四六		
参考	天皇	大祀	致齋一月		散齋三日		令義解卷二 神祇令	踐祚大嘗祭	
		中祀			三日齋				
		小祀			一日齋				

こういう議論に至るまでには相応の経緯があったに違いない。大小数多の祭祀と慎重を期すべき斎戒に要する多大な時間内にも生起する嘉慶事との悩ましい二律背反のゆえに、時間短縮の措置を講ずる改革の要は当然生じたことであろう。後漢周澤の逸話（後述）もあながち一笑に付し去るを許さぬ実情もあったかと推測される。『統漢書』礼儀志に「凡天地齋七日、山川等五日、小祀三日」^{三三〇}とするのは、そこに「大祀」「中祀」との表記こそまだないが、もし「天地」が大祀で「山川等五日」が小祀との間の中祀に相当するなら、当時の祭祀を大・中・小に三区分して実施せんとしたそもその起点はこの後漢時代にあったようにみえる。かつ散齋七日、致齋三日を散齋四日、致齋三日として、最も厳重な致齋三日は維持しつつ、前段階の七日の戒を四日に短縮することが一時的にもせよ後漢代にはあったと推定される。そのような背景に仲長統らに代表されるような議論があったのではないかと考えてみたのである。

次に斎戒の場所についても一瞥しておく。これは次節に掲げる具体的な史料と併せてみていく必要があるが、唐代以前には斎戒場所に関する記事をほとんど渉獵出来ず、空白にするしかなかった。わずかに示せたのは、外、内とする区別（礼記祭統）や『宋書』礼志から皇帝の南郊時の致齋が太極殿幄坐であった、ということぐらいである。唐代皇帝の場合には散齋と致齋とは場所が明確に区分されている。散齋四日は別殿で、致齋三日には太極殿（二日）と行宮（一日）とを明記するのはすべて『大唐開元礼』による。ただし、『大唐六典』や『大唐開元礼』は成書後すぐには行用されなかった^{三三一}ので、その内藤乾吉氏に従って、より確実にはそれは「建中二（七八二）年から貞元二（七八六）年頃以降」（同上）のこととしておく。所謂『開元禮』が統一的に使用する「行宮」は、『唐大詔令集』や『旧唐書』の玄宗開元二十三年条などの記述では「齋宮」と称している。

金子修一氏は、唐皇帝の「宗廟祭祀が親祭」のときには、『大唐開元礼』や『大唐郊祀録』に「散齋は別殿、致齋は太極殿・宣政殿室内」とあることを踏まえて、「親祭の場合でも皇帝は致齋まで宮城や大明宮に止まるゆえ、有司撰事のときも宮中を出ないことは誤りないであろう」^{三三二}とされた。また、すでに金子氏に言及もあるが、開元六年の玄宗の太廟親祭のとき、帝の意向で急遽廟所に齋宮を設えさせており、少なくとも玄宗のこの時点では致齋も大明宮正殿が儀注に沿った場所で、「齋宮宿齋」はあくまで皇帝の命を受けて臨時にとられた措置であった。尤も、祭場が宮城からはるか遠方にある、例えば泰山のような場合は別で、それは次節の具体事例で採り上げることしたい。

三．「齋宮」関係記事の概説

（ア）親耕藉田儀礼と齋宮

旧稿にも触れたが^{三三〇}、この儀礼の祖型は殷代にまで遡ると指摘され、それを示す卜辞の紹介もある^{三三三}。殷代藉田の礼を含む祈年祭の復元を試みた赤塚忠氏によれば、「殷代にも、齋宮があったか否かは明記がないが、先ず禱（みたまや）に祈ることはあった」^{三三四}とし、別の卜辞では、王が「黍事のために特に或る聖域内に入ること」^{三三五}も推測している。白川静氏は養蚕に伴い「蠶示」を祀る儀礼のあったことも指摘^{三三六}している。

「親耕親蚕」儀礼の研究には戦前における松本洪編述『支那歴代親耕親蚕考』³³⁵があり、今も有益である。近年の研究では、この儀礼の一つの面期は前漢文帝にあり³³⁶、それが賈誼や鼂錯の進言に拠るもので、「秘祝や肉刑の法」を除き³³⁷、かつ「田の租税」を除く(同上)などの施策と一体的な改革であったことも指摘される。こうした文帝の事績はあるいは後代の王符³³⁸などにも間接的には何らかの影響を及ぼしたかも知れない。それは兎も角、いま藉田儀礼に「斎宮」が登場する記事中から次の三件(a・b・c)を掲げてみる。

(a)『国語』卷一「周語」…(略) 先時五日、警告有協風至、王即齋宮、百官御事各即其齋三日、王乃淳濯饗醴。(略)³³⁹

(b)『旧唐書』卷三四、禮儀志四…「玄宗開元二十二年冬、禮部員外郎王仲丘又上疏請行藉田之禮。二十三年正月、親祀神農於東郊、以勾芒配。禮畢、躬御耒耜于千畝之甸。時有司進儀注…『天子三推、公卿九推、庶人終畝。』玄宗欲重勸耕藉、遂進耕五十餘步、盡壟乃止。禮畢、輦還齋宮、大赦。侍耕、執牛官皆等級賜帛。(略)」³⁴⁰

(c)『唐大詔令集』卷七四…籍田赦書。(略) 皇親、諸親及九廟子孫、不入等陪位者并外文武官九品位上、各賜勳。(略) 節級付分、南北衙門行從宿衛齋官及武官押当有職掌并諸色雜職掌并隨耕公卿從官等、各賜勳一轉。(略) 其宿衛齋宮者、加賜物三段。(略)³⁴¹

最初の(a)は、周の厲王の死後、子の宣王(前八二七〜前七八二年・西周末期)が即位したが、王は藉田儀礼を行わなかったために、號の文公がそれを諫めて親耕儀礼の意義やその次第を縷々説いて諭す中に「齋宮」が登場する事例である。長文ゆえ前後をすべて省略したが、「王齋宮二即キ、百官御事各オノ其ノ齋二即クコト三日、王乃チ淳濯シテ醴ヲ饗ム。」(前掲)とあり、その儀礼に先立ち、「王は事前に齋宮に入り、百官も共に三日間の斎戒をし、王は沐浴して醴酒を飲む」(註三九前掲書)仕来りであった。しかし宣王は文公の諫言を聴かず、ついに三十九(前七八九)年、王の軍隊はその千畝の地³⁴²に姜戎と戦い敗績する³⁴³という展開になっている。

谷口義介氏は「ここに記録された儀礼は、古朴な部分を含みつつも、宣王により廃止される以前の実体そのままだではなく、戦国期を下限として最終的に体系化されたもの」³⁴⁴だとされた。一方、吉本道雄氏はその大部分は秦代以前、即ち戦国晩期(稍晩)―前三世紀の第二四半期―に一応固定化したのが、「現行本の體例は、『国語』独自の紀年が『史記』に用いられるところから、前漢中期までに確定したことが推測される」³⁴⁵と説得力のある一面を指摘している。また、木村正雄氏は「国語も亦左伝と表裏する文献で、それが現在のような形に編著されたのは漢代であったと考えられる」³⁴⁶とした。

「戦国期を下限」としつつも、吉本氏や木村氏の言われるように、もし仮にその編著の最終的な確定時期が漢代(前漢中期まで)にあるとした場合には、ここに登場する「齋宮」の語は必ずしも古い用例ではなく、前漢代に付加された可能性もこれを否定はできない³⁴⁷。ともかく、この「周語」にいう藉田儀礼の記述は長く抛るべき原典として以後の史籍にも繰り返し引用された。『後漢書』黄瓊伝³⁴⁸や『隋書』所引の梁武帝天監十二年の記事³⁴⁹などはその典型例であるが、所引(a)との重複を避けて省略に従った。

次に(b)は、玄宗が開元二十三(七三五)年正月に行った藉田儀礼の記事に見える齋宮である。その前年の冬に礼部員外郎王仲丘が上疏

してそれは実現した。ここに現れる「齋宮」は先の黄瓊伝や梁武帝天監十二年の記事とは違い、『国語』周語を直接引用することなく「藉田齋宮」を記した最初の記事ではないかと思う。

この時、有司が上進した儀注には「天子ハ三推、公卿ハ九推シテ、庶人畝ヲ終フ。」（前掲）とあったが、玄宗は「重ネテ耕藉ヲ勸メント欲シテ、遂ニハ五十余歩ヲ耕シ、壟ヲ尽シテ乃チ止ム。礼ヲハリ、輦（玄宗）齋宮ニ還リテ、大赦ス。侍耕、執牛官ニモ皆級ヲハカリテ帛ヲ賜ヘリ。」（同上）という。儀注どおりの形式的な「天子三推」に終わらず、この時玄宗は五十余歩を耕し、畦を耕し尽してやめた^{五〇}。というから異例の親耕儀礼だったのである。終えたと齋宮に戻り、大赦するとともに従官たちにも賜帛があった。「執牛官」の名が見えるので、すでに藉田親耕儀礼に牛耕が導入されていたことが判明する^{五一}。

親耕後の玄宗は「齋宮に還つて、大赦した」とある事から、その当日はおそらく東郊藉田^{五二}に近接して設けられた「齋宮」を出て神農親祀の儀礼に臨んだものと推測される。従つて、少なくとも前日には最後の致齋のためにその東郊齋宮に入っていたと考えられるのである。そのことは次の（c）からも証明される。

（c）は、玄宗による先の藉田儀礼に際して行われた関係者へのより具体的な報奨内容のわかる史料である。詳細は略すが、地位や身分等によつてその内容には当然ながら差があった。「其宿衛齋宮者、加賜物三段（其レ齋宮ニ宿衛セシ者ニハ、賜物三段ヲ加ヘヨ）。」（前掲）と見え、齋宮の宿衛に当たった者たちにも賜物三段が加えられている。これにより、この時の玄宗が前日に先農壇のある東郊の齋宮に入つて致齋をおこなったことは間違いないのである。その齋宮の規模や結構等については不明で、将来の考古学調査の成果をまちたい。

（イ） 封禪儀礼と齋宮

封禪儀礼^{五三}といえは、始皇帝や漢の武帝が有名だが、本稿はあくまで「齋宮」記事の概説を自らに課しているので、次の三件にしぼつて掲げることにした（d～f）。

（d）『旧唐書』卷二十三、禮儀志三…「三年正月、帝親享昊天上帝于山下、封祀之壇、如圓丘之儀。祭訖、親封玉策、置石礎、聚五色土封之、圓径一丈二尺、高九尺。其日、帝率侍臣已下升泰山。翌日、就山上登封之壇封玉策訖、復還山下之齋宮。其明日、親祀皇地祇於社首山上、降禪之壇、如方丘之儀。皇后為垂獻、越國太妃燕氏為終獻。翌日、上御朝觀壇以朝群臣、如元日之儀。禮畢、讌文武百僚、大赦改元。（略）」^{五四}

（e）『旧唐書』卷八、玄宗本紀上…「開元十三年十一月丙戌、至兗州岱宗頓。丁亥、致齋於行宮。己丑、日南至、備法駕登山、仗衛羅列嶽下百餘里。詔行從留於谷口、上與宰臣、禮官昇山。庚寅、祀昊天上帝於上壇、有司祀五帝百神于下壇。禮畢、藏玉冊於封祀壇之石礎、然後燔柴。燎發、群臣稱萬歲、傳呼自山頂至嶽下、震動山谷。上還齋宮、慶雲見、日抱戴。辛卯、祀皇地祇於社首、藏玉冊於石礎、如封祀壇之禮。（以下略）。」^{五五}

(f)『唐会要』卷八、唐張說封禪壇頌…「皇唐六葉開元神武皇帝。再受命。致太平。乃封岱宗。禪社首。鑿石紀號。天文煥發。(中略)。則封禪者、帝王受天命告成功之為也。(中略)。孟冬仲旬。乘輿乃出。千旗雲列。萬戟林行。霍瀟燦爛。飛焰揚精。原野為之震動。草木為之風生。(中略)。是月來至於岱宗。祇祓齋宮。滌濯靜室。凝神元覽。將款太一。(後略)。」⁵⁵⁾

まず(d)は、唐の高宗が麟德三(六六六)年正月に封禪儀礼をおこなった時の記事に出る齋宮である。儒家の礼制が定着したと思える後代にも封禪への志向はなくならなかった。板野長八氏の言葉をかりれば、専制君主としての皇帝は「官僚以下人民の履行すべき人道・礼を超えた」⁵⁶⁾存在として「呪術的權威をもたねばならなかった」(同上)という。これも高宗が即位以来、臣下からたびたび要請を受けて来ていた封禪儀礼であった⁵⁷⁾。そして礼官、博士らに撰定させた儀注には、「上齋於行宮四日、致齋三日(上、行宮二齋スルコト四日、致齋三日なり)。」⁵⁸⁾とある。(d)の文から泰山の下に齋宮の在ったことは明白で、四日の齋(散齋)を行なう行宮は即ち泰山の齋宮であり、致齋三日も同所でおこなった(前殿、後殿を使い分けるなどしたか)と推測しておく。帝は正月戊辰朔に山下の封禪壇に昊天上帝を親祀⁵⁹⁾した。遠くはなれた地での齋戒のことでもあり、前年の十月丁卯(五日)には東都洛陽を出立している⁶⁰⁾。このように、遠方での祭祀儀礼では現地に齋宮が設けられていたことが判る。

次の(e)は玄宗の開元十三(七二五)年の封禪儀礼に見える齋宮の記事である。玄宗は、同十一月丙戌(七日)に岱宗に到着して頓(＝宿宮)⁶¹⁾し、翌丁亥(八日)にその「行宮二致齋」した。両者が全く別々の場所を指すとは思えず、同語の重複を避けて記したに過ぎない。七日に泰山麓の行宮にある宿宮施設で長途の旅の疲れを癒し、翌日同じ行宮内の別室で致齋に臨んだ、と解する。己丑(十日)に宰臣、礼官と泰山に登り、庚寅(十一日)には昊天上帝を封祀壇上に祀っている。従って、この次第のとおりならば、散齋は不明だが、泰山の下に在った行宮で二日間(八日・九日)は致齋する時間があった。その行宮とは文中に「上、齋宮二還ル」と見える齋宮のことに違いない。

ところで、『大唐開元禮』の「皇帝封祀泰山。齋戒。」には「皇帝散齋於行宮後殿四日、致齋於前殿三日。」⁶²⁾とあり、右掲玄宗の実績とは少し合わない。前記内藤乾吉氏の研究にある『開元禮』の行用が遅れたことはこの点からも証されるかも知れない。玄宗には前掲(b)の親耕儀礼においても必ずしも儀注には縛られない闊達な姿をうかがわせている。

最後の(f)は(e)に関連する史料で、玄宗の東宮時代から深く親敬された張說⁶³⁾の「封禪壇頌」の一節である。張說は、開元十年に封禪の議を建言し、十三年に詔を受けて東封儀注の議定に関わり、その議論においても重要な役割を果たした。玄宗が「献替之誠」⁶⁴⁾を以て称えた張說には東封に及んで右丞相兼中書令が授けられ、その時この「封禪壇頌」を撰して玄宗の聖徳を称揚したのである。この壇頌にある祇祓、滌濯、凝神・元覽などの言葉に、玄宗の泰山封禪における「齋宮」の性格の一端がうかがえる。直接表現としての「沐浴」の語はないが、「祇祓」「滌濯」「静室」「凝神」という言葉からは「身を清め」「室内を掃き清め」「精神を集中させて」、俗界から隔離された清浄な潔齋空間であったと想像できる⁶⁵⁾。かつ、「齋宮」と「静室」の語とを併せ用いたのは、道教を尊崇して止まなかった玄宗⁶⁶⁾をよく知る張

説ならではの配慮と齋戒の実態を巧みに表現しているように私には思える。

(ウ) 祀天祭地(含祠后土)と齋宮

次に、いわゆる南北郊キョウ関係の記事に見える齋宮関係史料を三件掲げておく(g-i)。

(g) 『漢書』卷八、宣帝紀第八(二六六頁)・「五鳳三年三月、行幸河東、祠后土。詔曰『略』朕飭躬齋戒、郊上帝、祠后土、神光並見、或

興于谷、燭耀齊宮、十有餘刻。甘露降、神爵集。已詔有司告祠上帝、宗廟。』(略)」(八九)

(h) 『魏書』卷一百八之一、禮志一(二七四九頁)高祖孝文帝太和十五(四九二)年・「十一月己未朔、帝釋禪祭於太和廟。帝袞冕、與祭者朝服。既而帝冠黑介幘、素紗深衣、拜山陵而還宮。庚申、帝親省齊宮冠服及郊祀俎豆。癸亥冬至、將祭圓丘、帝袞冕劍舄、侍臣朝服。辭太和廟、之圓丘、升祭柴燎、遂祀明堂、大合。既而還之大和廟、乃入。』(略)」(七〇)

(i) 『唐会要』卷十上、皇帝夏日至祭方丘儀(二二二頁)・

「代宗大歷十二(七七七)年秋八月。增修北郊壇齋宮二十五間。」

「文宗太和三(八二九)年六月。太常寺奏北郊祀皇地祇壇。先闕齋宮。請准祠例置一所。可之。」(七一)

(g) は前漢武帝の曾孫、孝宣皇帝が五鳳三(前五五)年三月に、河東(汾陰)で「上帝を郊祭し后土を祠った」(七二)時の記事に見える齋宮である。当時はまだ京師の南北郊で祀天祭地を行う時代ではなかった。詔には「略」朕躬ヲ飭メテ齋戒シ、上帝ヲ郊シ、后土ヲ祠ルニ、神光並ビニアラハレ、或ハ谷ヨリ興リテ、齋宮ヲ燭耀セシコト、十有余刻ナリ。甘露降り、神爵集ヒタリ。已ニ有司ニ詔シテ上帝、宗廟ニ告祠セシメタリ。(略)」(七三)と、はなはだ呪術性の強い言葉がちりばめられている。汾陰の後土祠に当たり、その齋戒のために現地に齋宮が置かれていたことが判るが、その規模や結構等は不明である。こうして神光、甘露、神爵(鸚鵡)などの瑞祥を以って慶祝するのは武帝以来一貫している(七四)。

前漢武帝は雍祠五畤、甘泉郊泰畤、河東祠后土を実践し、元封二(前二〇九)年には泰山のふもとに新しく明堂を作り高祖を祠っている。河東汾陰の畤のほとりに后土祠を建てたのはそれより早く元鼎四(前一二三)年十一月甲子のことで、その六月(七五)には后土祠の旁で宝鼎を得たという(七六)。元封二年は予てより決壊していた黄河の堤を修復工事し、白馬と玉璧とを沈めて河伯を祀った(夏四月)年でもあったが、その六月に甘泉宮に「九茎連葉」の靈芝が生えるという瑞祥があった(七七)。「郊祀歌十九章」中に「甘泉齊房」(第十三章)と見え、その故事に因んだ史近の「漢武帝齋宮產靈芝賦」(七八)には冒頭に「產靈芝於齋宮」とある。従って、靈芝が生えたという甘泉の「齊房」は武帝が泰畤を祀る時に齋戒をしたその「齋宮」を指すと考えて間違いないであろう。

次に、梁の武帝および元帝の郊祀における齋宮の記事(七九)もあるが略し、北魏孝文帝的太和十五年十一月癸亥冬至に南郊で円丘を祭った時の齋宮の記事(h)を掲げた。それは有名な故事(八〇)を遺した南伐Ⅱ洛陽遷都(太和十七年)より以前のことゆえ、舞台は代都平城にあった

南郊の齋宮を指している。遷都後の旧都平城の様子が『水經注』に記されていることは夙に日比野丈夫氏の解説^(ハ)によっても周知のことだが、大極殿などの宮殿や寺院のほか、城外には藉田や菓圃、明堂や辟雍などが在った^(ハニ)という。

『魏書』高祖本紀によると、高祖孝文帝は太和十二(四八八)年閏月甲子に「帝觀築圓丘於南郊(帝、円丘ヲ於南郊ニ築クヲ觀ル)」^(ハミ)とあり、翌十三年正月辛亥に「有事於圓丘」^(ハロ)し、五月庚戌には「有事於方澤」(同上)している。^(ハ)はその二年後の十五年十一月癸亥(五日)冬至に円丘に祭らんとした時の齋宮で、祭祀に先立つ三日前の庚申(二日)に「帝、親ヲ齋宮ノ冠服及ビ郊祀ノ俎豆ヲ省ル」とある。祭祀前の齋戒を正殿内でおこなったにしても、「齋宮ノ冠服ヲ省ル」とは齋宮での宿齋もその時の儀注にはあったことを物語る。そうであれば、前日四日(壬戌)の一日だけは齋宮に致齋したと解釈することができる。

(i)は唐の代宗及び文宗時代の北郊壇齋宮に関わる史料である。簡略ながら前者が施設の規模を記す珍しい記事ゆえ掲げた。玄宗鍾愛の孫であった^(ハフ)代宗(宝応元聖文武皇帝)の大暦十二年といえ、正月早々に渤海使が日本国の舞女十一人を献上した^(ハハ)年でもあったが、同月癸酉条にも「京師旱、分命祈禱(京師旱ス、分チテ祈禱ヲ命ズ)」(同上)とあるように、当時の「中国東・中部地域は、隋唐三二〇年間において二回目の干旱期」^(ハセ)に当たり、又しばしば大風大雨等による甚大な災害にもみまわれていた。安史の乱による政治経済的な混乱・弊害から抜け出せずにあったところへ重ねての自然災害である。

本紀には米価高騰の記事が繰り返してみえ(廣徳二年九月・秋、永泰元年三・春、七月、大暦六年春等)、繫囚放免を含む大赦も再三行っている(寶應二年七月、永泰二年十一月、大暦四年七月、七年五月、九年十二月、十年九月等)。そして、とりわけ大暦七年五月に「可大赦天下、見禁囚徒、罪無輕重、一切釋放(天下ニ大赦シ、禁セラル囚徒ハ罪ノ輕重ナク、一切釈放すべし)」^(ハト)とした時は、帝自ら減膳徹樂して「齋宮」に別居し、嘉応を獲るべく神明に禱っている(同上)。この場合の「齋宮」は上乗の齋宮とは少し違うが、臨時に設けた点では変わらない。別途『日本書紀』天武紀七年にみえる「倉梯齋宮」の意味を考えるうえでも貴重な史料と言わなければならない。

兎も角、慢性的な旱魃・水災被害のうちつづくなかで、皇地祇をまつる「北郊壇の齋宮」を二十五間に増修している。楊寛氏の歴代尺度研究では、唐宋の尺度は周隋の旧制によるもので、一般的に使用された大尺は「長〇・二九五七六六公尺」^(ハチ)という。いま仮にこれを約〇・三メートルとして単純計算すると、二十五間は約四十五メートルになる(注…柱間ではなく、桁行として計算した)。わざわざ増修したほどであるから、当然北郊壇での親祭には最後の致齋一日をその齋宮に宿齋したものと推定しておきたい。

文宗のときには、北郊の皇地祇壇に齋宮がないため所管の太常寺が「祠例に準じて一所置いてほしい旨奏上した」ものである。これは有司撰事で祀る場合の必要に出たものかも知れない。こういう点からも、齋宮が常置の施設ではないことが窺え、また既存の建物を所定の「齋戒施設」に指定し、それを齋宮と称したこともあり得たと考えられよう。

(エ) 宗廟の齋宮

最後に、宗廟関係の記事に見える齋宮の例を三件掲げておく（j～l）。

（j）『史記』卷六、始皇本紀第六（二七五頁）…趙高乃悉召諸大臣公子、告以誅二世之狀。（略）。立二世之兄子公子嬰為秦王。以黔首葬二世杜南宜春苑中。令子嬰齋、當廟見、受王璽。齋五日、子嬰與其子二人謀曰、『丞相高殺二世望夷宮、恐群臣誅之、乃詳以義立我。我聞趙高乃與楚約、滅秦宗室而王關中。今使我齋見廟、此欲因廟中殺我。我稱病不行、丞相必自來、來則殺之。』高使人請子嬰數輩、子嬰不行、高果自往、曰、『宗廟重事、王奈何不行？』子嬰遂刺殺高於齋宮、三族高家以徇咸陽。」^{九〇}

（k）『魏書』卷一百八之一、禮志一（二七五一頁）太和十九（四九五）年六月条…（高祖孝文帝太和）「十九年六月、相州刺史高閭表言…「伏惟太武皇帝發孝思之深誠、同渭陽之遠感、以鄴土舅氏之故鄉、有歸魂之舊宅、故為密皇后立廟於城內、歲時祭祀、置廟戶十家、齋宮三十人。……（以下略）。」^{九一}

（l）『旧唐書』卷二十五、志第五。禮儀五（九五二頁）…（開元）「五年正月、玄宗將行幸東都、而太廟屋壞、乃奉七廟神主於太極殿。玄宗素服避正殿、輟朝三日、親謁神主于太極殿、而後發幸東都。乃敕有司修太廟。明年、廟成、玄宗還京、行親祔之禮。時有司撰儀注、以祔祭之日車駕發宮中、玄宗謂宋璟、蘇頌曰…「祭必先齋、所以齋心也。據儀注、祭之日發大明宮、又以質明行事、縱使侵星而發、猶是移辰方到、質明之禮、其可及乎？又朕不宿齋宮、即安正殿、情所不敢。宜於廟所設齋宮、五日起行宮宿齋、六日質明行事、庶合於禮。」璟等稱聖情深至、請即奉行。詔有司改定儀注。六日、玄宗自齋宮步詣太廟、入自東門、就立位。樂奏九成、升自阼階、行裸獻之禮。至睿宗室、俯伏鳴咽、侍臣莫不流涕。」^{九二}

（j）秦の二世皇帝を自殺に追いやった丞相趙高は、二世の兄の子嬴（子嬰）を秦王とし、彼に齋宮で齋戒をさせた。齋すること五日、子嬰がその子二人と謀って言うには「高は皇帝を望夷宮で殺した、きつと群臣に殺させたのだ、そこで今度はいつわって我を立てようとしている。奴めには楚との約束が出来ていて、わが秦の宗室を滅ぼし自分が関中に王たらんとしているらしい。今、我に齋戒させて廟に見えんとするのは、廟中で今度は我を殺さんとしているからに違いない。病と偽り行かなければ、丞相めきつと自らやって来るぞ、そうすれば殺してやろうじゃないか。」と。果たしてその通りになった^{九三}。

右の文脈から、金子修一氏は「秦の宗廟が即位の際に重要な働きをしている」^{九四}と指摘している。宗廟での即位儀礼の前に「齋宮」で齋戒することになっていたのであろう。趙高の「宗廟重事、王奈何不行？（宗廟ノ重事、王ナンゾ行カザルヤ？）」の言葉も虚しく不幸にして殺戮の場と化した、その齋宮の正統な役割・機能は皇位継承者による即位儀礼前の齋戒にあつたはずである。ところで『続日本紀』では、聖武天皇即位後の踐祚大嘗祭挙行に際し、その大嘗宮を「齋宮」^{九五}と称している。そういう点にも当時日本の漢語受容の在り方の一端を窺うことができる。

（k）太和十七（四九三）年九月に南伐と称して北魏孝文帝が洛陽遷都^{九六}の計を定めてから二年後の十九年に、旧都平城から六宮及び文

武をことごとく洛陽に遷した（九月）。その三ヶ月前に当たる六月に、相州刺史の高閭が上表して魏郡鄴城内にあった密皇后の廟祀をやめべき事を訴え、聴用された。

密皇后杜氏は鄴の出身で、陽平王超の妹である。太宗が東宮時代にその寵愛を受け後の世祖を生み、太宗（明元帝）の即位後に貴嬪を拝し、泰常五（四二〇）年に薨去した。世祖（太武帝）は即位すると、生母貴嬪を追尊して密皇后とし、后廟を建て刺史をして四時に薦祀させることとなった^{九七}。「鄴土ハ舅氏ノ故郷ニシテ、帰魂ノ旧宅有ルヲ以テ、故ニ密皇后ノ為ニ廟ヲ城内ニ立ツ・」（前掲）とあるのはそれである。しかも折々の廟祭のために、廟戸十家を常置し、齋宮には三十人を常駐させた。それから七十年余を経た右記太和十九年には「今や廟殿ハ虧漏シテ、門牆ハ傾毀シ、簠簋（神饌を盛る器）モ古ク敗レテ、行礼ニモ闕クルコト有リ。」^{九八}というありさまであった。そこで、「若シ七廟コレ新タニシ、明堂初メテ制スルヲ以テ、配饗ノ儀ヲ京邑ニ備フルナラバ、便チマサニ罷壊シテ、其ノ常祭ヲ輟ムルベシ。如シクハ功高キヲ以テ特ニ立ツルトキハ、宜シクマサニ其ノ靈宇ヲ新タニスベシ。」（同上）という高閭の意見が裁可され、「之ヲ罷メヨ」との詔が出たのである。以上の経緯から、北魏世祖（太武帝）時代にあった密皇后の廟には三十人もの祭祀関係者が常駐する齋宮が併設されていたことが判るが、建物の結構等の実態は不明で、やはり今後の考古学調査成果を俟つしかない。

最後の（一）は、これも既に金子修一氏が詳細に論じられた所だが、唐玄宗の開元五（七一七）年における京師長安の太廟修理と翌開元六年の謁廟にかかわる記事に齋宮が登場する事例である。金子氏によれば、開元五年二月から翌六年十月まで、長期にわたる玄宗の東都（洛陽）滞在は「武后時代の残滓の払拭」（金子氏）を図る上で政治的に意味のある期間であつた^{九九}という。文中「明年廟成」は金子氏が指摘されたように不正確である。玄宗紀には「（五年）冬十月丙子、京師修太廟成」^{一〇〇}とあり、修理は同年十月に終了し、その間は大極殿に遷置されていた七廟の神主も「（同月）戊寅、祔神主于太廟」（同上）と見え、太廟に戻されていた。そして翌六年帰京後の十一月丙申（六日）に玄宗は太廟に親謁した^{一〇一}のである。

さて新修成つた長安の太廟に改めて玄宗自らが睿宗の神主を納める「親祔之禮」^{一〇二}を行うについて、玄宗は「朕不宿齋宮、即安正殿、情所不敢。宜於廟所設齋宮、五日起行宮宿齋、六日質明行事、庶合於禮（朕齋宮ニ宿ラズ、即チ正殿ニ安ンズルハ、情ノ敢ヘテセザル所ナリ。宜シク廟所ニ齋宮ヲ設クベク、五日ニ行宮ニ赴キテ宿齋シ、六日質明（＝黎明）ニ行事スレバ、禮ニ合スルニ庶カラン）」^{一〇三}と儀注を改めさせた。この事例を以って金子氏は「本来親祭でも大明宮の正殿（宣政殿か含元殿）で致齋を行うことになっていたことが判る。」（同上）と指摘している。

いよいよ六日の質明、玄宗は改めて廟所に設けさせた齋宮から「歩いて太廟に詣る」という。恐らくこれも本来は乗輿による移動であつたろうが、「歩詣太廟」^{一〇四}のことで玄宗のこの度の神主に対する至誠恭順の姿勢を表わす、一種の政治的パフォーマンスでもあつたのではないかと想像する。後代、宋の神宗にも「帝却乘輿、步入廟、趨至齋宮（帝乗輿ヲ却ケ、歩キテ廟ニ入り、ハシリテ齋宮ニ至ル）。」^{一〇五}とのエピソード

ドがあるのは、確証はないがあるいはこの玄宗の前例に比擬したものかも知れない。それは兎も角、該例では事前に皇帝からの指示があれば廟所に設けることができる臨機応変さを「齋宮」はもっており、まだ固定化された施設ではなく、文字通り「行宮」だったのである。

四・その他の齋宮

①…上記藉田儀礼などの諸祭祀とは少し違う場面に登場する齋宮のあったことは、唐・代宗の大暦七年「別居齋宮禱于神明」の例でも触れたが（前節ウのi）、ここには前漢・宣帝の事例を記しておきたい。

それは『太平御覽』（卷二二六）に、「漢書曰、宣皇帝元鳳中、路溫舒上書、宜尚德缓刑。帝深采覽之、季秋後讞。時帝幸宣室齋宮、而決事（漢書二曰ク、宣皇帝ノ元鳳中ニ、路溫舒上書スラク、宜シク德ヲ尚ビ刑ヲ緩ムベシト。帝深ク之ヲ采覽シ、季秋ノ後ニハカリヌ。時ニ帝ハ宣室ノ齋宮ニ幸シテ事ヲ決シタリ）。」⁽¹⁰⁰⁾という記事である。これは『漢書』卷二三の刑法志や同卷五一の路溫舒伝（列傳二一）⁽¹⁰¹⁾に拠ったものだが、路溫舒伝に「宣帝初即位、溫舒上書、言宜尚德缓刑。」とする文脈からみて、『太平御覽』が「宣皇帝元鳳中」としたのは恐らく「元平中」の間違いであろう。

宣帝（在位前七四〜前四九年）は後年（甘露三年）には「漢朝の儒教政策の転換点であった」⁽¹⁰²⁾と評される石渠閣會議を開催した皇帝である。その即位の初めに路溫舒が上疏して「德を重んじられて刑を緩やかにしますように」⁽¹⁰³⁾と、「秦の十失政」なども引いて切々と説いたので、宣帝は心動かされてこれを採用し、「季秋ノ後ニ讞ス（秋の末月の後に、重大な疑獄については帝に判決を請う）」⁽¹⁰⁴⁾ようにさせた。中村正人氏によれば、「萬物の生長する春夏において、強制的に人の生命を斷つことは、自然の調和を亂す行為と看做された」⁽¹⁰⁵⁾ので、春分以後、秋分以前には死刑の執行は禁止されたという。

その時に当たり宣帝は常に未央宮前殿の正室である宣室⁽¹⁰⁶⁾に出御し、齋居した上で刑事案を裁断することにしたというのである。つまり、先の「刑法志」が「時上常幸宣室、齋居而決事（時ニ上ハ常ニ宣室ニ幸シ、齋居シテ事ヲ決ス）」（同上）とした箇所を『太平御覽』はつづめ誤って「時帝幸宣室齋宮、而決事」としてしまったのだろう。これは刑法に関わることなので祭祀儀礼の例ではないが、しかし宣帝のこの件では（それを「齋宮」と称したとは断言できないものの）、少なくとも前漢代において、所謂「齋宮」以外の宣室（宣室）でも潔齋・齋居の行われたことは、やはり留意しておかねばならない。

なお蛇足ながら、古く周武が殷の紂を牧野に破ったとき、武王は之を「宣室」に殺した⁽¹⁰⁷⁾という。高誘の原注ではその宣室を「殷の宮名」とし、あるいは「宣室、獄也（宣室ハ、獄ナリ）」（同上）ともいうと付け加えている点に注目すれば、はるかに時代を隔てるものの、前漢宣帝の「宣室決事」にも何か通底しうるものがあつたのかも知れない。

②…最後に、中国の齋宮を語るうえで外せないのが『後漢書』周澤傳⁽¹⁰⁸⁾である。これは、『蒙求』「澤室犯齋」⁽¹⁰⁹⁾でも親しまれ、李白（七〇一〜七六二）に「李白の婦たりと雖も、何ぞ太常の妻に異ならん。」⁽¹¹⁰⁾という「贈内（つまに贈る）」の作品もあるためなおさら、日

本でも広く知られた逸話である。

周澤（字は稚都）は、光武帝の建武末年頃から明帝（顯宗）の中元く永平年間の頃に活躍した。その人となりは、「国家のために尽くして自分の欲望を抑え、身寄りのない弱者に憐れみの気持ちをかけ、役人や民は心を寄せ慕った。」^{（二二六）}という。永平十年に初めて太常の職^{（二二七）}を拝し、十二年（資治通鑑は十四年^{（二二八）}とす）には司徒（丞相）となるが「宰相としての声望を失う」^{（二二九）}と云うところがあって、数月で再び太常となる。祭祀儀礼を掌る役所のトップであった。その周澤伝にいう、

「かつて病に齋宮に臥す。其の妻、沢の老病なるを哀れみ、闕いて苦しむ所を問う。沢大いに怒り、妻の齋禁を干犯せるを以て、遂に収えて詔獄に送りて罪を謝びしむ。」^{（二三〇）}と。余りの奇矯な振舞いのゆえに当時の人は陰で嘲笑したのか、「世に生まれて諧わず、太常の妻と作る。一歳三百六十日、三百五十九日は齋す。」（同上）とて人口に膾炙することになった。これを以て当時の太常が年中家人を寄せ付けず齋戒していたと考える必要はないが^{（二三一）}、先の後漢末にあった仲長統や荀彧らの議論（上述）の背景に、年間にある多数の祭祀毎にかなりの時間を齋戒に要した現実のあったこともまた否定はできない。

とまれ、李賢らも注するように、『漢官儀』はこの下に続けて「一日不齋醉如泥（一日齋せずんば、酔いて泥の如し）」^{（二三二）}とする。この場合の「泥」は「ドロ」ではなく「デイ」と訓む。すなわち、「南海有蟲無骨名曰泥（南海にいる骨のない蟲の名を泥と曰）」い、「在水中則活、失則醉如一堆泥。故時人譏周澤曰、一日不齋醉如泥（水中に在れば則ち活き、失えば則ち酔ふて一堆の泥の如し。故に時の人周澤を譏りて、一日齋せずんば、酔ひて泥の如しと曰へり）」^{（二三三）}と云う。この「如泥（デイノ如シ）」は飽くまで蟲の名を以てその状態を謂うのであって、例えば、矯慎伝にみる「雲泥」^{（二三四）}の「泥」とも意味は異なるのである。

僅かに気付いた所では、本朝における『文徳天皇実録』や『玉葉』、あるいは『明月記』^{（二三五）}などでもこの「如泥」の表現は使われ、それ以降『園太暦』^{（二三六）}の頃までには日本語としての変化を遂げて定着したようである。一例を高橋貞一氏の『訓読玉葉』^{（二三七）}に拠ってみるに、「その後中臣遅参す。大略職事召し儲けざるか。毎事泥の如し。有れども亡きが若しと謂ふべきか。数度催足の後、僅に以て参入す。」（三六頁上段）と、兼実は当時の神祇官中臣氏らの余りにも懈怠に過ぎる勤務態度を歎いている。唐の郊廟祭祀においても祭官らの怠慢な様子やその引き締め措置については金子修一氏がすでに指摘されるところであった^{（二三八）}。

周澤と似た話は晋代に中正八損の議^{（二三九）}で知られる劉毅にも伝えられる。ただ、劉毅伝には「（略）嘗散齋而疾、其妻省之、毅便奏加妻罪而請解齋。」^{（二四〇）}として「齋宮」の語自体は見えない。それをいま『白氏六帖』が引くところによると、即ち「晋劉毅嚴酷、妻有過、立加杖捶。常居齋宮、妻省之、即奏加妻罪、請解齋也（晋ノ劉毅ハ嚴酷ニシテ、妻ニ過チ有レバ、タチドコロニ杖捶ヲ加フナリ。カツテ齋宮ニ居リシトキ、妻ノ之を省ミルニ、即チ妻ニ罪ヲ加ヘムコトヲ奏シ、解齋セムコトヲ請フナリ）。」^{（二四一）}という。余りにも「嚴格で剛直な性質の故に三公四輔の職には至らず終わった」^{（二四二）}と評された劉毅の、心配して夫の様子を窺った妻に対する態度が周澤とよく似ているため『白氏六帖』に

は並記されたのであろう。

とまれ、その「齋宮」を指して『東觀漢記』では「齋舍」(齋舎)とも表記しており、複数の呼称があったことを窺わせる。太常のように祭祀儀礼に直接かわかる官人らの齋戒する施設も齋宮ないし齋舎と呼ばれたことが右事例から判る。そして周澤や劉毅のストイックで、エキセントリックにも思える公正厳格な性情とは別に、妻といえどもその場を訪ねること自体が齋禁を犯すことになったのは、齋戒段階では心身ともに清浄にして外部との接触を断つことが前提²¹³だったからであらうが、他方、当時の一般的通念としての婦人に対する潜在的なタブー意識のあったことも少なからず影響していたであらう。いわゆる祭祀における「嬖變(変)」の問題については、別途「忌詞と御汗殿」(第三章第二章)において改めて触れるであらう。

五・まとめ

祭祀礼制には自ずから時代的変遷もあり、もとより一律にとらえることはできない。ただ、「齋宮」の果たす役割・機能の中心が「齋戒沐浴」にあったことは変わらず、王ないし皇帝祭祀の関係記事に「齋宮」が登場するのはその「潔齋空間」のための施設としてである。祭場が泰山や河東汾陰あるいは近郊(南北、あるいは東郊など)にある場合と、宗廟(太廟)のように宮城内の近距離にある場合とは異なることも掲げた事例から明らかである。尤も、唐代までの「齋宮」それ自体の規模や結構等に関する情報はほとんどなく、いずれも今後の発掘調査の成果を俟つよりほかはない。

おおむね漢代以来、都合十日の齋戒期日(散齋七日+致齋三日)が隋代に至って七日(散齋四日+致齋三日)に短縮されて唐代に至ることは表一から判明した。それは隋代に至って祭祀が大祀・中祀・小祀に三区分された(金子氏)ことと表裏一体の変革だったのではないかと推測できる。ただし、『続漢書』礼儀志の記述に拠れば、そこに「大祀・中祀」との明確な表記を欠くものの、諸祭祀三区分の起点はすでに後漢代に胚胎しており、しかも齋戒期日の短縮化が一時的にもせよ行われていたらしいと想定された。本稿ではその背景に、後漢末における仲長統や荀彧らによる「散齋期日内に生じた嘉慶事には宴樂するも可なり」とする議論などがあつたと考え、それに至るまでには相応の経緯もあつたのではないかと推測した。荀彧らが「年間にある大小の祭祀に要する物忌みたるや実に三百日にも及ぶ。これではとても祝い事をしてゐる暇などない。」と(多少大袈裟に?)嘆くのをみれば、有名な周澤の逸話にもそれなりの現実があつたうえで、それが誇張して人口に膾炙していたことも容易に想像された。

金子修一氏の先駆的業績により、唐代皇帝の「宗廟祭祀」における齋戒用の施設は親祀・有司摂事の場合ともに、宮城・大明宮から外には出ないとの原則が確認され、同時に玄宗帝の宗廟(太廟)祭祀にあつたように、皇帝の意向に沿って儀注を変更し廟内に「齋宮」を設けることもあり得たことが明らかにされている。「齋宮」は必ずしも一律に固定化されたものではなかったのである。

いま時代差を無視して列挙すれば、(ア) (エ)に掲げた記事の多くは、東郊の齋宮(藉田)、泰山の齋宮(封禪)、河東の齋宮(汾陰后

土祠)、南郊の齋宮(祀田丘)、北郊の齋宮(祭皇地祇)、あるいは鄴城内の齋宮(祭密皇后廟)など、いずれも皇城内の宗廟(太廟)祭祀とは違い、京師宮城外部に祭場が設けられていた事例である点に、自ずと「齋宮」設置の基本的な前提が見て取れる。

すなわち、皇帝親祀のとき、宮城外に設定された「行宮」^二「齋宮」は事前に祭場のある土地まで赴いて齋戒等に備えるとか、またはその齋戒の最後の一日を修すべく前日のうちに祭場内(ないし隣接地)に赴く必要性にでており、廟祭のように皇城内の比較的近距離にあつておこなう祭祀では、原則として齋戒場所は正殿を出ることはなく、従つて通常は別途「齋宮」を準備する必要はなかったのである。

貴嬪密皇后廟(k)のように、廟戸十家のほか、その「齋宮」に三十人もの人員を配置していたことを示す記事もあったが、それは北魏太武帝時代の特殊な事例であろう。また、唐代には北郊壇にあつた齋宮を桁行(と解釈した)二十五間の規模に増修している事例などは、当時の「齋宮」の具体的な規模が垣間見える点で貴重だが、北郊壇に「齋宮」が常置されていたことが判る以上の具体的な情報はなかった。

すでに言及したが、上記(ア)～(エ)とは違う状況下に登場する「齋宮」もあったことを再度確認して結びたい。代宗は、「宦官李輔国の尽力で即位(宝応元年)し、ようやく安史の乱を平定(広徳元年)したが、その治世の全期間を通じて乱後の処理」^二に追われたという。ウイグルへの報酬問題や吐蕃の侵入などもあつた(同上)。しかも、『旧唐書』代宗本紀には、治世わずか十七年の間に、不雨・旱天に関する記事を九回、大雨・水災の記事も九回、前後して米価高騰の記事を六回、繫囚放免を含む大赦も六回の記事をのこしている。その他、大疫、蝗害、雹霜・大雪、雷霆、地震、暴風拔樹など様々な自然災害にも見舞われていた。そういう社会情勢のなかで、大暦七年五月乙未に詔を下し、「所以減膳徹樂、別居齋宮、禱于神明、冀獲嘉應(減膳シテ樂ヲ徹シ、齋宮ニ別居シテ、神明ニ禱ル所以ハ、嘉應ヲ獲ンコトヲ冀ヘバナリ)。」^二と云々という。『新唐書』はこの時「以旱大赦、減膳徹樂(早スルヲ以テ大赦シ、膳ヲ減ジテ樂ヲ徹セリ)。」^二と簡略だが、先の詔は「天下ノ諸州、或ハ時雨ヲウシナヒ、首ニ種入ラズシテ、宿麦イマダ登ラズ。」(前掲)と述べており、それが旱魃不登による祈雨であつたことは明白である。大暦十二(七七七)年六月癸巳条にも「時小旱、于齋居祈禱……」(同上)とみえ、代宗は同じように齋居祈禱している。

大旱に際し、民のために祈雨する君主が自らの身体を犠牲にするのは、北魏孝文帝の詔のごとく^二、殷の湯王や斉の景公の故事^二として伝わって来たものである。それが後世になると、臣下の中にも「焚躬祈雨」を実践する者さえあつた^二。この代宗の場合には「梵身」ではなく、「齋宮」に忌み籠もり神明に祈禱したわけだが、案外これは道教の「静室」^二と同じか、またはその影響下に実践されたものだったかも知れない。いずれにしても、この場合の「齋宮」は、場所の特定はできないが、早天下に苦しむ民の窮状を救うべく、皇帝の立場として神明に祈禱するために臨時に設定された清浄な空間であつたと推測される。

以上、中国唐代までの皇帝祭祀における「齋宮」の在りようを駆け足でみてきたが、これを前提にして古代の日本には「齋宮」の語をどのように受容摂取した結果、何が類似し、どこが異なるのかを別章で概観してみたいと考える。

【註】

(一) …金子修一著『古代中国と皇帝祭祀』(汲古書院、二〇〇一年)及び『中国古代皇帝祭祀の研究』(岩波書店、二〇〇六年)が代表的研究で、諸註に所引の

文献等を含め学恩に浴している。

- (二) 近年の時代区分論に関して不勉強だが、例えば、宮崎市定氏の時代区分論では「唐代」は「中世」に区分される（『中国史』上、岩波書店、一九七八年第二刷）、総論二「時代区分論」参照。

- (三) 『周易正義』巻七、第七十頁（通八二頁）上段『十三經注疏』附校勘記、上冊、中華書局、一九九一年第五次印刷所収。竹内照夫著『礼記（中）』（明治書院、一九九〇年一二版）『祭統第二十五』に「其の將に齊せんとするに及びてや、其の邪物を防ぎ、其の奢欲を訖め、耳に樂を聴かず。故に記に曰く、齊する者は樂せずと。敢て其の志を散ぜざるを言ふなり。（略）是の故に君子の齊するや、専ら其の精明の徳を致すなり。故に散斎七日以て之を定め、致斎三日以て之を齊ふ。」（七三五頁）とす。

- (四) 前掲竹内照夫著『礼記（上）』、礼器第十、三六九～三七〇頁。前掲『十三經注疏』下冊所収、『禮記正義』巻二十四、第二百一十一頁（通一四三九頁）下段。因みに『明史』五（中華書局、一九九一年第四次印刷）巻四十七、禮志第二十三には「戒者、禁止其外。齋者、整齊其内。沐浴更衣、出宿外舍、不飲酒、不茹葷、不問疾、不弔喪、不聽樂、不理刑名、此則戒也。專一其心、嚴畏謹慎、苟有所思、即思所祭之神、如在其上、如在其左右、精白一誠、無須臾間、此則齋也。大祀七日、前四日戒、後三日齋。」（洪武二年、朱升らの奉勅撰「齋戒文」という詳細な規制が見える。

- (五) 『北堂書鈔』（中文出版社、一九七九年八月再版）、巻九十、齊戒二十七、四〇〇頁上段。

- (六) 仁井田陞著『唐令拾遺』（東方文化学院東京研究所、一九三三年）、祠令第八、二〇六頁。

- (七) 清水文雄校注『和泉式部集・続集』上（岩波書店、二〇〇九年第十一刷）、五十二頁に「契りしをたがふべしやはいつくしき荒忌真忌清まはるとも」。また観応二（一二三二）年三月の「春宮御輕服間事」にも「散齋者荒忌、致齋者真忌」とある（岩橋小彌太・齋木一馬校訂『園大曆』巻三、続群書類従完成会、一九七一年、四三四頁）。律令研究会編『訳注日本律令六・唐律疏議譯註篇二』（東京堂出版、一九九九年再版）所収、八重津洋平「職制」、一二五頁。「養老令」に散齋致齋を規定する事は周知のとおり（『令義解』吉川弘文館、一九七二年、巻二神祇令、七八～七九頁）。近藤芳樹著『標注令義解稿本』乾（吉川弘文館、増訂故実叢書第三十八回、一九三一年）、巻三、神祇令第六、二三九頁。岡田重精著『齋忌の世界』（国書刊行会、一九九九年）、第一章、二四～二五頁、ほか。

- (八) 吉田賢抗著『論語』（明治書院、一九九四年改訂三三版）、郷黨第十、二二三頁。

- (九) 前掲『十三經注疏 附校勘記』下冊所収、『論語注疏』巻十、第三十八～九頁（二四九四～二四九五頁）。『大唐開元禮 附大唐郊祀録』（汲古書院、一九九三年第三刷）所収「大唐郊祀録」巻第一には「皇帝令式、以絹一匹為明衣、白布一丈四尺為浴巾者也」（七三〇頁）とす。浴巾は「ゆてのごひ」らしい。参考までに、正倉院には聖武天皇の水袴（ふんどし）を蔵すると聞く。幸い、その原寸大複製品（奈良女子大学所蔵）を高岡市萬葉歴史館の特別展示で実見する機会を得た（平成廿四年八月十八日）。

- (一〇) 『隋書』一（中華書局、一九八七年第三次印刷）禮儀志一の「大祀齋官」の例では「皆於其晨集尚書省、受誓戒。散齋四日、致齋三日。祭前一日、晝漏上水五刻、到祀所、沐浴、著明衣、咸不得聞見衰經哭泣。」（巻六・一一七頁）とあり、事前の沐浴・明衣が必須であったことを知る。

(一一) … 先秦時代の前二八三年（趙の恵文王十六年、秦の昭王廿四年）、秦王が趙王の所有する「璧」と「城十五」とを交換したいと持ちかけた。使者の藺相如に璧を持たせて送り出す時、恵文王は「五日間の斎戒」をしている。智謀に長けた相如は昭王に対し「大王におかれましても五日間の斎戒をして、宮廷に九賓の礼をそなえられたならばこの璧を献上しましょう」と応じる（『史記』廉頗藺相如列伝第二十二）。「齋戒五日」が他の祭祀儀礼にも用いられたのか否かもよく判らなかつたので今回は対象外とした（小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝』二、岩波文庫、一九八一年第八刷、五四～七二頁参照）。

(一二) … 『宋史』八（中華書局、一九九〇年第二次印刷）、禮志には「政和四年五月夏至、親祭地于方澤、（略）皇帝散齋七日于別殿、致齋七（三？）日于内殿、一日齋宮。」（二四五頁）、「政和祈穀儀」（略）皇帝散齋七日、致齋三日。（二四五頁）、「感生帝」（略）其祀儀…皇帝散齋七日、致齋三日。（二四六三頁）、「明堂儀…皇帝散齋七日於別殿、致齋三日於内殿、」（二四七七頁）、「籍田之禮、（略）皇帝散齋三日、致齋二日、」（二四八九頁）など見え、次の宋代には大祀親祭では再び前後十日の斎戒になったようである。

(一三) … 金子修一氏前掲書、序章「唐代の大祀・中祀・小祀について」、四頁（初出は『高知大学学術研究報告』第二十五卷、一九七六年所収）。

(一四) … 『梁書』一（中華書局、一九八七年第三次印刷）卷二、武帝本紀（中）、五四頁。

(一五) … 渡邊義浩主編『全譯後漢書 志（二）』（汲古書院、二〇〇五年第二刷）、三〇頁下段、補注（二三）参照。

(一六) … 程樹德著『九朝律考』上冊（台湾商務印書館、一九六五年）卷一、漢律考五、律令雜考下、一六三頁。

(一七) … 『漢書』二（中華書局、一九八三年第四次印刷）、卷十六、高惠皇后文功臣表第四、五四三頁。該功臣表では「中二年、侯勝嗣。」とするが、父の蕭嘉が孝景七（前一五〇）年に卒したので、「中二年」は「中元二年」の「元」字を欠落しているものと考えた。

(一八) … 前掲『漢書』二、同功臣表第四。本文は「二十一年、坐不齋・・」とするが、中元は六年で終わり、「後元」と改元するので中元二十一年はあり得ず、彼が武陽侯を拜し二十一年を経た時に「不齋」による処罰を受けたと解釈した。なお、文中の「耐」はひげをおとす刑である（白川静著『説文新義』巻九、白鶴美術館、一九八五年三刷、一五三頁及び『字通』平凡社、一九九六年、一〇三三頁）。「頬ひげを剃り落とされ隸臣に貶された」（武帝の元朔元年）、としておく。なお、肉刑を廃止したのは文帝十三年の事であったが、軽減された答刑も答数が多く大抵は死亡するのが現実だったようである（前掲『漢書』四、刑法志第三、一〇九九頁。小竹武夫訳『漢書2』、筑摩書房、二〇一〇年第二刷、三九七～三九八頁）。

(一九) … 前掲『漢書』七、卷三十九、蕭何伝、二〇一二頁。

(二〇) … 前掲『漢書』三、卷十九下、百官公卿表第七下、七七六頁。前掲『全譯後漢書 志（二）』では「□充國」として欠字を推定し、かつ沈家本撰『歷代刑法考（三）』（鄧経元・駢宇騫點校、中華書局、一九八五年）の「他に理由があり齋にかこつけて棄市されたのではないか（疑有別故牽連之）」（漢律摭遺卷十九、齋令、一七三三頁）との見解を紹介する。前掲『九朝律考』上冊（二六三頁）にこれを「元狩元年」とするが、根拠を知らず。程氏は唐律職制の「大祀散齋、不宿正寝者、一宿答五十（大祀ノ散齋ニ正寝ニ宿ラザル者ハ一宿ニツキ答五十ス）」をも掲げてくれている点は大変あり難い。

(二一) … 前掲『歷代刑法考（一）』、刑法分考四、一三八～一三九頁。

(二二) … 『後漢書』六（中華書局、一九九一年第五次印刷）、卷四十九、仲長統伝（二六四三～一六五九頁）に現存三篇（理乱」「損益」「法誠」）を転載。現行『昌

言』は玉函山房輯佚書（光緒壬辰湖南思賢書局印行）に収むが、散斎時の宴樂の可否を論じる所は散佚したのか見えない。

- (二三) …彼の伝は前掲『後漢書』列伝第三十九（一六四三～一六五九頁）。次の郗慮が御史大夫を拝したのは建安十三年八月（前掲『後漢書』二、孝献帝本紀三八五頁）、また荀彧伝は列伝第六十（二三八〇～二二九一頁）にそれぞれ収む。いずれも後漢王朝末期の献帝に仕えた人物で、仲長統は献帝が魏王丕に遜位した歳に享年四十一歳で卒している。

- (二四) …『通典』四（中華書局、一九八八年）、卷一四七、学七、三七五六頁。同記事は『文献通考』上冊（中華書局、一九九一年第二次印刷、卷一四八、学二十一、一二九七頁中段～下段）にも所載。前掲『全譯後漢書 志（二）』、三〇頁下段、補注（二三）にも言及がある。

- (二五) …竹内照夫氏前掲書『礼記（中）』、郊特牲第十一、三九四頁。王肅偽撰という『孔子家語』にも同文あり（服部宇之吉校訂『漢文大系廿 淮南子・孔子家語』、富山房、二〇〇四年増補第七刷所収、卷第十、曲礼公西赤問第四十四、二九頁、第十二章）。

- (二六) …前掲『通典』四、卷一四七、学七、三七五六頁。

- (二七) …前掲『後漢書』一一所収、晋・司馬彪撰『統漢書』、禮儀志上、三一〇四頁。

- (二八) …内藤乾吉「唐六典の行用について」（『東方学報 京都』第七冊、一九三六年所収）、一一六～一一七頁、一二三頁、一二八～一三〇頁。

- (二九) …金子修一氏前掲書『中国古代皇帝祭祀の研究』、一三三頁、四二〇頁。

- (三〇) …拙稿「中国の齋宮に関する予備調査」（『齋宮歴史博物館研究紀要三』一九九四年所収）、一五頁。

- (三一) …白川静「詩経に見える農事詩（上）」（『立命館文学』、一三八号、一九五六年十一月所収。『稿本詩経研究』通論篇、一九六〇年第三章再録、後には『白川静著作集（一〇）』平凡社、二〇〇〇年、第三章に収録）。『甲骨文の世界』（平凡社、一九九三年第一九刷）第五章。赤塚忠「殷王朝における「土」の祭祀」及び「殷王朝における上帝祭禮の復元」（同氏著『中国古代の宗教と文化』、一九九〇年復刻版所収）。大嶋隆「耜田考」（『甲骨学』第八号、一九六〇年所収）。木村正雄「耜田と助法」（『東洋史学論集』第三（不昧堂書店、一九五四年所収）、など）。

- (三二) …赤塚忠氏前掲著書、五二九～六一〇頁。

- (三三) …赤塚忠氏前掲著書、五四八～五四九頁。

- (三四) …白川静氏前掲書『甲骨文の世界』第五章、一九七頁（『白川静著作集4』、平凡社、二〇〇〇年再録、一六六頁）。

- (三五) …一九三六年に当時の農林省米穀局から出たもので、原題のまま掲げたことをお断りする。本書を、かつて一志郡嬉野町（現・松阪市）に在った東畑精一記念館にて故・東畑精一氏の旧蔵書中に見つけ、使用させて戴いた。改めてここに謝意を表したい。

- (三六) …坂江涉「古代東アジアの王権と農耕儀礼」（鈴木正幸編『王と公』柏書房、一九九八年、第二章所収）、一七～三五頁。金子修一氏前掲書『中国古代皇帝祭祀の研究』第四章「漢代における郊祀・宗廟制度の形成とその運用」、一四四～一四五頁。

- (三七) …前掲『漢書』一、卷四、文帝紀十三年夏、及び五月条、六月条。賈誼や鼂錯の進言記事は、同書四、卷二十四上、食貨志第四上、一二七～一二三五頁。
- (三八) …范曄（三九八～四四五）は、「以て当時の風政を觀見するに足る」と評価して王符の『潜夫論』から五篇の節録を付す（『後漢書』、中華書局、一九九一年

第五次印刷、卷四十九、列伝第三十九、王符伝、一六三〇～一六四三頁。吉川忠夫訓注『後漢書』第六冊（岩波書店、二〇〇三年）、三七一～三七二頁。その「浮修篇」に「王者以四海為家、兆人為子。一夫不耕、天下受其飢；一婦不織、天下受其寒（王者ハ四海ヲ以テ家トナシ、兆人ヲ子トナス。一夫耕サザレバ、天下ハ其ノ飢ヲ受ケ、一婦織ラザレバ、天下ハ其ノ寒ヲ受クナリ）。とす。『潜夫論』の思想的分析をした日原利国氏は、それを王符の「鬱憤の発露であり、抵抗意識の結晶であろう」と評された（同氏「王符の法思想」『東洋の文化と社会』六、一九五七年所収、五六頁）。

(三九) 大野峻著『国語』上（明治書院、一九八四年）、巻第一、周語上、七三～八〇頁。

(四〇) 『旧唐書』三（中華書局、一九七五年第一次印刷）、巻二十四、禮儀志四、九一三頁。『文苑英華』三（中華書局、一九八二年第二次印刷）、巻四六二、翰林制詔、二三五～二三五七頁。

(四一) 『唐大詔令集』（学林出版社、一九九二年）、巻第七十四、典札、藉田、三七六～三七七頁。

(四二) 王の親耕を「王耕一壠、班三之、庶民終于千畝（王耕して一壠し、班ごとに之を三つにし、庶民千畝を終ふ）」（註三九前掲「周語」上、七六頁）という時の「千畝」である。「藉田千畝」ともいう。

(四三) 司馬遷は「三十九年、戦于千畝、王師敗績于姜氏之戎。」と簡略に記す（『史記』一、中華書局、一九八九年第十一次印刷、巻四、周本紀第四、一四四頁）。

しかし、吉本道雄氏によれば『周語』はこの千畝の役（宣王四十二年・前七八六年）と條の役（宣王三十九年・前七八九年）とを混同したと指摘する（同氏「史記原史―西周期・東遷期―」『古史春秋』第四号、一九八七年所収、七九頁）。なお、「周室の大壞を歌うものは、雲漢において極まる」（白川静著『稿本詩経研究通論篇』一九六〇年、五六七頁。同氏『著作集』十、詩経Ⅱ、平凡社、二〇〇〇年、五九三頁）とされるものだが、その『詩経』大雅の雲漢篇を疏解した孔穎達の「皇甫謐以為、宣王元年、不藉千畝、號文公諫而不聽。天下大旱、二年不雨、至六年乃雨。」（前掲『十三經注疏附校勘記上冊』、通五六一頁上段く中段）には、即ち天下大旱の原因を王の不藉千畝に求める典型的な災異思想の反映がある。錢保塘氏も『帝王世紀續補』（晋・皇甫謐等撰、陸古等點校『帝王世紀・世本・逸周書・古本竹書紀年』濟南齊魯書社、二〇一〇年所収）の七七頁に『毛詩正義』を引く。

(四四) 谷口義介著『中国古代社会史研究』（朋友書店、一九八八年）、第十章、二四五～二四六頁。王承文氏はこれを「戦国初期に整理され成書された」（同氏著、富田絵美訳「漢晉の道教における「静室」と齋戒制度の淵源に関する考察」、渡邊義浩編『中国史の時代区分の現在』汲古書院、二〇一五年所収、一五三頁下段参照）とする見解をとるが、あるいはカールグレンの説の影響を受けたのかも知れない。

(四五) 吉本道雄「国語小考」『東洋史研究』第四十八巻三号、一九八九年所収、二六頁（通四四六頁）。

(四六) 前掲木村正雄氏論文「藉田と助法」、一一五頁。

(四七) 第一部第一章にも少し触れたが、中国における「齋宮」の語は秦漢時代に漸く普及したのではないかというのが、今のところ筆者の懐く感想である。

(四八) 前掲『後漢書』七、卷六十一、黄瓊伝、二〇三四～二〇三五頁。

(四九) 前掲『隋書』一、卷七、禮儀志二、一四三頁。

(五〇) 前掲『旧唐書』巻八、玄宗本紀（二〇二頁）では、同日の藉田儀礼を「（正月己亥）、親耕藉田、上加至九推而止、卿已下終其畝。大赦天下。（略）」として、

異なる表現を取る。

- (五一) : Derk Bodde : *Festivals in Classical China, 1975, Chapter XI: Plowing* では藉田親耕儀礼における足鋤から牽牛犁への変遷も考察しており、足で踏む耒耜から牽牛犁への変換期は「凡そ五八〇年から七三〇年頃の約一世紀半の間」(二三八頁)にあったとした。なお、十八世紀にビルマ(現ミャンマー)のバドゥン国王も親耕儀礼を行ったがやはり牛耕であった(伊東利勝「ビルマ王による親耕の儀」(アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』第三八号、東京外国語大学、一九八〇年所収)。因みに、かねてから「浄梵王の親耕儀礼」はよく言われることだが、卑見では、緬甸仏伝における王の親耕儀礼は、中国皇帝の藉田儀礼を採り入れた結果ではないかと思う。何故なら、少なくとも漢譯による印度の仏伝中に見える農耕描写の場面は、太子の奇跡に重点があるのであり、かつ伝によつては浄梵王が必ずしもその牛耕の場にいる訳ではない。従つて、そこから印度における確実な王の親耕儀礼を特定するのは困難ではないか、との疑念をもち続けているからである(王の親耕が印度プロパーか否かは後考を要す)。

- (五二) : 前掲『旧唐書』卷二十四、禮儀志四、九一二頁に、「太宗貞觀三年正月、親祭先農、躬御耒耜、藉於千畝之甸。(略)初、議藉田方面所在、給事中孔穎達曰：『禮、天子藉田於南郊、諸侯於東郊。晋武帝猶於東南。今於城東置壇、不合古禮。』太宗曰：『禮緣人情、亦何常之有。且虞書云『平秩東作』、則是堯、舜敬授人時、已在東矣。又乘青輅、推黛耜耜者、所以順於春氣、故知合在東方。且朕見居少陽之地、田於東郊、蓋其宜矣。』於是遂定。自後每歲常令有司行事。」とある。「天子は親ら南郊に耕す(略)」「礼記」祭統篇を根拠に、孔穎達が「城東に先農壇を置くのは古礼に合わない」と主張したのに対し、太宗が『書經』堯典にいう「東作ヲ平秩セヨ」とは「則チ是レ堯舜ノ人時(民の時)ヲカゾフルモ、已ニ東ニ在リ。又青輅ニ乘リ、黛耜ヲ推スハ、春氣ニ順フ所以ニシテ、故ニマサニ東方ニ在ルベキヲ知ルナリ。マサニ朕ガ少陽ノ地ニ見居シ、東郊ニ田ツクラントスハ、蓋シ其レ宜シカラン。」と応じ、東郊に藉田することに決着した経緯を知る。加藤常賢著『書經』上(明治書院、一九九三年十一版)、二二〇二三頁、及び註三五前掲『支那歷代親耕親蚕考』、一八三〜一八四頁も参照。

- (五三) : 木村英一氏は「封禪思想の起元は之を先秦に求める事が出来ず」「その説が始めて明かにあらはれるのは始皇帝の時である」と断言している(「封禪思想の成立」『支那学』第十一卷第二号、一九四三年所収、七一頁、七八頁)。

- (五四) : 前掲『旧唐書』卷二十三、禮儀志三(八八八頁)。禮儀志では高宗本紀麟德(乾封)三年(六六八)正月条にある「辛未、御降禪壇」が「其明日・・・為終獻」の中に包摂されてしまったのか日程が合わない。『太平御覽』(卷一一〇)は本紀に拠って記す。

- (五五) : 前掲『旧唐書』卷八、玄宗本紀上、一八八頁。

- (五六) : 『唐会要』上冊(世界書局、民国六十三年・一九七四年)卷八、郊議(一一九〜一二二頁)。前掲『文苑英華』五、卷七七三、頌(四〇七〇頁)の張説「大唐封禪壇頌」に同文あり。

- (五七) : 板野長八「前漢末に於ける宗廟・郊祀の改革運動」(『中国古代における人間観の展開』、岩波書店、一九七二年所収)、五五八〜五五九頁。金子修一氏も「方士主導の呪術的な祭祀から儒教的な祭祀への転換は決して直線的に進行したわけでは」ない事を指摘する(前掲『中国古代皇帝祭祀の研究』、一四五頁)。

- (五八) : 前掲『旧唐書』卷四、高宗本紀、八七頁。同卷二十三、禮儀志三、八八四頁。

- (五九) …前掲『旧唐書』禮儀志三、八八四頁。
- (六〇) …前掲『旧唐書』卷五、高宗本紀下、八九頁。同卷二十三、禮儀志三、八八八頁。
- (六一) …前掲『旧唐書』卷四、高宗本紀、八七頁。
- (六二) …「兗州岱宗ニ至リテ頓リヌ」は高宗本紀(註五八前掲)の「至泰山頓」(八九頁)と同じ。湯沐之邑と関わるかも知れないが、兗州(長安の東千八百四十三里)泰山麓には皇帝の行宮即ち宿宮施設があつたのである。隱公八年三月条の公羊伝に「天子が泰山で祭祀をするとき、諸侯はみな泰山の下に従つた。(そのため)諸侯はみな湯沐の邑をもつていた」(岩本憲司著『春秋公羊伝何休解詁』汲古書院、一九九三年、五四二頁)。なお「天子の郊に皆朝宿の邑あり」との説には許慎らに反駁がある(陳壽祺撰『五經異義疏證』上海古籍出版社、二〇一二年、一五八―一五九頁)。
- (六三) …古典研究会『大唐開元禮 附大唐郊祀錄』(汲古書院、一九九三年第三刷)、三二八―三二九頁。
- (六四) …前掲『旧唐書』卷九十七、列伝四十七、張説伝(三〇四九―三〇五七頁)。「新唐書」(中華書局、一九七五年)、卷一二五(四四〇―四四一〇頁)。
- (六五) …前掲『旧唐書』張説伝、三〇五四頁。「献可替否」は『春秋左氏伝』昭公二十年の「君所謂可而有否焉、臣獻其否、以成其可、君所謂否而有可焉、臣獻其可、以去其否。」(又は『国語』卷十五「周語」九も)を典拠とし、「献君否以成君可也(君ノ否ヲ献ジテ以テ君ノ可ト成ス)」「(杜預)の謂で用いられ、次第に約めて「献替」でも通行した。例えば後漢荀悦伝に「悦志在献替」(『後漢書』卷六二)とある如き。その他枚挙に暇のないほどだが、前掲『旧唐書』文宗本紀太和五年四月丁亥条にも「献替」の語は見える。それは高宗の時に起居注の欠を補う名目で生まれた「時政記」がその後廃され、詔勅が度々下されるもなかなか実行されず、文宗がその撰修復活を命じた詔に用いられた(詳細は玉井是博著『支那社会経済史研究』、岩波書店、一九四二年所収「唐の実録撰修に関する一考察」、四一五―四二八頁を参照)。日本でも「職員令」「考課令」をはじめ、『三代格』卷十七(鑄免事、弘仁十一年正月六日)や『日本後紀』卷三十二(逸文・天長元年九月壬申条「献可」)或は『三代実録』卷七(貞観五年正月十九日条・「賀陽親王上表」文)、「貞慧伝」(『続々群書類従』第三、史伝部、一九八五年第四刷所収、四二六頁下段)、『本朝世紀』第三十一、久安二年十月四日条(新訂増補国史大系9、吉川弘文館、一九六四年)、五〇一頁、『法曹類林』(第二百・公務八に「職員令」を引き「献替」を用う)等々、その影響をみる(かつて拙稿「魏臣断鞅孜」『叙説』第三七号、奈良女子大学国語国文学会、二〇一〇年所収)に初歩的な考えを記したが、既に部分改訂の要を生じている)。
- (六六) …静室は「道教徒が神々に祈りを捧げ、懺悔告白を行なうところの施設ないしは空間」である(吉川忠夫「静室考」『東方学報・京都』第五九冊、一九八七年所収、一二六頁)。王承文氏によれば『祇祓』や「滌濯」は、皇帝が神靈に対して敬意を示すために行う齋戒沐浴を指す。漢魏六朝から隋唐時代にかけて、道士たちは齋戒を行い道を修めるのに「静室」を専ら利用していたが、(略)「齋宮」や「齋室」は「静室」と共通する意味をもつ。』という(註四四同氏前掲論文、一五五頁上段―下段)。
- (六七) …窪徳忠著『道教史』(山川出版社、一九七七年)第四章「道教教団の発展」、一二三頁ほか。金子修一氏前掲書第七章、3「大清宮の出現」三五六頁。
- (六八) …南北郊祀に関しては、南郊と円丘とは別の祭場とする鄭玄説、同一とする王肅説の問題がある。詳細は金子修一氏前掲書(二〇〇六年)、四一―五八頁を参照。(ウ)に所掲の三件(g-i)には感生帝を祀る南郊の事例はない。

(六九) …『漢書』一 (中華書局、一九八三年第四次印刷)、卷八宣帝紀、二六六頁。後漢・荀悅撰『前漢紀』(四部叢刊正篇、台灣商務印書館)、前漢孝宣皇帝紀四卷第二十、六葉右(二四二頁下段右)にも同文あり。他に黃暉撰『論衡校釋』(三)(台灣商務印書館、一九六四年)、卷十九・宣漢篇、八二二頁。『玉海』6 (江蘇古籍出版社、一九九〇年第二版)、卷一百九十五、瑞祥、神光、三五八八頁など参照。なお、右掲『玉海』3 (卷九四、郊祀、一七一六頁上段)では甘露二年三月に「神光燭耀齊宮」とするが本紀には合わず。

(七〇) …『魏書』八 (中華書局、一九九二年第四次印刷)、卷一〇八之一、禮志一、二七四九頁。

(七一) …前掲『唐会要』卷十上、二二二頁。

(七二) …小竹武夫訳『漢書』一帝紀(筑摩書房、二〇一〇年第三刷)、二五七頁に拠る。

(七三) …前掲小竹武夫氏の日本語訳に従い、その意味を損なわぬよう訓読を試みた私案である。

(七四) …元康二(前六四)年の夏に雍に、同三年春には泰山に、それぞれ神爵が集まるなど瑞祥があったため、宣帝は元康五年を以って神爵元年と改元している。

(七五) …前漢では武帝の太初元年五月まで十月歳首であった。前掲『漢書』一(卷六武帝紀)、一九九頁。藪内清著『中国の天文暦法』(平凡社、一九七三年第二刷)、八頁及び二八一頁。同氏著『歴史はいつ始まったか』(中央公論社、一九八〇年)、八〇頁。中村喬著『中国歳時史の研究』(朋友書店、一九九三年)、三九九頁。

(七六) …以上は前掲『漢書』一、卷六武帝紀、一八三〜一八四頁及び一九四頁、二〇七頁に拠った。なお、金子修一氏の「中国―郊祀と宗廟と明堂及び封禪」(東アジア世界における日本古代史講座9『東アジアにおける儀礼と国家』、学生社、一九八二年所収)所掲の第一表「前漢の郊祀」は至便である。

(七七) …『史記』(中華書局、一九八九年)卷二十九、河渠書第七、一四二〜一四一三頁。前掲『漢書』一、卷六武帝紀、一九三頁。同『漢書』四、卷二十二、礼楽志第二、郊祀歌十九章(二〇六五頁)。

(七八) …註四〇前掲『文苑英華』卷八七、賦、三九五頁。

(七九) …『梁書』一 (中華書局、一九八七年)卷三、武帝本紀(下)、九十一頁。太清元年(五四七)正月辛酉条。「輿駕親祠南郊、詔曰…「天行彌綸、覆燾之功博、乾道變化、資始之德成。朕沐浴齋宮、虔恭上帝、祗事禋燎、高燹太一、大禮克遂、感慶兼懷、思與億兆、同其福惠。可大赦天下、尤窮者無出即年租調(略)。」(因みに梁武帝は正月上辛に親祠南郊を、二月に躬耕籍田を行うことが比較的多かった)。前掲『梁書』卷五、元帝本紀(二二七頁)、大寶三(五五二)年(太清六年)三月己丑…「王僧辯等又奉表曰…(略)況郊祀配天、疊篋禮曠、齋宮清廟、匏竹不陳、仰望變輿、匪朝伊夕、瞻言法駕、載渴且飢、豈可久稽衆議、有曠彝則! (略)」とみえる。

(八〇) …わが『日本後紀』(卷二十一、弘仁二年七月庚子条)所載、藤原朝臣真雄卒伝中に見える「蓋魏臣断鞅之志乎」との表現は、太和十七年に南伐と称して決行された洛陽遷都における故事に基づくものであったことを既に明らかにしている(前掲拙稿「魏臣断鞅孜」、二〇一〇年参照)。なお、この遷都には五世紀の中国北部地方を襲った寒冷気候による大規模な災害(大旱と飢饉牛疫など)も大きな要因としてあった(葛全勝等著『中国歴朝氣候変化』、科学出版社、二〇一〇年、二六二〜二六三頁、二九二〜二九四頁)ことを、前の拙稿公表時には逸しているの(ここに付言しておきたい)。

(八一) …『アジア歴史事典』8 (平凡社、一九七一年七版)、二〇七頁「平城」の項。

(八二) …鄧道元著、陳橋驛校證『水經注校證』(中華書局、二〇〇七年) 卷十三(三二二～三一五頁)。北魏平城の往時の様子は、小林知生「東亜考古学会北魏平城址調査概報」(『考古学雑誌』二九卷十号、一九三九年所収)、水野清一著『雲岡の石窟とその時代』(創元社、一九五二年)、岡村秀典編『雲岡石窟 遺物篇』(朋友書店、二〇〇六年)、向井佑介「北魏の考古資料と鮮卑の漢化」(『東洋史研究』六八卷三号、二〇〇九年所収)、同氏「北魏平城時代における墓制の変容」(『東方学報・京都』第八五冊、二〇一〇年所収)等を参照(水野氏の著書は故・森鹿三氏旧蔵書を使用させて戴いた、記して感謝申し上げる)。

(八三) …前掲『魏書』一、卷七下、高祖本紀、一六四頁。同書禮志(二七四頁)は「閏月甲子」を「閏九月」に作り、「帝親築」を「帝親築」とす。『冊府元龜』(中華書局、一九六〇年)は「閏九月甲子帝親築圓丘於南郊」(卷三三下、帝王部、三五四頁上段)とす。金子修一氏は「閏十月甲子」とする(同氏前掲書二〇〇六年、第一章「魏晉南北朝における郊祀・宗廟の制度」、五一頁)。「三正綜覽」の「閏十月丁丑朔」に従うと、月内に「甲子」は廻って来ない。今、陳垣氏の『二十史朔閏表』(董作賓增補、藝文印書館、民国六十年、一九七一年、七〇頁)によれば、北魏太和十二年は「閏九月丁未、十月丁丑」で、「閏九月甲子」は十八日に当たる。近年の『二十五史千支通檢』上冊(陝西出版集團 三秦出版社、二〇一一年、二五四頁)も「閏九月甲子十八日」を採る一方、大同古城保護和修復研究会編『北魏平城分類記事』(山西出版傳媒集團・山西人民出版社、二〇一五年)では「閏十月十八日」(二七五頁)としていて一定しない。

(八四) …前掲『魏書』一、卷七下、高祖本紀、一六四～一六五頁。

(八五) …前掲『旧唐書』二、卷十一、代宗本紀、二六七頁。

(八六) …前掲『旧唐書』卷十一、代宗本紀、三一〇頁。

(八七) …葛全勝 等著『中国歴朝氣候変化』(科学出版社、二〇一一年)、第八章第二節「干湿変化」、三一四頁。隋唐時代を通して、四回ある湿潤期の間に挟まれた三回の干早期があり、西暦七六〇年から八〇〇年はその二番目の、八三〇年から八七〇年は三番目の干早期に当たるといふ。新・旧唐書本紀に「旱・不雨」の記事は、寶應元年八月、永泰元年春夏、七月(二回)、永泰二年六月、大曆六年春、八月、七年十月、九年七月、十二年正月、六月等に見える。

(八八) …前掲『旧唐書』卷十一、代宗本紀、三〇〇頁。帝崩御の大曆十二年六月癸巳にも「上齋居祈祷」とあり(三二二頁)、明記はないがやはり「齋宮」に齋居祈祷したものと解され、その種の「齋宮」もありえたことは留意すべきである。

(八九) …楊寬著『中国歴代尺度考』(商務印書館、一九五五年重版)、七六頁、一〇〇頁。

(九〇) …前掲『史記』一、卷六、始皇本紀第六、二七五頁。

(九一) …前掲『魏書』八、卷一百八之一、禮志一(二七五一頁)。

(九二) …前掲『旧唐書』三、卷二十五、禮儀志五(九五二頁)。

(九三) …前掲『史記』卷八十七李斯列伝第二十七・二五六三頁には「與宦者韓談及其子謀殺高。(略)、令韓談刺殺之(宦者ノ韓談及び其ノ子ト高ヲ殺サント謀ル。韓談ヲシテ之ヲ刺殺セシメタリ)」とみえる。『資治通鑑』卷八(秦紀三・二世皇帝三年)、『太平御覽』卷八十六(皇王部十一、秦王子嬰)等にも本紀と同

文あり。

- (九四) …前掲金子修一氏『中国古代皇帝祭祀の研究』、一五五頁。
- (九五) …新訂増補国史大系『続日本紀』前篇(吉川弘文館、一九七二年)、卷九、神龜元年十一月己卯条(二〇二頁)。『本朝世紀』第廿五、近衛天皇の康治元年十一月十五日癸卯条にも踐祚大嘗祭の記事があり、聖武の時と同様に「石上・榎井両氏が物部を率いて大嘗宮の南北門に神楯神杵を立てる」とあるので、神龜元年十一月己卯条の「斎宮」が「大嘗宮」である事が証される(国史大系9、吉川弘文館、一九六四年、四〇〇頁参照)。
- (九六) …この洛陽遷都の経緯は『資治通鑑』(卷一三八)や岡崎文夫著『魏晉南北朝通史』(弘文堂書房、一九四三年三版)内篇第三章(三六一頁以下)に詳しい(東洋文庫五〇六、平凡社、一九八九年復刻さる)。
- (九七) …前掲『魏書』一、卷四上世祖紀、六九頁。同書二、卷十三皇后列伝、三二六頁。
- (九八) …前掲『魏書』八、卷一百八之一、禮志一(二七五―二七五二頁)。
- (九九) …金子氏前掲書、第七章「唐代における郊祀・宗廟の運用」、三四七―三五〇頁。
- (一〇〇) …前掲『旧唐書』一、卷八、玄宗本紀上、一七八頁。
- (一〇一) …前掲『旧唐書』一、卷八、玄宗本紀上、一七九頁。
- (一〇二) …金子氏前掲書、第七章、三四七―三四八頁。
- (一〇三) …金子氏前掲書の註四七に引用の「冊府元龜」と同文ゆえ、同氏の訓読(四二〇頁)に従った。なお「五日起行宮宿齋」の「行宮」は「斎宮」のこと。『大唐開元禮』は「斎宮」を使わず「行宮」で統一表記している。
- (一〇四) …『宋史』八(中華書局、一九九〇年第二次印刷)、卷一〇八、禮志十一、元豐六年十一月(二五九五頁)。清朝でも乾隆九(二七四四)年五月、地壇方澤に大祀した高宗(乾隆帝)がやはり「輦に乗らず、鹵簿を設けず」に祭場へ赴いたことが『清史稿』(卷十二高宗本紀)や『皇朝文献通考』(卷九十五)に見える(前掲拙稿「中国の斎宮に関する予備調査」、九頁)。
- (一〇五) …『太平御覧』(中華書局、一九六三年第二次印刷)、卷二百二十六、官職部二十四、一〇七三頁。
- (一〇六) …前掲『漢書』四、卷二十三、刑法志第三・一一〇二頁。及び同書卷五十一、傳第二十一路温舒傳(二二六八―二二七一頁)。前掲小竹武夫氏訳注『漢書』2、三九九―四〇〇頁、及び同書5、一一六頁―一二〇頁に依拠。なお、「宣帝幸宣室、齋居而決事」は『晋書』卷廿四(七三八頁)にも見える。
- (一〇七) …保科季子「前漢後半期における儒家礼制の受容」(歴史と方法編纂委員会編『方法としての丸山真男』青木書店、一九九八年所収)、二二七―二三五頁。
- (一〇八) …前掲小竹氏訳注『漢書』5、伝第二十一、一一六頁を参照した。
- (一〇九) …前掲小竹氏訳注『漢書』2、刑法志第三、四〇〇頁。
- (一一〇) …律令研究会編『譯註日本律令八』唐律疏議譯註篇四(東京堂出版、一九九六年)、三三二―三三五頁。戴炎輝著『唐律各論』國立臺灣大学法学院事務組、三民書店、一九六五年、三二〇―三二二頁。桓寛『塩鉄論』卷十、詔聖第五十八にも「春夏生長、聖人象而為令。秋冬殺藏、聖人則而為法。…」と

す（王利器校注『鹽鐵論校注』増訂本下、天津古籍出版社、一九八三年、六一〇頁。佐藤武敏訳注『塩鉄論』平凡社、一九九四年第十刷、二七九頁）。伊藤東涯著、礪波護・森華校訂『制度通』2（平凡社東洋文庫、二〇〇六年）、卷十三、二七〇頁。

- (一一一)：前掲『漢書』卷六十五、東方朔伝（二八五六頁）に「夫宣室者、先帝之正處也、非法度之政不得入焉。」とす。前掲小竹氏訳注『漢書』6、伝第三十五、二三頁。

- (一二二)：何寧撰『淮南子集釋』中（中華書局、一九九八年）、卷八、本經訓、五八〇頁。

- (一二三)：前掲『後漢書』九、卷七十九下、儒林列傳第六十九下（二五七八～二五七九頁）、前掲吉川忠夫氏訓注『後漢書』第九冊、列伝七（三二一～三三四頁）。他に、司馬彪撰『統漢書』（王文臺輯『七家後漢書』、文海出版社、中華民國六十一年、一九七二年所収）卷五、周澤傳（四六九頁）。劉珍等撰・吳樹平校注『東觀漢記校注』下（中華書局、二〇〇八年）、卷十八、傳十三「周澤」（八三六～八三七頁）、及び王先謙撰『後漢書集解』下（中華書局、一九九一年第二次印刷）、九〇二～九〇三頁など。

- (一二四)：早川光三郎著『蒙求』上（明治書院、二〇〇二年十七版）「澤室犯齋」（五一三～五一四頁）

- (一二五)：武部利男訳『李白』（世界古典文学全集二七・筑摩書房、一九七二年）、四一～四二頁。因みに、この武部氏訳による『李白』（同上）では「日日酔うて泥の如し」の「泥」を「ドロ」と訓んでいるけれども、これは南海に棲む「デイ」という蟲の名であり、所謂「ドロ」ではない。余談だが、『論語』子張篇の子夏の言葉に「致遠恐泥」とある「泥」の場合は「なずむ」で本例とは別。吉田賢抗氏はそれを「泥土に足をふみ入れたように、ぬきさしならぬこと」（同氏著『論語』、明治書院、一九九四年改訂三三版、四一七頁）とする。蔡邕が靈帝に差出した封事にも引用されている（前掲『後漢書』七、列伝第五十下、一九九七頁）。

- (一二六)：前掲吉川忠夫氏訓注『後漢書』第九冊、二三一頁、注十二に拠る。

- (一二七)：光祿勳らと並ぶ漢代九卿（大臣）の一つ。秦の官で奉常といい宗廟禮儀を掌った。漢は景帝中の六年に名を太常と改めた（前掲『漢書』三、卷十九上、百官公卿表第七上、七二六頁）。前掲『後漢書』十二（司馬彪撰統漢書）、志第二十五「百官二」には「禮儀祭祀を掌る。祭祀の毎に、先ず其の禮儀を奏し、行事するに及びては、常に天子を贊く。」（三五七一頁）とする。

- (一二八)：『資治通鑑』一（中華書局、一九七一年重印）卷四十五、漢紀三十七、一四五四頁、永平十四年春三月条。楚王英（光武帝の子）の謀を司徒の虞延に告げる者があつたが、英が天子一門の近しい親族であるが故に、延は取り上げなかった。英の謀反が発覚するに及び、延を深く責める詔が下ると、永平十四年三月甲戌、司徒虞延は自殺。それで周澤がその闕を埋めて司徒をかねた。考異に「十二年には司徒に欠員なく、それは虞延の免職以後、後任の邢穆が着任するまでの間ゆえ、数月というのである。」と（前掲王先謙『集解』や清惠棟『後漢書補注』は虞延を賈延に作る）。

- (一二九)：前掲吉川忠夫氏訓注『後漢書』第九冊、二三四頁、注二に拠る。

- (一二〇)：前掲吉川忠夫氏訓注『後漢書』第九冊、二三四頁。

- (一二一)：最晩年までご指導を賜った恩師故・内田吟風先生からの私信（平成十一年四月二十日消印）で、周澤伝についても「忠告を戴いた。コレハ沢を笑ツタ

ノデ、コレデ太常ガ年中齋シタ制度アリシトハ言ヘヌ」由、特に朱書きされてあったのを有り難く拝読した。以て深甚の謝意を表したい。

- (一一二) … 應劭撰『漢官儀』(王雲五主編、叢書集成簡編、台灣商務印書館、一九六五年所収)、卷上、八頁。前掲『後漢書』九、列伝第六十九下、二五七九頁。また、前掲司馬彪撰『続漢書』卷五、四六九頁。徐蜀選編『二十四史訂補』第四冊(書目文獻出版社、一九九六年)所収、清姚之駟輯・会稽徐氏抄本『後漢書補逸』卷十八「司馬彪統漢書第八」(二四二～二四三頁)。早川光三郎氏が「これを『どろの如し』とよく訓み誤る」と注意している(前掲『蒙求』上、五一四頁)。

- (一一三) … 『群碎録』(享保六年仲夏、杉生五郎左衛門開梓)による(和刻本漢籍隨筆集第二集、汲古書院、一九七二年所収、三一九頁)。また前掲『後漢書補逸』卷十八・二四三頁(南海を東海に作る)。前掲早川光三郎氏著『蒙求』上、五一三頁。

- (一一四) … 汝南の呉蒼が矯慎へ宛てた書中に「雖乘雲行泥、棲宿不同、・・」と。前掲『後漢書』一〇、列伝第七十三、二七七一頁。前掲吉川忠夫氏訓注『後漢書』第九冊、五六五頁参照。

- (一一五) … 『日本文徳天皇實録』(吉川弘文館、一九八四年)卷十、天安二年六月己酉條の大学助山田連春城卒伝(二一八頁)に「古人猶泥」、また『玉葉』文治三年八月二日庚午条には「末代人(事?)毎ニ泥ノ如シ、悲シムベシ悲シムベシ」、同九月十八日丙辰に「内侍ハ又モ遅參ス、事毎ニ泥々」。また「事毎ニ泥ノ如シ、有レドモ亡キガ如シト謂フベキ歟。」など(高橋貞一著『訓読玉葉』第七卷、高科書店、一九九〇年、一三頁上段、三三頁上段、三六頁上段)。「明月記」第一(国書刊行会、一九一一年)、百十三頁上段、正治元年九月十二日条にも定家は「抑件女房雖有如泥尾籠(抑も件の女房にはデイの如きをこ有るといへども)」と記して、女房のなかに「箸にも棒にも掛からぬ戯けもの」のいる事を嘆いている。

- (一二六) … 貞和四年十月廿七日には儲皇(東宮)崇光院の元服の儀もあつたが、「御元服儀畢、還御本殿、行啓供奉人以下毎事泥々、(中略)就中御查不相儲云々、懈怠之至、不可説也(御元服ノ儀ヲハリテ、本殿ニ還御ス、行啓ノ供奉人以下事毎ニ泥泥ナリ、(中略)就中、御查ヲ相儲ケズト云々、懈怠ノ至リ、説クベカラザル也)」(岩橋小弥太・斉木一馬校訂『園太暦』卷二、続群書類従完成会、一九七一年、四七三～四七四頁)と洞院公賢の憤懣やる方ない筆致である。「如泥」ではもはや言い足りぬ程の懈怠極まりない様体を前掲『玉葉』(九月十八日条)と同様に「泥々」と表現した。いずれも「ドロドロ」と訓んでは興醒めで、飽くまでも「デイデイ」と訓み、遅くとも十二世紀後半以降十四世紀半ば頃までに新たな日本語としての進化の跡をみる。

- (一二七) … 高橋貞一著『訓読玉葉』第七卷(高科書店、一九九〇年)には、「末代每人泥の如し。悲しむべしかなしむべし。」(二三頁)との個所もある。

- (一二八) … 金子修一「唐代皇帝祭祀の親祭と有司撰事」(前掲『中国古代皇帝祭祀の研究』所収、一二二～一二六頁)。

- (一二九) … 『晋書』四(中華書局、一九九一年第四次印刷)、卷四十五、劉毅列伝、一二七三～一二七七頁。宮崎市定著『九品官人法の研究』(同朋舎、一九七四年第二版)、一六一～一六八頁。

- (一二〇) … 前掲『晋書』四、卷四十五劉毅伝、一二七七頁。武帝は毅が忠誠心を以て直言できる人物ゆえ諫官を掌らしめたが(一二七二頁)、太康六年に卒すると「吾が名臣を失えり、生きて三公となすを得ず!」と嘆き、儀同三司を贈った(一二七九頁)という。なお、安帝時代に逆臣桓玄らを討って活躍した劉毅(列伝第五十五)とは同姓同名の別人である。

- (一三二) … 古典研究会叢書漢籍之部に収められた静嘉堂文庫原本所蔵、神鷹徳治・山口謠司解題『白氏六帖事類集(三)』(汲古書院、二〇一二年)、卷二十、齋第十四、六九頁。
- (一三三) … 前掲『晋書』四、卷四十五、劉毅伝、一二七七頁。
- (一三四) … 前掲『東觀漢記校注』下、八三六頁。この齋舎が道教で言う静室や精舎・静舎などの影響を受けたか否かは判らないが、独立した建物である事は間違いないであろう。
- (一三五) … 前掲『譯註日本律令』六、唐律疏議譯註篇二、一二四～一二六頁。註四前掲『明史』五、卷四十七、禮志第二十三所掲の「齋戒文」参照。日本でも弘仁二年二月六日の格に「其散齋之内。不得弔喪問疾食宐。不判刑殺。不決罰罪人。不作音楽。不預穢惡之事。」と太政官が通達している(新訂増補国史大系『類聚三代格』前篇、吉川弘文館、一九八三年、卷一・祭幣事、一八頁)。他にも例えば、天野信景の随筆集『鹽尻』下卷(国学院大学出版部、一九一〇年)、卷五十七(一〇七頁)なども「太神宮六色の禁忌として「不吊喪、不聴言、不聞樂、不行姪、不食魚鳥并葷、不飲酒」を掲げている。
- (一三六) … 日比野丈夫著『華麗なる隋唐帝国』(図説中国の歴史4、講談社、一九七七年)、一四九～一六三頁「唐帝国の解体」。外山軍治著『顔真卿』(創元社、一九七八年第六刷)、八三～一四頁。宮崎市定著『中国史』上(岩波書店、一九七八年第二刷)、二三七～二九二頁「唐」、及び同氏著『大唐帝国 中国の中世』(中央公論社、一九九五年五版)、三八〇～三九九頁、など参照。
- (一三七) … 前掲『旧唐書』卷十一、代宗本紀、二九九～三〇〇頁。
- (一三八) … 『新唐書』(中華書局、一九七五年) 卷六、代宗本紀、一七六頁。
- (一三九) … 前掲『魏書』一、卷七下、高祖本紀、太和一五年四月乙丑詔(二六八頁)。
- (一四〇) … 藤田劍峯訳註『晏子春秋』(国民文庫刊行会、一九二四年再版) 卷一、「内篇諫上第一」、二〇頁。新編諸子集成第一輯『淮南子集釋』下(中華書局、一九九八年)、附録二「淮南子逸文」、一四九六頁、にそれぞれの故事を録す。本朝弘仁四年五月丙子勅にも「禹水九年人無飢色、湯旱七歲民不失業」(後紀逸文)と諸国の史を戒めている。隋代にも司隸臺管轄下の巡察史には水旱蟲災時における虚偽報告を検察する必要があつたが(隋書百官志下)、わが嵯峨朝でも国司らの解文に不実報告があり(弘仁十年五月二日太政官符)手を焼いていたからである。
- (一四一) … 前掲『後漢書』九、列伝七十一、諒輔伝(二六九四頁)。前掲吉川忠夫氏訓注『後漢書』第九冊、四二六～四二七頁。神仙を好んだ武宗会昌中にも晋陽令狄惟謙の「焚躬祈雨」がある。『劇談録』(中華書局、叢書集成初編、一九九一年所収) 卷上、四八～五三頁。『太平廣記』(中華書局、一九八一年第二次印刷) 卷三九六(三一六六～七頁)に『劇談録』を引く、周勳初校證『唐語林校證』(中華書局、一九八七年) 卷一(七六～七七頁)、劉大鵬遺著『晋祠誌』(山西人民出版社、一九八六年) 第十八卷(四七一～四七三頁) 参照。
- (一四二) … 吉川忠夫氏前掲論文「静室考」(一九八七年)、一二六頁。王承文氏前掲論文・富田絵美訳「漢晉の道教における「静室」と齋戒制度の淵源に関する考察」(二〇一五年)

第二部：「齋宮」の日本的受容と展開

すでに第一部「中国古代の齋宮の特質」において、中国古代における民間祭祀や皇帝祭祀に登場する「齋宮」の実情を概観してきたところである。中国における様々な祭祀にも祭前の齋戒は必須であり、時代に応じて変遷もあるが、齋戒の一定期間内においてその最終段階に利用される、あるいはされ得る潔斎空間に資する施設の一つが「齋宮」であり、基本的にはそれ以外の意味を見出す事はなかった。そういう中国独自の祭祀関係の用語がいつ、どのようにして（又は何を通じて）、わが国にもたらされたのかは今後に改めて究明も必要だが、ここではまず、わが国の六国史の筆頭に位置する『日本書紀』において、「齋宮」という漢語はどのような意味において使用されているのか、換言すれば、わが国の初期正史のうえに「齋宮」の用語はいかに摂取・受容され、また展開したのか、その事例を改めて整理しておきたい。

第一章 『日本書紀』に見える齋宮とその意味

一．はじめに

一九七八年度の藤原宮跡発掘調査で出土した木簡中の一つに、「伊都支宮奴婢□」と読める墨書があった^①。後代、源順が編纂し承平年間（九三一～九三八）に成ったという『和名類聚抄』（五・職官、職員令）にも「齋宮」を「以豆岐乃美夜」と訓じており、わが国にはそれが定着していたことがわかる。和訓「いつきのみや」あるいは「いはひのみや」に当てた漢語「齋宮」が「神祇」、「地祇」、「神宮」、「神社」、「天皇」、「皇后」などといった多数の語とともに、中国の漢籍などに伴ってもたらされた輸入漢語の一つであることは夙に周知の事実である^②。

わが国古代に外来漢語であったこの「齋宮」は『古事記』には登場せず、それが最初に現れるのは『日本書紀』垂仁二十五年三月丙申条である^③。近時、森博達氏によってなされた『日本書紀』成立区分論にあつては、その垂仁紀（巻六）はベータ（β）群に属すとされている。そして、そのβ群（森氏によれば巻一～十三・巻二十一、二十三、巻二十八、二十九をさす）は「文武朝になって山田史御方が倭音・和化漢文で撰述し」^④、元明朝に至って三宅臣藤麻呂が「漢籍による潤色などを加えた」（同上）ものであったという。こういう指摘は大変重要なもので、それまでの成果も踏まえつつ、大いに活用されるべき研究成果の一つと受け止めている。

この垂仁紀を初見として『書紀』には計五か所（垂仁紀二十五年・神功紀九年・天武紀二年と三年、および七年）に「齋宮」の語は登場するが、いわゆる「伊勢齋宮」の表記は一例もなく、五例すべてがまったく同一の意味内容で用いられているというわけでもない。すでに国文学者の故・西宮一民氏が明らかにされたように^⑤、中国とは異なりわが国の古代においては、「齋宮」の語は複数の訓義において用いられたからである。しかも、期せずしてそれら五例の「齋宮」の語はいずれも森氏のいうβ群の諸巻に属している。となれば『書紀』撰述の最終段階、つまりすでに「伊勢大神宮」や「伊勢齋宮」の存在も当然知られていたはずの文武朝以降の時期において、『書紀』の撰述者やその関係者は

複数の訓義をもつて「齋宮」という語を使用していたのである。このような認識あるいは言語事情は、少なくとも⑤、次の『続日本紀』巻九の撰述段階くらいまでは続いていたのではないか、と今は予想している。聖武天皇の神龜元年十一月己卯条に見える踐祚大嘗祭の「齋宮」記事⑥はその一例証であろうと思う。「大嘗宮」すなわち「齋宮」を本稿は西宮氏の説に依拠して「イハヒノミヤ」と訓んでおきたい。

さて、これまで『書記』に登場する上記五か所それぞれの「齋宮」の意味について、その解釈にはなお一定せぬ部分もあるので、まずはその語彙上の解釈に関する卑見を述べることから始めたい。

二・『日本書紀』に見える「齋宮」

最初に五例すべてを列挙しておく。（本文は訓み下し文をふくめ、岩波書店刊行の日本古典文学大系本『日本書紀』に依拠した。なお、それぞれの条文ごとに本書上・下巻の区別と巻数、およびそれが掲載された頁数とを示した。）

(a) 垂仁紀二十五年三月丁亥朔丙申条…(上・巻第六、二七一頁)。

「(略) 故随大神教、其祠立於伊勢国。因興齋宮于五十鈴川上。是謂磯宮。則天照大神始自天降之處也。(略)」(故、大神の教の随に、其の祠を伊勢国に立てたまふ。因りて齋宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります處なり。)

(b) 神功紀九年春二月・三月条…(上・巻第九、三三一頁)。

「時皇后傷天皇不從神教而早崩、以為、知所崇之神、欲求財寶國。是以、命群臣及百寮、以解罪改過、更造齋宮於小山田邑。三月壬申朔、皇后選吉日、入齋宮、親為神主。則命武内宿禰令撫琴。喚中臣烏賊津使主、為審神者。…」(時に皇后、天皇の神の教に従はずして早く崩りたまひしことを傷みたまひて、以為さく、崇る所の神を知りて、財宝の国を求めむと欲す。是を以て、群臣及び百寮に命せて、罪を解へ過を改めて、更に齋宮を小山田邑に造らしむ。三月の壬申の朔に、皇后、吉日を選びて、齋宮に入りて、親ら神主と為りたまふ。則ち武内宿禰に命じて琴撫かしむ。中臣烏賊津使主を喚して、審神者にす。)

(c) 天武天皇二年夏四月丙辰朔己巳条…(下・巻第二十九、四一三頁)。

「欲遣侍大來皇女于天照太神宮、而令居泊瀨齋宮。是先潔身、稍近神之所也。」(大來皇女を天照太神宮に遣侍さむとして、泊瀨齋宮に居らしむ。是は先づ身を潔めて、稍に神に近づく所なり。)

(d) 天武天皇三年冬十月丁丑朔乙酉条…(下・巻第二十九、四一七頁)。

「大來皇女、自泊瀨齋宮、向伊勢神宮。」(大來皇女、泊瀨の齋宮より、伊勢神宮に向でたまふ。)

(e) 天武天皇七年条…(下・巻第二十九、四三二頁)。

「是春、將祠天神地祇、而天下悉祓禊之。堅齋宮於倉梯河上。夏四月丁亥朔、欲幸齋宮卜之。癸巳、食卜。仍取平旦時、警蹕既動。百寮成列、乘輿命蓋、以未及出行、十市皇女、突然病發、薨於宮中。由此、鹵簿既停、不得幸行。遂不祭神祇矣。」（是の春に、天神地祇を祠らむとして、天下悉に祓禊す。齋宮を倉梯の河上に堅つ。夏四月の丁亥の朔に、齋宮に幸さむとして卜ふ。癸巳、卜に食へり。仍りて平旦の時を取りて、警蹕既に動きぬ。百寮列を成し、乘輿蓋命して、以て未だ出行しますに及らざるに、十市皇女、突然に病發りて、宮中に薨せぬ。此に由りて、鹵簿既に停まりて、幸行すこと得ず。遂に神祇を祭りたまはず。）

以上が『日本書紀』中にみえる「齋宮」に係した五例の該当箇所とその読み下し文である。

本章では右掲（a）～（d）の四件について取り扱うことにするが、あくまでもその記述内容が史実か否かという視点ではなく、できる限りそれぞれの文脈にそって純粹に文言上の問題として逐次「齋宮」の意味を考えてみることにしたい。なお、先述した西宮一民氏の研究成果に依拠して、以下の文中では原則として（ア）「齋内親王の居所」の意味で「イツキノミヤ」と訓み、（イ）「伊勢神宮ないしは天皇などが入る祭祀用の施設」という意味では「イハヒノミヤ」と訓むことにし、両者を区別して述べようと考え（但し、一部において卑見は西宮氏の解釈とは異なるかも知れないことを予めお断りしておきたい）。最後の（e）は章を改めて述べることにする。

（a）垂仁紀二十五年条の「齋宮」

本条文は余りにも有名で、これにつづく「一云」の注とともに、いわゆる伊勢神宮の創祀説話（起源伝承）として繰り返し言及されてきたものである。なお、文中にある「其祠立於伊勢国」や「是謂磯宮」などは、森博達氏の言われる正格漢文の観点からは、あるいは問題のある個所のひとつかも知れない¹⁸が、ただそういう問題を正すことが本稿の目的ではないので、必要がない限りはいわゆる倭習¹⁹に関する問題点には直接はふれないようにしたい。

周知のとおり、卷五の崇神紀六年（二三九頁）において、それまで「天照大神と倭大国魂の二神を並祭してきたが、「其神勢」を畏れ「共住不安」ざるために、天照大神を豊鍬入姫命に託けて倭の笠縫邑に祭り、また「日本大国魂神」の方は淳名城入姫命に託けて祭らしめることになったのだ、という。それをうけて、（a）垂仁紀二十五年三月丁亥朔丙申条では「天照大神を豊鍬入姫命から離し、倭姫命に託け」たところから始まり、倭姫命が「天照大神を鎮坐せむ處を求めて」、まず「菟田筱幡」に詣り、そこから近江、美濃を経て、伊勢国にやってくる話が語られる。この倭姫命の遍歴コースは後の『皇大神宮儀式帳』²⁰では、「宇太」から「伊賀」へ出てそれから「淡海」、「美濃」、「伊勢」への順になり、遍歴する個所も増加している²¹。

さて、本文には「（天照）大神の教えの隨に、その祠を伊勢国に立てたもうた」という。しかしこれだけでははなはだ漠然としている。で

は具体的にそれが伊勢国のどこかといえ、五十鈴川の上（ほとり）」だという。「因りて」とはここでは前句を受けてその結果を具体的に導く役割である。従って、ここにいう「齋宮」とは「天照大神の祠」つまりその「神殿」を指しているのである。そしてそれはまた「磯宮」ともいうと、別称のあったことをのべ、そこが「則ち天照大神の始めて天より降ります處なり」と締めくくっている。虚心坦懐、これが私の理解する上記本文の文脈に沿った解釈である。現代のわれわれが「齋宮」の語に惑わされて、これを「倭姫命の齋居する齋宮（イツキノミヤ）」を五十鈴川の上にたてた」と解釈したのでは、結句の「則ち天照大神始自天降之處也」が甚だ間の抜けた、矛盾するものになり、文章として一貫性をもつことにはならない。確かに倭を出た時には倭姫命に託いて諸国を共に巡行した天照大神だったが、最終的に五十鈴川のほとりまで来て、その「倭姫命の齋居する齋宮（イツキノミヤ）」を「天より降ります處」としたのでは笠縫邑の時と同じ結果になり、せっかく「大神を鎮め坐させむ處を求めて」諸国を遍歴したことが意味をなさない。倭姫命からは離れて、その地に新たに建てられた「祠」＝「齋宮（イハヒノミヤ）」、別称「磯宮」をして初めて「降ります處」としなければ「天照大神を鎮め坐す神殿」にはならないからである。繰り返すが、「天照大神の始めて天より降ります處」こそがその「祠」即ち「神殿としての齋宮（イハヒノミヤ）」＝「磯宮」でなければならず、それが倭姫命の齋居する「齋宮（イツキノミヤ）」、つまりは「祠（神殿）」でもない単なる潔齋施設（イツキノミヤ）であつてはおかしいのである。「則ち（そのまま・とりもおさずの謂）」とはそういう機能を果たす副詞である。この本文の主体、つまり主人公はあくまでも「天照大神」であつて、事実またそのようにしか読み取れないと私は考える。これは「イツキノミヤ」の起源譚では決してないのである。

後世の『古語拾遺』^(三)になると、右記の該当箇所は「隨神教、立其祠伊勢国五十鈴川上。因、興齋宮、令倭姫命居焉（神の教の隨に、其の祠を伊勢国の五十鈴川のほとりに立つ。因りて、齋宮を興て、倭姫命をして居らしむ）。」（同上）と巧妙に、しかし後世の人間には解りやすく変更を加えられている。「解りやすく」とは垂仁紀の「齋宮」を「イツキノミヤ」という前提で読む人には解りやすいだろう、という意味である。齋部広成自身もおそらく「イツキノミヤ」を前提に「倭姫命＝齋内親王」との固定観念のもとに当該本文に接し、右に指摘したような文脈上の矛盾を感じたのであろう、すでに周知となつて久しい「齋王制度」の実質に辻褃を合わせて、垂仁紀とはニュアンスの異なる文章に作り変えたのである。この『古語拾遺』と（a）垂仁紀当該条文とを同一視してはならない。

思うに、垂仁紀二十五年の倭姫命による諸国遍歴譚は、その巡行経路からみて「壬申の乱」を経た勝者側にあつて初めてなしうる発想（ないし着想）でもあり、いかにも歴史的事実として擬装されたい伊勢大神宮に関する一種の起源神話であろう^(三)。それによつて自らの王権ないし皇統の正統性が保障されるか、またはその必要性がある場合において、この種の神話はつくられうる。そしてその神話の主人公たる「祖神」の常駐する神聖なる祠（神殿）を地上に結構することがその皇統創始者にとっては不可欠の事業だった。更にその神話を原点として、

地上に結構した神殿に祭られる「祖神」と自らの王権（皇統）とを可視的に直結する循環的な祭祀システムを独占的に構築・具現化することで、自らの王権（皇統）の正統性は保障されるものとなったに違いない。恐らくそれが、当初の「斎王制度」が担ったそもそもの政治・宗教的な意味合いだったのではないだろうか、と今もなお愚考を重ねているところである。

それはともかくとして、(a) 条文にある「斎宮」をあくまでも「倭姫命の斎居する斎宮を五十鈴川の上にたてた」と解釈しようとするのは、「斎宮」＝「斎内親王」という固定観念のためか、もしくはそのように読まなければ不都合な問題があるとの認識がどこかで働いているからではないだろうか。併せて、それは『書紀』撰述過程での加筆・潤色を一切考慮しない見地に立つものとも言えよう。先の森博達氏の研究成果を踏まえれば、β群に属する垂仁紀にも潤色・加筆はあったかも知れないのである。

顧みれば、谷川士清氏の『日本書紀通證』⁴⁴も、また河村秀根・益根両氏の『書紀集解』⁴⁵も、当該本文に見える「斎宮」を倭姫命を斎居させた施設（いわゆる「イツキノミヤ」）として解釈している。彼らの解釈は恐らく後世の『古語拾遺』などの影響を受けた結果ではないかと推測する。しかしながら、屋代弘賢氏が当該本文を指して「此文にまぎらはしき事どもあり、よくせずば誤りぬべし。まづ其祠立於伊勢国、因興斎宮于五十鈴川上とある斎宮（は）即（ち）大御神宮なり。志かるを古語拾遺、倭姫命世記などに文を少し換て、此を倭姫命の坐宮の如く記せるは、御々世々の斎王の宮をも斎宮と申す故に、其と心得たるひがごとなり。斎王の宮を云は其王の坐宮と云意、此は大御神を斎奉る宮といふことにて、同名ながら意異なり。抑此には大御神の宮をこそ委曲には記すべきことなるに、其をば只祠立於伊勢国とのみ大かたに云て、斎王の坐宮をば却て具に五十鈴川上といふべきに非ず。萬葉なる人麻呂の長歌に渡會の斎宮とよめるも、必（ずや）大御神の宮とこそ聞えたれ。（濁点、カッコ内、句読点は田阪補う）」⁴⁶と、先述した卑見とほぼ同一内容のことをすでに言い尽くしている。また藺田守良氏もこの本文につき「されど此斎宮を内親王の坐なりと思ふはあらず。大神を斎祭る宮にて、即ち大宮を申し奉るなり。」⁴⁷と述べて、先行する谷川士清氏らの解釈を完全に否定している。今回利用した日本古典文学大系本『日本書紀』（岩波書店）では校注者による頭注（二七〇頁注七）で「斎王の忌みこもる宮」との解釈をとり、結果的に谷川士清氏の解釈を追認・踏襲している。ただその補注（五九二頁）においても、谷川、河村説から屋代、藺田説にいたる先学の当該「斎宮」に関する解釈の相違や問題点について一言も触れていないのはあまりにも不自然に思われた。

繰り返しになるが、この五十鈴川のほとりの「斎宮」をあくまでも「倭姫命の斎居する斎宮（イツキノミヤ）」であると解釈してしまうと、文脈上はそこに天照大神が天降ったことになるため、「倭姫命が斎居するイツキノミヤとしての斎宮」＝「天照大神の祠」とならざるを得ず、倭姫命は天照大神が伊勢国五十鈴川のほとりにまでやって来た後も、それまで「倭の笠縫邑」で豊鍬入姫命が行っていたのと同じく何も変

わからない形態で祭祀に従事したという結末にならざるを得ない。しかもその実態はあの奥まった神域の杜にすっぽりと覆われて隠れてしまい、王権（皇統）の正統性を誇示する場でもある重要な王権祭祀の様子が外部の人間には何も見えず、知られることがない。時の王権（皇統）にとっては何ら「政治的な意味（効果）」をもたらさないのであろう。それでは「天照大神」をわざわざ倭から伊勢国に遷し祀った政治的な意味がなく、これほどの一大事業として描かれたのであれば、理念上は、その結果として王権祭祀に何らかの变革が伴ってしかるべきところで、そのことが具体的に表現される文章になっていなければおかしい。史実か否かの問題はともかくも、私はこの本文に見える「斎宮」については、本文の正確な解釈（と信じる）から屋代弘賢氏らの説を支持する立場に立ち、古訓のとおり「イハヒノミヤ」と訓み、「天照大神がはじめて天降って」鎮坐したという「伊勢国五十鈴川のほとりの祠（別称「磯宮」）」の意味に解釈せざるを得ないのである。この点に限っては西宮一民氏のご高説²¹とは齟齬をきたす結果になってしまうが、ご寛恕を乞う次第である。

当然、「斎内親王（この場合は倭姫命）の斎居する斎宮がこの時五十鈴川のほとりに建てられたのだ」という意見もある。しかしそれはあくまでも現実との整合性を欠く机上の空論に過ぎない。斎内親王の「斎宮（イツキノミヤ）」跡は現に国史跡として明和町斎宮の地に存在し、経年の発掘調査事業が進行中だからである。でなければ、「垂仁紀二十五年当時の」斎内親王の斎宮跡たるべき建物遺構や遺物などが、出雲大社でも行われたように、将来の科学的な発掘調査によって現地（五十鈴川の上）で実際に確認されることを願わずにはおれない。

森氏の研究成果に依拠して、飽くまでも一つの仮定の話として最後に記せば、例えばいま「因興斎宮于」を書紀編纂最終段階での加筆として除外してみたならば、該条は「故随大神教、其祠立於伊勢国五十鈴川上。是謂磯宮。則天照大神始自天降之處也。」となり甚だ判りやすい文章だったかも知れない。あるいは書紀編纂の最終段階当時においては、「斎宮」の語がまだ「イハヒノミヤ」としても通行していたために、編纂者は後代に誤解を生むなど予想だにせず綴ったのが現行（a）の文章だったかも知れない、という別の推測も付言しておきたい。

（b）神功紀九年条の「斎宮」

今度は、『日本書紀』の編纂者が「卑弥呼と同一人物だと考えていた」との説²²もある、神功皇后こと氣長足姫尊にまつわる「斎宮」である。上垣外憲一氏は神功皇后は「神の託宣を語る特殊能力者、シャーマンであった」²³としているが、筑紫は橿日宮で皇后が受けた託宣——つまりは「熊襲よりも財宝の国新羅を帰服させるべし」との神託を夫の仲哀天皇こと足仲彦は疑って信じなかったため、神の怒りをかけて急逝したという。そのことを傷んだ皇后が、再度その祟りをなした神の託宣をきき新羅の国を親征せんとして、群臣百寮に命じて「罪を解へ過ちを改め」させたうえで、小山田邑に「斎宮」を造作させた。そして九年春三月壬申朔に「吉日を選び」、その「斎宮」に入って自らが神主となった、というのである。

これは先述の垂仁紀二十五年の「五十鈴川の上の齋宮」とはいささか趣が異なる。ただ、神主となった皇后が審神者を介して「先に（仲哀）天皇に教へたまひし神の名前」を問うと、まず答えたのは「神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神、名撞賢木蔽之御魂天疎向津媛命焉。」であつたという。やはり伊勢が出てくる。しかし、ここに「伊勢國は度逢縣の五十鈴宮に居る神」といえば、垂仁紀二十五年にある記述の経緯からして当然「天照大神」であるべきところ、「撞賢木蔽之御魂天疎向津媛命」といつているのは、それを「天照大神」の別名と言つてみたところで、『書紀』の体裁としては筋が通らない印象の方が強く、違和感の残る記述である。律令の編纂や『書紀』編纂事業に深くかかわつたとされる藤原不比等の病状が急を告げるなかで、「未定稿のまま撰上された」^{三〇}という事情もあつたからかも知れないが、やはり納得はいかない。

とまれ、天皇自身が自ら神に祈りまた祀る事例は他にも認められる。例えば、卷第二十四^{三二}の皇極天皇こと天豐財重日足姫の場合である。その元年六月には「大きに早る」と伝える。秋七月戊寅、群臣たちが言うには、「村村の祝部の教えにしたがつて、牛馬を殺して犠牲とし諸々の社の神を祭つたり、頻りに市場を他所に移して祭祀を行つたり、あるいは河伯の神に禱つたりして、雨ごいをしたが全く効果がなかった。」と。そこで今度は蘇我大臣蝦夷の主導により、大寺（百濟大寺）で僧たち到大雲經などを読ませたが、結局は雨を祈うことができなかった、という。同八月甲申朔に至つて「天皇幸南淵河上、跪拜四方。仰天而祈。即雷大雨。遂雨五日。溥潤天下。（略）」とあり、九穀の実りをもたらしした皇極天皇の「至徳」を讃えている。これなどは、もし中国古代の「齋宮」、即ち『史記』滑稽列伝にいう河伯の祭祀における西門豹の故事^{三三}や、あるいは唐の代宗が旱魃不登に際し、祈雨のために「齋宮」に別居した例^{三四}などを念頭におけば、「南淵の河のほとり」に皇極天皇が自ら入る「齋宮」が造られていたとしてもおかしくはない。しかしそこに「齋宮」の語が見えないのは、やはりこの語が外来漢語であり、皇極の時代にはまだ「齋宮」の語が普及していなかったか、あるいは、そもそも日本にはそういう意味での「齋宮」を設ける文化がまだ根付いていなかったのかも知れない。それは兎も角として、天皇自身が雨ごい祭祀を執り行うという点では神功皇后がみずから神主となつて神託を聴いたという記事とは何か通底するものがあるように思う。神祭りの特殊な能力をもつた女性司祭が民衆から崇められたという歴史的な背景をあるいは反映しているようにも思える。

いずれにしても、神功紀九年条の「齋宮」はこれを「イハヒノミヤ」と訓んで、「伊勢神宮」や「齋内親王の忌み籠る宮」とは区別して「天皇自身が齋戒のために入る臨時祭祀用の施設」の一形態と考えておきたい。

（c）天武二年四月条及び（d）天武三年十月条の「齋宮」

両条は卷二十九の天武紀に入つて初めて明快な形で現れる「齋内親王の忌み籠る宮」としての「齋宮」の例である。いずれも「泊瀬齋宮」

とあって「伊勢斎宮」ではない。天照太神宮に發遣されることになった大来皇女が「先づ身を潔めて、稍に神に近づく所」として忌み籠るために、倭の泊瀬の地に造営設置された「斎宮」である^(三三)。

いま、垂仁紀二十五年に「天照大神」を倭の笠縫邑から伊勢国五十鈴川の上へ遷し祀ったとして以降、伊勢の天照大神のもとへ遣わされたとして記されている皇女の関係記事を左に列挙してみよう。

卷第七・景行紀二十年春二月辛巳朔甲申、遣五百野皇女、令祭天照大神。

卷第十四・雄略紀元年春三月。是月、立三妃。元妃葛城圓大臣女曰韓媛。生白髮武廣國押稚日本根子天皇與稚足姫皇女。更名曰幡姫皇女。是孝女侍伊勢大神祠。

卷第十七・繼體紀元年三月癸酉、納八妃。(略)次、息長眞手王女曰麻績娘子。生荳角皇女。荳角、此云婆佐礙。是侍伊勢大神祠。(略)

卷第十九・欽明紀二年春三月、納五妃。(略)次蘇我大臣稻目宿禰女曰堅鹽媛。堅鹽、此云岐陀志。生七男六女。其一曰大兄皇子。是為橘豐日尊。其二曰磐隈皇女。更名夢皇女。初侍祀於伊勢大神。後坐姦皇子茨城解。(略)

卷第二十・敏達紀七年春三月戊辰朔壬申、以菟道皇女、侍伊勢祠。即姦池邊皇子。事顯而解。

卷第二十一・用明即位前紀九月壬申、詔曰、云々。以酢香手姫皇女、拜伊勢神宮。奉日神祀。是皇女、自此天皇時、逮乎炊屋姫天皇之世、奉日神祀。

これらはいずれも「令祭天照大神」とか「侍伊勢大神祠」、「侍祀於伊勢大神」あるいは「拜伊勢神宮。奉日神祀」などといった表現をとつてはいるものの「斎宮」の文言は一度も使用されていない。またその事に関して特段の説明はなく、「伊勢大神」と「その皇女」との関係が今や判り切った既成事実としてそれを前提に書いている、とも言える。ところがこの(c)(d)の天武紀に至って初めて「泊瀬斎宮」という具体的な名称として登場し、しかもその「斎宮」が「予め身を清めて神に近づくための」施設であることを明確に説明しており、『書紀』の記述における「斎宮」としては前例のない書き方になっている。従って、天武紀二年と三年とにみえる大来皇女とそれ以前の皇女(前掲の五百野皇女から酢香手姫皇女まで)とは、形式上は同じく「侍伊勢大神祠」る皇女として描かれているとはいえ、表記の上では明らかに大きな格差があると言える。大来皇女以前に「伊勢大神の祠」に奉斎したとされる皇女たちの場合は、おおむね同じパターンの繰り返しのため、制度の上で特別に何か大きな変化があったようには見えない^(三四)。しかし、大来皇女の場合には明らかに従来とは異なる新しいことが始まったという印象を与える文章表現になっている。この点は『書紀』の編纂事情ともかわって重要な問題を含むと考えている。それが果たして事実上の何を反映するものなのかは別途機会を得て考えてみる必要がある。

ともあれ、この天武紀二年・三年にみえる「齋宮」についてはこれを「イツキノミヤ」と訓み、言うまでもなく「齋内親王の忌み籠る宮」（伊勢齋宮ではない）であることが明瞭にわかる初めての事例であるとしておきたい。細部には異論があるかも知れないが、この「泊瀬齋宮」は後代にいう「初齋院（初齋宮）」ないしは「野宮」と同じような機能をもつ施設の先蹤と考えてよく、そういう類の施設も当初は「齋宮」の語を当てて称していたのであった。よく知られているように、少し後の養老五（七二）年九月十一日に「齋王」に選ばれた井上女王が移った「北池辺新造宮」も『官曹事類』では「齋宮」を以てて称している³⁵。

三、まとめ

以上『日本書紀』において現れる五例の「齋宮」のうち、（a）垂仁紀二十五年から（d）天武天皇三年までの四例について見て来た。それらの「訓み」と「意味」とについて述べたところの卑見を整理すると、次のようである。

（a）垂仁紀二十五年三月丁亥朔丙申条の「齋宮」は、「イハヒノミヤ」と訓み、「天照大神がはじめて天降って」鎮坐した「祠」で、別称を「磯宮」ともいった。つまり、その意味するところは天照大神の坐す神殿を指す（但し、これを直ちに「伊勢大神宮」と称すべきか否かはまた別の問題であろうと思われる、慎重でなければならない）。

（b）神功紀九年春二月・三月条条の「齋宮」は、「イハヒノミヤ」と訓み、「天皇などが自ら齋戒して入る祭祀用の施設」。（次章に述べる（e）と同じである。）

（c）天武紀二年夏四月丙辰朔己巳条および（d）同三年冬十月丁丑朔乙酉条の泊瀬「齋宮」は、「イツキノミヤ」と訓み、「伊勢神宮に発遣される皇女が忌み籠る宮」（初齋の宮であり伊勢齋宮ではない）。

こうしてみると、漢字表記としては同じく「齋宮」であっても、西宮一民氏の研究にあるように、決して齋内親王の「齋宮」だけにはとどまらない、複数の訓義をもつことは今更いうまでもないことであった。ただ、（a）垂仁紀二十五年の「齋宮」に関しては、詳述したように、本文の解釈から屋代弘賢、菰田守良両氏の見解と同じ立場をとることになり、谷川士清、河村秀根・益根ら三氏の解釈や西宮氏の結論とは見解を異にすることになった。とは言え、それは飽くまでも、当該条文に編纂の最終段階で手が加えられていないという前提での解釈である。もし、「因興齋宮于五十鈴川上」の「齋宮」を齋内親王の齋居する「イツキノミヤ」であると解釈した場合には、それが「磯宮」の別称をもつのはいいとしても、その齋宮（イツキノミヤ）が「天照大神の始めて天より降った処である」という、あり得ない矛盾した結果になってしまう。伊勢における天照大神は齋内親王の齋居するイツキノ宮に天下ったのでは決していない。従つてもし、強いてそのように解釈しようとすれば、「因興齋宮于五十鈴川上」の一文は既に「伊勢大神宮」が「五十鈴川のほとり」に在って、都から「齋内親王」も発遣され、伊勢に「齋

宮」が設置されている現実を知り得た人間が、遑つて加筆したものと推測せざるをえなくなるのである。そういう事情を仮定・推測しない限りは、垂仁紀二十五年三月丁亥朔丙申条を普通に読んで、その「齋宮」を「イツキノミヤ」だと解釈することには無理がある、と考えた。基本的な考え方を西宮一民氏の研究に依拠しているので、繰返しにはなるが、『書紀』編纂段階で用いられた漢語「齋宮」は、齋内親王のイツキノミヤばかりではなく、天照大神の鎮座した祠（まだ伊勢神宮とは称していない）のほか、天皇などが臨時に親祭をおこなう場合のイハヒノミヤなど、いわば汎用語としての機能を有するものであった。とりわけ、(b)に現れた「齋宮」の機能は、皇后自らが齋居するという点では(e)天武紀七年の倉梯齋宮と似通う面を持っている。それについての考察は章をあらためることに致したい。

【註】

- (一) … 鬼頭清明氏によるその報告を『木簡研究』創刊号（木簡学会、一九七九年）、十五頁において参照した。
- (二) … 山田孝雄著『国語の中に於ける漢語の研究』（宝文館出版、一九九四年訂正版第五刷）三三三頁。
- (三) … 坂本太郎ほか校注『日本書紀』上・下（日本古典文学大系六七、岩波書店、一九七一年第五刷版を使用）。以下、引用等には『書紀』と略記する。
- (四) … 森博達著『日本書紀の謎を解く―述作者は誰か』（中公新書、二〇〇一年六版）二二六～二二〇頁、同氏著『日本書紀成立の真実―書き換えの主導者は誰か』（中央公論新社、二〇一一年）一二七頁。
- (五) … 西宮一民『『齋宮』の訓義』（『皇学館大学研究紀要』第六号、一九六八年所収）、その後同氏著『上代祭祀と言語』（桜楓社、一九九〇年）に再録。
- (六) … 「少なくとも」とした理由は、卷十九の孝謙天皇五年二月甲午条に「齋宮大神司」の語があるからである。「大神司」を「主神司」の誤記または前身官署名と解して、この齋宮を文字通り伊勢の「齋宮」の意味に取る説もあるが、筆者はかつて津嶋朝臣小松の経歴に依拠して、それを「大神宮宮司」の誤記と捉え、この「齋宮」を「伊勢大神宮」の意味に解することを前提に、「孝謙朝には齋王は不在だった」との卑見を述べた。しかし、孝謙朝に「齋宮寮」が置かれていたことを裏書きする記事が『北山抄』にあるとの教示を榎村寛之氏からうけ、拙稿の改訂が必要になっている。拙稿「『齋宮大神司』をめぐる覚書」（『齋宮歴史博物館研究紀要一』一九九二年所収、三四～四三頁。榎村寛之著『伊勢齋宮の歴史と文化』（塙書房、二〇〇九年）、五三頁註二十及び二十一。なお当拙稿の公表直後に、千々和到氏から「もとからそう書かれてあったのではないか」とのご忠告も戴いている。
- (七) … 新訂増補国史大系『続日本紀』前篇（吉川弘文館、一九七二年普及版）一〇二頁、神龜元年十一月己卯条（大嘗）に、石上・榎井の両氏が内の物部を率いて「神楯を齋宮の南北二門に立つ」との記事があり、『本朝世紀』（吉川弘文館、一九六四年）第廿五、近衛天皇の康治元（一一四二）年十一月十五日癸卯条にも石上榎井の二氏がやはり物部四十人を率いて「大嘗宮の南北門に神楯神梓を立つ」（四〇〇頁）との記事が見える。前者の「齋宮」が「大嘗宮」のことであったと判る。大嘗宮（齋宮）の南北門に物部（石上氏）が大楯を立てることは『日本書紀』持統天皇四年春正月戊寅朔条や『延喜式』卷七「踐

祚大嘗祭」(班幣)も参照。他に、榎村寛之「物部の楯の成立と展開について」(同氏著『律令天皇制祭祀の研究』塙書房、一九九六年所収。初出は『日本書紀研究』第十七冊、一九九〇年)がある。

(八) …いま敢えて愚案を示せばそれぞれ「建其祠於伊勢国」、「謂是磯宮」とでも直すべきかと私案した。ただ、少なくとも「七世紀後半には、既に中央・地方を問わず日本語の語順によって漢字文を綴ることが行われている」ことは、法隆寺金堂の薬師如来坐像の光背銘、飛鳥池遺跡出土の「願恵上申」木簡、群馬県高崎市の「山ノ上碑」、あるいは滋賀県中主町の西河原森ノ内遺跡出土の書簡木簡などにもとづき、明らかにされている(小林芳規「飛鳥池木簡に見られる七世紀の漢文訓読語について」『汲古』第三十六号、平成十一年十一月、二二二～二三頁)。従って、当然『日本書紀』編纂時にそういう漢字文が綴られていてもそれを一概に間違いとすることも出来ないであろう。ただ、「倭習」を指摘すること自体は重要である。

(九) …前掲森博達著『日本書紀の謎を解く―述作者は誰か』、一二四頁など参照。

(一〇) …『皇大神宮儀式帳』(塙保己一編纂『群書類従』第一輯、神祇部一、続群書類従完成会、一九八三年訂正三版第五刷)二二三頁。

(一一) …その遍歴譚において倭姫命がまず「菟田」に赴いた点は、舒明一族による櫛田川流域の開発と斎宮寮の立地からみて重要な意味を示唆する、との卑見は別稿に述べた(第四部第一章「伊勢斎宮の立地とその歴史的背景」参照。初出は『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四十二号、二〇一四年所収)。

(一二) …斎部広成撰・西宮一民校注『古語拾遺』(岩波書店、一九八六年第三刷)三十九頁および一三五頁参照。なお、引用に際しては、「五十鈴の川上」を「五十鈴川のほとり」に改めたことをお断りする(理由は本論文第四部第一章第三節、一七一頁を参照されたい)。

(一三) …長く斎宮跡調査指導委員会の委員として、指導戴いた故・早川庄一氏は、崇神紀六年条や垂仁紀二十五年条にいう倭姫命の説話は共に「伊勢神宮の起源説話であって斎王の起源説話ではない。しかも史実性に乏しい。」と断言された(同氏「斎宮寮の成立とその財政」『名古屋大学文学部研究論集』一六・史学三九』、一九九三年所収、三頁(通一二三頁)下段。西宮秀紀氏もそれを「伊勢神宮の起源伝承」とする立場ではほぼ同じであると理解している(同氏「伊勢神宮の成立」『伊勢湾と古代の東海 古代王権と交流4』名著出版、一九九六年所収、特に一二二頁。同氏著『律令国家と神祇祭祀制度の研究』塙書房、二〇〇四年所収、第一部第二章「律令制神祇祭祀と畿内・大和国の神(社)」)。私は寧ろ擬装された神話に近いと思う。

(一四) …谷川士清著・小島憲之解題『日本書紀通証』一、臨川書店、一九八八年再版、五七七頁。訓みは「イツキノミヤ」としている。

(一五) …河村秀根・益根編著・阿部秋生解題・小島憲之本文補注『書紀集解』二、臨川書店、一九八八年、四二八頁。訓みは「イハヒノミヤ」としている。

(一六) …屋代弘賢著『古今要覧稿』第一卷(原書房、一九八一年覆刻)、巻第十一、神祇部、百八十九頁。

(一七) …藺田守良著『神宮典略』前編(神宮司庁編纂太神宮叢書、臨川書店、一九七六年)、殿舎考六、斎宮寮、三二二頁。

(一八) …西宮一民氏の前掲論文ではこれを「イツキノミヤ」と訓み、いわゆる「斎内親王」の斎居する宮殿の意味にとっておられる。

- (一九) 岡本堅次著『神功皇后』(吉川弘文館人物叢書、一九七五年第六版)、一四八頁～一六八頁「六、卑弥呼と神功皇后」。山本武夫著『日本書紀の新年代解説』(学生社、一九七九年)、四「神功皇后は実在した」(六三～一〇四頁)の特に七四～七五頁参照。
- (二〇) 上垣外憲一著『倭人と韓人―記紀からよむ古代交流史』講談社学術文庫、二〇〇九年第八刷、一五五頁。
- (二一) 前掲森博達著『日本書紀成立の真実―書き換えの主導者は誰か』、二五四～二五六頁。なお関連して、上山春平著『神々の体系―深層文化の試掘』(中公新書、一九七二年)、同『続・神々の体系―記紀神話の政治的背景』(中公新書、一九七五年)、同『埋もれた巨像―国家論の試み』(岩波書店、一九九七年)、および土橋寛著『持統天皇と藤原不比等―日本古代史を規定した盟約』(中公新書、一九九四年)なども参照。
- (二二) 先の森博達氏の『日本書紀』成立区分論では巻二十四はα群に属す。森氏によれば、α群は二分され、七世紀末の音博士であった唐人の続守言が巻十四の雄略紀からを担当し、同じく薩弘恪が巻二十四の皇極紀からを担当したという。薩弘恪は文武四年の大寶律令編纂の奉勅後には史料に登場せず、巻二十四～二十七を述作して引退したものと推測されている。なお皇極帝が甘雨を齎した該条は『吾妻鏡』建保二年六月五日条にも引用されている。
- (二三) 『史記』(中華書局、一九八九年湖北第十一次印刷)、巻一百二十六、滑稽列伝第六十六、三二一～三二四頁。西門豹伝は司馬遷には採用されなかったが、漢元帝・成帝時代の博士であった褚少孫によって後補されたものである。中国の文献史料に現れる民間祭祀の「齋宮」の記述としては最も古く、先秦時代の民間祭祀における河伯の祭りに人身御供として犠牲にされる女性と「齋宮」の実態を窺い知る唯一の史料で、これに言及した邦人の研究も多い。『日本書紀』巻第十一、仁徳紀十一年十月にも人身御供を以て河伯を祀り堤を築く話がある。なお、文化大革命末期の一九七五年には上海人民出版社から『西門豹資料輯注』も出て、西門豹を人民のために尽力した人物として高く評価し、中学校教育のテキストの一つにもなったようである。拙稿「中国古代の民間信仰にみる齋宮」(本論第一部第一章)では、その「齋宮」の実態解明と共に当該「河伯祭祀(西門投巫)」の記述をめぐる虚構性を追求した。
- (二四) 『旧唐書』(中華書局、一九七五年)、巻十一、代宗本紀、大曆七年五月乙未条詔(三〇〇頁)。
- (二五) 前掲『日本書紀通証』三、(二八二頁)も前掲『書紀集解』四、(二七〇七頁)も共に、この「泊瀬齋宮」に注して「在初瀬氣波比坂下」としている。
- (二六) しかも、例えば敏達紀にみえる「即奸池邊皇子」などは漢文表記としても不正確である。このままでは池邊皇子を「奸した」ことになる。これなどは森氏の言われるように、これも最終的に日本人の手(森氏はそれを和銅七年に国史撰述の詔勅のあった三宅朝臣藤麻呂ではないかと推測している。註四前掲『日本書紀の謎を解く』二一九～二〇頁参照)によって潤色・加筆された文言の一部である可能性があるのではないかと推測している。
- (二七) 新訂増補『国史大系政事要略 前篇』(吉川弘文館、一九八一年)、巻廿四、年中行事九月、七一頁。

第二章 天武紀七年の齋宮

(一) はじめに

前章では『日本書紀』に見える「齋宮」関係記事のうち(a)垂仁紀二十五年から(d)天武紀天武天皇三年までを考察したので、予告に従い、ここでは(e)天武天皇七年条の「齋宮」をめぐる卑見をのべておきたい。改めて当該(e)の条文を左にひくと、

「是春、將祠天神地祇、而天下悉祓禊之。堅齋宮於倉梯河上。夏四月丁亥朔、欲幸齋宮卜之。癸巳、食卜。仍取平旦時、警蹕既動。百寮成列、乘輿命蓋、以未及出行、十市皇女、突然病發、薨於宮中。由此、鹵簿既停、不得幸行。遂不祭神祇矣(是の春に、天神地祇を祠らむとして、天下悉に祓禊す。齋宮を倉梯の河上に堅つ。夏四月の丁亥の朔に、齋宮に幸さむとして卜ふ。癸巳、卜に食へり。仍りて平旦の時を取りて、警蹕既に動きぬ。百寮列を成し、乘輿蓋命して、以て未だ出行しますに及らざるに、十市皇女、突然に病發りて、宮中に薨せぬ。此に由りて、鹵簿既に停まりて、幸行すこと得ず。遂に神祇を祭りたまはず)。」^(二)

というものである。

この時天武が行おうとした天神地祇祭祀について、虎尾俊哉氏や三橋正氏^(三)などは、大きくは大化の改新以降における古代日本の神祇制度の形成やその発展を考察する射程範囲の中において当該条文を捉え、意義づけようとされた。従うべき視点である。ところが一方では、僭越ながら当該条文に触れた先行論文のなかには、本文中の「十市皇女、突然病發、薨於宮中」に目を奪われ過ぎて、「齋宮」とあれば反射的に「皇女」と結び付けようとする志向性が強く働き、畢竟、十市皇女を悲劇の主人公に仕立てあげる物語化へと展開してしまったために、主人公の天武天皇やその時の天神地祇祭祀の意味などはどこかへ飛んでしまい、西宮一民氏の研究にある「齋宮」の訓みかたにさえも齟齬をきたしてしまうような結果に陥っているものがある。

後に詳述するように、宮中での十市皇女の急逝をもって、それを「自害」と考えた最初の人は橘守部氏^(四)ではなかったかと思うが、事由こそ異なるものの「十市自害」説はのちに古代史家の北山茂夫氏によっても継承された^(五)。いずれにしても、両説は天武紀七年段階における「倉梯齋宮」の政治・宗教的な意味について必ずしも十分な議論がなされたとは言い難いと思う。本稿ではその点に留意しつつ、旱魃・飢饉下において天武天皇が目指した蠲免救民策という観点から考察をおこない、卑見をのべてみたいと考える。

この「倉梯の河の上(ほとり)」に造営された「齋宮」、つまり「倉梯齋宮」の性格については、かつて旧稿^(六)において、そのときに考察した主題から明らかになった「王自らが齋戒のために入る齋宮」と性格的に類似するとの観点から、まったく初歩的な考えを述べたことがあるが、今となつてははなはだ未熟で不十分なものであったことを反省している。その後、従来とは異なる視点から当該条文にも関連してわ

ずかに触れた新しい研究成果も出されている⁸⁾。ここに改めて旧稿の該当部分を改訂して卑見を述べ直すものである。

(二) 天武親祭の「齋宮」

最初に、上掲の当該条文の意味を文脈に沿って虚心坦懐、忠実に読み解くことから始めたい。書かれた内容は左のように解釈できる。すなわち、天武天皇は七年の春に「天神地祇を祠らむとして、天下悉に祓禊」をさせたうえで、「倉梯の河の上に齋宮をたてた」⁹⁾。そして夏四月丁亥朔に、その「倉梯齋宮」に赴く吉日を卜わせたところ、「癸巳」が良いとの結果を得た。いよいよその日の平旦（午前四時頃）を以てその倉梯齋宮へ行幸せんとして、警蹕（みさきおひ）の者はすでに動き始めたのである。扈從の役人達もすでに整列をなし、天武の乗輿を蓋う傘もめされて、今まさに出立せんとした時だった。十市皇女が突然に病を発して、宮中で急逝してしまった。そのために、行幸の行列はもとより急きよ停止して、天皇は（倉梯齋宮へ）行幸することが出来ず、ついに予定していた「天神地祇」を祭ることもできなかった、というものである。右の解釈になお稚拙な面はあるかも知れないが、先に引用しておいた（e）当該条文の文意はおおむねこのようなものであると考えて異論はないだろう。

神祇令によれば、「凡天神地祇者。神祇官皆依常典祭之（凡ソ天神地祇ハ。神祇官ミナ常典ニ依リテ之ヲ祭レ）。¹⁰⁾とあり、また「凡天皇即位、惣祭天神地祇（凡ソ天皇位ニ即キタマハバ。惣テ天神地祇ヲ祭レ）。」（同上）ともみえているが、少なくとも養老令では前者は神祇官らに有事させる（中国でいう有司摂事）祭祀であり、後者は天皇が即位後の仲冬に行う親祭で、その祭祀主体は勿論天皇自身にある。神祇令条にいう仲冬の「天神地祇」祭祀とどのように関連するのか、またしないのか定かではなく分らないが、右記解釈のとおり天武紀七年夏四月の場合も天神地祇をまつろうとした主体はその文意からして天武天皇以外には考えられない。倉梯の齋宮はそのために建てられた齋戒・祈神用の施設であったと解される。「倉梯」は現在の桜井市倉橋に当たるらしく、遡れば、崇峻即位前紀（卷第二十一）八月には「宮於倉橋（倉梯ニ宮ツクル）」とみえ、後には文武天皇の離宮¹¹⁾が置かれたところでもある。

さて、四月癸巳の早朝、天武天皇は鹵簿を連ねてその倉梯齋宮へ行幸せんとしたわけだが、そもそも宮衛令には、「釋云。天子出車駕謂之鹵簿（釋ニ云フ。天子車駕ヲ出スコト之ヲ鹵簿ト謂フ、ト）。¹²⁾とみえる。「警蹕」¹³⁾といい「鹵簿」といい、また「幸行（＝行幸）」というも、これらはどれも天皇の行動に付随して用いられる専用語である。従って、当該条文の主語はどこまでも天武天皇自身でなければならない（天武紀である以上、本来的に主語は天武に決まっている）。

ところが、あろうことか十市皇女が宮中で俄かに発病し薨去したため、今にも出立せんとしていた天武の齋宮への行幸は中止され、予定されていた天神地祇を祠るという天武親祭の儀礼は取りやめになったのである。唐突とおもえる十市皇女の死は、それにより穢れが発生した

のであるから、天武親祭による「天神地祇」の祭祀が「中止された理由・根拠」として述べられているに過ぎないのである(二二)。

そもそも、宮中等において人の急逝した事例は他にいくらかでもある。全てを列挙できないが、例えば天武天皇五年六月に「物部雄君連忽発病而卒(物部雄君連、忽ニ病発リテ卒ヌ)」(二三)とあり、また同朱鳥元年五月庚子朔戊申条にも「多紀皇女等至自伊勢。是日、侍醫百濟人億仁病之臨死(多紀皇女等、伊勢ヨリ至リ。是ノ日ニ、侍醫百濟人億仁、病シテ死ラムトス)」(二四)というのも、侍医の億仁が帰京したその日に発病して急逝したことを言うのである。下つて、淳和天皇の天長二(八二五)年閏七月丁亥に薨去した彈正尹四品佐味親王にしても、彼はかつて弘仁十四(八二三)年四月辛亥に挙行された「天皇踐祚の日、朝堂に行立し、暴かに疾に倒れ臥し、云々」(二五)というのがその原因であつたし、齊衡元(八五四)年十二月甲寅條には「是日。木工頭正五位下、石川朝臣長津頓死於寮中(是ノ日。木工ノ頭正五位下ノ石川ノ朝臣長津寮中ニ頓死ス)」(二六)とあり、また同三(八五六)年四月庚寅條にも「右京大夫從四位下藤原朝臣諸成卒。(中略)而遽然頓逝(而ルニ遽然トシテ頓逝スナリ)」(二七)とみえ、貞觀十六(八七四)年正月二十九日庚寅條には「右近衛宇保貞主宿直仗下。頓得病死。或稱。氣絶於宮中。或云出於宮外而命終(頓ニ病ヲ得テ死ス。或ハ稱フ。宮中ニ氣絶スト。或ハ云フ宮外ニ出テ命終セリト)」(二八)といい、更に、仁和元(八八五)年八月十九日、「是日伊勢齋内親王將修禊事。而典葉大属峰田岑範。去十一日夜於寮中頓死。邪穢延染供奉所司。仍停止(是ノ日伊勢ノ齋内親王將ニ禊事ヲ修メントスナリ。而レドモ典葉ノ大属ノ峰田ノ岑範。去ル十一日ノ夜寮中ニ於テ頓死シタレバ。邪穢ノ供奉セル所司ニ延染スナリ。仍テ停止ス)」(二九)等々の記事がある。この最後の事例などは、典葉寮の大属であつた峰田岑範が八日前(十一日)に寮中で頓死し、その邪穢(死の穢れ)が供奉する所司にも延染したために、その日(十九日)に予定されていた齋女王繁子の野宮入りに備えた禊が停止されたのであつた。従つて、今いう宮中での十市皇女の急逝も上掲頓死の諸事例中の一つとして数えて何ら不自然ではなく、特に皇女の死去ゆえ(当時、すでに死穢延染の觀念があつたか否かは知らないが)天皇親祭も停止された、と文面通り素直に解釈して然るべきところではないだろうか。

すでにみたように、「警蹕既動。百寮成列、乘輿命蓋、以未及出行」という時点において十市皇女がまだ「宮中」に居たという事実からは、間違つても彼女が天皇と一緒に倉梯齋宮へ向かうとしていたなどとは到底考えられない。天皇よりも遅れて皇女が乗輿に乗り込むなどあり得ない作法である。それが十市皇女の赴く「齋宮」でなかつたことは、天皇Ⅱ鹵簿の始動時点におけるそういう明確なタイムラグが読み取れる点からも断定できる。よしんば、もしそれが十市皇女の赴く齋宮だと仮定してみても、では一体なぜ天皇と一緒にいて行く必要があるのか、その理由がまったく判らない。わずかに管見の及ぶところでは、平安時代の寛治五(一〇九二)年正月十一日に、「白河上皇が前齋宮媼子内親王(郁芳門院)を伴い賀茂社へ参詣した」(三〇)事例もあることはある。しかし、それは賀茂社への新年の参詣であつて、いま問題にしている天武紀七年の「天神地祇」祭祀とは全く次元の異なる話で比較にはならない。あろうことか、時の天皇が「皇女」を送つて「齋

「宮」へまでついて行くなど前代未聞で、断じてありえぬ設定である。親祭の主体はあくまでも天皇自身にあり、皇女が同行する必要もない（それ故、十市斎宮説を採ってこのことを説明した人はいまだ皆無である）。いま文脈に沿っていえるのは、この「倉梯斎宮」というのは、天神地祇を祠らんとした天武天皇が自らそこに赴こうとしていた施設であって、それ以外にはない。天皇自らが赴くというその限りについて、中国の皇帝祭祀における「斎宮」にその性格が最も近似するものであると、旧稿では考えたのであり、基本的に今もその点に関する考え方は変らない。かつて津田左右吉氏は、その「天神地祇」は「中国の成語を無意味に適用したに過ぎない」²³⁰としたが、ではなぜそのような名称で祭祀が行われようとしたのか、その政治的意味についてはやはり当時の社会情勢の推移のなかにおいて考察してみる必要がある。

（三） 先行研究にみる解釈

さて、天武が親ら「天神地祇」を祠ろうとしたその事由や背景についての卑見を述べる前に、これまでの先学による諸研究のいくつかを簡略に紹介してふり返りつつ、それぞれの解釈等に対する自分なりの意見や感想も付しておきたい。

（あ） 橘守部氏の説。十市皇女が、「突然病發、薨於宮中。」と書いてあるのは、「ただ文のつくりの過ぎず、実際には今晩にわかに自害して亡くなられたのである」²³¹なぜならば、「この倉梯の斎宮は、かつて大海人皇子が大友皇子を亡ぼさんと立願したことへの報賽のためであり、その大友の妃でもあった十市には從駕し難いことであつたからである」（同上）という。テキスト・クリティックは大切なことである。しかし、前節にいくつもの事例を列挙したように、古代にあつては宮中や役所内などで親王や役人が頓死するといったハプニングは確かにあつたのである。記録に残らなかつた事例も多いであろう。確たる証拠もなしに「文のつくり」と評するのは少し恣意的に過ぎるのではないかと思う。しかも倉梯の斎宮で天武が天神地祇を祭ろうとした理由を、かつて大友滅亡の立願成就に対する報賽だつたと想定している。祭祀の主体が天武であることを前提としている点はいが、なぜ十市皇女を連れて行く必要があるのか解らない。第一、仮に氏の言うように立願成就に対する「報賽」とすれば、七年もの歳月を経たのちではあまりにも遅すぎはしまいか。わが伊勢国が生んだ大先達の説に異を唱えるのは心苦しいが、その高説を受け容れることはできない。

（い） 北山茂夫氏の説。氏もまた十市皇女の自害説をとるが、橘氏とは違う背景を構想された。『万葉集とその世紀』²³²では、十市皇女の突然の薨去（自害）に至る理由を下記のように推理している（「」内は右記著書からの引用であることをお断りしておく）。

十市皇女が「宮の中」にいたのは「父天武の愛護のもとに宮中に生活の場をもっていた」とし、壬申の乱以後は「彼女自身をつつむ悲劇に堪えつつ、孤独に生きていた」と想定した上で、その十市皇女は倉梯の斎宮に「斎王としておくりこまれることになっていた」と想像し、天皇は「皇女をおくって、斎宮に赴く予定であつた」という。宮中での突然の病死は「状況からみてそうはうけとれ」ず、

「皇女が自害の道をえらんだと解釈するほかはな」く、皇女を「そこまで追いつめた」理由については、「この疑問を解くカギは、おそらく、高市皇子の、皇女への挽歌三首のほかになからう」とした。それら挽歌の内容から「高市が十市に想いをよせていたことはほぼたしかであろう」といい、かつ「天武、皇后は、それが結婚にまで進むのを、警戒し、さらに反対していたのではなからうか」と想像を重ねた。「十市を妻にすることによって、皇族、貴族のあいだで、高市の重みが」増すことを警戒した天武と皇后が「思いきつて、十市皇女を齋宮にし」て布石をうったのだとする。「恋愛の状況がすすんでいたにちがいない」二人を警戒してとられた強硬措置に対し、「思いあまつて」とった十市「皇女の自害は、専横な父天皇および皇后への死の抗議ともうけとれなくはない」、というのである。こうして北山氏は、終始物語り風に話を展開された^{二四}。

高市皇子の挽歌を踏まえた北山氏の説は、心情的には広く受け容れられやすいものである。日本古代史の大家ならではの該博な知識を背景にした構想ではあるが、その核心部分は想像に想像を重ねたあくまでも推論である。しかも、当該条文に明記された天武紀七年段階において「天神地祇」を祠するという行為の政治・宗教的な意味合いには特段の言及はなく、「なぜ天武が十市皇女に同伴しなければならぬのか」という根本的な疑問にも答えるものではない。失礼な言い方になってしまいが、氏は最初から、十市皇女は「斎王としておくりこまれることになっていた」との前提に立つために、「突然の病死」に納得がいかず、当該条文の範疇からは外れて別方向へと話を展開され過ぎたのではないか、と思えてならない。著書のタイトル上やむを得ないとはいえ、天武が親祭しようとした「天神地祇」やそのために準備された「倉梯の齋宮」に対する氏の見解を窺えなかったのは残念である。何よりも必要なのは、「齋宮」イコール「齋内親王」すなわち「皇女」という固定観念からわれわれはひとまず開放されなければならない、ということである。

(う) 虎尾俊哉氏の説。「大化改新後の国造」についての専論であり、決して天武紀七年の当該条文を対象とされたのではない。論題のとおり、改新以後の国造の職掌とその設置時期に関して重点的に論述し、最後にその目的にも言及している。詳細を省くが、文武大寶元年十一月丙子条、および大寶二年二月庚戌条の「大幣」を文武天皇即位の大奉幣と解し、それに諸国の国造が関与したとの解釈を示した。その際、養老神祇令の「凡天皇即位、總祭天神地祇、散齋一月致齋三日、其大幣者三月之内令修理訖。」について、「致齋三日」までの前半を大嘗の事とし、「其大幣者」以下の後半を即位についての大奉幣の事として分けて考える近藤芳樹氏の説^{二五}なども紹介しながら、「毎世一年の踐祚大嘗祭の事」とする「義解の説は従うべきでなく、踐祚の大嘗の外に、かくの如く天神地祇を總祭して大幣を諸神に供えられる事があったと解すべきだ」とした。そして、「我国神祇制度の整備が天武朝に始まる」として、天武七年正月是春条、即ち前掲(e)の前半部分を指して、「この行事の制度的な先蹤を為すものではあるまいか」^{二六}と予見されたのである。

大化の改新以後の国造制度の創始を「天武朝における全国的な神祇制度の整備の一環」としてとらえ、その中に文武即位の大奉幣と国造の役割などを位置づける論考に学ぶべきことが多かった。堅実な古代史家の論述は、十市皇女の急逝記事に目を奪われることなく、上掲(e)天武紀七年の当該条を神祇制度の創成期における歴史的な流れのなかに位置づけようとするものであり、それ自体を否定する理由などない。ただ私は一方で、氏の高説に比すべくもなく近視眼的ではあるうけれども、(e)の当該条にはむしろ文武慶雲二(七〇五)年三月四日の「倉橋ノ離宮へ幸ス。」や翌四月三日の詔に「水旱失時ヲ失ヒ、年穀登ラザレバ。五大寺ヲシテ金光明經ヲ轉讀セシム。」と見える記事とを関係づけて考えてみることもまた、可能性の一つとしてはあるのではないかと考えている(後述)。

(え) 三橋正氏の説。表題のとおり、わが国古代における神祇制度の形成とその展開の実態を本格的に論じたものである。氏はそれを古墳祭祀から律令祭祀へと向かう変遷過程の中に跡付ける。これも詳細は省かざるを得ないが、「天武天皇によって推進された神祇制度は、遂に完成を見ることなく次の時代へ受け継がれていった」としつつ、「古墳時代における祭祀儀礼が途絶え、仏教儀礼によって置き換えられつつあった流れを、過去の宗教的權威を復活させながら、天皇中心の国家建設や宮城の造営と一体化した神祇祭祀を創出・構築する方向へ大きく転換した」点で、「日本古代宗教史上におけるこの(天武の)時代の意義は重大である」(三三)と評価した。天武天皇五年までには「以後の神祇の方向性を示す三要素―すなわち天皇親祭を伴う新嘗(大嘗)、諸神を対象とした幣帛奉獻、諸氏族の服属儀礼としての大祓―が出そろい」、同六年五月己丑条に「勅、天社地社神税者、三分之一、為擬供神、二分給神主」とあるのは、「新嘗や大忌祭(廣瀬)・風神祭(龍田)という祭儀の定着だけでなく、諸神(諸氏族の祭祀)の整備も進められた」(同上)ことを意味する。その上で、同七年条を引き、天皇親祭による(氏は「天皇自らが中心となった」と表現)「天神地祇」祭祀の儀が計画されたのを以て、「祀りかつ祀られる」天皇の神格化への試みとの意義づけをされた。先の虎尾俊哉氏と同様に、丹念に諸史料を精査し、積み重ねられた行論に対して異論はないし、何よりも、十市皇女の急逝を以て天武の天神地祇祭祀中止の根拠として解釈し、倉梯齋宮を「十市皇女が向う齋宮」と位置付けてはおられないという点で心強く感じた次第である。

(お) 榎村寛之氏の説。それは表題のとおり「大来皇女」を主題とするもので、「大来による伊勢神宮奉斎の史的意義」や「律令国家形成過程における伊勢神宮祭祀の位置づけ」等につき持論を展開したものである(三六)。従って、それは当該条文そのものの考察ではなく、むしろ主眼の中心は天武天皇のもつ「強大な祭祀権」が大来皇女、十市皇女、そして持続へと分与されていたという構想の提案にあり、そのことを前提として、「倉梯齋宮」を十市皇女の齋宮と解しうるとみたものではないかと推察する。実際に当該条文そのものに対しては、それ(倉梯齋宮)が「王権祭祀に関わる施設で、十市に奉仕させることを想定していたと考えるのが自然であろう。」(同上)と

簡潔に述べるに留まる。いま、祭祀権の分与という問題をここで論評するだけの準備はないが、北山茂夫氏の説にはなかった視点からの考察に多くの啓発を受けた。しかしそれでもなお、「ではなぜ天武は十市皇女についていく必要があるのか」という素朴だがしかし本質的な疑問はやはり解消されなかった。天武が十市皇女に「祭祀権を分与した」のであれば、天皇がわざわざ同行する理由はないし、先述した当該条文の文脈に沿った解釈を前提とすれば、それは「天武親祭」以外にはないと考えるのである。

以上、限定的ながら、特に(e)天武紀七条に言及された先学諸氏の研究の一端を拝見して改めて思うことは、西宮一民氏の研究成果にあるように、『書記』における漢語「齋宮」の訓義は複数存在しており、決して「齋宮」＝「齋内親王の齋居施設」とのみ決めつけることは出来ないし、ましてや平安時代に現れる齋内親王本人を指す避称としての「齋宮」でもまだないのである。従ってそういう事実からすれば、上掲(う)虎尾俊哉氏や(え)三橋正氏らによる視点の側に立たざるを得ない、ということであった。繰り返すが、少なくとも七・八世紀段階における「齋宮」を考える場合には、誰しもまずは「齋内親王の居所」という固定観念の呪縛から解放された上で取り組むべきであろう。

(四) 早魃下における天武親祭

最後に、冒頭に掲げた(e)天武紀七条と「齋宮」とをめぐる卑見を述べ直して本稿を締めくくりたい。それには大きく三つの観点からその理由を導きだそうと考える。いずれも前引の虎尾氏や三橋氏が直接にはほとんど言及されなかった事柄にも属するものである。

① 天武朝から文武朝にかけての「気候」

残念ながら、この時期に限定的に焦点を絞ってその「気候」を詳述した論文をまだ知らない(恐らくそれは無理な要求だろう)。しかし、関係者の努力に負う科学的手法によって過去七六〇〇年間の気候の変遷(古気温曲線)はほぼ確定されて来ている。その方面における邦人の研究成果の一端は、例えば、吉野正敏・安田喜憲編集『歴史と気候』^{三三}からも窺うことができ、その他にも多くの関係論文^{三四}が発表されている。阪口豊氏の論文^{三五}に掲げられた「第四図・p73古気温曲線」(二二頁)や「第八図・過去七六〇〇年間の温暖期と寒冷期」(二四頁)などは、私のような門外漢が当該時期の気候を想像するのに可視的で解りやすく大変有難い図版であった。

その阪口氏によれば、「紀元前三九八年に始まる弥生温暖期は十七年に至って急に寒冷化し、一七〇二四〇年の移行期を経て七三二年に至る長い寒冷期(ちょうど古墳時代に当たるゆえ古墳寒冷期と呼称)を迎える。この寒冷期は、三九〇年の一時的な中休みによって二期に分かれ、気温は前期では二七〇年、後期では五一〇年頃にもっとも落ち込む。とくに前者の落ち込みは著しい。七二〇年を過ぎると気温は急昇し、七八〇年でそのピークに達する。」^{三六}と報告されている。

一方、「屋久杉年輪の安定炭素同位体比分析」という研究から「歴史時代の気候変動の復元」をおこなった北川浩之氏も、その古気候復元

図から「七世紀から八世紀にかけては一〇二度C寒冷期が認められるとする。この時期はヨーロッパの北東から西にかけては民族の大移動期と一致している。」^{③④}とも指摘している。もはや極寒ではないが、七世紀代はやはり低温期であったことを認めている。

また、吉野正敏氏は「大化の改新から約一〇〇年間、すなわち七世紀前半から奈良時代の初頭までは寒冷であった。(略)日本の古代においてはもともと顕著な低温期であった」^{③⑤}という。しかし同時に吉野氏は、「古墳時代に入って気候が常に寒冷であったわけではない。(略)古墳時代に入って、弥生時代より全般に温暖化したのが、五〇〇年前後の数十年間、寒冷な時代があった。しかし、その寒冷の程度は弥生時代に比較すると、きわめて弱かったので、誤解を防ぐために「古墳寒冷期」の名称は使用しない方がよいと思われる。」^{③⑥}とも注意している。しかも、東アジア世界において唐が百済を滅ぼし(六六三年)、また高句麗を滅ぼす(六六八年)などの「唐の活躍は、温暖化が始まった時期である。」^{③⑦}といい、七世紀後半代においてそれまでの寒冷期から八世紀初頭ころに始まる温暖期への移行があったことを認めている。

先に紹介した阪口氏の古気温曲線でも、全体的には寒冷期の中にありながら八世紀に入る直前に気温が急上昇しており、吉野氏のいわれる「温暖化」への序章を示すものと解釈できる。本稿がこれから問題にする天武天皇七(六七九)年条から文武天皇慶雲二(七〇五)年条のころはまさにそのような気候の微妙な転換期に当たっていたであろう、という点をまずは認識しておきたい。

② 天武朝から文武朝にかけての「災異」と対応

まだ「気候変動と社会活動の関連が証明されたわけではないが、前者が後者に大きく影響を与えている可能性がある」^{③⑧}とされている以上は、当然そのような視点から歴史記述を読む必要性がある。そこで、温暖気候に向かう直前の七世紀後半代、天武天皇の時代から持統朝を経て文武朝へと到るまでの微妙な気候の変動期に、「天候」等に関しては果たしてどのような記事が残されているだろうか。その点を次に見ておきたい。参考までに、天武四年から慶雲三年までの三十年間に起こった水旱や地震など自然災害の記事を中心にして簡略にまとめた表を作成しておいた(表二)。すでに東野治之氏^{③⑨}も考察されているように^{③⑩}、当時においてはそういう自然災害への為政者による対応姿勢には中国の災異思想^{③⑪}の影響が表れていると考えるのが妥当である。

さて、天武紀七年の直前で注目される関係記事としては、

(ア) 五年是夏条「大旱。遣使四方、以捧幣帛、祈諸神祇。亦請諸僧尼、祈于三寶。然不雨。由是、五穀不登。百姓飢乏(是の夏に、大きに早す。使を四方に遣して、幣帛を捧げて、諸の神祇に祈らしむ。亦諸の僧尼を請せて、三寶に祈らしむ。然れども雨ふらず。是に由りて、五穀登らず。百姓飢乏す。)(前掲『書紀』下、四二四〜四五頁)

である。その年の五月甲戌条には下野国司の奏上に「所部の百姓、凶年に遇りて、飢多て子を賣らむとす」(同四二二〜三頁)ともみえ、早

表二：天武朝～文武朝の災異記事（天武四年～慶雲三年）

	旱	雩・ 祈雨	地震	雨・ 大水	大風	雪・霜 氷零	飢餓	疫病	蝗
天武4			11月						
天武5	是夏	○							
天武6	5月	5月	6月	11月		12月			
天武7			12月						
天武8	○	6月・7月	10・11月			6月	2月		
天武9	○	7月	9月	8月	8月				
天武10	○	6月	3・6・ 10・11月						
天武11			1・3・7 8・8月		7月	7月			
天武12	7・8月	7月			9月				
天武13	○	6月	10月						
天武14			12月						
朱鳥1	○	6月	1・11月			3月			
持統2	○	7・7月		○					
持統4	○	4月							
持統5				4・5・6月					
持統6	○	5・6月		閏5月					
持統7	○	4・7月							
持統9	○	6月							
持統11	○	5・6月							
文武1							閏12月		
文武2	4・5・6月	4・5・6月						3・4月	
文武4								12月	
大宝1	○	4・6月	3月	8・8月					8月
大宝2	○	7月			8月		9月	2・6月	3月
大宝3								3・5月	
慶雲1	○	6・7月		○	8月		4・5月	3月・夏	8月
慶雲2	○・8月	6月		○	7月		○	○	
慶雲3	○・7月	6月		7月			2・4・ 7月	1・4月 是年	

- ・それぞれ該当する記事は『日本書紀』と『続日本紀』から抽出した。
- ・各当該の記事が書かれている「月」名だけを示し、「干支日」は省略した。
- ・「雩」とか「祈雨・請雨」の記事がある場合は、「旱」の欄にも○印を入れた。
- ・あるいは「是年諸国飢疫・・・」とあれば、「飢餓」と「疫病」欄に○印で表した。
- ・また、例えば「地震」等が同じ月内に二回あれば、その月名を重ねて記した。
- ・日蝕や月食、あるいは瑞祥に関する記事は、この表では省略に従った。

魃による飢饉が深刻な状況にあったことが窺える。四年夏四月癸未条に初見の「風神（龍田）・大忌神（廣瀬）」祭祀が、この五年以降は夏四月と秋七月の二回執り行われるようになり、持統天皇十一年までほぼ毎年その時期に遣使して祀らせる、いわば有司摂事で継続された。同じ八月には、後の養老令の規定よりは①広範囲に食封を支給し（丁酉）、②四方に臨時の大解除を行い（辛亥）、③囚人に対する大赦（壬子）も行っている。推測するに、これらはいずれもこの夏の大量の旱による五穀不登、百姓飢餓といった社会情勢に対応する蠲免措置の一環であったと考える。翌六年の四月には天武を諤る者も現れ^{四〇}、流刑に処された。五月には再び旱に見舞われ、京師、畿内に雩（雨乞い）を実施している。そして六月には大地震が起きる。被害のほどは不明だが、実はこれは十三年冬十月壬辰に起きる本震により大打撃をうけるに至るまでの長い余震の序章でもあった。八月には飛鳥寺に一切経を讀ましめ、天武自身もその南門に御して仏を拝んでいる。旱魃等による不安な世情を慮つての行動という側面もあったのではないかと考えている。

次には天武紀七年より以降で注目されるいくつかの記事をみておこう。まずは、

（イ） 九年十一月戊寅条「詔百官曰、若有利国家寛百姓之術者、詣闕親申。則詞合於理、立為法則（百官に詔して曰はく、若し国家に利ある。これは中国の皇帝が詔して「賢良方正の士を挙げよ」^{四一}）というのと同じ精神に発するものである。何らかの災異現象の出現に際して、薄徳のゆえに「責は予一人にあり」とした上で、併せて自らの政治に対して直言極諫できる人士を求むとするときの常套句であった。実際に実行したかどうかは別問題としても、明らかにこの天武の詔はそれを踏まえている。表一には簡略に示したが、実際、八年六月には大さが桃の実ほどもある雹がふり、また引き続く旱天に雩（雨乞い）も繰り返され（同年六月壬申、七月甲申、九年七月戊寅）、更に断続的な余震（七年十二月、八年十月戊午、十一月庚寅、九年九月乙未）や日蝕（九年十一月朔）もあった。こういう「水旱、年穀不登、日蝕、地震」といった自然現象を中国の災異説では地上を治める天子の不徳や失政などに対する天からの譴告である^{四二}、と考えたのである。（イ）がそういう災異への対応を示すものであることは早くから既に指摘されてもいる^{四三}。

更には、天武が災異説を十分に理解し、かつそれをいかにうまく治世に活用せんとしたのかを窺わせる詔がある。すなわち、

（ウ） 十二年春正月丙午条に「詔曰、（略）。朕初登鴻祚以来、天瑞非一二多至之。傳聞、其天瑞者、行政之理、協于天道、則應之。是今當于朕世、毎年重至。一則以懼、一則以嘉。是以、親王諸王及群卿百寮、并天下黎民、共相歛也。乃小建以上、給祿各有差。因以大辟罪以下、皆赦之。亦百姓課役、並免焉（略）（朕、初めて鴻祚登しより以来、天瑞、一二に非ずして多に至れり。傳に聞くならく、其の天瑞は、政を行ふ理、天道に協ふときには、應ふと。是に今朕が世に當りて、年毎に重ねて至る。一は以て懼り、一は

以て嘉す。是を以て、親王と諸王及び群卿と百寮、并て天下の黎民、共に相歓びむ。乃ち小建より以上に、禄給ふこと各差有らむ。因りて大辟罪より以下、皆赦す。亦百姓の課役、並に免す、とのたまふ。」(同上、四五六～四五七頁)

という。治政に失道あれば災害を以て譴告するが、「行政之理、協于天道」^{〔四四〕}うものであれば天瑞を以て応えるものだ。自分が即位して以来、毎年のように重ねて天瑞は現れているではないか。皆と共に相歓ばんとするものである。それゆえに、給禄、課役の免除、罪人への大赦を行うというもの。確かに、天武二年三月の白雉をはじめとして、同十年七月朱雀・九月赤亀に至るまで、白銀(三年三月)、瑞鷄・白鷹・白鵠(四年正月)、瑞鷄(五年四月)、赤鳥(六年十一月)、瑞稻五莖(七年九月)、嘉禾・芝草・瑞稻(八年八月)、白巫鳥(九年三月)・朱雀(七月)・嘉禾(八月)と、まるで何時とは知らに準備されたかのごとくにも、「天瑞」は毎年必ず献上されている。

しかしその反面で、この詔の直前にあたる十年、十一年には、都合九度にわたる大小の群発地震(余震)のほか、旱天による雨乞い(十年六月)、日蝕(同十月朔)、そして信濃国や吉備国では十一年秋七月に「霜降り」と「大風」によって五穀は稔らなかったという。仮に天瑞が献上されても、その情報は限られた人間のものではしかない。大多数の一般民衆にとっては旱魃や五穀不登、そして何より度重なる地震の方がより直接的に体感できる点で、避けがたい恐怖と不安があった。えも言われぬ不安感是他ならぬ天武の内にもあったはずである。しかし怯まず数多の「天瑞」を以て自ら新年を寿ぐ姿勢をみせ、臣下の動揺を抑えて苦境を乗り越えんとしたのであった^{〔四五〕}。

この天武十二年も七月から八月まで旱天続きで、百済僧の道蔵に雨乞いをさせ「雨を得たり」と記すが、八月庚申には「天下に大赦」するしか外に打つ手はなかった。翌十三年六月甲申にも例に違わず「雨乞い」をしている。そしてその十月、終に大地震(本震)が襲う。

(エ) 十三年冬十月壬辰条は「逮于人定、大地震。舉国男女唱、不知東西。則山崩河涌。諸国郡官舎、及百姓倉屋、寺塔神社、破壊之類、不可勝数。(中略)是夕、有鳴聲如鼓、聞于東方。有人曰、伊豆嶋西北二面、自然增益、三百餘丈。更為一嶋。則如鼓音者、神造是嶋響也(人定に逮りて、大きに地震る。国舉りて男女叫び唱ひて、不知東西ひぬ。則ち山崩れ河涌く。諸国の郡の官舎、及び百姓の倉屋、寺塔神社、破壊れし類、勝て数ふべからず。(中略)是の夕に、鳴る聲有て鼓の如くありて、東方に聞ゆ。人有りて曰く、「伊豆嶋の西北、二面、自然に增益せること、三百餘丈。更一つの嶋と為れり。則ち鼓の音の如くあるは、神の是の嶋を造る響きなり」といふ。)(同上、四六四～四六五頁)

と凄まじい激震のあった事を伝えている。翌十一月庚戌に土佐国司から大津波のあったという報告も届いた。同月甲午には「天文悉亂、以星隕如雨(天文悉くに乱れて、星隕つること雨の如し)。」(同上、四六六～四六七頁)とも記す。同年、伊賀・伊勢・美濃・尾張の四国に対して採られた以後の「調と労役」とを交互に免ずる措置は、単に壬申の乱時の功労に報いるというだけではなく、地震後に情報が錯綜するな

かで急ぎ手を打った蠲免措置という側面も考慮すべきであろう。時に、倭葛城下郡や丹波氷上郡からの瑞祥の報せがあるもどこか虚しい。翌十四年三月には信濃国に灰が降って草木がみな枯れたといい、四月には紀伊国司から「牟婁温泉の湯が出なくなった」由の報告も入っている。いずれも今回の大地震の影響で、前者は連動した火山噴火のあったことを示している。秋七月辛未に「美濃国以東の東山道、および伊勢国以東の東海道諸国の有位者たちの課役を免除」した詔がみえ、更に九月戊午条には「東海・東山・山陽・山陰・南海・筑紫方面へそれぞれ巡察使を派遣して、各国司・郡司・百姓らの消息を調べさせた」という。これには当然、地域によっては地震による被害状況をつぶさに把握するという事^{【六六】}もその目的のなかには入っていたと考えなければならない。

余震はなおその十二月辛巳に西方より起こったといい、翌朱鳥元年正月庚申にもあった。その夏四月丙申条は多紀皇女ら三人を「伊勢神宮」に遣わしている。あくまでも憶測に過ぎないが、この四月には恒例となっていた廣瀬大齋忌神・龍田風神を祭るという記事が珍しく欠けている点を重視すると、あるいは引き続き災異と世情不安のゆえに、この時ばかりは「伊勢神宮」^{【六七】}に治世安寧を願って奉祀させたのかも知れない。五月癸亥に初めて天武が病魔に侵されていることを記すが、同月、諸寺堂塔を掃き清め、天下に大赦して囚人たちを解放したのはそのためであろう。かくして世情不安定のなか、洪業道半ばにして天武は九月丙午に正殿に崩御した。

後事を託された持統の時代には夏の大水と旱天とに悩まされたが、総じて旱天請雨の記事が多い（表一参照）。

（才） 五年六月戊子条「詔曰、此夏陰雨過節。懼必傷稼。夕惕迄朝憂懼。思念厥愆。其令公卿百寮人等、禁斷酒肉、攝心悔過。京及畿内諸寺梵衆、亦當五日誦經。庶有補焉。自四月雨、至于是月『此夏、陰雨、節に過へり。懼るらくは必ず稼を傷りてむ。夕までに惕みて朝に迄るまでに憂へ懼る。厥の愆を思ひ念ふ。其れ公卿・百寮人等をして、酒肉を禁め断めて、心を撰め悔過せしめよ。京及び畿内の諸寺の梵衆、亦当に五日、經を誦め。庶はくは補有らむことを』とのたまふ。四月より雨ふりて、是の月に至れり。」（同上、五一〇～五一頁）

とあれば、大嘗祭のあったこの年の夏は、一転して三ヶ月にもおよぶ長雨に悩まされていたのである。翌六年五月には名山岳瀆に対して請雨したが、閏五月にはまた大水があり、京師と畿内四国に金光明經を講読するよう詔を下す（丁酉条）が、六月には再び請雨しなければならなかった。早雨錯綜した異常気象の傾向が著しいが、以後、持統朝には五たび請雨記事（表二）が遺されている。

次に、『続日本紀』^{【六八】}で文武朝の元年から慶雲三年までの初期段階（十年間）の記事を一瞥すると、引き続き旱天に見舞われ祈雨の記事（十回）と並んで飢饉（七回）と疫病（十一回）の蔓延していたことが窺える（表一参照）。そういう異常気象にあつて注目すべき記事に、（カ） 大宝二年三月己卯条「鎮大安殿大祓。天皇御新宮正殿齊戒。惣頒幣帛於畿内及七道諸社（大安殿ヲ鎮メテ大祓ス。天皇、新宮ノ正

殿ニ御シテ、惣テ幣帛ヲ畿内及ビ七道ノ諸社ニ頒ツ。」(『統紀』卷二・一四頁)

がある。これは文武三年と四年の両年にわたり、諸国への巡察使を三たび派遣^{五七}して各地の非違状況を検察した上で、なおかつ夏季旱天下での祈雨、更には蝗害による秋稼の損失など、治世上にもはなはだ厳しい社会情況に直面していた局面で、臨時に行われた幣帛の頒布であった。当時としては、そういう災異現象を鎮静化せんがために畿内、七道諸国の諸神に祈らせたのである。文武はそのために正殿で斎戒をしたのちに幣帛を頒布したのであった。こういう災異の頻発などに際して臨時に行う斎戒の事例は当然中国の皇帝にもあり^{五八}、珍しいことではない。断言は避けたいが、卑見では皇帝によるこういう臨時の斎戒は例えば『晋書』禮志にいう「災祥之発、所以謹告人君、王者之所重誠、故素服廢樂、退避正寢、百官降物、用幣伐鼓、躬親而救之(災祥ノ発ルハ、人君ニ謹告スル所以ニシテ、王者ノ重ク誠ムル所ナリ、故ニ素服ニシテ樂ヲ廢シ、正寢ヲ退キ避ケテ、百官ニ物ヲ降シ、幣ヲ用ヒテ鼓ヲ伐チテ、躬親カラ之ヲ救ハムトス)。」^{五九}という儒教精神に通じるもので、遡れば遠く春秋齊に大旱のあった折、靈山を祠らんとした景公を諫めて晏子が「君誠に宮殿を避けて、暴露し、靈山河伯と憂を共にせば、其れ幸にして雨ふらんか。」^{六〇}と勧めた故事にも通底しようか、と想像している。文武天皇のこの斎戒は、天武朝以来、醸成され来った日本的災異説の考え方に従ったものではないだろうか。

ともあれ、その後も氣候不順に加え台風被害などにより農作物には深刻な事態であったことが左記各条文の記述から知られる。

(キ) 大宝二年八月庚子条「駿河下総二国大風。壞百姓廬舍。損禾稼。」(『統紀』卷二・一五頁)

(ク) 大宝三年七月甲午条「以災異頻見年穀不登。詔減京畿及大宰府管内諸国調半。并免天下之庸。」(同上卷三・一八頁)

(ケ) 慶雲元年四月壬午条「備中。備後。安藝。阿波四国苗損。並加賑恤。」(同上・二〇頁)

(コ) 慶雲元年八月辛巳条「周防国大風。拔樹傷秋稼。」(同上・二二頁)

(サ) 慶雲元年十月丁巳条「有詔。以水旱失時。年穀不稔。免課役并当年田租。」(同上・二二頁)

(シ) 慶雲元年十二月辛未条「大宰府言。去秋大風。拔樹傷年穀。」(同上・二二頁)

それゆえ、飢餓や疫病がこの時期に集中(表二参照)してみられるのであろう。乾燥するあまり近江国では自然発火による山火事(大宝三年七月丙午)もあつたし、太政官奏に「雖久雩祈。未蒙嘉澍(久シク雩ヒシ祈ルト雖モ。未ダ嘉澍ヲ蒙ラズ)。」(慶雲二年六月丙子)という有様で、同八月戊午条の詔にも「陰陽失度。炎旱弥旬。百姓飢荒。或陷罪網(陰陽度ヲ失ヒ。炎旱旬ニワタリヌ。百姓飢荒シテ。アルイハ罪網ニ陥ル)。」とみえ、この年には廿ヶ国が飢疫に苦しんだ(同上・二四頁)という。この疫病蔓延をうけて、翌慶雲三年の閏正月乙丑条には「勅シテ神祇ニ禱祈ラシム。天下ノ疫病ニ由ルナリ。」とみえ、同月癸酉条で泉内親王を伊勢大神宮へ参拝させたのは、この天下の

疫病平癒を祈らせたのであり、いわゆる神祇官による「有司撰事」ではなく天皇の代理として参向したものであろう。当時、伊勢斎宮に在任中の當耆皇女^{金三}が担う職能には上記のような緊急を要する臨時の祈祷参宮は当初から含まれてはいなかったのである。前節に触れた榎村氏の論考にある「祭祀権の分与」は、あるいはこのような形でその都度行われたと想定されうるのかも知れない。

以上、天武朝から文武朝にかけての「災異」記事を中心にその概要を述べた。節を改めて、文武天皇の倉橋離宮と天武天皇の倉梯斎宮について考えてみたい。

③ 倉梯斎宮と文武の離宮

前節には敢えて触れなかった『続紀』の次なる条文をまずは掲げておく。

(ス) 慶雲二年三月癸未条「車駕幸倉橋離宮(車駕、倉橋ノ離宮ニ幸ス)。」(同上・二二頁)

(セ) 慶雲二年四月壬子条「詔曰。朕以菲薄之躬。託于王公之上。不能德感上天仁及黎庶。遂令陰陽錯謬。水旱失時。年穀不登。民多菜色。

每念於此惻怛於心。宜令五大寺讀金光明經。為救民苦。天下諸国。勿收今年舉稅之利。并減庸半(詔シテ曰ク。朕ハ菲薄ノ躬ヲ以テ。

王公ノ上ニ託ルモ。徳ハ上天ヲ感カシ仁ハ黎庶ニ及ブコト能ハザレバ、遂ニ陰陽ノ錯謬シテ。水旱モ時ヲ失ヒ。年穀登ラズシテ。民ニハ多ク菜色セシメタリ。此ヲ念フ毎ニ心ヲ惻怛セリ。宜シク五大寺ヲシテ金光明經ヲ読マシメ。民ノ苦ヲ救ハムコトヲ為サシムルベシ。

天下ノ諸国ハ。今年舉稅ノ利ヲ收ムルコト勿レ。并テ庸ノ半バヲ減ゼヨ、ト)。」(同上・二三頁)

後者の(セ)は明らかに自らを中国の皇帝に比擬せんとした詔だが、前の(ス)と無関係ではなく、両者は相互に関連している。先に概観したように、天武朝からこの文武朝にかけては、時に「大水」をもたらしながらも全体的には凄まじい旱魃被害の連続で、飢餓と疫病と各地に蔓延するような時代に遭遇していた。当時の気象状況は、一般的に冷涼多雨とされる所謂「古墳寒冷期」^{金四}の終末期にあたり、安田喜憲氏の言葉を借りれば、それはおよそ「万葉寒冷期」^{金五}に相応しうるかも知れない。つまり阪口豊氏のいう七二〇年から気温の急上昇が始まり七八〇年にそのピークを迎えるという「温暖期」のまさに直前にあって、なお寒冷期内にはありながらもそれまでに比べ気温が急上昇し始める時期に相当していたからである。とりわけ慶雲二年の新年を迎える頃には全国的な「不登」と共に、とりわけ「飢・疫」の蔓延に見舞われていたのであった。

そのような状況を踏まえたとき、(セ)で蠲免救民策を内容とする詔を下す前に文武は自らの皇統の創業者たる祖父天武が果たせなかったことを同じ倉橋の「離宮」において実践したのではないだろうか。「離宮」とあって「斎宮」ではないがそれは単に名称の問題に過ぎず、そこでの斎戒と親祭による祈祷には何ら支障を来すものではない。現に文武は前引(カ)大宝二年三月己卯条でも「御新宮正殿斎戒」して

おり、齋戒の場所が「齋宮」でなければならないという法はどこにもない。それは中国でも同じであった。天武ゆかりの地に文武が「離宮」を設けていたのは、持統が「吉野離宮」を設けていたのも同じことである。重要なのは、倉橋には天武が実施できずに終わった「天神地祇」祭祀の陰翳が残っているという事実である。無論、文武がそこで天武紀七年にいうところの「天神地祇」を祭ったという証拠は何一つなく、まったく判らない。しかし、度重なる「災異」に対して自戒を込めて齋戒し、自ら神に祈る場所としては「倉橋離宮」以外にはなかったであろう。「倉橋離宮」に幸して約一か月後に出された詔（セ）には、かつて祖父の天武が度重なる災異を前にして臣下の動揺を抑え、瑞祥の誇示を以って乗り切らんとした詔（前掲、ウ・十二年春正月丙午条）と同様、今回もその難局を乗り越えんとする文武の政治姿勢ないし信条が読み取れる。当時としては文化的先進国として誉高い中国の皇帝に自らを比擬して臨んだ姿に、それが表れている。

以上のように考えたとき、同じく早魃下に「倉梯齋宮」において天武が試みようとしたことは、孫の文武天皇の事績（ス・セ）を通したとき、蠲免救民を旨とした天下安寧の祈禱であったことが逆に見えてくる。古代律令制国家の建設途上にあつて、天皇の徳を広く天下に知らしめる手段として、災異説を援用した親祭と蠲免施策は一定の政治的機能を果たし得たものと考えたい。それが臨時の親祭であったことは中国皇帝の類例^五に照らしても、むしろ補強されるところである。従って私は、天武紀七年に見える「倉梯齋宮」については、西宮一民氏の研究成果に即してそれを「イハヒノミヤ」と訓じ、「天皇自身が齋居し神に祈る施設」として理解するものである。

（五）まとめ

天武紀七年の倉梯齋宮における祭祀の政治的意味を考察するため、まずは『書紀』当該条本文をできる限り精確に読み取ることから始めた。その結果、天武親祭のための齋宮である以外の意味は見出せなかった。そして、該条に関わる先学諸氏の研究成果も紹介して、卑見を陳べた。その上で、本件に対する自説の拠つて来るところを、①当時の気象の概要、②天武朝から文武朝にかけての災異記事とそれへの対応内容を概観し、それと同じ視点から③天武の倉梯齋宮と文武の倉橋離宮がもつ同等の宗教的機能、という三つの側面から主題に迫ってみた。

その結果、両者が七世紀後半代から八世紀初頭における半ば慢性的な異常気象下にあつて、早魃（祈雨）・不登・地震・飢疫等による世情不安定のもとで神々に嘉応を求めて執行されんとした親祭儀礼であり、それによつて蠲免救民の徳を天下に知らしめるべき政治的意義を有するものであったとの結論に達した。従つて同時に、当該「倉梯齋宮」は「天皇自身が齋居し神に祈る施設」であつて、西宮一民氏の研究成果に即して、これを「イハヒノミヤ」と訓むべきことを改めて確認することができた。併せて、わが国の七・八世紀代における「齋宮」の語には、なお複数の訓義を考慮すべきであり、「齋宮」Ⅱ「齋内親王の齋居する施設」とのみ解釈するような固定観念をまずは捨て去るとともに、前後の社会的諸事情にかんがみて予断・偏見に支配されることのない正統な評価を下すべきであることを重ねて標榜するものである。

本稿は、大化の改新ないしは天武朝以降における草創期神祇制度の成立展開という歴史的な流れに沿った考察^{五七}などはとてもできず、当時ににおける「災異」とそれへの対応事情だけを軸に考察したため、全体的にはバランスを欠くものとなった。ただ、天武紀七年条に関して従来の諸研究があまり注意を払われなかった、当時の為政者が政治的難局を乗り切るために「災異説」を援用した実状に基づき別の視点からの解釈を試みた点で新たな提案にはなったのではないかと考えている。ともあれこれは、あくまでもの先学諸氏の研究成果と併せて考慮されるべき一案としての卑見を提出したに過ぎず、決して先行研究のすべてを否定する意図のないことを念のため申し添えておきたい。

【註】

- (一) 坂本太郎ほか校注『日本書紀』下（日本古典文学大系六七、岩波書店、一九七一年第五刷版）、巻第二十九、四三一頁。以下、本文等での引用には『書紀』と略記する。
- (二) 虎尾俊哉「大化改新後の国造―特にその職掌と設置の時期について―」（『藝林』第四巻四号、一九五三年所収）、特に二二（二四二）頁。三橋正著『日本古代神祇制度の形成と展開』（法蔵館、二〇一〇年）、特に第二篇第一章、第三節「律令祭祀形成への道程」（二六〇四二頁）。
- (三) 橘守部『萬葉集檜婦手別記』（橘純一編『橘守部全集』第四、国書刊行会、一九二二年所収）、二五五～二五七頁。
- (四) 北山茂夫著『万葉集とその世紀』上、（新潮社、一九八五年六刷）、第六章「天武・皇后の共治のもとに」、二〇七～二二二頁、「十市皇女の悲恋」参照。
- (五) 拙稿「中国の斎宮に関する予備調査」（『斎宮歴史博物館研究紀要』三、斎宮歴史博物館、一九九四年）十八～十九頁（この旧稿は天武紀七年の「斎宮」を主題にしていなかったため、関連して触れたに過ぎず、きわめて不十分なものであった）。
- (六) 榎村寛之「大来皇女と『続日本紀』」（『続日本紀研究』第三六四号、二〇〇六年）、三六～三七頁。前掲の旧拙稿執筆の段階では「神に奉祀する斎王たるべき皇女は未婚であるべし」との先入観が筆者にはありまたそのようにも書いたが、それは間違いであることを榎村氏から教示・啓発を受けた。
- (七) 引用した岩波日本古典文学大系本『日本書紀』下（四三〇頁）では「倉橋の河上」の「河上」に「かわかみ」とルビを付すが、これは「河のほとり」と訓むのが無難である。周知のように中国では「河」は基本的に「黄河」を指し、「河上」といえば「黄河の上流」ではなく「黄河のほとり」という意味である。日本は違うと言われればそれまでだが、「かわかみ」と訓んだのでは場所が「上流域」に限定されてしまう。古代の祭祀が多く「水」と不可分の関係にあったことは洋の東西を問わない。古代の神祭りは豊饒祈願に一つの主眼があり、またその斎戒にあたつて沐浴潔斎が不可欠でもあることから、神祭りに付随した「斎宮」は日本の場合でも「水辺」から遠く離れては機能し得なかった。水辺の祭祀は何も上流域のみで行われたのではない。河に近く、川を見下ろすやや小高い土地を「河上（河のほとり）」と称したのである。それが日本にあっても最もふさわしいことは、実例を示して拙稿「伊勢斎宮の立地とその歴史的背景」（『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四十二号、二〇一四年所収、一二四頁）に述べておいた。一般的に、為政者は「凡

立國都、非於大山之下、必於廣川之上、高毋近旱而水用足、下毋近水而溝防省（凡そ國都を立つるには、大山の下に於いてするに非ざれば、必ず廣川の上に於いてす。高きも早に近づくこと母くして水用足り、下きも水に近づくこと母くして、溝防省く）」（公田連太郎訳注『管子』、国民文庫刊行会、一九二四年、巻一、乗馬第五・經言五、四二頁）ということを経験的に識っていたからである。中国のみに限定されない普遍性を持つ哲理である。

(八) 新訂増補『国史大系二十二・令義解』（吉川弘文館、一九六六年）、巻二、七七〜七九頁。

(九) 崇峻天皇即位前紀は前掲『日本書紀』下、一六七頁。『続日本紀』前篇（改訂増補国史大系、吉川弘文館、一九七二年）、巻三、二十二頁、文武天皇慶雲二年春三月癸未条に「車駕幸倉橋離宮。」とだけ見える。

(一〇) 前掲『令義解』巻五の宮衛令、一七八頁によれば、「鹵楯也。薄文籍也（鹵ハ楯ナリ。薄ハ文籍ナリ）。」というように、鹵は「警備に用いる大楯」であり、薄は「行列の順序を記す帳簿」の謂で、「天子の行列」を指した。中国では秦、漢より始まりその名があるという（宋・高承撰『事物紀原』（中華書局、一九八九年、巻二、一〇五頁）。また、『世説新語』雅量第六に言う「鹵簿」も参照（井波律子訳注『世説新語』2、平凡社、二〇一四年、三五一頁）。

(一一) 『江談抄』（群書類従第二十七輯雑部、一九八三年改訂三版第五刷所収）第一・公事（五五二頁）の「警蹕事」によると、「天子用之。文選に見ゆ。出警入蹕。是天皇迎送事歟。近衛司誡諸人之義也。」云々とある。梁・蕭統編『六臣注文選』上冊（中華書局、一九八七年）、巻三、東京賦、六九頁下段。『周禮注疏』（卷三十一）、夏官隸僕に「掌蹕宮中之事（宮中ニ蹕ヒスル事ヲ掌ル）」といい、後漢の鄭司農の注に「蹕謂止行者、清道。若今時散蹕（蹕ハ行者ヲ止メ、道ヲ清ムルヲ謂フ。今時ノ散蹕ノゴトシ）」とあり、前掲『事物紀原』（二二四頁）にも「蓋始於周制（蓋シ周制ニ始マレリ）」という。伊勢貞丈の『貞丈雜記』（改訂増補 故実叢書）一卷、明治図書出版、一九九三年、巻之二「人物之部」には、「蹕蹕と云は、天子出御の時御先はらひの聲を云也。御殿の内にも外へ御出の時も蹕蹕あり。其聲はおうと云ふ由、後醍醐天皇の日中行事に見えたり（略）」（一五四頁）云々と記す（句読点は田阪）。

(一二) 岡田重精著『齋忌の世界―その機構と変容―』（国書刊行会、一九八九年）、第一章第三節「齋忌の具象化」、(一)「祭祀・儀礼の場」の「祭祀・儀礼の停廢」（六三〜六八頁）において、『続日本紀』天平勝宝八年（七五六）十一月に「諒闇のため新嘗祭を拝した」例や、宝龜七年（七七六）四月詔勅に「災異続発の原因に諸社の修理の不備、人畜の穢、祭祀怠慢などを掲げて憂慮している」事例などを挙げて、「神聖冒瀆の罪科が神靈の咎懲を招くとする觀念」を示すものと指摘し、その冒頭に当該天武紀七年四月条を引いて（断定はできないが）と含みを残しつつ、十市薨去の穢による祭祀停廢の先蹤としている（なぜか氏は断言を避けているが、私はそのように理解している）。

(一三) 註(一) 前掲『日本書紀』下、四二三頁。

(一四) 註(一) 前掲『日本書紀』下、四七六〜四七七頁。

(一五) 黒板伸夫・森田悌編、訳注日本史料『日本後紀』（集英社、二〇〇三年）、巻第三十三（逸文）、八九七頁。

- (一六) …新訂増補国史大系『文徳天皇実録』(吉川弘文館、一九八四年)、巻六、六六頁。
- (一七) …前掲『文徳天皇実録』巻八、八一頁。
- (一八) …新訂増補国史大系『日本三代実録』(吉川弘文館、一九八三年)、巻廿五、三三七頁。
- (一九) …前掲『日本三代実録』巻四十六、五九三頁。他に気付いたところでは、「元慶三年八月八日木工頭藤原維邦於寮曹司頓滅。其穢及宮中諸司。(略)」ともある(新訂増補国史大系9『本朝世紀』、吉川弘文館、一九六四年、第二・朱雀天皇、一一頁に引用。これは『三代実録』にはない記事である)。
- (二〇) …『園太暦』巻二(岩橋小彌太・斎木一馬校訂、続群書類従完成会、一九七一年、一八八頁。なお、『中右記』は同日条に「十一日辛未、天晴、太上皇有御幸賀茂社」(東大史料編纂所『大日本古記録 中右記一』、岩波書店、一九九三年、六七頁)と簡略に記し、『後二条師通記』も「十一日辛未、天陰、院御行、次第大略如八幡云々、略有違例歟」(東大史料編纂所『大日本古記録 後二条師通記 中』、岩波書店、一九五七年、五六頁)と粗略である。
- (二一) …津田左右吉「日本の神道」第二章(同氏著『津田左右吉全集』第九巻、岩波書店、一九六四年所収)、及び同氏著『日本古典の研究』下、岩波書店、一九七三年所収、第五篇、特に三三三〜三六一頁。
- (二二) …前掲『橘守部全集』第四、二五六〜二五七頁。
- (二三) …北山茂夫著『万葉集とその世紀』上(新潮社、一九八五年六刷)、第六章「天武・皇后の共治のもとに」所収、「十市皇女の悲恋」(二〇七〜二二二頁)。
- (二四) …私は折口学にも暗く間違っていればお詫びするが、折口信夫氏であれば万葉の歌々からこういう解釈へと話を引き出そうとするのを「合理化」と呼んで忌避したのではないだろうか。『折口信夫全集』第九巻所収、「萬葉集の民俗学的研究」(五四〇〜五五一頁)。三浦佑之氏は著書『神話と歴史叙述』(古代文学研究叢書一・若草書房、一九九八年所収、II「物語としての歴史」第一章「語られる人と事件」)の3「創られる悲劇の人―大津皇子」(一六七〜一七一頁)において折口信夫の歴史認識を解く鍵の一つとしてこの「合理化」の問題を採り上げており、教示を受けた。
- (二五) …近藤芳樹著『標注令義解校本』(増訂故実叢書第三十八回、吉川弘文館、一九三一年)、二三八頁。
- (二六) …以上は、註(二)前掲虎尾氏論文「大化改新後の国造―特にその職掌と設置の時期について―」による(特に二〇〜二二頁を中心に引用した)。国造の問題は新野直吉著『国造と県主』(至文堂、一九六五年)に詳しく整理されている。
- (二七) …註(二)前掲三橋氏著書『日本古代神祇制度の形成と展開』、第一篇第一章「古墳祭祀から律令祭祀へ」、第三節「律令祭祀形成への道程」、特にその「三、天武天皇と神祇」(三三〜四二頁)に依拠し、引用するものである。
- (二八) …註(六)前掲同氏論文。行論中に榎村氏が、遠山美都男氏の指摘も踏まえて、「天智の妻である倭姫皇后」は「近江朝廷における何らかの祭祀権を掌握していた可能性が高い」(三七頁上段)と指摘した点に魅力を感じた(以前から私は、いわゆる「伊勢神宮創始」神話に登場する「倭姫命」は天智の妻倭姫

皇后の何等かの事跡をもとにデフォルメしたものではないかとさえ想像しているほどだからである。

(二九) …『講座 文明と環境』第六巻、吉野正敏・安田喜憲編集『歴史と気候』、朝倉書店、二〇一二年新装版第二刷。

(三〇) …例えば、鈴木秀夫・山本武夫著『気候と文明・気候と歴史』（朝倉書店、一九七八年）、安田喜憲著『気候と文明の盛衰』（朝倉書房、一九九〇年）、同氏著『気候変動の文明史』（N T T出版、二〇〇四年）、山本武夫著『気候の語る日本の歴史』（そして、一九七六年）、同氏著『日本書紀の新年代解説』（学生社、一九七九年）、吉野正敏『歴史時代における日本の古気候』（気象庁監修『気象』三〇〇号、一九八二年四月所収）、同氏著『歴史に気候を読む』（学生社、二〇〇六年）、同氏著『古代日本の気候と人びと』（学生社、二〇一一年）など（以上、著者名五十音順）。

(三一) …阪口豊『日本の先史・歴史時代の気候―尾瀬ヶ原に過去七六〇〇年の気候変化の歴史を探る―』（『自然』、中央公論社、一九八四年五月号所収）。

(三二) …阪口氏註（三二）前掲論文、三一頁左「寒冷多雨な古墳時代」。同氏は別の論文「過去一万三〇〇〇年間の気候の変化と人間の歴史」（註二九前掲『歴史と気候』所収）でも「気候は紀元後二四六年に急に寒冷化し七三二年に至る長い寒冷期を迎える。」（八頁）「日本では七三〇年ころを境にして寒冷で湿潤な気候から温暖で乾燥した気候に変わった。」（九頁）、「七〇〇年ころは世界的な気候転換期であった。」（二〇頁）と書いている。

(三三) …北川浩之「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」（前掲『歴史と気候』四七～五五頁所収）、五二頁。

(三四) …吉野氏註（三〇）前掲書『古代日本の気候と人びと』、四四頁。初出は二〇〇九年『地学雑誌』一一八（六）号所収論文「四～十世紀における気候変動と人間活動」（一二二頁）。

(三五) …吉野氏註（三四）前掲論文「四～十世紀における気候変動と人間活動」、一二二～八頁左。

(三六) …吉野氏註（三四）前掲論文「四～十世紀における気候変動と人間活動」、一二二～九頁右。

(三七) …北川浩之氏註（三三）前掲論文「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」、五四頁。

(三八) …東野治之「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」、『日本歴史』一九六九年、通二五九号所収）、五七頁。松本卓哉「律令国家における災異思想」（『纂弘道編』『古代王権と祭儀』、吉川弘文館、一九九〇年所収）、一四九頁、一六二頁（註十一）。

(三九) …災異説の解説によく引用される典型的な文章の一つが董仲舒の対策にある。『漢書』八（中華書局、一九八三年第四次印刷）、卷五十六、董仲舒伝、二四九八頁。災異説については前掲松本卓哉氏の論考に詳しいが、拙稿「不改常典の典拠と公羊伝」（『鷹陵史学』第三十九号、二〇一三年所収二三頁、三三頁）にも触れることがあった。なお、従来からあまり詳述されなかった「目録学の観点から」する『春秋繁露』の真偽問題については、深川真樹氏の近著に詳しい（同氏「目録学の観点から見る『春秋繁露』と董仲舒の關係」『汲古』第六九号、汲古書院、二〇一六年所収、四七～五二頁）。

(四〇) …この事件の背景や経緯など内容は全く不明である。管見では天武朝から元明朝のころまで、「壬申年の功」を以って嘗て従軍した人物の死去に際し褒賞を

与えている。勝者側の皇統としては当然の措置だが、しかしそれは同時に、敗者の側に天武朝に対して心情的に根強い反感等のあったこととあるいは表裏をなすものであったのかも知れない。その上、天候不順で旱魃や飢饉などによる社会的に不安定な情勢下においては、その彼らの心情が為政者への直接的な不満の声として噴出することもまたあり得たであろう、と想像しておく。

(四一) …例えば、前漢文帝二年(前一七八)十一月癸卯晦に日蝕があった時の詔は典型例の一つである。前掲『漢書』一、卷四、一一六頁。

(四二) …前掲『漢書』卷五十六の董仲舒伝ではこれを「国家将有失道之敗、而天乃先出災害以譴告之」(二四九八頁)と言っている。

(四三) …東野治之氏および松本卓哉氏による前掲論文参照。

(四四) …中国の「天」という表現に替えて「天道」とした点に、天武朝における災異説の摂取の仕方に何か工夫があるのかも知れない。

(四五) …平安時代、淳和天皇の天長元年に多氣の斎宮を度会の離宮に遷していたが、讓位を承けた仁明天皇の承和六年十一月五日に焼亡した(拙稿「神火と伊勢斎宮の焼亡事件」に詳述)。十二月八日、太政官および左大臣藤原緒嗣以下の廷臣全員が、以前参河国や越中国から報告のあった五色の慶雲の出現は『孫子瑞応図』などの古典に照らしても「太平之應」であり、「政和平」、「德至山陵」のめでたい瑞応であるからと、斎宮焼亡に大きな衝撃を受けていた天皇を慰め励まさんとしたのを彷彿とさせる『続日本後紀』卷八、承和六年十二月丙辰条)。それとは逆だが、天武は新しい国家建設の途上に度重なる災害に直して、プラス志向で乗り切らんとする優れたリーダーシップを持っていた、と思う。

(四六) …広く公人不正の歴史は古いが、例えば隋代にも司隸臺管轄下の巡察史には水旱蟲災時における地方からの虚偽報告を検察する必要があった(『隋書』卷二八・百官志下)。唐・代宗の大暦十二年秋の洪水被害の際には蠲免政策を悪用して私腹増殖のために虚偽報告を以ってする例がみられ(『旧唐書』卷十一・代宗本紀)、後の憲宗は李絳ら中央の臣下にも蠲免策に乗じた不実報告のあることを察知し(『旧唐書』卷十五・憲宗本紀下)、出使する郎官御史に各地の状況十一箇条を録して奏聞せよと勅を下している(『唐会要』卷六二・御史台下、出使)。本朝弘仁四年五月丙子条の勅にも「禹水九年人無飢色、湯旱七歳民不失業」(後紀逸文)と諸国の吏を戒めるが、嵯峨朝でも国司らの解文に不実報告があり(弘仁十年五月二日太政官符)手を焼いていた。この天武朝に巡察使の初例が見えるのも、各地の被害状況を正確に把握しておかないと、虚偽報告による不必要の支出で国家財政の負担増が避けられないからである。律令制国家の完成をめざす天武はそのことを十分に承知して、拔かりなく手を打ったのだと考える。

(四七) …『日本書紀』における「伊勢神宮」についてはなお熟慮の要があり、この時の「伊勢神宮」がどこに在ったかの判断は今では保留しておきたい。

(四八) …新訂増補国史大系『続日本紀』前篇(吉川弘文館、一九七二年)を利用した。以下『続紀』と略称し、引用には巻数とその頁数とを示す。

(四九) …前掲『続紀』卷一、三年三月壬午条、十月戊申条(四〇五頁)、四年二月壬寅条(五頁)による。

(五〇) …気づいた範囲でいうと、『周書』卷七、宣帝本紀、大象元年十二月戊午条や『旧唐書』卷十一、代宗本紀、大暦七年五月乙未条など。

(五一) …『晋書』三(中華書局、一九九一年第四次印刷)、卷十九、志第九、禮上、五九五頁。

(五二) …藤田劍峯訳・註『国訳晏子春秋』(国訳漢文大成經子史部第十八卷、国民文庫刊行会、一九二四年)、卷一、内篇諫上第一、二〇頁。ついにながら、北魏の高祖孝文帝は太和十五年夏四月、正月以来の旱に有司が百神に祈ることを奏上すると、詔して「昔成湯遇旱、斉景逢災、並不由祈山川而致雨、皆至誠發中、澍潤千里。(略)」と言ひ、この斉景公の一件にも言及した(魏收撰『魏書』一、中華書局、一九九二年第四次印刷、卷七下、一六七〜一六八頁)。また、中国戦国時代の思想家墨子は、「天子善を為せば天能く之を賞し、天子暴を為せば天能く之を罰す。天子、疾病禍祟あらんに必ず齋戒沐浴し、潔く酒醴棗盛を為りて以て天鬼を祭祀すれば、則ち天能く之を除去す」(小柳司氣太訳注『国訳漢文大成 国訳墨子』(国民文庫刊行会、一九二〇年)、「天志中」第二十七、一一三頁(なお、類同の文言は「尚同中」四七頁、「天志上」一〇九頁にも見える))と言っている。

(五三) …前掲『統紀』卷一・文武天皇二年九月丁卯条(三頁)に、「遣當耆皇女侍于伊勢齋宮(當耆ノ皇女ヲシテ伊勢ノ齋宮ニ侍ラシム)」とする。ここまでの『統紀』中の記述に當耆皇女を解任して帰京させるべき事由は見当たらない。

(五四) …阪口豊氏註(三一) 前掲論文、三一頁左。

(五五) …安田喜憲氏註(三〇) 前掲著書『氣候変動の文明史』、八五〜八六頁。

(五六) …例えば註(四六)に触れた唐・代宗が大暦七年五月に「齋宮に別居して、神明に禱り」神の嘉応を得んとしたのも、やはりその前年まで地震に加え、度重なる大旱や連雨により秋稼は害され米価の高騰を招いていた時期に当たっており、その五月にも「天下諸州に時雨を失い宿麥未だ登らざる」状況下での臨時の親祭であった。そしてその月に天下に大赦を実施している。彼はその五年後の大暦十二年六月にも「齋居祈祷」を行った(『旧唐書』二、中華書局(一九七五年)、卷十一、代宗本紀(二六七〜三二八頁)、特に三〇〇頁及び三一二頁)。近年の氣象研究では、この代宗の時代は唐初よりも甚だしい干旱期に当たり、災荒記事の多い事が指摘されている(葛全勝等著『中国歴朝氣候変化』、北京科学出版社、二〇一一年、第八章第二節、三一四〜三一八頁)。

(五七) …前掲三橋氏の他にも、西宮秀紀著『律令国家と神祇祭祀制度の研究』(塙書房、二〇〇四年)は、日本の律令制祭祀の成立・展開過程を丹念に分析、解明した専著として不可欠の一書である。

第三章 伊勢斎内親王の呼称をめぐる

(一) はじめに

かつて穂積陳重氏は、「避称」を「タブー」の思想に基づくものであって、身体上の離隔から始まって思想上の離隔に及び、声音を以て直接に名に触れることはこれを冒瀆するものとしたことによる。」^①と規定し、これには「絶対的避称」と「相対的避称」との二種があるとした(同上)。すなわち前者の絶対的避称には「地名または居所によるものが最も多い。実名敬避の習俗ある社会においては、尊貴の名を呼ぼうとするときにその居所を用いて代称とすることが最も便宜とされる。(以下略)」(同上)と述べている。

時の天皇に代わり伊勢大神宮に奉祀すべく伊勢国多気郡の斎宮に発遣された皇女がすなわち「斎内親王」だが、彼女を指していつしかその居所である「斎宮」の名を以て呼ぶようになったのは周知のとおりである。穂積氏のいう「絶対的避称」にあたろう。元来、実名で呼ばれることのない皇女ではあったが、更にそれを居所名で呼ぶに至ったのには、避称は勿論のことながら、賀茂斎院の成立したことによって、『延喜式』ではたいてい「斎王」と汎称される斎内親王が伊勢と賀茂とに並存するに至ったために、呼称上の混乱を避ける必要性があったからではないか、と想定してはじめてのがこの章の発端である。

その「斎王」という呼称の成立に関しては榎村寛之氏に先駆的な研究^②がすでにあり、重要な指摘はなされている。その中で、「斎内親王」は内親王が選ばれた時の呼称で、「斎(女)王」は女王が選ばれた時の呼称、つまり両者は当時の皇族女子における称号^③の違いに基づく対称であることを初めて明らかにし、関係者への警鐘の役割も果たした。そして「六国史」や有職故実書のほか、『延喜式』における表記方法の分析等から、「斎内親王」に代わる統一呼称(汎用語)としての「斎王」が十世紀には定着し、その成立期は九世紀後半にまで遡る可能性などを指摘している。その「総論」とともに「斎王」呼称の変遷過程を天皇制の変質という歴史的背景のなかに位置付けて論じているところも榎村論文に学ぶべき点である^④。

後塵を拝する本稿は当然のことながら右の研究成果に依拠して進めるが、果たしてどれほどの「落穂ひろい」ができるものか、もとより何ら確証はない。時代史を俯瞰するだけの視点は持ち得ないが、伊勢「斎内親王」という意味における避称「斎宮」がいつ頃から現れ始め、汎称「斎王」とどのように交わりながら定着したのか、その実態をより精確に知りたいと思ひ敢えて作成を試みたのが表三^⑤である。

難点の一つは、六国史以降の現存史書にある不安定さである。例えば、後朱雀天皇の時の良子卜定時の記事を『本朝世紀』では欠逸するために『扶桑略記』や『栄花物語』などで補うしかなかった。おおむね十世紀以降は『貞信公記』をはじめとする公家の日記が当時の実態を知る上で重要になるが、日記類にもまた欠逸部分があり、また相互に一定の基準で書かれた訳ではないので同じベースで比較するには注意も要

する。とまれ、不確定要素の避け難い一面はあるものの、今回試作した表から凡そ判明もしくは抽出し得るいくつかの事象などを指摘して、『史記』滑稽列伝に始まった私の「齋宮」探索調査の旅に一つの区切りを付けておきたいと考える。

(二)「齋内親王」の正統性

伊勢齋宮史上において「齋内親王」として最初に登場したのは首皇太子のむすめ「井上(女)王」である。養老五(七二二)年九月十一日乙卯のことであった⁸⁸。そしてこの「齋内親王」こそが最も正式な(ないしは伝統的な)呼称として以後も永く宮中にその命脈を保ち続けたであろうと考えている。まずはその事を大きく二つの史料から確認してみよう。

その第一は、伊勢齋宮に向かういわゆる齋王群行当日の発遣儀式において、中臣に対し必ず下された恒例の勅である。『日本三代実録』には陽成天皇の元慶三(八七九)年九月九日丙申条に伊勢齋識子内親王の発遣に際し、「勅。今令奉進留齋内親王波。此依恒例天。三千年波齋清天。天照大神乃御杖代尔定天奉進内親王曾。中臣宜尔吉久申天奉進礼止宣。有本稱唯。降殿退出(勅スラク。今進メ奉ラシムル齋内親王ハ。此レ恒例ニ依リテ。三千年ハイモヒ清メテ。天照大神ノ御杖代ニ定メテ進メ奉ル内親王ゾ。中臣マサニ宜シクヨク申シテ進メ奉レト宣ル。有本(この時は大中臣朝臣有本)唯ト稱ヘテ。殿ヲ降り退出ス。」⁸⁹と見える。識子は内親王だから「齋内親王」というのは当たり前だと思われるかも知れないが、そうではない。これとまったくの同文が天永二(一一一一)年成立の『江家次第』⁹⁰にも収められているし、また「中右記部類第廿七」にも見えている。後者『中右記』の例は崇徳天皇の天治二(一一二五)年九月十四日壬午条で、この時伊勢に発遣された齋王は守子女王であったが、この勅書でもやはり「齋内親王」の称を用いている。更に、壇ノ浦の合戦から二年余を経た文治三(一一八七)年九月十八日条に『玉葉』は齋宮潔子の発遣当日の記事を記すが、その中にも同一の勅書文を記している⁹¹。しかも、これら十二世紀の事例より早く一條天皇の齋王恭子女王が群行する日に、その発遣の儀を詳述した『小右記』永延二(九八八)年九月廿日甲辰条では、「勅曰、云々如例、中臣稱唯退出(勅シテ曰ク、云々ト例ノ如シ、中臣ハ唯ト稱ヘテ退出ス)」⁹²とすでにして省略されるに至ってさえいる。それは汎称「齋王」の出現からおよそ百年後にあたるが、実資ほどの公卿ともなれば、もはやそれは逐一記録せずとも解り切った内容で繰り返されて来た恒例の勅書ゆえに「例の如し」で十分だったことが判る。ちやうど即位宣命に同じ文言が繰り返されるのに似ている。右に掲げた史料に限ってみても、少なくとも九世紀後半代から十二世紀後半代までのおおよそ三百年間は辿りうる。ともかく、右のような公的儀式の場における中臣への勅にあつては、時の齋王が内親王であろうが女王であろうがそのことには関係なく、並べて「齋内親王」と称えるのが基本的原則であり、時代を超えて永く繰り返されてきた正当な呼称に他ならなかった。

なお、次に採り上げる「宣命」ともかわる事例にもなるが、朱雀天皇朝の齋王として天慶元(九三八)年九月十五日己未に僅か十歳の徽

子女王が群行したが^{二二〇}、恒例の發遣の儀に物忌み中の天皇は出御せず、貞觀三（八六一）年の恬子齋王の時の例に準じ、代わつて摂政太政大臣藤原忠平がそれを執り行つた^{二二一}。この時、恒例の中臣（大副大中臣朝臣奥坐）への勅はなく、両宮の幣物を受けた忌部（少副齋部宿祢春行）と共に退出している^{二二二}。代わりに忠平から使王神祇伯忠望王に渡された宣命文には文意は殆んど同じだが「齋内親王」の表記はなく、「皇太神乃御杖代と定申天。三年之間齋侍シ奉齋子女王乎。依例天奉賜不九月神嘗乃大幣帛と共尔奉出給んとセル間仁。……云々（皇太神ノ御杖代と定メ申シテ。三年ノ間齋ヒ侍ラシム齋子女王ヲ。例ニ依リテ奉リ賜フ九月神嘗祭ノ大幣帛と共ニ出デ奉リ給ハんとセル間ニ。）」（同上一九頁）とする。これなどは通常にはない異例の措置でもあり、上記の類例からは外して考えざるをえない。

さて第二には、伊勢大神宮への通常の宣命（告文）や太政官符などである。陽成即位とそれに伴い恬子内親王に替えて先述の識子齋内親王を卜定したことを伊勢大神宮に報告する告文^{二二三}には当然「齋内親王」とある。下つて後一條天皇朝の齋王嬪子女王は長元四（一〇三一）年六月に神宮の月次祭神事を終えたあとに託宣事件^{二二四}のあつたことで有名だが、その八月廿三日戊辰条に、大神宮へ向かう伊勢使に託された宣命草を『小右記』が伝えている。兵部権大輔菅原忠貞の手になるその宣命草によると（略）爰六月十七日恒例乃御祭奈留尔依天、齋内親王諸司遠率列天、参詣之天・・・（爰ニ去ル六月十七日恒例ノ御祭ナルニ依リテ、齋内親王諸司ヲ率牛列シテ、参詣シテ・・・）^{二二五}とする。汎称「齋王」や避称「齋宮」が普及定着してすでに久しかったが、先の中臣への恒例の勅にしてもこの種の宣命にしても、必ず「齋内親王」を用いている。そこでは内親王も女王も一切の区別はない。それが伝統的に正統な呼称だったからである。

事情は賀茂齋院でも同様で、例えば嘉応元（一一六九）年十月廿日、無品僖子女王を内親王として卜定した後に起草された陰陽寮勘申や諸司に下知する太政官符^{二二六}などの公的文書には『延喜式』『齋院司』で一度も使用されていない「齋内親王」の称を用いている。後にも触れる親王宣旨の背景には恐らく俸禄など経済面での事由もあつたに違いないが、右記呼称の面からみると、榎村氏がいうように「理想的な齋王は、内親王だとする意識」^{二二七}のあつたことは間違いなく、しかもそれはかくも根強く存続していたのであつた。因みに、文武天皇二（六九八）年九月丁卯条に「遣當耆皇女侍于伊勢齋宮（當耆皇女を遣はし伊勢の齋宮に侍らしむ）」^{二二八}とするのはまだ「齋内親王」の呼称が定まつてはいなかった時代のことに属している。

次に、上述した勅や宣命とは別に、通常の歴史的記述の中における「齋内親王」の呼称にも注目してみよう。伊勢・賀茂双方の「齋内親王」欄を通覧して気づくことがある（表三）。それは、いま焦点を女王（表中▽印）に当てて見たとき、親王宣旨の有無にかかわらず、卜定時のみならず通常は「齋内親王」と表記されることが基本的にはないか、もしくはその傾向が強いという現象がみられるという事実である。当てはまらないのは、伊勢では繁子（光孝）、喜子（近衛）、熙子（順徳）のわずか三人が、また賀茂では穆子（光孝）、怡子（崇徳二條）、僖子

(高倉)、礼子(土御門順徳)の四人だけが、女王であっても「齋内親王」の呼称をもつ例外的な事例になる。しかし、むしろそれは親王宣旨を遵守した結果だと解釈すれば、必ずしもその例外とするには及ばぬであろう。例えば繁子の場合は卜定後に親王宣旨があったので、その後には齋内親王と表記される場面もあったのである。少なくとも伊勢齋王の場合は、十一世紀前半代頃までそのような傾向は否定できない。法令書からは窺い得ない当時の関係者らの何等かの意識、言い換えればある種の規制ないしは慣習的なものが図らずもそこに反映されたのではないか、という点を指摘しておきたい。

ところで、表中に▼印で表示した嬪子女王(後一條天皇室)の場合は、『日本紀略』寛仁元(一〇一七)年九月廿一日丙辰条に「伊勢齋内親王禊于東河。入野宮。」^{⑤⑥}とあるのを指している。国史大系本の傍注にある「當子」がすでに間違っているが、同じ『日本紀略』が寛平九(八九七)年三月十九日条で齋王元子女王の下座^{⑤⑦}を伝えて「其日。伊勢齋元子内親王下重。」^{⑤⑧}とするのを、頭注で「内親王、據上文恐當作女王(内親王、上文ニ據レバ恐ラクハマサニ女王ニ作ルベシ)」「下重、恐當作下座(下重、恐ラクハ當ニ下座ニ作ルベシ)」として誤謬を正している。先の寛仁元年九月の条文に頭注がないのはそれを當子(當子)内親王と考えたからであろうが、當子はすでに前年の長和五(一〇一六)年九月三日甲辰に帰京している^{⑤⑨}。従って、寛仁元年九月廿一日丙辰条の「伊勢齋内親王」の場合も、それが齋王嬪子女王の野宮入りである以上「内親」を衍字として訂正した方がよいのではないかと提案したい。このように言うと、嬪子女王は先の宣命草に「齋内親王」と呼称されていたのだから『日本紀略』が彼女を「伊勢齋内親王」と表記していても矛盾しない、との反論があろう。しかし『日本紀略』のように歴史的時間軸に沿った記述の中で用いられ、また時間と共に変遷もし得るようなその呼称と、先の宣命等において非クロノロジカルな普遍性をもって使用された呼称とは本質的に意味合いの違う別個の問題であると考え(理由は後述)。それはともかく、表三からおぼろげながらも窺い得る原則的な規制(ないし慣習)から言えば、親王宣旨のない嬪子女王であればなおさらのこと「齋内親王」の呼称は用いないのが普通なのである。その点、藤原道長の日記は称号(女王か内親王か)によって呼称を峻別している。當子内親王には汎称としての「齋王」と避称「齋宮」とを併用するが、嬪子女王に対しては「齋王」の称だけしか用いていない^{⑥⑩}のは単なる偶然とは考え難いのである。

ここで、先にも触れた「親王宣下」の後に卜定された伊勢・賀茂両齋王(嬪子・官子)の例を見ておこう。『中右記』には、鳥羽天皇の天仁元(一一〇八)年十月廿八日庚辰に卜定された嬪子女王について「其前可為内親王哉(其の前に内親王と為すべき哉)」^{⑥⑪}とし、しかる後に「嬪子内親王可為齋宮者(嬪子内親王を齋宮と為すてへり)」、「嬪子内親王為伊勢齋王之由、可下知諸司(嬪子内親王を伊勢の齋王と為す由、諸司に下知すべし)」(同上)等々とある。この時の親王宣旨に至る議論はこの『中右記』のほか『殿暦』にも見える。時に権中納言宗忠によれば、「齋宮卜定朝家一代大事也。御上表猶可令用他日給歟(齋宮ノ卜定ハ朝家一代ノ大事ナリ。上表ヲ御メテ猶ホ他日ヲ用キシメ給フ

参考典拠	齋院	齋王	親齋王内	賀茂齋	皇女	齋宮	齋王	親齋王内	伊勢齋	皇女	天皇	備考欄
続日本紀 官曹事類						—	◎	◎	—	井上▽	元正 聖武	養老五年九月乙卯初任。神亀四年九月壬申伊勢大神宮に侍る。
続日本紀 一代要記 (皇女名を参照)						—	◎	—	—	縣▽	聖武	二親の喪により齋宮を退出。
										小宅▽	孝謙	正史に初任記述を欠き不明。
						—	○	—	—	山於▽	淳仁	天平宝字二年八月戊午、齋王の事を伊勢太神宮に告ぐ。
						—	—	—	◎	酒人	光仁	宝亀三年十一月己丑条。
										浄庭▽		正史に初任記述を欠き不明。
						—	—	○	—	朝原	桓武	続紀に初任記事なし。一代要記の齋宮は後代の呼称ゆえ採らず。
日本後紀						—	—	○	◎	布勢		
後紀逸文 小右記所引大外記 文義勘文	—	—	○	—	有智子	—	—	◎	仁子	嵯峨	弘仁九年五月九日官符新置齋院司。	
					時子▽	—	◎	—	—	氏子	淳和	停止・再置の経緯は久禮論文参照。 時子女王に呼称記さず(逸文)
続後紀	◎	—	—	—	高子	◎	—	○	—	久子	仁明	齋宮・齋院の初出。
文徳実録	—	—	◎	◎	恵子	—	—	◎	◎	晏子	文徳	恵子は慧子とも。
	—	—	◎	—	述子							
三代実録	—	—	○	◎	儀子	—	—	○	◎	恬子	清和	卜定後は伊勢・賀茂齋内親王。 貞観元年十二月、初齋院の初見。
	—	○	◎	◎	敦子	—	—	◎	◎	識子	陽成	元慶五年賀茂祭祝詞で齋王初出。
	—	◎	—	○	穆子▽	—	—	◎	○	掲子		穆子は女王で、齋王のまま。
	—	◎	○	◎		—	◎	○	◎	繁子▽	光孝	★兩名卜定後内親王に、その後は全て齋内親王。
日本紀略 貞信公記 西宮記 小右記	○	◎	—	—	直子▽	○	◎	▼	○	元子▽	宇多	元子入野宮条、紀略頭注は内親の二字恐らく衍字とするに従う。
	○	◎	○	—	君子	◎	○	○	—	柔子	醍醐	前齋宮晏子薨。前齋宮恬子薨。前齋宮掲子薨。前齋院恭子薨。齋院宣子薨。前齋院君子薨。前齋院敦子薨。
	○	—	—	◎	恭子							
	◎	○	○	—	宣子							
	—	◎	—	—	韶子							
日本紀略 小右記所引御記 貞信公記 吏部王記 九暦 北山抄 朝野群載 十三代要略					婉子	◎	◎	○	○	雅子	朱雀	承平二年三月定齋院入便處、伊勢宮内、賀茂東職。齋内親王雅子母喪還京。北山抄は雅子を前齋王とも。前齋宮齊子薨。
	○	◎	○	—		◎	○	—	—	徽子▽		齋王徽子母喪退出。
						◎	◎	○	—	英子	村上	英子は卜定後四ヶ月で薨。
						◎	◎	—	—	悦子▽		貞信公記は悦子を卜定伊勢齋宮。天暦二年八月悦子初齋宮。
					◎	○	○	—	楽子		楽子卜定は十三代要略に依る。	
日本紀略 本朝世紀権記 十三代要略 河海抄 園太暦	◎	◎	○	—	尊子	◎	◎	○	—	輔子	冷泉	安和元年十二月輔子初齋宮・尊子初齋院の御禊御前次第使等定む。
						◎	◎	—	—	隆子▽	円融	齋王隆子卒于齋宮。天禄三年九月二日伊勢初齋宮（園太暦卷三、観応元年十月四日、卜部兼豊）。
					選子	◎	○	○	—	規子		河海抄は規子女王とす。
						○	◎	—	—	済子▽	花山	寛和二年六月伊勢初齋宮警御・・・。前齋院尊子薨。
	◎	◎	○	—		○	◎	—	—	恭子▽	一條	前齋宮輔子・楽子薨。
日本紀略 御堂関白記 小右記 大鏡 十三代要略					馨子	◎	◎	○	—	当子	三条	関白記は当子に齋王・齋宮を用う。長和二年八月当子伊勢初齋内親王、初齋宮。十三代要略卜定伊勢齋王。
	◎	◎	—	—		○	◎	▼	—	嬬子▽	後一条	関白記は嬬子を齋王のみ。長和五年九月嬬子初齋宮。宣命草に齋内親王。齋院選子は老病退出。
本朝世紀 扶桑略記 栄花物語 十三代要略	◎	◎	—	—	娟子▽	◎	?	—	—	良子▽	後朱雀	★娟子卜定後に勅内親王（薨伝）。良子卜定後内親王（十三代要略）。範国記は未見。

表三：齋宮齋院呼称一覧 (1/2)

栄花物語 十三代要略 鏑抄	◎	—	—	—	祿子	◎	—	—	—	嘉子	後冷泉	嘉子祿子卜定記事十三代要略。
	○	—	—	◎	正子	○	◎	—	—	敬子▽		敬子・正子卜定記事十三代要略。
	◎	—	—	—	佳子	◎	—	—	—	俊子	後三条	俊子・佳子卜定記事十三代要略。
水左記 栄花物語 十三代要略	◎	—	—	—	篤子	○	◎	—	—	淳子▽	白河	淳子女王卜定記事十三代要略に。
	○	◎	—	—	斉子▽	◎	—	—	—	媞子		媞子卜定記事は十三代要略。郁芳門院としては頻出。
中右記 本朝世紀 永昌記 殿暦 長秋記 十三代要略	◎	○	—	—	令子	◎	◎	—	—	善子	堀河	善子卜定後一貫して斎宮（中右記）寛治元年九月初斎宮善子入御左近衛府。斎王令子不例に依り齋院に御神楽。禎子卜定賀茂斎王（十三代要）。
	◎	◎	○	—	禎子							
	◎	○	—	—	官子▽	○	◎	—	—	姁子▽	鳥羽	★姁子・官子を先に内親王とす。天仁元年十月、親王宣旨を巡り議論あり（中右記・殿暦）。
永昌記 中右記 十三代要略 鏑抄	○	◎	—	—	惊子	○	◎	—	—	守子▽	崇徳	天治元年四月守子伊勢初斎院。初斎宮とも（永昌記）。恂子初斎院。先被下准后勅書。恂子は統子に改名。
	◎	◎	—	—	恂子							禧子を祥子にす（中右記）
	◎	—	—	—	禧子							
本朝世紀 台記 百鍊抄 山槐記 兵範記 明月記 十三代要略 鏑抄	◎	○	○	—	怡子▽	○	◎	—	—	妍子▽	近衛	★先被下可為内親王宣旨。康治元年四月依初斎宮可入御也。妍子に初斎宮記事多く、群行時は斎宮。
						◎	○	◎	—	喜子▽		★喜子は先被下親王宣旨、台記は卜定伊勢斎内親王とす。仁平三年八月以藤忠房可為初斎宮勅別当之由被宣下。怡子は仁平元年以前は斎内親王以後は斎王とする傾向顕著。
						◎	—	—	—	亮子	後白河	亮子帰京後前斎宮。
						◎	○	—	—	好子▽	二条	★好子内親王と為し、齋宮に卜定。
頭広王記 兵範記 山槐記 一代要記 鏑抄	○	—	—	—	式子	◎	—	—	—	休子▽	六条	★先に内親王と為して斎宮卜定。仁安二年九月初斎宮休子入野宮。
						◎	—	—	—	惇子▽	高倉	★惇子・僖子共、内親王と為して斎宮・賀茂斎王に卜定。嘉応元年九月惇子初斎宮。陰陽寮勘申、太政官符等に僖子賀茂斎内親王。
百鍊抄 玉葉 頭広王記 愚昧記 兵範記 鏑抄	◎	◎	○	—	僖子▽	◎	—	—	—	惇子▽		★功子を内親王と為し斎宮に卜定。初斎宮入野宮。母喪に野宮で退下。★範子親王宣旨後に斎院卜定。治承三年九月範子初斎院入左近府給。
	◎	○	—	—	頌子	◎	○	—	—	功子▽	安德	
	◎	◎	—	—	範子▽							
百鍊抄 玉葉 猪隅関白記 三長記 明月記 吾妻鏡						◎	○	○	—	潔子	後鳥羽	文治二年五月初斎宮入御左近府、九月潔子初斎宮入御野宮。翌三年九月十九日群行す。
	◎	—	○	—	礼子▽	◎	—	—	—	肅子	土御門	正治二年五月肅子初斎宮入御諸司。★礼子先被下親王宣旨。元久元年六月有初斎院卜定事。建永元年四月初斎院入御紫野院。肅子に准后記事。
						◎	—	○	—	熙子▽	順徳	★先被下親王宣旨。建保三年九月初斎宮禊東河入御左近府。
百鍊抄 壬生家文書 吾妻鏡						◎	○	—	—	利子▽	後堀河	祖母の喪に群行す。前斎宮立后。
						◎	○	—	—	昱子	四条	暦仁元年初斎宮入御野宮。嘉禎三年、四年昱子伊勢初斎院、伊勢斎院とも。四条崩御退下帰京。
						◎	—	—	—	曦子▽	後嵯峨	★先に内親王宣旨。寛元三年九月伊勢初斎院遷〔御野宮？〕。
											後深草	前斎宮昱子薨。前斎宮曦子為皇后。
續史愚抄						◎	—	—	—	愷子	龜山	
實躬卿記						◎	—	—	—	驊子	後二条	
續史愚抄 壬生家文書						◎	—	—	—	權子	後醍醐	前斎宮驊子内親王を皇后とす。
						◎	—	—	—	祥子		建武二年八月祥子初斎宮可有遷御野宮。

表三：斎宮斎院呼称一覧 (2/2)

ベキカ」^{二六}といい、当時すでに皇胤（白河上皇や堀川院の皇女）と称する皇女は何人もいてその母親がはっきりしなかった（同上）ことを特筆している。件の姁子女王は木工権頭季實朝臣の孫であることを誰も知らず、上皇に尋ねても明確には覚えがない由、密々に六壬占^{二七}で王胤か否かを問うたところ、「為上皇實子之由顯然也、仍為齋王也（上皇ノ実子タル由顯然ナリ、仍リテ齋王ト為スナリ）」^{二八}と記している。後日、摂政右大臣の忠実が「猶可被下宣旨也、院御子と謂を以天可為齋王、何不蒙親王宣旨、事為神事上、可叶首尾也（猶ホ宣旨ヲ下サルル可キナリ。院ノ御子ト謂フヲ以テ齋王ト為ス可クンバ、何ゾ親王宣旨ヲ蒙ラザランヤ。神事ノ為ニツカフルノ上ハ、首尾ヲ叶フ可キナリ）。」^{二九}と主張し、即日宣旨が下された。翌十一月八日に、今度は官子女王を齋院に卜定したが、一日にして定まった姁子齋宮の例に准じ、官子女王の卜定もまた先に内親王としたうえで行われた^{三〇}。しかしながら両人ともクロノロジカルな記述においては「齋内親王」という呼称を用いられることはなかったのである。

ここで、もう一度冒頭の井上「齋内親王」にもどって付言しておきたい。『官曹事類』は『続日本紀』編纂時の本案中から中央官司事務にとり有用な記事を選んで編集した^{三一}とされ、ここでは冒頭の養老五年九月十一日乙卯条の記事が「以皇太子女井上王為齋王」^{三二}となつてゐるのは周知のとおりである。井上は父の首皇太子の即位以前に選ばれていたので、その時点ではまだ「内親王」ではなかったからである。従つて井上も養老五年段階では「齋（女）王」であり、首の即位をまつて「齋内親王」として伊勢齋宮に發遣されたのである。それを編纂段階で女王井上を「齋王」とせず最初から「齋内親王」としたわけである。実はそこに当時のある政治的事情が埋もれていてと考える。

かつては右掲養老五年の記事を以つて「齋王井上の發遣の儀」との誤った解釈をする人も一時的にはあつたし、また元正天皇の齋王であると解釈する人もあつたようである。確かに形式上は元正天皇朝の齋王だが、注意深く記事を追えば実態はそうなつてはいない。通常は天皇即位に伴い選ばれるはずの齋内親王もしくは齋王である。しかし、それを強引にも前倒して急いだのは、それによつて父首皇太子の即位を既成事実化することにあつた。そういう狙いから執られた政治的な措置であつたと考える。異母妹に阿倍内親王もいるが、早々と幼少の井上に白羽の矢が立つたところにも藤原氏の隠然たる政治力が働いていたと見ている^{三一}。皇位継承問題に直結させるべく「齋王制度」そのものが露骨に利用されたのである。裏を返せば、天武・持統皇統の悲願であり、元明や不比等の意向も強く働いていたであろう首皇太子の即位には明らかに不満勢力への牽制のあつたことがこういう側面からも推測され、早くから春秋の義に基づく「不改常典」を掲げたほどに^{三四}、念入りに布石を打ちつつ、慎重かつ周到に進められたことをそれは物語っている。そしてこの「齋内親王」なる正統的呼称の創起にも象徴されるように、聖武天皇朝は初期の齋宮史上における一つの画期であつた^{三五}。実はその画期において、齋宮跡に今も確認作業が継続する方格地割に関する当初の基本的な計画ないし素案の原形がすでに浮上していたのではないかと考える。それについての卑見は別章（「伊勢齋宮における墳

墓の削平と方格地割」において陳べるであろう。

(三) 呼称の使い分け

では、本来は居所を指す「齋宮」の語がいつごろから伊勢「齋内親王」ないし伊勢「齋女王」をさす避称として使われはじめ、その後はどのように変遷したのかを改めて表一の結果から類推してみよう。

最初の変化は仁明天皇朝に現れた。伊勢の場合は久子内親王を「齋宮」とし、賀茂の高子内親王を「齋院」と称して卜定している。これは明らかに齋院司の設置による影響であろうと思われる。二人の齋内親王が並存することになり、第一義的には呼称の上での混乱を避けるためであったが、両者を「伊勢齋王」「賀茂齋王」としなかったのは、久子も高子も「女王」ではなく、しかも当時はまだ「齋内親王」を「齋王」と呼称する習慣はなかったからではないかと考える。淳和天皇は一時「伊勢齋宮、賀茂齋院を廃止しようと試みていた」^{三三}という久禮旦雄氏の説を踏まえると、一時的にもせよという混乱の生じた後を継いだ仁明天皇の即位時にあつては、気分を一新して再スタートを切る意味合いもあつたかと想像できる。しかしその後（文徳・陽成）、伊勢齋宮の卜定時の呼称には「伊勢齋」と「齋内親王」とが四人続き、醍醐天皇朝の柔子内親王に至って再び「齋宮」になる。その間、概ね九世紀代には「伊勢齋」と「齋内親王」は内親王を卜定した場合に限られ、女王の場合は「齋王」とする意識―原則的な規制（ないし慣習）はここでも働いていたかのように見える。

そこで、柔子以降の伊勢齋宮の卜定時における呼称を追って行くと、途中に八例ほど該当しないように見えるものもあるが、おおむね十二世紀前半代（康治元年）の妍子女王に至るまで、親王宣旨の有無にかかわらず、あくまでも「原則的に」ではあるが女王の場合には「齋王」が、内親王の場合には「齋宮」がそれぞれ最初の呼称になっているのはむしろ驚きであった。勿論、冒頭に断つたように表作成に資する典拠は一樣ではなく必ずしも厳密さがあるとは言えないものの、卜定時における呼称に限っては前節にもみた一定の原則的規制（慣習―内親王であつたか女王であつたかにより区別する潜在的意識）がなおも働いていた可能性はこれを一概には否定し切れないのである。辛うじてそういう意味での呼称の使い分けはあつたのではないかと考える。

いま、該当しないとした八例をみても、内親王では雅子、輔子、当子、善子の四人、女王では徽子、悦子、隆子、良子の四人がいる。このうち不明部分を残す良子を保留にすると、徽子女王以外の六名には卜定時に「齋王」「齋宮」両方の呼称が認められ、言うところの規制から完全には外れているわけではない。独り徽子女王だけが例外的に該当しないだけである。その後は、十二世紀半ば（仁平元年）の喜子女王から十四世紀（元弘三年）の様子内親王に至るまでの十六名（半数は女王）全員が卜定時には例外なく「齋宮」と呼称されるようになる。つまり伊勢の場合は、九世紀前半代の仁明天皇朝で初出した避称「齋宮」が十世紀、十一世紀を通じて汎称「齋王」と並存しながら用いられ、こ

の十二世紀半ば以降の段階において、それまでの「齋王」に代わる汎称として確実に定着をみるに至るのである。これが今回の一覧表から窺える伊勢齋内親王の呼称をめぐる変遷の経緯であった。

賀茂の齋院についても一瞥しておく。すでに榎村氏の指摘にあるように、「齋内親王を指して「齋王」と表記した六国史上の初例」^{①②③}は、陽成天皇の元慶五（八八二）年四月廿日丁酉条にある賀茂祭当日の祝詞^④においてであった。循環・回帰的な宣命や祝詞を伴ったこういう神前儀礼には、前節にみた伊勢の場合であれば例外なく「齋内親王」としたところである。この九世紀後半代には、宇多天皇朝の賀茂の齋王直子女王が紫野院に入るときには賀茂「齋院」^{⑤⑥}と避称したのに合わせるかのように、同年九月に元子女王が伊勢に群行するときには伊勢「齋宮」^{⑦⑧}と避称を用い、また醍醐天皇朝の柔子内親王が群行する時には伊勢「齋王」^{⑨⑩}と汎称するようになる。九世紀後半代の末期に近いころに、賀茂齋院でも伊勢齋宮でもそういう事象がみられることが判る。そして十世紀に入ると、これもすでに榎村氏の指摘^{⑪⑫}にあるとおり、『延喜式』における「齋王」の呼称はあたかも「齋内親王」の略称と判断しうる汎用的な法制用語として使用される」（同上）という一面が現れるかのである。そしてこの十世紀以降は、避称「齋宮」も日記や文学において広範に使われるようになってくる。

表一を眺める限りでは、汎称としての「齋王」は、制度的には後発組の賀茂齋院においてより徹底されたように見受けられる。特に、十世紀から十一世紀前半代にかけてはそれが顕著であった。卜定時の呼称に限って通覧しても、賀茂の場合には伊勢で窺い得たほどには親王・諸王に対する原則的な規制（ないし慣習）をほとんど見ることがない。しかも、冷泉天皇朝の十世紀後半代以降は、伊勢の「齋宮」と同様に避称としての「齋院」が「齋王」と同じように頻繁に登場するようになっていく。やはり呼称による伊勢・賀茂両者の混乱を回避することが第一だが、都びとにとっては伊勢よりも賀茂齋院の方が身近にあったこともあるいは影響したかも知れない。

（四）初齋宮と初齋院

以前から気になっていたことの一つはこの両呼称の存在である。今回の作表作業を通じてより多くの事例に接する機会を得たので、最後にそのことに触れておきたいと思う。

まず周知される代表的見解の一つを引くと、初齋院とは「伊勢の齋宮および賀茂の齋院が、卜定後一年ないし二年間すごした宮城内の潔齋所をいう」^⑬とされている。具体的な「初齋院」の比定問題には今は立ち入らないことにして、国史における「初齋院」という用語表記の初見記事はと言えば清和天皇の貞観元年十二月廿五日丙午条^⑭である。そしてこの潔齋用施設名を表す「初齋院」は、『延喜式』巻五「齋宮」でも巻六「齋院司」でもなんら区別なく同じように「初齋院」と同一表記されている。それがもし普通の文中に単独で出てくれば、瞬時に区別はつかない難点がある。現状では前者式文中に五か所（「此院」を入れると六ヶ所）、後者では四か所に見える。これは汎称「齋王」に

も同じことがいえるが、同時期に伊勢斎宮と賀茂斎院とに關して記述することがたびたびあった当時としては、法制用語とはいえ非常に煩わしい名称であつたに違ひなく、早くからして關係者間の評判も芳しくはなかつたのではないか、と想像して余りある。

虎尾俊哉氏によれば、『延喜式』は延長五（九二七）年に奏進されたが、その後修訂事業の中心人物であつた伴久永の死去や新たな国史編纂事業等があつたために、修訂作業は中断したまま時が過ぎ、改めてその施行に漕ぎつけんとした村上天皇の意向により康保二（九六五）年六月に撰式所を再開してその施行準備に入つたのであるという。しかしながら、そもそもこの『延喜式』の施行（九六七年）によつて新たにはじめて効力を發する規定は、……まずほとんどなく、（中略）式の規定そのものにすでに有名無実となつてしまつたものが少なくなかつた」（同上）と言われている。法令集が必ずしも流動する現実の社会状況を映し出さない所以である。

その施行直後にあつた最初の斎王卜定は、冷泉天皇の安和元（九六八）年七月一日壬午のことで、伊勢斎宮に輔子内親王、賀茂斎院には尊子内親王が選ばれた。『日本紀略』はその十二月二日庚戌条に「定初斎宮初斎院御禊御前次第使等（初斎宮、初斎院ノ御禊ノ御前次第使ナドヲ定ム）」としてゐる。伊勢には式文にいう「初斎院」ではなく、少なくとも悦子女王の時にはすでに登場してゐた「初斎宮」という呼称を用いてゐる。しかもそれは文脈からみてもはや「宮城内の潔斎所」を指す施設名としてではなく、卜定されたそれぞれの斎王その人を指す呼称としても使われている。従つて、遅くとも十世紀後半代には初斎段階の斎王を指してそのような呼称が用いられてゐたことが判る。すでに施行直後にして現場サイドでは式文にある正式な法制用語にこだわらなかつたばかりか、それを以つて人物への呼称に転用している点からみても、先に想像したことは裏付けられる。以後の「初斎宮」「初斎院」の使用例は備考欄に記したとおりである（表三）。

法制上の呼称として定着・固定化された『延喜式』の世界と日々に変化發展し続ける公家（当事者）たちの言語空間とのあいだには施行以前からしてすでに乖離が生じていたのは、彼らがいかに前例を尊重する世界に生きていたとは言え、当然の成り行きであつた。再び虎尾氏の言葉を借りれば、『延喜式』の編纂というも「文化事業としての色彩が濃厚」だつたからであり、細部にわたる呼称表記の幅を限定的に規制するほどの拘束力はもとよりなかつたのである。

これと同列に論じることが出来ないかも知れないが、類似した事柄は中国にもある。例えば『大唐六典』や『大唐開元礼』にしても、やはり成書後すぐには行用されなかつたのであるという。その『大唐開元禮』には皇帝親祭による各種祭祀儀礼の斎戒規定を定めてゐる。そしてその祭祀に先立つ散斎四日致斎三日のうち、致斎一日を過ぐす施設名をすべて「行宮」として統一表記している。しかし、『唐大詔令集』や『旧唐書』礼儀志など現実に生起した歴史事象にもとづく記述においては、その「行宮」を「斎宮」と表記しているのである。翻つて、細部においては固定化された式文の用語にはこだわらない平安時代の公家たちの現実に対応しつつ工夫された呼称表記の在り方にこそ

当時の実態がより正直に反映されているであろう。

原則的に必ず一定期間を宮城内の便所に齋居しなければならなかった卜定後の「齋王」をさして、伊勢の場合には「初齋宮」と呼び、賀茂の場合は「初齋院」と呼んで両者を混同せぬよう工夫したものに他ならないのである。すでに見て来たように、「齋王」という共通した汎称の普及とも矛盾することなく、避称「齋宮」「齋院」の語も場面に応じて広く活用されて行った事実はおおむね表一の上にも表れていると思う。これまで、概説書等では特段注意されることはなかったが、伊勢齋宮の歴史に接する場合には、少なくとも十世紀半ば以降において、伊勢に群行する以前の「齋内親王」ないし「齋王」が「初齋宮」とも呼称された事は知っておかねばならない。その事実を踏まえた上で法制用語をもって今や広く使用され定着した「初齋院」の語は使用した方がよいと思う。

(五) むすび

唐突に思われようが、今回の考察の過程で、かつて小南一郎氏の著書から学んだことが頻りに思い出された。それは、「王権にとっての神聖さの保証」^(五)という、言わば王権（天皇権威と読み替えて）の拠って立つ権威の源泉を考える場合に、「歴史的・直線的な時間」と「円環的・回帰的な時間」（同上）との相違や関わりを認識すべきであるということである。小南氏の論考の趣旨からは外れるかも知れないし、また氏のスケールとは多分に相違しようが、本稿の主題に当てはめて誤解を恐れずに陳べることを許されたい。

今回利用した「六国史」や「日記」などは「歴史的な時間」の中で不可逆的に生起する「事柄」を時系列に沿って記すもので「直線的な時間観念」^(五)の支配する領域にある。一方、倭姫命が伊勢へ向かう遍歴譚は、『日本書紀』編纂段階において垂仁紀二十五年にかけていかにも歴史的事象を装った一種の「神話」に他ならないと私は考えて来た。その神話創製と併せ、律令制神祇制度の整備を進めた天武朝において創始された「齋王制度」は、歴史的な時間軸から遊離しては存在し得ないものだが、倭姫命による伊勢への遍歴・神宮創祀神話を可視的に地上に再現したものであり、それを独占的な循環的システムとして構築することにより自らの皇統（王権）の正統性を神の名において保証・維持せんとするものであった。そしてそれは繰り返される必要性があった。それ故、天皇の代替わり毎に「齋内親王」発遣の儀式を必要としたのである。実際、本稿第二節で引用した中臣への勅に「天照大神の御杖代と定めて」というように、垂仁紀二十五年（一書）や『皇大神宮儀式帳』にあるのと同義のフレーズを用いることから、伊勢齋内親王の群行が倭姫命の遍歴の再現（回帰）であったことを示している^(五)。この制度が有した神話的時空は、歴史的な時間の中にその都度設定された循環・回帰的な時間観念の支配する領域であった。そこに用意された勅や宣命は、調度品や装束などと共にその神聖な場を荘厳する機能を有したのである。

いささか大袈裟になったが、本稿の趣旨に即して改めて言い直すと次のようになる。通常は大極殿で執り行われる発遣の儀式で中臣に下さ

れる勅書や伊勢大神の神前において発せられる告文などは、直線的時間軸の中にその都度の別儀をもって装填される円環的時間観念を再生させるに重要な役割を担った。それゆえに、そういう勅書や宣命文に表記される「齋内親王」の呼称自体は、時系列に沿って記された歴史事象の中で用いられた呼称をそのまま反映したものではなく、またその逆でもない。表記は同じでも、本来的には別次元の用語である。後者における呼称は不可逆的時間の中に生起しまた変遷もするが、前者のはたとえ天皇や皇女が替わっても、常に繰り返される用語であった。第二節において、『日本紀略』寛仁元年九月丙辰条に齋王嬪子女王の「野宮入り（直線的时间での事象）」の記事にある齋内親王」の呼称と菅原忠貞による「宣命（円環・再生的時間演出）草の齋内親王」とは別問題であるとし、「内親」を衍字として訂正することを提案したのは、そういう理由からであった。つまり、宣命草に「齋内親王」とあるからと言って、それが直ちに嬪子女王の野宮入りの記事で「齋内親王」とする根拠にはならないのである。両者は使用され、また機能する場面や支配する時間的観念が異なる。伊勢齋内親王に供奉する中臣への勅や大神宮の神前に報告される宣命にあつては女王、内親王には関係なく恒常的に「齋内親王」と称えたのであり、それゆえ本稿ではそれを正当性をもつ呼称として位置付けた。それに対して汎称や避称はあくまでも直線的な歴史的時間観念の支配する場面で発生し、同時に常に変遷するものであつたのである。今回試作した一覧表ではこの後者の部分を取り扱つたのである。

そして、本稿が表三の作成に当たつて齋王の特に撰定ないし卜定時における最初の呼称に注目したのは、その時にこそ関係者の古い観念や慣習（こだわり）などが最も端的に表現されるのではないかと考えたからである。それには、固定的に体系化された法令や有職故実などの書よりは、むしろ天皇と伊勢大神宮にかかわる円環・回帰的な宗教儀礼に常時携わつた公家たちの日記の方がより生々しい実態を窺い知るのに適している。勅や宣命を除くそれぞれの関係記事では、伊勢、賀茂を問わず一人の齋王に対して複数の呼称が併用されていることが多く、全体としては特別なルールがあるようには見えない。しかしそういうなかにあつても、伊勢齋内親王の特に撰定・卜定時に焦点を絞つて注意してみると、「厳密に」とは言い切れないまでも、表記された呼称のあり方には何か原則的な規制（ないし慣例）のようなものが働いていたことは認めうると思う。

（ア）親王宣下の有無にかかわらず、選ばれる齋王が女王であつた場合には基本的に「齋内親王」と表記されることは稀有である。

（イ）概ね九世紀代には、「伊勢齋」や「齋内親王」の呼称は内親王を卜定した場合に限られ、女王の場合は「齋王」である。

（ウ）概ね十世紀の柔子内親王から十二世紀前半代の妍子女王に至る間は、卜定時において女王には「齋王」が、内親王には「齋宮」の呼称が用いられる傾向が顕著である。

（エ）そして、十二世紀半ばの喜子女王から制度が終焉を迎える十四世紀の様子内親王まで、十六名（半数は女王）全員が卜定時にも例外

なく「斎宮」と呼称されるに至る。

こうして伊勢斎内親王に対する呼称について、特に撰定・卜定時の記事に限定してみると、少なくとも十二世紀の前半代頃までは汎称「斎王」や避称「斎宮」が広く併用されている中にあっても、そもそも「内親王」であるか「女王」であるかが先ずは大きな関心事となり、その最初の呼称には右記のような使い分けがなされる傾向の強い事が確認されたと思う。その意味からも「汎称・避称」の生まれる以前において、内親王であれば「斎内親王」、女王の時には「斎(女)王」の呼称が与えられた事実を最初に発見した榎村氏の見解は大変重要なものである。しかもそういう意識が以後も根強く存続し続けたことをここに付け加えておきたい。

以上見てきたとおり、避称「斎宮」の初現はまず九世紀前半代にあり、その後九世紀後半代に汎称としての「斎王」が登場すると、両者は共に併用されながら十・十一世紀を経て十二世紀に至ることになる。その間『源氏物語』などの文学作品においては例外なく「斎宮」と表記されるものの、しかし日記等の歴史的記述にあつてはなお汎称「斎王」との併用が続いたことは表一に明らかである。そして、やがて十二世紀半ば以降になると、今度は「斎宮」がそれまでの「斎王」に代わる呼称として確実に定着していった様子が窺えた。

中国においては、祭前の致斎に利用される施設名であつた「斎宮」だが、その漢語を輸入摂取したわが国では『日本書紀』において、①天照大神を祀る伊勢大神宮、②その大神を奉祀する斎内親王の居所、③天皇自身が忌み籠もる施設、など複数の意味に汎用された^{〔五五〕}。聖武の践祚大嘗祭のときの大嘗宮を斎宮と呼んだのもその一例である^{〔五五〕}。住吉大社にも斎宮はあり、奈良や京都には斎宮神社も知られ、伊賀市に斎宮芝の地名が、松阪市や明和町にも小字名「斎宮」が今に残る。中国の戦国時代末期から秦・前漢時代に知られた「斎宮」の語は、遅くとも七世紀代には日本に輸入摂取されたあと、長年月にわたってその命脈を保ち、次第に変容・定着してそれぞれの土地に歴史の痕跡を刻むに至ったのである。

【註】

(一) … 穂積陳重著、穂積重行校訂『忌み名の研究』(講談社、一九九二年)、一〇五頁。初出論考「諱に関する疑」は『帝国学士院第一部論文集 邦文第貳號』、一九一九年に所収(今回引用した箇所は八六〇八七頁)。校訂復刻版では「関係的避称」を「相対的避称」と改訂している。

(二) … 榎村寛之「総論 九・十世紀の斎王たち」及び「斎王」という称の成立について『伊勢斎宮の歴史と文化』塙書房、二〇〇九年、一〇九〜一四二頁所収。後者の初出は『ヒストリア』第一五一号、大阪歴史学会、一九九六年所収。

(三) … 継嗣令には「凡皇ノ兄弟皇子ヲ。皆為ヨ親王。女帝ノ子モ亦同ジ。以外ハ並為ヨ諸王ト。自親王五世ハ。雖得タリト王ノ名ヲ。不在皇親ノ之限ニ。」とする(新訂増補『国史大系 令義解』吉川弘文館、一九七二年、巻十四、一四七頁。同上『令集解(前篇)』、一九四三年、巻十七、五一九頁)。(内)親王は天皇の

兄弟と皇子（一世）まで、諸王（女王）は皇孫（二世）ゝ皇玄孫（四世）までが原則。

（四）…氏は早くから九世紀後半期における天皇の幼少化が齎した斎王制度の変質について指摘している。それは、金子修一氏が「後漢における尚書体制進展の副産物としての幼帝の即位」という富田健之氏の見解に注目して、「平安時代における幼少天皇の出現と官僚による機制的支配への展開」に言及されたことと符合する所があり興味深い。榎村寛之「斎王制と天皇制の関係について」『律令天皇制祭祀の研究』塙書房、一九九六年所収。初出は『古代文化』四十三巻四号、一九九一年。富田健之「後漢前半期における皇帝支配と尚書体制」『東洋学報』八十一巻四号、二〇〇〇年、一〇三二頁。金子修一「中国古代の即位儀礼と郊祀・宗廟」『中国古代皇帝祭祀の研究』岩波書店、二〇〇六年、四五頁にその言及がある。

（五）…表作成に当たり典拠として使用した史料名を最左蘭に記した。各皇女に対して用いられた呼称に○印をつけ、彼女が選ばれた時の最初の呼称と判断しうる場合には◎印にした。またその出自が「女王」である場合は判る限りで▽印をつけ、その前後に親王宣旨があれば備考欄に★印をつけて注記した。なお、卜定時に二段構えの記述がある場合は次のように解した。（例）天仁元年十月廿八日、『中右記』は「今日斎宮卜定。（略）姁子女王是太上皇御女也、而可被為斎王也。」とし、『殿暦』では「（廿六日）今日斎宮有沙汰、（略）李實〔孫脱力〕娘（姁子女王）後院御子也。」、（廿八日）今日伊勢斎王卜定（略）」とする。両者とも前の「斎宮」は汎称としての普通名詞で、個別具体的に姁子女王を指しているのは後の「斎王」の方である。その場合は「斎王」に◎印をつけた。史料を違えば双方にわたることもある。不明部分もあり、表はなお万全ではないこともお断りしておく。大半の典籍は故・竹田聴洲氏の旧蔵書を利用して戴いた。ここに深謝を申し上げる。

（六）…新訂増補国史大系『続日本紀』前篇（吉川弘文館、一九七二年普及版）、巻八、八八頁。

（七）…新訂増補国史大系『日本三代実録』後篇（吉川弘文館、一九八三年）、巻三六、四五八頁。

（八）…増補故実叢書『江家次第』（吉川弘文館、一九二九年）、巻第十二（斎王群行）、三五八頁下段。

（九）…東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 中右記（別巻）』（岩波書店、二〇一一年）、二二八頁。高橋貞一著『訓読玉葉』第七巻（高科書店、一九八九年）、三七頁上段。

（一〇）…東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 小右記一』（岩波書店、一九八七年第二刷）、一四五頁。当該『小右記』全冊の長期間借用という私の我儘を許された元同僚梅沢裕氏のご好意に対し深甚の謝意を表したい。

（一一）…その年は四月十五日の大地震があり、以降に引き続く余震の記録は『本朝世紀』と『貞信公記』とでは多少日時の違いも見られるが、年末に至るまで止まなかった。その群発地震の中を幼女微子女王は伊勢に向った。『貞信公記』には群行の前日も当日にも地震があったと記す。

（一二）…東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 貞信公記』（岩波書店、一九五六年）、一七六頁ほか。新訂増補『国史大系9 本朝世紀』（吉川弘文館、一九六

四年)、一七〇一九頁。

(二三) 前掲『本朝世紀』は割注に「今夜依天皇不御。不召中臣。是依貞觀三年例所被行(今夜ハ天皇御サザルニ依リテ。中臣ヲ召サズ。是貞觀三年ノ例ニ依リテ行ハルル所ナリ)」(一八頁)としている。

(二四) 前掲『日本三代実録』後篇、卷三十、元慶元年二月廿三日乙丑条(三九四〇三九五頁)。

(二五) 早川庄八「長元四年の斎王託宣事件をめぐって」(同氏著『日本古代官僚制の研究』岩波書店、一九八六年、一八五〇二二六頁所収)を参照。

(二六) 前掲『大日本古記録 小右記九』、二九頁。

(二七) 増補史料大成二十二『兵範記』五(臨川書店、一九七五年再版)、九八〇一〇三頁。

(二八) 前掲榎村氏論文「斎王」という称の成立について、一二五頁。

(二九) 前掲『続日本紀』前篇、三頁。従前から「遣〇〇侍于△△」と表記するのが普通であった。

(三〇) 新訂増補国史大系『日本紀略』第三(後篇)、吉川弘文館、一九八四年、二四五頁。

(三一) 過去、一部の研究者間で不用意に用いられ誤解を生じていた語彙に「退下」と「帰京」がある。伊勢斎宮における「下座」||「退下」と「帰京」との概念規定の相違については拙稿「斎王の退下と帰京」(本論文第三部第一章。初出は『斎宮歴史博物館研究紀要』第四号、一九九五年所収、一三〇一八頁)に詳述した。

(三二) 前掲『日本紀略』第二(前篇下)、吉川弘文館、一九八五年、五四五頁。

(三三) 前掲『日本紀略』第三(後篇)、二四一頁。

(三四) 東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 御堂関白記(中)』(岩波書店、一九五三年)、一八五頁、長和元年十二月二日乙丑条及び四日丁卯条。同『御堂関白記(下)』(一九五四年)、四七頁、長和五年二月十九日甲午条及び廿五日庚子条。

(三五) 増補史料大成十一『中右記(三)』(臨川書店、一九七五年再版)、天仁元年十月廿八日庚辰条、四一〇頁上段〇四二頁下段。

(三六) 前掲『中右記(三)』、天仁元年七月廿七日条(三七一頁)。

(三七) 六壬占は、増訂故実叢書『江家次第』(吉川弘文館、一九二九年)、卷第十八、軒廊御卜(四七三頁・下段)、および『江談抄』(後藤昭雄・池上洵一・山根 對助校註『江談抄・中外抄・富家語』、岩波新日本古典文学大系三三、一九九七年所収)、第二、四五頁などにもみえる。

(三八) 前掲『中右記(三)』、同条、四一頁上段。

(三九) 東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 殿暦(二)』(岩波書店、一九六三年)、天仁元年十一月廿八日条(三三四頁)。この十一月は十月の間違いか。

- (三〇) …前掲『中右記(三)』天仁元年十一月八日甲寅条(四一五頁)。
- (三一) …角田文衛監修、古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』本編上(角川書店、一九九四年)の所功氏執筆「官曹事類」の項(五七九頁)。
- (三二) …新訂増補国史大系『政事要略』前篇(吉川弘文館、一九八一年)、七一頁。
- (三三) …學術論文ではなかったので掲げるのは躊躇もあるが、私は以前から養老五年九月の当該記事を以って「父の首皇太子即位への重要な布石の一つ」と捉える卑見を披露してきた(拙稿「斎宮案内記8」『あすの三重』七八号盛夏、一九九〇年所収、一〇五〜一〇六頁の註一五。及び拙稿「櫛物語(十五)・別れの御櫛三」『龍』、岡山龍短歌会、二〇〇九年六月号所収、六〇〜六一頁に詳述)。
- (三四) …拙稿「不改常典の典拠と『公羊伝』」『鷹陵史学』第三十九号、二〇一三年所収、三三〜四三頁。天武は自らを漢の高祖に比擬していた(西嶋定生著『中国古代国家と東アジア世界』、東京大学出版会、一九八三年、第二篇第四章「草薙剣と斬蛇剣」、五二九〜五三四頁に詳述)ので、天武皇統には「天下は高祖の天下にして、父子相伝するは此れ漢の約なり」(『史記』魏其侯竇嬰伝)との記述も強く意識され、「不改常典」考案の背景にもそれがあつたと考える。また、生前の聖武天皇が「杖刀」すなわち「仕込み杖」を佩帶していた事実(奈良国立博物館編『第六十六回正倉院図録』、二〇一四年、三九頁)からは、首擁立が政治情勢的にいかに難産であり、悔れぬ反対勢力のあつたことの左証でもある。聖武の消し去り難い危機感をそれは物語っている。
- (三五) …聖武天皇朝には、斎内親王井上の群行に伴い、斎宮寮の「長上官と番上官の定員および長上官の相当位を改めて確定したもの」とされる神龜五年の勅、「国家財政を以て斎王と斎宮寮の経費をまかなうことに」した天平二年の詔(以上は、早川庄八「斎宮寮の成立とその財政」『名古屋大学文学部研究論集』一六号、史学第三十九号、一九九三年所収論文に拠る)などがあり、組織と財政両面からの改革が実施されている。
- (三六) …久禮旦雄「賀茂斎院・伊勢斎宮の淳和天皇朝における存廃について―狩野本『類聚三代格』天長元年十二月二十九日太政官符の評価をめぐって―」(『続日本紀研究』第四〇九号、二〇一四年所収)参照。
- (三七) …榎村寛之氏前掲書『伊勢斎宮の歴史と文化』、一二七頁。
- (三八) …(略) 辞別申久。前年尔進礼留斎王渡。重喪尔遭太留尔依天退出志女天友」とし、重喪により退出した敦子内親王を「斎王」と称している(新訂増補『国史大系日本三代実録』後篇、吉川弘文館、一九八三年、卷三九、四九七頁)。なお、榎村氏の当該記事への註には少し混乱があるように思う。
- (三九) …新訂増補『国史大系 日本紀略』第二(前篇下)(吉川弘文館、一九八五年)、五三七頁、寛平三年四月十五日条。
- (四〇) …前掲『日本紀略』第二(前篇下)、五三八頁、寛平三年九月四日辛亥条。
- (四一) …前掲『日本紀略』第三(後篇)、一九八四年、五頁、昌泰二年九月八日己亥条。
- (四二) …前掲榎村氏論文「斎王」という称の成立について」(『伊勢斎宮の歴史と文化』所収)、一二八〜一二九頁。同氏が一例として掲げた『延喜斎宮式』の「斎

内親王参三時祭禊料」は確かにそのような解釈も可能であるかのような書き方になってはいる。

- (四三) …『国史大辞典』7 (吉川弘文館、一九八六年)、六九四頁所載、所京子氏執筆「しよさいいん」の項。『平安時代史事典』本編上(角川書店、一九九六年)、一二五八頁所載、関口力氏執筆「初斎院」の項も参照されたい。なお、『延喜式』卷六「斎院司」では「凡斎王於初斎院三年斎。畢其年四月始将参神社。」(新訂増補国史大系本、一三二頁)としている。

- (四四) …前掲『日本三代実録』前篇、卷三、四三頁。

- (四五) …虎尾俊哉著『延喜式』(吉川弘文館、一九八六年第六刷)は延喜式研究の基本図書である。以下の本文はその著書中の七九〇八九頁にある「4 延喜式の施行とその意義」から、特に七九〇八五頁に拠って私的に要約、引用させて戴いたことをお断りする。

- (四六) …新訂増補『国史大系 日本紀略第三(後篇)』(吉川弘文館、一九八四年)、一〇九頁。『本朝世紀』にはこの記事を欠逸している。

- (四七) …斎王悦子女王の「初斎宮」の記事は『貞信公記』(大日本古記録、岩波書店、一九五六年)、二六二頁(天曆二年八月七日条)。

- (四八) …虎尾俊哉氏前掲書、八一頁。

- (四九) …内藤乾吉「唐六典の行用について」(『東方学報 京都』第七冊、一九三六年所収)、一一六〇―一一七頁、一二八〇―一二九〇頁。

- (五〇) …池田温解題『大唐開元禮 附大唐郊祀録』(汲古書院、一九九三年第三刷)、卷四、吉禮「皇帝冬至祀圜丘」(三五頁下段)ほか。

- (五一) …宋敏求編、洪丕謨ほか点校『唐大詔令集』(学林出版社、一九九二年)、卷六十八、典礼・南郊二、三四七頁、卷第七十四、典礼・藉田、三七七頁など。『旧唐書』三(中華書局、一九七五年)、卷二十三、礼儀志三、八八八頁、卷二十四、礼儀志四、九一三頁、卷二十五、礼儀志五、九五二頁など。

- (五二) …小南一郎「楚辞の時間意識―九歌から離騷へ」(『楚辞とその注釈者たち』朋友書店、二〇〇三年所収、第一章、三五〇―三七二頁。初出は『東方学報』京都、第五十八冊、一九八六年所収)の特に第二節「終古の語義―永遠について」(四一〇―四一八頁)。氏によれば、「王権は、循環的な時間によってその神聖さが保障されている必要があった(儀礼や神話がその働きをした)にしろ、その現実的な経営は、歴史的な時間観念なしには成り立たなかった。」(七七頁)という。一読者に過ぎぬ私の理解に間違いや消化不良があればお詫びしなければならないが、個人的には氏の研究に接して初めて、壬申の乱後の天武朝に創始された「斎王制度」こそは歴史的時間軸の中に構築された円環的システムであると考え直す機会を得て、今も感謝に堪えない。

- (五三) …前掲小南一郎氏の著書(七七頁)から部分的に用語を借用して、自分の論旨に都合よく利用していることをお断りしておきたい。

- (五四) …倉塚曄子著『巫女の文化』(平凡社、一九八四年初版第三刷)、第六章「斎宮論」は、「(略)この神話的始源に回帰するために、アマテラスの御杖代なる新斎宮誕生のたびごとに、国覓ぎの儀礼化として群行は繰返されねばならなかった」(二六八頁)と述べてあったのを思い出す。

- (五五) …西宮一民『斎宮』の訓義(『皇学館大学研究紀要』第六号、一九六八年所収)、その後同氏著『上代祭祀と言語』(桜楓社、一九九〇年)に再録。

(五六) …新訂増補国史大系『続日本紀』前篇(吉川弘文館、一九七二年)、卷九(一〇二頁)。「本朝世紀」近衛天皇の康治元(一一四二)年十一月十五日癸卯条に「踐祚大嘗祭の記事があり、やはり聖武の時と同様に石上・榎井両氏が物部を率いて大嘗宮の南北門に神楯神杵を立てるとあるので、その「齋宮」が「大嘗宮」である事が証される(国史大系9、四〇〇頁)。榎村寛之「物部の楯の成立と展開について」『律令天皇制祭祀の研究』塙書房、一九九六年、七六―一〇九頁。初出「物部の楯を巡って」は『日本書紀研究』第十七冊、一九九〇年所収)は「大嘗祭の楯の発生と衰退」についても論究している。

第三部・伊勢齋宮史の基本的用語

ここでは、伊勢齋宮史の研究をする場合に避けて通れない、必ずや使用もするはずのいわばテクニカル・タームの中から、これまでややもすると誤解されてきたような基本的な用語「退下」と「帰京」の概念規定を明確にすること、そして似て非なる漢字の介在によって直ぐには結論の出せない「御汗殿」・「御汗殿」をめぐる問題点の整理、さらに三番目には、通称「別れの御櫛」と言われているその「櫛」の意義とは果たして何だったのかを改めて考えてみることにし、将来への課題の一つとして卑見を陳べるものである。

第一章 齋内親王の「退下」と「帰京」

(一) はじめに

かれこれ三十年以上も前のことになるが、伊勢齋宮のことがまだ現在ほどには一般に知られていなかったころ、伊勢齋宮に関する一部の紹介文や論考などにおいて、ややもすると混同され、もしくはその概念規定が曖昧なまま使用されて来た用語があった。それが「退下」と「帰京」である。当時、特に気になった一例をあげれば、「天皇の讓位、あるいは崩御や肉親の不幸などの理由によつて齋王は任を解かれ、伊勢から都へ帰ります。これを退下と言います。そして齋王の退下路は云々……」などというような類の文章である。

研究をするうえで、誰もが使用する常用語の概念規定が人により異なれば、全体としてその分野の研究の進展を著しく阻害することになる。研究者間で同一の概念を共有することが齋宮研究の進展にとつても望ましいことは改めて言うまでもない最も基本的な事柄である。いづれ書かなければと思いつつも準備が整わずにいた。それで、後に機会を得た時には自己批判の意味もこめて旧稿^③を公表したわけである。それ以後、もはやそのような事例に接することはなくなったように思えるので、拙稿が果たした一定の役割も終えたものと受け止めている。今や屋上屋を架すことになってしまいが、今後とも必要な両語の混乱を避けるべく、広くその定義を再認識されることを願って、若干の改定増補はあるが基本的な論旨には大きな手直しをせずには旧稿のまま再説しておきたいと思う。

(二) 定義の再確認

緯度により上り・下りを区別する西欧の一般的な地理的感覚とは違い、わが国においては天皇の在す都の方へ向かうのを「上る」といい、逆に都から遠ざかる場合を「下る」と言い習わしてきたことは周知のとおりである。十世紀の史料になるが、伊賀国板蠅杣の四至に錯誤あることを記した康保元（九六四）年記の文案^④にも、「南限齋宮登道大（大道力？）」と見え、「齋宮」一行^⑤が通る大道を指して「登る」と冠しているのは動かぬ証拠である。通常、平安時代も十世紀半ば過ぎの頃に「齋宮」^⑥伊勢齋内親王が「伊賀国板蠅杣」を通るのは凶事帰京の場合しかないからである^⑦。従つて例えば、康保四年に村上天皇の崩御^⑧をうけて解任され、帰京した前齋王樂子の場合も、凶事による解

任であるから、その帰京にあたっては一志頓宮から伊勢河口を経て伊賀に向かいこの「齋宮登大道」を経て都に戻ったに違いない。

いま、齋内親王が故あつて都へ帰る前後の消息を『古事類苑』（神祇部五十九齋宮）に所載の記事を骨子としつつ、若干の補足をしてまとめたのが表四である。この表には初齋院や野宮での事例も一部は含み、また齋王月事の場合や賀茂齋院の若干例をも参考までに掲げている。言わんとすることはすべてこの表によって諒解されよう（特に支障はないと判断し、旧表のまま使用することにした）。

掲げた諸例から判明するのは、齋王が何らかの事由により任を解かれた場合に、八世紀から十世紀ごろまでは「退出」と表記されるのが一般的で、十一世紀以降では「下座（坐）」ないし「退下」という表現が一般的に用いられる傾向にあったことである。天皇の崩御であれ、讓位であれ、解任された齋王は齋宮内院にあった居室内の御座から下りて、内院外の別の建物に自らの座を遷さねばならなかったのである。齋王としての任を解かれ自らの御座を下りて別の建物に退くこと、それがすなわち「下座」あるいは「退下」「退出」という語の意味である。その際に使用される建物が齋宮寮頭の宿館であったり、また時には御匣殿や内侍宿所が使用されたりもしたことが表に見えている。そしてその後何か月か、場合によっては半年以上の待機（準備）期間を経て、ようやく都へ帰ることができた。それが「帰京」である。『延喜式』には「還京」との表記もあるが定着はせず^⑤、全時代を通じておおむね「帰京」と表記している。貴重な法令集だが、用語に関しては金科玉条の如くに使われていた訳ではない。そして、いよいよ京へ入る段になって、初めて「入京」とか「入洛」とかの表記を用いている。

この間の事情を比較的によく表しているのが、表では『大神宮諸雜事記』^⑥寛徳二（一〇四五）年正月条（後朱雀天皇讓位による齋王良子の場合）、『中右記』嘉承二（一一〇七）年七月廿一日条（堀河天皇崩御による齋王善子の場合）、『類聚大補任』承久三（一二二二）年四月廿日条（順徳天皇讓位による齋王熙子の場合）^⑦、同じく仁治三（一二四二）年正月廿六日条（四条天皇崩御による齋王昱子の場合）、また文永九（一二七二）年二月十八日条（後嵯峨上皇崩御による齋王愷子の場合）などの記事である。なかでも仁治三年の齋王昱子の例では、

「正月廿六日頭ノ宿館ニ下座シ。二月廿日ニ帰京シタマヒヌ。退下ノ後三箇月ノ内ニ帰京シタマヒシ例ハ無カリシ也。」

と記すのを見れば、下座・退下そして帰京という用語の概念に区分相違のあったことは誰しも了解されるであろう。承安二（一一七二）年五月三日、不幸にして伊勢齋宮の地で薨去された惇子内親王の場合、『百練抄』に記すところによれば、

「件ノ日、先ニ寮頭ノ館ニ退下シタマヒ（テ後）、子ノ剋ニ薨ジタマヘリ」

とあり、齋王の居室を死のけがれから護るために、余命いくばくもない齋王の身を事前に齋宮寮頭の宿館に遷したのである。このように、「退下」とは飽くまでも「伊勢の大神に仕えるべき齋内親王としての任を解く」ことを以て用いられた用語であつてみれば、そこには「帰京」の謂などは微塵も含まれていないのである。都へ退き下るなど昔も今もあり得ないからである。

典
擬

– 127 –

小右記	親子	永觀三（九八五）年四月三日丁丑 齋王今日入洛云々。	入洛
大神宮 諸雜事記	良子 敬子 敬子	寬德二（一〇四五）年正月以同十六日酉時。天皇御位下御坐。即日號院。同十九日午時。 齋內親王御匣殿下坐。是則本院御以十八日亥時依參着也。件日天皇崩御早了。 同年四月廿八日。齋內親王歸京了。 康平三（一〇六〇）年九月（略）齋內親王以今月九日下坐於御汗殿給。 （略） 治曆四（一〇六八）年四月十九日天皇崩御給了。同廿二日齋王下坐了。	下坐／歸京 下坐 下坐
中右記	善子	嘉承二（一一〇七）年七月廿一日（裏）則齋宮出御內侍宿所，隍之外云々，雖可渡給寮頭公網宅，依破損先渡給件內侍宿所也，（略） 十二月十五日前齋宮歸京事，上卿新源中納言基綱卿，左中辨長忠朝臣勤之無奉整云々。 十二月廿二日今夜齋宮歸京上卿可勤仕由，蒙其仰，（略） 十二月卅日夜半許前齋宮令人洛給，渡御于故隆時朝臣中御門富小路宅也，	出御 歸京 歸京 入洛
江家次第		齋王歸京次第。（略） 十日 入京 本齋王者一月可經河陽，然而近代密々入京也，	入京 歸京
朝野群載	善子	嘉承二（一一〇七）年十一月廿八日 伊勢齋王歸京國々所課 （略） 左右衛門府 歸京駕輿丁各十六人 嘉承二（一一〇七）年十二月四日 左辨宣下 伊勢國 應早速造歸伊勢齋王歸京輿事 輦輿壹基 腰輿壹基 右權中納言源朝臣基綱宣，奉勅齋王月日退宮歸京，宣仰彼國以白木令造儲件輿等，（略） 嘉承二（一一〇七）年十二月四日 太政官符 伊勢國司 應造歸壹志河口行宮事 右正三位行權中納言朝臣基綱宣，奉勅伊勢齋王今應歸京，宜准舊例造儲行宮者，（略）但入京之期，須待後符之到奉行，	退宮／歸京 歸京
本朝世紀	妍子	久安六（一一五〇）年七月十二日丙戌今日齋宮歸京行事右少辨藤資長下向，（略） 廿六日庚子今日前齋宮妍子內親王難波禊了入洛，（略）	入京 歸京
皇帝紀抄	功子	治承三（一一七九）年正月十一日退下，依母儀喪也	退下

類聚大補任	潔子 熙子	建久九（一一九八）年正月十七日下座。同八月廿三日歸京。 承久三（一二三二）年四月廿日讓位。同廿二日脚力到来。依御計過後。同廿七日下午坐頭宿館。 依天下兵亂。同年六月十八日宇治里行導入道家御渡。同七月廿五日又頭宿館還。 八月廿一日歸京。（鈴鹿道）以下略す。 貞永元（一二三三）年十月十四日下座。明正月廿八日歸京。天皇讓位故也。 仁治三（一二四二）年正月廿六日下座頭宿館。二月廿日歸京。退下之後三箇月之内無歸京例也。 寬元四（一二四六）年正月廿九日從野宮退下。天皇御讓位故也。號宣花門院。是內親王也。 文永九（一二七二）年依太上法皇崩去。十八日下坐御匣殿。八月七日歸京之由。勅使中臣神祇權少副隆長 參二宮。十三日立伊勢齋宮向京。（略）	下座／歸京 下座／歸京 下座／歸京 下座／退下／歸京 退下 下坐／歸京 ・向京
百練抄	惇子 功子 肅子 禮子 利子 昱子	承安二（一一七二）年五月三日伊勢齋宮惇子內親王薨于本寮。（略）件日先退下寮頭館。子尅薨 治承三（一一七九）年正月十一日伊勢齋王依遭母儀喪。自野宮退出。 建曆元（一二二一）年四月十九日被立齋宮阪京之由伊勢奉幣使。 建曆二（一二二二）年九月四日賀茂齋內親王依御不例火急令退下給。 建曆二（一二二二）年九月廿八日被立賀茂社奉幣使。是依被告申齋內親王退下之由也。 天福元（一二三三）年二月五日庚辰。齋王入洛。 仁治三（一二四二）年正月十一日甲午伊勢齋王因此御事。退下御櫛笥殿云々。	退下 退下 退下 退下 退下 入洛
新葉和歌集	祥子	野宮より退下の後雪を見て、 忘れめや神のいがきの榊葉にゆふかけそへし雪のあけほの	退下
新統古今 和歌集	肅子	伊勢におはしましける時、をみなへしをうゑられたりけるに、 京へ歸りのほり給とて、（略）	京へ歸りのほる
二所太神 宮例文	楊子 妍子 休子 功子 奨子	文德皇女 自野宮下座。 鳥羽皇女 依御腦下座。在任七年。康治二年。 後白河皇女 自野宮下座。仁安二年。 高倉院皇女。從野宮下座。 太覺寺法皇女。自野宮御退下。	下座 下座 下座 下座 御退下

『大神宮諸雑事記』に見える康平三(一〇六〇)年九月条は斎王敬子の月事に際しての記事である。当時は血のけがれという觀念から、その当事者が神事に就くことを忌避して一定の期間、特定の建物(それを御汗殿という)^{二〇}に身を遷されたのである。また同書には外に永承四(一〇四九)年六月御祭に、離宮院で大祓の後に嘉子内親王が「斎宮、御汗殿に下座これあり」^{二二}との例もある。しかし、そのことではもとより解任はされないもので退下とは言わず、この場合にも「下座」である。従って、一口に「下座」とは言ってもその原因は同じではなく、厳密に言えば「下座」と「退下」とは必ずしもイコールではない。「下座」はより即物的、具体的な表現なれば、けだし「解任」という場合の「下座」は「退下」という概念に包括される行為と見なしうるであろう^{二三}。従行群官の謂を以て「群行」^{二四}だとするのなら、「退下」はさしずめ「退出下座」とでもいうるのかも知れない。ともかく、伊勢斎宮にあって「退下」といえば「解任」の謂で用いられた用語であることは間違いなく、「帰京」や「自家に帰る」という概念は含まれないのである。

(三) 初斎院、野宮での場合

では初斎院や野宮に在って解任されるべき事由の生じた場合はどうであつただろうか。それを最後にみておきたい。

まず斎王が野宮に在って任を解かれたばあい、『類聚大補任』寛元四(一二四六)年正月廿九日条(後嵯峨讓位による斎王曦子の場合)^{二五}や『百練抄』治承三(一一七九)年正月十一日条(母の喪による斎王功子の場合)、あるいは『新葉和歌集』などは「退下・退出」といい、『二所太神宮例文』では「下座・御退下」と表記している。いずれも伊勢斎宮における場合と同様であつた。

ではその後に野宮から自家に帰るのを何と呼べばいいのだろうか。野宮は京外^{二六}に在ったから、近距離にあるとはいえ厳密にはこれも帰京には違いない。『壬生家文書』所収の「伊勢斎宮古文書(三)」(二五九頁)のなかに次のような文書が遺されている。すなわち、

「前斎宮御帰京之由承候、其間事無才学候、主神司官事も今度之儀、未承及候・・・(前ノ斎宮、御帰京ノ由ヲ承り候、其ノ間ノ事ハ才学無キニ候、主神司ノ官事も今度ノ儀ハ、未ダ承ルニ及ハズ候・・・)」^{二七}

というものである。「解題」によると、この古文書の第三卷は曦子内親王関係(大略原本)^{二八}の文書であるという。であれば、文中の「前斎宮」は無論、後嵯峨天皇の斎宮曦子以外にはありえない。寛元四年正月廿九日己未条^{二九}に後嵯峨天皇は後深草(東宮御歳四)に讓位して上皇となつたことが見えるので、それに伴い当時野宮に居た斎宮曦子は任を解かれて「御帰京」になつたことがこの貴重な文書から知られるのである。従って、少なくともこの時の「野宮」は「京城外」に在つたことが証明される。「御帰京之由」とはそういうことを示すのである。

もう一例を加えると、かの藤原定家はたびたび嵯峨に行き、沐浴をして帰つて来るのが常だつた。往路に人宅に病を問うこともあつたが、目的はいつも洗髪・沐浴である。そして京に戻るのを「帰京」とか「皈洛」とか記している。従って、彼の日記^{三〇}からも「嵯峨」は洛外に

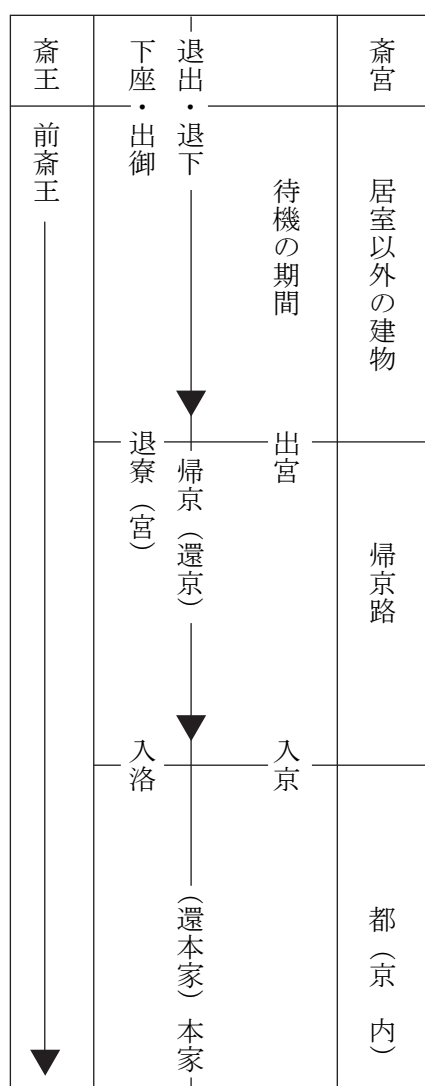
あるゆえ、そこからの帰還をのように呼んだことが了解される。斎王の事例ではないが、往時における地理的感覚は同じものと考え、参考までに引いた。

そして最後に、表中『日本三代実録』の元慶八（八八四）年二月十三日条にいう陽成天皇譲位による斎王掲子の場合には、「是ノ日、本家ニ還リタマヘリ」とみえている。つまり自分の家に帰ると、具体的な言い方をしている。これも大きくは「帰京」という概念に包摂され、今は考えておきたい。前後したが、宮内の初斎院において解任された場合の例は、同じく『日本紀略』安和二（九六九）年十一月四日条（冷泉天皇譲位による斎王輔子の場合）によってみておく。その場合は、初斎院であつた左近衛府の建物からいったんは修理職の建物に退出したとある。これはすなわち、伊勢斎宮において一旦は寮頭宿館など別の建物へ身を遷すのと全く軌を一にしている。その後のことは不明だが、原則的には「還本家」という以外になかったであろうと考えるべき。いずれにしても、伊勢斎宮におけるのと同様に、あくまでも「下座・退下」と「帰京（還本家）」とは概念規定を区別して用いることが肝要である。

なお、伊勢斎宮にあつても退下をすれば、その時点でもはや斎王ではなくなるわけで、帰京の折には既に「前斎王」であつた。記録によっては必ずしも厳密ではないものの、基本的には、例えば『日本三代実録』元慶元（八七七）年三月に恬子内親王が帰京する際に見える、「（前）刑部大補従五位上弘道王。右中弁従五位上藤原朝臣保則ヲ遣ハシテ前伊勢斎内親王ヲ迎ヘシム。」³⁰との記事からも推察できよう。

（四）まとめ

以上、述べたところを図表風にまとめて、「退下」と「帰京」の概念規定を可視的に整理しておくことにしたい。



【註】

- (一) …例えば、中川崋梵著『齋宮と文学』（光書房、一九八五年）には、「退下の順路は、群行の際の逆の順路で帰京するが」（十二頁）とか「齋王の中には、帰京（退下）せず、齋宮の地で亡くなられた方もあった」（同上）など、退下を帰京と同義語として使用する混乱があった。また、渡辺寛「齋宮―いつきのみやの世界―」（春日井市教育委員会編『尾張古代史セミナー（1）―考古学からみた壬申の乱―』、一九九六年所収）にも、「そして自らを卜定された天皇が退位されますと、それに伴ってその時代の齋王も伊勢から都へ帰ります。これを「退下」といいます。」（九九頁）ともみえている。
- (二) …拙稿「齋王の退下と帰京」（『齋宮歴史博物館研究紀要』四、一九九五年三月）、十三〜十八頁所収。
- (三) …『平安遺文 古文書編第一巻』（東京堂出版、一九九八年新訂十版）、四〇七頁下段〜四〇八頁上段、二八〇・「伊賀國板蠅柚四至紙謬記案（東大寺文書四ノ二）」康保元年九月廿五日記。
- (四) …この十世紀中ごろには「伊勢齋内親王」を指して汎称「齋王」と共に避称「齋宮」も併用されていた。齋内親王の呼称については、榎村寛之「「齋王」という称の成立について」（『伊勢齋宮の歴史と文化』塙書房、二〇〇九年、一〇九〜一四二頁。初出は『ヒストリア』第一五一号、大阪歴史学会、一九九六年所収）、および拙稿「齋内親王の呼称をめぐって」（本論文第二部第三章）を参照されたい。
- (五) …後白河の皇女好子の帰京は異例であったがやはり一志―川口―伊賀を経る道をとった。『古事類苑』神祇部三（吉川弘文館、一九七七年）、七七七頁所引『顕廣王記』永万元年十二月十九日条参照。拙稿「死と再生の国」（『誘い ―根の国から―紀伊半島の旅』、三重県観光連盟、一九九〇年所収）、六五〜六六頁。
- (六) …新訂増補国史大系『日本紀略』第三後篇（吉川弘文館、一九八四年）、一〇〇頁、五月廿五日癸丑「巳刻。天皇崩于清涼殿。春秋四十二。（略）」。
- (七) …新訂増補国史大系『日本紀略』のほか、新訂増補国史大系九十一月乙未には「齋宮帰京使」が進発しているので、樂子は遅くともその十一月中には帰京したであろう（上記『日本紀略』のほかに、新訂増補国史大系九『本朝世紀』、吉川弘文館、一九六四年、一二五頁も参照）。
- (八) …これも拙稿「齋内親王の呼称をめぐって」（本論文第二部第三章）にふれた事だが、当時の公家らの日記では、必ずしも『延喜式』の固定的な法制用語には束縛されない言葉の使用をしている。『延喜式』の成書は一種の「文化事業」（虎尾俊哉著『延喜式』吉川弘文館、一九八六年、八一頁）だったからである。その点では『大唐開元礼』とも似通った一面を持っているかも知れない。
- (九) …夙に本書の信憑性に対しては疑義のあることは承知している。これも別稿「忌詞と御汗殿」（第三部第二章）において触れるところがある。
- (九) …余談ながら、『類聚大補任』承久三年四月廿日以下の条では、前齋王の熙子は当初は寮頭宿館に下坐したが、天下の兵乱（恐らくは承久の乱）の余波を受けて、伊勢は宇治の里にあった行尊入道の家に一時避難し、後にまた寮頭宿館へ戻ったことを伝えるものである。この点に関して山中智恵子氏の『続齋宮志』（砂子屋書房、一九九二年、一八二頁）は、「何のゆかりか行尊入道が参入している」などと、甚だしい史料の読み違いを冒しておられる。

(一〇) …旧稿では「齋宮忌詞の中に、血を阿世（アセ）というを以てこの施設を「御汗殿」（ミアセノトノ）とする意見は藺田守良翁以来根強いものがある」云々と書き、御汗殿（ミケガレノトノ）が正式ではないか、という趣旨のことを示唆したが、その後調べ直した結果をもって別稿「忌詞と御汗殿」（本論文第三部第二章）に認め直したので、そちらを参照されたい。

(一一) …『太神宮諸雜事記』二、『群書類従』第一輯、神祇部、続群書類従完成会、一九八三年訂正三版第五刷、卷第三所収、百十四頁上段。

(一二) …なお「退出」については注意しなければならないことがある。a『古老口實傳』やb『文保記』（いずれも『群書類従』所収。前者aは第一輯・神祇部、三二五～三三八頁所収。後者bは第二十九輯・雜部、四八～五一頁所収に拠る）に、齋宮院内や参宮時における「月事」等の禁忌を述べた部分で、「月水故障。服氣男女等。退出之法也。」（a…三三六頁下段）、「天養二年六月十六日外宮御祭御遊之時有御月事御退出。」（b…五〇六頁下段）という場合の「退出」は、室内等その場から別の屋舎・屋外へ出る・退避することであって、「退下（解任）」の意味はない。後者は近衛天皇の伊勢齋妍子が六月月次祭で外宮に参宮した時の出来事を指している。

(一三) …甲田利雄「齋宮覚書」（同氏著『平安朝臨時公事略解』続群書類従完成会、一九八一年所収、一三〇頁。『延喜式』には「臨行」なる表記も見え、なにゆえ「群行」の語が定着し来ったのかは説明できない。例えば、諸葛亮の有名な木牛流馬の故事などを熟知した江戸時代の学者・文人ならば、あるいは「群行」の二文字を着想するのはありうべきことであつたかも知れないが、勿論保障の限りではない。

(一四) …旧稿の発表以降に、平安京右京三条二坊で「齋宮」の邸宅跡が発見され、様々な議論を呼んだ。当時、角田文衛氏から拙宅にご恵送いただいた記事（『京都新聞』二〇〇年三月二三日）には、帰京後の恬子内親王が余生を過ごした「三条齋宮の御所」だとされ、お電話にてお話を伺う機会もあった。その後、（財）京都市埋蔵文化財研究所から刊行された調査報告第二一冊『平安京右京三条二坊十五・十六町―「齋宮」の邸宅跡―』（二〇〇二年）によれば、「野宮」の可能性を示唆しつつも（一六一頁）、「結語」（一六四～一六五頁）では、西暦九〇〇前後に邸宅の再整備がなされた点を考慮して、そこに居住した人物として寛平九年に卜定された柔子内親王を第一候補とするが、絶対年代を示す遺物がなく考古学的には確定できないとした。そして「群行以前に齋宮が京内に居住した地であり、皇族との深い関係のもとに維持されていたことを指摘するにとどめておきたい」（一六五頁）と明言を避け、「遺物から導かれる造営時期が九世紀後半であり、平安遷都直後から邸宅が造営される以前の遺構が全く検出されないことも重要な所見」である等の今後に残された課題にも言及している。附章には西山良平氏の精緻な論考「平安京の墨書「齋宮」と齋王家・齋王御所」（一八〇～二〇〇頁）が収められている。『延喜齋宮式』に「（略）即卜宮城内便所、為初齋院……」（略）「更卜城外淨野、造野宮畢……」とある「城外」は宮城外ではなく「京城」の外部であるとの立場から「京中の齋王御殿は齋王家のみである」（以上は一八一頁）とされた上で、厳密な考証を展開された。氏は「九〇〇年前後」の再整備を皇女の「齋宮」点定と関係づけ、天慶元年に「西三条第」に初筭（裳著）し、同九年に卜定された英子内親王を至当として、発見された齋王家は英子の西三条第である可

能性を主張されている（二〇〇頁）。私は発掘現場を見学する機会を逸し痛恨の極みだが、当該邸宅造営以前の遺構がないことに関連して思うのは、寛平八（八九六）年四月十三日の太政官符に「三条大路以南、有荒廃私田五六町、曾無百姓口分・・・」（『類聚三代格』卷八「農桑事」）とあり、当時の周辺の様子を窺う間接的史料にはなるかと思っている。また、「宮城内便所」と「城外浄野」とを対句的に読めば、「城外」を「宮城外」の謂に解釈し得るという可能性についても、一応は検討してみる必要はあるのではないだろうか。

（二五）…宮内庁書陵部編『圖書寮叢刊 壬生家文書九』（明治書院、一九八七年）、本書通一九三頁、「二四七一 某書状」。

（二六）…前掲『圖書寮叢刊 壬生家文書九』、二八頁（通二八頁）。

（二七）…新訂増補国史大系『百鍊抄』（吉川弘文館、一九八三年）、第十五、二二一頁。

（二八）…『明月記』第一（国書刊行会、一九一一年）、正治元年四月十八日条（九十二頁上段）および同十二月六日条（一一九頁上段）、正治二年三月廿四日条（一五五頁上段）、同十一月十八日（一八八頁下段）など参照。私事に涉るが、学生時代を右京区桂木ノ下町に過ごした。昭和四十年代にはまだ、桂辺りに居住する京育ちの年配者が「ちよつと京都へ行ってくるし」と言っては四条河原町辺りへ出かけて行くのが常であった。現行の行政区画とは異なり、洛中洛外を区別する意識ないしは言語習慣が現代にまで生きていた証である。その体験上、間接的ながら「帰京」という感覚は十分に想像はできる。

（二九）…『中右記』の記す斎王善子の場合は、伊勢からの帰京の例だが、或は方違え等の事情もあつてか、入洛後に故隆時朝臣中御門富小路の宅に渡御している。

（三〇）…新訂増補国史大系『日本三代実録』後篇（吉川弘文館、一九八三年）、卷三十、三九七頁。

第二章 忌詞と「御汗殿」

(一) はじめに

本稿は、かつて旧稿中に述べた「御汗殿」か「御汗殿」か^①の問題について再考し、改めてその問題点を整理してみたものである。

ありていに言えば、毛筆文字の細部にわたる相違問題は、日本史の基本文献として一般に流布する活字本を利活用するだけの筆者のような人間には容易には結論が出せないものである。それは「汗」字と「汗」字とがあまりにも極似するためである。通常、翻刻に際し使われる底本は毛筆で書かれているはずである。本来的に「汗」か「汗」かどちらであるかは活字本からは判断できないし、忠実に翻字されている以上、読者としてはそれを信じるしかない。もっとも、編纂上の基本方針として「用字が必ずしも正当であると思われるものでも概ね傍注を施さなかった」^②とされる場合もある。もし仮に、それぞれの底本などを閲覧できたとしても、おそらくこの両漢字の場合には判読に難渋するであろう。以前、神宮文庫の黒川典雄氏にお世話をいただき、文庫所蔵の『太神宮諸雜事記』(以下『諸雜事記』と略記)の写本を検した時のほんのわずかな体験でさえも、その運筆の加減で「汗」か「汗」かの判断には躊躇することがあったのを思い出す。書き手によっても随分と文字の印象は異なる。当該文字の場合には特に、第六画の終筆にあつては次の文字への続き具合や筆勢にもよるが、明確に書き分けるにはその都度よほどの注意力が要るのである。まして両文字の相違を知らない人が筆をもてば一層曖昧な終筆にならざるをえない(恐らくそれは十分にありえた)。そういう翻字以前の如何ともしがたい問題が横たわっているのである。

なにしろ、本場の中国でも、「汗」字と「汗」字とは、よく書き間違い、また読み間違いの生じ易く紛らわしいことで古くから知られている。『札記』曲礼篇の鄭玄注は「為汗」にわざわざ「汗辱」之汗^③と説明したり、あるいは同様に「汗」に対し「本或作汗」などと注したりしている事実からもそれは窺える^④。わが国でも「汗」字は『日本三代実録』^⑤などでも使用され、決して特殊な用字ではなかったが、やはり間違われ易い文字であった。例えば『小右記』長和四年十二月十二日条にいう。権大納言藤原頼通(左近衛大将)は「頭打身熱」により一時は重篤(万死一生之由)に陥ったが、「將軍汗出蘇生、得尋常(將軍ケガレ出シテ蘇生シ、尋常ヲ得タリ)」^⑥とあるのは、その傍注にあるように「汗(ケガレ)」は「汗(アセ)」の誤りだったのである。

ここで、「汗」に対するある種の先入観があるといけないので中国での話題を先に紹介しておこう。前漢武帝に仕えたかの東方朔は「正諫することでは正直の人に似、無作法なことでは隱者に似ている。」^⑦と評されたが、彼には「かつて酔うて殿中に入り、殿上で小便をもらし、その不敬を弾劾された」^⑧ことがあったという。その一件を「叙伝」には「懷肉汗殿」^⑨と簡略に表現している。この場合の「汗」は朔が殿上で小遺(小便)をしてしまったことを指している。それは決して女性の生理現象だけを指す語ではないので留意しておきたい。

つぎに、『続漢書』礼儀志には、「凡そ斎は、天地は七日、宗廟・山川は五日、小祠は三日なり。斎日内に汚染有らば、斎を解き、副倅礼を行ふ。斎に先だつこと一日に汚穢災変有るも、斎祀は儀の如くす。」^{二五}とある。この「汚染解斎」について清の周壽昌氏は、「説文を案ずるに、婢は婦人の汚れなり。漢律に曰く、婢変を見れば侍祠するを得ざれ、と。楊慎曰く、婢変とは月事を謂うなり、と。」^{二六}と注解している。この礼儀志にいう「汚染」には生活上の様々なケースがあり得たはずだが、それを周氏や明の楊慎氏のようにただ単に婦人の月事へのみ限定するのはいささか矮小化のきらいがあると思う。祭祀において、婦人に対する潜在的なタブー観念は、周澤や劉毅の故事を引くまでもなく長年月にわたり培われて来たものであった。

ただ今回はその見解を参考にしつつ、わが伊勢斎王の事例を検すれば、やはり同類のことが散見される。例えば、後冷泉天皇の永承四（一〇四九）年六月、神宮恒例の月次祭に向かうに途次、度会の離宮院で大祓の後に斎王嘉子内親王が月事のために「御汗殿に下座」^{二七}した例や、また康平三（一〇六〇）年九月の神嘗祭（十六・十七日）を控えた同月九日になって、斎王敬子女王がやはり「御汗殿」に下座し給い、「例に任せて七日を過ぐるのち、十六日に直道して（離宮院には寄らず直行して）参宮」^{二八}した事例などを知ることができる。先の漢律^{二九}にいう「婢変」は婦人と斎戒・祭祀との関係を規定する事柄だが、右に所引の伊勢斎内親王の事例をみれば、彼我の祭事における禁忌には共通する一面のあったことも了解される。

さて周知のように、右例にも登場する「御汗殿」の訓み方に関して、二つの見解がなされて今日にまで至っている。一つは、斎宮忌詞から着想してそれを根拠に「御汗殿（ミアセノトノ）」と考える度会常彰氏（一六七五～一七五二）や藺田守良氏（一七八五～一八四〇）^{三〇}らの説であり、もう一方は、御巫清直氏（一八一二～一八九四）に代表される説でこれを「御汗殿（ミケガレノトノ）」^{三一}であるとするものである。冒頭に触れた旧稿の中では「御汗殿（ミケガレノトノ）」の側に立つて見解を述べたが、その後少し躊躇させられる記事に出遭い、判断に苦しむ点もある。ただこれは、同じ史料でも人により解釈が異なる、といった類の問題ではないように思えるので、両方の説を改めて整理しなおし、再考し直してみたいと考えた次第である。

（二）両説の比較

A…度会常彰と藺田守良の「汗（アセ）」説

度会常彰氏は『斎居通』巻下に「月水」の項目を設け、諸書を引いて解説するなか、「又忌詞ニ血ヲ阿世ト云、因テ月事ヲモ忌テ汗ト云ヒ、其別屋ヲ御汗殿ト云フ」^{三二}として『中右記』天永二（一一二二）年正月四日条を引いている（同上）。ではその『中右記』当該条はといえば、「（略）今朝神祇少副兼政来談云、齋宮去九月群行之間、并十一月新嘗會、十二月御祭間、共逢御汗時之由所傳取也、此事頗有恐歟（今朝、

神祇少副ノ兼政来リテ談リテ云フニ、齋宮ハ去ル九月ノ群行ノ間、并ビ二十一月ノ新嘗会、十二月ノ御祭ノ間モ、共ニ御汗ノ時ニ逢ヒタル由、伝ヘ取ル所ナリ、此ノ事頗ル恐レ有ラムカ、ト」(二七)とある。去る天永元年九月に伊勢齋宮へ群行したのは、卜定時に親王宣旨をめぐり少し議論(二八)もあつた齋王嫡子である。彼女は伊勢への群行から、神宮の神事に当たつて再三にわたり月の障りに逢つたというのだが、藤原宗忠はそれを「御汗時」と「汗」の字を使っているという。これが判断に苦しむ理由の一つである。常彰氏はおそらくこれを根拠に、血の忌詞「阿世」を以つて「月事」に符合せしめた可能性があろう。

しかし冷静に考えれば、齋宮忌詞の外七言にいうところは「血稱阿世(血ヲ阿世ト称フ)」(二九)と定めてはいるが、「月事稱阿世」とは規定していないのである(三〇)。血には切傷や鼻血、あるいは灸など、もっと他の原因による場合も多々あつたはずである。いま内七言を見ても、「経」に対しての「染紙」、「寺院」に対する「瓦葺」、「塔」に対しての「阿良良岐」など(同上)がある。こうした忌詞は、神事に伴い忌避すべき対象物(実体)がまずあつて、それを直接表現するのが忌避されたために別途考案された表現である。つまり、「阿世」が「血」を忌避するという限定表現であるならば、仮にも「ミアセノトノ」というような忌避表現(呼称)が生まれるためには、それに対応する実体としての「御血殿」という建物自体がまず存在していなければ成立しない道理ではないか。度会常彰説のロジックにはその点において観念論的な飛躍があるのではないか、と不審に思えた。しかし宗忠は「御汗時(ミアセのとき)」と記しているらしい。

しかも、「壬生家文書」に収められた「伊勢齋宮古文書」の中にも、「同野宮汗殿御座料薦二百枚、宜仰掃部寮、早令進上者(同ジク野宮ノ汗殿ニ御座料ノ薦二百枚、宜シク掃部寮ニ仰セテ、早ク進上セシメヨテヘリ)」(三一)とあるのを知つて、更に心が揺らいだ。これはおそらく、昱子内親王が野宮に遷るに際して作成された嘉禎四(一二三八)年四月から七月にかけての弁官宣旨案文の一つであろうと思われる(三二)。案文にあるもとの文字が間違っていなければ、その当時野宮に在つた「汗殿」が伊勢齋宮にもなければならず、それより百年以上も昔に生きた宗忠が日記に「御汗ノ時」と書いている事実もこれを認めなければならなくなるであらう。

『齋居通』や『神宮典略』にも引く『文保記』には、月の障りがあれば参宮までに十日間の潔斎(猶予期間)が要るとし、常彰氏は事後十一日目に参宮するのを「神宮の通法なり」とした。『古老故實抄』にも「月水女。七箇日以後。三ヶ日潔斎。第四日参宮无憚云々(月水ノ女ハ。七箇日以後ニ。三ヶ日ノ潔斎ヲスレバ。第四日ニハ参宮スルモ憚ルコト无シト云々)」(三三)というが、齋内親王の各事例(三四)ではどれも七日間の忌憚りの後、八日目には参宮をしており、氏は「神宮ノ法トハ異ナリ」として一般女性とは異なる扱いを認めている。ただ、この『文保記』なる書が記す齋王の月事に伴う潔斎事例のうち、建長七(一二五五)年十二月十五日の一件には不審感を覚える。なぜなら、すでに榎村寛之氏が指摘(三五)しているように、後深草天皇以来いわゆる持明院統系の天皇は齋宮を置かなかつたからである。従つて、それを無批判に

引用した『齋居通』（度会常彰氏）の姿勢にも一定の不信感が残り、著しく信憑性を損なう結果になっている。

とまれ同氏は月事潔斎による参宮遅参に併せて、『文保記』に「御服猶以日易月也（御服ハ猶ホ日ヲ以テ月ニ易ヘルゴトキ也）」^{三六}というところの「服喪」による遅参への軽減措置にも言及している。因みに、この「以日易月」は漢孝文帝の故事に由来するらしい。嵯峨太上皇はその遺詔中に「漢魏二文、是吾之師也（漢魏ノ二文ハ、是レ吾ノ師ナリ）」^{三七}と述べたが、即ちその一人である孝文帝は崩御に際し遺詔して厚葬を戒め、長期間にわたる服喪を禁じた^{三八}。応劭は「凡三十六日而釋服矣。此以日易月也（凡ソ三十六日ニシテ服ヲ釋クナリ。此レ日ヲ以テ月ニ易ヘルナリ）」（同上）と注している。三年（三十六ヶ月）の服喪を三十六日で終わらせ、官民ともに日常生活に支障を来さぬよう配慮する天子としての人徳を示したのである^{三九}。本来はそのような倫理観から生まれた措置であつたのを日本では都合よく神宮祭祀の運営上にも応用撰取したものである^{四〇}。

では次に、常彰氏から百年あまり後の時代に活躍した藺田守良氏の説をみてみよう。氏もまたその大著『神宮典略』において、再三この問題を採り上げた。常彰氏と同じく「御汗殿とは忌語に血を汗と云故なり」といい、また「斎王御月経の時は御汗と忌詞をもて申し、又御汗殿に下座す例なり」^{四一}と、「御汗（アセ）殿」を前面に出し説いている。この人のロジックもやはり忌詞に「血」を「阿世」というから、「月事」も「阿世」つまり「汗」というのであるとして、「御汗殿（ミアセノトノ）」を主張する。両氏の説はどこまでも「忌詞」との符合を前提にしており、当時のかれらが実際に利用した文書、それが写本であれ版本であれ、そこに書かれた該文字が果たして本来は「汗」であるのか、それとも「汗（汚）」であるのかについては一切問題にはしなかった。そこに、この両氏の説に一抹の不安を抱かせる点がある。実際のところ、藺田氏が引く『諸雑事記』康平三年九月条は「斎内親王以今月九日、下坐於御汗殿給、任例過七日後十六日直道参宮云々。」^{四二}として「御汗殿」を用いるが、いま私の手許にある『群書類従』所収の『諸雑事記』では「御汗殿」を用いている^{四三}。もとの「底本が異なれば翻字にも違いがでる」のは当然のことだが、だとすればなおさら、いずれを取るにもせよそのような「危うい」部分には決断を下しにくいのである。

ただし、藺田氏には常彰氏とは違うところもあった。同じく『諸雑事記』が記す永承三（一〇四八）年九月八日条^{四四}に寮頭が「穢所殿」とも言っているのに氏は気づいていた。それゆえ「永承三年の條には御汚殿ともいへり」^{四五}と注記したのである。しかし結局、それ以上は問題にはしなかった。その重要な鍵を握るかとも思える記事を最初に引いて「汗」説に反論したのが御巫清直氏であつた。

B…御巫石部清直の「汗（ケガレ）」説

この人の説はやはり大著で知られる『神宮神事考證』^{四六}において述べられている。では、氏がその冒頭に引いた前記「永承三年九月八日」

の条文の該当箇所を左に掲げてみよう（この問題を扱う人が必ず引用する有名な個所である）。それはすなわち、

「(略) 竹河乃御祓之後。斎王俄御汗ニ御坐了。因之斎宮西鳥居許ニ暫御輿ヲ奉下居天。中納言殿并左少弁近江守藤原朝臣泰憲。此由ヲ議定給天。直御汗殿ニ御輿ヲ可奉仕之由被定之處。寮頭被申云。御汗殿如此非常乃御汗御遷座之由云々。而何事乃最初ニ先穢所殿ニ着御哉。於事尤有憚。猶今日許御殿乃内令入座給天。以明日御汗殿可遷座之由具也。依件定着給。以十四日卯時。御汗殿移坐給已了。」^{三七}

とみえる。不備を承知で敢えて拙い訓みをくだせば、竹河で禊祓をおえた後に、「斎王にはかにみけがれに御坐しおはんぬ。之に因りて斎宮の西の鳥居の許に御輿を下居し奉りて。中納言殿並びに左少弁近江守藤原泰憲。此の由を議定し給ひて。直ぐに御汗殿に御輿を奉仕すべきの由定めらるるの処。寮頭申せられて云く、御汗殿は此の如き非常の御汗（の時）に御遷座するの由と云々。しかれども何ぞ事の最初に先ず穢所の殿に着御せらるとや。事に於いて尤も憚り有るなり。なほ今日ばかりは御殿の内に入座せしめ給ひて、明日を以て御汗殿に遷座するの由のぶる也。件の定めに依りて（御殿内に）着き給へり。十四日卯の時（午前六時）を以て、御汗殿に移りまし給ふこと已におはんぬ（カッコ内は田阪補う）」と、概ね以上のようになるであろう。

清直氏はまず「按ルニ一本ニ御汗殿ニ作ル。斎宮式忌詞ノ内ニ、血ヲ稱阿世、トアルカ月事ニ據アル故ニ謬レリ。」（前掲一四二頁）と指摘した。ここにいう「一本」とはもちろん先の度会常彰氏の『斎居通』や藺田守良氏の『神宮典略』を指している。それは、斎宮の忌詞のなかに「血ヲ阿世ト称フ」とあるのを月事のことにしてしまったが故に誤ったのである、と明言した。忌詞では月事を指して阿世といったわけではないのに、いわば「言葉のすり替え」が行われた、と氏は言いたかったのである。氏の説に魅かれる点がここにある。つまり先述「汗」説にある「観念論的な飛躍」に対する疑義である。

続けて氏は、「汗」は「汗」ではなく、『説文解字』に「𦵏ハ婦人ノ汚也」^{三八}とある「汚」字の義であるとして、「汗」字自体にすでに「𦵏」の意味があることを示した。両文字が混同され易いことから、『説文解字』をもつてその字義を示したわけである。同時に、その「御汗殿」の場所がどこにあったかを種々詮索してみせた。その詳細は省くが、いずれも准知できるものなく、結局すべて証拠はないと筆を擱いている。今後、斎宮跡の発掘調査においてもこの種の施設の手がかりを求めて検討を重ねられることが望まれる。

さて先に掲げた条文には、この問題を考えるためにも重要なポイントがふくまれている。それは藺田氏も言及した寮頭が「穢所殿」とも言っていることにある。歌人山中智恵子氏は、「月事であるから直につつしみの御汗殿に入るべきところ、寮頭は、しばらく穢所殿に坐し、明日を以て御汗殿に遷居することに定めた」^{三九}との解釈を取った。山中氏のように読んでしまうと、「猶今日許御殿乃内令入座給天」という寮頭平朝臣雅康がそこでもっとも重要視した部分が完全に抜け落ちてしまう。この時は神宮遅参への焦燥感もあり^{四〇}、中納言（藤原朝臣信長）

と左少弁近江守藤原朝臣泰憲とが合議して直ぐに御輿を「御汗殿」に運ぶべしと定めたのに対し、寮頭雅康の判断は違った。いわく、「御汗殿」はまさにこういう非常時に御遷座される所ではありませんが、しかしだからと言ってご到着早々（正殿に着御もせず）真つ先に「穢所殿」に着御されるのは如何なものでしょうか、「それは最も憚られるべき事」ではありませんか。ですから、今日のところは（まずは）御殿内にご安堵いただき、明日改めて「御汗殿」へとお遷り戴きたく存じます、と新斎宮着座の形式を重んじたのであった。

ともかく、当該条文を是としてみた場合には、斎内親王が一定期間を退座するその施設を「穢所殿」とも呼んでいたことが知られ、断然、御巫清直氏の説に心は傾くのを覚える。寮頭雅康がそのとき、中納言らのいう「御汗殿」を指して「穢所殿」と称したのは、同じやりとりのなかで同一の言葉を重複して繰り返すのを避け、シノニムを使うとする意識が働いたものと解釈しておきたい。特に「書き手」はそうだろうが、それは昔も今も変わらないのではないかと考える。上掲条文のコンテキストからして、寮官人もしくは宮司ら関係者は常日ごろから「穢所」と通称していたと解釈するのが自然であり、決して別の建物を言ったのではない。その文面に「阿世」の阿の字も出て来ないのは、彼らが「御汗殿」を「御阿世殿」などとは呼ばなかったことを、時の寮頭平雅康の言葉が伝えてくれているのである。今「ケガラヒトコロ（未定）」と仮に訓じておくが、長旅の末に漸く到着したその日ばかりは、先ずは本来の内院正殿に着御して旅の疲れを休め、翌日早朝に改めてその「穢所殿」＝「御汗殿」に遷るとしたのであるから、当面の十五日の外宮への参宮を延期し、八日目の同月二十日に離宮院へ向かったものと推測されるところである。最後に、上記三氏も頻りに引用された『諸雑事記』の記事自体への信憑性の問題に少し触れておきたい。

（三）『大神宮諸雑事記』の記事

かつて吉田晶氏は、内宮祢宜の家系にあった荒木田徳雄とその累代の子孫の手により書き継がれたというこの書の信憑性には疑義のあることを次のように述べている。「諸雑事記は正文の焼失や十七世紀に（盛澄による）加筆部分があるほか、（略）編者の史観による編纂や文章化が行なわれており、それぞれの記述にどの程度の信憑性を認めうるかは慎重に取り扱う必要がある」^{〔四〇〕}と。「承暦三（一〇七九）年の火災で正文が焼失した」^{〔四一〕}のに、「寛治七（一〇九三）年に中央官庁に召し上げられていた一本が翌八年に返下され」（同上）て伝写した^{〔四二〕}といわれても、にわかには信じ難く確かめようもないために、やはり割り切れないものを感じてしまう。

一方また、かつて吉見幸和氏（一六七三～一七六一）はその著『難太神宮諸雑事記』^{〔四三〕}において、例えば聖武天皇「天平十四年辛巳十一月三日。右大臣橘朝臣諸兄卿参入伊勢太神宮。其故波。天皇御願寺可被建立之由。依宣旨所被祈申也。・・・」^{〔四四〕}とある一件について、『続日本紀』の関連記事を列挙した上で、「按神皇雜用先規録、（略）勅使ノ篇二載天平十年五月聖武ノ御宇、勅使右大臣正三位橘諸兄中臣神祇伯名代、不載其餘使、則天平十三年十四年之間、勅使橘諸兄之事、實録無取見、然則不過荒唐附會之説而已（神皇雜用先規録ヲ按ズルニ、（略）

勅使ノ篇二、天平十年五月聖武ノ御宇、勅使ニ右大臣橘ノ諸兄神祇伯ノ名代ヲ載ルモ、其餘ノ使ヲ載セザレバ、則チ天平十三年十四年ノ間二、勅使橘ノ諸兄之事、實錄ニハ取ルコト無キヲ見ル。然レバ則チ荒唐附会ノ説ニ過ギザルノミ」(同上)と断じて批判している。この問題に関しては、これまでも田中卓氏や辻善之助氏らによって取りあげられてきたところである^{【四五】}。そしてその大要は、鎌田純一氏によって解りやすくまとめられてもおり^{【四六】}、後学には有り難い一文である。

総じて、『諸雜事記』の記事に信憑性を欠く部分のあることは何人も認めるところだが、先の吉田氏も「その内容には他にみられない各種の記事を含んでいて、一概に捨てざることの出来ないものが多い」^{【四七】}としている。実際、伊勢神宮や伊勢斎宮の諸事ばかりではなく、南勢地域の歴史・地理学的な研究には(場合によっては、とりわけ平安時代の氣象学的研究にも)、やはり不可欠の記事を含んでいると考える^{【四八】}。一部の記事が『続日本紀』と合わないという事のみを以って、他のすべての記事についても信用できぬとして全否定する立場には直ちには賛成できない。筋違いかも知れないが、例えば『本朝世紀』の朱雀天皇天慶元年八月三十日甲辰条に前例を引いて「去元慶三年八月八日木工頭藤原維邦於寮曹司頓滅。其穢及宮中諸司。爰恬子斎王以九月。可入伊勢。八月晦日大祓從停止已了。」^{【四九】}とあるが、元慶三年九月に伊勢に群行したのは恬子ではなく識子内親王であつた^{【五〇】}。『本朝世紀』の当該記事は明らかに正史『三代実録』の記事とは相違し「爰恬子斎王以九月」の個所は間違っている。だからと言って、『本朝世紀』は信用できないとして退けることは無益であろう。この程度の錯簡・錯誤などほどの書物にもありうることである。

思うに、公明正大にして完全に政治的中立の立場で書かれた、言い換えれば「真に客観的」で、かつ一ヶ所も間違いのない史書などどこにも存在しないであろう。筆録者はその時々々の種々の制約のなかで、自らの立場において記録しあるいはしなかったものであり、また読者においては、時に後人の加筆などがあることも前提にして読まれているはずである。『諸雜事記』においても個別条文の内容については、六国史等他書の記事との整合性などを検討しつつ、そこに明らかな矛盾のないものに関して、当面それを活用することは許されるであろう。

(四) むすびにかえて

かつて本居宣長は、「血は知と訓べし。【阿世と訓ムは非なり、血を阿世と云は、斎ノ宮の忌詞にこそあれ、常然よむは由なし】」^{【五一】}とし、斎宮忌詞の特異性を指摘している。一般的に考えて、「血」は決して「月事」に限った問題でもなく、また伊勢斎宮における「穢れ」には「血」以外の事象も多々あつたはずである。従つて、逐一の記録には残らないものの、その実名称を忌避して包括的に「ケガレ」と汎称するのが最も現実的であり、またその方が原因を一つに限定されず対外的にも露骨にならない穏当な表現ではなかったかと思う。宣長はまた、「月経は、(略)『和名抄』に俗に「佐波利」と云う」とみえ、『うつほ物語【俊蔭の巻】』に「何時よりか御けがれはやみ賜ひし云々」(中略)などあれ

ど、「障と云も、穢と云も、月水の出ることを云る稱にして、正しく其物を指て云るには非ず（略）」^{五三}とも論じた。従って、「阿世」は「血」そのものを指している場合の忌詞ではあつても、必ずしも「佐波利」を指している詞ではなかったと言えるのである。

そうすると、現行刊本の『中右記』や『壬生家文書』にみえる「汗」の字は、当然のことながら忠実に翻字された結果であるが、当時におけるそれぞれの筆跡にも問題があると考えるべきなのであろう。つまり両書の筆録者がそれぞれの文面で「斎宮忌詞」を使用したと強いて考える必要性がないとすれば、むしろ「汗」字と「汗」字とに対する認識に問題があつたということに帰結するかも知れない。だとすれば、度会常彰氏や藺田守良氏の「汗」説において「心が揺らいだ」のは杞憂に終わることにもなるのである。

また、穂積陳重氏は「我国語なる「いみ」に於ては、或は汚穢を避くるは其原意にして、總て神に奉仕するには潔斎して一切の汚穢を避ける可らざるが故に、「いみ」に「神聖」若くは「敬畏」の意義を生じたるやも知るべからず。」^{五四}と論じた。文字どおり「汚穢を避けるのが原意」であるが、神事の上で忌避する必要があつて斎王並びに女官たちの「佐波利」を言う場合、身辺に仕えるごく少数の女官たちが忌み憚つて小声でいへば通じることであつた。あるいは、むしろそういう事態に特化した時にこそ「阿世」という忌詞は使用されたのではなかったのだろうか（所管の寮官人には事務連絡の要もあつたであろう）。当時の人々は今よりはるかに大らかであつたに違いないが、しかし伊勢斎内親王の身近に仕えた関係者たちが平然と「ミアセソトノ」などと公言するほど粗野な人達だったとは、私には想像し難いのである。

すでに見て来たように、度会常彰・藺田守良両氏の「汗」説のロジックは、「血」を忌詞に「阿世」という点にこだわって「汗（ケガレ）」ではなく「汗（アセ）」と呼んで「御汗（阿世）殿」を主張した。その結果、観念論的には架空の「御血殿」を想定することにもなった、と言えよう。一方、御巫清直氏の「汗（汚）」説は、「汗」字にはすでに婦人の「姪変」の謂がある故に「汗」と訓む必要はないとした。それが証拠に『諸雑事記』永承三年九月八日の条文で、寮頭が「御汗殿」を指して「穢所殿」とも言っているではないか、として反論したのである。証会・藺田両氏もその同じ条文を引用しながら、その点を問題にせずにはいずれも「御汗殿」と訓んで、寮頭の言葉を生かすことが出来なかったのは弱点であつた。ましてや藺田氏はそれに気づいていたにも関わらず、度会氏の「汗」説を無批判に継承することになった。そこには恐らく、本来的に「汗」字と「汗」字との混乱もあつたのである。両氏自身がどうであつたかは知る由もないが、その説を容認し継受した人々、またかつて写本作業に従事された人々の中にも、「汗」と「汗」とが別字（訓義の相違）であるとの認識に疎い方もきつとおられたに違いなかった。そうでなければ、誤写やこういう不分明な話にはならなかったであろう。

結局のところ旧稿と同じく御巫清直説を是としておくが、しかし、刊本の『中右記』が「御汗時」と記し、『壬生家文書』に「野宮汗殿」とあるのは、むしろ御巫説を容認せぬものである。今後この問題を考える若い世代の人たちには、その点を念頭に解決の手がかりにしていた

できれば幸いである。

【註】

- (一) …旧稿「斎王の退下と帰京」(『斎宮歴史博物館研究紀要四』、平成七年・一九九五年三月所収)の註三(二七頁)で触れた斎宮忌詞と御汗殿に関して、その後、後に認識を新たにした問題点を含め「小考」としてここにまとめることにした。
- (二) …東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 中右記』一、「例言」(二頁)による。
- (三) …清・阮元校刻『十三經注疏附校勘記上冊』(中華書局出版、一九九一年第五次印刷)所収、『禮記正義』卷二、第十四頁(二二四二頁)。陸徳明撰・張一弓點校『經典釋文』(上海古籍出版社、二〇一二年)、二五六～二五七頁など。
- (四) …新訂増補国史大系『日本三代実録』前篇・後篇(吉川弘文館、一九八三年)で思いつくままに挙げれば、「以舊社近於汗穢也」(一一三頁)、「汗穢事等在介リ」(一九八頁)、「冢墓骸骨汗其山水」(二八九頁)、「及汗穢神社」(三四五頁)、「神祇官染汗其穢」(三六七頁)、「以皇太后宮犬死内裏染汗也」(三七〇頁)、「豈汗汾水之流」(三九八頁)などがある。
- (五) …東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 小右記四』(岩波書店、一九八七年第二刷)、一〇七頁。かつて本書を職場の同僚梅沢裕氏のご好意により長期間貸して戴いた。心から感謝を申し上げたい。
- (六) …『漢書』九(中華書局、一九八三年第四次印刷)、卷六十五、東方朔伝第三十五、二八七三～二八七四頁。小竹武夫訳『漢書』6・列伝Ⅲ(筑摩書房、二〇一〇年第二刷)、三八頁に拠った。
- (七) …前掲『漢書』九、二八五二頁。前掲小竹氏訳『漢書』6、一九頁。
- (八) …前掲『漢書』一二、卷一百下、敘伝第七十下、四二五八頁。前掲小竹氏訳『漢書』8・列伝Ⅴ、五四七頁に「さりながら肉を懷に入れ、酔うて殿中に放尿するなど、・・・」という。王先謙『漢書補注』拾貳(上海古籍出版社、二〇一二年)、六二九四頁の【四】補注も参照。
- (九) …司馬彪撰・劉昭注補『統漢書』礼儀志上(『後漢書』一一、中華書局、一九九一年第五次印刷)、三一〇四頁。渡邊義浩・藤高裕久・塚本剛・平田陽一郎編『全譯後漢書』第四冊、志(二)・礼儀(汲古書院、二〇〇五年第二刷)、二四頁下段に拠る。
- (一〇) …前掲『全譯後漢書』第四冊(志二・礼儀、四一～四二頁。王先謙撰『後漢書集解』下(中華書局、一九九一年第二次印刷)、一一〇二頁下段。徐蜀選編『二十四史訂補』第四冊(書目文獻出版社、一九九六年)所収、清周壽昌著、廣雅書局刊本『後漢書注補正』、六六三頁上段。なお、祭祀儀礼ではないが『史記』卷五十九、五宗世家第二十九には長沙定王発の出自を述べて、「發之母唐姫、故程姫侍者。景帝召程姫、程姫有所辟、不願進、而飾侍者唐兒使夜進。上醉不知、以為程姫而幸之、遂有身。已乃覺非程姫也。及生子、因命曰發(発ノ母唐姫ハ、故・程姫ノ侍者タリシ。景帝、程姫ヲ召サルモ、程姫ハ辟クル

所有リテ、進ムヲ願ハズ、而チ侍者ノ唐兒ヲ飾ヒテ夜進メシムナリ。上ハ醉ヒテ知ラズ。以為ヘラク程姫ナリト而シテ之ニ幸シ、遂ニ身ゴモルコトアリ。已ミテ乃チ程姫ニ非ザルヲ覺ユナリ。子ヲ生スニ及ビ、因リテ命ツケテ発トイヘリ。」(二二〇頁)とあり、「程姫有所辟、不願進」の理由を『索隱』は姪変の謂に解している。天野信景著『隨筆鹽尻』下巻、(国学院大学出版部、一九一〇年)、卷六十六(二六三頁下段)にも引く所の『群碎録』(和刻本漢籍隨筆集第二集、汲古書院、一九七二年所収)にも「姪變婦人有汗也。姪變月事也(姪変ハ婦人ニ汗レ有ルナリ。姪変ハ月事ナリ)。」とみえている(三一四頁)。

(一一)：『大神宮諸雜事記』二『群書類従』第一輯、神祇部、続群書類従完成会、一九八三年改訂三版第五刷所収、百十四頁上段～下段。

(一二)：前掲『大神宮諸雜事記』二、百二十九頁下段。他に同類の事例として、「治暦三(一〇六七)年九月。(略)斎王参着離宮院給天。十五日夕大祓了。十六日巳時御汗殿下座了。仍以二十五日天二宮参宮已了。」(百三十五頁)もある。また『文保記』『群書類従』第二十九輯・雜部、続群書類従完成会、一九八二年訂正三版第五刷所収)にも「婦人月水」の項に、斎内親王に関するいくつかの事例を列挙している(五〇六頁)。

(一三)：程樹徳著『九朝律考』上冊(台湾商務印書館、一九六五年)、卷一、九九頁。

(一四)：度会常彰編輯『齋居通 卷下』(大神宮叢書『神宮隨筆大成』前篇、臨川書店、一九七〇年復刻)、五四五～五四六頁上段。藺田守良著『神宮典略』前篇(大神宮叢書、臨川書店、一九七一年復刊)、神宮典略五、殿舎考六、三二六～三二七頁。『同』中篇(同上、一九七〇年復刊)、神宮典略十七、齋忌・忌詞、三〇五頁。『同』後篇(同上、一九七六年復刊)、神宮典略三十四、神祇人倫、斎王御汗殿例、四七六～四七八頁。

(一五)：御巫石部清直著『神宮神事考證』中篇(大神宮叢書、臨川書店、一九七〇年復刊)、「斎宮寮考證」御汚殿、一四二～一四三頁。

(一六)：前掲度会常彰編輯『齋居通卷下』、五四五頁下段。

(一七)：増補史料大成第十二卷『中右記』四(臨川書店、一九八〇年第三刷)、三～四頁。なお、東大史料編纂所編『大日本史料』第三編之十一(一九五三年)、一五〇頁に所引の『中右記』天永二年正月四日条にはこの話はない。

(一八)：大日本古記録『殿暦』二(岩波書店、一九六三年)、三三四頁。増補史料大成九『中右記』三(臨川書店、一九七五年)、四〇九～四一〇頁。経緯については別稿「斎内親王の呼称について」(本論文第二章第三章)に述べた。

(一九)：新訂増補国史大系『延喜式前篇』(吉川弘文館、一九八三年)、卷五、一〇〇頁。

(二〇)：斎宮忌詞に見える「阿世」も出血一般と解すべきことは西山良平氏も指摘している(同氏「王朝都市と『女性の穢れ』」『日本女性生活史』第一巻原始・古代、東京大学出版会、一九九一年二刷所収、一九八頁)。

(二一)：宮内庁書陵部編『圖書寮叢刊 壬生家文書 九』(明治書院、一九八七年)、伊勢斎宮文書一、二三九七「弁官宣旨案」、一一八頁。

(二二) 前掲『圖書寮叢刊 壬生家文書 九』の解題(二八頁) 参照。

(二三) 度会行忠撰『古老口實傳』(『群書類従』第一輯、続群書類従完成会、一九八三年訂正三版第五刷所収)、三三一頁下段。

(二四) 延久四(一〇七二)年六月九日条俊子、天養二(一一四五)年六月十六日条妍子、建長七(一二五五)年十二月十五日条などを掲げている。

(二五) 榎村寛之「斎王制と天皇制の関係について」(同氏著『律令天皇制祭祀の研究』、塙書房、一九九六年所収、一六九頁。初出は『古代文化』一九九一年第四三卷四月号、二七〇四五頁)。

(二六) 註(一一)前掲『文保記』は天喜二(一〇五四)年、康平六(一〇六三)年の事例を掲げる。註(一二)前掲『太神宮諸雑事記』二は後者の事例に、「(略)然而斎宮齋院。祖父母及兄弟乃忌服不御坐之例也。以日易月之前例。所謂服五月五日。服三月三日。服一月一日。・・・(然レバ而チ斎宮齋院ハ。祖父母及ビ兄弟ノ忌服ニ御坐サザルノ例ナリ。日ヲ以テ月ニ易ヘルノ前例ナリ。所謂服五ヶ月ヲ五日トシ、服三ヶ月ヲ三日トシ、服一ヶ月ヲ一日トス。)」(一三一頁上段)とする。

(二七) 新訂増補国史大系『続日本後紀』(吉川弘文館、一九八七年)、卷十二、承和九年七月丁未条(一三六頁)。

(二八) 『史記』二(中華書局、一九八九年第十一次印刷)、卷十、四三四〜四三五頁。『漢書』一(中華書局、一九八三年第四次印刷)、卷四、一三二〜一三四頁。小竹武夫訳『漢書』1、帝紀(筑摩書房、二〇一〇年第三刷)、一三二〜一三四頁。

(二九) 後漢安帝の建光(一二二〜一二三)中に、尚書令の祝諷たちが奏上して光武帝の故事に復すべきを進言するなかに「孝文帝が約礼の制を定めた」由を陳べている。李賢らが注して「孝文帝崩、遺詔薄葬、以日易月、凡三十六日釋服、後以為故事」とするのがこれである。『後漢書』六(中華書局、一九九一年第五次印刷)、卷四六、列伝第三十六、陳忠伝、一五六〇〜一五六一頁。吉川忠夫訓注『後漢書』第六冊(岩波書店、二〇〇三年)、二四四〜二四五頁。

(三〇) 註(一四)前掲同氏著『神宮典略』前篇、三二六頁および同書後篇、斎王御汗殿例、四七六頁。

(三一) 前掲『神宮典略』前篇(神宮典略五・殿舎考六)、三一六〜三一七頁。

(三二) 前掲『太神宮諸雑事記』二(『群書類従』第一輯、神祇部所収)、一二九頁下段。なおこの『諸雑事記』では他条でも全て「汗」の字を用いている。

(三三) 前掲『太神宮諸雑事記』二、一一三頁下段〜一一四頁上段。

(三四) 前掲『神宮典略』前篇(神宮典略五・殿舎考六)、三一七頁。

(三五) 註(一五)前掲「斎宮寮考證」御汚殿、一四二〜一四三頁。

(三六) 註(三三)に同じい。(事の経緯は現地に同行した者でないと解らぬほど詳細に書かれている。同行記者なくば詳しい復命があったものであろう。もし当該条文に信憑性がなく後日の加筆としても、少なくとも神宮関係者には「穢所殿」という呼称が使われていた点は保障されるものと考ええる。)

(三七) …漢・許慎撰『説文解字』(中華書局、一九七九年第五次印刷)、二六四頁下段。

(三八) …山中智恵子著『続齋宮志』(砂子屋書房、一九九二年)、九八頁。同子氏は初めから「御汗(アセ)殿」を前提としたがゆえに、それとは別個に「穢所殿」があるのか、とくに誤読されたのであろうが、それにしても正確さを欠くと思う。著名な歌人である氏の齋宮研究書は読みやすく、多くの読者層をもつ。現代における先駆的な業績の一つである。日頃から多くを学ばせていただいた者として敬意を表するが、氏は時に史料の思わぬ読み違いもされることがある。到底人さまの事を言えるような立場ではないが、敢えて指摘をさせて戴いた。他に氏の著作には『齋宮志』(大和書房、一九八六年)、『齋宮女御徽子女王歌と生涯』(大和書房、一九八六年)、『齋宮笛記』(砂子屋書房、一九九三年) など一連の業績がある。

(三九) …『諸雑事記』当該条は、嘉子一行は九月八日に都を発ったが「御群行之間、非常事多々出来レリ。」といい、栗田口では馬が犬を踏み殺し、甲賀頓宮でも駄馬の斃死があり、鈴鹿の頓宮では女別当に仕える雑色と寮頭の雑色とが打ち合いの流血騒ぎを起こし、一志頓宮に到って使部等に随身の駄馬が俄かに斃死しているのを十三日の朝見つけるなど、彼らが最も忌避する「汚穢」の事どもに見舞われた。十五日の参宮への影響が懸念され、祭主中臣永輔(行神祇大副)は「尤も穢気たる可きなり」と雑色を示したが、検非違使の惟宗公方が「更に穢れとなす可からず。早く御参宮あるべきなり」と断じたので、「十五日に内親王はご参宮されるということ で一定した」ばかりの所へ、今度はにわかに嘉子自身に障りが生じた、と続くわけである。引用では略したが、この経緯を前提にして全体を読まないと、彼らの慌てぶりは伝わらない。

(四〇) …吉田晶「県造小論―伊勢神宮との関係を中心として―」(岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究』上、塙書房、一九八四年所収)、八一―八二頁。

(四一) …前掲『諸雑事記』二、巻第三、一四一頁。西田長男「大神宮諸雑事記」(『群書解題』第六、神祇部、一九七六年再版)、一五頁下段。鎌田純一「大神宮諸雑事記の史料性」(『史料』第二六号、一九八〇年所収)、一頁。

(四二) …前掲西田長男氏論文(二五頁) および前掲鎌田純一氏論文(二頁)。

(四三) …神宮文庫所蔵「二五四七五号・一冊(天保七年神麻績連久壽写本)。末尾に「寛延三年庚午秋七月、風水散人源幸和誌」とあり、一七五〇年の七月、彼が喜寿を過ぎて書いたものであったことが判る(なお、該写本は紙魚害の目立つ現状にて、判読し難い箇所も有之、私に憂う)。

(四四) …前掲『諸雑事記』一、七十六頁下段。

(四五) …田中卓「イセ神宮寺の創建」(『田中卓著作集』)。西田長男「伊勢神宮と行基の神佛同體説(上)」(『神道史研究』第七卷第三号、一九五九年所収。喜田貞吉「国分寺の創建と東大寺の草創」(『喜田貞吉著作集6』(平凡社、一九八〇年)所収、三四九頁。辻善之助「本地垂迹説の起源について」(同氏著『日本仏教史研究』第一巻、日本仏教史之研究、正篇上、岩波書店、一九九一年第二刷、特に四二―四六頁、など)。

(四六) …鎌田純一氏前掲論文「大神宮諸雑事記の史料性」、一―三頁。

(四七) …吉田晶氏前掲論文「県造小論―伊勢神宮との関係を中心として―」、八二頁。

(四八) …拙稿「伊勢斎宮の立地とその歴史的背景」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四十二号、二〇一四年所収)において、南勢地域の土地条件図と併せて『諸雑事記』が記す洪水記事は、伊勢斎宮の立地を考えるうえでの貴重な史料の根拠にもなった。伊勢斎宮の研究には不可欠の一書である。

(四九) …新訂増補国史大系『本朝世紀』(吉川弘文館、一九六四年)、第二、朱雀天皇天慶元年八月、十一頁。

(五〇) …前掲『日本三代実録』後篇、卷三十(三九四頁)には、元慶元年二月十七日に伊勢斎識子内親王を卜定し、同三月朔日には前斎内親王(恬子)を迎える使いを発遣し(三九七頁)、同卷二十六(四五八頁)元慶三年九月九日内申条に識子内親王の群行を伝える記事を載せている。従って、この正史の記事と、指摘した『本朝世紀』の記事とは合わない。後者の間違いである。

(五一) …『本居宣長全集』第九卷(筑摩書房版、一九八九年第七刷)、古事記傳五之卷、二二八頁。

(五二) …前掲『本居宣長全集』第十一卷(一九八九年第五刷)、古事記傳二十八之卷、二五三頁。

(五三) …同氏著「諱に関する疑」(『帝国学士院第一部論文集邦文第貳號』、帝国学士院、一九一九年所収)、一六一頁。同著は『忌み名の研究』(講談社学術文庫、一九九二年)として再刊された(二八八頁)。

第三章 「別れの御櫛」考

(一) はじめに

いわゆる別れの御櫛をめぐっては、すでに芝野真理子氏や榎村寛之氏の研究成果^①が出ている。芝野氏はこの櫛を「人の世との訣別と聖なる神との婚姻の象徴である」^②とされた。一方、榎村氏の論考は「発遣儀礼」それ自体の意義についての考察であり、決して櫛だけを採り上げたのではないが、概ね次のような論旨であった。すなわち、その発遣儀礼で「斎王に与えられる櫛には、節刀と似た意味がこめられているのではないか」^③とし、それが遠征する將軍と異なるのは、「天皇に代わって祭祀を行う資格、つまりは祭祀権をも分与されていたと考えられ」(同上)、従って「別れの御櫛の本来の意味」は、「斎王を擬制的であれ成人させて聖別し、祭祀資格を完成させる」(同上)ことにあった。そして同時に「その発遣儀礼に、婚姻の意味が含まれていた可能性も全くないとは言えない」(同上)とする。

両氏の論考は今後ともこの方面の研究には不可欠の一説であろう。ただ、そこに引用された一部の史料に関して、その訓み方や解釈においてはいささか異なる卑見を以前より私は持っている。敢えて一つの「異見」として別の訓み方と解釈を試みた上で、改めてその群行発遣の夜に天皇自らが斎内親王の髪に挿す小櫛(額櫛)の意味について抱いてきた考えないしは見通しを提示することができれば、実事求是の上からも、今後に向けての課題の一つになりはしないか、と自らに言い聞かせた次第である。

そもそもこの「別れの御櫛」なる名称は、『源氏物語』や『大鏡』などの文学作品や歴史物語によって初めて用いられた^④通称(俗称)であって、決して当時の正式名称ではない。この点はすでに前掲榎村氏の論考において詳述^⑤されているので繰り返す必要はないが、本稿としても、最初に二、三の史料を引いてみずからのスタンスを明らかにしておきたいと考える。

例えば、平安時代の代表的な有職故実書である『江家次第』は、「斎王群行」の項に「額櫛」^⑥と称し、それが「黄楊木で作られ長さ二寸許り」(同上)の小さなものであったことも記している。平安時代の公家の日記にあっても「別れの御櫛」と表記した記事はない。因みに、斎王恭子女王の発遣の儀を伝える『小右記』の永延二(九八八)年九月廿日条には、「黄楊木額櫛納蒔絵筥(黄楊ノ木ノ額櫛ハ蒔絵ノ筥ニ納ム)」とか「天皇以櫛刺斎王額(天皇、櫛ヲ以テ斎王ノ額ニ刺セリ)」^⑦とあり、「額櫛」あるいは単に「櫛」としか表記はしていないのである^⑧。また、鳥羽天皇の斎王姁子の発遣儀礼を伝えた『殿暦』の天永元(一一一〇)年九月八日条には、「主上自以小櫛加斎王額、有勅語云々(主上ハ自ラ小櫛ヲ以テ斎王ノ額ニ加ヘ、勅語モ有リシト云々)」^⑨とあれば、「小櫛」とも称したことが判る。「長二寸許」(江家次第)であったからである。

ところで、鎌倉時代中期の成立かとされている『吉野吉水院楽書』^⑩には、「斎宮ノ下リ玉フトキハ。又都へ販リ給ナド云フ有。此故ニ櫛

モア(ワ?)カルゝ人ニハトラセズ。」としている。こうして時代が下つても斎王の発遣に対して「永別」という観念はうかがえないのである。形見に櫛を贈る習慣は『落窪物語』や『夫木和歌集』などのほか『源氏物語』自身にも出てくる語で^{二二}、人に櫛を贈ってはいけないなどというような俗信(民俗信仰)が斎王制度成立の以前からあったとは到底思えない。『源氏物語』などが「別れの」という象徴的な形容句をつけて呼んだのは当時の世情から生じたものか、あるいは紫式部個人の主観的な呼称表現であったとすれば、さして普遍性は持たないものである。本稿では、そういう普遍性に欠ける表現(用語)は避けて単に「櫛(小櫛)」ないしは「額櫛」として、つまり「別れの」という固定観念はひとまず除外して考えることにしたい。

思うに、紫式部が時間をかけて物語を綴っていた十一世紀初頭の頃^{二二}というのは、いわゆる末法の時代^{二三}を目前に控えた時期にあたっていた。井上光貞氏によれば、『往生要集』が大成した寛和元(九八五)年は、「康保元(九六四)年以来、慶滋保胤が指導してきた念仏結社の勧学会がまさに源信の二十五三昧会へと発展解消した時期」^{二四}にも当たり、党と称したその念仏結社への結衆は、故人となった仲間も含む精神的紐帯で結ばれた「往生極楽の団体であった」(同上)という。しかもその新たに生まれた運動体の発起が「往生要集の功畢ったその翌年(寛和二年)に当たる」(同上)のも偶然ではなく、圭室諦成氏は、先に『往生要集』で理論立てをし、ついで実践の方法(首楞嚴院二十五三昧講)を確立したのが源信(恵心僧都)だった^{二五}としている。紫式部はまさにそういう念仏結社の活動にも象徴される時代を生きていたのであり、彼女もまた『往生要集』から強い影響を受けて^{二六}末法思想にも関心を持ったであろう。全くの想像に過ぎないが、「櫛」本来の意味を離れて「別れの」と着想させたのは、その時代を覆っていた仏教思想の影響を抜きにしては考えられないのではないか、と思う。速水侑氏は、源為憲の『三宝絵詞』(九八四年成立)や藤原行成の『権記』長保二(一〇〇〇)年条^{二七}などを引き、「十世紀以後の貴族社会では」、「末法思想は古代的秩序の解体と即応した社会的危機意識としての色彩を深め、末世・末代等の語は各種の史料に頻出」^{二八}するようになったという。また、すでに寺崎修一氏も源信の思想は「僧俗あらゆる階級に浸潤」^{二九}してゆき、以後の文学作品や日記における澆末観の醸成、出現に大きく貢献したことを論証している。「別れの」という観念的な形容句も恐らく、「摂関体制の確立に伴いもたらされた中下層貴族の没落や武士名主層の台頭」^{三〇}などを背景として徐々に深化したであろうその「澆季末世の社会的不安感」(同上)と無縁の語ではなかった、と考えるものである。

(二) 発遣儀礼に見る髪上げと小櫛

前掲芝野氏の論考では、たどり得る「小櫛」(氏は「御櫛」と略す)の実施状況を表にまとめ、清和天皇天皇の恬子内親王から四条天皇の昱子内親王まで十三名を掲げている。そして、天皇と斎王との続柄をも整理され、父―娘の関係にあるのはわずかに二例(三条の当子、後三条

の俊子)に過ぎないとし、その背景に「摂関政治や院政といった政治体制の中から生じて来た天皇の即位年齢の低下」^{⑤⑥}があることを指摘したのは正鵠を射ている。傍系斎王の出現は、榎村氏の分析にもあるように ^{⑤⑦}、摂関家が実権を掌握した結果、「幼帝慣習の定着」(同上)により必然的に生じた問題であり、併せて「八・九世紀には、天皇の荘厳装置として機能した」(同上)斎王制度も十世紀代以降になると「形骸化・相対的地位の低下」(同上)が進んだのである。そして、選ばれる斎内親王の低年齢化の事例も目立つようになった。その事実、群行当日に行われる発遣儀礼の記事において、「櫛」に関連した行間にある割注の内容からも推測されるであろう。その該当箇所にある割注は多く斎内親王の「髪形」をめぐりなされている。本来それは「小櫛」を挿すことが容易にできる、言い換えれば「髪上げ」可能な成人の斎内親王(適齡十三歳頃)であれば、わざわざ割注して補完する必要のない内容であった。そこで以下には、その点に注目していくつかの事例を本稿でもたどってみようと思う(A〜D)。

(A)『西宮記』^{⑤⑧}の「群行」中にみえる「斎王参入」の段にある割注に、

「(略)斎王着南面座、王幼乳母抱之、着唐衣裳玉纓等、以不上髪為童(斎王、南面ノ座ニ着クニ、王ノ幼ケレバ乳母之ヲ抱ケリ、唐衣ノ裳ニ玉纓ナドヲ着クルナリ、以テ(或は以フニ)髪ヲ上ザリシハ童タレバナリ)」(同上)

とある。「以」はこの場合、すでに「玉纓等」を頭に着けていたのだから、「おもフニ」と訓むか、あるいは「もつテ」と訓じて、「それで」「そのため」という謂にとるかいずれかであろう。ところが、別の系統に属する刊本^{⑤⑨}では、この最後の一行にある「以」字が「必」と翻字されていて、「必不上髪為童(必ズシモ髪ヲ上ゲザルハ童タレバナリ。または、必ズヤ髪ヲ上ゲザルハ童タレバナリ)」(同上)となっている。神道大系本の『西宮記』でもその部分は同様に「必」とされている^{⑥⑩}。もし「必」が正しく「必ズシモ髪ヲ上ゲザルハ、童タレバナリ」と訓めると仮定してみても、その場合、本来のあるべき語順としては「不必・」でなければならぬところではある。

ちなみに、(財)前田育徳会「尊經閣善本影印集成」に所収の『西宮記』^{⑥⑪}に拠って、右に問題にした箇所を検した限りでは、いかに不慣れな私にもそれは「以」としか読めない文字であった。「以」と「必」とは「汗」と「汗」ほどには紛らわしい文字ではない。伝世する諸本により小異のあることは珍しくないが、この尊經閣文庫の影印集成本『西宮記』の場合には間違いなく「以」であった。文脈に沿った意味の上からしても、私はこの善本影印集成にある「以」の方を採りたいと考える。

その問題はさておき、ではこの『西宮記』に割注を以って記録された幼少の斎内親王とはいったい誰をモデルにしたのだろうか。むしろその方が「訓みや解釈」の上からは大切なことである。所功氏の大著によれば、『西宮記』の原本文は村上天皇の「天徳元年十月から康保元年十二月の間にその大部分が完成」していたと考証・推断されている^{⑥⑫}。すると直近の天徳元(九五七)年九月五日に群行した^{⑥⑬}村上天皇

の斎王楽子内親王（満五歳）^{三九}を事例として注記された可能性がもとも高いのである。六歳にも満たない楽子には髪上げは難しく「玉纓（玉鬘）」を着けて臨んだのだが、深夜の儀式は眠かったのであろう、乳母に抱かれたのである。従って筆者（醍醐皇子高明）は、「それで（或は、おもふに）御髪をお上げにならなかったのは（王がまだ）幼少にあらせられたからである」と、幼童斎宮ならではの異例のさまを注記して向後に備えたのである。これ以外の解釈はあり得ないであろうと思う^{四〇}。

（B）『江家次第』の「斎王群行」中にある「闈司開戸、斎王入自同戸着座（闈ノ司戸ヲ開キ、斎王同戸ヨリ入テ着座ス）」の割注を次にみてみよう。これはまだ天皇が櫛を召す前の段階であるが、幼童ならではの記事ゆえに注目したい。すなわち、

「略」、着玉鬘、依未成人不可上髪給歟、又御乳母可奉抱、女房三人取几帳隠玉座東南二方、（前例隠東南一方）由、関白被申、而長曆并延久御記如此（玉鬘ヲ着ク、未ダ成人ナラザルニ依テ髪ヲ上ゲ給フ可カラザルカ、又御乳母ノ抱キ奉ル可ク、女房三人几帳ヲ取りテ玉座

ノ東南二方（前例ハ東南一方）ヲ隠ス由、関白ノ申サルナリ、而チ長曆并ビニ延久ノ御記モ此ノ如シト）」^{四一}

とある。本稿にとって重要なのは「着玉鬘、依未成人不可上髪給歟」の部分である。この時の斎王は未成人であったために髪をあげることが出来なかったので玉鬘（かもじ・そえ髪）を着けて臨んだのである。幼童であったため乳母に抱かれたまま天皇の近くへ参進したことが下条に見えている。では、この割注記事にもっともふさわしい幼童斎宮は果たして誰であろうか。前掲所氏によれば、本書の「原形成立は寛治年間（一〇八六〜九四）ころまで遡り」^{四二}、かつ康和四（一一〇二）年以降匡房の没年（一一一一）までにも「編纂と補修に努めていたであろう」（同上）とされている。また、「本文や割注に『北山抄』からの抄出なども少なくない」（同上）とされる。『北山抄』の成立は「ほぼ長和年間（一一〇二〜一〇一七。公任五十歳前後）ころ」^{四三}とされる。その間に群行した斎内親王は当子と嫡子の二人だが、当時としてはいずれも幼童とはいえない。匡房が本書執筆に着手した寛治年間に群行した善子^{四四}か、それ以前で直近の媼子内親王^{四五}か、いずれかが候補になろう。ここは年齢的にみて後に郁芳門院として著名な媼子内親王が群行した時のことだと考えておきたい^{四六}。従って割注は、幼童斎宮媼子には「未成人ゆえ、櫛を挿すための髪上げが出来ないので、玉鬘を着けてその場に臨んだ」という意味であり、この場合は文字どおり仮髪（かつら）が必要だったので、注記されたのである。

（C）『法性寺殿御記』にある「取几帳指隠斎王」に続く割注によつて、右記の事情も一層明確になる。すなわち、

「後聞、斎王着鬘、是幼女依不能上髪、所着也、成人斎王不着之、降輿之間、忽聞得此旨、徹之云々（後ニ聞クナラク、斎王ハ鬘ヲ着ケタリ、是レ幼女ノ髪ヲ上グルコト能ハザルニ依リテ、着クル所ナリ、成人ノ斎王ハ之ヲ着ケズ、輿ヲ降ルルノ間ニ、忽チニシテ此ノ旨ヲ聞キ得テ、之ヲ撤シタリ、ト云々）」^{四七}

と、忠通は記している。これは天治二（一一二五）年九月十四日に行われた崇徳天皇（御年七歳）の斎王守子（満十四歳）の群行時の記録である^{三九}。すでに成人に達していた守子の頭に迂闊にも「わげ（みずら）」を着けて臨んだのだが、それは幼女斎王のすることで成人斎王は着けたりはせぬものだと輿を降りる時にわかに指摘され、慌てて外したことを、筆者の忠通は後聞したものである。これで判ることは、成人斎王が髪上げをして発遣の儀に臨んだのは間違いない。ただ、幼女の髪ではそれができず、櫛が挿せないために時に玉鬘や鬘などが登場してくるのである。制度の形骸化がはじまってすでに久しかったとはいえ、陪従の女官たちの認識の無さや、いささかなおざりな様子も想像できる事態であった。時代が下れば、その傾向は一層深刻なものになっていったことが次の『玉葉』からも判る。

（D）『玉葉』の文治三（一一八七）年九月十八日条には、後鳥羽帝の斎宮潔子内親王発遣の日の出来事が詳細に記されている。ここは高橋貞一氏による訓読本があるので、少し長くなるが安心して肝心の個所を左に引いてみよう。

「次に斎王参進せんとする間、几帳の隙側よりこれを望見するに、未だ髪を上げられず。余驚きて斎王の仕女に問ふ。答へて云はく、蔀屋に於て御髪を上げらるると雖も、即ちこれを撤す。（略）今官庁に於て御髪を上げらるるべき由、一切承らず存ぜずと云々。（略）仍つて定経を以て親雅に問ふ。親雅申して云はく、蔀屋に於て御櫛上を撤せらるる由、全く以て知り給へず。（略）仍つて髪上の讃岐を召し出し、その物具を召し（末額等なり）、本御座の几帳の中に於て、陪従の女これを上げ奉る後、御座の前に参進し給ふ。（略）余従女に仰せて云はく、勢多の離宮に至り、御櫛を筥に納めらるべし。路間勢多までは、御櫛を撤せらるべからず。又御輿に向ひ下りしめ給ふ間、顧面せしめ給ふべからずといへり。」^{四〇}

と見えている。時に九歳^{四一}の潔子の場合には、伝統的なしきたりに関して既に関係者にもほとんど認識がなく、一度髪上げしたのを直ぐに撤したためごたついた様子が記されているが、つまるところ、「末額」^{四二}などを用い、あろうことか本御座の几帳の中で急ぎ髪上げして発遣の儀に臨むという醜態ぶりを伝えている。潔子の場合はまだ八歳（満七歳）であったので、髪上げに末額などを使ったのかも知れない。兼実は陪従の女官に最後まであれこれと口添えをしなければならなかった。すでに過去の慣例は通じない時代に在ったのである。しかも、当日は内侍ばかりでなく神祇官の中臣でさえ、否、だからというべきか、いつもの如くに遅参するなどしたのを、「毎事泥の如し。有れども亡きが若しと謂ふべきか」^{四三}と嘆いており、そのお座なりにして懈怠の様子は目を覆うばかりであった事も判る。

以上、右掲（A）～（D）の割注から明らかなことは、伊勢斎内親王の発遣の儀に不可欠であった小櫛（額櫛）は、本来はあくまでも髪上げ可能な成人皇女を前提にしたものであったということにはかならない。ところが天皇制の変質に伴いもたらされた変化として幼童斎王が幾たびも出現した結果、上掲のごとく割注が挿入されるに至ったのであり、決してそれを本来の正式な作法であったと勘違いしてはならない。

しかし考えてみれば、一方ではそのような成人皇女を前提とした制度は伊勢神宮の神事の遂行には時に支障を来すものであったはずである。とりわけ後代には忌避観念のあった「姪変」による齋忌と神事への参向遅延などが避けがたくなることは始めから明白であった^{四四}。ならばどうしてそのような相矛盾する前提でなければならなかったのだろうか。恐らくは、そういう一見して相矛盾する現実のなかにこそ、深夜の儀礼における小櫛（額櫛）に秘められた本来の意味も埋もれてしまっているのではないか、と思わざるをえない。

（三） 神婚儀礼から小櫛へ

日本では縄文時代から古墳時代後期（六世紀代）ごろまで堅櫛が用いられた^{四五}。一方、系譜的に斎内親王の小櫛（額櫛）に連なる横櫛は古墳時代の四世紀末～五世紀初頭頃には出現していた^{四六}。弥生時代の堅櫛には一定の流通文化圏を思わせる特色もあったが、その九割以上が西日本で出土する古墳時代の堅櫛には、そういう個性や地域色はなくどこでも同じ櫛が出土する。それ程までに社会的変革の大きかったことを示している。櫛の歴史から大まかにみれば、堅櫛と横櫛とが並存しはじめ、やがて横櫛へと変遷していった五～六世紀はいわば次の大きな社会的変動を胚胎・準備する時代でもあったのだらう。

さて、本稿が注目したい事例は、頭部に堅櫛を挿着した男女の人骨が出土した宮崎県の上ノ原九号墓（五C後半～六C前半）である^{四七}。幅四・九cm×長さ一三cmの大きい堅櫛の方は年若い女性（長崎大学医学部鑑定）であった。この女性を一番奥にして三体の人骨が埋葬され、中央の年長男性（同鑑定）は頭部に九個の小型堅櫛を挿着し、顔面は朱に染まっていた。その頭部からずり落ちた状態で棕櫚毛状の繊維質の塊に五個の小型堅櫛が付着し、しかも埋葬時に前頭部に強い衝撃を加えられていたという。報告者の岩永哲夫氏は、「櫛の挿着は特異な霊力を保持する者の象徴」であると考え、繊維塊から付け髪や鬢の装着を想定すると共に、神がかりする年若い巫女に対してこの年長男性を女装した双性の観^{四八}として審神者的役割をもつて跳梁し畏怖された人物とした上で、当該九号墓を巫者一族の墓室と推定した。栃木県大平町の七廻り鏡塚古墳でも堅櫛を着けた熟年男性に毛髪束の副葬があったほか、熊本県の大鼠蔵山古墳でも櫛を挿着した熟年男子人骨の出土があり注目される。すでに、義江明子氏は従来からある「卑弥呼と男弟の聖俗分担」という解釈・通念への根本的な疑義を提起してきたところである^{四九}。後述するように、七世紀以前の神祭りの場には男女の神職者がペアで奉祀したからである。いずれにしても、櫛が女性だけのものではないことが発掘資料から明確になったことの意義は大きいと思う。

前掲榎村氏の論考で言及のあったわが国の「節刀」にしても、当然、中国の「節（これは『易経』にいう「節」ではない）」^{五〇}をそのまま移入したわけではなく、わが古墳時代の服属儀礼的な装飾太刀の伝統を踏まえ、それを形式的に生かして発展的に模倣・摂取したものであらうと考える^{五一}。それゆえ、節刀とは根本的に相違するが、斎内親王の小櫛の場合にしてもその儀礼は兎も角として、それが重要な発遣儀礼の

器物として採用されるについては、少なくとも古墳時代の神職者たちが挿着していたであろう櫛の伝統的な文化が背景にあったからだと考えるのが妥当であろう。上ノ原九号墓をはじめとする古墳出土の特定人骨に挿着された櫛の存在はそのことを強く意識させてくれた。

卑見では、上ノ原九号墓出土の「櫛を装着した男女二体」の人物像には、『風土記』に登場する「土蜘蛛（国栖・佐伯とも）」のような社会的存在が相応しいのではないかと推測する。上ノ原（全十基）では五号墓を除く全ての墳墓に人骨が在ったが、櫛の出土は九号墓だけだった。熊本や大分でも、櫛は「特定の墳墓に限られる傾向にある」（岩永哲夫氏）という。従って、その死装束からしても他の被葬者とは異なる社会的存在と類推される。そうであれば、上ノ原九号墓の女性人骨を以て単に「神がる巫女」とのみ決めつけずに、男女一組の神職者として自らの支配領域の神事に関わった可能性をも考慮しなければならないであろう。

九州地方の土蜘蛛には女首長が何人もいたが、『風土記』には櫛が豎櫛から横櫛へと変遷したように、時代と共に変遷・変容した後の地域社会の習俗をも記しているであろう。義江明子氏に拠れば、『風土記』の玉依ヒコ・玉依ヒメは、既に「七世紀には確認できる男女祭祀者の分化した姿を投影したもの」^{〔五二〕}で、努賀毗咩のように「政治的統率・指揮をも行ったヒメとは異なり、女性が政治支配の場から排除される一方で神秘的な巫女像が作り上げられていく道筋を」（同上）も示しているという。そして賀茂社の御阿礼祭に見られる阿礼乎止己・阿礼乎止女より始原的本質を「豪族祭祀成立の背景にある共同体的祭祀にまで遡って」（同上）考察したのが、義江氏が注力された常陸国鹿島の神祭りと童子女（童子）松原の説話の分析であったと思う。

時期や地域によっても多少の相違はあろうけれども、鹿島に代表される各地の季節毎の神祭りでは「男も女も集会ひて、日を積み夜を累ねて、飲み楽しみ歌ひ舞ふ」^{〔五三〕}という事が歌垣（耀歌会）の基本であったようである。雲南省ペー族の歌垣を取材し膨大な歌詞を記録された工藤隆氏は、長時間にわたり「配偶者や恋人を得ようとする実用的な歌垣には、酒を飲んで酔っぱらってその場を盛り上げるといった性質は、いつさいない」^{〔五四〕}と報告している。『風土記』にみる鹿島の歌垣と現代のペー族のそれとの間に異なる面があるのは当然であろう。それはともかく、「童子女松原」の「童子女」を「うなぬ」と訓むべきことを証明された秋本吉郎氏は、同時に彼らが「恋を語らふ青年男女」^{〔五五〕}であることを認め、狩谷掖斎の説を引用している。すなわち、「略」按、宇奈井、蓋項居之義、髪至項之謂也、然則宇奈井、比和良波稍長、而猶未結髪也、蓋謂十三四歳者（按ズルニ、宇奈井ハ、蓋シ項居（うなじゐ）ノ義ニシテ、髪項ニ至ルノ謂ナリ。然レバ則チ宇奈井ハ、和良波（わらは）ニ比シテ稍ニ長ク、而ルニ猶ホ未ダ髪ヲ結ハザルゴトシナリ。蓋シ十三、四歳ノ者ナラム）^{〔五六〕}と明快である。この年齢は前節で「発遣儀礼の小櫛（額櫛）」が、本来は髪上げ可能な成人皇女（適齡十三歳前後）を前提にしたものである」と指摘したのに全く符合している。『風土記』の童子女（童子）が「垂髪」であったのに対し、発遣儀礼での斎内親王が「髪上げ」を前提にしたのは「小櫛」を挿着させる必要に出たもの

に他ならない。

とまれ、この歌垣＝嬬会（嬬歌会）に関して土橋寛氏は「要するに農作物や村人の繁栄のための呪術的な行事で（略）、原初的な段階では、実際に男女の性交が個人的・集团的に行われた」^{〔五七〕}としている。義江氏は、「童子女松原」の説話に「加味乃乎止古・加味乃乎止売」として登場する男女が正に「童子（童子垂髪）」で、神祭りの場で神婚を演じた「通婚（開始）年齢にある垂髪の巫祝」^{〔五八〕}に外ならず、その「男女の性結合（の模擬・象徴）による豊饒の祈り」（同上）こそが共同体祭祀（民間基層信仰）における中心的神事だったという。

『風土記』から類推される、旧い共同体レベルでの農耕予祝神事が在地首長一族の政治支配上の独占的装置へと変容すると、（未婚とは限らない）複数男女の性的結合による豊饒の祈りは首長層の一对の男女により集約的・儀礼的に担われるようになる^{〔五九〕}。そして「男性神職の力が強まる一方で起こる女性祭祀者の特殊化や神秘化は、女性の社会的地位の低下と裏腹の関係にあった」^{〔六〇〕}のである。賀茂の斎院や伊勢の斎王はその最も聖別進化した存在だった。賀茂の御阿礼祭が斎院（斎王）ではなく「賀茂氏の祀官や斎祝子によって行われた」^{〔六一〕}ように、伊勢神宮の祭祀も在地豪族の男女神職者が律令祭祀仕様に变化してその中枢を担い、斎内親王はただ「その上に政治的に付加された象徴的な存在でしかなかった」^{〔六二〕}のである。

令外の官とはいえ、律令制下において伊勢神宮に発遣された斎内親王は、かつて神事場で神婚を演じた垂髪乙女たる職掌も既に剥奪されて久しい神聖な存在としてその場に臨み、一方、天皇の立場からすることは、自らの血統が遙か昔にヒコとして演じた儀礼に替えて、その遠い歴史の原点に小櫛を挿着することによって回帰する、もはや極端に形骸化された象徴的秘儀だったのではないだろうか。それ故、抛って来るその原義さえ忘れ去られた後に、髪上げも出来ぬ幼童斎王の場合にも玉鬘などを着ければ可能な儀礼となり得たのである、と憶測するにとどめたい。「小櫛」は最初の勢多頓宮で早くも櫛宮に納められてその役割を終え、伊勢神宮で使用されることはなかったし、帰京後に返納された記録もない。それは大極殿での儀礼において完結する、いわば律令制下における伊勢神宮祭祀とは初めから無関係の器物であった。その意味では「小櫛を挿す発遣儀礼」は、「個体発生が系統発生を繰り返す」（ヘッケル）のにも似てと言えば語弊もあるが、律令天皇制以前の神祭りにおける古い習俗（神婚儀礼）を新たな神祇制度の中で歴史的に止揚して成った複合的な儀式であったと考えておきたい。小櫛はその古い儀礼習俗の形骸化した象徴に過ぎなかった、と考える。

（四）「むらに別れ」の櫛と呪力

周知のように、折口信夫氏が「別れの御櫛の古儀の生きたる註釈とも申す事を得べく候」^{〔六三〕}として紹介した話は、沖縄「先島辺り」（同上）のつぎのような習俗である。即ち、花嫁が婚家の門をくぐる時に、「むらに」（乳母に相当）は「おのが櫛をとりて、新嫁の髪に挿すや、婚女

は後をも見ずして、婚家に馳せ入るを例と致し候。」(同上)といい、またこのとき一度でも振返ることがあれば、必ず不吉のことが起きると信じられていた、というものであった。すでに前掲榎村氏の論考でも「櫛を挿す当事者が、父ではなく乳母であることに決定的な違いがあるため、単純比較は難しい」^(天四) 由の指摘もあった。そこには、①「櫛」に「縁切り」の呪力を信じ、また、②「振り返ってはならぬ」とのタブーを日本だけの民俗信仰という考えが前提にある。とりわけ、③沖縄地方が長く中国文化圏内にあったことがほとんど考慮されていないように思われる点で、慎重にならざるを得ない。僭越ながら、予てより抱く二、三の疑問を最後に述べて本稿を閉じたいと思う。

(a) 「むらに別れ」の櫛は、「挿釵子」の文化変容した後の姿ではないのか。

まず最後の③について卑見を述べてみたい。『東京夢華録』や『夢梁録(南宋臨安繁昌記)』^(天五)には「嫁迎え」の話がある。婿方の人間(親族・母親)が嫁方の家に行き、気に入ればその嫁の冠に簪を挿してやる。これを「挿釵子(チャーチャイズ)」と言ったそうである。先島諸島の「むらに別れ」の櫛は、挿す側の人間こそ逆転してもいるが、寧ろこの挿釵子と親縁関係にある習俗に思えてならない。「うちのこの娘は先方様に気に入られたんだよ」と、婚家の手前(つまり公衆の面前)で最後に「むらに」が挿してやったのがそもその起りではないのかと。さもなくば単に「むらに」ならではの「かたみの櫛」に過ぎなからうと思う。政治文化の中心地から遠く離れた周辺地域に、中央で失われた古い文化の痕跡が遺るという事も当然あるだろうが、沖縄は中国や東南アジア文化圏に最も隣接した地域であれば、ここは日常的に接し得た異文化の受容や変容をも前提に構想して然るべきであろう。「文化」もまた一国だけで完結する問題では済まないからである。

永尾龍造氏の『支那民俗誌』^(天六)に拠れば、中国では「毛髪に祖先の霊を呼び得る一種の魔力がある」(同上)とされ、身体に宿る「人神」が夜中「頭髪或は指の爪に行つて休む」(同上)と信じた。そして吾子を鬼魔等から護るため考案された髪型習俗の中に「鬼見愁」や「木梳背(ムウシュウペイ)」等があった。木梳背は文字どおり「形が木梳に似ている」(同上)ので付いた名前だが、期せずして、爪形をしたわが古墳時代の堅櫛と同じ形状に頭髪を剃り残す習俗である。数年前、沖縄本島と久米島とのほぼ中間に位置する渡名喜島の様子を映したテレビの映像にも、これと同形に髪を剃り残した幼児の姿が映っていた。古い中国文化の影響がかくも深く浸透している現状から推し量ると、「むらに別れ」の櫛にはすでに変容を遂げてしまった後の「挿釵子」を想起せしめるものがある。いまや沖縄地方の習俗の中に中国道教ないし道教的な要素が多々見られることは窪徳忠氏の著名な研究^(天七)によっても窺うことができるようになっている。

なお、紀元前六〜五世紀以来、中国の東北境外(沿海州方面)に住むいわゆる塞外民族の一つとして知られた肅慎氏にも「挿釵子」と類似する習俗を伝えている。唐の房玄齡等の奉勅撰で貞観二十二(六四八)年に成った『晋書』(四夷列伝)によれば、「俗皆編髪、以布作檐、徑尺餘、以蔽前後。將嫁娶、男以毛羽挿女頭、女和則持歸、然後致禮娉之(俗ミナ髪ヲ編ムニ、布ヲ以テ檐ヲ作シ、徑一尺余ニシテ、以テ前後ヲ

蔽へり。将ニ嫁娶セントスレバ、男ハ毛羽ヲ以テ女ノ頭ニ挿シ、女コタフレバ則チ持チ帰リテ、然ル後ニ礼ヲ致シテ之ニ娉フナリ」(天)という。肅慎を「把婁」、「勿吉」、「靺鞨」などの名称で呼んだ時代もあるが、詳しい事情は不明である(天)。ただ、この「嫁娶挿毛羽」の記事が『太平御覧』四夷部「肅慎」に引く「肅慎国記」(モ)の記事と一致するため、池内宏氏は「主なる所依は肅慎国記であるといってもよい」(モ)とされた。ともあれ、場所が「東北境外」ゆえ安易な類推は慎むべきであるが、もし男女がそういう嫁娶告白の機会を持てるとすれば、日本を含む照葉樹林帯の多くの民族において著名な「歌垣」の場(モ)がいかにもふさわしく思える。これもそういう男女の出逢いの場における意思表示の「毛羽」であつたとすればもつとも理解はしやすいが、何一つ確証がない。

ただ私はここに、わが国の古墳時代における歌垣＝耀歌会において、その意思表示に自らの「櫛ないし装飾品」を相手の髪に挿したり渡したりする(男から女へか、男女相互にかは別にして)習俗もあつたのではないか、との憶測をもつ。櫛ではないが、『常陸国風土記』にも「俗諺云、筑波峯之會、不得娉財、兒女不為矣(俗の諺に云はく、筑波峯の会に娉の財を得ざれば、兒女とせず、と)」(モ)ともいう。実際、村松一弥氏や藤井知昭氏が調査・紹介された現代のミヤオ族やトン族では、歌垣で互いに氣を通じ合った男女が契の品として「腕輪」や「帯」、「銀のカンザシ」などを渡す事例があるという(モ)。現行『風土記』にいうところの「童子」(うなゐ)では末額などの補助具がなければ櫛の挿着は難しいが、上ノ原九号墓のような出土例などから当時の神職者―各地の季節ごとの神祭りでの中心的所作を担う人物ら―の盛装を想像したとき、時代や地方によつては耀歌会への参加者が必ずしも「童形垂髪」ばかりではなかったかも知れないからである。

(b)「振り返つてはならぬ」というタブーは果たして日本固有の信仰か。

これも本来はもつとグローバルな視点から考えるべき問題ではないかと思つてゐる。詳しく調べたわけではないが、気づいた範囲で二、三の事例をあげてみよう。『金枝篇』には、パンジャブ地方で行われた牛疫退治において「替罪羊」役の男が守るべき禁忌(モ)として、またニュージーランドのマオリ族でも未知の土地に入る際に行う「ウルウラフェヌア」という儀式においてもやはり、彼は振り返つてはならぬ、振り返れば不吉な事が起きる(モ)とされたという。

同様のタブーは中国にもあつた。張華の『博物志』(卷十)に「婦人妊娠未滿三月、著墮衣冠、平旦左邊井三匝、映詳影而去、勿反顧、勿令人知見、必生男(婦人ノ妊娠シテ未ダ三(カ)月ニ滿タザルトキ、墮ノ衣冠ヲ著ケ、平旦ニ井ヲ左邊スルコト三匝ニシテ、詳影ヲ映シテ去ルニ、反顧スルコトナク、モシ人ノ知見スルコトナケレバ、必ズヤ男(兒)ヲ生マン)。」(モ)とある。夫の衣冠をまとい、夜明けに井戸の周囲を左回りに三めぐりして、水面によき影を映して去れば男兒を得ることができるといふ。しかし、その井を去るときに「振り返つてしまえば」、男兒を得たいとの「願いは叶わない」というのである。更に、道教の「静室」において嚴守すべき作法を吉川忠夫氏が解説しておられる(モ)。詳

細は省くが、「焼香の時」にも、「静戸を出ずるの時」にも「反顧すること勿れ（後を振り返ってはならぬ）」（同上）といい、「若し反顧すれば則ち眞氣に忤（さから）い邪應を致（まね）かん」（同上）とされていた、という。入静次第にはこの他にも、穢氣を洗うために「口を漱ぎ」、また「手を洗う」といった清めの作法、あるいは「頭に櫛をいれ髪を整える」（同上）といい、恰も齋宮における戸座や火炬を思わせる「侍香金童・玉女」の存在などが述べられているのを讀むにつけ、神を祀る道教的作法に散見されるいくつかの要素が、齋王制度に対してもあるいは間接的に影響を及ぼした可能性を今後は考慮すべきなのかも知れないと考えるに至った（七九）。

わずかな事例しか掲げられなかったが、「反顧する勿れ（振り返ってはならない）」というのは、何も齋内親王や先島諸島の花嫁に限定された問題でないことだけは、以上の事例からも明白である。構成要素の一つがいかに類似していようと、それをもって齋王発遣の儀式にだけ収斂させるかにみえる折口氏の解釈には、なお素直には賛成致しかねるところがある。

（c）「櫛」に「縁切り（絶縁）」の呪力はあったのだろうか。

『沖縄文化叢説』（昭和廿二）に寄せた「女の香炉」で折口氏は、「櫛を挿したり、手渡したりすることが、親子の縁切りの形式になることは、古くからの民俗であつて」とか、「櫛をさすことが、神物に串をさし立てて神物なることを示すのと、同意になることは、（略）世間からはほぼ認容せられてゐる」と説いた（八〇）。櫛になにがしかの呪力のあつたことは否定しないが、果たしてそれが「縁切り」だったのだろうか。念のために有名な伊奘諾尊の黄泉訪問神話の後段部分で確認してみよう。

伊奘諾尊の逃げ帰るに先ず追つて来たのは伊奘冉尊ではなく泉津醜女八人であつた。「故、伊奘諾尊（略）黒鬘を投げたまふ。此即ち蒲陶に化成る。醜女、見て採りて噉む。噉み了りて則ち更追ふ。伊奘諾尊、又湯津爪櫛を投げたまふ。此即ち筍に化成る。醜女、亦以て抜き噉む。噉み了りて則ち更追ふ。後に則ち伊奘冉尊、亦自ら来追でます。」（八一）とある。伊奘諾尊が伊奘冉尊と絶縁するのは実にこの後の事で、泉津平坂まで逃げ果せた伊奘諾尊が「千人所引の磐石」で坂路を塞ぎ「絶妻之誓建（コトドワタシ）」（八二）の呪言を以て伊奘冉尊との縁を切つたのである。この櫛の一体どこに絶縁（縁切り）の呪力があるというのか。

この「コトドワタシ」の意味に関する鈴木重胤氏の説を踏襲した上で、各地の横穴式古墳の発掘調査成果等に基づいて考察された白石太郎氏（八三）は、「後期古墳にまつわる葬送儀礼」（同上）として時系列的に次のように復元された。①「まず死者を石室内に埋葬」↓②「死者に黄泉国の食物を供する儀礼」（「ヨモツヘグイ」は、この儀礼に用いた食物を現世の人間が口にすることに對する禁忌をさす）↓③「参列者の呪的逃走、すなわち一定の身につけた品物を遺棄しながら石室から脱出」↓④「石室の封鎖に際し、死者に對し現世との別処を宣し、死霊を黄泉国（石室）に封じ込める呪的儀礼（コトドワタシ）を行う」↓⑤「ミソギ（沐浴）をもつて葬送儀礼を終了する」（同上・三六六頁）というも

のである。実際の横穴式石室および羨道の築造工程に即して先の黄泉訪問神話は形成されたであろうことが説得力をもって解明されている。このように科学的根拠をもつ研究を前にすれば、伊弉諾尊が投げた櫛はただ筥に化けたに過ぎぬ、としか言いようがない。彦火火出見尊の件でも「老翁即取囊中玄櫛投地、則化成五百箇竹林（老翁、即ち囊の中の玄櫛を取りて地に投げしかば、五百箇竹林に化成りぬ）」^{八四}とやはり竹林に化けている。いずれも古墳時代の堅櫛が竹製だったからである。ともかく、醜女らの足を止め時間稼ぎには役立ったが、その櫛に絶縁の呪力を言うなら、黒髪にも同様に言わねばならぬ。折口氏は「餓鬼阿彌蘇生譚」の段階では、「桃の実や櫛・縵の化成した筥、野葡萄の類が悪霊を逐うた神話などは或種の植物に呪力があると見る以外に云々」^{八五}とも言っていた。そこではまだ櫛の呪力ではなく植物の呪力を問題にしている。「桃」は古来中国でも「逃」に通ずるゆえに解るが、先の神話では化成けた葡萄でも筥でも醜女らは採って食べればすぐまた追い駆けてきたのであり、それ自体に悪霊を逐い祓うほどの呪力まであったとは認められないのである。

俗に「投げ櫛」などという言い方は、恐らく右引「伊弉諾尊の黄泉訪問神話」からの思いつきだろうが、かつて全国一九五ヶ所の遺跡から出土した膨大な数の堅櫛を出土状況を含めて分析した亀田博氏によると、投げ櫛の呪術を「伺わせる横穴式石室での出土状況はない」^{八六}と断言している。管見では『吾妻鏡』建長二（一二五〇）年六月廿四日戊午条に至って初めて「投げ櫛」に遭遇した。父・娘密通の話に「しかるに櫛を投げしむるの時、取らば、骨肉も皆他人に變ずるの由これを稱す」^{八七}とあり、他人に擬えるべく櫛を投げたというが、果たしてこれを絶縁の謂に解すべきかどうかである。「他人に變ずる」というのは、伊弉諾の投げた櫛が筥に化けたのと同じ理屈で、愚行を企てた父は「その砌に」帰宅した壻に見つかり恥じて自害した。しかし、見つからなければ父・娘の親子関係もやはり続いたはずではないか（あるいは娘の方が自害した可能性もあるが）。よしんば「縁切り」の謂を認めたとしても、十三世紀半ばのそのような俗信がいかなる経緯のもとに関東に広まっていたのかを証明する術はもとより、これが斎王制度の以前からあった櫛の呪力という証拠は然らでだにない。

甲骨文字や金石文などの解説により前人未到の業績を遺された白川静氏も「簪の呪詛」を述べたついでに伊弉諾の櫛に触れ、「いわゆる『投げ櫛』の俗で、絶縁を意味した。『江家次第』の斎王群行の条に、別れの櫛筥を賜うのも、投げ櫛の俗を背景にもつ儀礼とみられる。」^{八八}とされた。折口説を踏まえた記述だが、「別れの櫛筥」なる表記は『江家次第』ばかりか『北山抄』にも『西宮記』にも登場はしない。失礼ながら、櫛に絶縁の呪力を説く大家はことごとく、十一世紀以降に発生した「別れの」御櫛なる俗称を前提にして八世紀に書かれた神話を遡って解釈したに過ぎないように思う。折口氏の「古くからの民俗」というのも、実は案外新しい時代の事ではないのだろうか。大来皇女から数えて六百年以上も続いた斎王制度で、平安時代のとりわけ十世紀以降には発遣の儀礼も形骸化し、別れの御櫛なる俗称さえ生まれて、やがて定着した。この斎王制度の長い、繰り返しの歴史を背景にして、櫛に「別れ」や延いては「縁切り」といった観念的俗信が徐々に形成されて来

たり、遂には恰も櫛に最初からそういう呪力があつたかのような擬似的信仰も生まれるに至つたのではないかとの憶測をもつのである。

因みに、『古事類苑』や『廣文庫』に「別れ櫛」の項目はあつても「投げ櫛」の項目はない。『日本民俗事典』にも「投げ櫛」の項目はなく、櫛を魔除け^(八五)として使う例は多いとするも、「絶縁」には折口氏のいう「むらに別れ」を付言するに過ぎず、いわば下駄を預けた格好で閉じている。櫛が「縁切り」では素戔鳴尊の湯津爪櫛の意味を説明できないからである。その点、江戸の儒学者新井白石などは「そのクシといひしは義詳ならず」^(九〇)と潔い。繰り返すが、伊奘諾尊が伊奘冉尊と縁切りをしたのは絶妻之誓建の呪言によつてであり、それを可能にした物は千人所引の磐石であつて、黒臺でも櫛でも決してなかった。折口学に精通した識者からは筋違いとの批判も受けるだろうが^(九二)、櫛をめぐる言説を検討した結果は、少なくとも櫛に「縁切り（絶縁）」というような呪力が斎王制度以前からあつたと認めるには至らなかった。

(五) むすびにかえて

本稿では、普遍性をもたない「別れの御櫛」なる呼称を用いなかった。「別れの」という観念論的形容句は、十世紀末から十一世紀初頭ごろから顕著に現れる仏教的末世観や現実社会への澆末的不安感を背景にして生まれたもので、当初からあつた名称ではないからである。

斎内親王が伊勢に向つて都を出立する日の夜、大極殿で行われた葬遣儀礼に不可欠の器物であつた黄楊の小櫛（額櫛）は、本来は髪上げ可能な成人皇女を前提として成立したものであつた。第二節で掲げた平安時代の有職書や日記類（A・D）には、多くは本文への割注の形で幼童斎王の場合の異例を記して向後に備えたものである。それは大抵、五〜七歳前後のまだ肩にも届かぬ王の髪にどうすればその小櫛を挿着できるかを示す具体的な対処法やまたその間のエピソードを記したに過ぎないと言える。従つて、そういう異例に属する内容の割注記事のみに拠つて「小櫛」の意味を考えるのは本末転倒であろう。その上で、「節刀」がもし、古墳時代における大王と諸豪族間における服属儀礼にかかわる装飾太刀の伝統を生かす形で中国の「節」を變形・摂取したものだとなれば、斎内親王の小櫛の場合もその淵源はやはり古墳時代の櫛挿着の伝統に求めるべきではないかと考えたのである。

その点で、宮崎県の上ノ原九号墓（五C後半〜六C前半）で大小の堅櫛を挿着した男女人骨をはじめ、栃木県大平町の七廻り鏡塚古墳や熊本県の大鼠蔵山古墳などからも堅櫛を着けた熟年男性人骨が出土している実例は、この問題を考えるのに重要な素材であつた。櫛を挿着した被葬者がその地域における特別な社会的存在であれば、その当時の神祭りの場でも重要な所作や役割を演じたと思定されるからである。その際、『風土記』の「童子女松原」をはじめ古代祭祀における社会的存在としての女性史を該博な知見をもつて開拓された義江明子氏の研究成果には特に恩恵を受けた。賀茂の斎院や伊勢の斎宮として完全に聖別される以前の、原始共同体における季節ごとの神祭りにおいて男女神職者が演じた予祝儀礼としての神婚所作や宗教的意義は、大王―天皇家においては新たな国家的規制たる律令制度にそぐうべく整合性を以つた

形で歴史的に止揚されたと考える。発遣儀礼における齋内親王への小櫛挿着をそのような背景をもつ秘儀と捉えてみたのである。

小櫛は、明け方に到着する最初の頓宮勢多に至ればもはや実質的に不要のものとして櫛筥に納められた。それ以後、齋王制度の全期間を通じて、その小櫛が伊勢神宮祭祀の場で使用された形跡を伺うことは出来ない。すなわち、小櫛の役割ないし宗教的意義は、発遣儀礼を終えて大極殿を後にすればもはや完了していたと考えてよいのである。昭和四十五年から発掘調査のつくく国史跡齋宮跡（面積一三七ヘクタール）でも少数だが櫛の出土例はある。しかし残念ながら、現在までのところ「小櫛」に比定しうる遺物には恵まれていない。洪積台地上に立地するため、有機質のものは遺りにくいという土地条件も影響しているよう。

最後に、かつて折口信夫氏が「別れの御櫛の古儀の生きたる註釈」だとして紹介し、今もなお必ず引き合いに出される、いわゆる「むらに別れ」の櫛の一件について、僭越ながら、これまで抱き続けてきた卑見を大きく三点（挿釵子・勿反顧・縁切り）に分けて述べてみた。最初の二点はより広範な視点からの考察も必要であることを近隣の事例を以って述べた。最後の「櫛」＝「縁切り」という呪力の問題は、白石太郎氏や亀田隆氏といった第一線で活躍される考古学者の研究成果をも援用しつつ、伊弉諾尊の黄泉訪問神話を再検討したが、櫛にそのような呪力が齋王制度以前からあったとの証拠は見出せなかった。ただ、その作業を通じて、道教の「静室」における所作などにみられる類似点から、齋王制度への間接的な影響の検証なども容易ではないが今後へのこされた課題の一つではないか、と考えるに至っている。

【註】

- (一) …芝野真理子「別れの御櫛考」『史窓』第四八号（学園創立八十周年、史学科創設四十周年記念特集号）、京都女子大学史学会、一九九一年所収。榎村寛之著『律令天皇制祭祀の研究』（塙書房、一九九六年）、第二章第二節「齋王発遣儀礼の本質について」（一八二～二二五頁）。
- (二) …芝野氏前掲論文、二四三頁下段。
- (三) …榎村氏前掲論文、二〇一～二〇六頁。軍防令に「凡大將出征。皆授節刀。辞訖。不得反宿於家（凡ソ大將征ニ出ルトキハ。皆節刀ヲ授ケヨ。辞ケ訖ハリナバ。反リテ家ニ宿スルコトヲ得ザレ）」（新訂増補国史大系『令義解』、吉川弘文館、一九七二年、巻五、一八七頁）とあり、義解は「（略）凡大將軍授節而出。不得更復反入於家。其至飯時亦同（凡ソ大將軍節ヲ授カリテ出レバ。更ニ復タ反ヘリテ家ニ入るコトヲ得ザレ。其レ飯ル時ニ至ルモ亦同ジ）」（同上）という。節刀は凱旋時に直ちに返納すべきものであった。齋宮寮は令外の官ゆえに齋内親王の小櫛には固よりこのような規定はない。
- (四) …『源氏物語』の成立事情を勘案すれば、おおよそ十一世紀初頭頃にはこの名称が生まれていた可能性は高い。
- (五) …前掲榎村氏論文、一八八頁（この語の初見記事は『大鏡』長和三年九月条にあると指摘し、総じて「文学的修辭ともいふべき用語」に過ぎないとする）。『源氏物語』の「賢木の巻」には「帝、御心動きて、別れの御櫛たてまつり給ふ程、いとあはれにて、しほたれさせ給ひぬ。」（山岸徳平校注『源氏物語（一）』）

(岩波書店日本古典文学大系一四、一九六九年第十三刷)、賢木、三七四頁)とある。他に、松村博司校注『大鏡』(岩波書店日本古典文学大系二一、一九六三年第二刷)、卷一、三条院、五六頁には「斎宮くだらせたまふわかれの御くしきゝせたまひては、かたみにみかへらせたまはぬこと」とす。松村博司・山中裕校注『栄華物語』下(岩波書店日本古典文学大系七六、一九六五年)、卷第三十八、四九五頁では「大極殿にて別れの御櫛などの程、いとあはれなり。」とし、また三谷栄一・関根慶子校注『狭衣物語』(岩波書店日本古典文学大系七九、一九六五年)、卷二、一九六頁には「早う伊勢へ下りし折のこと、故院、泣くく、別れの櫛もえ挿しやらせ給はざりし程の事など・・・」などがある。更には、『仙源抄』(『群書類従』第十七輯所収)、五百八十四頁にも「わかれのくし」が登場する。

(六) 増訂故実叢書『江家次第』(吉川弘文館、一九二九年)、卷第十二、斎王群行、三五七頁下段、三五九頁上段。

(七) 大日本古記録『小右記』一(岩波書店、一九八七年第二刷)、一四五頁。

(八) 『原中最秘抄上』(『群書類従』第十七輯)、五三〇頁上段には「さしぐしのはこの心葉に」とみえ、「此匣は。立后。斎宮。斎院。若は五節の童に用之」云々と説明している。

(九) 大日本古記録『殿暦』三(岩波書店、一九六五年)、一〇五頁。

(一〇) 『日本古典文学大辞典』第六卷(岩波書店、一九八五年)、一六〇頁d、植木行宣氏執筆。『吉野古水院楽書』(『続群書類従』第十九輯上、管絃部所収)、四七四頁上段「仙遊霞ハ。斎宮ノ伊勢へ下り給トテ。勢多ノ橋ニテスル楽ナレバ。人ノ別レナドノ時ニハスベカラズ。・・・」と見え、斎宮は伊勢に下つてもまた還つて来る由を陳べている。

(一一) 稲賀啓二校注『落窪物語』(新潮社、日本古典集成第十四、一九七七年)、二八二～二八三頁に(略)いとよくしたる扇二十、貝すりたる櫛、蒔絵の箱に白粉入れて、ここの人の語らひけるして、『かたみに見たまへ』とて取らす。とある。『夫木和歌集』、三十二雑部十四、櫛「かたみのくし」物へまかる人にさしくしをつかはすとて・・・」君にやるかたみのくしはわかれちの神にまかせていのれと思ふ。能宣(山田清一・小鹿野茂次著『改訂版作者分類夫木和歌抄』本文篇、風間書房、一九八一年、七八九頁)。山岸徳平校注『源氏物語』(日本古典文学大系十四、岩波書店、一九六九年第十三刷)、「夕顔」(一七三～一七四頁)、「伊豫の介、神無月の朔日ごろに、くだる。『女房の下らんに』とて、たむけ、心殊にせさせ給ふ。(略)をかきさまなる櫛・扇多くして、幣など、いと、わざとがましくて、かの小桂もつかはす」など。

(一二) 『日本古典文学大辞典』第二卷(岩波書店、一九八四年)、秋山虔・阿部秋生・篠原昭二執筆「源氏物語」の項、四〇八頁【執筆時期】に拠る。

(一三) 釈迦の入滅年を基準とする「正像末三時の年限」は仏教經典により一定していなかったが、日本では「正法千年説をとると、一〇五二年に末法に入る」とになっていた(『国史大辞典』一三、吉川弘文館、一九九二年、一五七頁、大隅和雄氏執筆「まっぼうしそう・末法思想」に拠る)。圭室諦成著『日本仏

教史概説』(理想社出版部、一九四〇年)、第四章第三節、九二頁。なお、浄土教受容の基盤ともなった末法思想の形成・展開については、数江教一著『日本の末法思想』(弘文堂、一九六一年)や田村圓澄著『日本仏教史3 鎌倉時代』(法蔵館、一九八三年)などに詳述がある。

(一四) 井上光貞「往生要集成成立の背景」(同氏著『新訂日本浄土教成立史の研究』、山川出版社、一九八九年第五刷所収)、一四七～一五二頁に拠る。

(一五) 圭室氏前掲書『日本仏教史概説』、第五章第一節、一〇七～一〇九頁。平川彰氏は、「源信は浄土往生の因縁」に「自己の善根の因力・往生したいとの願求の因力・弥陀本願の縁力・衆聖助念の縁力」を重視した点に、後の法然や親鸞らの念仏との相違を指摘している(同氏著『インド中国日本仏教通史』、春秋社、二〇〇二年第十三刷、第五章、二四一～二四二頁)。

(一六) 数江教一氏は往生要集が源氏をはじめ栄華、枕草子、平家等の文芸などに深刻な思想的影響を与えたという(前掲書、七九頁。八九頁註(一二))。

(一七) 『三玉絵詞』(吉田孝一・宮田裕行校、東寺観智院本、古典文庫第二二五冊、一九六五年)、十二頁に「尺迦牟尼仏隠給ヒテ一千五百三十三年二成ニケリ。像法ノ世ニ有ム事、遺年不幾、・・・」という。また、増補史料大成『権記(一)』(臨川書店、一九七五年再版)、長保二年六月廿日乙丑条に「近日疫癘漸以延蔓、此灾年来連々無絶、(略)而今世路之人皆云、代及像末、灾是理運也、予思不然、(略)愚暗之人不知理運之灾、堯水湯旱難免、忽迷白日蒼天雖訴無答者也(近日疫癘ノ漸ク以テ延蔓シ、此ノ灾年来連々トシテ絶ユルコト無シ、(略)而シテ今、世路ノ人皆云フニ、代ハ像末ニ及ビテ、灾ハ是レ理運ナリト、予ハ思フニ然ラズト、(略)愚暗ノ人ハ理運ノ灾ヲ知ラズ、堯ノ水湯ノ旱モ免レ難ク、忽チ白日ニ迷ヒテ蒼天ニ訴フト雖モ答ヘル者無カリシ也)」という。田村圓澄氏はこの一節を引き、行成が世上の見解に反して「聖代の意識をもちつづけた」と指摘している(同氏前掲書、一九六頁)。

(一八) 速水侑著『日本仏教史 古代』(吉川弘文館、一九八六年)、六「中世的仏教の胎動」、二三七頁。

(一九) 寺崎修一「日本末法思想の史的考察」(東北帝大文学会編輯『文化』第一卷四号、岩波書店、一九三四年所収)、特に、四七六～四八一頁参照。

(二〇) 田村圓澄氏前掲書『日本仏教史3 鎌倉時代』、末法思想の形成(特に一九六～二〇二頁)を参考にし文言を借用した。

(二一) 芝野氏前掲論文、二三六～二三八頁(二三七頁に表があり至便である)。

(二二) 榎村寛之「斎王制と天皇制の關係について」(同氏著『律令天皇制祭祀の研究』、塙書房、一九九六年所収。初出は『古代文化』第四三巻第四号、一九九一年)、特に一五六～一六八頁、一七二～一七三頁。

(二三) 改訂増補故実叢書七卷『西宮記』第二(明治図書出版、一九九三年)、巻八(斎宮三度禊、入野宮、群行)、六九頁上段。底本は「前田家卷子本」で卷子本にない部分を史籍集覧本に基づいているという。

(二四) 改訂史籍集覧編外一『西宮記』(臨川書店、一九八四年)、巻十七、臨時五、四二九頁。なお、本書が底本に用いた「松岡本(宮内庁書陵部所蔵)が壬生本の系統を引くもので、流布本の問題点を抱えている」とされているものである(宮内庁書陵部本影印集成七『西宮記』(八木書店、二〇〇七年)に所収の、

北啓太「解説」一、壬生本の概要、四頁に拠る。従って、利用には慎重を期さねばならない。

(二五) 財 神道大系編纂会編『神道大系 朝儀祭祀編二 西宮記』、一九九三年、臨時五「齋宮」、六二五頁。

(二六) 尊經閣善本影印集成三『西宮記』三(財・前田育徳会尊經閣文庫、八木書店、一九九四年)、卷八、臨時乙、齋宮三度禊 群行・齋王入京事、一〇三(三六)頁。手許にある児玉幸多編『くずし字解説辞典 増補版』(近藤出版社、一九七八年増補版十四刷)に依り、文字を引き比べても「必」はあり得ない。

(二七) 所功著『平安朝儀式書成立史の研究』(国書刊行会、一九八七年再版)、第一篇第三章『西宮記』の成立(二〇一〜二二二頁)、特に一六九頁。

(二八) 大日本古記録『九曆』(岩波書店、一九五八年)、二〇頁。

(二九) 山中智恵子著『齋宮女御徽子女王 歌と生涯』(大和書房、一九八七年新装版)、一七三頁。ここは満年齢に変えた。

(三〇) 『西宮記』の当該部分を「必ず髪を上げず、童となす」と訓む向きもあるが、「童の髪型となす」ならばまだしも、それは日本語としても不適切である。否、ここはそういうことよりも、その直前に「王幼乳母抱之」と明記されているのである。もとより「幼女」たる齋王を「童となす」要など初めから存在しない。最も基本的かつ核心部分であるため、敢えて「異見」を述べた次第である。

(三一) 前掲増訂故実叢書『江家次第』、卷第十二、齋王群行、三五八頁上段。

(三二) 所氏前掲著書、第一篇第五章『江家次第』の成立(二九七〜三六八頁)、特に三三六〜三三八頁。

(三三) 所氏前掲書、第四章、二五八頁。

(三四) 山中智恵子著『続齋宮志』(砂子屋書房、一九九二年)は二人共卜定時に十二歳とする(五八頁、六八頁)。群行時は十四(満十三)歳である。

(三五) 増補史料大成九『中右記』一(臨川書店、一九七五年)、二六頁に「寛治三年九月十五日、天晴。有齋宮群行……」とある。

(三六) 増補史料大成八『水左記』(臨川書店、一九七五年再版)、一三三頁に「承暦四年九月十五日甲辰。晴。齋宮群行也、(略)先之有行幸事、此間余退出、仍不知後事、亥剋許令出大極殿給云々」とし、同じく『帥記』(同上)、七五〜七六頁でも「天皇并齋王御座如式」として太極殿での発遣儀礼の詳細は記さず。

(三七) 山中氏前掲書『続齋宮志』、一〇九頁によると承暦二年の卜定時に三歳だというから四年群行時は五歳(満四歳)だったことになる。

(三八) 宮内庁書陵部編『九条家本 法性寺殿御記』(八木書店、一九八九年)に付属の「解題 釋文」十五頁に拠る。

(三九) 前掲『九条家本 法性寺殿御記』、付属の「解題 釋文」一頁及び七頁に拠る。

(四〇) 高橋貞一著『訓読玉葉』第七卷(高科書店、一九九〇年)、三八頁。

(四一) 九条兼実は文治元年十一月十五日条に齋宮の卜定ありとし、生年六歳と記している(高橋貞一氏前掲書『訓読玉葉』第六卷、一八頁下段)。であれば、ここは八歳(満七歳)でなければおかしいが、兼実もうっかり三年足して書いたのであろう。

(四二) …衣服令では衛府の衛士ら下級武官が公式の場で用いたようで、鉢巻状の朱い絹布をいう。「まつこう」、また「もこう」と訓む。

(四三) …後漢周澤の故事を引くまでもなくこの「泥」は「デイ」と訓む。早川光三郎氏も「これを『どろの如し』とよく訓み誤る」と注意された(同氏著『蒙求』上(明治書院、二〇〇二年十七版)、五一四頁。兼実は他条にもこの表現を繰り返すが、管見では『日本文徳天皇實録』(吉川弘文館、一九八四年)巻十、天安二年六月己酉條の山田連春城卒伝(一一八頁)のほか、『明月記』第一(国書刊行会、一九一一年)、百十三頁上段、正治元年九月十二日条では定家も「抑件女房雖有如泥尾籠(抑も件の女房にはデイの如きをこ有るといへども)」と記して、女房のなかに「箸にも棒にも掛からぬ戯けもの」のいる事を嘆いている。また、洞院公賢の憤懣やる方ない様子は、貞和四年十月廿七日の儲皇(東宮)崇光院の元服の儀に際して「御元服儀畢、還御本殿、行啓供奉人以下毎事泥々、(中略)就中御查不相儲云々、懈怠之至、不可説也(御元服ノ儀ヲハリテ、本殿ニ還御ス、行啓ノ供奉人以下事毎ニ泥泥ナリ、(中略)就中、御查ヲ相儲ケズト云々、懈怠ノ至リ、説クベカラザル也)」とある筆致によっても知られる(岩橋小弥太・斉木一馬校訂『園太暦』巻二、続群書類従完成会、一九七一年、四七三〜四七四頁)。「如泥」ではもはや言い足りぬ程の懈怠極まりない醜態を前掲『玉葉』(文治三年九月十八日条)と同様に「泥々」と表現した。いずれも「デイデイ」と訓み、遅くとも十二世紀後半以降十四世紀半ば頃までには新たな日本語としての進化の跡をみる。なお、唐の郊廟祭祀における祭官らの怠慢な様子やその引き締め措置については金子修一氏がすでに指摘している(同氏「唐代皇帝祭祀の親祭と有司撰事」『中国古代皇帝祭祀の研究』、岩波書店、二〇〇六年所収、第三章、一二二〜一二六頁参照)。

(四四) …それゆえ、鹿島神社の物忌にあつては「一生月の障りを見ることなし」などと虚偽を重ねるしかなかった。その虚構性については既に義江明子著『日本古代の祭祀と女性』(吉川弘文館、一九九六年)、「神社の『聖処女』(八〜二五頁)」に詳しい。なお、西山良平氏は「王朝都市と『女性の穢』」において、「九世紀中頃から血の穢れが顕在化し、十世紀初期に月事の忌避は伊勢神宮の斎宮から賀茂神社の斎院に拡大した」とする(女性史総合研究会編『日本女性史』第一巻原始・古代、東京大学出版会、一九九一年二刷所収)、特に一九四〜二〇四頁参照。文献学的には西山氏の見解は正しく、異論はない。ただ、伊勢神宮や斎宮においては、仮に忌詞の成立する以前であっても(まだ「穢れ」の意識はなくても)、現実問題として女性たちの特に斎内親王の生理現象を無視して神事等が強行ないし進行したとは考えにくい。そういう点での影響は避けられなかったはずである、というのが本稿の立場である。

(四五) …斎宮歴史博物館春季企画展図録『日本の櫛―別れの御櫛によせて―』(一九九五年四月)。拙稿「日本の櫛物語」(『龍』、岡山龍短歌会、平成廿年四月〜同廿一年三月)、同「櫛物語・別れの御櫛」(廿一年四月〜廿二年三月)に拠った。

(四六) …管見では、大阪八尾市の小阪合遺跡出土の挽齒漆塗横櫛(四C末〜五C初・幅五・一×長さ八・九cm)が最古で、愛知県安城市の彼岸田遺跡にも類似の横櫛がある。両櫛は大韓民国光州にある新昌洞遺跡出土の刻齒横櫛(紀元前二〜一世紀・六・四×一・九cm)と比較すると、棟部と齒部との間に段差をもつその断面形状が似る。群馬県高崎市の新保田中村前遺跡の横櫛には毛引きや挽実がなく前二例と同要素を具える反面、棟部と齒部との境界に段差がなく

三重県津市の六大A遺跡の横櫛と同じ新しい要素を持つ。六大A遺跡出土の挽齒横櫛（五C後半・五・〇×九・〇cm）は黄楊櫛の初例で、その断面形状は滋賀県能登川町の斗西遺跡出土の挽齒横櫛（古墳・五・四×七・七cm）と類似する。齒の挽き出し方も肩部の張り具合も近似するその櫛は共存遺物の比率から推して五世紀末〜六世紀代の可能性がある（植田文雄氏）。形態上これらに繋がるのが奈良県桜井市の上之宮遺跡から出土した挽齒横櫛（古墳後期・四・八×六・六cm）である。時代は下るが、これと同じ長さの横櫛には大阪高槻市の梶原南遺跡から出土した挽齒横櫛（奈良後半・二・五×六・六cm）がある。法量だけでいえば、『江家次第』が記す「長二寸許」の横櫛とあまり変わらない小形の櫛である。横櫛は藤原京、平城京また平安京でも多数出土するが、通常の長さは八、九センチメートルから十一、十二センチメートル内外で、殆んどがイスノキである。『延喜式』には、内藏寮に年間三百六十六枚の梳を製作するよう定める。その内訳は天皇に二百枚、皇后に百枚、皇太子に六十枚を六月と十二月の二回に分けて半数ずつ、残り六枚は神今食と新嘗祭の料として各三枚ずつが献上され、いずれも「由志木」を用いよと規定する。「由志木」はユスノキ、別名ヒヨノキとも言い、マンサク科の常緑高木イスノキのことである。斎内親王の小櫛（額櫛）が「黄楊木」を用い、しかも非常に小さい「特殊な」櫛であったと言えるであろう。

（四七）…宮崎県教育委員会文化財調査報告書第二三集『上ノ原地下式古墳発掘調査』（岩永哲夫・茂山護執筆、一九八一年。以下の記述は本書に拠る）。

（四八）…祭祀における女装男子の出現は、十四世紀半ば以降の村落構造の変化など諸要因により、女性が行排除されて行った結果ではないかと考えられる。加藤美恵子『女』の座から女房座へ―中世村落と母性』（脇田晴子編『母性を問う 歴史の変遷（上）』、人文書院、一九八六年初版第三刷所収）、および義江明子著『日本古代の祭祀と女性』（吉川弘文館、一九九六年）所収、「基層信仰の男・女」（一〇八頁）など参照。

（四九）…前掲義江明子著『日本古代の祭祀と女性』、及び同氏著『つくられた卑弥呼―女』の創出と国家』（筑摩書房、二〇〇五年）。

（五〇）…中国の「節」は旄節また毛節に作る。古く『周礼』地官司徒篇「掌節」に拠ると玉節や角節などの区別もあり、「凡通達於天下者。必有節以傳輔之。無節者。有幾則不達（凡ソ天下ニ通達セントスル者ニハ、必ズヤ節有リテ以テ之ヲ傳ヘ輔クモ。節無クンバ。幾フコト有レドモ則チ達セザルナリ）」とする『斷句十三經經文』、臺灣開明書店、一九七一年第五版、『周禮』二三頁。管見では明・王圻の『三才圖繪』中（上海古籍出版社、一九八八年）、器用二卷、一〇九七頁下段〜一〇九八頁上段に『周禮』にいう六種の節を載せるほか、『清会典図』上（中華書局、一九九一年）、卷三九、四二五頁下段にも図が載る。また、『漢書』八（中華書局、一九八三年第四次印刷）、卷五四列伝二十四の蘇武伝（二四六三頁）や『後漢書』一（中華書局、一九九一年第五次印刷）、卷一上、光武帝紀（一〇頁）などに節の具体的な事例の一端を見る。それは「権力の象徴」であり、使者は「身分表明の信物」としたという。

（五一）…節刀に関する軍防令は前掲のとおり。『古事類苑』は『塵袋』の「太刀契」を引き、「軍防令云、大將出征皆授節刀。注云、凡節者以鬚牛尾為之所擁也。今以刀劍代之。故同節刀ト云ヘリ。（略）」とす（兵事部三十、刀劍三、一四一三頁。大西清隆・木村紀子校注『塵袋2』、平凡社、二〇〇四年、九一頁）。新訂増補国史大系二四『令集解』後篇（吉川弘文館、一九六六年）、「令集解逸文」軍防令第十七、二頁では、「釋云。案。節者。以毛為之。使者所擁也。見

漢書。・・・」とす。我が国で旄牛の尾に替えて刀剣になった背景の一つに、古墳時代におけるヤマト王権と豪族間の服属儀礼に関わる環頭太刀や頭椎太刀等の伝統があつたからではないかと愚考する。斎内親王の小櫛は節刀とは根本的に違い、前代以来の神職者が挿した櫛の伝統文化を重んじて、新たな律令制祭祀の整備に付随し案出されたものではないか、と推測する。

(五二) 義江明子氏前掲書『日本古代の祭祀と女性』第一「玉依ヒメの実像」、六五頁。

(五三) 秋本吉郎校注『風土記』(日本古典文学大系2、岩波書店、一九七二年第十五刷)、六九頁。他にも類似例は多く、頁数だけを記せば、四一頁、五三頁、六一頁、七三頁、八三頁、八七頁、一一一頁、一三七頁、一三九頁、五一五頁など。

(五四) 施珍華ペー語表記、張正軍翻訳・工藤隆著『雲南省ペー族 歌垣と日本古代文学』(勉誠出版、二〇〇六年)、七六頁。『肥前国風土記逸文』の杵島島の歌垣とを比較した見解だが、現代の雲南には少数民族自体を商品化する観光化の影響も考慮すべきかも知れない(栗原悟著『雲南の多様な世界』、大修館書店、二〇一一年、一三二頁、一九四頁等を参照)。

(五五) 秋本吉郎「童子女松原考」(東京大学国語国文学会編『国語と国文学』、至文堂、一九五七年九月号所収)、一〇四頁参照。

(五六) 狩谷椋斎著『箋注倭名類聚抄』(京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』本文篇、臨川書店、一九八七年再版第五刷所収)、卷一・八十七葉(四九頁上段左)。十世紀初頭には成立していた『新撰字鏡』(『群書類従』第二十八輯、雑部卷第四九七所収)、二九七頁下段、影部三十二に「髥髮至肩垂兒。宇奈井(髮ノ肩ニ至ルマデ垂ルルカタチナリ。ウナヰ)。」としている。

(五七) 土橋寛著『古代歌謡と儀礼の研究』(岩波書店、一九六六年)、第六章「歌垣の意義とその歴史」、三九三頁。工藤隆氏が歌垣モデルとしたペー族では、「不特定多数の男女が集まる機会でありさえすれば、農耕の予祝儀礼という限定は不要である」と述べている(同氏前掲書、七三頁)。

(五八) 義江明子氏前掲書『日本古代の祭祀と女性』第一「玉依ヒメの実像」、七七頁参照。いくつかの引用文献も含め、同氏の研究成果に全面的に依拠した。

(五九) 義江氏前掲書『日本古代の祭祀と女性』、七六〇七七頁等参照。原始的祭祀がいくつかの発展段階を経て神社の独占的な式典へと変化していく構想は松本信広「歌垣の発生的基盤」(『国文学 解釈と鑑賞』、至文堂、一九五五年八月号所収)にも言及がある。

(六〇) 義江氏前掲書、八四〇八五頁等参照、および同氏前掲書『つくられた卑弥呼』、一〇六頁。

(六一) 榎村寛之「斎王の禊について」(同氏著『律令天皇制祭祀の研究』、塙書房、一九九六年所収)、二四四頁。初出は『斎宮歴史博物館 研究紀要一』、一九九二年(二一〇三三頁)所収。

(六二) 義江氏前掲書『日本古代の祭祀と女性』、一〇一頁等参照。

(六三) 折口信夫「沖縄に存する我が古代信仰の残孽」十一、一〇頁、及び「女の香爐」、六九〇七〇頁(『折口信夫全集』第十六卷、中央公論社、一九七三年新訂

再版所収)。「女の香爐」の初出は柳田国男編『沖縄文化叢説』(中央公論社、一九四七年)、八一―一〇六頁。

(六四) 前掲榎村氏論考「斎王発遣儀礼の本質について」、二二二頁の註(五二) 参照。

(六五) 孟元老著、入矢義喬・梅原郁訳注『東京夢華録―宋代の都市と生活―』(岩波書店、一九八三年)、巻五、一八二―一九三頁(特に一八三頁)。吳自牧著、梅原郁訳注『夢粱録3―南宋臨安繁昌記』(平凡社、二〇〇〇年)、巻二〇、三三二―三三五頁(特に三三二頁)。

(六六) 永尾龍造著『支那民俗誌』第六卷(支那民俗誌刊行会、一九四二年)、第六篇第二章「小児の頭髮に関する習俗」(七八―八二二頁)。

(六七) 窪徳忠著『沖縄の習俗と信仰―中国との比較研究―』(東京大学東洋文化研究所、一九七一年)。

(六八) 『晋書』八(中華書局、一九九一年第四次印刷)、卷九十七、列伝第六十七、四夷、肅慎氏、二五三五頁。

(六九) 池内宏著『満鮮史研究上世篇』(まさき会祖国社、一九五一年)に「肅慎考」がある。池内氏は『国語』巻五「魯語」に孔子が言う「肅慎氏貢矢」の記事も伝説以上の価値はないとする(三九九頁)。三上次男著『古代東北アジア史研究』(吉川弘文館、一九七七年二版)では、『晋書』の「この記事は問題が多いので、ただちにこれを取り上げて使用することはできない」(二四九頁)とした。一見して「歌垣」を想わせる「嫁娶、毛羽挿女頭」の記事も、恐らくは照葉樹林帯地域の諸民族に特徴的な習俗事例の記事が混入したのかも知れず、今は不明というしかない。

(七〇) 宋・李昉等撰『太平御覧』四(中華書局、一九六三年第二次印刷)、卷第七八四、四夷部五、東夷五、三四七二頁上段。

(七一) 前掲池内氏論文「肅慎考」、四〇四―四〇六頁。

(七二) 藤井知昭「歌垣の世界―歌唱文化のさまざまな形態をめぐって」(佐々木高明編著『雲南の照葉樹のもとで』、日本放送出版協会、一九八四年所収)、一七三―二〇六頁。

(七三) 秋本吉郎校注『風土記』(日本古典文学大系2、岩波書店、一九七二年第十五刷)、四二頁。

(七四) 村松一弥著『中国の少数民族―その歴史と文化および現況―』(毎日新聞社、一九八一年二刷)、二二五頁、二八六頁。前掲藤井氏論文「歌垣の世界―歌唱文化のさまざまな形態をめぐって」、一八七頁及び一九七頁。

(七五) J・G・フレイザー著・永橋卓介訳『金枝篇』四(岩波書店、一九六七年第三刷改版)、第五十七章、一六五頁。

(七六) J・G・フレイザー著・M・ダグラス監修・S・マコーマック編集・吉岡晶子訳『図説 金枝篇』上(講談社、二〇一一年)、第二部第三章、二〇八頁。

(七七) 晋・張華撰、宋・周日用等注『博物志校證』(明文書局、一九八四年再版)、巻十、一〇九頁。校勘記「二」に六朝末の劉敬叔撰『異苑』巻八から「映井水詳觀影而去、勿反顧、勿令媚見、必生男」を引く(二二二頁)。なお、范寧校點の『異苑』(古小説叢刊、中華書局、一九九六年)では、八一頁に載る。

(七八) 吉川忠夫「静室考」(『東方学報 京都』第五十九冊、京都大学人文科学研究所、一九八七年所収)、三「静室における儀禮」(一三七―一四四頁)に陶弘景

の『登真隱訣』巻下を基に解りやすく「入静」の法を解説されている。門外漢には大変に有り難く、感謝したい。

(七九) …前掲窪徳忠氏は、「道教は中国古代のさまざまな信仰や思想をあわせ、さらに仏教に学んで宗教としての形式や体裁を整えた複合宗教であるから、儒仏二教をふくめて、中国古代に成立したあらゆる思想、学説、信仰、方術などに関する、ひろい素養と知識とがなければ、その内容や教説を正しく把握して、理解するのは困難である」と注意している(同氏前掲書、四七二頁)。

(八〇) …折口氏前掲論文「女の香炉」(沖縄文化叢説の八二頁。全集十六では七〇頁)。

(八一) …『古事記』にもあるが、ここは『日本書紀』上(日本古典文学大系・岩波書店、一九七一年第五刷)、神代上第五段(一書第六)、九二〇九三頁に拠る。

(八二) …前掲『日本書紀』上、神代上第五段(一書第六)、九三頁。

(八三) …白石太一郎「ことわざとわかし考―横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐる―」(檀原考古学研究所編『檀原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』、吉川弘文館、一九七五年所収)。氏は「コトドワタシ」の意味について『書紀集解』以来の近世の著名な言説を紹介した上で、国文学者鈴木重胤の「現世と黄泉国の別処の宣言であり、巨石をもってその別処を明確にする行為をさす」との説を支持した。そして考古学者の立場から、「六世紀中葉以降の横穴式石室」の造営時に、「長い羨道をその入口部で閉鎖する」時の儀礼としてこの問題を考察している。

(八四) …前掲『日本書紀』上、神代下第十段(本文・一書第一)、一六八〇一六九頁。

(八五) …同氏「餓鬼阿彌蘇生譚」(『折口信夫全集』第二巻、中央公論社、一九六五年所収)、三四八頁。

(八六) …亀田博「堅櫛」(『末永先生米寿記念献呈論文集 乾』、同記念会、一九八五年所収)、四八五頁。同氏はまた、「櫛に特別な呪力があるとする従前の考え方は特に論拠がないと考えられる」(四八六頁)とも述べている。

(八七) …永原慶二監修、貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』五(新人物往来社、一九七九年三刷)、第四十、八三頁。前掲亀田氏の論考もこの記事に触れ、この事例から「直ちに、古墳出土の堅櫛に特別な意味を考えることは出来ない」(四八五頁)と述べている。

(八八) …白川静著『漢字の世界 1 中国文化の原点』(平凡社東洋文庫二八二、一九九二年初版第十四刷)、第二章、九六〇九七頁(後に『白川静著作集2 漢字II』、平凡社、二〇〇〇年に所収、投げ櫛については七五〇七六頁に)。甲骨文字などにおいて「櫛」に「絶縁」の呪力を示すような事例はないと思われる。

(八九) …大塚民俗学会編『日本民俗事典』(弘文堂、一九七二年二刷)、二二七〇二八頁。

(九〇) …『新井白石全集』第四巻(国書刊行会、一九七七年)、「東雅」巻之八、器用第八、一五九頁上段「櫛」。

(九一) …例えば、山折哲雄「分節しない時間」(『現代思想』第十五巻第四号、一九八七年三月臨時増刊号所収)、四三頁。

第四部・伊勢齋宮史における諸問題

伊勢齋宮に関して考察すべき問題は多いが、ここでは過去に発表してきた五件の拙稿を基本として、その後を得た多少の知見を加えて論述するものである。まず第一章では、伊勢神宮（内宮）から直線距離にして約十数キロメートル離れて在った伊勢齋宮の立地とその歴史的背景について、第二章には、聖武天皇の関東行幸に当たり十日間を滞在した河口頓宮（関宮）の所在地についてこれまで誰も異論を挟まずにきた旧説の誤謬を正し、本来あるべきその所在地とそれが原則前齋王の凶事帰京に供された頓宮でもあったことを明らかにする。第三章では、過去の発掘調査で明らかになってきている齋宮跡の方格地割に關して、その初現的造営計画案の一つの画期として聖武朝が考えられること、第四章には度会離宮院に移転した齋宮の火災事件は「神火」であった可能性の高いこと、そして最後の第五章で、すでに出土している「目代」墨書土器から九世紀齋宮寮における「目代」像について旧稿を改訂して再説するものである。

第一章 伊勢齋宮の立地とその歴史的背景

（一）はじめに

文献上は『続日本紀』文武二年九月丁卯条^三に初見の伊勢齋宮の所在地が、現在の三重県多気郡明和町にある国史跡齋宮跡にあったことは広く知られている。しかし、その齋宮跡から五十鈴川畔の皇大神宮（内宮）までは直線距離にして約十四く十五キロメートルはある。そのため、なぜかくも遠く離れた所に設置されたのかという疑問が、これまで異口同音に発せられてきた。本稿はその理由を歴史的背景の中にさぐろうとするものである。

もとより、この本質的な問いかけに応えるためには、伊勢神宮及び齋王制度の創始、あるいは神宮司、神郡司の所在地など、いくつもの基本的事項にわたって論述するのが本来あるべき姿勢ではあるが、問題が多岐にわたり煩雑ゆえ、ここでは単に齋宮跡の現在地からみた伊勢齋宮の立地条件とその歴史的な背景を整理して、解決への糸口を手繰り寄せたいと考えている。そのために、この課題に関する主な先行研究の概要をはじめに紹介してその疑問点を指摘し、その上で自らの卑見をのべたうえで自説を展開して、江湖のご批判を仰ぎたいと思う。

（二）先行研究の概要と疑問点

伊勢齋宮の立地問題を取り上げた先行研究は概ね二類に分けられる。即ち、（A）太陽神祭祀（太陽信仰）との関わりから割出そうとする説と、（B）律令制度下の齋内親王を女性祭祀者の政治的敗北と捉え、それゆえに都からも神宮からも遠ざけられたとする説とである。ここでは前者（A）に、①井上辰雄氏、②三村幹弘氏の説を、後者（B）には③林一馬氏の説を掲げる。

（A）①井上説について

同氏の説では、奈良の三輪山と箸墓を結ぶ東西延長線上に伊勢斎宮跡も河内の日置里、淡路の久留麻（伊勢久留麻神社）もあり、それと同名の鈴鹿市白子の久留麻神社は淡路久留麻とも関係がある、との前提がある。そして、大化前より伊勢の多気郡有爾郷は天照大神の祭祀の中心地で、その太陽神祭祀にかかわるとする日置部の所在地（多気町足田―日置田）を主軸に、伊勢斎宮が鈴鹿白子の久留真神社と久居の戸木（日置）とを結ぶ二等辺三角形の一角に位置すると指摘して図示する。断言を慎むべきだしつつ、「日置氏がその居を定める時、聖地を基準として、一定の方位を強く意識していたことを窺わせるもの」だとされた⁶¹⁾。

伊勢神宮の祭祀や斎王制度に日置氏がどう関わったのか不詳でコメントはできないが、現代の地図上で導き出された図形的位置関係（二等辺三角形）のもつ意味が判然としない。果たして古代祭祀上の重要事項を決する際に、それがあつた種の数理科学的原理から必然的に導き出されたものか否かはまだ立証されていない。何より天照大神を祭神とする伊勢神宮自体が氏の言われるその三角形から外れるのも不可解である。この種の議論には偶然性の介在する余地がある。仮に何らかの方位上の原理に基づき割り出した三角形の一角がたまたま泥沼地帯であれば、そういう所には決して伊勢斎宮を置かなかったのではないか、との素朴な疑問が残った。

（A）②三村説について

氏は、ゲーター祭の行われる神島は、神体島として伊勢湾一帯の海人族の祭祀センターであるといい、その神島の東西軸上に「太陽信仰の聖地たる」「大淀斎地」―それは神宮司や神郡司の置かれた有爾郷から伊勢湾に注ぐ笹笛川の河口は現在より約一・五キロメートルほど内陸の御厨野（美久里野）辺りにあつたとし、斎王はそこで神嘗祭の禊を行ったとの想定を前提として―があつたと仮定。その「大淀斎地」に近く、かつそこを見下ろす最も安定した洪積台地の最奥部に伊勢斎宮は立地した。神島を太陽信仰の祭祀センターとする伊勢湾地域の地理的祭祀構造こそが、伊勢斎宮の立地の根底を用意した⁶²⁾、という。

言うまでもなく、斎王は伊勢神宮祭祀に奉祀するために発遣された天皇の名代である。その宮殿の立地が神島によって規定されるのかどうか疑問がある。そもそも肝心の伊勢神宮が氏の言われる東西軸上にはない。第一、ゲーター祭の起源が果たして何世紀まで遡り得るのかという、八代神社神宝（考古遺物）とは別に考究されるべき問題もある⁶³⁾。氏のいう「（伊勢神宮まで遠いという）斎宮の地理的不合理性」は民俗宗教学的理念からだけでは説明し切れず、もっと当該地域に密着した社会経済的、政治的背景からのアプローチも必要であろう。

（B）③林説について

氏は、律令制下の斎王は俗権の頂点たる天皇の身代わりとして派遣された潔斎者に過ぎず、神宮祭祀を主導したわけでも、王権の宗教権を掌握したものでもない、至聖の中心から遠ざけられた存在であると言う。だから伊勢斎宮が都からも伊勢神宮からも遠く離れた神郡の縁辺部

に当たる場所に立地したのは、そのような斎王の性格に見合うものである^⑤、とする。

王権における「中心と周縁」^⑥の問題は文化人類学上も恐らく重要であろう。律令制下の斎王制度は敗者の側面をア・プリオリにもつのも知れない。折口信夫氏は「大化の改新の一つの大きな目的は、政教分離にあった」^⑦としたが、それは「女君の政治的権威の失墜」^⑧による「敗退としての政教分離」(同上)との見解や「倭王権の最高守護神の祭場が伊勢に移された最大の理由」を従来の女王制の廃絶(女性最高司祭者の地位の終焉)にある^⑨とした見解にも通じるかも知れない。かつて、卑弥呼や賀茂伝説などの例示から「彦姫による政治的・宗教的二重統治が日本固有の古い形式であった」^⑩とした西郷信綱氏も斎王(制度)に関して次のように述べている。即ち、「極言すればそれは女の《世界史的敗北》を記念する制度であったとさえいえなくもない」(同上)、「女の霊能のにない手を自己の姉妹から娘に移し、さらにそれを政治の中心から離れた伊勢の地に配置することによって、天皇の政治力の相対的独立性は強められ(天皇の政治力の強化という)、王権のあらたな展開」(同上)でもあったと。

また、仮王としてのコトシロヌシの例^⑪にならない、それを伊勢神宮起源伝承譚(倭姫命の諸国遍歴)に当てはめると、「倭姫命」をどう捉えるかは暫くおくとして、王権中枢部からの女性司祭(斎内親王)の実質的追放を象徴するかに見えなくもない(伊勢斎宮の立地問題を論じたのではないが、最近の直木孝次郎氏は天照大神の伊勢への遷祀について「高皇産霊神を奉ずる河内政権が天照大神を奉ずる第一次ヤマト政権を圧倒した結果、天照大神は中央から遠ざけられ、流謫にも近い形で伊勢に遷された」^⑫との新見解を公にしている)。

しかし仮に、斎王制度を「天皇の二元的機能が一元的に収斂した結果、新たに生み出された制度」^⑬だと位置付けたとしても、そこから氏のように斎王の敗者的側面だけを強調して、伊勢斎宮の地理的な位置づけまでも説明するのはいささか観念論的飛躍があるように思う。それに関わった当時の人々が「王権と女性祭祀」をめぐる現代の研究者たちの分析結果と同じ認識で斎宮や斎内親王の存在を受けとめ、設置場所まで選んだとは到底考えられないからである。

以上、三説には重要な問題提起や指摘もあり学ぶべき点も多いが、必ずしも科学的根拠に基づく説とはいえない。同時に、①と②は予てよりある、「斎王は祭事に際して、日本の固有思想により旭に向かって東面した」^⑭とか、また外宮に近い高倉山は「太陽神の降臨する聖地として崇拜され」^⑮、そのため「この山頂の巨石古墳の石室も東に向って口を開いている」(同上)などといった想像的見解と、同じではないが、太陽信仰を基軸とする点では似通っているとの印象をうけた。この種の問題には当該地域社会の地理学的属性や政治・経済的、歴史的な背景からも迫る必要がある。次節ではより形而下の問題として立地条件を考察してみたい。

(三) 伊勢斎宮の立地条件と背景

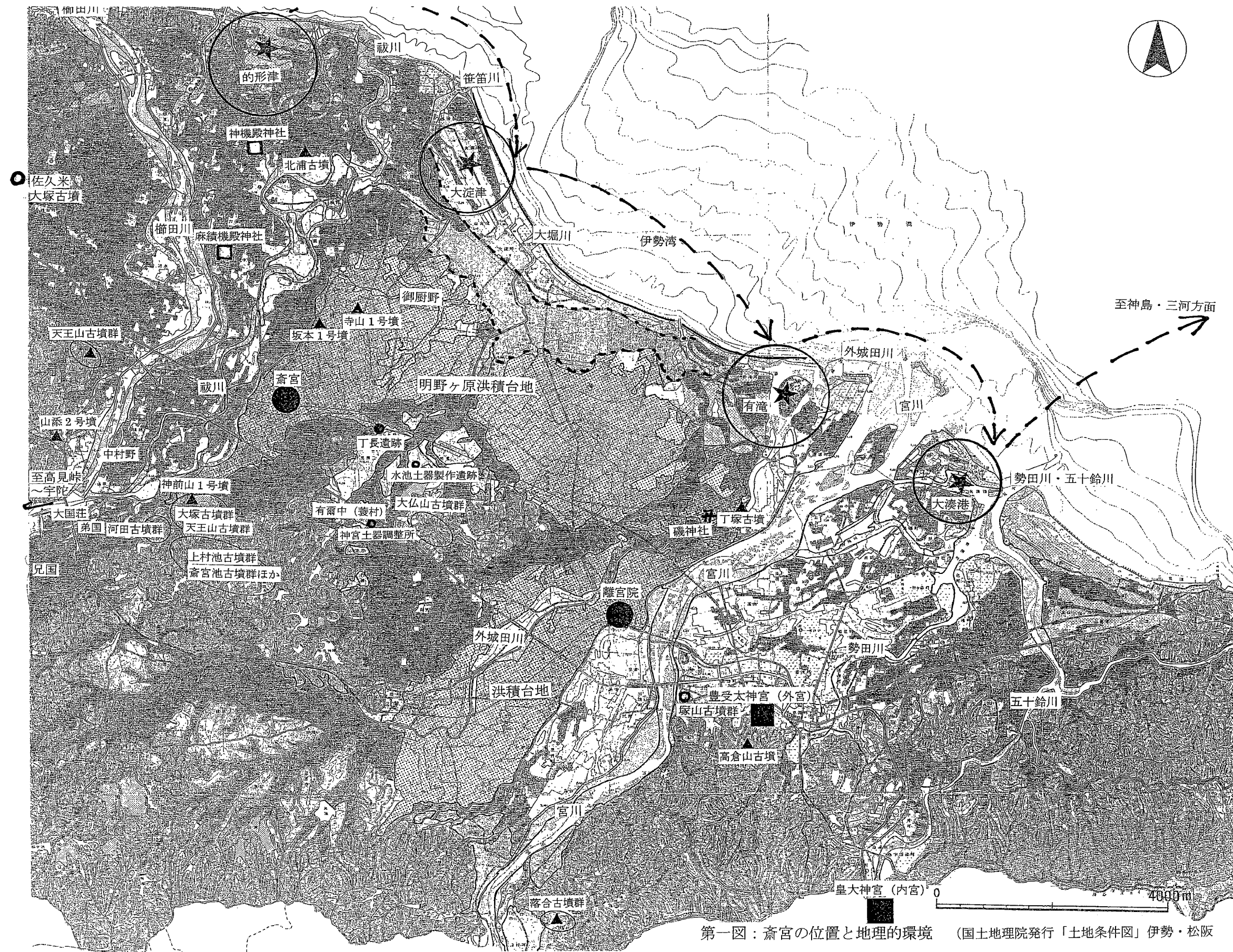
①最も安定した土地

当面の対象となる土地の属性や成り立ちを知るために、南勢地域の「土地条件図」^{二六}を掲げた（第一図）。現在、伊勢神宮のある場所は、宮川（延長約九一キロメートル）を内堀とし、櫛田川（延長約八六キロメートル）を外堀として、東前方に海が広がり、後方は紀伊山地に連なる山塊を背負う護りには適した地理的環境にある。しかし、宮川右岸の旧伊勢市街地のほぼ全域に氾濫平野のほか自然堤防や砂堆（礫堆）、砂州が顕著にみられ、そこがすさまじい氾濫原だったことが判る。宮川の大洪水はいま離宮院跡のある洪積台地にぶつかる大きくL字状に屈折し、勢田川の洪水とも合して大量の土砂を繰り返し運び込んだであろう。

延暦十六（七九七）年に、度会郡沼木郷高河原に在った離宮院が宮川左岸の度会郡湯田郷宇羽西村へ移転する^{二七}。その事情を『園太暦』所引の古記にいう「大神宮司解」は、「件の官舎は、去る宝龜四年に改造して以来、既に二六年を経て、皆悉く破損す、しかのみならず南北に河通じて、暴水の汎溢すれば、崩壊すること少なからざるなり」^{二八}と述べている。また『太神宮諸雑事記』^{二九}の和銅三（七一〇）年八月十六日条は、大風洪水による豊受神宮（外宮）の瑞垣と御門一字の流失を伝える。従来から、「それぞれの記述の信憑性は慎重に取り扱う必要がある」^{三〇}とされる『諸雑事記』だが、本書は宮川、五十鈴川を含む都合二十七回もの洪水被害も記録する。それらが六月から九月の間に集中しているのは、歴史時代にあっても、台風などによる宮川右岸地域の地理的不安定さは変わらなかったことを物語っている。

一方、斎宮跡の西側を流れる祓川と櫛田川は、度重なる洪水で流路が何度も動いた結果の姿を示している。元来、祓川筋が旧櫛田川の本流であり、多気川とも称した（以下本稿では両河川分流以前の時代については多気川と統一表記する）。この流域でも氾濫平野と自然堤防などが顕著である。流域に残る「中海（なこみ）」や「流田郷」^{三一}といった地名に、繰り返された氾濫蛇行の歴史が刻まれている。記録に残る多気川の大洪水には、斎王久子内親王在勢中の承和十四（八四七）年、斎王媞子内親王在勢中の永保二（一〇八二）年、そして斎王姁子内親王在勢中の保安二（一一二二）年の三回^{三二}が知られる。『高山寺文書』所収の承平二（九三二）年八月五日付け太政官符案には、「彼の河、承和十四年の比目を以て、古河の西北一里許りに移り流るるなり」^{三三}とみえ、仁明皇女久子が伊勢斎宮在任中に起きたこの九世紀半ばの大洪水で、流路が西北へ一里許りも移動し、郡堺をめぐる地元に混乱のあったことを伝えている。先の『諸雑事記』に洪水被害記事の頻出する宮川地域と同じ南勢地域にあるこの多気川流域でも、季節により同様の洪水被害のあったことは十分に想定されて然るべきである。

また、現在の櫛田川左岸に広がる沖積平野部は櫛田川低地の名で知られ、大部分は標高二メートル以下の氾濫平野や後背低地、さらには海岸平野や干拓地などからなっている。金剛川右岸域には五世紀後半代の佐久米大塚山古墳^{三四}もあるが、元来その一帯は、伊勢湾の満潮時には地下からの湧水もあるなど、日常的に浸水害の避けがたい低湿地だったのである^{三五}。



第一図：斎宮の位置と地理的環境 (国土地理院発行「土地条件図」伊勢・松阪
1：25,000 昭和44年3月 をもとに作成した。)

かくて宮川と多気川とに挟まれた広義の明野ヶ原洪積台地の上こそが、時ならぬ水害にさらされる心配がなく、安心して住める最も安定した土地だった。何よりもこの事実こそが第一義的条件である。

②河川に近接した場所

ただ、この洪積台地の上でも立地場所は限定される。なぜなら『延喜式』には次の規定があるからである。斎内親王が三時祭に参宮するときの禊の料に次いで、「右五月。十一月晦日。随近川頭為禊。八月晦日。臨尾野湊為禊。其三時祭月十五日。斎内親王向離宮。(中略)十六日。(略)禊度会河。参入神宮。(略)十七日参太神宮祓禊御裳洗河。」^{二五}とある。つまり、六月と十二月の月次祭参宮に先立ち、「近川」で禊をする必要があった。同じ洪積台地の上でも、近くに禊のできる川が存在が必要だったのである。ただ、前述したとおり宮川も多気川も天候次第では暴れ川になることがありえた。幸いにも斎宮跡の東側にはエンマ川、笹笛川などの中小河川が流れている。従って、基本的には多気川で禊をしたが、『延喜式』段階では特定の河川名を指定せず、臨機応変に対応できるよう「近川」としていたことは間違いない。

因みに、『日本書紀』の皇極紀元年八月甲申朔条に、「天皇幸南淵河上、跪拜四方。仰天而祈。即雷大雨。遂雨五日。溥潤天下。於是、天下百姓、俱稱萬歳曰、至徳天皇。」^{二六}とみえるのは、伊勢斎宮とは直接関係はないが、天皇が自ら南淵河の「ほとり」で雨ごいの祭祀を執り行ったと言う記事である。恐らく事前に南淵の河辺に臨んで禊はおこなわれたであろう。また、天武紀七年春に、「將祠天神地祇、而天下悉祓禊之。堅斎宮於倉梯河上。」^{二七}とあり、天武自らが天神地祇を祀らむとして倉梯河の「ほとり」に斎宮を建てたことがわかる。この場合もその斎宮は当然、禊の必要から「倉梯河のほとり」^{二八}にあつたことが窺える。それは天武紀二年四月にみえる大来皇女の「泊瀬斎宮」を「是先潔身、稍近神之所也」^{二九}といい、事実、大来泊瀬斎宮跡としても注目されている桜井市の脇本遺跡から眼下の泊瀬川までは指呼の間にある事からも明白である。

古代では、間近に川を望むやや小高い丘陵状の場所を「河・川の上(ほとり)」と呼んだのである。今も誤って「かわかみ」と訓ませている注釈書をみかけるので敢えて念を押すと、そういう場所こそ「凡立國都、非於大山之下、必於廣川之上、高毋近旱而水用足、下毋近水而溝防省(凡そ國都を立つるには、大山の下に於いてするに非ざれば、必ず広川の上に於いてす。高きも旱に近づくことなくして水用足り、下きも水に近づくことなくして、溝防省く)。」^{三〇}という哲理を為政者は識っていたからである。(但し、例えば元慶六年六月三日付太政官符にある「諸國百姓每至夏節。剥取諸毒木皮搗碎散於河上。在其下流者魚虫大小舉種共死。」^{三一}のような場合は「かわかみ」と訓むこと、言うまでもない。なお、水・草の交わる岸辺も「ほとり」だが、その場合には通常は「辺」や「湄」を用いた。)

こうして、ヤマトにおける皇族による祭祀儀礼の記述から推してみても、伊勢斎宮には近くに「禊に適した川」を望める微高地、すなわち

「川の上（ほとり）」に立地することが何よりも不可欠の条件だったことが判るであろう。

③ 外港の発達、水陸交通の要衝

郡司の非律令的な守旧制は夙に指摘されて来たところである^{三三〇}。律令制政治の根幹に属する「収取した租を保管する正倉が本来郡毎に設置」^{三三一}されていたことや「租庸調類の国衙・中央への運上が綱領郡司の担うところ」（同上）であったことをはじめ、檢察・軍事・手工業・宗教等の各分野における在地支配の実質が当初は郡司層に委ねられていたことも明らかにされている。従って、伊勢神郡内における交通機能と郡司との関係も極めて重要だったはずである。しかし、伊勢神郡の郡衙跡が発掘調査で発見されたという報告をまだ聞かず、場所の特定はもちろん、斎宮寮との位置的關係も不明という他はない。ここでは郡衙との地理的關係には触れ得ないまま話を進めることにする。

伊勢斎宮の設置には、陸路と水路とが交差する交通の要衝であることも同時に要請された。なぜなら、『延喜式』には「諸国送納調庸并請受京庫雑物。積貯寮庫。支配雑用。」^{三三二}とあり、尾張・参河・遠江・駿河・相模・上総・常陸・下総・上野・伊豆・安房・美濃・信濃・志摩・伊勢・伊賀の諸国から絹紬や庸綿、紙、筆のほか、春米や粟・大豆・胡麻油などの食糧品、あるいは陶器など、少なくとも六十八品目の雑物が寮庫に搬入される規定があったからである。もとより『延喜式』（巻五・斎宮）が伊勢斎宮のどの段階の事実を反映しているかは別途重要な問題だが、ここでは他国からの物資の移動・搬入を類推する資料として掲げたにすぎない。

斎宮跡の周辺地域では二十か所に及ぶ土器製作関連遺跡が発掘調査されている。祭祀に必要な大量の土師器の坏・皿類をはじめ、日常雑器などは斎宮寮近郊でも調達しうる条件はあった^{三三三}。これら土器製作関連遺跡も当然、地元郡衙との関連で今後は解明に資するべきであろう。一方、斎宮跡の調査では「美濃」と施印された須恵器片、猿投産や近江産をはじめとする大量の緑釉陶器なども出土しており^{三三四}、そうした器物は種々の物資と共に生産地から陸・海路を運ばれて来たのである。斎王の神宮祭祀への参入にも、公卿勅使が伊勢神宮に向うにも、志摩国から都へ贄を運ぶにも、京庫から斎宮寮庫へ雑物を請い受けるにも、幹線道路は不可欠、最重要の基本的な社会資本であった。幹線道路のない所に伊勢斎宮が設置されることはないのである。伊勢斎宮の設置と当地における郡衙の支配圏とは密接に関連していたであろう。

第二図は史跡内で検出された伊勢古道^{三三五}と呼ぶ官道を示している。両側に側溝をもち、溝の心々間が約九メートル幅の直線道路で^{三三六}、史跡内の北西側から南東方向にかけてまっすぐに走る。これと同一規格の道路が、斎宮跡から南東へ約六百メートル隔てた、笹笛川左岸の丁長（ちよなが）遺跡^{三三七}でも約三十二メートルにわたって検出され、少なくとも斎宮寮域を通る古代の官道はまっすぐに同遺跡を経て、伊勢・志摩方面へと向かって延びておいたことが着実に証明されてきている。

次に、海路水運についてみる。既に出土遺物の考古学的分析・検討に基づき、四世紀から五世紀前半代におけるヤマトから伊賀・亀山・鈴

鹿・桑名を経て美濃・尾張方面へ向かう陸路に対し、伊賀・一志・松阪を経て、伊勢湾を航行し三河・遠江方面へ向かう海路の存在も提唱されている^{【四〇】}。和田萃氏はその玄関口として多気川河口の形的形津（円形津）を想定された^{【四一】}。しかし、ヤマトからの形津に直行する道としては桜井・宇陀から高見峠越えて多気川沿いに伊勢湾岸に出るルート^{【四二】}も重要であった。

「形的形津」はすでに埋没したが、『伊勢国風土記逸文』には「形的形浦者 此浦地形似的 因以為名 今已跡絶成江湖也」^{【四三】}という。『万葉集』や『躬恒集』にも題材として詠われている^{【四四】}。『日本書紀』斉明紀六（六六〇）年に「是歳、欲為百濟、將伐新羅、乃勅駿河國造船。已訖、挽至續麻郊之時、其船、夜中無故、艫舳相反。衆知終敗。」^{【四五】}とみえ、この續麻郊を頭注は『和名抄』から「伊勢国多気郡麻績郷」とし、現「祓川河口付近に比定」している（三四八頁）。それはこの形的形津にほかならない。穂積昌裕氏が指摘^{【四六】}したように、当時は外洋に航行できる軍用船が停泊できるだけの要津であったと推測される。

多気川下流域には神機殿神社と麻績機殿神社がある。ここでは現在でも神宮の神衣祭にあわせて地元住民の手で機織りを行う。かつての令制による公的祭祀である月次祭と神衣祭が、少なくとも持統三（六八九）年に班賜された浄御原令の時代には伊勢神宮の公式行事として実施されていたことについては井上光貞氏の研究がある^{【四七】}。その神衣織成に従事したのが神服部（服部氏）と麻績連（麻績氏）で、両神社はその伝統を今に受け継ぐ。当時は神衣祭の織成に三河国の赤引糸も使用した。三河から海路で運ばれた糸を形的形津で荷揚げし、それを服部氏と麻績氏に織らせたのである。それゆえ両神社は形的形津からは至近の位置にあったのであろう。

斎宮寮庫に調庸を送り納める諸国には東海から北関東に及ぶ地域を含むが、とりわけその太平洋岸に面する諸国の場合は海路で人も物資も運んだに違いない。それを形的形津（又は大淀津）で荷揚げし、多気川（又は笹笛川）の水運を利用して斎宮に近い船着場に着け、荷揚げしたと推測する。こうして斎王が恒例の禊のみならず、斎宮寮の日常的経営には良好な外港とそれに連結する水路としての身近な河川がどうしても必要不可欠だったのである。

ところで、形的形津や大淀津から東海・関東方面に航行する場合、一気に伊勢湾を横断する船もあったかも知れないが、「大部分が陸岸を見ながらの航海」^{【四八】}だとすれば、基本的には瀬戸内を航行した遣新羅船^{【四九】}にも似て、有滝（豊浜）→二見浦→飛島（浮島、牛島）・答志島→神島→伊良湖岬→三河湾→遠州灘以遠へ（この逆も）と、複数の港津に寄港しながら航行した。その海運荷役の利害を管轄・差配する在地有力者の存在^{【五〇】}も想定される。そこで、伊勢斎宮に近い神前山一号墳と坂本一号墳の被葬者などについて今少し考えておきたい。

【付説・金銅装頭椎大刀が結ぶ糸、多気と胸形と舒明一族】

すでに消滅したが、神前山一号墳は五世紀後半の帆立貝式前方後円墳で全長が四〇メートル、二段築成の墳丘は約五万個前後の葺石で覆わ

れていた。百六十余点の円筒埴輪のほか、明治三十八年出土の三面の画文帯神獸鏡でも知られる^{五二}。県内の同型鏡には、龜山の井田川茶臼山古墳から二面、神島八代神社に伝世所蔵一面がある^{五三}。この画文帯神獸鏡を共通項として神前山一号墳と神島との間に形的形津ないし大淀津という港津拠点を置いてみると、神前山一号墳の被葬者は当該海上交通の利害を所管した在地有力者の一人と想定することも可能であろう。即ち、伊勢湾にそそぐ多気川河口に近い多気郡の地は海上交通の所管に関わる重要な拠点だったのである。

また、坂本一号墳（七世紀前半）はこの時期には珍しい前方後方墳で、木棺直葬の主体部から金銅装頭椎大刀（全長一・〇五メートル）が出土した^{五四}。神話の世界ではアマツヒコホノニギノミコトが降臨する際に、天忍日命と天津久米命の二人が頭椎大刀を取り佩き先導している。従来この大刀は古墳時代後期の特に東国方面に多く、「渥美半島を経て遠江・駿河に線状に連なる分布状況が認められる」^{五五}ものである。神島にも伝世される同じ大刀二点をも踏まえて岩原剛氏は、「古代の東国へのルート上の諸豪族へ配布された飾大刀だった」^{五六}と意義付けをして、TK二〇九段階^{五七}の「王権が東海より広い地域を戦略的に統括しようとしていたのではないか」（同上）と重要な指摘をしている。伊勢を起点にした東国への海路が重要視されたことを示す貴重な遺物であった。

坂本一号墳の被葬者も神前山一号墳の被葬者と同様、的形津・大淀津から神島を経て今という所の東海・関東方面へと向かう海上交通路の利害を管轄する在地有力者の一人であった可能性が極めて高い。その被葬者としては、第一には竹首の一族か、あるいは大神神社起源説話に倭迹速神浅茅原目妙姫や穗積臣の遠祖大水口宿禰と共に登場する伊勢麻績君（崇神紀七年八月己酉）の一族に連なる人物か、と想像するにとどめておきたい（後者は後の時代に『皇太神宮儀式帳』に見える多気評督領麻績連広背へと連なるものであろう）。

神前山一号墳から坂本一号墳へと在地有力者の古墳の位置が約一五〇年の間に、より海側へと位置的に進出した背景の一つには、フェアブリッジ教授の海水準曲線による「七世紀頃の後退」現象^{五八}のほか、対ヤマト王権との関係において、その政治情勢の変化を反映している可能性も考慮に入れておきたいところである。

そしてとりわけ、坂本一号墳の金銅装頭椎大刀を介して附言したいことは、伊勢と胸形（宗像）と舒明一族との政治的関係性である。玄海灘に面した宗像の宮地嶽古墳（旧称・津屋崎七〇号墳、宮地岳大塚古墳）からも坂本一号墳と同様に金銅装頭椎大刀が出土^{五九}している。ただこの古墳は三十五メートル前後の円墳と推定され、全長が全国第二位という横穴式石室（無袖）の最奥部に横口式石槨をもち、出土した金銅装頭椎大刀は復元長が実に二・四メートルもある。これは坂本一号墳の大刀の二倍強の長さである。七世紀前半代でも少し新しい段階（第二・四半期）の築造だとされ、その被葬者には胸形君德善が比定されている^{六〇}。大海人皇子がその德善のむすめ尼子娘を妃とし、子の高市皇子が壬申の乱で活躍したのは周知のとおりである^{六一}。この両古墳築造の七世紀前半代の時代的背景の一つに、都では「六三〇年代後半から六

四〇年代の初め頃」^{〔六二〕}に吉備池廃寺の創建があつたことを木下正史氏が明らかにされている。木下氏は発掘調査の成果を踏まえ、その吉備池廃寺こそ舒明が発願した百濟大寺（後の大官大寺・大安寺）だとする。のちに大安寺のモデルともなる道慈留学の寺、長安の西明寺は顯慶元（六五六）年に皇太子の病氣治癒を祈願して創建されている^{〔六三〕}。

すなわち、両古墳の規模や副葬品のグレードに差異はあるものの、同じく金銅装頭椎大刀を副葬した七世紀前半代の二つの古墳である。坂本一号墳は伊勢斎宮に近い洪積台地上から、的形津や大淀津の港津を見据える在地有力者の古墳であり、一方、玄海灘を望む津屋崎古墳群（宮地嶽古墳を含む）は朝鮮半島への海上交通路の所管を担い、沖ノ島祭祀にも関係した胸形君一族の奥津城であつた。従来から西国には出土例の少ない頭椎大刀がそこに副葬されていた事実を重視すると、ほぼ同時代に生きた両古墳の被葬者は、舒明一族（天智・天武）との政治的関係において、西（対朝鮮半島）と東（対伊勢以東）の重要な港津（海の玄関口）の掌握に直接かわり、ヤマトの王権からいわば相似形の役割を期待されそれを担った人物だつたのではないか、というのが予てからの私の主張である^{〔六四〕}。天武・持統皇統下に成立した記紀において、筑紫胸形君等のもちいつく三女神を天照大神が生むことによって「胸形君の氏の神を天照大神の系譜と結びつける」^{〔六五〕}という神話が成立した背景には、恐らくそのような政治的関係が伊勢（多気）及び筑紫（胸形）と舒明一族との間に形成されていた事実があつたからであろう、と考えられるのである。

併せて、「伊勢は東国への大和の外港であつた」^{〔六六〕}との評価もあり、だとすれば伊勢湾岸の港津が東アジア方面との交易の玄関口として機能した可能性も一概には否定できない。欽明天皇即位前紀に見える秦大津父の説話に「但臣向伊勢、商價来還」^{〔六七〕}というのは、伝統的な地方豪族らによる遠距離交易^{〔六八〕}が背景にあることを予想させる。先の画文帯神獸鏡に象徴される「舶載鏡の所有者の性格」の問題^{〔六九〕}も想定・考慮にいれると、津市の六大A遺跡や木造赤坂遺跡で出土した韓式系土器（朝鮮系軟質土器）や、陶質土器（コップ形土器）^{〔七〇〕}といった遺物は、東アジアの特に朝鮮半島や中国からの季節的な貿易船や人々の直接的な来航ないし一部定住化などの歴史的背景^{〔七一〕}をも物語る貴重な資料として改めて評価されなければならないであろう。

以上、古代王権にとって恒常的に道路、渡河点や港津などの要衝の地を所管・支配する政治的・経済的な意義はなによりも重要であつた。伊勢神宮の祭祀にかかわる伊勢斎宮の場合にも、それを安定的に維持経営するに相応しい立地場所としては、①洪水被害の恐れがない最も安定した土地で、②しかも河川には近くて、恒例の禊に適した場所が常に確保でき、③都との血脈たる官道、および発達した外港とそれに連絡する水運条件を備えたいわば水陸交通の要衝の地であることが不可欠であつた。これらの条件をすべて満たす場所は、多気川（右岸）・宮川（左岸）両河川の沿岸部にあたる明野ヶ原洪積台地の縁辺部^{〔七二〕}―伊勢斎宮の場合はそれが神郡の西の境界に位置した―をにおいて他にはあり

えなかったのである。ではなぜ、より神宮に近い宮川左岸ではなく遠く離れた多気川右岸だったのか、その歴史的背景を次項で考えたい。

④王権による土地開発

天武天皇や聖武天皇は伊勢国から広大な土地を大安寺に施入した事実がある。『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』^{〔七三〕}によれば、天武天皇の歳次癸酉、即ち即位後間もない天武二（六七三）年に伊勢国から施入された墾田地六百六十二町のうち、八十町が多気川流域に展開した飯野郡中村野からの施入であった。この天武二年は、舒明発願による百濟大寺（吉備池廃寺）が百濟川（米川）のほとりから、高市という地に移転されて高市大寺（後の大官大寺・大安寺）となった正にその年に当たっている^{〔七四〕}。従って、天武によるこの時の施入には、父舒明の百濟大寺を引き継ぐ新たな高市大寺の营造という国家的大事業がその背景にあったと考えるべきであろう。

ところで先の『資財帳』や『平安遺文』等から、飯野郡中村野の条里を丹念に復元した山中章氏は、「多気郡には少なくとも天武朝に二〇〇町以上、桓武朝までには四〇〇町以上の土地が王権の下にあった」^{〔七五〕}との結論を得、かつ、中村野周辺にある山添二号墳（六世紀後半代）や河田A・三号墳（六世紀末〜七世紀前半頃）の副葬品を傍証の根拠として、少なくとも当地と王権との関係は六世紀以来の歴史があることを明らかにした。

松阪市山添町字上山にある山添二号墳は径約十六メートルの円墳で、主体部には木棺直葬跡が二か所あり、いわゆる田辺編年のTK四三様式^{〔七六〕}に相当する須恵器や馬具・玉類のほか、掘じり環頭金具をもつ直刀二振りが出土したことで知られる^{〔七七〕}。藤ノ木古墳の出土遺物にも含まれる掘じり環頭金具は、現在までのところ三重県内では井田川茶臼山古墳（亀山）と保子里一号墳（鈴鹿）にしかない。山中氏によれば、井田川茶臼山古墳は伊勢国で初めて横穴式石室を採用した首長墓であり、画文帯神獸鏡の出土があることは前述のとおりである。

一方、多気郡多気町河田字東谷にある河田古墳群は、百基からなる群集墳である。尾根筋に沿ってA〜C支群に分かれるが、十五基の方墳を除いた他はすべて径一〇〜二〇メートル級の円墳である。就中、山中氏が鈴鹿市の岸岡山古窯（六世紀後半）の指標土器とする須恵器脚付短頸壺が河田A・三号墳^{〔七八〕}から出土している点にも注目した。

その上で山中氏は、井田川茶臼山・保子里両古墳の造営は「伊勢北部地域への新たな勢力の浸透」^{〔七九〕}を示唆するもので、それ以後に伊勢国での横穴式石室が定着するとみ、南勢多気川流域で「その新しい王権といち早く関係を結んだ勢力」（同上）として山添二号墳を評価し、それにつづく「河田古墳群の首長層も北勢地域の新しい権力と無縁ではない」（同上）とした。そして、伊勢国北部に進出した新たなヤマト王権が支配権を及ぼしていく過程を三期に分け、南勢中村野周辺の在有力者層との関係を整理して、「河田古墳群の被葬者達こそ、王権が確保した大安寺の所領を中心に飯野・多気両郡北部の王権の土地を開発した人々ではないか」^{〔八〇〕}と提起した。ただ、古墳の築造年代だけで

いえば、多氣川左岸の天王山古墳群（五世紀中葉～七世紀後葉）などの被葬者らも決して無関係ではないと推測される。

ここに山中章氏の画期的な見解を一つの前提として、山添二号墳から河田A・三号墳に至る時期をヤマト王権における敏達・用明・崇峻・推古・舒明・孝徳朝の時期に重ねた時、伊勢国では竹氏・麻績氏らの所在地有力者たちはもとより、鈴鹿を本拠地としたとされる^{〔八二〕}大鹿氏一族の動向も重要になると考えざるを得ない。次に藺田香融氏の研究成果^{〔八三〕}に導かれて、多氣川流域に大鹿氏一族の政治力を窓口としてヤマト王権の力が及んだ経緯を推定し、前記の考古遺物が鈴鹿方面からもたらされた因果関係を説明する一助としてみたい。

藺田氏は、『日本書紀』大化二（六四六）年三月の皇太子（中大兄皇子）の奏請にいう「皇祖大兄御名入部」が息長氏の管理した押坂部を中心に構成されていたこと、そしてそれが「彦人大兄皇子から妃・糠手姫（田村皇女）、その子舒明天皇（田村皇子）、孫・中大兄皇子に伝領され、大化改新―蘇我氏打倒のための重要な経済的源泉」（同上）であったことなどを説明された。

蘇我氏との血縁を持たぬ押坂彦人大兄皇子（敏達の子）は即位できずに終わった悲運の皇子だが、その妃糠手姫皇女は他でもない、伊勢大鹿首小熊の娘菟名子を敏達の夫人として納めた結果生まれた孫娘（外孫）であった^{〔八四〕}。後に嶋皇祖母尊とも呼ばれた糠手姫皇女は晩年を飛鳥嶋宮に住み^{〔八五〕}、壬申の乱後に大海人皇子はその嶋宮に入っている。母方の外戚氏族になる伊勢大鹿氏一族としては、孫むすめ糠手姫皇女が彦人大兄皇子との間に生んだ田村皇子（外曾孫）即ち舒明の即位（六二九年）には、大いに歓喜したことであろう^{〔八六〕}。後代に於いて「伊勢大鹿首」^{〔八七〕}が聖武天皇の乳母を出す四氏のうちの一つであった^{〔八八〕}ことを考え合わせると、伊勢の地に少なくとも二百年もの長きにわたる舒明一族との親密な関係を保ち続けた有力氏族大鹿氏の存在は、天武朝における斎王制度の創始などを考える上でもきわめて重要な位置を占めたに違いなかった。

藺田氏は、当時の皇室が蘇我系と敏達直系の非蘇我系とに二極分化の様相を呈したのは、蘇我氏による露骨な外戚化政策に対して危機感を持った皇室側の自己防衛策の所産と位置づける。蘇我氏と血縁関係をもたない彦人大兄―舒明皇統による純血性保持の意識が「蘇我氏の外戚支配を排除し、舒明の即位を経て、大化の改新を導き出し」^{〔八九〕}、さらには天皇神格化や天武朝の皇親政治へと継承されたという重要な指摘をおこなっている。后妃の資養やその子女の養育には生家がかかわる^{〔九〇〕}という前提に立てば、大鹿氏の娘菟名子の場合も夫人ゆえ皇后（息長氏の廣姫）と同列ではないが、糠手姫皇女や田村皇子（舒明）らの経済基盤獲得・拡大強化に対する後方支援の意味からも、外戚大鹿氏が伊勢国内で新たな経済的基盤獲得のために、在地首長層竹首一族や麻績君一族らの協力を得て、力を注ぐのは当然ではないか。しかも、彦人大兄皇子の居所の在った桜井市押坂の地は、舒明陵もある彦人大兄―舒明一族の本拠地であるばかりでなく、大和南部から宇陀地方を経て、高見峠越え多氣川ルートで斎宮、的形・伊勢湾に直結する重要な古道の入口にもあたっていたのである^{〔九一〕}。（藺田氏は、そこにはかつて允恭

の後妃忍坂大中姫命が居住し、その名代である押坂部の置かれたところだともしたが、允恭紀の記述を批判した山尾幸久氏の説もある(九二)。

伊勢神宮起源伝承を後の『皇大神宮儀式帳』(九三)でみると、倭姫が多気の佐々牟邇宮に至ったときに竹首吉比古が自らの国名を「百張蘇我の国。五百枝刺竹田の国」と答える件がある。この「蘇我の国」とは、あるいは多気郡内にはかつて蘇我氏が政治的・経済的関係を築いていた事の反映と想定することは無意味であろうか(九三)。

その是非とは別に、蘇我氏滅亡に前後して、敏達直系の彦人大兄―舒明―中大兄・大海人皇子らの皇統は、重要な伊勢湾西岸の港津に近い多気川流域に政治的・経済的基盤を構築して東国方面ルートへの掌握と安定化をはかる必要性があった。それは恐らく、舒明朝前後の頃から徐々に進行し、中大兄皇子(天智)らの時代に確定した土地を天武が引き継いだと推測する。尼子娘の故郷胸形の宮地嶽古墳と共に、金銅装頭椎大刀を埋葬した多気川右岸の坂本一号墳の存在は、舒明一族による当地への政治・経済的進出を裏付ける宗教的象徴とも読み取れる。そういう政治情勢下で、菟名子の貢納以来、敏達直系の皇統(舒明一族)との関係を保持し得た伊勢大鹿氏一族(九四)の現地で働きを想定することは決して不自然ではなく、母方の外戚氏族であればこそ可能な政治・経済的活動だったのではないだろうか。先にも触れたように、聖武の大仏建立に際し大鹿氏が称揚されたのは単に乳母を出したと言うに止まらない、舒明一族との長期にわたる政治的関係を物語るのである。

山中章氏の言われた亀山・鈴鹿方面の古墳に特徴的な遺物が多気川流域の山添二号墳や河田A・三号墳に副葬されるに至った背景には、ヤマトにおける舒明一族の皇位継承をめぐる政局の動きに伊勢国内で呼応した大鹿氏一族らの動向、(あるいは婚姻関係を含む)地元有力氏族との連携による、特に多気川流域の農耕地開発の動きがあり、その結果が反映されたものではないか、と推測する所以である。

以上、伊勢斎宮が多気川右岸の絶妙の位置に置かれた背景には、少なくとも天武二年に高市大寺(大安寺)へ八十町もの土地を寄進し得るだけの舒明一族の政治的・経済的な基盤がそこにはすでにあったからである。伊勢斎宮とはそういう場所に設置されたものにほかならない。

(四) まとめ

以上、①から④まで四項目にわたり卑見として述べたところをまとめておきたい。

① 多気川(祓川・櫛田川)と宮川とによってその東西を区切られた広義の明野が原洪積台地の上こそは、南勢地域において唯一の洪水被害の心配がなく安心して定住できる土地であった。

② 併せて、伊勢神宮祭祀に先立つ恒例の禊のために、どうしても適切な河川を近くに臨む場所(河のほとり)でなければならなかった。

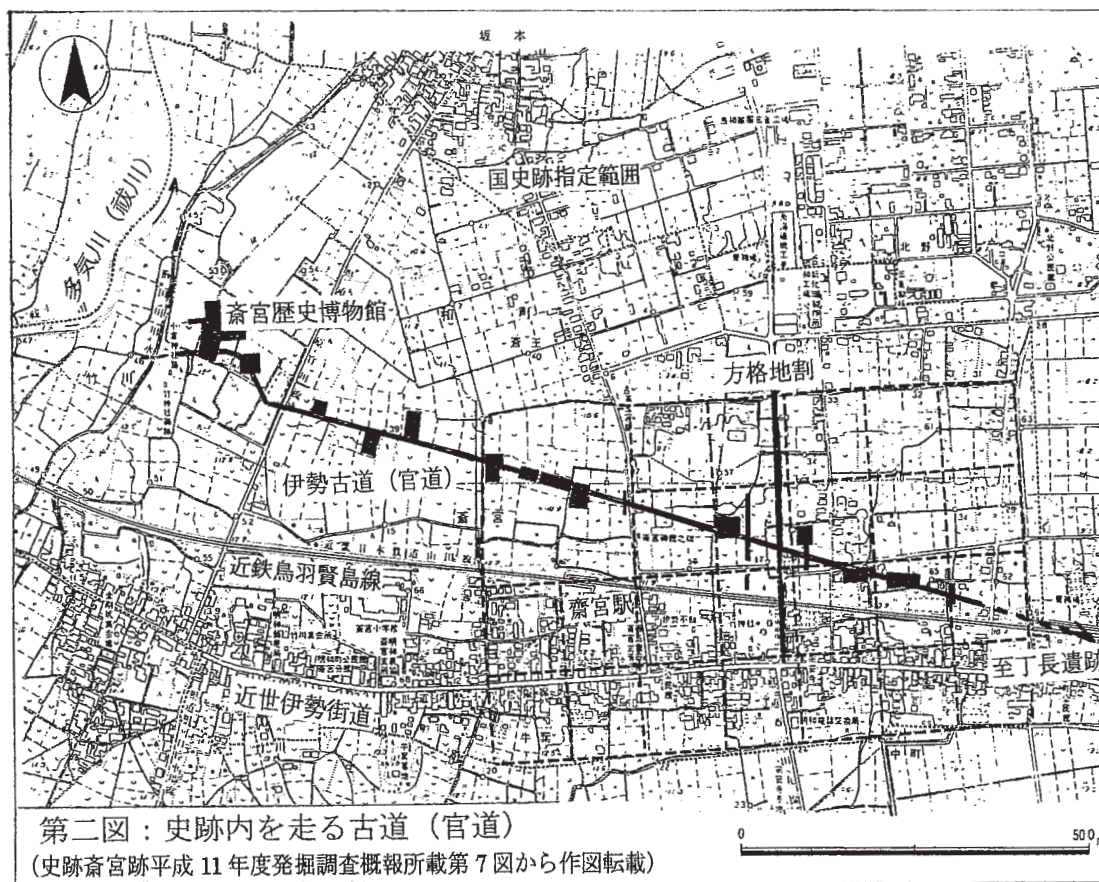
③ 同時に、斎宮寮による伊勢斎宮の経営にはさまざまな物資などを寮庫に運び込むに至便な、都との血脈である官道と同時に発達した外港とそれを結ぶ水運とが必要不可欠であった。すなわち、水陸交通の要衝でもあることが要請された。

	竪穴住居	掘立柱建物	柵列(塀)	井戸	溝(含側溝)	道路	土坑
弥生時代	7	0	0	0	5	0	29
古墳時代	1	0	0	0	0	0	5
飛鳥時代	27	8	3	0	1	0	11
奈良時代	335	368	25	17	172	11	738
平安時代	8	1568	78	78	234	5	1584
鎌倉時代	0	2	9	56	32	5	271
飛鳥～ 鎌倉時代 (小計)	370	1946	115	151	439	21	2604
室町以降	0	19	0	22	45	0	143
時期不明	2	102	12	16	112	5	444
合 計	380	2067	127	189	601	26	3225

表五：斎宮跡の時代別遺構件数

— 平成21年度166次調査まで —

※ 弥生～古墳時代の伊勢斎宮の施設に相応する官衙的遺構は一切検出されていない。
 ※ 平成18年度第150次調査までのデータベースに基づき筆者の責任で追加作成した。



これらの条件をすべて満たす場所としては、伊勢神郡の西の境界にあたる多気川右岸の台地上か、あるいは離宮院跡のある宮川左岸の台地上において他にはなかった。

一方、多気川流域には舒明皇統（天智・天武）に直結する土地が早くから拓かれたという事実があった。それはヤマト王権内部の、蘇我氏による露骨な外戚化政策をめぐる政争を背景としていたであろうと推測した。同時にそのことは、舒明一族の本拠地でもある押坂・宇陀から高見峠越えの多気川ルートで直行できる伊勢湾岸の港津（的形津・大淀津など）のもつ政治・経済的価値を抜きにしては語れない問題でもあった。すなわち、

④ 伊勢斎宮が多気川右岸域に設置されたのは、天武二年段階で高市大寺へ八十町もの土地を寄進しうるだけの、政治的・経済的基盤がそこには既に形成されていたからにほかならない。その際、坂本一号墳の被葬者が、早く尼子姫を介して天武（大海人皇子）との政治的関係を強化していた胸形君徳善と同種の金銅装頭椎大刀を副葬していた事実は、即位後間もない天武天皇が当初から多気川下流域に広大な土地を勢力下に収めるに至っていた、まさにその政治的経緯と決して無関係ではなかったのである。

そしてその事は、すでに半世紀近くにも及ぶ斎宮跡の発掘調査において、七世紀後半を遡る伊勢斎宮関連の遺構が皆無である（五）という事実と見事に符合する（表五参照）。過去の発掘調査は祓川右岸の河岸段丘、近鉄線路敷地内、第四種住宅地などを除く史跡内の全地区に最低でもトレンチ調査は実施してきており、地区ごとに地下の遺構状況は概ね把握されている。調査可能な所で発掘調査の鍬が入っていない地区はほとんどないと言ってよい。従って「検出されない」という事実は暫定的ではあれど結論にも近く、今後ともそれより古い時期の伊勢斎宮の遺構はまず出ないことを意味する。これはきわめて重要な、厳然たる科学的根拠と認識すべきであろう。

加えてそこが神郡の玄関口であったことも重要である。伊勢国衙は遠く鈴鹿にあり、国衙―郡衙を通じた神郡内雑務の遂行には種々の困難も予想されたに違いない。多く国・郡司らの怠慢事情等（五）もあれば、神事に名を借りた禰宜層・神郡司・百姓らの反律令的行為や利害の対立など、さまざまな軋轢や抗争も起こりえた。結果論かも知れないが、多気川右岸という神郡の境界（出入口）に令外の官とはいえ時の公的機関を置くこと自体に、寮―神郡司を通して神郡内を行政的に監督する機能も当初は期待されたのではないかと推測するものである。

【註】

- (一) …新訂増補国史大系『続日本紀』（吉川弘文館、一九七二年）前篇、卷一、三頁。以後は『続紀』と略称する。
- (二) …井上辰雄「太陽祭祀と古代氏族」（松前健・白川静ほか編『古代日本人の信仰と祭祀』大和書房、一九九七年）、二二―三四頁。
- (三) …三村幹弘「伊勢斎宮の立地に関する考察―「神島」古代祭祀との関連を中心に―」（筑波大学芸術研究報二二・別冊、二〇〇二年三月）、一―六〇頁。

- (四) …故・金子裕之氏は神島神宝調査報告の中で、この神宝の性格につき「近年は過大評価の傾向が目立つ」と戒めていかれた。同氏「三重県鳥羽八代神社の神宝」(独立行政法人文化財研究所・奈良文化財研究所編『奈良文化財研究所紀要』、二〇〇四年、六六～六七頁、二〇〇五年、二四～二五頁)。
- (五) …林一馬「齋宮の成立時期とその位置について」『伊勢神宮・大嘗宮建築史論』、中央公論美術出版、二〇〇一年、三五五～三六九頁。
- (六) …山口昌男著『天皇制の文化人類学』、立風書房、一九九〇年、および同氏著『文化と両義性』、岩波書店、二〇〇〇年。
- (七) …折口信夫「最古日本の女性生活の根柢」『折口信夫全集』第二卷(中央公論社、一九六五年)、一四七頁。
- (八) …洞富雄「原始齋宮から皇后へ」『天皇不親政の起源』(校倉書房、一九七九年)、七六頁。
- (九) …山尾幸久「初期ヤマト政権の史的性質」『日本古代王権形成史論』(岩波書店、一九八三年)、一〇〇頁。
- (一〇) …西郷信綱著『古事記の世界』(岩波書店、一九八二年第十六刷)、「齋宮制の意味」三七～三九頁。本書を久志本鉄也氏に教わった。記して謝意を表する。
- (一一) …宮田登著『生き神信仰』(塙書房、一九七〇年初版、二〇〇三年オンデマンド版)、四六～四九頁。
- (一二) …直木孝次郎著『伊勢神宮と古代の神々』(吉川弘文館、二〇〇九年)、七一～八五頁。氏の新見解は溝口睦子氏の『王権神話の二元構造』(吉川弘文館、二〇〇〇年)を踏まえたものだが、流謫にも近い形で中央から遠く伊勢に遷された天照大神がなぜかくも永きにわたり存続したかの説明はない。
- (一三) …宮田登氏前掲書『生き神信仰』第二章「天皇信仰の構造」、四二～五二頁。
- (一四) …中村哲「齋宮考」『文学』四六号(岩波、一九七八年一月)、二七頁。創建以来不変か否かは知らないが、伊勢神宮正殿は参拝者が北面する形に建つ(福山敏男著『伊勢神宮の建築と歴史』、日本資料刊行会、一九七六年所収巻末附図第三・第四、第八・第九参照)。齋宮跡では今の所、「齋王が東面する」べき性格の建物はない。因みに、東面して行う祭祀は古代中国にもあり日本固有の思想か否かは不詳。中国の皇帝は春を東郊に祀る。また顧炎武は「東向坐」に「古人之坐、以東為尊。故宗廟之祭。太祖之位東向。即交際之禮。亦賓東向。而主人西向。(略)」という(初刻『日知錄』歳在辛丑狩野君山先生弟子景印北京図書館蔵本、巻之六・第十二葉左。黄汝成集釋『日知錄集釋』、上海掃葉山房發行、民国十三年・一九二四年石印、卷二十八・第三葉左、に拠る)。
- (一五) …岡田精司「伊勢神宮の起源―外宮と度会氏を中心に―」『古代王権の祭祀と神話』(塙書房、一九八四年)、三三六頁。現地に立てば判ることだが、高倉山古墳の石室はほぼ南西(乃至西南西)方向に向かって開いており、岡田氏の想像とは違う。西宮秀紀「伊勢神宮成立論」(『伊勢湾と古代の東海 古代王権と交流4』名著出版、一九九六年)、一二〇頁の注(一六)にも指摘がある。
- (一六) …国土地理院発行「土地条件図」(一・二五〇〇〇)、伊勢・松阪(昭和四四年三月)をもとに作図した。
- (一七) …離宮院の移転記録は、『神宮雜例集』所引の「延暦十六年丁丑八月三日官符」や『園太曆』所引の古記を基本とする。
- (一八) …『園太曆』巻六(統群書類従完成会、一九八五年)、九六～一〇六頁。延文二年十二月三日～九日の間の「月次祭官幣發遣下著離宮院事」。古記所引延暦十

六年八月廿一日付け神祇官符中に引用した件がある。

- (一九) …『群書類従』第一輯(続群書類従完成会、一九八三年)、巻第三「元明女天皇」(七四頁下段) 参照。以下『諸雜事記』と表記する。
- (二〇) …吉田晶「県造小論―伊勢神宮との関係を中心として―」(岸俊男教授退官記念会『日本政治社会史研究』上、塙書房、一九八四年所収)、八二頁。
- (二一) …前掲『群書類従』第一輯、巻第四、『神宮雜例集』第一、一四二頁に「神服機殿。在多氣郡流田郷服村。麻績機殿。在同郡井手郷。」とみえる。
- (二二) …角田文衛監修・(財) 古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』本編下(角川書店、一九九四年)、一五五頁「多氣川」の項。
- (二三) …斎宮歴史博物館編『斎王のおひさまと―斎宮をめぐる地域事情―』(二〇〇六年一〇月)、一五頁の掲載図版中段、右から六行目以下。『平安遺文』所収「二四二 伊勢太神宮司解案」(三五五〜三五八頁)。
- (二四) …末永雅雄著『増補日本上代の甲冑』本文篇、木耳社、一九八一年、五四〜五五頁。三重県史編纂室編『三重県史』資料編考古一、二〇〇五年、五〇二頁。
- (二五) …佐久米大塚古墳群の一つ丸山古墳の西側で実施した発掘調査では満潮時の湧水に難渋した(三重県埋文センター編『大見遺跡発掘調査報告』、二〇〇九年)。
- (二六) …改訂増補国史大系『交替式・弘仁式・延喜式』前篇(吉川弘文館、一九八三年)、巻五、斎宮、一一八頁。
- (二七) …『日本書紀』下(日本古典文学大系六八、岩波書店、一九七〇年)、二四一頁(「かわかみ」とルビ)。なお、例えば『全譯吾妻鏡』三(新人物往来社、一九七九年三刷、二四六頁)、建保二年六月五日条にも皇極紀当該条を引くが、「帝、河の上(ほとり)に幸し」と訳すべきであろう。
- (二八) …前掲『日本書紀』下、四三〇〜四三二頁(「かわかみ」とルビを付けているのは訂正されるべきであろう)。
- (二九) …中国では河上郡を河上とする例(漢書高帝紀二年一月)もあるが、通常、例えば左氏伝襄公九年二月「晉侯以公宴于河上」の河上は「黄河のほとり」と訓み(鎌田正著『春秋左氏伝』二、明治書院、一九九三年)、『論語』「子罕第九」の「子在川上曰、逝者如斯夫、不舎晝夜」(吉田賢抗著、明治書院、一九九四年、二〇八頁。『春秋繁露』巻十六「山川頌第七三」にも引く)や『史記』晋世家の「秦軍河上、將入王」(巻三九、一六六三頁)の「川上」等もみな同じ謂。北魏太武帝の太平眞君十二年正月丙戌朔「大會群臣於江上」(魏書卷四下)は、通常は京師で行う大会を「長江のほとり」で行ったとの意。大業十三年十一月(丙辰)、唐高祖は「移營舍於長樂宮瀦川上」(『大唐創業起居注』(上海古籍出版、一九八三年、巻二、三七頁)という。瀦川は隋唐長安城北東約十数kmで渭河に注ぐ関中八川の一つ。彼が營舍を移した長樂宮はその「ほとり」に在った。「かわかみ」では場所を上流域に限定するため実態に合わない。『日本書紀下』(岩波日本古典文学大系本)の「南淵河上」(皇極紀元年八月甲申朔)も「倉梯河上」(天武紀七年春)も「河のほとり」と訓むべきである。「河上」としたままの事例も時に見られるが、読者には解りづらいことである。
- (三〇) …前掲『日本書紀』下、四二二〜四二三頁。
- (三一) …公田連太郎訳注『管子』(国民文庫刊行会、一九二四年)、巻二、乗馬第五・經言五、四二頁。人類の経験上、中国のみに限定されない普遍性を持つ哲理。

- (三二) …新訂増補国史大系『類聚三代格』(吉川弘文館、一九八三年) 卷十九、禁制事、六〇〇頁。
- (三三) …坂本太郎「郡司の非律令的性質」(坂本太郎著作集第七卷『律令制度』、吉川弘文館、一九九一年第二刷)、二七六～二八六頁に拠った。
- (三四) …義江彰夫「国衙支配の展開」(岩波講座『日本歴史4(古代4)』、一九八〇年第二次発行所収)、四五～五〇頁参照。
- (三五) …前掲『交替式・弘仁式・延喜式』前篇、卷五、斎宮、一二七～一二八頁。
- (三六) …斎宮跡でも土師器焼成坑は数基検出例あり。斎宮跡の南東約一・五kmに在る北野遺跡は南北九二五m×東西五四〇mと広範囲で、『和名鈔』の「有貳郷」に属す。弥生から奈良時代に及ぶ住居群(竪穴住居二三七棟、掘立柱建物七四棟)と二五基(古墳時代・奈良時代)の土師器焼成坑を検出、当地域有数の土師器生産遺跡である(三重県埋文センター編『北野遺跡(第二・三・四次)発掘調査報告』、一九九五年、『北野遺跡(第五次)発掘調査概報』、一九九六年)。斎宮跡の東方約二kmにある水池土器製作遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物・粘土溜などを土器焼成坑が取り囲むように検出された。斎宮研究会編『斎王宮跡発掘』、一九七九年、および三重県編『三重県史』資料編・考古2、二〇〇八年参照。上記報告書の閲覧では田村陽一氏のお世話になった。記して深謝し上げる。
- (三七) …第四三―一次調査で「美濃」刻印陶器(高台付坏)が出土。また、破片も含め七千点を超す緑釉陶器は京都・猿投・東濃・近江産のほか一部は二川窯(豊橋)のものもあるという。斎宮歴史博物館編『斎宮跡発掘資料選』、一九八九年、一〇頁、同『発掘資料選』II、二〇一〇年、一〇～一一頁。
- (三八) …斎宮歴史博物館編『史跡斎宮跡平成二年度発掘調査概報』第三一図、同『史跡斎宮跡平成一四年度発掘調査概報』第四―I図など参照。
- (三九) …木下良「日本の古代駅路と世界の古代道―特にローマ道との比較を主にして―」(国学院大学日本文化研究所編『律令法とその周辺』、二〇〇四年)は発掘調査成果から幅員「九メートル」道路の存在を明記し、「概して古い時期のものほど道幅は広いようである」(一六〇頁)と述べる。
- (四〇) …三重県埋文センター編『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査IV・丁長遺跡(第一次)・大谷遺跡(第一・二次)発掘調査報告』、二〇〇九年、一三、一七～一八、二〇、三二～三六頁。
- (四一) …泉森皎「大和から伊勢湾への路」(上田正昭編『探訪古代の道』第二卷、法蔵館、一九八八年)、五四～八二頁。高橋克壽著『埴輪の世紀』、講談社、一九九六年。桑名市教育委員会編『高塚山古墳基礎調査報告書』、二〇〇六年、五九頁。高嶋弘志「神郡と古代交通路」(佐伯有清編『日本古代政治史論考』吉川弘文館、一九八三年)、九五～一〇六頁。
- (四二) …和田萃「伊勢と王権」(『東海の埴輪と宝塚古墳』松阪市教育委員会、二〇〇三年)、五四～五九頁。
- (四三) …直木孝次郎「大和と伊勢の古代交通路―高見峠越えについて―」(『大和文化研究』第九卷七号、一九六四年、一～一三頁。同氏著『飛鳥奈良時代の研究』、吉川弘文館、一九七五年に再録)。

- (四四) …秋本吉郎校注『風土記』（日本古典文学大系2、岩波書店、一九七二年）、四三五頁。
- (四五) …小島憲之ほか校注・訳『萬葉集』一（日本古典文学全集・小学館、一九八七年）、巻第一、九六頁・六一番歌。前掲『群書類従』正編第十五輯・和歌部、巻第二六一所収『躬恒集』、二六五頁「まとかた」。
- (四六) …前掲『日本書紀』下、三四七～三四九頁。
- (四七) …穂積裕昌「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」（『考古学に学ぶⅡ』、同志社大学考古学シリーズⅧ、二〇〇三年）、三三五頁、同氏「海洋地域の社会と祭祀」（季刊『考古学』第九六号、二〇〇六年）。
- (四八) …井上光貞著『日本古代の王権と祭祀』（東京大学出版会、一九八四年）、三七～五八頁。
- (四九) …茂在寅男著『古代日本の航海術』（小学館、一九九二年）、一二四頁。
- (五〇) …前掲『萬葉集』四、巻一五。天平八年二月任命遣新羅使らの歌参照。
- (五一) …穂積氏前掲論文「伊勢湾西岸域における古墳時代港津の成立」参照。
- (五二) …明和町教育委員会編『神前山一号墳発掘調査報告書』、一九七三年。澄田正一「伊勢湾沿岸の画文帯神獸鏡について―櫛田川流域の調査を中心にして―」（『近畿古文化論攷』吉川弘文館、一九六三年）、一八五～一九七頁。吉村利男「三重県内の古鏡出土に関する覚書（その一）」（『三重県史研究』第十六号、二〇〇一年）、一二六～一二七頁。川西宏幸著『同型鏡とワカタケル―古墳時代国家論の再構築―』、同成社、二〇〇四年、三六～五〇頁、ほか。
- (五三) …金子裕之氏前掲論文「三重県鳥羽八代神社の神宝」六六頁。穂積裕昌「海洋地域の社会と祭祀―海上交通と神島神宝をめぐる諸問題―」（季刊『考古学』第九六号、雄山閣所収）、八四頁。
- (五四) …『三重県史・資料編考古Ⅰ』（二〇〇五年）、第四章、五一四頁「坂本一号墳」（中野敦夫氏執筆）。
- (五五) …後藤守一「頭椎大刀について（二）」（『考古学雑誌』二六巻一二号、一九三六年所収）、七六一頁。岩原剛「副葬品の変質―東海地方における後期古墳の副葬品から―」（『東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会編『東海の後期古墳を考える』二〇〇一年所収）、四一一頁。
- (五六) …岩原剛「東海の飾大刀」（立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集Ⅱ』、二〇〇一年）、一八三頁。同氏「東海地域の装飾付大刀と後期古墳」（島根県教育庁古代文化センター・同埋蔵文化財センター編『装飾付大刀と後期古墳―出雲・上野・東海地域の比較研究―』、二〇〇五年）、四八頁。
- (五七) …須恵器の形式編年の一つ。田辺編年のTK二〇九は中村編年ではⅡ形式五段階に相当。絶対年代観には七世紀初頭から前半、と六世紀末～七世紀初頭、とがある。ほぼ推古朝に相当しよう。
- (五八) …山本武夫著『気候の語る日本の歴史』（そして、一九八二年）、一一二～一三〇頁。吉野正敏氏も「大化の改新から約百年間、七世紀前半から奈良時代初

頭までは寒冷だった」(四〇一〇世紀における気候変動と人間活動)『地学雑誌』一一八(六)号、二〇〇九年、一二三頁)という。

(五九) 福岡県教育委員会編『福岡県重要文化財解説 国宝篇』一九五二年、五四頁。

(六〇) 津屋崎町教育委員会編『津屋崎古墳群Ⅰ』(町文化財調査報告書第二〇集)二〇〇四年、五八〜七〇頁。

(六一) 前掲『日本書紀』下、四一〇〜四一一頁、天武天皇二年二月丁巳朔癸未条。

(六二) 木下正史著『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』(角川書店、二〇〇五年)、一八七頁、及び一九四頁。

(六三) 小野勝年著『中国隋唐長安・寺院史料集成』解説篇、法蔵館、二〇一一年、一四六頁。

(六四) 二〇〇七年一月一日、奈良女子大学での講演「斎宮はなぜここに置かれたのか」において述べた。その後、溝口睦子氏にも「東方への交通の要衝としての伊勢と朝鮮半島及び中国大陸へ向かう北の出入口沖ノ島はヤマト王権に重要視された」(『アマテラスの誕生―古代王権の源流を探る』、岩波書店、二〇〇九年、第四章、一四八頁)との見解が出ている。

(六五) 倉野憲司校注『古事記』(岩波書店日本古典文学大系一、一九七二年第十六刷)上巻、七六〜七九頁。小島憲之ほか校注・訳『日本書紀』一(小学館新編日本古典文学全集、一九九四年)、神代上、六四〜七三頁参照。直木孝次郎「天照大神と伊勢神宮の起源」(藤直幹編『古代社会と宗教』、若竹書房、一九五一年所収)、七頁。

(六六) 高嶋弘志氏前掲論文「神郡の成立とその歴史的意義」、一〇〇頁。

(六七) 前掲『日本書紀』下、欽明天皇即位前紀、六三頁。

(六八) 栄原永遠男「日本古代の遠距離交易について―八世紀を中心として―」(大阪歴史学会編『古代国家の形成と展開』吉川弘文館、一九七六年所収)。

(六九) 樋口隆康「画文帯神獸鏡と古墳文化」(『史林』四三巻五号、一九六〇年)。

(七〇) 三重県埋蔵文化財センター編、一般国道二三号線中勢道路(8工区)建設に伴う『六六A遺跡発掘調査報告』二〇〇二年、および同(13工区)建設に伴う『木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告』二〇一二年。津市大里窪田町字花村(志登茂川右岸)の六六A遺跡では甕、長胴甕、把手付鍋、甕、有孔鉢、平底鉢など多数の韓式系土器が出土し、特に甕は伽耶から百済地域に淵源を辿れるものが中心(四一六頁)であるという。津市(旧久居市)木造町の雲出川左岸に広がる低位段丘沖積低地に立地する木造赤坂遺跡では、e地区の古墳時代堅穴住居(五四〇・五九二など)から出土の韓式系土器は伽耶地域の影響が強く(第二分冊・二一六頁)、中でも堅穴住居内土抗(SK六五四)出土の陶質土器は四世紀後半から五世紀前半頃の伽耶地域に特徴的な遺物で、韓国慶尚南道陝川郡双冊面城山里玉田の玉田古墳群から類品の出土があると指摘されている(同八〇頁)。私見では、如上の遺物は難波方面から陸路で運ばれたというよりむしろ、海路で韓半島から直接伊勢湾岸の雲出川近郊の港津へと舶載されてきたもの、とするのが妥当な解釈であろう。

(七一) …岡田英弘著『日本史の誕生』弓立社、一九九四年、一〇〇～一〇八頁を参照。

(七二) …宮川左岸の台地縁辺部の場合、外港は宮川・外城田川河口にある有滝港の辺りに比定でき、在地有力者の存在は、伊勢市西豊浜町野依の丁塚古墳（五世紀末築造）などによって象徴される。皇学館大学考古学研究会編『伊勢市とその周辺の古墳文化』一九九二年、一〇五～一〇六頁、及び『伊勢市史』第六巻考古編、二〇一一年、一四一～一四四頁。

(七三) …前掲『群書類従』第二四輯・釋家部、巻第四三五所収、『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、三八九頁。

(七四) …前掲『日本書紀』下、四一四頁、天武二年十二月戊戌条。前掲『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』、三七八頁、『大安寺縁起』三九三～三九四頁。木下正史氏前掲書の第八章を参照。

(七五) …山中章「伊勢国北部における大安寺施入墾田地成立の背景」、『ふびと』第五四号、二〇〇二年）、及び同氏「伊勢国飯野郡中村野大安寺領と東寺大國庄」、『三重大史学』第二号、二〇〇二年所収）。

(七六) …中村編年のⅡ形式四段階に相当。六世紀後半～七世紀初頭とするか、六世紀中葉～後半とするかは研究者にもよる。ほぼ欽明朝から推古朝にわたる時期に相当と判断。

(七七) …松阪市教育委員会編『山添二号墳発掘調査報告』、一九九八年。報告者は、掘り環頭金具などの副葬品から王権との深い繋がりを想定している（十四頁）。

(七八) …多気町教育委員会編『河田古墳群発掘調査報告Ⅰ』、一九七四年。A一三号（三二二号）墳は並行する二基の主体部からなる木棺直葬の古墳。北側の第二主体部はほぼ最頂部に位置し、大小二基の木棺痕跡があった。大きい方の木棺跡から刃部長八二・五cmの直刀も一本出土。『三重県史』資料編考古一（二〇〇五年）、五〇八～五二一頁、下村登良男氏執筆「河田古墳群」参照。

(七九) …前掲『三重大史学』第二号所収、山中氏論文…九頁「中村野周辺の歴史環境」。

(八〇) …前掲『三重大史学』第二号所収、山中氏論文…九頁「飯野郡中村野周辺と王権」。

(八一) …聖武の乳母の一人を出したという大鹿氏の本拠地は、式内社大鹿三宅神社のある鈴鹿市説と、相鹿上神社のある多気町説とがある。共に祭神は大鹿首の祖天児屋（根）命。吉田東伍は「大鹿は相可と相異なり、河曲郡に属す、相可と混ぜべからず」（大日本地名辞書、上方・第二巻、八四五頁）とした。

(八二) …藺田香融「皇祖大兄御名入部について―大化前代における皇室私有民の存在形態―」（『日本書紀研究』第三冊、塙書房、一九六八年所収、一六九～二〇九頁）。

(八三) …前掲『日本書紀』下、一三九頁、敏達天皇四年正月条。

(八四) …前掲『日本書紀』下、三八三頁、天武即位前紀。渡瀬昌忠「島の宮（上・中・下）―人麻呂文学の基点―」（『文学』三九巻、岩波書店、一九七一年九月号、

一〇月号、一二月号。

(八五) 上井久義「伊勢神宮の成立」『史泉』第四一号、関西大学史学会、一九七〇年、二六頁。

(八六) 新訂増補国史大系『続日本紀』前篇(吉川弘文館、一九七二年)、天平勝宝元年四月甲午朔条(一九七二〇〇頁)。

(八七) 林陸朗校註訓訳『完訳注釈続日本紀』第三分冊(現代思潮社、一九八八年第二刷)、注釈・一〇頁下段〜一一頁上段。渡里恒信「聖武天皇の乳母について」(季刊『ぐんしよ』再刊第二四号、通巻六一号、群書類従完成会、一九九四年所収)、一三〜一六頁。

(八八) 藺田香融氏前掲論文、一七八〜一八四頁(三「彦人皇子略伝」(1) 政治的境遇)。

(八九) 藺田香融氏前掲論文、一九一頁。

(九〇) 倭姫巡幸譚が「宇太乃阿貴宮」から始まるのも斎王による伊勢神宮祭祀の創成が舒明一族と深く関わる事を暗示する。伊賀・淡海・飛驒を経て伊勢へと至る巡幸路の設定も壬申の乱を踏まえて初めて出る着想である。また、『延喜大神宮式』に宇陀郡に二町の神田を割当てているのも伊勢神宮、伊勢斎宮と舒明一族との原初的な関わり的一端を裏付けはしないかと推測している。「倭姫」による天照大神の神宮創成譚は文字どおり天智皇后「倭姫」による何らかの事績に基づき、暗に仮託して創作された物語(神話)だったのではないかと、と最近私は私に思うようになった。

(九一) 山尾幸久氏前掲書『日本古代王権形成史論』Ⅱ編三章一節、一五八頁。

(九二) 前掲『群書類従』第一輯神祇部、巻第一「皇大神宮儀式帳」、三頁上段。

(九三) 「蘇我の国、竹田の国」と聞けば、用明紀二年七月条に物部(守屋大連)氏討滅軍に参加した蘇我馬子と竹田皇子をつい想像してしまう。

(九四) 宝龜七年正月の叙位記事にある大鹿臣子虫がその後裔ならば、敏達紀四年以来伊勢地方で少なくとも二百年間は存続した豪族である。拙稿「聖武天皇の伊勢行幸と関宮について」(坂本信幸編『聖武天皇の時代』高岡市万葉歴史館、二〇一三年所収)四五〜四六頁。

(九五) 表五は毎年の発掘調査結果に基づく主な検出遺構のデータを時代別に集計したものである。主要な遺構は全体の約八割から九割以上に達する範囲で飛鳥〜鎌倉時代(斎王制度存続期間内)に集中している。

(九六) その事を示す史料は多く、『続日本紀』では、天平七年閏十一月壬寅、同九年九月癸巳、同十六年九月丙戌、同十九年十一月己卯、天平勝寶四年十一月己酉、同六年九月丁未、天平寶字元年十月乙卯、同五年三月丙戌朔、同五年八月癸丑朔、同七年九月庚子朔、天平神護二年九月戊午、寶龜四年八月庚午、同十年八月庚申、延暦四年七月丁巳、同五年四月庚午条、等々を参照。

第二章 伊勢河口頓宮考

(一) はじめに

天平十二(七四〇)年八月に、時政の得失を災異説を以って指摘し、玄昉と下道真備を除くべしと訴え出ていた大宰少貳の藤原広嗣が、九月に入って遂に挙兵した^①。その広嗣の反乱^②がまだ終息を見ぬ十月廿九日、聖武天皇は「朕おもふ所あるによりて」「やむ事あたはず」と、関東行幸に出立した。陪従の右大臣橘諸兄をはじめとする総勢でほぼ五百人に近い文武官人・騎兵らを伴う行幸であった^③。扈従した大伴家持が伊勢河口の行宮で詠んだ歌(一〇二九)の題詞に「藤原朝臣廣嗣の謀反けむとして発軍するに依りて、伊勢国に幸す時に」^④とあるのが災いして、従来からこの行幸の頭には必ずと言ってよいほど「広嗣の乱を避けて」という安直な決まり文句がくりかえし冠されて来た。決してそうではなく、それが周到に準備された行幸であったことは十五年前の旧稿にも^⑤、またその後に発掘調査で判明した「禾津頓宮」跡の建物の規模などを紹介しつつ、再度稿を改めて再説^⑥したところである。

ここにいる河口(川口とも)頓宮は、この時の聖武の行宮をいうばかりではない。斎内親王一行が都から伊勢斎宮へと下向する時の往路および解任後に帰京するときの復路にもあたり^⑦、利用することになっていた伊勢国側の行在所の一つを指している。しかし、その頓宮跡の発見は遅れていて、未だ発掘調査による確認さえも実施されてはいない。もともと、聖武天皇がその行幸に際して十日間滞在した「河口頓宮」は一名を「関宮」とも称されたが、江戸時代以来、有識者がその所在地(候補地)をあれこれ詮索してきたところではある。本稿は、その両者の河口頓宮が同一場所に在ったこと、そして従来からある河口関や関宮跡の候補地はまったくの間違いである理由も述べて、本来あるべき「河口頓宮(行宮)」の所在地を明らかにせんとするものである。核心部分にあたる基本的な考えはすでに右掲両度の拙稿に余すことなく述べてはいるが、ここに改めて内容を増補して再説し直すことをお断りしておきたい。

ところで河口頓宮を「関宮」とも称したのは、当地に「川口関」が置かれており、恐らくはその関から遠くない近接した地点に頓宮が置かれたからであろう。平城宮出土木簡(第十三次調査SK820出土)の中に「川口関務所本土返□人夫事」(年代不詳)があり^⑧、直木孝次郎氏はこの木簡の内容を疏解して(略)。伊勢あるいは伊勢以東の国から徵発された人夫が、川口関を通って故郷へ帰っていったのである。この関を通る道が実際に利用されていたことがわかる。^⑨とした。古くは「催馬楽」にも「川口の関の荒垣」との句^⑩がみえるが、近くは当地を通るJR名松線の駅名「関ノ宮」としてその名残りを今にとどめている。聖武天皇が十日間ものあいだ滞在した稀有な行宮である当該遺跡の重要性に鑑み、一層の適切な保護とその考古学的解明とを念願して、最も蓋然性の高い候補地を提示せんとする所以である。

(二) 河口頓宮を経由した斎王

では、前掲（註七）田中君於氏の研究成果に従い、群行（往路）・帰京（復路）に際しこの河口頼宮を経由したはずの斎内親王はどれぐらいおられたのかを次に一瞥しておこう。田中氏は大きく（A）大和↓伊賀↓伊勢（奈良朝）、（B）山城↓大和↓伊賀↓伊勢（平安朝）、（C）山城↓近江↓伊勢（平安朝）、の三通りの経路を確認している^{二二〇}。伊賀から伊勢への具体的な経路については今回は敢えて問題にはしない。重要なのは「伊勢河口」を経由するのは（A）および（B）であり、（C）になると「伊勢河口」は群行路からは外れるということである。もう少し具体的にみておこう。参照する歴代の「斎王表」は便宜的に甲田利雄氏作成^{二二一}のものを使用させて戴くが、大来皇女から祥子内親王までを対象とすることをお断りしておく。

経路（A）で群行…大来皇女から朝原内親王まで。十一名^{二二二}。

経路（A）で帰京…大来皇女から酒人内親王まで^{二二三}。十名（朝原は経路Bで帰京）。

朝原内親王は延暦四（七八五）年九月己亥に大和（平城京）から群行したが、帰京時の延暦十五（七九六）年には遷都後の平安京へ戻ったと考えられる。なぜなら、同二月乙亥条には「斎内親王欲帰京、造頼宮於大和国（斎内親王京に帰らんと欲す。頼宮を大和国に造る）。」^{二二四}とあるからである。大和国に頼宮を造ったのはこの場合そこを経由して新京へ帰ったことを意味している。よって、朝原内親王は帰京時には経路（B）によったことが判る。

経路（B）で群行…布勢内親王から識子内親王まで。九名（掲子は野宮で退下したので群行には及ばず）。

経路（B）で帰京…朝原内親王から識子内親王まで。十名。

この間、大原内親王の帰京時から退出（退下）の理由には関係なく、途路に摂津国を経由して難波津での禊が慣例化したという^{二二五}。いずれにしても、この識子内親王までの斎内親王は（A）・（B）ともに伊勢河口頼宮を経由して群行および帰京したことは間違いないだろう。延べにして四十名（浄庭女王を入れると四十二名）もの斎内親王がその途次に河口頼宮を利用、經由されたことになる。

そして、「繁子^{二二六}内親王以後、群行道については（C）に変更され、入京道も斎王の退出理由により区別されるように」^{二二七}なったという。『延喜式』卷五斎宮式の頼宮条に「凡頼宮者。近江国国府。甲賀。垂水。伊勢国鈴鹿。壹志。総五所。並国司依例营造。（略）」^{二二八}とし、少なくとも群行時における伊勢河口頼宮の役割は不要になった。従ってこの規定は、「新道が開かれた仁和二（八八六）年段階のものが式に定着したもの」^{二二九}だという。また、同じく遣使奉迎条には「凡斎王還京者。若有遭故還者。不用初入之道（若シ故ニ遭フコト有リテ還ルトキハ。初入ノ道ヲ用イザレ）。」^{二三〇}とあり、「故ニ遭フ」とは同じく斎王相代条の「（略）若遭国哀及親喪者。遣中臣一人告其状。不奉幣帛（若シ国哀及び親ノ喪ニ遭ハバ。中臣一人ヲ遣ハシテ其ノ状ヲ告ゲシメ。幣帛ヲ奉ラザレ）。」^{二三一}とあるように、「天皇の崩御や親の喪」を指している。つま

り、凶事により解任（退下）され帰京する時は初入（群行）時の道は通らず、旧道（B）を用いよとしたのであった（cmap）。

経路（C）で群行…繁子内親王ほか。三十三名。

経路（C）で帰京…慶事帰京は元子女王ほか十三名（川口經由で帰京した好子^{三〇}を除き十二名となる）

経路（B）で帰京…凶事帰京は繁子内親王ほか二十名（好子を入れて二十一名。このうちには病・薨去など四名も一応含めた）

九世紀以降の斎内親王としては、輔子内親王はじめ群行に至らなかった九名を加えると総数では四十二名の名が知られるが、実際には三十名の斎内親王が経路（C）をとって伊勢に群行したのである。そのうち二十一名が旧道（B）で帰京したことになる。先に（A）および（B）の経路で河口頓宮を経由した仁和二年以前の斎王は（浄庭女王を含め）延べ四十二名あった。両方を合せると、実に延べ六十三名もの「斎王および前斎王」が当地を通ったことになる。しかしその都度、設営地を占定していたとは考え難く、畢竟、所与の地理的条件から限定されよう。予め専用地がその用途に定められ、普段から国郡衙の管轄下に在ってその土地を繰り返し利用したと考えるのが自然であろう。

（三）「関宮」跡をめぐる旧説（江戸・明治期）

次に、斎内親王の河口頓宮や河口関および聖武の関宮（頓宮）跡の推定地をめぐる主な旧來說を点検したい。以下にみる旧來說（ア・カ）に共通する難点は「河口関」の「河口」をどう認識しているかという極めて初歩的な次元の問題にあった。その意味からも外せないのが谷川士清著『日本書紀通証』^{三二}なので、それを先に紹介しておきたい。勿論、関や頓宮跡を考証したものではないが、仁徳天皇紀四十年にみえる「廬杵河」への注釈にすでに本稿にとっても重要な記述がある。いわく、「雄略紀作廬城河。疑即今所謂家城河、属一志郡。（略）河有勝景、名湍門渚、與河口関隣比。○続日本聖武紀曰、到伊勢国一志郡河口頓宮、謂之関宮也。河口蓋廬杵河之河口也。今有河口村、属邑有御城、馬場、的場、算所、御衣田等名（雄略紀ニ廬城河ニ作ル。疑フラクハ即チ今、謂フ所ノ家城河ニシテ、一志郡ニ属セリ。（略）河ニ勝景ノ有リテ、湍門渚（せとがふち）^{三三}ト名ヅク、河口ノ関ト隣比スルナリ。○続日本聖武紀ニ曰ク、伊勢ノ国ハ一志郡ノ河口ノ頓宮ニ到ル、之ヲ関ノ宮ト謂フ也。河口トハ蓋シ廬杵河ノ河ノロナリ。今、河口村有リテ、属邑ニハ御城、馬場、的場、算所、御衣田等ノ名有リ。」と。

平凡社刊『三重県の地名』^{三四}の巻末に所収の「行政区画変遷・石高一覧」で一志郡（二〇〇〇～一〇〇三頁）を見ると、「元禄郷帳」（一七〇〇年）ではまだ右記「御城」以下の十七ヶ村が分立していたが、「天保郷帳（一八三四年）」ではすでにそれらが合併して「川口村」になっている。郷帳は年毎に異動を記して代官所が進達したものだが、谷川氏の『通証』（一七四八年）段階にはすでに「河口村」とあれば、十七ヶ村の合併は一七〇〇年以降一七四八年までの間に行われた事が判明する^{三五}。従って、それより以前に「川口村」という行政単位としての名称はなかったことを知るべきである。合併前の十七ヶ村分立時代にも河口村の名称はなく、上流に「瀬戸ヶ渚」を望む廬杵河（家城川。現・

雲出川)の口にあたる兩岸地域一帯(旧算所村か)の通称が「河口」であった。家城方面から東流してきた廬杵河(雲出川)は当地(河口)の手前から大きく湾曲して北方向へ流れを変え、大角付近で東へL字状に屈折する流路を取る。同時にその屈折地点で支流の山田野川と垣内川とが合流する。それゆえ今も「双川」の通称がある。少なくとも聖武天皇の時代にはこの間の兩岸(河口の渡河点)に近接した「川のほとり」のどこかに有名な「河口関」(位置未詳)が置かれており、東国との往来には伊勢の「河口」と言えば直ちに通じたのである。

(ア) まず宝暦十三(一七六三)年成立の藤堂元甫著『三国地誌』²⁶⁾から見て行こう。

◎「河口行宮」については、『朝野群載』と『江家次第』とを引いたあと、小野村にあった民間伝承²⁷⁾を紹介している。この「行宮」は斎内親王の河口頓宮のことで、「聖武の頓宮」(左掲)とは別にしてまとめられている。

◎「河口関宮」として、『続日本紀』や『催馬楽』『源氏物語』などを引用した上で、まず「関」の所在地について「按、河口御城村に遺址あり、今切通しと云。古へ大和に帝都ありし時、(略)阿保を経て当国に移り、此関所を通ると云。往昔河口より関所への通路は、王住より御城村に出て、山にかゝり、一町許登り、関を越えて市場村へ下り、・・・」²⁸⁾と述べる。「往昔河口より関所への通路は」と記すことで、いみじくも氏の言う「河口ノ関所」を「河口」以外の場所に比定せんとする矛盾を露呈している。十七ヶ村合併後の広い川口村内に奈良時代の「河口」関跡を求めた点がそもそも致命的欠陥であった。後述する大西源一氏はこの誤謬を継承してしまったのである。

◎次いで、「関宮の旧地は、御城より乾六町許にあり、隠田或は王住と云。今算所村と云。御城算所は河口十六郷の内なり。西北に瀬戸川流る、前に堀の跡あり、関所の辺より茲に至て築地ありと云。」(同上)と記す。聖武関宮の伝承地を御城の北西約六百数十メートル先にある王住に在ると伝えている。「王住」は「オオスミ」で現在は「大角」と書く。河がL字状に屈折して大きな角(隅)を呈するからでもあるが、当地には「八幡神社」(後述)があったことに由来すると思う。聖武の行宮を平地に在ったものとして記録にとどめていることが重要である。かつて天皇が長期間滞在したという漠然とした伝承が長く地元で語り継がれたことを物語る。瀬戸川は『通証』にも言う「瀬戸ヶ渚」に因む俗称で、廬杵河(雲出川)のことである。堀の跡や築地が遺っていたというのも重要で、将来の発掘調査に備えて無視できない情報である。後に明らかにする「宮ノ東」地区には「大堀」があったとの証言を旧地主からも得ている²⁹⁾。

(イ) 次に、安岡親毅著『勢陽五鈴遺響』³⁰⁾を見てみよう。

◎「川口関址」には、「的場村ノ南ニ旧址アリ往昔関隘ノ所置ナリ是大和州ノ帝都ヨリ伊勢行幸或ハ斎宮群行ノ旧途ナリ」(二二二頁)と述べ、前掲『三国地誌』にいう「御城村の切通し」とは少し異なる地点(的場村ノ南)に「河口関址」を求めているが、これも論外である。

◎「聖武天皇行宮趾」として、『続日本紀』の聖武行幸記事を引いた上で、「凡テ此街道ハ、光孝天皇仁和年中ノ前ハ、大倭ノ京ヨリ伊賀州名

張郡ヲ歴テ本州ニ至リ、本郡波多宮古一志ノ駅、飯高郡石津清水、多氣郡齋宮及小俣ニ至ル、大神ニ奉幣使齋宮群行等ノ駅路ナリ。又河口皇居ノ地ハ、河口ノ内王住ト云地アリ（略）即皇居ナルコト明ナリ（句読点田阪）（一一三頁）とする。前節にみた仁和二年繁子内親王の時の道路変更を踏まえている。天皇の行宮を「河口皇居ノ地」とし、それを「王住」に求めたのは前掲（ア）と同じである。

以上、（ア）、（イ）が述べる「河口関」の候補地は、御城の「切通し」といい「的場南の旧址」というも、『通証』のいう「河口」からは離れるばかりの山手で勿論「河口」ではない。河に近接した河口地内にあつてこそ「河口関」である。それが御城村の切通しや的場村の南に在れば河口の関ではないし、渡河点での物資や人間のチェック機能も到底望めない。恐らくは、中世に発達していた「関所」^{三三}の記憶から狭隘な「切通し」や「的場村の南」との伝承も生まれたのだが、そこを古代の「河口」とすることは到底できない話である。また、「王住」なる地名は前述のとおり川口八幡神社祭神との関連で考慮すべきである。一方、（ア）で採り上げられた「齋内親王の頼宮」は、既述のとおり延べ六十三名もの齋内親王の経由が数えられるにも拘わらず、（イ）では姿を消し、以後その傾向（齋内親王の頼宮跡は軽く扱われる傾向）が現代にまで続く。近代に入つて改めてこの「河口関」および「聖武の頼宮」問題に言及したのは、『伊勢名勝誌』^{三三}であつた。

（ウ）今度はその宮内黙藏著『伊勢名勝誌』をみてみよう。

◎「行宮址」として、「聖武天皇行宮址、一名河口頼宮址。川口村字大角旧字王住ニ在リ。一説ニ本村字医王寺亦頼宮ノ址トナス（略）」（一七六頁）

と述べ、聖武の河口頼宮が大角（王住）に在つたとするのは従前と同じだが、明治に入り表記が「大角」に変化した。旧的場村の医王寺のある山上をそれに比定する別の一説を加えた点が従来とは異なる。これが大西説をはじめ後々にまで尾を引くことになった。

◎「関址」に関しては、「河口関址又名久岐田ノ関、川口村字医王寺ニ与五郎坂ト称スル地アリ今、里道ニ属ス蓋シ此辺ナラン。伝ヘ云フ和銅

三年初メテ此関ヲ置ク、大和ノ帝都ヨリ伊勢行幸或ハ齋宮群行ノ旧途ナリト五鈴遺響、伊勢名所拾遺集」（二〇〇頁）としている。

彼もまた前二者と同様に、聖武天皇の時代（八世紀）に在つた河口関をはるか後代（十八世紀）の川口村の範疇で考えてしまつた点で致命的な誤謬は避けられなかった。ここにいる「与五郎坂」とは御城と的場との境にある『三国地誌』にいう「切通し」のことである。また、医王寺のある山頂はかつて北畠氏の砦^{三三}が在つた場所、より近接した中世の確かな伝承地の上に、遙か昔の天皇の頼宮（関宮）を投影して人口に膾炙するようになったのではと憶測するが、併せて、もしや「天皇の聖地」を大義名分として「お上」から大切な田圃が奪われはしまいかと危惧した農民たちの自己防衛本能が、予てからの伝承地を彼方の医王寺の山へと転嫁し結びつけたのではないかととも愚考する。

以上、江戸から明治の旧來說を検証してきたが、「河口関」をいづれも御城と的場との境界にある切通し（与五郎坂）ないしは、それを越えた的場南に想定するもので、残念ながら谷川氏の『通証』にある明快な「河口」の位置情報がまったく生かされなかった。多分に、中世関

所の伝承に影響を蒙ったものと推測したが、重要な「河口関」の役割は雲出川兩岸の渡河地点から遠く離れては機能しえないということが一顧だにされなかったのも不思議でならない。聖武天皇の河口頓宮（関宮）の伝承地を雲出川右岸の大角にあるとした点は、それが平地に在ったとの認識として受け継がれるべき情報であった。天皇行幸への関心が強かったのか、斎内親王の頓宮との関係には触れるところが殆んどなかったのも、学術的な発掘調査を前提にした今後の研究において克服していかなければならない課題である。

（四）「関宮」跡をめぐる旧説（昭和期）

（エ）大西源一氏の医王寺説

昭和天皇の即位に伴う伊勢神宮参拝を記念して、昭和三（一九二八）年十一月に三重県では原田知事の序文を付した『御巡幸紀要』を上梓し、天覧に供した。「臨時御大札事務嘱託」を拝命した地方史家の大西源一氏が執筆した。時に大西氏は、前掲（ア）『三国地誌』や（ウ）『伊勢名勝誌』と同様に、川口村から波瀬村へとぬける途中の与五郎坂（第三図⑦）のある切通しを古代の河口関跡とした。そして、聖武の関宮は『伊勢名勝誌』が一説として掲げた医王寺の在る山の上（第三図⑥）だとした。昭和三十（一九五五）年に上梓された『一志郡史』^{三三}にも大西氏は右の自説を繰り返して説く。川口頓宮（関宮）について『三国地誌』が記す「算所村」や『伊勢名勝誌』にいう「大角」の地を「雲出川の河畔に近い田の中の卑湿地で、何等景勝の地ではない」^{三四}と否定して、「関も行宮址も同一の地と考えなければ関の宮と申上げた理由が解けない」（同上）とするほか、斎内親王の河口頓宮も聖武の関宮と同所で、「御城なる医王寺の台地である」^{三五}と、あくまでも「与五郎坂＝河口関」の基本的考えを崩すことはなかった^{三六}。これが大西氏のいわゆる医王寺説で、長く三重県の公式見解として機能し続け、現地には石碑まで建っている。石碑は人々の意識を医王寺に集束させる作用を有し、ついには誰もそれを疑わなくなつて今日に至ったのである。繰返すが、千三百年も昔の「河口」に在った「関」を、近世以降の行政区画としていう「川口村」の範囲内で考えるという、『三国地誌』以来だれも疑問視せずに来た「時代錯誤」説を無批判に踏襲した点に大西医王寺説の致命的失態がある。今までこれを誰も指摘してこなかったのがむしろ不可解という他はない。『朝野群載』や『江家次第』以外の書に地名として現れる伊勢「川口」には、管見では『日本後紀』弘仁元年九月戊申条に、「（略）太上天皇今日早朝、取川口道入於東国、凡其諸司并宿衛之兵悉皆従焉。（略）」^{三七}とあるほか、『吾妻鏡』文治三年四月廿九日庚子条にも、同三月の公卿勅使の駅家雑事を対捍した伊勢国地頭らのなかに「河口 兵衛尉基清」^{三八}とみえるのを知る。これらの「川口（河口）」は勿論、後世の行政区画にいう川口村を指すものではない。古来、東国へ出るに必ず通過する有名な「関」のあった所の狭い地域を象徴的に指した、いわば通称のようなものであつたらう。

いずれにしても古代の伊勢「河口」とは、近世以降の行政区画名ではなく、雲出川が現在の字大角付近で垣内川、山田野川という二川と合



第三図：伊勢川口地区地形図

流する辺りを中心に、上流の瀬戸ヶ渚方向へと続く両岸地帯を指す今より範囲の限定された地域の総称である。『通証』が「廬杵河ノ河ノ口ナリ」というにまことにふさわしい土地であった。都と伊勢との往来にはここ「河口」で河流を越えねばならず、関はその渡河地点（未詳）に近接する形で川の両岸にあったはずである。中世以降ならば河口―波瀬間を結ぶ山路の与五郎坂あたりにも別途関所があつて不思議ではないが、古代においてその「河口」から直線距離にして約六百メートル余も離れた山手の与五郎坂や坂を越えた的場の南側にポツンと関所を設けてみた所で、その手前には自由に往来可能な平野が広がっており、無意味なことは現代の地図上からも一目瞭然である。関は単なる見張り台ではない。千三百年も昔の「河口」を迂闊にも近・現代の行政区画の範囲内で考える時代錯誤こそが問題なのである。

医王寺のある山は、既述のように伊勢国司北畠氏の時代にその家臣（鹿云爪玄蕃亮）が城館Ⅱ砦を構えた場所であつた。比較的古代には近い当時において、そこがもし聖武行幸時の頓宮（関宮）跡と伝承されていたならば、天皇家（南朝）のために尽力した北畠氏が聖武天皇行幸の聖地に砦を築いて踏み荒らすことなどあり得ないし、仮にあつたならばそれなりの記録や痕跡が残つて然るべきかと考える。そもそも、古代の天皇をそういう狭い山上に閉じ込めるなどあつてはならない非礼というものである。それはせいぜい近代以降の警察的警固意識による発想に過ぎない。古代における天皇は常に堂々と広い平地に居して南面する神聖な一通常、人はその姿さえ見たこともない一存在であつた。大西氏は「田の中の卑湿地」（前掲）だとして切り捨てたが、『三国地誌』に「堀の跡」や「築地」の痕跡を伝えている点をこそ冷静に評価し、継承すべきだったと思う。家持の「河口の野辺にいほりて」の歌もここにおいてこそ生きる。『三国地誌』（宝暦十三）をはじめ『勢陽五鈴遺響』（天保四年）や『伊勢名勝志』（明治三二年）などの近世以降の地誌類が、せっかく関宮の所在地を「大角」の平地に在ったという古くからの伝承を書き残してくれたのである。それはやはり生かすべき情報だった。「河口関」に対する近世以来の誤った認識（中世的な関所のイメージからくる固定観念）を大西氏も無批判に受け入れてしまったために、他の全てが見えなくなったと言えるのではないだろうか。

（オ）鈴木敏雄氏の御城・大角説

県内の考古遺物の収集に尽力した事で有名な鈴木敏雄氏も、大西氏と同じ年（昭和三）に手稿本『一志郡川口村考古誌考』¹⁰⁰を書き、その中で与五郎坂の切通しをやはり河口関と考え、関宮をなぜか大西説とは反対側の字御城の山上（第三図⑧）に比定した。『御巡幸紀要』の出るわずか二カ月前（九月）のことである。私は何よりも、その手稿本中で鈴木氏がその山を字大角とした認識不足に驚いた（大角区が御城区の山に「愛宕さん」を祀っていた）。大西氏による医王寺説記載の立派な書物が刊行されると、手稿本は秘蔵されたようである。私は一応念のために、鈴木氏という御城山の候補地の簡略な地形測量も行い、平面図を旧稿¹⁰¹には載せておいたが、さまで問題にすべき場所ではない。医王寺の山上より遙かに狹隘で、与五郎坂からの通路は余りにも急峻に過ぎる。大西氏といい、鈴木氏といい、何ゆえかくも急峻で狹隘な山

上に執着されたのか不思議でならなかった。古代天皇の行幸の意義をもう少し慎重に考慮されるべきであつたと思う。

五年後の昭和八（一九三三）年に鈴木氏は『三重県考古図録』^{五五}を刊行し、川口村宇大角（これは正しい大角）で入手したという後期難波宮期相当の重圈文軒丸瓦を写真図版で紹介した^{五六}。そしてこの古瓦をもつて、明治四十一（一九〇八）年まで宇大角に在ったことが明白な八幡神社^{五七}の別当寺院の存在を想定し、「聖武天皇ノ行幸ヲ記念シテ建立スルカ」と提唱したのである。これが鈴木氏のいわゆる「大角廃寺」説である。ただこの段階ではまだ関や関宮については右に記した昭和三年の自説をそのまま併記し、聖武行宮を大角だとする里人の伝承を誤りであると否定している。鈴木氏には八幡神勧請に関する歴史的認識を欠いているが、今さら難じるには当たらない。

戦争を挟んで二十年余を経た昭和三十年の前掲『一志郡史』下巻において、鈴木氏は改めてこの問題を取り上げ、自らの重圈文軒丸瓦を掘り所に初めて「関宮大角説」を説くに至ったのである^{五八}。ようやく江戸・明治期の地誌類と同じ結論にたどり着いた訳である。しかし、重要な鍵を握るその古瓦の具体的な入手経緯や入手地点や日時などを記すことなく全く不詳で^{五九}、現地にくる小字名を調査した様子もなく、説得力には欠けている。彼がこだわった大角の河岸寄りでは川口平野の縁辺部に偏り過ぎ、関連施設ならばともかく、古代天皇の頓宮設置場所としてはふさわしくはない。その伝承地としていう「大角」はもっと南側の中央部を指していたと思う。

古瓦を以て古代寺院を想定するのはよくあることだが、近年では鈴鹿の伊勢国府跡の発掘調査でも同種の軒丸瓦が複数出土した^{六〇}。神亀元（七二四）年十一月甲子（八日）の太政官奏言に「万国ノ朝スル所、コレ壮麗ニ非ンバ、何ヲ以テカ徳ヲ表セン。其板屋草舎ハ中古ノ遺制ニシテ、營ミ難ク破レ易クシテ、空ク民財ヲツクスノミ。請フ有司ニ仰テ、五位已上及ビ庶人ノ營ミニ堪タル者ヲシテ瓦舎ヲ構ヘ立テ、塗テ赤白ト為サシメムコトヲ。」^{六一}とあり、奏可された。主に京内を対象としたことであろうし、その規制力のほど不明だが、この度の頓宮造営にあつては「天皇の徳を表す」ために、あるいは唐の皇帝にならつて瓦葺きを採用した可能性もこれを否定はできないであろう。また近年では、古代山陽道の駅家の所在地を推定する一つの手法として「奈良時代の瓦が採集できる地点」^{六二}がメルクマールにされている。今後はそういう視点（官衛的性格遺跡との視点）からも鈴木氏の重圈文軒丸瓦を再検討する必要があるかと推測している。

いずれも、両者の関連性については今後の課題だが、何しろ鈴木氏の古瓦は動産である。後期難波宮期の貴重な遺物だが、ただ一点の瓦に固執するだけでは関宮跡は見つからない。最低限度の発掘調査を断行せずんば一歩も前には進まないのである^{六三}。

（カ）足利健亮氏の追認説

現代日本の人文地理学会を代表するお一人であつた故・足利健亮氏の「大和から伊勢神宮への古代の道」は昭和六十三（一九八八）年刊行の『探訪古代の道』第一巻^{六四}において公表されたものである。標題のとおり、古代の道路を復元することに主眼があるが、その中で「河口

関」や聖武の「頼宮（関宮）」にも少し言及がなされている。氏の文章から抽出すると次のようである。

（あ）… 河口頼宮（関宮）は川口関と密接な関係がある。

（い）… 推定地としてあげられているいくつかの地点のうちでは、曹洞宗東光山医王寺の位置が最も注目されるようである。

（う）… 阿保頼宮比定地といい、河口頼宮比定地といい、共に現段階で断定する根拠はない。

（え）… 恐らく考古学的な調査に当否の証明を期待せざるを得ない。

（お）… が、阿保といい、川口といい、地名が伝えられている地域内の推定地であるから、大きくは的をはずれていないと見たい。

と、慎重である。（あ）、（う）、（え）に異論はない。氏の古道復元案では、現代の県道白山―小津線で「河口」から波瀬に出たあと、そこからさらに「一志郡家」のあった「一志集落を最短距離で最もスムーズに結ぶ」延長線を以って古道であるとする^{五五}。その前提に立って川口側の起点を従来どおりの「関宮」想定地に置いたため、「断定する根拠はない」としながら医王寺の山上を「大きくは的をはずれていない」と曖昧にする結果となった。旧稿にも書いたが、大和・伊賀方面から山を越えてようやく伊勢国に出て河口で雲出川を涉った人間が、右岸東前方に広がる平野を横目にすぐまた右手の山道をとるだろうか（第三図）。「代表的な古代道路である駅路は、ともかくにも“まっすぐな”直線道路であった」^{五六}ことが明らかにになっている現代では、当地の地勢から見てもここを通過する古代の道路が眼前の平野を避けて与五郎坂の切通しを通るなどあり得ぬ想定である。そもそも「地名が伝えられている地域内の推定地であるから」（同上）との足利氏の発言は、氏もまた近世以降に成立した行政区画としての「川口村」の範囲内で奈良時代の地名を考えたことを意味する。かつて伊賀国府跡の調査でも実感したが、何故かくも歴史地理学における基本的な手続が無視されるのだろうか^{五七}。医王寺の山は奈良時代において断じて「河口」ではない。時代錯誤による医王寺＝関宮説のおかげで、本来の「河口」の平地に発掘調査もなされずにどれだけ官・民の建物が立ち並んで来てしまったことか。このまま安閑としていては聖武の「関宮」跡も斎内親王の「川口頼宮」跡も「河口関」跡も、当地の貴重な遺跡群はことごとく破壊が進む一方である^{五八}と、遣る方なき不安を覚えた。人文地理学者の社会的責務は決して軽くはないのである。

（五）伊勢河口頼宮跡の推定地

地元教育委員会刊行の『白山町文化誌』^{五九}をしみじみと読んだのは昭和五十六（一九八二）年に町内の「初瀬街道」調査に参加したときである。河口頼宮や関宮に関して前節までに見た従来説を掲載する一方で、江戸時代の検地帳などから採集したという川口地内の小字名に「宮ノ西、上田尻（宮ノ東）、宮ノ後（宮ノ浦）」などがあるという実に興味深い記述^{六〇}にも遭遇した。しかし、両者の情報は誌上では一切リンクせず独立して書かれていることに違和感があった。その「宮ノ〇〇」の「宮」こそが「頼宮（関宮）」ではないのか。それが率直な感想で

あり、「医王寺」説では家持の歌にも齟齬を来し、どこことなく胡散臭い印象であったのを覚えている。

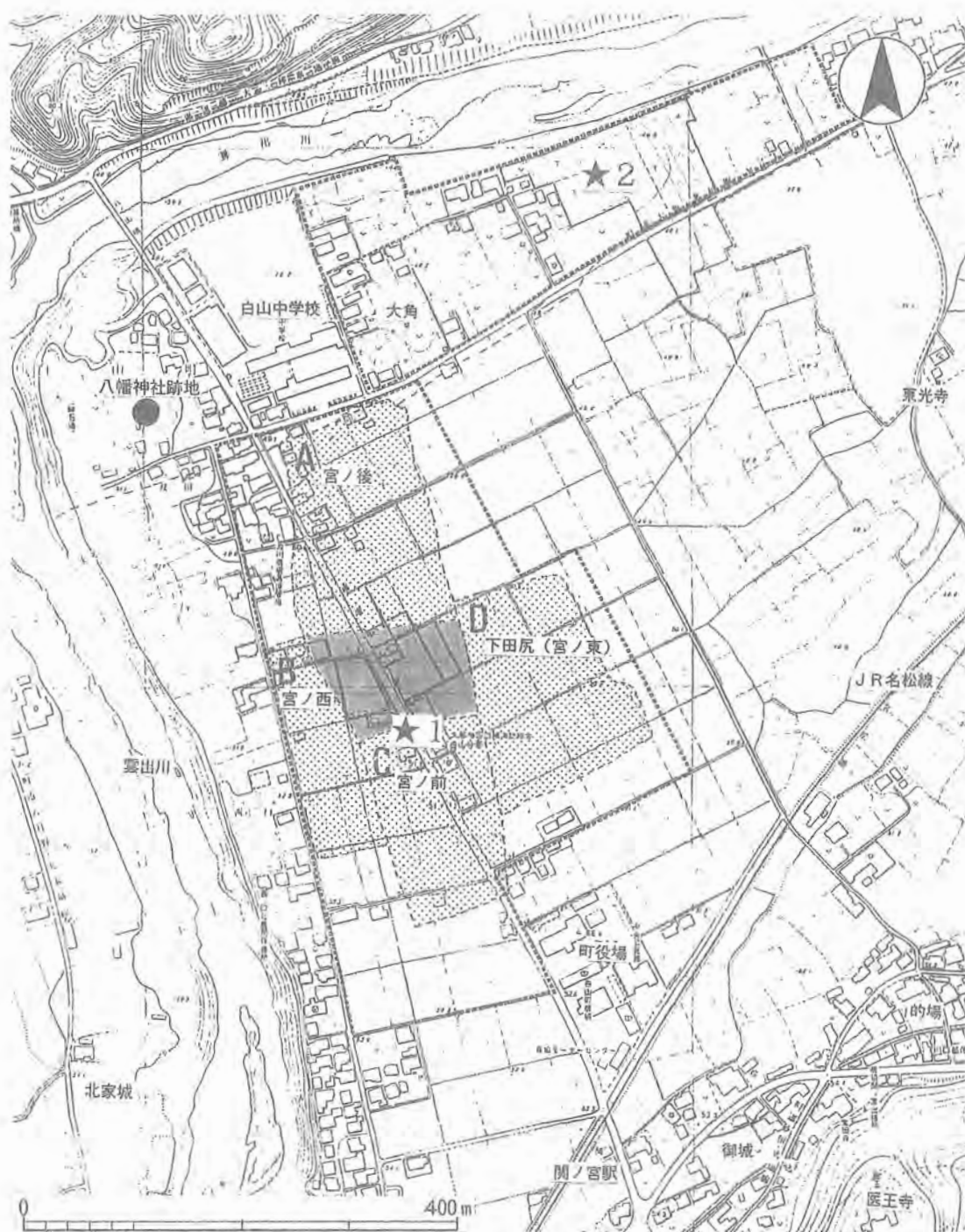
それから十七年余の歳月が流れて前節に述べた理由から、改めて本格的に調査を始めた。『日本地名大辞典・三重県』^{〔五〕}に付録の「小字一覧」からは、関ノ宮、宮ノ西、宮ノ前、宮ノ後、を知ることができる。そして、『白山町文化誌』に収録の小字名とも合わせると、県内でこの「宮ノ〇〇」という小字名が四面そろって一か所に集中して現存するのは一志郡白山町の川口地区だけであることも判った。

幸運にも、三重県史編纂室には明治十九（一八八六）年作製の『伊勢国一志郡川口村全図』という古地図があると同室（当時）の吉村利男氏からご教示をうけ、かつご協力を戴いたのは何よりも有難いことだった。それは、当時の川口村戸長宮田一雄氏をはじめ隣接村の戸長七名と測量兼図面調整人上田宗二郎氏ら全員の署名捺印がある行政上の公式図面であった。縮尺は六千分の一。字界と小字名を記入した本格的な地図で、しかも明治四十一年（一九〇八）年の当地における合祀以前の神社の位置情報なども判るきわめて貴重なものである。私はまず、休日ごとに現地の田畑をくまなく歩き、落ちていた土器片の採集にとめた（その遺物は後日三重大学考古学研究室に寄贈した）。

また、三重県神社庁（津市鳥居町）を訪ねて事情を説明し、所蔵されていた『一志郡合祀済神社明細帳』などを閲覧させて戴いた。それによると、合祀前の川口村にあった無格社十四社のうち、鈴木敏雄氏のいう八幡神社があったのは字大角と山尾田（やもた）との二か所だけであることも判明した。いずれも祭神は品陀和気命で、由緒は不明であった（併せて旧一志郡内に今ものこる他の八幡神社を別途調べたが、すべて中・近世以降の勧請であった）。品陀和気命（應神）が難波「大隅宮」に居したとの伝承^{〔六〕}から「王住」の地名はできたに違いない。ここ大角に在った八幡神社の社殿の規模は「桁行四尺、梁行三尺」、その「境内の広さは百七坪」と記されていた。明治以降に一般的な神社建築を見慣れた我々には意外に映るかも知れないが、当時まで片田舎に在った神社としては立派なものである（合祀を免れたこの種の神社を今も時たまみかけることがある）。数多ある往時の「神社」には真ん中に石（依代であろう）を一つ置き、その周りを注連縄で囲ったばかりの神社も決して珍しくはなく、むしろそれが普通だった時代のことである。

ともかく明治十九年段階の行政公図『伊勢国一志郡川口村全図』によると、大角地区の西北方に神社の印が一か所あるだけであった。つまり、そこが大角八幡神社の原位置であると判明し、「宮ノ〇〇」という小字名にいうところの「宮」が大角八幡神社を指す可能性がない事も図上で一目瞭然であった。そこで先の公式測量図と現代の都市計画図とを縮尺をそろえて重ね合わせた結果が第四図である。河岸線の変化もあるだろうし、多少のズレは避けられないが、図上おおむねA（宮ノ後）、B（宮ノ西）、C（宮ノ前）、D（宮ノ東）という小字に囲まれたその中央部分こそが我々の目指す「宮」跡の推定地に他ならないのである。

もちろん、それが「古代の」宮跡だという確証はまだない。しかし当地では「河口頓宮」において他にはそういう歴史的痕跡を遺し得るよ



第四図：川口頼宮（関宮）推定地 ----- 字界 - - - - 分布調査範囲

うな事績が見当たらないのである。中心部分の「宮」推定地の規模は多少いびつながら、図上で東西約一四〇m、南北約一〇〇mになる（決してその当時の正確な面積ではない）。これは期せずして多気郡明和町の伊勢斎宮跡で検出される「方格地割」の一区画分にほぼ相当もし、あるいは条里制でいう一町分にも匹敵するかも知れない広さであったろうと推測される。恐らくこれは、前述した斎内親王の頓宮用地として普段から国衙―郡衙を通じて管理させていた公用地だったのではないかと考える。聖武天皇の行幸時には、斎内親王井上は伊勢斎宮に在任中であつて、当該用地は空閑地であつた。その用地に聖武の河口頓宮を建てて準備したものと考えることが出来る。かつて『三国地誌』に記されたように、周囲には「堀」や「築地」があつた可能性も高く、扈從した官人たちの宿舎のほか関屋の建物との位置関係などを含めて、今後の発掘調査に期待される課題も多々想定されるところである。ともかく、おおむね北緯三四度三十八分一九秒、東経一三六度二〇分二七秒付近にあるこの場所こそが斎内親王の川口頓宮および聖武の河口頓宮（関宮）跡には最もふさわしく、天皇はその立派な宮殿に南面したはずである。頓宮の南方には東西方向に直線的な古道が走つていたと想定でき、古道の一部分だけでも見つければ、およそその頓宮の位置関係も一層明確になるはずである。従つて、図上で四面の小字域を含む東西約三四〇m×南北約四六〇mにおよぶ広い範囲に陪從官人らの宿舎等があつたとみて、その全体を「河口頓宮遺跡」とであると強調した次第であつた。机上の計算でも約五百人を下らない人間がこの関宮に十日間も滞在したのであるから、延べにして五千人もの人間がここで毎日飲み食いし、排泄したのである。河に隣接せずんば到底処理しきれぬことくらい、ほんの少し想像力を働かせれば誰しも解ることではないか。

（六）むすび

以上、詳細に論じてきたように、江戸期以来繰り返された川口関の想定（伝承）地や、『伊勢名勝誌』以来不必要に尾を引いている頓宮Ⅱ医王寺山上説は歴史地理学の初歩的観点からみても誤りである。虚心坦懐、谷川士清氏の教える「河口」の解説を再度読み直して、「古代の」河口関の所在地を認識し直す必要性が強く求められている。河口関は古代の河口になればならない。頓宮（関宮）跡はその河口関にほど近くなければならないのである。そして、明治十九年の公式図面に記載の「宮ノ前」をはじめとする小字に四方を囲まれた「宮」を中心とした場所こそが、古くから伝承されて来た「大角」であつたに相違なく、今のところ頓宮跡の名残りを示すそれが唯一の有力な候補地である。地表に土器片の散布がなくても、地下に予想だにせぬ大遺跡のあることは伊賀の城之越遺跡で証明済みである。延べ六十三名もの斎内親王が行在所とした貴重な河口頓宮遺跡の解明には、たとえ小規模なトレンチ掘りでもあれ、現地での発掘調査を実施する以外にはもはや方法なきことをここに衷心より訴えたいと思う。埋蔵文化財はひとたび破壊されれば、二度と元には戻らないことをどうか肝に銘じて戴きたい。

長年にわたり医王寺の石碑に感けているうちに、最も蓋然性の高いこの平地には何ら行政的な手立てもなく、今や多くの建物が建つて来

ている。地元教育委員会の担当部局において国史跡級の当該遺跡解明に積極的な方策を講じているという話も聞かぬし、このまま放置してはかけがえのない河口頓宮遺跡は破壊消滅の危機をまぬがれず、その解明の機会も永遠に喪失してしまいかねない。そうした危機感が不肖わたくしごとき一兵卒をして既述のような行動に走らせた所以であった。歴史地理学的にも根拠のない旧来説をひとまず棚に上げて、最も可能性のある当該推定地の考古学的解明のために、関係各位によるなお一層のご尽力を切望して筆を擱くことにしたい。

【註】

- (一) …新訂増補国史大系『続日本紀』前篇（古川弘文館、一九七二年）、卷十三、一五八頁、「九月丁亥。廣嗣遂起兵反（廣嗣遂二兵ヲ起シテ反ス）」。
- (二) …本来「謀反」とは「反を謀る―王朝顛覆を計画することで、行為の未遂段階を示し、二人以上の者が共謀して反逆を計画することである。これが『唐律疏議』（名例律一及び六）や『晋書』刑法志に見る謀反の定義である。反逆行為が既に行われた「反（叛）」とは厳然として区別すべき」ものであった（富谷至「謀反―秦漢刑罰思想の展開」『東洋史研究』四二―一、昭和五十八年所収、三頁参照）。前掲『続日本紀』当該条は正しく「起兵反」と記している。『万葉集』卷六の家持の歌（二〇二九）の題詞に「藤原朝臣廣嗣の謀反けむとして發軍するに依りて」とあり、また『国司補任』第一（統群書類従完成会、一九八九年）にも「謀反」（三四九頁）とするのはいずれも間違い。恐らく、「反」と「謀反」との区別がつかなくなった後代の人が書いたのであろう。
- (三) …前掲『続日本紀』天平十二年十月丙子条には「徵發騎兵。東西史部。秦忌寸等惣四百人」（二六〇頁）とあるが、これは騎兵の数である。武官の多くを九州へ鎮庄に差し向けたので、急遽、東西史部、秦忌寸等を徵發したのである。同十一月甲辰条に名前見える主だった人物を加えるだけでも優に四百数十から五百人は下らない。「総勢四百人」などと平気で書く人もいるが、頓宮跡の推定地を考察するにもより正確な数字が必要となる。
- (四) …鶴久・森山隆編『万葉集』（桜楓社、一九七二年）、二〇三頁。この題詞を前提にして文章を書くのはやはり改めるべきかと考える。
- (五) …拙稿「聖武天皇の伊勢国行幸と関宮跡について（上）・（下）」（『斎宮歴史博物館 研究紀要十』および『同 十二』二〇〇一年、および二〇〇二年、所収）。
- (六) …拙稿「聖武天皇の伊勢行幸と関宮について」（坂本信幸編『聖武天皇の時代』、高岡市万葉歴史館、二〇一三年所収）。なお、膳所高校グラウンドでその一部が発掘された禾津頓宮跡の現地説明会資料を安土城考古博物館（当時）の大橋信弥氏からご恵送いただき活用できた。記して深謝を申し上げたい。その後、大崎哲人・中村智孝「推定禾津頓宮の発掘調査」（『条里制・古代都市研究』十九号所収）も公表された。
- (七) …田中君於「斎宮群行道並びに入京道について」（『国学院高等学校校紀要』第十五号、一九七三年十二月所収）。
- (八) …『平城宮第十三次発掘調査出土木簡概報』（国立奈良文化財研究所、一九六三年）、四頁（二三五二A）。
- (九) …直木孝次郎「大和と伊勢の古代交通路―高見峠越えについて―」（『大和文化研究』第九卷七号、大和文化研究会、一九六四年所収）、二頁。
- (一〇) …今井似閑著『万葉緯』卷第八「催馬楽」（古澤義則編纂『未刊国文古註釈大系』第三卷、清文堂出版株式会社、一九六九年復刻版）、二六〇～二六一頁。

- (一一) …前掲田中君於氏論文「齋宮群行道並びに入京道について」、六五頁。
- (一二) …甲田利雄著『平安朝臨時公事略解』（続群書類従完成会、一九八一年）、二七七～三一五頁、「齋宮覺書別表」。
- (一三) …前掲甲田氏作成の表で、「補遺」欄に疑義を記された皇女は除いた。但し、「淨庭女王」を入れると十二名になる。
- (一四) …例えば、山中智恵子氏作成の齋宮表には朝原の前任に「淨庭女王」を掲げるが、甲田利雄氏の表では空欄にしている。
- (一五) …黑板伸夫・森田悌編『訳註日本史料 日本後紀』（集英社、二〇〇三年）、六四～六五頁。
- (一六) …前掲田中氏論文「齋宮群行道並びに入京道について」、八九頁。
- (一七) …田中氏の前掲論文では「識子」になっているが誤植と思う。氏は続けて、「具体的にいえば繁子内親王の仁和年間からである」と正しく書いている。
- (一八) …田中氏の前掲論文「齋宮群行道並びに入京道について」、八九頁。
- (一九) …新訂増補国史大系『交替式・弘仁式・延喜式』前篇（吉川弘文館、一九八三年）所収、『延喜式』巻五、神祇五、齋宮、一一三頁。
- (二〇) …田中氏の前掲論文「齋宮群行道並びに入京道について」、九〇頁。
- (二一) …前掲『交替式・弘仁式・延喜式』前篇所収、『延喜式』巻五、神祇五、齋宮、一三〇頁。
- (二二) …前掲『交替式・弘仁式・延喜式』前篇所収、『延喜式』巻五、神祇五、齋宮、一二九頁。
- (二三) …田中氏の前掲論文「齋宮群行道並びに入京道について」、九一頁。
- (二四) …『古事類苑』神祇部三（吉川弘文館、一九七七年）所引『顯廣王記』長寛三年十二月十九日条～廿五日条（七七七頁）。
- (二五) …谷川士清著・小島憲之解題『日本書紀通証』二（臨川書店、一九八八年再版【延享五（一七四八）年成立】）、一一五五頁。以下『通証』と略記する。
- (二六) …第一図1を参照。瀬戸ヶ渚は大小の連続する奇岩が両岸を占める景勝地で、ここでの川幅は約五メートル内外と狭く、深い。丸太を渡せば渡河は容易。
- (二七) …日本歴史地名大系第二四巻・平松令三監修『三重県の地名』（平凡社、一九八三年）、九二九～一〇三九頁。
- (二八) …色井秀謨編『三重一志 白山町文化誌』（白山町教育委員会、一九七三年）に、「古来河口十六郷と称され、（略）十六ないし十七地区が各々村を称した場合もあったが、これらは村内の一地域にすぎず、古くから全体を川口郷と称し、また川口村とも呼んでいた」（四三六頁）とするのは不合理で、再考の余地がある。一村内に十七村が存立するような藩政などありえない。「元禄郷帳」（一七〇〇年）に拠る限り「川口村」の成立はそれ以降の出来事である。
- (二九) …藤堂元甫著、蘆田伊人編集校訂『三国地誌』第一巻（雄山閣、一九七〇年【宝暦十三（一七六三）年成立】）、二二一～二二二頁。
- (三〇) …この民間伝承「倭姫の腰掛石」については前掲拙稿「聖武天皇の伊勢国行幸と関宮跡について（下）」、六六頁下段、七二頁註（五二）に詳述した。
- (三一) …前掲『三国地誌』第一巻、二二三頁下段。

- (三二) …かつて同地に田圃を持っておられた地元住民の園浦氏の証言による（二〇一二年八月廿一日火曜日、午後十九時〜於川口公民館にて聴取）。
- (三三) …安岡親毅著『勢陽五鈴遺響』三（三重県郷土資料刊行会、一九七六年【天保四（一八三三）年成立・明治三六年改訂増補版】、一一二〜一一三頁）。
- (三四) …天正三（一五七五）年に伊勢参宮をした島津家久の『中書家久公御上京日記』五月二十九日条には、伊賀から青山越えて伊勢は入道垣内へ至るが、そこから小倭の谷、駒の口、大ぬき、長野関、田尻の伊賀関、三渡、平尾などを経て現在の松阪市内に出るまでに十一箇所もの関があったと記している（前掲『三重県地名』、四六四頁b）。すでに十六世紀には「兵士役の領民が交通上の労務に服し、治警の任務も帯びた」ことは相田二郎氏の『中世の関所』（畝傍書房、一九四三年）、第二「中世の兵士及び兵士米」において夙に明らかにされたところであった。この点は前掲拙稿「聖武天皇の伊勢国行幸と関宮跡について（下）」（六一頁上段・七〇頁註二）に詳述したところである。
- (三五) …宮内黙蔵著『伊勢名勝誌』（三重県郷土資料刊行会、一九七四年復刊【明治二十（一八八九）年出版】、一七六頁、二〇〇頁）。
- (三六) …医王寺のある山は、北畠氏の家臣鹿々爪玄蕃亮が城館（砦）を構えたところである。前掲『勢陽五鈴遺響』三、「河口城」（一一三頁）。
- (三七) …大西源一・鈴木敏雄・野田精一・森田利吉著『一志郡史』上巻（一志郡町村会、一九五五年）、二九〜三六頁。
- (三八) …前掲『一志郡史』上巻、三四〜三五頁。
- (三九) …前掲『一志郡史』上巻、四四頁。
- (四〇) …天覧に供すべく『御巡幸紀要』に執筆した以上それを変更出来ぬのは当然で、その意味で理解されるべきである。氏には「史蹟離宮院趾」（『史蹟名勝天然記念物』第一冊、一九三六年）など今なお学術的価値を有する論文も多く、優れた地方史家であったことに異論はない。
- (四一) …黒板伸夫・森田悌編、訳注日本史料『日本後紀』（集英社、二〇〇三年）、巻第二十、五二〇〜五二二頁。
- (四二) …永原慶二監修、貴志正造訳注『全譯吾妻鏡』第一巻（新人物往来社、一九七六年）、第七・文治三年四月、三四四頁。龍肅訳註『吾妻鏡』二（岩波書店、一九八二年第四刷）、巻七、文治三年四月、九九頁。
- (四三) …故鈴木敏雄氏の遺稿などは皇学館大学史料編纂所に所蔵されており、同編纂所にて閲覧させて戴いた。記して深謝申し上げる。
- (四四) …前掲拙稿「聖武天皇の伊勢国行幸と関宮跡について（下）」、六一頁。医王寺境内より遙かに狭く、到るに急峻である。東西十四m内外、南北約四〇m。
- (四五) …鈴木敏雄著『三重県考古図録』（楽山文庫、一九三三年八月）。
- (四六) …重圈文軒丸瓦の写真図版は白山町教育委員会（当時）の提供を受けて前掲拙稿「聖武天皇の伊勢国行幸と関宮跡について（下）」、六二頁、および二〇一三年の「聖武天皇の伊勢行幸と関宮について」（高岡市万葉歴史館叢書）、三四頁にも掲載させて戴いている。なお、難波宮式重圈文が三重圈文であるのに対し伊勢国出土のは二重圈文であること、その出土遺跡は官衙的性格を持つものが多いことなどの指摘がある（中尾芳治「重圈文軒瓦の制作年代と系譜につ

いての覚書』『難波宮跡研究調査年報一九七二年』昭和四七年所収。竹内英昭「伊勢地方における官系瓦の分布―奈良時代後半期の軒丸瓦の様相」『斎宮歴史博物館 研究紀要二』平成五年。新田剛「伊勢国府跡とその周辺の重園紋軒丸瓦」『第四回鈴鹿市埋蔵文化財展―最近の調査―』平成六年。岡田登「伊勢大鹿氏について（上・下）」『皇学館大学史料編纂所報』第一三五・一三六号、平成七年所収。

(四七)・・鈴木氏が川口の八幡神社をどう認識していたのかは不明。私は旧稿を書くに当たり、三重県神社庁（津市鳥居町）所蔵の『一志郡合祀済神社明細帳』および『三重県神職管理所広報』を閲覧させて戴いた。厚く御礼を申し上げる。前者は、大正十五年に文書台帳から記載したもので、「引継大正拾五年七月参日」「第三号ノ二二分冊」とある。また後者は、明治四一年二月十五日発行の第三百五号で、同年一月二十九日付けで川口村に在った無格社十四社を白山比咩神社へ合祀し、白山比咩神社と単称することを許可すとも報じている。

(四八)・・前掲『一志郡史』下巻（一九五五年）、二五〇二七頁。

(四九)・・鈴木氏の「川口・大角遺跡関係記録メモ」（皇学館大学史料編纂所蔵、鈴木乙二二三六四）ほか遺稿類を調査した結果は、前掲拙稿「聖武天皇の伊勢国行幸と関宮跡について（下）」、六三〇六四頁（七一頁の註を含む）に詳述した。

(五〇)・・新田剛氏前掲論文「伊勢国府跡とその周辺の重園紋軒丸瓦」及び同氏「伊勢国府跡と大角遺跡における重園文軒丸瓦」（『考古学雑誌』巻九〇巻第三号、二〇〇六年所収）。

(五一)・・前掲『続日本紀』前篇、一〇二頁。

(五二)・・中村太一著『日本の古代道路を探す―律令国家のアウトバーン』（平凡社、二〇〇〇年）、二八頁、九八頁のほか第四章（特に一四六―一六三頁）など。

(五三)・・三重大学が現在の行政区画でいう川口地内で二度の発掘調査を実施した。分布調査で奈良時代の土師器片が採取された地帯だが、奈良時代の「河口」地内でなければ「頓宮跡」の発見はあり得ない。表採遺物も当てにはならない。日本最古の庭園遺跡として著名な伊賀の「城之越遺跡」は分布調査で近世の陶磁器片を数点採取したに過ぎず、長靴でなければ歩き難い湿田の未確認遺跡であった。試掘調査の実施には否定的な意見が大勢だったが、農林の調整担当係長であった私の方針で強行した。伊賀農林の担当者に「どこを掘りたいか」と問われ、比土地区圃場整備計画図面を前に指した個所が後の「城之越遺跡」の真上だった。平成二年のことである。試掘調査には森川常厚君が行き、翌三年の本調査を穂積裕昌君が担当した（三重県埋蔵文化財センター編『城之越遺跡―三重県上野市比土』、三重県埋蔵文化財調査報告九九―三、一九九二年）。個人的には今も「比土の奇跡」と自負している。

(五四)・・上田正昭編『探訪古代の道』第一巻「南都をめぐるみち」（法蔵館、一九八八年）所収（二七八―二〇六頁）。

(五五)・・前掲『探訪古代の道』第一巻所収「大和から伊勢神宮への古代の道」、一九八―一九九頁。

(五六)・・中村太一氏前掲書『日本の古代道路を探す―律令国家のアウトバーン』、一〇頁。

(五七) …平成二年度に伊賀国庁跡の発掘調査に関わった折にも、従来の歴史地理学に対して不審を覚える出来事があった。つとに「伊賀国府」を論じた著名な歴史地理学者は「柘植川と服部川に挟まれた」平地（そんな氾濫原に国衙を設置するはずはない）にその推定地を比定した。それを抛り所に三重県埋蔵文化財センターでは発掘調査を重ねたが伊賀国府に関しては何の成果もなかった。紆余曲折を経て柘植川右岸の狭隘な段丘上に調査区を移して漸く確認された。驚いたことに、地元住民がその土地を国町（こくつちよ国庁）と呼んでいたことである。上野市立図書館には明治二十一年内務省地誌取調職にあった川井景一氏編輯の『伊賀国名勝図』が所蔵されている。その巻頭第一頁に国町の遠景が「国府」と題して描かれ、巻末付図「伊賀国明細図」にも柘植川右岸に「国府」と明記されていたのである。それを知るきっかけは、発掘現場に差し入れのあった菓子店を食していた時のことであった。市内の有名な老舗菓子店が包装紙に使っていたのが「伊賀国明細図」だったのである。最初に気付いたのは穂積裕昌君で、直ぐにその菓子店に電話をし、原資料の所在を教えられ、急遽図書館に駆け込んだ。調査官川井氏が同年十二月中旬、安濃津巖田川北の水明樓で記した公務餘唱によると、内務省（当時は山県有朋を首班に、地方制度の改革を推進）の地誌取調職として彼が伊賀に赴任してきたのは明治二十年八月十六日で、半年後（二十一年二月）に調査を終了した。阿拝郡十七箇所、山田郡五箇所、伊賀郡八箇所、名張郡三箇所の計三十三箇所を画工清水兼三郎（士族、乙部村拾五番屋敷）に描かせ、西行や度会家行らの歌などを配したものが『伊賀国名勝図』だったのである。明治政府による歴とした地誌資料である。昭和の歴史地理学者はなぜこういう基本的な現地調査もせず、「国府論」を書いたのか、到底理解に苦しむエピソードであった（藤岡謙二郎著『国府』、吉川弘文館、一九六九年、九八～一〇一頁）。

(五八) …市町村合併前の平成十一年当時に、川口の頓宮関係遺跡を守るために愚考したのは三点、①「遺跡地図」の作成、②町文化財担当者の採用、③あるべき「頓宮跡」の候補地を提示する論文の作成・発表、である。このうち自力で可能なのは③だけであり、あとの①と②とは地元自治体に依頼・要請する以外には方法がない。当時の白山町教育長岩脇輝明氏が大変に理解のある方で、尽力戴き、結果的に①と②が他力本願で実現した。③「論文の発表」は榎村寛之君のご配慮により『斎宮歴史博物館 研究紀要』に（上）に（下）に分けて掲載してもらった。発表後十年を経た平成二十四年ごろからようやく地元でも少し知られるようになったのは、ひとえに高岡市万葉歴史館長の坂本信幸氏や川口公民館長楠見茂晴氏のお蔭である。そのほかご芳名は略すが、お世話になった関係者の皆様方に心よりお礼を申し上げたいと思う。

(五九) …前掲『三重一志 白山町文化誌』、第三章に「古代誌」、第五章を「近世誌」に当てている。

(六〇) …前掲『三重一志 白山町文化誌』、第五章、近世誌・上、一九九頁。

(六一) …『日本地名大辞典・三重県』（角川書店、一九八三年）、巻末「小字一覧（二五二～二五九八頁）」の一五六二頁参照。

(六二) …『日本書紀』上（岩波日本古典文学大系六七、一九七一年第五刷）、三八〇～三八一頁。山根徳太郎「みそぎーナニワにおける皇室の儀礼―『国史論集』（京都大学読史会、一九五九年）、三七七頁。

第三章 伊勢斎宮における墳墓の削平と方格地割

(一) はじめに

本来「方格地割」といえば、東洋史学では「且田且守（且ツ田ツクリ且ツ守ル）」^①、即ち「農業生産と軍事」との結合した屯田制の成立に関わり使用されてきた学術用語である^②。そこでは溝洫を伴いそのほとりに道路をめぐらせていた。近年、日本考古学でも「溝（隍）」と道路により構成された規格性のある方形区画「遺構を指して「方格地割」と呼ぶのは、その用語からの転用ではないかと憶測している。

後者の意味での方格地割が伊勢斎宮跡でも確認され、現時点で概ね東西七区画分、南北に四区画の規模の造営プランが明らかに becoming している。発掘調査の進捗に伴い区画内部の様子も徐々に判明しつつある途上で^③、その成立時期を延暦四（七八五）年として進められている。一つのエポックとして妥当な見解である^④。ただ、その初現形態を知る上でも重要であった道路側溝（区画溝）と柵（柱）列との切り合い関係を未確認のまま展開される現行の成立論には今もいささかの危惧を抱いている^⑤。光仁朝あるいはそれ以前における造営形態の解明を含め、なお今後の発掘調査に期待するところの大きい遺跡である。

筆者が初めて斎宮跡の発掘調査現場に立ったのは一九八六年春のことで、現存する塚山古墳群の東側に隣接する畑地で実施した第六五―一次調査であった^⑥。その調査区北端で推定径約十一メートル規模の削平された古墳の周溝（と私は考えた）^⑦を検出した。それ以来、折に触れ、およそ次のような点に関心を寄せつつ今日にまで至っている。

○都城造営などに伴い、時に不可避的な墳墓の破壊削平に対し、古代天皇がとった政治姿勢の背景には中国の政治思想からの何らかの影響があったのではないか。

○都における天皇のその政治姿勢が伊勢斎宮の造営（特に方格地割）にはどのように反映されたと考えられるだろうか。

○その場合、方格地割と削平された墳墓との相関関係をどう読み解くべきであろうか。

○被削平古墳の周溝埋土から出土した遺物の年代観からみて、全体的な方格地割の当初の計画案策定は何時ごろと考えるのが妥当か。

○最終的な方格地割の造営実施に当たり在地郡司層との間になにも問題はなかったのか。

本稿では以上のような問題意識にもとづき不十分ながら卑見を述べて、将来の問題解決へとつながることを期するものである。

(二) 都城建設にみる勅の背景―中国思想の影響を探る―

難波長柄豊碕宮造営のときにも、また藤原京（新益京）建設の際にも、そして平城京造営にあたって、それぞれ時の天皇は造営事業で墳墓の破壊・削平をうけた人や転居を強いられた人に対して適切な措置を講じ、また暴露に瀕する遺骨の埋瘞を命じるなど、必要以上に墳墓を

荒れることのない方針をとった⁸。とりわけ、元明天皇による和銅二（七〇九）年冬十月癸巳の勅（後述）は有名だが、その背景には中国政治思想からの影響をも窺うことができる。その点を最初に考察しておきたい。

古来中国では「発かれぬ墓はない」⁹との一般的通念があり、『淮南子』にも殷湯・周武、春秋の齊桓・晋文らが覇を成しえたゆえんを説いて、「墳墓を抉くこと母れ」¹⁰との常套句があるほどである。小川琢治氏は「墳墓の盗掘は古代から現今に至るまで常に行われる事件で、秦漢以来帝王の目星しい陵墓が大抵発掘されざるものなく」¹¹とされた。『莊子』外物篇にいう「儒以詩禮發冢」の一節などは儒家の礼教主義に基づく厚葬を痛烈に批判したことで知られるが¹²、「厚葬が却つて盜墓を招くといったことは已に戦国時代の社会にあつては普遍的な現象であつた（拙訳）」¹³という。わが国の天皇にも影響を与えた薄葬論¹⁴は、恐らく孔子以来の伝統を引くが（本題から外れるので今は省くも）一例のみ掲げると、前漢武帝の時に黄老の術で知られた楊王孫も、「夫厚葬誠亡益於死者、而俗人競以相高、靡財單幣、腐之地下。或乃今日入而明日發、此眞與暴骸於中野何異（ソレ厚葬ハ誠ハ死者ニ益ナシ、而ルニ俗人ハ競ヒテ以テ相高ク、財ヲ費ヤシ幣ヲ尽シテ、之ヲ地下ニ腐ラシム。或ハ乃チ今日入ルモ明日ニハ発カル、此レ眞ニ骸ヲ中野ニ暴スト何ゾ異ナランヤ）」¹⁵と、友人の祁侯に応えている。

漢景帝が魯の宰相に任じた田叔などはもともと「墓発き」で儲け身を立てた長者だつた¹⁶というし、かの董卓にしても靈帝陵（文陵）をはじめ諸帝陵や公卿の冢墓を発き藏中の珍宝を悉く奪い取つた¹⁷ことが知られている。また、晋の武帝のとき、汲郡の平準なる男が魏の襄王の墓（安釐王の冢とも）を盗発して埋納されていた竹書数十車を得た¹⁸とか、後趙王の石勒、石虎（季龍）はかつての帝王や先賢の墓を発掘せざるなくその宝貨を取り、季龍が始皇帝の冢を掘らせた¹⁹のも有名な話である。唐賊盜律に塚（墓）を発いた者らに対する罰則規定があり²⁰、大宝律にもそれに類似する条文²¹のあることから、「唐律本條に相当する規定の存在」²²が推測されてもいる。

閑話休題。西周文王（姫姓ゆえ姫文とも）は、野中に暴露した枯骨を鄭重に葬らしめ、君主にふさわしい仁徳ある聖王として長く後世に伝承された。前引『呂氏春秋』に、「周の文王、人をして池をほらしめ、死人の骸を得たり。吏以て文王に聞す。文王曰く、『更めて之を葬れ』と。吏曰く、『此れ主無し』と。文王曰く、『天下を有つ者は、天下の主なり。一国を有つものは一国の主なり。今我其の主に非ずや』と。遂に吏をして衣棺を以て更めて之を葬らしむ。天下之を聞きて曰く、『文王は賢なり、澤、骸骨に及べり。又況や人に於てをや』と。」²³とある。賈誼がこれを文王への夢告として記し²⁴、劉向はこれとほぼ同文を伝える²⁵など、西周文王への固定化した称賛の跡が見える。白川静氏は、「雅頌諸篇が」事功としては殆んど伝えるに足るもののない文王に、肇国の理念的根柢を集約的に表現しようとするこのような志向は、すでに世襲体制を確立した、西周後期貴族社会の意識を反映するものがある。それはいわば、世襲制を基礎づけている祖宗觀念の、象徴的な表現であつた。」²⁶とされた。

一方、J・G・フレイザー卿は中国人の信仰にある暴露された屍と旱魃との関係性についても述べている。いわく、結果的に「凶作、欠乏、飢饉など」^{②⑤}をもたらす旱魃は、「未葬のままで放置され」（同上）た遺骨があると、それを不快に感じたその人（遺骨）の靈魂によって引き起こされる。「それでその祟りを除いて雨を降らせるために、未葬の遺骨を葬ってやるのが中国の当局者に共通した慣習となっている」（同上）と。『礼記』月令にいう「掩骼埋胔（骼を掩ひ胔を埋む）」^{②⑥}には永い歴史的背景があったのである。

翻って、古代の日本人にも暴露された屍に対する畏怖や宗教的観念は当然あった^{②⑦}であろう。因みに、元正天皇養老六（七二二）年七月、「陰陽錯誤して灾旱しきりに至った」時の詔にも、また天平九（七三七）年に疫瘡が大流行し、四月以来の旱魃にも苦しんだ時の聖武天皇の詔にも、冤罪者への救済措置、賑給、大赦などの他に『礼記』月令と同じ「掩骼埋胔」^{②⑧}ことを命じている。下って、淳和天皇天長五（八二八）年の「坤徳愆叙。山崩地震。（坤徳ついでを失ひ。山崩れ地なありし。）」時の詔にも「收葬道殣。掩骼埋胔。（道殣〔行き倒れ〕を収め葬り。骼を掩ひて胔〔腐乱死体〕を埋めよ。）」^{②⑨}とし、天平九年、弘仁五（八一四）年について、仁寿三（八五三）年二月頃から疱瘡の疫病がまたも流行して死者多数に上った時の文徳天皇の詔にもやはり「貴埋胔掩骸之仁（胔を埋め骸を掩ふの仁を貴び）」^{③①}というのである。すでにして、そこにはあたかも晋の成都王や北魏の高宗、更には唐武宗などの政治姿勢^{③②}をも彷彿とさせる趣きがある。

貞観十一（八六九）年六月には、旱災による農業被害が深刻で伊勢大神宮に奉幣使を遣わし甘雨、五穀豊穰を祈らせた（十七日）。同二十六日の清和帝の勅に「（略）今旱雲涉旬。農民失望。班幣以遍群神。屈僧以祈三寶。雖然冥感未通。嘉應難至。朕之不徳。百姓何辜。責躬責畏。未知攸濟。其朕服御常膳等物。並宜減撤。（略）。令左右京職收葬道殣掩骼埋胔（今旱雲旬に涉り。農民望みを失ふ。幣を班ちて以て群神に遍くし。僧を屈めて以て三寶に祈りぬ。然あれども冥感いまだ通ぜず。嘉應至り難きは。朕の不徳にして。百姓に何の罪かある。躬を責めつつしみ畏るるも。未だすくふ所を知らず。それ朕の服御常膳などの物は。並びに宜しく減撤すべし。（略）。左右京職をして道殣を収め葬りて骼を掩ひ胔を埋めしめよ。）」^{③③}とある。ここに至って既に定型化して久しいこれら詔勅文言は、もはや中国皇帝のそれとなんら変わらないものになっていることを知るのである。

中国からの影響を類推する別の強力な手がかりとして、最後に「対策文」を挙げたい。天平五（七三三）年七月廿九日当時の聖武朝における「対策」には、虞舜と西周文王（姬文）の統治姿勢の違いとその殊途同帰たることを述べて、黔黎（一般民衆）を懐集するための術を質す「策問」とそれに答えた神虫麻呂の「対策」を録すが^{③④}、その中で虫麻呂が舜・文両聖王に対して「重華」、「四乳」という、日本ではそれ程知られていない美称まで用いているばかりか、三代（夏殷周）の歴史にも甚だ造詣の深いことが判る。その事実から類推すれば、当時日本の知識人が西周姬文の骸骨埋瘞伝説をも既に熟知していたことはまず間違いないところである^{③⑤}。

孝徳をはじめ歴代天皇は都城建設事業で避けがたい墳墓への破壊削平（遺骨暴露）に特別な配慮の姿勢を示した。観念的であれ、それは中国姫文の骸骨埋瘞伝説を踏まえ、自らも聖王としての倫理仁徳を体現すべく擬制的措置を講じるよう努めた結果であると考ええる。後に触れるように、元明天皇和銅二年の勅にある「祭酹」の語は、漢籍からの影響を考慮すべきものであり、恐らくは中国皇帝の政治姿勢に擬えつつ、詔勅の文案を作成せしめたことはこれを否定できないであろう。

（三）平城京の建設事業と古墳の削平（表六参照）

平城京建設等に伴いいくつかの古墳が破壊削平を受けた事実が発掘調査により徐々に判明してきている。当然、和銅二年の元明帝の勅とも関連させてこれを見なければならぬ^{三七}。しかもそれは孝徳朝以来の文脈のなかでこれを押さえておく必要があると考える。

すなわち、かつて難波長柄豊碕宮造営時に「為入宮地、所壊丘墓、及被遷人者、賜物各有差。即遣將作大匠荒田井直比羅夫、立宮堺標。（宮の地に入れむが為に丘墓を壊られたるひと及び遷されたる人には物賜ふこと各差有り。即ち將作大匠荒田井直比羅夫を遣はして、宮の堺の標を立てしむ。）」^{三八}とみえ、藤原京建設の際にも持統は、「詔造京司衣縫王等、收所掘尸（造京司衣縫王等に詔して、掘せる尸を収めしむ。）」^{三九}との措置をとった。また、藤原宮域内に入る民家の立ち退きに対する措置は『続日本紀』慶雲元（七〇四）年十一月壬寅条^{四〇}に見えている。平城宮の造営時に、神明野古墳（完全削平）や市庭古墳（前方部削平）のほか、直径約十メートルの方墳などが削平されていた^{四一}ことが判明している。平城京内で削平された古墳には、左京で法華寺垣内古墳などおよそ十二基、右京では平松北内古墳など三基が知られる。また、最近の左京二条五坊五坪を中心とした発掘調査でも四世紀後半から五世紀後半頃の各種埴輪が出土した事実から、さらに「未知の古墳が複数存在した可能性」^{四二}が指摘されている。もちろん、これら発掘調査で検出された古墳が全て平城京造営に伴い破壊削平されたとも断定はできず、平安時代や近世以降に破壊削平を受けたものもある。現に旧平城京内に残っている古墳^{四三}がある事実から、都城造営の当時には必要以上の破壊・削平は行わなかった^{四四}ことも明らかである。

そこで、改めて和銅二年冬十月癸巳の勅をみると、「勅造平城京司。若彼墳隴。見發堀者。随卽埋斂。勿使露棄。普加祭酹。以慰幽魂。（造平城京司に勅すらく。若し彼の墳隴の。発き堀らるることあらば。随ひて即ち埋め斂めて。露し棄てしむること勿れ。普く祭酹を加へて。以て幽魂を慰めよと。）」^{四五}とあり、それら墳墓の破壊・削平に当たっては被葬者の幽魂を慰めるべく、造平城京司らに所定の祭酹儀礼^{四六}をさせた上で、改めて再埋葬させる措置を取ったのである。ただ、出土状況においてその祭酹儀礼を証明し得るだけの事例は、表六に見る限りでは解らなかった。

下って、宝龜十一（七八〇）年十二月甲午条には次のような勅も出ている。即ち、「勅左右京。今聞。造寺悉壊墳墓。採用其石。非唯侵驚

平城京における古墳の削平 (附方形周溝墓)							(2013年9月現在筆者調べ)		
番号	古墳名	形状	規模 (m)	主な遺物	古墳の時期	京内の位置	所在地	文献 (下表番号)	備考
1	市庭古墳	前方後円	墳丘長250 (253) 後円径130 (147) 前方幅160 (164) 周濠幅約40 深さ1.5 () 内は文献6	円筒埴輪 朝顔形埴輪 形象埴輪 (家形 動物など) すべて 破片で葺石上に 散乱か周濠内落ち 込み。	中期前半	平城宮内裏 北外郭部	奈良市佐紀町 塚本・市庭	2 ; 53～54頁。 (6 ; 4頁。)	周濠底を一部検出に 止めた。 陵墓管理 : 平城天皇 楊梅陵
2	神明野古墳	前方後円	墳丘長100(117) 後円径55(65) 前方幅60(72) () 内は文献6	円筒埴輪 朝顔形埴輪 形象埴輪 (蓋形 家形など)	中期中葉 (市庭より 新)	第二次太極 殿院 内裏地区	奈良市佐紀町 神明野	1 ; 13頁・20頁・ 66～67頁。 (6 ; 5頁。)	東側に造り出し。 平城宮造営時に破壊 削平。その後6AAQ 区で5回整備された内 裏の造営を和銅創設 当初とみるのは困難 としている。
3	仮称 : 法華寺 垣内古墳	前方後円	墳丘長107 後円径69 前方幅75 文献6による。 全長140m。 完全に削平	円筒埴輪 朝顔形埴輪 形象埴輪 (家形 ・蓋形・楯形)	中期前半 (削平時期を 示す遺構遺物 はない。4 ; 24頁による)	左京一条 三坊四・ 五坪	奈良市 法華寺町	4 ; 甌16年度22～ 24頁第520次。 6 ; 6頁。	ワラナベ古墳から 約400m南。周辺で 木取山古墳、平塚1号 2号墳も検出。平城京 の宅地化に伴い削平 されたと考えるのが 妥当である (24頁)。 第1発掘区で掘立柱建物 2棟、掘立柱列S A 03 検出。平安時代前期か。
4	平松北内 古墳 (仮称)	不明	溝幅約1.4	家形埴輪 鱗付き円筒 埴輪	中期中頭	右京四条 三坊十坪 の南西部	奈良市平松 一丁目	報告書未見 6 ; 7頁。	宝来山古墳の 西側約100m
5	木取山 古墳	前方後円	墳丘長110超	円筒埴輪 蓋形埴輪 家形埴輪	中期	左京一条 二坊十五 坪西半部	奈良市 法華寺町	昭和56年度 平城宮跡発掘 調査概報未見。 6 ; 8頁。	コナベ古墳の 南約140m
6	仮称 ; 六条野々 宮古墳 第489次 第492次	円墳又は 前方後円	円墳なら直径 約30m前後 墳丘自体は奈良 時代以降の破壊	円筒埴輪の 基底部 周濠最下層茶褐色土 から円筒埴輪破片 8C代の須恵器杯B 壺胴部片。	中期中半 5C前半頃	右京六条 三坊六坪	奈良市六条 一丁目	4 ; 甌15年度28～ 29頁。甌14年度 51～53頁。 6 ; 8頁。	少なくとも北東の周濠は 奈良時代には破壊されず 存在。室町以降人為的に 一挙に埋め立てられた。

番号	古墳名	形状	規模 (m)	主な遺物	古墳の時期	京内の位置	所在地	文献 (下表番号)	備考
7	仮称； 八条ユモ 川古墳	方墳	南北9以上 東西5.2以上 幅1.6周濠	須恵器 甲冑埴輪	中期後半	左京四条 二坊三坪 南辺	奈良市四条 大路一丁目	報告書未見。 6；9頁。	田村第推定地 の西側
8	仮称； 菅原子ノ 尾古墳 菅原東遺跡 第310次 第326次	円墳	直径約16 周濠幅2.5 ～4.0―定せず。 遺物なし。	周溝底から 土師器鉢 土師器甕2点 のみ出土。 埴輪土に殆ど 遺物なし。	後期	右京二条 三坊六坪 南東部分	奈良市 菅原町	4；14頁。 6；9頁。	周溝S D07はある程度 灰色粘土が自然堆積し た後に、墳丘削平土に よって埋め立てられて いる。削平時期言及なし。
9	脇戸古墳 第39次 第51次 第53次	円墳	直径約30 (GG 第39次の成果と 勘案して。南発 掘区で周濠検出 出来ず矛盾を はらむ)	周濠S X01から 円筒埴輪 盾形埴輪 動物埴輪 刺形埴輪 須恵器杯・壺・ 壺蓋、土師器の 壺出土。	後期 川西編年V期 5C末～6C初 頭	元興寺旧 境内西端 中央部	奈良市 脇戸町	4；穽5年度140頁。 穽11年度120～ 126頁。穽12年 度100～101頁。 6；10頁。	須恵器杯身 口径11.6cmで 口縁部の「かえり」 が短い。 埴輪の時期よりかなり 新しい。細頸壺蓋上面 脚部破片に自然釉厚く かかる。有脚細頸壺か？
10	率川古墳	不明	周濠幅3	円筒埴輪 朝顔形埴輪 石見形埴輪 蓋形埴輪 動物埴輪	後期	左京四条 六坊九坪 の西辺部	奈良市 本子守町	報告書未見。 6；11頁。	
11	仮称； 杏近衛 古墳 杏遺跡 第337次 第340次	方墳三基	1号墳； 1辺約16 周濠幅約4.5 2号墳； 1辺11以上 周濠幅約2.4 3号墳； 1辺5のみ確認	1号墳周溝S D 05から6C前半 の須恵器	後期	左京八条 二坊二坪 南半中央	奈良市 杏町	4；穽7年度92頁。 6；11頁。	1号墳は墳丘 南側中央部に 台形突出部約2m。
12	ヤイ古墳 第437次	前方後円	墳丘長約18.5 後円径約15 前方部約3.5	円筒埴輪 人物埴輪 馬形埴輪 盾形埴輪 蓋形埴輪 須恵器 土師器	後期中葉	左京二条 五坊北郊	奈良市 法蓮町	4；穽11年度74～ 77頁。 6；12頁。	周濠幅：一定せず。 後円部東側約5.5m 後円部南側約2.2m 前方部南側約1.2m 前方部西側約0.8m 別の古墳周濠と一部共有 している可能性あり。

番号	古墳名	形状	規模 (m)	主な遺物	古墳の時期	京内の位置	所在地	文献 (下表番号)	備考
13	杵尻広 1・2号墳	方墳	1号墳； 1辺約14 2号墳； 1辺約11	5C末の埴輪	中期後葉 ？			橿原考古学 博物館常設 展示による。	報告書未見。 奈良市教育委員会 平成22年度調査。
14	未知の 古墳群	不明		円筒埴輪 蟠付円筒埴輪 朝顔形埴輪 各種形象 埴輪	中期 4C後半 ～5C後半	左京二条 五坊五坪 を中心に	奈良市 芝辻町 法蓮町	8；28頁・31頁・ 141頁ほか。	未知の古墳が 複数存在した 可能性がある。
15	平城京跡 第300次 S D 11	方墳？ 円墳？ 方形周 溝墓？	溝幅約1m 深さ0.3m 東半分のみ検出。 南北約9mの 半円状	弥生後期末～ 古墳前期初頭		左京九条 四坊 九条大路		4；職6年度61頁。	
16	平城京跡 第600次 古墳 S X 01	前方後円	全長約15m 後円部径約9m 前方部幅約8m 含周濠全長は 約18m	近接の旧河川から 埴輪多数出土。 古墳時代後期の 須恵器杯身、8C の土師器甕・壺・ 杯・皿・高杯、 須恵器甕・壺・杯 杯蓋・円面硯・ 三彩小壺、9C後 半～10C初頭の 土師器 A・B など。	中期後半？	左京二条 五坊北郊		7；94～99頁。	調査地東方に後期 のヤイ古墳がある。 当地とその東方一帯 に中期後半～後期の 古墳群が存在した可 能性は高い。 当該古墳 S X 01の墳丘 の削平は後円部の柱穴 から居住地化に伴う開 発と考えられ、平安中 期～後葉と推定。
17	コナベ古墳 第4次 第5次	前方後円	全長210m	周濠から 5C前半 の円筒埴輪片・6 Cの須恵器高杯片。 8Cの土師器皿片、 須恵器杯片、丸・ 平瓦片など。				4； 職12年度132頁。 職16年度46頁。	佐紀盾列古墳群の ひとつ。

番号	古墳名	形状	規模 (m)	主な遺物	古墳の時期	京内の位置	所在地	文献 (下表番号)	備考
18	大安寺旧境内の杉山古墳 第54・55次 第67次 第72次	前方後円	復元墳丘長： 南北約154m 後円部： 東西径約84m 前方部： 長さ約85m 幅約95m 周濠含む全長 約200m	周濠底部から 円筒埴輪 形象埴輪出土。 平安時代初めに 埋められ、整地 されて掘立柱建 物や塀が建つ。 整地土中から 奈良三彩破片 散らばって出土。				4；韃4年度119～ 122頁。韃6年度 110～112頁。 8年度120頁。 5；52頁。	天平19年『大安寺伽藍縁起 并流記資材帳』にいう「 一坊池井丘」が当古墳に 当たる。大安寺造営時に 寺地内に取り込まれた。 前方部墳丘盛土は全て削 平。 前方部に瓦窯築造のため、 窯体破片も出土した。 後円部は近世以降に破壊。
19	柏木遺跡 第338次 第370次	方形 周溝墓	北群8基 南群10基 平均規模は 一辺4～14m。		弥生時代	左京五条 一坊十六 坪		4；韃9年度 第二分冊2頁。	2・6・7・10号墓以外 には埋葬施設削平される。 削平時期への言及なし。
20	平城京 第226 - 1次	方形 周溝墓			弥生時代	右京三条 三坊六坪		4；韃3年度49頁。	169次・173次・182次 184次でも方形周溝墓 を検出している。
参考文献 (表中には下記の文献番号で表示した。)									
1	平城宮発掘調査報告Ⅲ、国立奈良文化財研究所、昭和37年。								
2	平城宮発掘調査報告Ⅶ、国立奈良文化財研究所、昭和51年。								
3	昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報、国立奈良文化財研究所、昭和57年。								
4	奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告書、奈良市教育委員会、昭和54年度から平成16年度分まで (全26冊)。								
5	奈良市埋蔵文化財発掘調査報告第一冊、史跡大安寺旧境内Ⅰ、奈良市教育委員会、1997年。								
6	第24回平城京展、古墳の残像—都の造営で壊された古墳・残された古墳一、奈良市埋蔵文化財調査センター、2006年。								
7	奈良市埋蔵文化財発掘調査年報・平成19年度、奈良市教育委員会、2010年。								
8	奈良県文化財調査報告書第160集・平城京左京二・三・五条五坊一J R奈良駅連続立体交差・街路整備事業に係る発掘調査報告書 (V) 一、奈良県立橿原考古学研究 所、2013年。								

鬼神。實亦憂傷子孫。自今以後。宜加禁斷（左右京に勅すらく、今聞くならく、寺を造るに悉く墳墓を壊し、其石を採り用ゐるは、唯に鬼神を侵し驚かすのみに非ず、実に亦子孫をも憂傷するものなり。今より以後、宜しく禁斷を加ふるべし、と。）^{四七}とみえる。

これは、造寺のために古墳の石室から石材を抜き取って建築部材として転用する事態に対し、禁斷を加えたのである。当時はそういう形で古墳の破壊も行われた。この例では、「鬼神」^{四八}即ちこれまで破壊・削平を余儀なくされた墳墓の「被葬者の靈魂」に対する措置と同質の配慮を示すのみならず、その子孫に対する憂慮も示している。古墳石室の石が他に転用されていた個別の一般的な実態としては、左京一条四坊における二基の前方後円墳の破壊削平事例^{四九}などでも報告がある。従つて孝徳朝以来、天皇の勅により示されてきた趣旨が必ずしも一般には徹底されてはいなかったこともまた事実である。

ともあれ記録上は、難波長柄豊碕宮の造営時以来、宮都の建設工事に伴いその所在に既存の墳墓への破壊・削平に際して、少なくとも時の天皇はその遺族に物を賜う配慮のほか、地に酒を注いでする「祭酹」儀礼などの一定の方式で幽魂（鬼神）への慰霊を含む措置を講じるようにとの姿勢を表明してきたのである。これは単に仏教思想の影響というより、周・文王の故事を以って象徴的に繰り返された中国皇帝の儒教的徳治主義に倣うという側面のほかに、右掲宝龜十一年勅の場合では、巫覡の徒らによって実しやかに吹聴された「石の祟り」^{五〇}を忌避しようとする民俗宗教的側面をも垣間見せている。

以上わが国古代の難波長柄豊碕宮造営から平城京造営に際し、天皇により示された墳墓への配慮の姿勢は、地方官衙―ここでは伊勢斎宮の造営プラン（特に方格地割）にはどのように反映したと推察できるだろうか、節を改めて考えてみたい。

（四）墳墓の削平と方格地割（表七参照）

斎宮跡において破壊削平された墳墓と方格地割との相関関係を知るために、過去に検出された墳墓の周溝を概報等の報告データに依拠して集計し、平面図上にドットで落してみた（第五図）。小規模な墳墓が多く、完全な破壊・削平を受けているため主体部は残存しない。また、現状変更に伴う事前の緊急調査の場合は特に、調査範囲の物理的制約から周溝全体を完全な形で検出しえない場合が多い。しかも、周溝埋土からの出土遺物が少なく厳密な被削平時期の決定は難しい。しかし図上で俯瞰すると、改めて判ることがいくつかあった。いまそれを（A）「弥生時代の方形周溝墓群」と（B）「方格地割を囲む被削平古墳」とに分け、抽出できる事から次に列挙したい。ただし、現存する古墳群および今回の趣旨から外れると考えられる古里地区、塚山地区の大部分の被削平古墳についての考察は、今回は省略しておきたい。各情報 の根拠は表七の「典拠」「掲載頁」欄に記しておいた。

（A）弥生時代の方形周溝墓群（第五図）

① 斎宮跡で検出の方形周溝墓^{五二}は、現状では史跡東部は鍛冶山地区の一例（第一一九次調査・SX7945）を除き、すべてが洪積台地西端部の古里・中垣内地区に偏在し群集している。

② その方形周溝墓群も、概ね奈良古道（官道）を境に大きく南・北に分布する。古里グループ（仮称）と、中垣内グループ（仮称）とみなすことができる^{五三}。

③ 後者のグループはすぐ南に隣接する金剛坂地域の方形周溝墓群と関連して捉えるべきかも知れない^{五四}。

④ 方形周溝墓の集中する中垣内地区では今まで古墳は一基も確認されていない。

⑤ 前記SX7945以外、現状では大半の方形周溝墓の削平と方格地割との相関関係はなさそうである。

斎宮跡では地表面に墳丘の遺る方形周溝墓は皆無である。従って、例えば古里地区のSX4438（第六十七次調査）が奈良時代前期の竪穴住居などと重複するように、古里・中垣内地区の調査区では飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物などが顕著である事から、あるいはその時期の居住空間等の建造に伴い破壊・削平を受けたものも多いと、推測はできる。

中垣内地区の南側はいま史跡内で最も標高の高い微高地である。近年の調査結果から、そこには掘立柱列による一辺約百メートル四方の方形区画^{五五}が想定されている。その性格はまだ不分明ながら、泉雄二氏の考察^{五五}によると初期の伊勢斎宮などを考える上で注目されている遺構である。しかもこのエリアにはそもそも古墳が存在しなかったようで、想定されるその方形区画を伴う施設の造営には、当初から古墳のない場所であつた河川に近く、周囲より標高の高いその微高地を意識的に選択していたという事実が重要である。

この方形区画がもし仮に飛鳥時代の施設であれば^{五六}、初代斎王たる大来皇女の関連施設か、ないしは飽くまでも可能性の一つに過ぎないが、多気大神宮^{五七}の存在の可否などを改めて検討する上でも大いに注目されるところであった。しかし都の土器に習熟、悉知する山中章氏から斎宮跡の土器編年に関して疑義や批判がでている^{五八}。今後の調査研究や再検討の進捗をまちたい。ともあれこの施設周辺の方形周溝墓は遅くともその方形区画を伴う施設造営に際して最終的な破壊・削平を被ったものと推測されよう。

（B）方格地割を囲む被削平古墳（第五図）

① 塚山古墳群から南へ約四百メートル、斎宮小学校を中心とした一円にも十基前後の古墳が集合するような傾向にあり、本稿では仮称「広頭古墳群」の可能性を推定しておきたい。

② 方格地割のある史跡中央部から東部一帯（調査率の高い地域）にかけては、今までのところ、方格地割北端の三基以外に古墳の存在は確認されていない。

表(七)

斎宮跡における墳墓の削平

(2013. 8. 26現在筆者調べ)

【弥生時代の方形周溝墓】

番号	調査 次数	地区名	時代区分	遺構名称	遺構番号	備考欄 () 内は筆者の私見	典拠	掲載頁	地図 記入
1	39次	古里	弥生時代 (後半)	方形周溝 (墓)	S X 2232	外径約7.0m×6.4m ; 内径4.8～5.2m。	年報1981 (年報1986)	18・21～22頁、 24頁。(15頁)	○
2	67次	古里	弥生時代	方形周溝墓	S X 4438	内径7m以上。陸橋部。周溝は奈良 前期の竪穴住居S B 4447・4435と重 複。(遅くとも奈良前期には削平・埋 没と考えるべき)	年報1986	15頁 30～33頁	○
3	67次	古里	弥生時代	方形周溝墓	S X 4456	内径8.2m。陸橋部。(奈良前期の竪 穴住居S B 4460と重複。遅くともその時 期には削平されたと考えられる。)	年報1986	15頁 30～33頁	○
4	71次	古里	弥生中期	方形周溝墓	S X 4730		年報1987	4頁	○
5	71次	古里	弥生中期	方形周溝墓	S X 4731	周溝被削平	年報1987	4頁	○
6	72 - 1次	古里	弥生中期 前半代	方形周溝墓	S X 4730	四隅に陸橋部	年報1987	20頁	○
7	72 - 1次	古里	弥生中期 前半代	方形周溝墓	S X 4771	四隅に陸橋部	年報1987	20頁	○
8	72 - 1次	古里	弥生中期 前半代	方形周溝墓	S X 4783	四隅に陸橋部	年報1987	20頁	○
9	72 - 1次	古里	弥生中期 前半代	方形周溝墓	S X 4796	四隅に陸橋部	年報1987	20頁	○
10	72 - 2次	古里	弥生中期 前半代	方形周溝墓	S X 4438	67次調査既出・四隅陸橋部。 奈良竪穴、鎌倉溝で被削平。	年報1987	32頁	○
11	72 - 2次	古里	弥生中期 前半代	方形周溝墓	S X 4456	67次調査既出・四隅陸橋部。	年報1987	32頁	○
12	72 - 2次	古里	弥生中期 前半代	方形周溝墓	S X 4910	四隅陸橋部と推定	年報1987	32頁	○
13	74 - 1次	古里	弥生中期	方形周溝墓	S X 5020		年報1987	53頁	○
14	74 - 1次	古里	弥生中期	土壇	S X 5021	方形周溝墓の可能性あり。(未確定)	年報1987	53頁	
15	74 - 4次	古里	弥生中期	方形周溝墓	S X 5036		年報1987	55頁	○
16	76-3次	古里	弥生中期	方形周溝墓	s x 5470 s x 5471	同一遺構	年報1988	45頁	○
17	76 - 11次 北調査区	古里	弥生後期	方形周溝墓	S X 5525	後期の壺甕つて出土	年報1988	47～48頁	○
18	107次	中垣内	弥生中期	方形周溝墓	S X 7200	北東 - 南西辺で約7m。	概報1995	19・29頁	○
19	107次	中垣内	弥生中期	方形周溝墓	S X 7201	北東 - 南西辺で約6mと推定。	概報1995	19・29頁	○

番号	調査 次数	地区名	時代区分	遺構名称	遺構番号	備考欄	() 内は筆者の私見	典拠	掲載頁	地図 記入
20	119次	鍛冶山	弥生時代	方形周溝墓	S X 7945	一辺約7.8m。東周溝中央北寄り途切れる。北東隅埋土から高杯脚部二個体分出土。(史跡東部での検出は異例である。)		概報1999	36～37頁	○
21	132次	中垣内	弥生中期	方形周溝墓	S X 8349			概報2003	10・11・22頁。	○
22	132次	中垣内	弥生中期	方形周溝墓	S X 8359	一辺約8m。		概報2003	10・11・22頁。	○
23	132次	中垣内	弥生中期	方形周溝墓	S X 8365	一辺約7m。		概報2003	10・11・22頁。	○
24	132次	中垣内	弥生中期	方形周溝墓	S X 8379	一辺約10m。西隅陸橋状。		概報2003	10・11・22頁。	○
25	141次	中垣内	弥生中期	方形周溝墓	S X 8880	(図上一辺8m前後と計測)		概報2005	55～56頁。	○
26	144次	中垣内A	弥生中期	方形周溝墓	S X 9051	一辺6m前後。		概報2006	76～78頁。	○
27	144次	中垣内A	弥生中期	方形周溝墓	S X 9071	陸橋部あり。		概報2006	76～78頁。	○
28	144次	中垣内A	弥生(中期)	方形周溝墓	S X 9089	規模不明。		概報2006	76～78頁。	○
29	144次	中垣内C	弥生後期	方形周溝墓	S X 9085	一辺12m前後。後期前半。		概報2006	76～78頁。	○
30	149次	中垣内	弥生後期	方形周溝墓	S X 9591	一辺8m程度。北隅陸橋部。無文広口壺出土。		概報2007 (11月)	13頁。16～18頁。	○
31	149次	中垣内	弥生後期	方形周溝墓	S X 9594	周溝含む平面規模一辺8m以下。小型の広口壺出土。		概報2007 (11月)	13頁。16～18頁。	○
32	149次	中垣内	弥生後期	方形周溝墓	S X 9600	周溝含む平面規模一辺9m以下。無文広口壺・高杯出土。		概報2007 (11月)	13頁。16～18頁。	○
33	149次	中垣内	弥生後期	方形周溝墓	S X 9603	南西辺を検出。小型鉢・壺出土。		概報2007 (11月)	13頁。16～18頁。	○
			小計	33基	古里地区；51.5%、中垣内地区；45.5%、で圧倒的					

【破壊・削平された古墳の周溝】

1	4次	(古里C)	古墳後期 (5C末)	方墳周溝？	S X 6	方形・内径11m×ー。(削平された弥生の方形周溝墓の可能性も考慮すべき遺構である)	古里C地区 報告1973。 (年報1986)	5～6頁・ 28頁(15頁)	○
2	4次	(古里C)	古墳後期 (6C初)	方墳周溝？	S X 10	方形・内径6.6×8m；須恵器杯、杯蓋出土。東隅・西隅に陸橋部。(下記S B 21以下10棟の建築等に際し、削平された後期古墳の可能性がある)	古里C地区 報告1973。 (年報1986)	5～6頁・ 28頁(15頁)	○
3	4次	(古里C)	古墳後期 (5末～6初)	方墳周溝	S X 42	方形・内径13×13m。須恵器杯。奈良時代の溝や土坑で被削平。(下記S B 21以下10棟の建築等に際し、削平された古墳の可能性あり)	古里C地区 報告1973。 (年報1986)	5～6頁・ 28頁(15頁)	○

番号	調査 次数	地区名	時代区分	遺構名称	遺構番号	備考欄 () 内は筆者の私見	典拠	掲載頁	地図 記入
4	4次	(古里C)	古墳後期 (5 末～6 初)	方墳周溝	S X58	方形・内径8.5～7.7m (下記S B1以下10棟の建築等に際し、環境整備のため削平された古墳の可能性あり)	古里C地区 報告1973。 (年報1986)	5～6頁・ 28頁 (15頁)	○
5	4次	(古里C)	古墳後期 (5 末～6 初)	方墳周溝	S X62	方形・内径一辺8.6m (下記S B21以下10棟の建築等に際し、環境整備のため被削平古墳の可能性あり)	古里C地区 報告1973。 (年報1986)	5～6頁・ 28頁 (15頁)	○
6	4次	(古里C)	古墳後期 (5 C 末)	方墳周溝	S X69	方形・内径25m×一。埴輪出土。 (下記S B21以下10棟の建築等に際し、削平された古墳の可能性あり。)	古里C地区 報告1973。 (年報1986)	5～6頁・ 28頁 (15頁)	○
7	4次	(古里C)	古墳後期	溝跡 (周溝 の可能性)	S D65	多数の円筒埴輪など。埋土上方から奈良時代の円面硯や土馬など。 (本来はS X69と一体の古墳だったのではないか?)	古里C地区 報告1973。	5～6頁・ 28頁	×
8	38次	塚山	古墳後期 (5 C 末～)	方墳周溝	S X2160	一辺16.5m。古墳周溝と判断。	年報1981 (年報1986)	10・13～14頁 16頁/ (15頁)	○
9	38次	塚山	古墳後期 (5 C 末～)	方墳周溝	S X2210	一辺12m以上。5C末～6C初頭の無蓋高杯1点のみ出土。古墳周溝と判断。	年報1981 (年報1986)	10・13～14頁 16頁/ (15頁)	○
10	38次	塚山	不明	円墳周溝	S X2217	直径約19m。古墳周溝と判断。	年報1981 (年報1986)	10・13～14頁 16頁/ (15頁)	○
11	39次	古里	古墳時代	方墳周溝	S X2230	一辺約12m 内径8m以上。	年報1981 (年報1986)	18～19頁、21～ 22頁、24頁。 (15頁)	○
12	39次	古里	古墳時代	方墳周溝	S X2231	一辺約8.2m 内径6.6m。	年報1981 (年報1986)	18～19頁、21～ 22頁、24頁。 (15頁)	○
13	41次PQR トレンチ	塚山	古墳時代	方墳周溝	S X2330	内径8m以上。	年報1981 (年報1986)	33・37～38頁。 41頁。 (15頁)	○
14	41次PQR トレンチ	塚山	古墳時代	方墳周溝	S X2331	内径5m以上。	年報1981 (年報1986)	33・37～38頁。 41頁。 (15頁)	○
15	41次PQR トレンチ	塚山	古墳時代	円墳周溝?	S X2333	内径5m以上。	年報1981 (年報1986)	33・37～38頁。 41頁。 (15頁)	○
16	41次PQR トレンチ	塚山	古墳時代	方墳周溝	S X2334	内径9m以上。	年報1981 (年報1986)	33・37～38頁。 41頁。 (15頁)	○

番号	調査 次数	地区名	時代区分	遺構名称	遺構番号	備考欄	() 内は筆者の私見	典拠	掲載頁	地図 記入
17	68次	古里	古墳後期	円墳周溝	S X 4562	内径14.5m。7C前半には埋没し始め、奈良前期には完全に埋没。円墳の削平。		年報1986	15頁・42頁	○
18	72 - 3次	古里	古墳後期	円墳	塚山1号墳	径約21m		年報1987	37頁	○
19	72 - 4次	古里	古墳後期	方墳	塚山2号墳	一辺約18m。この地域の古墳は鎌倉時代にも削平が進んだようだ。地元では「田所さんのお稲荷さん」と呼んでいた塚。		年報1987	38～39頁	○
20	76 - 6次	塚山	古墳時代	方墳	S X 5500	東西14m×南北15m。(周溝には奈良時代の土坑墓S X 5498・5499が重複。この古墳はそれ以前に削平を受けたか、周溝だけが埋没していたか。墳墓は塚山周辺に引き続き造られたか?)		年報1988	46頁	○
21	112次	塚山	古墳時代	塚山3号墳	S X 7490	周溝を含め直径約18mの円墳と想定。現地に修景保存。		概報1996	53～55頁 58頁	○
22	130次	西加座	古墳時代	円墳	S X 5379	内径東西13.7m、南北12.5m。(比較的に平安時代後期の掘立柱建物と重複も顕著だが、奈良時代後期の土壇S K 8 2 4 3が周溝と重複するので、それ以前に削平を受けた可能性がある。)		概報2002	4～6頁	○
23	110 - 1次	竹川	7C前半頃	方墳周溝	S X 4796	埋土中程から完形の須恵器杯。		町報告13 (1997年)	4～7頁。	○
24	110 - 1次	竹川	7C前半頃	方墳周溝	S X 4797	溝心心間で約10.2m。弥生壺底部片、溝埋土中程から須恵器杯など出土。(弥生方形周溝墓が7C代に削平ないし埋没した可能性はないか?)		町報告13 (1997年)	4～7頁。	○
25	174 - 8次	下園東	古墳時代	円墳	古墳	径12m。古墳時代後期の円墳が削平されたもの。(現説史料では重複する掘立柱建物9棟は全て平安前期～後期のもの。その時までここに古墳がぼつんと一基だけあったとは考えにくいので、方格地割の造営時には削平されたと考えたい。)		現説資料(明和町) 2011. 10. 1		○
26	178 - 4次	広頭	古墳時代後期	方墳	古墳1	一辺約10mの方墳。調査区西端。		現説資料(明和町) 2013. 3. 17		○

番号	調査 次数	地区名	時代区分	遺構名称	遺構番号	備考欄	典拠	掲載頁	地図 記入
27	178 - 4次	広頭	古墳時代 後期	円墳	古墳2	径約7m。古墳3と重複。中央部に 埋葬施設。2を拡大して3造ったと 推定。(25 - 9次で既検出の周溝の 全容が明らかでない。)	現説資料 (明和 町) 2013. 3. 17		○
28	178 - 4次	広頭	古墳時代 後期	円墳	古墳3	径約15m。中央に埋葬施設。古墳 2と重複。2を拡大して3造ったと 推定。(25 - 9次で既検出の周溝の 全容が明らかでない。)	現説資料 (明和 町) 2013. 3. 17		○
			小計	28基					
29	6 - 2次 B トレンチ	荻干	古墳時代	円墳周溝	S D21・22	内径 (10m)。(出土遺物は埋没か削 平の時期を示すか?坂本古墳群の一部で は)	報告 I・1974 (年報1986)	9頁。P L 5 (15頁)	○
30	15次	齋宮 小学校	古墳時代	円墳周溝	S X 705	径14～17m。 須恵器長頸壺(奈良前期)。	斎王宮跡発掘 1978 (年報1986)	101～104頁。 (15頁)	○
31	15次	齋宮 小学校	古墳時代	円墳周溝	S X 715	径18.5m。陸橋部あり。 須恵器長頸壺(奈良前期)。	斎王宮跡発掘 1978 (年報1986)	101～104頁。 (15頁)	○
32	15次	齋宮 小学校	古墳時代	方墳周溝?	?	径10～12m。土師器杯・甕、 灰釉碗など(平安末?)。	斎王宮跡発掘 1978 (年報1986)	101～104頁。 (15頁)	○
33	25 - 9次	広頭	古墳時代	円墳周溝	S D1590	内径 (14m)。(178 - 4次と同遺構。 古墳3のことか。)	(年報1986) 現説資料 (明和 町) 2013. 3. 17	(15頁)	—
34	25 - 9次	広頭	古墳時代	円墳周溝	S D1591	須恵器長頸壺(奈良前期)。 (178 - 4次と同遺構。)	(年報1986) 現説資料 (明和 町) 2013. 3. 17	(15頁)	—
35	32次	塚山	古墳時代	方墳周溝	S X1685	S X1699より大型。	(年報1986)	(15頁)	○
36	32次	塚山	古墳時代	方墳周溝	S X1699	内径一辺8m。	(年報1986)	(15頁)	○
37	33次	篠林	古墳時代	円墳周溝	S X1810	内径9.4m。陸橋部。中央部に土坑。	(年報1986)	(15頁)	○
38	33次	篠林	古墳時代	円墳周溝	S X1834		(年報1986)	(15頁)	○
39	33次	篠林	古墳時代	方墳周溝	S X1835	一辺12m以上。	(年報1986)	(15頁)	○
40	45次	樂殿	古墳時代	円墳周溝	S X 2735	内径約13m。地形的にやや高い 所に立地。古墳の削平跡と推定。 奈良初頭の土師器杯・皿など。	年報1982	20～22頁。	○
41	45次	樂殿	古墳時代	円墳周溝	S X 2760	周溝埋土から奈良初頭頃の須恵 器杯底部1点出土。	年報1982	20～22頁。	○

番号	調査 次数	地区名	時代区分	遺構名称	遺構番号	備考欄	（ ）内は筆者の私見	典拠	掲載頁	地図 記入
42	53 - 9次	木葉山	古墳時代	円墳周溝	S X 3830	内径7m。土師器杯1点。		年報1984 (町報告2)	56頁。59 ～60頁。 (14～16頁)	○
43	57次	東加座	古墳時代	円墳周溝	S D 3687	内径9m。近接して同時期の掘立柱建物 S B 3 6 7 1 があり、奈良末～平安初期 のS B 3688・3689・3691・3692などが重 複する。(遅くとも奈良後期以降には削 平された後期古墳と想定。)		年報1984	39頁41頁	○
45	65 - 1次	塚山	古墳時代	円墳周溝	S X 4310	内径約11m。北側に陸橋部。 周溝から須恵器長頸壺(奈良前期。 遺物の時期以降に削平された古墳 と考えるべき)。		年報1986	4～8頁。 13～15頁。	○
46	65 - 2次	樂殿	古墳時代	円墳周溝	S X 4330	内径12.6m。(奈良前期削平?)		年報1986	10頁 13～15頁	○
47	65 - 2次	樂殿	古墳時代	円墳周溝	S X 4335	内径9.2m。北東に陸橋部。(奈良 前期削平?)		年報1986	10頁 13～15頁	○
			小計	17基						
48	76 - 6次		奈良時代	土坑墓	S X 5498	人骨出土。S X 5500に重複。		年報1988	46頁	×
49	76 - 6次		奈良時代	土坑墓	S X 5499	S X 5500に重複		年報1988	46頁	×
			小計	2基						
50	45次	樂殿	不明	方形周溝?	S X 2734	S X 2735より新。一辺6m弱。 記述なく性格等は不明。		年報1982	21～22頁。	×
51	151 - 5次	東浦	不明	方形周溝	S X 9635	東北隅部分のみ検出。周溝幅 約2.7mに復元可能。		町報告24	4～5頁	○
			小計	2基						
			総計	8 2基						
52	付録	塚山	古墳後期	現存古墳 (13基)	塚山1～13 号墳	上記1～3号墳の他に、4～13号墳。 これ以外に分布調査や航空写真で 判明したものが8基(14～21号墳) ある。		概報1996	57頁第25図	○
53		塚山	古墳後期	分布調査 航空写真	塚山14～ 21号墳	(平面図には現存古墳と同様の記号 で表してある。)		概報1996	57頁第25図	○

番号	調査 次数	地区名	時代区分	遺構名称	遺構番号	備考欄	典拠	掲載頁	地図 記入
54	付録	坂本 (史跡外)	古墳後期 (7C前半)	現存県指定8 基	坂本1～8 号墳	金銅装頭椎大刀で著名な1号墳 から8号墳まで県指定史跡にこ。	明和町史 2005年	176～180頁	×
			合計	21基					
55	5次	古里D	不明	溝	S D 16	(方形周溝になる可能性も要再検討)	古里D地区 報告1974	P L 3	×
56	5次	古里D	不明	溝	S D 28	(円形周溝になる可能性も要再検討)	同上	P L 3	×
57	5次	古里D	不明	溝	S D 37	(方形周溝になる可能性も要再検討)	同上	P L 3	×
58	5次	古里D	不明	溝	S D 43	(方形周溝になる可能性も要再検討)	同上	P L 3	×
59	5次	古里D	不明	溝	S D 59	(陸橋部を持つ。やや長方形にはな るが、一応可能性を再検討してみる ことも必要と思う)	同上	P L 3	×

③ 方格地割の外周を、北辺から西側へと破壊削平された古墳の周溝が大きくL字状に分布する状況は、それらが方格地割造営計画と無関係ではないことを示唆している。今のところ、それらは図上では二十六基を数えている。

④ そのL字状地帯に位置する楽殿地区のSX2735及び2760、塚山地区のSX4310、仮称広頭古墳群のSX705及び715、とSD1591の六基からは、奈良時代初頭を中心とした時期（七世紀末～八世紀前葉）の土師器や須恵器が出土したという共通項があり、それは破壊削平された時期の手がかりとなる有力な遺物情報である（五九）。

⑤ 上記出土遺物中、少なくとも須恵器長頸壺（四点）は、和銅二年の勅に「普く祭酹を加へて。以て幽魂を慰めよ」とみえる「祭酹」儀礼に関わる器（六〇）には相応しい、と考えている。

⑥ 右記二十六基の中には、坂本古墳群で中野敦夫氏が追跡調査したように（六一）、先の大戦中の開墾で破壊・削平された古墳のあったことも留意すべきであろう。ただその特定は困難で、二十六基の周溝跡のすべてを方格地割との相関関係において捉えることは差し控えたい。次に、とりわけ方格地割の造営と直接に関係がありそうな事例（上記②から④にかかわる九基の古墳周溝）について考えてみたい。

○方格地割内（東加座第五十七次調査SD3687・西加座第一三〇次調査SX5379・下園東第一七四―八次調査地点古墳）の三基…▼表七の四三、二二、二五を参照。

この三基は古墳時代後期の円墳が破壊・削平されて遺った周溝である。SD3687は奈良時代後期の掘立柱建物（SB3671）が近接し、奈良時代末～平安初期の掘立柱建物（SB3688など四棟）が重複する。SX5379にも奈良時代後期の土坑（SK8243）が重複する。最近、下園東地区で新たに検出された円墳周溝（第一七四―八次調査地点古墳）は重複する掘立柱建物九棟がすべて平安前期～後期のものである（現地説明会資料による）。ただ、検出地点が方格地割の内部ゆえ、平安時代前期～後期までその円墳が遺されていたかどうかは疑問。これら三基の円墳は方格地割の計画または造営段階に破壊・削平されたと考えるのが自然である。

○楽殿地区のSX2735及び2760、塚山地区のSX4310、仮称広頭古墳群のSX705及び715、SD1591の六基…▼表七の四〇、四一、四五、三〇、三一、二八（三四と同じ）を参照。

第四十五次調査区（楽殿地区）の二基の円墳周溝（SX2735と2760）からは奈良時代初頭の土師器杯・皿や須恵器杯底部が出土し、第六十五―一次調査区（塚山地区）では円墳周溝SX4310の底部に近い埋土から七世紀末～八世紀前葉頃の須恵器長頸壺二点が出土した（第六図）。また第十五次調査区（斎宮小学校）の二基（SX705と715）及び第一七八―四次調査南地区（広頭南地区）のSD1591（いずれも円墳周溝）からも奈良時代前期の須恵器長頸壺が出土している。

以上、方格地割に沿って大きくL字状に分布し、かつ奈良時代初頭を中心とした時期（七世紀末～八世紀前葉）の土師器や須恵器が出土した少なくとも上記「六基」の古墳（SX2735と2760、SX4310、SX705及び715とSD1591）については、方格地割の設計構想・造営計画との相関関係においてこれを解釈してみることは、今後の斎宮跡の解明にとつても重要であろうと考える。最後にその点の推測を重ねてみたい。

（五）六基の古墳削平時期とその背景

大きく方格地割の北側から西側を取り囲むようなL字状地帯の中の六基の古墳（方格地割内の三基を入ると九基）については、方格地割の初期造営計画との関係で意図的に削平されたものと考ええる。少なくともその六基からの出土遺物の時期には、いずれも七世紀末～八世紀初頭ころを中心とするという共通点がある。その点を重視すれば、ほぼ同時期に一定の儀礼を伴い削平された可能性をそれは示唆している。

通常、出土遺物の生産地における遺物学的年代観とそれが実際に使用ないし破棄された時期（消費地での最終的年代）との間には伝世期間を含む一定の「タイムラグ」^(※)が介在する。従って、少なくとも六基の古墳の破壊・削平が「七世紀末～八世紀初頭」頃をあくまでも上限として、それ以降の「ある時期」に行われたとしても不都合はなく、むしろその方が真実に近い。ではそれら六基の削平時期は一体いつ頃であらうか。候補としては大きく三とおりがある。①は文武朝、②は聖武朝、③は光仁～桓武朝である。

まず、①文武朝の場合。すでに指摘^(※)もあるように、「伊勢大神宮」の名称が諸社に優位して国史上に初めて登場したのは『続日本紀』文武三（六九九）年八月己丑条である。その前後の記事には、例えば持統六（六九二）年三月「遂幸伊勢（伊賀・伊勢・志摩）」、同八（六九四）年十二月「遷居藤原宮」、同十一（六九七）年「禪天皇位於皇太子」、文武二（六九八）年七月「伊勢守、美濃守」の任命、同八月「藤原姓（行政）と中臣姓（神祇）とに職掌分担」、同九月「伊勢の麻績連と服部連に氏上と助を定める」、また「遣當耆皇女待于伊勢斎宮」、同十二月「遷多氣大神宮于度會郡」、文武四（七〇〇）年六月「勅刑部親王、藤原不比等等、撰定律令」、大宝元（七〇二）年正月「文物之儀。於是（有）備矣。」、同二月「遣泉内親王待於伊勢斎宮」、同八月「撰定律令。於是始成。」、および「斎宮司准寮。属官准長上焉。」、大宝二（七〇三）年正月「當麻真人橘為斎宮頭。」、同二月「始頒新律於天下。」、同十月「太上天皇幸參河国。」、同十二月「太上天皇崩。」などがある^(※)。

細部に異論はあろうが、晩年にかけての持統は、草壁の子（＝孫皇子）文武の即位を実現したばかりか、新都城造営、律令公布、伊勢大神宮祭祀に関わる諸整備などを踏まえて、文武による新しい律令制国家の門出を莊嚴し、その威容を見届けていったことが判る^(※)。因みに、原秀三郎氏は、律令施行に伴い大宝二年三月に大安殿で挙行された「大祓を中心としたこの二か月間の行事を通して、国郡制に象徴される律

令制的地方行政組織への転換がなしとげられ」^{〔天武〕}、それにより「イデオロギー分野をも含め律令体制の大枠が完成した」(同上)とされた。ならばそういう記念すべき時期に、伊勢大神宮と並ぶ伊勢斎宮の環境整備の一環として、慰霊祭式を伴う少なくとも上記六基古墳の削平もあったと考えることは可能であろう。前述した出土遺物の年代観とも矛盾はしない。

次に、②の聖武朝の場合、候補はさらに大きく二つある。(1) 神亀四(七二七)年および天平二(七三〇)年と(2) 天平十一(七四〇)年とである。前者(1) 神亀四年九月は娘の井上内親王が伊勢斎宮に下向した年で、その八月には斎宮寮官人一二一人の補任もあった^{〔天武〕}。天平二年は「斎宮に供給する年料は、神戸からの庸調物をやめ官庫負担とした」^{〔天武〕}年であり、伊勢大神宮奉幣使を五位已上と定め、祢宜、内人の位を進めてもいる。そして後者(2) は史上有名な聖武の関東行幸の時に当たっている。幼少井上女王の急かれた卜定(養老五年)が、「不比等や元明天上天皇の意向に沿って、皇太子首の即位を既成事実化するために慎重に執り行われたこと」^{〔天武〕}を想起すれば、即位後の聖武が伊勢斎宮に殊更に強い関心と思い入れを持っていても不思議ではない。加えて、別稿^{〔モロ〕}で指摘したように、「斎内親王」という正式呼称の創始という面からも、聖武朝は初期斎宮史上の一つの画期に当たっていた。以上の点からも神亀四年～天平十二年は伊勢斎宮への環境整備の一環としては理解しやすいところである。

聖武の関東行幸の目的や意義については旧稿に卑見^{〔モロ〕}を述べたので繰り返さないが、タイムラグを考慮に入れた出土遺物の使用年代観からもその時期ならば許容範囲には入るであろう。特に行幸に合わせて執行された環境整備の可能性は考えられる^{〔モロ〕}。関東行幸に先だつ天平九(七三七)年十一月に「使ひを畿内七道諸国に馳せて天下の神宮を増し飾へた」^{〔モロ〕}のは「年穀不豊にして。疫癘頻に至る。」(同上)状況にあつて「広く蒼生の為に遍く景福を求め」(同上)んとしたからだ^{〔モロ〕}と聖武は述懐している。その際、娘のいる伊勢斎宮は天皇にすれば伊勢大神宮とは不可分一体の施設ゆえ、当然伊勢斎宮への政治的配慮も含まれていた可能性の強いことも付け加えておきたい。

一方、「中央政府の地方に対する政策は、天平十年頃から変化し始めてくる」^{〔モロ〕}とする米田雄介氏によれば、それは即ち「在地秩序の混乱を避け支配の安定化を図るために、伝統的な在地首長層である譜第層を重視する政策」(同上要約)であつたという。現地の後期古墳群が彼ら譜第首長層の系譜と無関係でないなら、伊勢斎宮で想定される丁重な古墳削平の儀礼と整地が、行幸に備えて天平十二年以前にあつたと思えば、当時の政策とも整合性をもつものと言えよう。以上、聖武朝の場合は二案(1、2)のいずれにも可能性はあるだろう。山中章氏のいう斎宮第Ⅰ期第二段階から第三段階(の初期)の画期^{〔モロ〕}に相当しそうである。

最後に、③光仁～桓武朝について考えてみよう。光仁朝の離宮および斎宮に対する一連の整備と意義については旧稿^{〔モロ〕}に述べたが、方格地割造営を延暦四(七八五)年とする立場からは③は最もあり得べき時期であるし、また都合もよい。ただ、上記出土遺物(七世紀末～八世

紀初頭)の使用年代をここまで下げるのは、いかにタイムラグを考慮するにしても、さすがに違和感がありすぎるように思う。その段階には恐らく、六基の古墳は既に破壊・削平されて久しかったと考えるざるをえないのである。

従ってあくまでも現状では、方格地割を大きくL字状に取り囲む少なくとも上記六基(ないし九基)の古墳の削平は②聖武朝に照準を当てるのが最も蓋然性が高い。つまり方格地割の初期の造営計画案はその当時から既にあり、必要な古墳削平にも限定的に着手したが、例えば都での種々の政治情勢の変化や在地における郡司層の利害の調整など、種々の問題があつてすぐには実現せぬまま機を逸し、その初現形態を含む実際の造営事業が実現したのはようやく光仁・桓武朝においてであつた、と想定するのである。そして、実際の方格地割の造営は、「宝龜」延暦年間頃を境に駅家の整理・改廃が急増^(モ)することと相俟つて進んだ「平安時代初頭における全国的な交通制度の変革」(同上)と軌を一にした事業でもあつたことを考慮しておくべきなのである。

今後の課題として憶測を重ねると、広大な方格地割の造営には労働力をはじめ在地有力者層に依拠する問題があつたであろう。とりわけ現地での最大の関心事は官道(古道)の寸断と交通路の改変にあつたと推測する。もとより伊勢斎宮の立地は、神郡西端に位置する旧多氣川右岸の洪積台地上において外にはあり得ず、そこが水陸交通の要衝であつた^(モ)ことは甚だ重要で、志摩・伊勢神宮へ通じる官道が史跡西部から南東方向に向かつて横断貫通していたからである(第五図)。言うまでもなく、駅家関連の業務は郡司層に負うところが大きかつた^(モ)。「租庸調類の国衙・中央への運上が綱領郡司の担うところ」^(モ)、交通運輸機能は郡家本来の属性と不可分であつた^(モ)点からみても、多氣・度会神郡司らにとつても、その造営事業は自らの生活基盤のみならず存在価値にもかかわる課題で、彼らの担ってきた社会的任務にとつて不可欠な交通資本への前代未聞の現状変更を意味したであろう。国衙や京への運上ばかりではない。恒例の神宮祭祀に関わる他国神戸からの奉獻物^(モ)を伊勢大神宮へ搬送する際にも、彼らは重要な役割を担つたに違いないからである。それゆえ、在地有力者層の系譜と共に存在したであろう複数の古墳を破壊・削平することと方格地割造営による官道(古道)の寸断、改変というのは、彼らの日常生活に大きな動揺や何らかの抵抗などをもたらしたのではないかと想像されるのである。方格地割の造営プランが現史跡内では最も墳墓の少ない地域に設定されているのは、在地有力者への政治的配慮からであるに違いないと推測する。

重ねて、伊勢斎宮の立地からみた交通運輸機能の重要性は、その地が伊勢湾の形的形津へもつながる旧多氣川の渡河地点でもあつたことからも再確認できる。養老「雜令」には「凡要路津濟。謂。不必大路。當人往来。有要便者皆是也。不堪涉渡之處。皆置船運渡。依至津先後為次。国郡官司檢校。及差人夫。充其度子。謂。以雜徭差配。二人已上。十人以下。每二人。船各一艘(凡要路ノ津ワタリニハ。謂ハ。必ズシモ大路ナラズ。当二人ノ往来ニ。便ヲ要スルコト有ルハ皆是ナリ。涉リ渡ルニ堪ヘザラム処ハ。皆船ヲ置キテ運ビ渡セ。津ニ至ラム先後ニ依リテ次ヲ為セヨ。国郡

ノ官司檢校シ。及ビ人夫ヲ差シテ。其ノ度子ニ充テヨ。謂ハ。雜徭ヲ以テ差配スナリ。二人已上。十人以下トシ。二人毎ニ。船各一艘トセヨ。」^{八三}と見え、差遣わされる「度子」（渡子・和太之毛利）は「雜徭」を以て充當せられ、国郡官司の檢校下に運用されたとなれば、伊勢齋宮でも神郡司の関与は不可欠だったのでないかと思う。後の『日本後紀』逸文延暦二十（八〇二）年五月甲戌条にも「路次の諸国をして貢調の時、津濟の処に舟楫・浮橋等を設けしめて、長えに恒例と為せ」^{八四}と勅している。従つて、方格地割の造営による官道（古道）の寸断と交通路の変更には、如何に国家権力といえども在地神郡司らをはじめ有力者層の協力なくしてはなしえなかったと推測する。しかし一方では、そういう方格地割の造営による幹線道路の再編成というのは、在地有力者たる郡司層の伝統的な政治力を時代に合わせて巧妙に齋宮寮運営等に取り込むための政治的実現形態の一種でもあったかも知れない。寮頭と国守との兼官事例が顕著化したこととも無関係ではないだろう。

朝廷側からみた国郡司らの懈怠・怠慢や不正問題^{八五}などは早くからあったが、後代、遅くとも九世紀半ば以降には運輸をめぐる非律令制的な状況は日常化していた。承和二（八三五）年、左右京職五畿内近江等の国では「威勢之輩（諸衛府諸家人等）」が「往還ノ人馬ヲ強雇」して「民を愁苦セシム」^{八六}事態が知られ、下つて寛平六（八九四）年には上総越後等の国々にも類同の状況があり、厳しく禁断を加える旨の官符が尾張、参河、遠江、駿河、近江、美濃、越前、加賀、能登、越中等の諸国に下知された^{八七}。昌泰二（八九九）年、坂東諸国の富豪の輩は群党を結び掠奪をなす「僞馬之党」^{八八}としても知られ、「山道之駄ヲ盗ミテ以テ海道ニ就キ。海道之馬ヲ掠メテ以テ山道ニ赴ク」（同上）凶賊集団と化していた。そして、十世紀中葉頃には「律令体制下のような調庸運送システムはすでに崩壊していた」^{八九}のであったという。これは勿論、「院宮王臣家」^{九〇}が各地の富豪浪人らと組んで私的に莊園化を進めた社会情勢の中で、交通機能を担つて来た在地富豪層らがその威を借りて常習化するに至つた所業の一端であつたろう。

伊勢齋宮における方格地割の解明はまだそういう時代に至る以前の段階での課題であり、九世紀中葉以降の事情と直接には結びつかない。しかし方格地割の造営は、郡家の所在や実態、大神官司や郡司層らの利害、動向などと無関係ではなく、そういう視点からのアプローチも今後には必要になることを指摘して、この未熟な稿をひとまず終えることにする。

（六）むずびにかえて

現代に至るまでに多くの破壊があつたとはいえ、史跡内に塚山古墳群が現存すること自体が伊勢齋宮の造営にあつても必要以上の破壊・削平は行わず、平城京や長岡京で山中章氏が指摘したように、「意識的に遺された古墳があつた」ことを物語っている。

史跡中央部から東部にかけて造営された方格地割は、墳墓の最も少ない地域に計画設定されたものであることが図上に俯瞰して一目瞭然で、それが本稿の起点でもあつた。今回明らかにし得たことや残された課題も含め、卑見を箇条書きにして結びにかえたい。

・都城造営などに際し破壊削平の避けがたい墳墓について、時の天皇はその被葬者の靈魂およびその関係者に配慮して祭酌儀礼を行わせるなどの措置をとり、必要以上に墳墓を荒げない姿勢を示そうとした。

・その背景には、中国における君主の理想像として長く伝承されて来た西周文王（姬文）の故事（天下の主として暴露した遺骨の埋瘞）があり、それがわが国の天皇にも聖王の徳治姿勢として擬制的に受容されたことは、まず間違いない。

・都におけるそのような天皇の政治姿勢は、一地方官衙の伊勢斎宮における施設造営の上にも反映され、対在地有力者層への政治的配慮とも相俟って、最も墳墓の少ないエリアに方格地割という形態を以て中核施設が建造されることにもつながった。

・特に方格地割の平面プランとそれをL字状に取り囲むように分布する被削平古墳との間には相関関係を認めざるをえない状況がある。

・方格地割に沿ったL字状地帯に分布する少なくとも六基の古墳周溝からは、七世紀末から八世紀前葉までに収まるほぼ同時期の遺物が出土するという共通項があり、方格地割の平面プランを意識にいたした同時並行的な削平であったことを物語っている。

・環境整備としての六基（ないし九基の）古墳の削平時期、即ち方格地割造営計画案の初現は奈良時代的前半代、聖武朝にその契機を求めることができる、と考えた。

・しかし、都や在地における種々の政治的事情もあつてか、その造営計画の実現には時間を要し、光仁く桓武朝に至り漸く着手されたものであるが、それは同時に「宝亀く延暦年間頃を境に駅家の整理・改廃が急増」（中村太一氏）することと相俟って進んだ「平安時代初頭における全国的な交通制度の変革」（同上）と軌を一にした事業でもあったと考えられる。

・その実現のためにクリアしなければならなかった現地サイドでの最大の課題は、交通運輸機能が郡家本来の属性と不可分であった（註八一前掲）点からみても、伊勢・志摩に通じる幹線道路である官道（古道）の寸断による大幅な現状変更であったに違いない。

・いまだ郡家の発見・確認のない現状では地元郡司層の動向を方格地割出現の政治的意味に関連づけて議論するには限界があり、今後の発掘成果を注視して行かねばならない。

・触れる機会を逸したが、方格地割を墳墓の少ない史跡東部に設定したのは、大神宮や伊勢斎宮自体が血臭や死穢を忌避する^忌性格の役所であった点も作用していたかも知れない。また、方格地割造営（官道の寸断）には、光仁朝における「神郡内からの神宮寺の追放」という政治課題とも関連させるほか、有力寺院等による神郡域への経済的浸食等の問題も当然考慮しておく必要がある。

【註】

（一）…わが国にも「且守且耕軍糧有儲」の文言が新訂増補国史大系『続日本紀』後篇（吉川弘文館、一九八四年）、卷三十九、延暦五年四月庚午条、五一九頁に

見える（新訂増補国史大系『類聚三代格』前篇、吉川弘文館、一九八三年、巻七、二八七頁、延暦五年四月十九日太政官謹奏に相等。以下は『三代格』と略す）。米田雄介著『郡司の研究』（法政大学出版局、一九七六年）、二〇三頁 参照。

- (二) 米倉二郎「東亜に於ける方格状地割の展開」『地理学評論』、一九五五年七月号所収。好並隆司「曹魏屯田における方格地割制」『歴史学研究』一〇号、一九五八年十月、二二四号所収）など。

- (三) 経年的な発掘調査概報や調査報告書が基本。他に『古代文化』（古代学協会、一九九一年第四三巻第四号）所収「国史跡斎宮跡調査の最新成果から」（泉雄二と共同執筆）は当時、角田文衛先生から「民俗学や美術史関係者も含め幅広い専門家に斎宮跡調査の経緯や現状を知ってもらえるように配慮して」とのご指導のもと執筆した。その後、大川勝宏「光仁・桓武朝の斎宮―方格地割形成にみる斎宮の変革―」（同誌第四九巻第十一号、一九九七年所収）、山中章「斎宮方格地割の設計」（『条里制・古代都市研究』通巻十七号、二〇〇一年所収）。『明和町史斎宮編』（明和町、二〇〇五年）や泉雄二著『伊勢斎宮跡』（同成社、二〇〇六年）、などがある。

- (四) 後述するように、方格地割の造営によりそれまで史跡中央部を横断していた奈良時代の古道が寸断されたことは、「八世紀末〜九世紀初頭をエポックとして、七世紀後半に建設された駅路の多くがいったん廃絶していることが分かってきた」（中村太一著『日本の古代道路を探す―律令国家のアウトバーン』、平凡社、二〇〇〇年、四三頁。他に五三頁、五六頁など参照）という事実にも照し合せても符合することではないかと考える。

- (五) 通称中町裏で実施された第九二次調査では、方格地割を構成する区画溝SD六五二〇と柵列SA二八〇〇との切り合い（新旧）関係を確認できる絶好機であったが、担当者の取り返しのない不注意で逸してしまったのが悔やまれる（『斎宮跡調査概報一九九二年』、三二〜三六頁）。拙稿「宝亀二年の造斎宮使の意義について（素描）」（三重県埋蔵文化財センター紀要第八号、一九九九年所収）、一三〇頁でも指摘したことがある。

- (六) 三重県斎宮跡調査事務所編『斎宮跡調査概報一九八六年』、第六五次調査、四頁〜一五頁。PL2〜4。

- (七) 概報作成時に、(1) 古墳時代の遺物が出土していない、(2) 古墳周溝の底部はこんなに凸凹ではない、との理由で「被削平古墳の周溝」だとした筆者の考えには決裁が下りず、止むなく指示に従い奈良時代の「円形周溝」と報告した経緯があり、今も責任を感じている。既に下村登良男氏から批判があるのは当然である（『斎宮跡調査による検出古墳』『明和町史 史料編第一巻―自然・考古―』二〇〇四年、四四九頁）。

- (八) 『日本書紀』下（岩波日本古典文学大系、一九七〇年）、三一六〜三二七頁、孝徳天皇白雉元年冬十月条。前掲『日本書紀』（同、五二〇〜五二二頁）、持統天皇七年二月己巳条。『続日本紀』前篇（新訂増補国史大系、吉川弘文館、一九七二年）、巻四、四〇頁、元明天皇和銅二年十月癸巳条。

- (九) 『呂氏春秋』に「古より今に及びて、未だ亡びざるの国有らず。亡びざるの国無きは、是れはられざるの墓無きなり。」（国訳漢文大成經子史部第二十巻、国民文庫刊行会、一九二四年、孟冬季第十、安死、一五五頁）といい、梁の劉峻と共に「書淫」と評された皇甫謐もその「篤終」中に「古来、いまだ死な

ぬ人はおらず、また発かれぬ墓もない」『晋書』中華書局出版、一九九一年第四次印刷、卷五十一、列伝第二十一、一四一七頁」と『呂氏春秋』並みの事をいい、蔵書家でもあったが孝経一卷だけを所望して薄葬を望んだ。『孝経』随葬については、吉川忠夫「六朝時代における『孝経』の受容・再説」『古代文化』二七巻七号、一九七五年所収）を参照。

(一〇) 漢文大系第二十巻、服部宇之吉校訂『淮南子 孔子家語』（富山房、二〇〇四年増補版第七刷）、淮南鴻烈解、巻第十五、兵略訓、三頁。

(一一) 小川琢治著『支那歴史地理研究續集』弘文堂書房、一九二九年所収、「第二篇 周穆王の征西」、一八九頁。

(一二) 福永光司著『莊子』雜篇・上（朝日新聞社、一九七八年）、外物篇第二十六、二四九～二五一頁。『史記』十（中華書局、一九八九年第十一次印刷）、卷二九、貨殖列伝第六十九、三二七一頁、三二八二頁などに掘冢（盜墓）の事が見える。

(一三) 蒲慕州著『墓葬與生死——中国古代宗教之省思』（聯經出版事業公司、民国八二年・一九九三年）、第八章「漢代之厚葬風氣及其批評」、第一節「先秦時代與薄葬有關的言論」、一三六頁。

(一四) 今井宇三郎・堀池信夫・間嶋潤一著『易經』下（明治書院、二〇〇八年）、繫辭下伝、一五九四頁に「古之葬者、厚衣之以薪、葬之中野、不封不樹、喪期無數。後世聖人、易之以棺槨。蓋取諸大過。」とす。前漢末成帝の時に光祿大夫を拝したかの劉向が奏上した薄葬論が参考になる『漢書』七、中華書局、一九八三年第四次印刷、卷三十六、劉向伝、一九五〇～一九五七頁。小竹武夫訳『漢書』4、列伝1、筑摩書房、二〇一〇年第三刷、二〇二～二〇八頁。他に、牧尾良海「漢代薄葬論の典型——楊王孫と趙咨——」『智山學報』第二二・一三輯、一九六四年）、大久保隆郎「王充の薄葬論について」『人文論究』第二六号、一九六五年）、佐藤匡玄「王充の薄葬論について」『愛知学院大学文学部紀要』第一号、一九七一年）、西脇常記「仏教徒の遺言」『中国古典社会における仏教の諸相』知泉書館、二〇〇九年）などがある。元明太上天皇が光武帝の送終の礼にならい薄葬を遺命したこと等は拙稿「不改常典の典拠と公羊伝」『鷹陵史学』第三十九号、二〇一三年所収、二九～三〇頁に触れた。延暦十一年七月廿七日にも太政官符「應禁斷兩京僧著喪儀喪」『類聚三代格』卷十九）が出ている。

(一五) 前掲『漢書』九、卷六十七、列伝三十七、楊王孫伝（二九〇八頁）。前掲小竹訳『漢書』6、八十八頁。宮川尚志「前漢時代の神仙方術」『中国宗教史研究』第一、同朋舎、一九八三年所収）、六十三頁参照。漢武帝の兄広川景王（劉越）の孫の劉去（疾）も国内にある春秋・戦国時代の墳墓を発き副葬品を盗掘した（曹海東注訳・李振興校閲『新訳西京雜記』、三民書局、二〇一二年二版一刷、卷六、二二四～二三一頁「廣川王發古冢」と伝えられる。

(一六) 前掲『史記』九、卷一〇四、列伝四四、二七七七頁。前掲『漢書』七、卷三七、列伝第七、一九八三頁。前掲『史記』十、卷二九、貨殖列伝第六九、三二八二頁（小川環樹ほか訳『史記列伝』五、岩波書店、一九七六年第二刷、一七三頁参照）。

(一七) 『後漢書』八（中華書局、一九九一年第五次印刷）、卷七十二、董卓列伝、二三二五～二三二八頁。

(一八) 前掲『晋書』卷五十一、列伝第二十一、束皙傳(一四三三頁)に、「初、太康二年、汲郡人平準盜發魏襄王墓、或言安釐王冢、得竹書數十車。」とあり、『芸文類聚』(上海古籍出版、一九九九年)卷四十、七三三頁には、「太康元年。汲縣民盜發魏安釐王冢。得竹書漆字古書。有易卦。似連山歸藏文。有春秋。似左傳。」とみえる。これは従来から『逸周書』の発見に関わって問題にされる一節でもある『隋書』中華書局、一九八七年第三次印刷、卷三三、經籍志第二八、九五九頁、及び袁宏點校『逸周書』齊魯書社、二〇一〇年、一一三頁)。陳德弟著『秦漢至五代官私藏書研究』天津古籍出版社、二〇一二年、第三章の特に二一〇～二二二頁を参照。

(一九) 前掲『晋書』卷一百七、載記第七、石季龍下、二七八一～二七八二頁。李昉等編『太平広記』(中華書局、一九八一年第二次印刷)には「国内の墳墓を皆発いた」とされる広川王の話(出『西京雜記』)をはじめ、各種の墓発きの逸話が収録されており(卷三八九～三九〇・三二〇〇～三二一二頁)、読むに大変興味深い。

(二〇) 律令研究会編『譯註日本律令』三、東京堂出版、一九七五年、五三七～五三九頁(発冢)。

(二一) 新訂増補国史大系『政事要略』前篇(吉川弘文館、一九八一年)、卷二九、一九四頁に「賊盜律云。發冢者徒三年。發徹卽座。已開棺槨者遠流。發而不徹者徒二年。其塚先穿及未殯而盜屍柩者徒一年半。盜衣服者減一等。器物者以盜論。」[集解云。古答云。屍謂露頭之名。柩。謂納槨棺之名。]とある。

(二二) 前掲『譯註日本律令』三、五三九頁。高鹽博「日本律復元に関する一考察」『皇學館論叢』第七卷第五号(通卷四〇号)、一九七四年所収、二五頁下段。

(二三) 前掲『呂氏春秋』孟冬紀第十、異用・一六三頁。文王の人徳を語る「埋瘞枯骨」故事については前掲『後漢書』二、卷六・孝順帝本紀(二七八頁)や同書四、卷二十九・鄧曄列伝(一〇二六頁)にも引かれている。

(二四) 漢・賈誼撰『賈太傅新書』(上海涵芬樓借江南圖書館藏明正徳長沙栞本景印原書版)下卷、二十四葉(卷第七、論誠)。山口察常訳註『国訳賈誼新書』(国文庫刊行会、国訳漢文大成經子史部第十、八卷、一九二四年再版)、一四九～一五〇頁。呉雲、李春台校注『賈誼集校注(増訂版)』、天津古籍出版社、二〇一〇年、二二二～二三三頁。文王が夢に槨骨に王札を以て葬るを許し、それを実行する話を語る。

(二五) 漢・劉向撰、趙善詒疏證『新序疏證』(華東師範大学出版、一九八九年)、一二八～一二九頁。より古い劉安の『淮南子』(国訳漢文大成、国文庫刊行会、一九二二年)人間篇には「文王は死人の骸を葬りて、九夷之に歸し」(五〇一頁)とす。『太平御覽』(卷三九九、人事部四〇、應夢、一八四三頁下段)は『新書』を引く。姬文については、宋朝太子率更令の何承天が上表中にも「是以玄扈之鳳、昭帝軒之鴻烈、鄧宮之雀、微姬文之徽祚。」(『宋書』卷二十九、志第十九、符瑞下・八四九頁)とみえる。

(二六) 同氏著『稿本詩經研究』通論篇、一九六〇年、五二八頁。のち『白川静著作集』一〇、詩經Ⅱ、平凡社、二〇〇〇年収録、五五二～五五三頁。

(二七) フレイザー著、永橋卓介訳『金枝篇(一)』(岩波書店、一九七〇年第八刷)、第五章「天候の呪術的調節」、一六八～一六九頁。新訂増補国史大系『日本三

代実録』前篇（吉川弘文館、一九八三年）卷十三、清和天皇貞観八年六月廿九日壬寅晦条は、天下大旱して民多く飢餓に陥つた原因が、楯列山稜（神功皇后陵）の守（陵）等による山稜樹木伐採にあつたとして冢樹伐採と災異（大旱飢餓）とを結び付けている（以下は『三代実録』と略す）。田中久夫「文獻にあらわれた墓地」（森浩一編『墓地』、社会思想社、一九七五年所収）、八八頁。

（二八）…新釈漢文大系『礼記』上（明治書院、一九九三年第十九版）、月令第六、二三〇頁。

（二九）…本稿の主旨ではないが、古くは聖徳太子が片岡の道に行き倒れた飢者を葬る逸話がある（前掲『日本書紀』推古二十一年十二月庚午朔条。一九八〇二〇一頁）。光定撰『傳述一心戒文』（大正新脩大藏經第七四卷、続諸宗部五、一九九二年所収）、卷下、六五三頁中段にもこれと同話を録す。

（三〇）…前掲『続日本紀』前篇、卷九、養老六年七月丙子条。同卷十二、天平九年五月壬辰条。

（三一）…前掲『類聚三代格』卷十七、蠲免事、天長五年七月廿九日詔。

（三二）…新訂増補国史大系『日本文徳天皇実録』（吉川弘文館、一九八四年）、卷五、四九頁、五一頁（仁寿三年二月是月条、同夏四月丙戌条）。弘仁五年における「庖瘡」流行はこの文徳実録の記事が初見ではないかと思う。

（三三）…例えば、前掲『晋書』卷五九、列伝二九、成都王穎伝（二六一六頁）には「盧志の穎に言て曰く…『黄橋に戦亡せし者八千余人有り、既に夏暑を経て、骨を中野に露すは、傷惻たるべし。昔、周王は枯骨を葬る、故に詩にも云へり『みちに死人有れば、尚ほ之をうづむるあり』』と。況や此れ等（の者）は死を王事に致せしをや！』と。穎は乃ち棺八千余枚を造り、成都国の秩を以て衣服を為りて、祭を斂め、黄橋の北に葬りて、枳の籬（まがき）を樹て之を塋域とす。又、石を刊（きざ）みて碑を立て、その赴義の功を紀し、亡者の家をして四時の祭祀する所を有らしむ。仍てその門閭に表し、常に戦亡に等を加ふ。

又河内温県に命じて趙（王）倫に戦死せし士卒一万四千余人を埋蔵せしむなり。（略）と見える（文中の「周王」は即ち文王（姬文）を指し、「詩」とは節南山の什「小弁」のことを指す）。あるいは『魏書』（中華書局、一九九二年第四次印刷）、卷七高祖紀（一五〇頁）には、連年水旱飢饉に見舞われていた大和年間の五年四月、孝文帝（時に十四歳）は「時雨するも霑はず、春苗は萎え悴るなり。諸れ骸骨の有る處は、皆救めて埋蔵し、露見せしむこと勿れ。神祇の所有らば、悉く禱祈せしむべし。」と詔しており、同書卷八、世宗紀（一九四頁）にも、「景明三年春二月戊寅、詔して曰く『此のごろ陽旱の時を積さね、農民殖を廢せり、寤言（ごげん）増して愧（は）づること、予に在ることまことに多し。州郡に申し下し、骸骨の暴露するものあらば、悉く埋瘞すべし。』と命じている。他にも前掲『魏書』卷五、高宗（文成帝）本紀、一一七頁、同卷八、世宗紀、正始三年五月丙寅条（二〇二頁）。唐代の事例には、『唐大詔令集』（宋・宋敏求編、上海学林出版社、一九九二年）、卷第一百四、高祖武徳二年九月条「收瘞隋末喪亂骸骨詔」（五四五頁）、同上・卷第一百四、太宗貞観元年四月条「掩暴露骸骨詔」（五四六頁）、同卷第二百二十五、武宗会昌四年九月十八日条詔「平潞州德音」（六一八頁）などがある。

（三四）…前掲『三代実録』前篇、卷十六、二四八〜二四九頁（貞観十一年六月十七日癸卯、廿六日壬子条）。前掲『三代格』前篇、卷十、供御事、三五八頁。

(三五) …『経国集』卷二十『群書類従』第八輯、卷第一二五所収、五五四頁。この策問は『漢書』董仲舒伝を踏まえている。舜重華、文王四乳は虫麻呂が『漢書』以外に『春秋元命苞』か、『淮南子』もしくは『白虎通』等に通じていたことを示す。なお、「虞舜無為」は『尸子』（中華書局叢書集成初編、一九九一年）卷上、仁意篇十一頁に、また「文王四乳」は同書君治篇十八頁等にも見える句である。

(三六) …なお、天平三年の対策文から唐代の昊天祭祀の知識も当時既に知られていたことを佐野真人氏が論証している（同氏「奈良時代に見られる郊祀の知識―天平三年の対策と聖武天皇即位に関連して―」『続日本紀研究』第三九二号、二〇一一年六月所収）。

(三七) …国立奈良文化財研究所編『学報第十六冊・平城宮発掘調査報告Ⅲ』、一九六二年、六七頁。泉雄二著『伊勢斎宮跡』（同成社、二〇〇六年）、V斎宮の成立、五七頁。

(三八) …『日本書紀』下（岩波日本古典文学大系、一九七〇年）、三一六～三一七頁、孝德天皇白雉元年冬十月条。大系本の訓みに従えば、「丘墓を壊られたるひと」は（先祖の）墳墓を破壊された人であり、「及び遷されたる人」とは立ち退きを余儀なくされた人を指すのである。だとすれば、前掲論文で田中久夫氏は当該条文の文意を少し取り違えられたかと思える（八七頁一二行目）。

(三九) …前掲『日本書紀』下、五二〇～五二二頁、持統天皇七年二月己巳条。

(四〇) …前掲『続日本紀』前篇、卷三、二二頁、慶雲元年十一月壬寅条。

(四一) …前掲『平城宮発掘調査報告Ⅲ』、一三頁・二〇頁、六六～六七頁。同『学報第二六冊・平城宮発掘調査報告Ⅶ』一九七六年、五三～五四頁。同『学報五十冊・平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』一九九一年、三四頁。同『学報五一冊・平城宮発掘調査報告ⅩⅣ』一九九三年、五四～六〇頁。左京一条四坊でも二基の前方後円墳が削平されていた。

(四二) …橿原考古学研究所編『平城京左京二・三・五条五坊―JR奈良駅連続立体交差・街路整備事業に係る発掘調査報告書（V）』（奈良県文化財調査報告書第一六〇集、二〇一三年）、第三章・三一頁、第五章・一四一頁。

(四三) …宝来山古墳（垂仁天皇陵）、弘法山古墳（開化天皇陵）、大安寺墓山古墳、杉山古墳、野神古墳。

(四四) …山中章氏は、平城京・長岡京において一定の基準を以て破壊される古墳と残される古墳とが存在した事実を詳細に論じている（同氏「日本古代宮都と陵墓・葬地―宮都内古墳の処理にみる陵墓意識―」『東アジア都城の比較研究』、京都大学学術出版会、二〇一一年、二〇八～二二九頁所収）。

(四五) …前掲『続日本紀』前篇、卷四、四〇頁、和銅二年十月癸巳条。

(四六) …新日本文学大系『続日本紀』一（岩波書店、一九八九年）、一五五頁に「酌は、酒を地にそそいで祭ること」とある。前掲『漢書』二二、卷九七（下）、外戚傳第六七（下）、孝元傳昭儀伝（四〇〇〇頁）の「為人有材略、善事人、下至宮人左右、飲酒酌地、皆祝延之（人トナリ材略アリテ、善ク人ニ事フレバ、

下ハ宮人左右ニ至ルマデ、酒ヲ飲ミテ地ニ酹ギ、皆之ヲ祝延スナリ。」といい、「飲酒酹地」に顔師古は「酹ハ酒ヲ以テ地ニ沃グ也」と注する。『南史』四（中華書局、一九九二年第四次印刷）、卷五一、列伝第四十一（二二六九頁）の梁・臨汝侯猷伝（文帝の孫にして、長沙宣武王懿の子）には、「性倜儻、與楚王廟神交、飲至一斛。每酹祀、盡飲極醉、神影亦有酒色、所禱必從（ひととなり倜儻にして、楚王の廟神と交はるにも、飲みて一斛に至る。酹祀する毎に、飲を尽し酔を極むれば、神影にも亦酒色有りて、禱る所必ずや従ふ）。」という。また有名な「李冰江君退治」（中国水神説話）にも李冰が江水の神祠に「舉酒酹」を行う場面がある（漢・應劭撰、王利器校注『風俗通義』下、中華書局、二〇一〇年第二次印刷、佚文・五八三頁参照）。

（四七）…前掲『続日本紀』後篇、卷三六・四六五頁。前掲『三代格』後篇、卷十九、五九一頁、宝龜十一年十二月四日「太政官符・應禁制壞墳墓事」。

（四八）…北魏で絶戸して沙門になる民が続出した時の李瑒（李安世の子）の言に「天地曰神祇、人死曰鬼。」とある（前掲『魏書』卷五十三、列伝第四十一、李孝伯、一一七七頁）。

（四九）…前掲『学報五一冊・平城宮発掘調査報告XIV』、一九九三年、五四〜六〇頁。かつて、門脇禎二氏は古墳石組みが庭池に転用された例を挙げ、「墓地という思いも、霊魂への恐れも、宅地の設定に何の妨げにもなっていない」とされた（同氏著『日本古代政治史論』塙書房、一九八一年所収「古代政治史の諸論点」三四九頁。『平城京跡第五五・五六・五七次発掘調査概報』一九九九年）。恐らく一般的にはそれが実情であつただろう（前掲田中氏論文、八七頁）。

（五〇）…前掲『続日本紀』後篇、卷三十、三七四頁、宝龜元年二月丙辰条。「西大寺東塔の心礎を破却す。其の石の大さ方一丈餘、厚さ九尺なり。東大寺より以東、飯盛山の石なり。初め數千人を以て之を引けども、日に去ること數歩。時に復た或は鳴る。是に於て人夫を益し、九日にして乃ち至れり。即ち削刻を加へて築基已に畢れり。時に巫覡の徒あり。動もすれば石の祟りを以て言を為す。是に於て柴を積て之を焼き、灌ぐに三十餘斛の酒を以てし、片片に破却して、道路に乗つなり。後ち月餘日にして、天皇不念（豫）たり。之をトふに、破石の祟りを為すとぞ。即ち復た淨地に拾ひ置きて、人馬をして之を踐ましめず。今其の寺内東南の隅にある數十片の破石は是なり。」という。

（五一）…『齋宮歴史博物館研究紀要』十四号（二〇〇五年）に所載の柴山圭子「齋宮の弥生時代」（一〜六頁）のデータはより詳細で、時期的変遷や居住空間と墓域との棲み分けなど、本稿の及ばない領域にまで踏み込んで考察しており、併せて参照されたい。

（五二）…表（二）末尾にも示したが、古里D（第五次）地区の調査では、平面図上でみる限り何基かの方形周溝墓が見落とされた可能性がある。

（五三）…明和町郷土文化を守る会編『金剛坂遺跡発掘調査報告』一九七一年。三重県埋蔵文化財センター編『織糸遺跡』二〇〇六年に、周辺地域の弥生時代の遺構を含め、再整理と検討とを泉雄二氏が行っている。

（五四）…明和町史編纂委員会編『明和町史・齋宮編』二〇〇五年、一九〇頁。泉氏前掲書、六〇〜六五頁。

（五五）…右掲註（五四）に同じい。

(五六) …泉雄二氏前掲書、六五頁（氏は「可能性は高いが、再検討の必要がある。」ともいう）。この方形区画のほぼ中央部付近に位置する第一四六次調査でL字状に検出された掘立柱塀SA9472の所属時期を、調査を担当した水橋公恵氏は「奈良時代前期〜平安時代初期の幅の中」で考えるべきだとする（調査概報、二〇〇七年、二五頁）。そうであるならば、現状では両柱列遺構には時期的整合性はないことになる。

(五七) …前掲『続日本紀』前篇、文武天皇二年十二月乙卯条の「遷多氣大神宮于度會郡」にはこれまで、さまざまな類推・憶測が重ねられている。真福寺本を是認する上では「多氣大神宮」がどこにあったかは重要な問題で、従来からある滝原神宮説（大宮町）と並んで或は候補地の一つになりはせぬかと想い巡らすと共に、それが度会郡に遷御した後に、時期は不明ながらあるいは竹氏に対して「竹神社」奉斎の勅許も下されたのではと更に個人的には憶測を重ねるものもある。いずれも将来の課題である。

(五八) …山中章「斎宮・離宮院変遷の歴史的背景―離宮院遷宮にみる古代王権と伊勢太神宮―」（角田文衛監修、古代学協会編『仁明朝史の研究―承和転換期とその周辺』、二〇一二年所収）。山中氏は斎宮跡土器編年案の第一期第一段階（六七四〜七二〇年）の基準資料（実測図を見る限り）には大来皇女段階のものは認め難く、現状では史跡「西部の初源は飛鳥V期（平城宮I期）段階、つまり持統朝末から文武朝に過ぎない」（二九四〜二九六頁）という。

(五九) …泉雄二氏は「広範囲に点在していた塚山古墳群は、奈良時代前半頃に施設を拡大造成するため、須恵器の長頸壺などを埋納するような祭祀を行って破壊された可能性が高い」（前掲書五七頁）とした。これは、調査当時から私が漠然と抱いてきた事がらに近く、初めて具体的に言及された見解として個人的には賛同したい。ただ、少量ながら出土した遺物の時期等を勘案すると、要因の一つは方格地割の構想計画との相關関係において考えるべきであろう。

(六〇) …門田誠一教授からは、「中国での醗祀には青銅器が使われたであろう」とのご指導を受けた。それを踏まえて筆者は斎宮跡の古墳周溝埋土からの出土事例を参考に、日本では例えば須恵器の長頸壺のような器が使用された可能性もあるのではと個人的に憶測している。

(六一) …前掲『明和町史・斎宮編』、一七八頁。斎宮歴史博物館への寄贈資料には、かつて斎宮地内（現史跡内）で採取された須恵器類がある（倉田直純「寄贈資料紹介」『斎宮歴史博物館研究紀要』十二号、二〇〇三年所収）。

(六二) …土器生産と消費の最終段階との間のタイムラグは、山下峰司氏が中世墓の出土土器に関して指摘している（同氏「灰釉陶器・山茶碗」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、一九九五年所収）。

(六三) …直木孝次郎著『日本古代の氏族と天皇』（塙書房、一九八六年第一〇刷）、二五六頁（文武・聖武の代になってはじめて、伊勢神宮を他と区別する意識が明瞭になった」とする重要な指摘がある）。

(六四) …前掲『日本書紀』下、および前掲『続日本紀』前篇とを使用した。

(六五) …直木孝次郎著『持統天皇』（吉川弘文館、一九八六年第二刷）で、直木氏が持統派に対する文武派の台頭を考察した部分のあること（同書二五三〜二七五

頁)を指摘されたことも承知はしている。

(六六) 原秀三郎「郡司と地方豪族」(岩波講座『日本歴史』三、古代三、一九七六年所収)、二二二頁参照。

(六七) 前掲『続日本紀』前篇、卷十、神龜四年八月壬戌条、同九月壬申条(一一〇頁)。

(六八) 前掲『続日本紀』前篇、卷十、天平二年七月癸亥条(一二三頁)。

(六九) 拙稿「斎宮案内記(その八)」(『あすの三重』No.七八、三重県社会経済研究センター、一九九〇年所収)、一〇五〜一〇六頁(註一五)参照。また拙稿「不改常典の典拠と『公羊伝』」(『鷹陵史学』第三九号、二〇一三年所収)、四四〜四五頁。

(七〇) 拙稿「斎内親王の呼称をめぐって」(本論文集、第二部第三章)、第二節「斎内親王」の正統性。

(七一) 拙稿「聖武天皇の伊勢行幸と閑宮について」(坂本信幸編『聖武天皇の時代』、高岡市万葉歴史館、二〇一三年所収)二六〜四六頁。

(七二) 鈴鹿赤坂頓宮での報奨の列に斎宮長官引田朝臣虫麻呂の名もある(前掲『続日本紀』前篇、卷十三、一六一頁、天平十二年十一月甲辰条)。

(七三) 前掲『続日本紀』前篇、卷十二、一四八頁、及び卷十四、一六四頁。

(七四) 米田雄介氏前掲書『郡司の研究』、一八八〜一九二頁。

(七五) 山中章氏前掲論文「斎宮・離宮院変遷の歴史的背景―離宮院遷宮にみる古代王権と伊勢太神宮―」、二九六〜二九九頁参照。

(七六) 前掲拙稿「宝龜二年の造斎宮使の意義について(素描)」、一三〇〜一三二頁。

(七七) 中村太一著『日本の古代道路を探す―律令国家のアウトバーン―』平凡社、二〇〇〇年、特に第五章。

(七八) 拙稿「伊勢斎宮の立地とその歴史的背景」(『佛教学大学大学院紀要文学研究科篇』第四二号、二〇一四年所収)、一二二〜一三六頁。官道が海の玄関口「的形」からの水運路(旧多気川、現・祓川)と交差し、伊勢斎宮のみならず神宮祭祀の円滑な運営にも不可欠の条件を具備していた。

(七九) 弘仁十三年閏九月二十日の太政官符「應給食係丁事」は、伊賀近江等諸国の解文を得て太政官が同七月廿九日に五畿内七道諸国に下した符に基づくが、その中で諸国言上の「係丁数」は不揃いで一定せぬゆえ、折衷して丁数を定めたとする。郡関係には「駅伝使鋪設丁、伝馬丁」の名も見える。義江彰夫「国衙支配の展開」(『日本歴史』4(古代4)『岩波書店、一九八〇年)、四六〜四七頁参照。

(八〇) 前掲義江彰夫氏論文、四六〜四七頁。

(八一) 原秀三郎「郡家小考―交通機能を中心として―」(岸俊男教授退官記念会編『日本政治社会史研究(中)』、塙書房、一九八四年所収)、一五四頁。氏は弘仁十三年官符や「上野国交替實録帳」等の分析を通じて郡家の交通機能や問題点を明らかにした。方格地割を含む伊勢斎宮の解明に多気・度会郡家の発見が不可欠であることは今更言うまでもないであろう。

(八二) 川畑勝久「延暦儀式帳からみた伊勢神宮の神郡と神戸」『神道史研究』第六二巻第一号、二〇一四年所収、二四〇二九頁など。

(八三) 新訂増補国史大系『令義解』(吉川弘文館、一九七二年) 巻十、雜令、三三五頁。同上『令義解』後篇(一九六六年)、逸文、雜令第三十、二四頁。

(八四) 黑板伸夫・森田悌編訳注日本史料『日本後紀』(集英社、二〇〇三年)、巻第九(逸文)、二一五頁。

(八五) 神火を含め国郡司らの懈怠・不正の史料を示せば、天平七年閏十一月壬寅条、同十六年九月甲戌条、同十九年十一月己卯条、天平勝宝六年九月丁未条、天平宝字五年八月癸丑朔条、宝龜四年八月庚午条、同十年八月庚申条、同年十月十六日条(三代格)、天應元年六月戊子朔条、延暦四年七月丁巳条、延暦五年四月庚午条(以上『続日本紀』など多数あり(外は略す))。

(八六) 貞觀九(八六七)年十二月廿日太政官符「應禁止強雇往還人并車馬吏」(前掲『三代格』後篇、巻十九、禁制事)。

(八七) 寛平六(八九四)年七月十六日太政官符「應禁止諸院諸宮諸司諸家使等強雇往還船車人馬事」(前掲『三代格』後篇、巻十九、禁制事)。

(八八) 昌泰二(八九九)年九月十九日太政官符「應相模国足柄坂上野国碓氷坂置開勘過事」(前掲『三代格』後篇、巻十八、関井烽候事)。戸田芳実「九世紀東国莊園とその交通形態―上総国藻原莊をめぐる―」(月刊『政治経済史学』第一一〇号、一九七五年所収)、五〇六頁参照。

(八九) 吉川真司「九世紀の国郡支配と但馬国木簡」『木簡研究』第二四号、二〇〇二年所収、二三五〇二六頁。

(九〇) 吉川真司「院宮王臣家」(同氏編『日本の時代史』5、平安京、吉川弘文館、二〇〇二年所収)。

(九一) 『延喜齋宮式』の「忌詞」をみると、外七言には「死稱奈保留」など人間の死をはじめ、寺院・僧侶関係の忌み言葉が殆どで、死穢や仏事に対して忌避の態度をとる。親兄弟の死去に伴う齋王の解任もあった。酒人内親王の齋王卜定があった宝龜三年にはじまる伊勢神郡内からの太神宮寺排斥運動は宝龜十一年に決着したが、神宮や伊勢齋宮における忌詞もその宝龜年間における一貫した仏教忌避の動きのなかで最終的な整理、体系化がなされたのではないかと考えている。栗原朋信「犠牲礼についての一考察―特に古代の中国と日本の場合―」『上代日本対外関係の研究』吉川弘文館、一九七八年所収、三八九頁等参照。

第四章 「神火」と伊勢齋宮の焼亡事件

(一) はじめに

七世紀後半以来^①、多気郡に在った伊勢齋宮^②が度会郡に移転する。その詔は淳和天皇の天長元(八二四)年九月乙卯(十日)に出た^③。詔詞(後引)や日付からみて、それは恒例の太神宮神嘗祭奉幣使にあわせて託されたものと推測する。移転先は宮川左岸の離宮である。離宮は元来、宮川右岸側の度会郡沼木郷高河原に在ったが、延暦十六(七九七)年にそこから西方宮川左岸の湯田郷宇羽西村(現在国史跡離宮院跡)へ移転していた。

宝龜年間に伊勢太神宮寺を神郡外へ移転させた一連の動きを「古代王権と伊勢太神宮との権力闘争の一端」^④とみる山中章氏は、延暦十六年にあった離宮のその移転を「齋王や伊勢太神宮例幣使が拠点としてきた離宮院が宮川の外へ出され」「神宮付近から王権の拠点は完全に消滅」(同上)したという指摘を行っている。その是非はともかくも、そこは大神宮司の所在地であり、かつ度会駅も置かれた^⑤とされる重要な拠点、いわば伊勢神宮祭祀にかかわる神祇行政の本拠地である。そういう場所に、九世紀前半代に至ってなぜ今度は伊勢齋宮を遷す必要性が生じたのか。改めてその政治的背景の一端を考察し、移転先の離宮地内で発生した伊勢齋宮の焼亡を検討すること―実際にはそれが神火事件ではなかったかと考え、その真相に迫ってみたいというのが本稿第一の目的である。

それに先立ち、輸入漢語である「神火」と「天火」とが中国史籍上ではどのように用いられ、奈良時代の日本ではいかなる受容と変容があったのかを検証し、わが国古代の神火事件発生当時における中国災異説^⑥受容の実態も把握しておきたい。

(二) 天火から神火へ

『春秋左氏伝』宣公十六年夏条には「成周宣榭火、人火之也。凡火、人火曰火、天火曰災。」^⑦といい、「成周の宣榭に火あり」を「人之をやける也」(同上)という意味で「人火」だとし、天火(これを災という)とは区別している。これを董仲舒や劉向の災異説では、「以為十五年王札子殺召伯、毛伯、天子不能誅。天戒若曰：不能行政令、何以禮樂為而臧之？」^⑧と解釈する。成周、即ち洛陽の宣榭に火があったのは、その前年(十五年)に王札子(王子の捷)が召伯と毛伯を殺す罪を犯したのに天子は彼を誅しえなかった。政令を守れなかった天子に対する天からの誠めとして災、すなわち天火があったのだと因果関係を明確にするようになる。夙に孔子は「天災地妖。所以儆人主者也(天災地妖は。人主をいましむる所以のものなり)」^⑨と言ったとされるが、天子が善政を施すことによってしか災(天火)を防ぐ方法はないというのである。実にそれは「君主権を規制するために」^⑩構想された説であることがよく解る。

災としての天火は、『史記』孝景皇帝三(前一五四)年正月乙巳にも「赦天下。長星出西方。天火燔雒陽東宮大殿城室。吳王濞、楚王戊、趙王遂、(略)反、發兵西鄉。」^⑪と見える。占星術との関係は明白で、吳王ら七王が反し兵を西郷に起こしたその根拠に予兆としての「長星出西方」を記し、かつ天が天火(災)を以て洛陽に在る東宮の大殿城室を燬き、反乱の発起を予め知らせた、というのである。

『漢書』や『統漢書』には『五行伝』の「棄法律、遂功臣、殺太子、以妾為妻、則火不炎上（法律を棄て、功臣を逐ひ、太子を殺し、妾を以て妻となせば、則ち火は炎上せず）。」(一三)を引いて、「謂火失其性而為災也（火、其の性を失ひて災となるを謂ふなり）。」(一四)としている。悪政や人倫の乱れ等があれば、火がその本来あるべき性を失つて炎上しない、炎上せずんば即ち災（天火）を被るという。これをわが国では、例えば賀茂在方の『暦林問答集・上』には「火居太陽之位、南方主夏。以明熱為性。以炎上為性。故内暗外明也。其火不失炎上之性。則天下大治。垂拱無為也（火は太陽の位に居り、南方に夏を主る。明熱を以て性となし、炎上するを以て性となす。故に内は暗にして外は明なり。それ火は炎上の性を失わざれば、則ち天下大いに治まり、垂拱して為すこと無し）。」(一五)と敷衍していること既に周知のとおりである。

顧炎武の「星事多凶」(一六)には淮南王安らの反逆(一七)を始め諸事例を引くが、その中に後漢靈帝の時、凶讖家董扶の妖言「京師將亂、益州分野有天子氣（京師は將に乱れんとす。益州の分野に天子の氣有り）。」(一八)を信じ、求めて益州牧となった劉焉の話がある。焉は獻帝の興平元（一九四）年、謀戦に敗れて二子を失った上に「又遇天火燒其城府車重（天火が彼の城府や車重を焼くに遇い）」(一九)、成都に徙つてのち、「遂疽發背（疽）卒（遂には背中に悪性の腫物ができて死んだ）」(同上)。妖しい予言を信じて竊かに逆心を抱き反乱に発つた焉に対して天罰が下ったかの如き書きぶりで天火の語が用いられている(二〇)。従つて、天火は君主だけが対象だったわけではないことも明らかである。

三国魏は明帝のとき、青龍二（二三四）年(二一)に太史令の高堂隆(二二)が侍中に遷ると、その夏四月に「大疫。崇華殿災（伝染病が猛威をふるい、崇華殿が天火で焼けた）」(二三)。帝から「何の咎か」と下問を受けた隆が対えて「夫災變之發、皆所以明教誡也（災変が起ころのは皆教誡を明らかにする為です）。又曰『君高其臺、天火為災。』此人君苟飾宮室、不知百姓空竭、故天應之以旱、火從高殿起也。上天降鑒、故譴告陛下（君主が其の台を高くすれば、天火災いをなす」とは、人君が苟も宮室を飾り、百姓の空竭を知らなければ、天は之に旱を以て応え、火も高殿より起ころ、との謂です。上帝が上からみそなわされて、それで陛下を戒められたのでしょうか）」(二四)という。人民を苦しめ政道を誤れば天火の災いが下り皇帝に譴告するとしている点に漢代以来の災異説が鮮明である。

梁の劉峻と共に「書淫」(二五)と評された晉の皇甫謐（二五一〜二八二年）もその『帝王世紀』(二六)に殷帝紂の暴虐ぶりを記し、「（七年）六月發民、獵於西山。居期年、天下大風雨、飄牛馬、壞屋樹、天火燒其官、兩日并盡。或鬼哭、或山鳴。紂不懼、愈慢神、誅諫士。為長夜之飲、七日七夜、失忘歷數、不知甲乙・・・（六月二民ヲ發シテ、西山ニ獵ス。居ルコト期年（満一年）ニシテ。天下ニ大風雨アリ、牛馬ニ飄キ、屋樹ヲ壞シ、天火ノ其ノ官ヲ燒クコト、兩日ニシテ并ビニ尽キヌ。或ハ鬼哭キ、或ハ山鳴ルモ、紂ハ懼レズ、イヨイヨ神ヲ慢リ、諫士ヲモ誅セリ。長夜ノ飲ヲ為サバ、七日七夜ニシテ、歴數ヲ失忘シ、甲乙モ知ラズ・・・）」と過去の暴君を後の災異説で殊更に譏つたにせよ、ここは「天火」でなければ収まらなかったのである。

下つて、開成五（八四〇）年長安への途次、現地の人々が石炭の火を「天火の焼く所なり」(二七)と言うのを、下野国出身の円仁は当然神火事件の真相も知る故にか「未だ必ずしも然らず。此乃ち衆生の果報の感ずる所なり」(同上)と冷静に記している。当時の一般民衆は「天火」を石炭の燃焼現

象にも使ったようで、塩入良道氏は「神火（日本の神火ではなく、本来の靈妙神秘な火）」のことであろうと解している²⁵⁰。天火と神火とが同一でないことは、例えば八世紀中葉頃に成立²⁵¹の『吽迦陀野儀軌』（巻中）に、「以般若智火為火。一切衆生罪若煩惱障為薪。是火不天火地火人火龍火神火木火石火自然火。只如来極秘密般若心智火也。」²⁵²と、般若智火の火は天火でも地火でも人火でも神火等でもなく、一切衆生の罪や煩惱の障りを薪として燃える般若心智の火であると説いている。般若心智の火に対比される俗界の諸々の火は一樣でなく、それぞれ天火、地火、人火などと共に神火が名称区別されていることから明白である。

中国における「神火」の語は『晋書』范甯伝²⁵³、梁簡文帝の「詠螢詩」²⁵⁴、『出三藏記集』²⁵⁵等にあるが、天火の事例に比して甚だ少ない。しかもその用法は飽くまで「靈妙神秘・不可思議な火」の謂で、もとより「災」の語感はない。范甯は四世紀後半代、東晉孝武帝（在位三七二～三九六）時代に活躍²⁵⁶したが、現行『晋書』の編纂はわが大化元年前後に当たる唐太宗の勅命²⁵⁷による。該伝にいう所は、目痛を患う甯が中書侍郎の張湛に処方を求める話で、湛が嘲つていう神火はどう見ても方術―神仙術の類である。また詩文の才で著名な梁の簡文帝（在位五四九～五五一）は文字通り螢火を神火と詠じた。その「詠螢詩」は多く『芸文類聚』でも参照されたかと思う。当然のことながら『日本国見在書目録』には『晋書』も『芸文類聚』の名も、そして『梁簡文帝集』も見えている²⁵⁸。

梁は天監九（五一〇）～五二一（五一八）年に成立した『出三藏記集』十五卷は有名な僧祐の撰述で、後漢から梁時代までの漢訳三藏を集めた現存最古の経録²⁵⁹である。その巻第八に収める釋慧觀の「法華宗要序第八」には、「有外国法師鳩摩羅什。超爽俊邁奇悟天拔。量與海深辯流玉散。繼釋蹤以嗣軌。秉神火以霜燭。紐類綱於將絕。拯漂溺於已淪。耀此慧燈來光斯境。」²⁶⁰と、鳩摩羅什の崇高な人となりを述べる。『国訳一切経』ではこの「神火」云々に「大（い）なる光が手燭の火の価値を無くする如きをいふ」²⁶¹と註している。

この『出三藏記集十五卷』が正倉院文書には三か所に見えることを木本好信氏のご労作²⁶²により知った。一は天平十九（七四七）年六月七日「寫疏所解」の「右、件六百八十三卷、依無本、所未寫」のうちの一本に、また二は、天平勝宝四（七五二）年正月二十五日類收「可請本經目錄」のなかの一本として、そして三は、天平勝宝五（七五三）年五月七日類收「未寫經律論集目錄」聖賢集中の一本としてである²⁶³。これによると、天平十九年までには知られていた『出三藏記集』十五卷の入手に時間を要し、六年後の天平勝宝五年になっても未だ書写されていなかったことになる。

以上、神火に比して頻出する天火（五行志の「災火」は天火を指す）は、ほぼ「災異」との因果関係の中で登場することが判る。日本では『万葉集』に「天の火もがも」の歌があり、『日本書紀』にも三箇所²⁶⁴に天災を指摘される。『日本三代実録』の貞観年間（九世紀後半）に至れば天火と人火とを分明表記²⁶⁵するようになるが、私見では『続日本紀』の八世紀後半以降しばらくは「神火」の表記が主流となり定着する。それはなぜか。我が国で「神火」の初見は淳仁天皇天平宝字七（七六三）年九月庚子朔条にある。即ち、「勅曰。疫死多數。水旱不時。神火屢至。徒損官物。此者。國郡司等不恭於國神之咎也。又一句亢旱。致無水苦。數日霖雨。抱流亡嗟。此者國郡司等使民失時。不修隄堰之過也。（略）」²⁶⁶という。文面からは

既に各地で正倉などの焼亡はあったことも判る。中国ならば「災（天火）」といい、災異説により因果関係に言及し、多くの場合「責在予一人」^{四四}といった常套句で天子の不徳を表すのを典型とした^{四五}。疫病・災火・水旱などの現象は天が天子に対して示す譴告だからである。従って元来「天火」をいうのは権力者の側である。国郡司らがもし不正隠蔽の自己弁護のために「天火」を以って釈明れば、却って天皇の非を表明したとして朝廷からは「謀反」の罪に問われる可能性がある。だから自己保身から「神火」の方を選択したと思う（日本では雷火でさえも神火と称した。後述五節（a）の（イ）を参照）。朝廷側ではそれを逆に利用して、神火の原因を国郡司らの国つ神への不遜な態度や不道失政にあると意味付けし、彼らの責任を糾弾する姿勢を最初から鮮明にしたのが右の勅である。

天皇を頂点とする律令制国家の完成を目指し法律や制度の整備、またその「実現形態としての都城の造営」^{四六}は勿論のこと、天皇の正当性を保証する根拠としての神話・歴史書もすでに成立していた。天より降臨した神の子孫たる天皇の世に天からの誡めたる「天火」がしばしば発生しては国家成立の根底が崩れる、律令制下の官人らはその自己矛盾に気づき、身の保全を図ったと思う。天火の語を避けるに至った最大の理由はそこに在ったのではないかと推測する。天皇も災害時には形式的に中国皇帝に擬して類同的文辞を以て詔^{四七}を発することはあったが、それによって政治責任を問われる立場にはア・プリアリになかった^{四八}。古代の天皇は「法を超越した政治的権威であった」^{四九}からである。それ故、政府もいち早く「不恭國神之咎（国つ神を恭むざるの咎）」と称して闕怠・不正の目立つ反律令制的な地方官吏の非道を責め、初めから「天つ神」を埒外に置いたのである。これはつまり中国の災異説を国情に合わせて巧みに改変応用した災異説の日本的展開と言える。それが我が国における初期の「神火」であった。因みに前引高堂隆の言葉にある人君や陛下を国郡司に置き換えて国内事情に投影し直せば、その文化受容と変容のさまは一層明瞭となるであろう。

もともと、薊内清氏は中国における「この災異説は当然のこととして、君主の独裁的な行為を制限するものであった。しかし実際には災異に対して責任を負うのは天子ではなく、その臣下であった三公であり、漢代には自然の災異に対し三公を策免することが行われた。」^{五〇}として馮友蘭氏の『中国哲学史』を紹介している。それに拠ると、「三公除負政治上之責任外、尚須負自然界中事物変化之責任。故漢時遇有災異有策免三公之制（三公は政治上の責任を負うばかりではなく、自然界中の事物変化の責任をも負うべきだとされた。それゆえ漢の時にはたまたま災異が有れば三公を策免する制があったのである…以上拙訳）。」^{五一}という。また、「毎に古今及び時俗の行事を論説し、恒に憤りを發して歎息す」^{五二}と評された後漢仲長統はその『昌言』において、光武帝以後の治世における外戚や宦官らによる政治的弊害を述べるとともに、「（略）怨氣並作、陰陽失和、三光虧缺、怪異數至、蟲螟食稼、水旱為災、此皆戚宦之所致然也。反以策讓三公、至於死免、乃足為叫呼倉天、號咷泣血者也（怨氣並び作り、陰陽ノ和ヲ失ヒ、三光（日月星）虧缺シテ怪異シバシバ至リ、虫螟（蝗・ズイ虫）ハ稼ヲ食ラヒ、水旱ハ災ヲ為ス。此レ皆ナ戚宦（外戚と宦官）ノ臣ノ然ルヲ致ス所ナリ。反ッテ以テ三公ヲ策讓シ、死免ニ至ラシムルハ、乃チ蒼天ニ叫呼シ、号咷シテ泣血スルヲ為スニ足ル者ナリ）。」（同上）としている。

そういう事情を日本でも観念的には知っていたのであろうか、管見では左大臣藤原緒嗣が「加以、陰陽不調。責在臣子（シカノミナラズ、陰陽ノ調

ハザルハ、責ハ臣子ニ在リ。」と言ひ、清和天皇が貞観元（八五九）年七月十三日丙寅の詔に「近年、水旱疫癘の頻発するのは三綱檀越らが堂塔修理を怠つてゐるその咎による」と述べるのを知る（五三〇）。こうして九世紀半ば頃にはわが国の正史にもそういう文言が現れるのであるが、「神火」の初見記事からは百年近くも後のことであつた。水旱疫癘の咎を直近の臣下に向ける災異觀念が漸く現れたわけである。しかし、災異の責を三公にとらせ策免する漢代の制をわが朝廷では採用しなかつた。未だ太政大臣や左・右大臣がそのような事由で罷免された例を知らない。日本では少なくとも八世紀における「神火」の初期段階においてはあくまでも地方の国郡司らの責任を追及する姿勢で臨んだのであつた。九世紀に入ると、人智の及ばざる災異への対応に苦慮する政治権力に対し法力を以て浸透を図ろうとする最澄や空海らの動きも注目されるが、今回は触れる余裕がない。

（三）伊勢齋宮の移転と氏子内親王

さて冒頭に触れたように、多氣郡に在つた伊勢齋宮を度会の離宮へ移転させるという詔は齋内親王氏子が野宮に在任中の天長元（八二四）年九月乙卯に出た。すなわち、「掛畏支大神乃大前尔申給閉止申久、多氣乃齋宮。太神宮止離遠天、毎事尔無便。因茲度會乃離宮乎卜定天。常齋宮止須倍伎状申出事乎、恐美恐美毛申給久止申。」（五三〇）という。「多氣の齋宮は大神宮から遠く離れており、事あるごとに不便だから」というのが理由である。伊勢齋宮の立地には相応の経緯や背景があつたのであり（五三一）、今さら「遠すぎて不便だ」とは唐突にすぎる。しかも、皇居歴代遷宮行列（五三二）や神宮式年遷宮（五三三）のもつ政治的效果として既に指摘されてきたことだが、天皇（伊勢では齋王）の権威と尊貴性を豪族らに周知させる壮麗な行列が土地を横ぎることの重要性、即ち「権威を示すための一定の劇場的空間が不可欠」（五三四）ならば尚更である。真実遠くて不便ならば、焼亡（承和六年）後に二度と移転の詔が出ず、齋王制度廃絶まで多氣の旧地を動かなかったことへの説明がつかない。離宮を出ざるを得なかった点に火災事件の真相が隠れている。

最近、久禮旦雄氏が狩野本『類聚三代格』の天長元年十二月二十九日付太政官符などを丁寧に分析し、淳和天皇の時に賀茂齋院および伊勢齋宮を停廃させようとした経緯を論証され（五三五）、「伊勢齋宮の廃止計画を断念させたのは嵯峨上皇の意向を受けた大中臣洸魚である可能性が高い」（五三六）との指摘もされた。天長元年四月乙丑条（五三七）にいう「伊勢大神宮への御剣と幣帛との奉献」は当時の早魃（五三八）に伴う災害を伊勢大神宮の「崇り」であるとなすことと併せて、久禮氏は「齋宮廃止に対する伊勢神宮の不満の表明」ではないかと捉えたが（五三九）、あり得べきことである。

いずれにしても、この時「齋宮を再開存続させる」ことを一つの条件として、より大神宮に近い宮川左岸の洪積台地上にあつた離宮へ移転することを神宮側に承服させたという可能性もある。何しろ、仮にも氏子が病弱だつたとしても、それは理由にはならないからである（氏子の群行は『神宮雜例集』（五四）により天長二年九月としておく）。なぜなら、天長三年五月一日に氏子の同母兄である三品恒世親王が薨去（五五一）した。通例肉親の喪に遭えば齋王は交替するがこの時氏子は解任されなかつた。移転後間もない伊勢齋宮に空白期間が生じるのを回避したとしか考えられない措置である。後世、恬子内親王の場合にも齋宮在任中に生母紀静子が亡くなったが解任されずに伊勢に留め置かれている。応天門の変で伴氏・紀氏が政界から抹殺されようとしていた最中のことだった。つまり、肉親の不幸による齋王の退下（解任）とは言つても、天皇の交代でない限り、それは時の政治情勢次第で

はいかようにもなる流動的不確定なものに過ぎなかったのである。従って氏子の場合にも、解任帰京により移転後間もない伊勢斎宮寮に空白期間の生じることが許されない政治的事情（後述）が伊勢神郡内にはあったからではないかと思う。それなのに、翌天長四（八二七）年二月丁巳に次いで同四月癸巳には参議左大弁直世王らを太神宮に差使わし、重ねて「今侍留斎内親王波本病屢發弓。奉齋尔不堪尔依弓。令退出状乎云々申。」^{（八二七）}と、病を理由に解任を申し出る前例のない措置をとった。それなら兄の薨去に際してなぜ解任（退出）させなかったのか、更に不審である。なにしろ氏子は帰京後も実に仁和元（八八五）年四月二日^{（八八五）}まで生きながらえた。彼女は「斎王卜定時（弘仁十四年）に仮に十八歳であつたとすれば、優に八十歳」^{（八八五）}という長寿だったのである。「本病タビタビ発リテ」との事由がまるで嘘のようであり、一層疑念は増さざるをえない。

ともあれ、九世紀前半代における伊勢斎宮の度会離宮への移転にはやはり不審な点があり、参宮行路の距離や斎王の健康といった表面上の理由よりも深刻な政治的事由が他にあったと推測したい。

（四）伊勢神郡内における諸矛盾の表面化

伊勢斎宮の経営をめぐる政治・社会的諸矛盾が記録の上で表面化してくるのは延暦十（七九二）年代から弘仁年間（八一〇～八二三）にかけてのことである。すなわち延暦十年代からといえば、時あたかも天平宝字七（七六三）年以降東国（伊勢も東国の一つ）を中心に連綿と起こっていた、所謂「神火問題」の処理に政府が頭を悩めていた時期^{（七六三）}に重複し、また連続している。そして何よりも、延暦末年ごろには連年の征夷、造営、天災（不作・暴風雨）などにより諸国の農業生産に被害が出て、国家財政は窮乏に瀕していた時代のことでもあった^{（七九二）}。

延暦十一（七九二）年七月三日の太政官符^{（七九二）}では、①斎内親王の禊用度の事と②斎宮寮の乾し藁の事とを問題にする。『延喜式』段階では、斎王の禊は月次祭、神嘗祭に先立つ、五月、十一月の晦日（近川）と、八月晦日（尾野湊）に行うと規定する^{（七九二）}。前者①は、それに必要な用度を「従来神郡が供給し雑物も儲けてきたのを停止し、今後は斎宮寮でその都度儲ける。供給用の料稲二百四十束は正税を舂き備え寮家に運び送ること（人夫と馬だけは従来通り神郡が行う）」とした。後者②は、年間三千餘斤の乾し藁を調達して来た神戸百姓らからの「調庸雑徭の外に。件の乾藁を輸すは。艱辛殊に深し。」との訴えを容れて、「それを停止し、以後は斎宮寮が神戸を差して刈り取らせ、その糧食の料には正税も以て充てる」とする。総じて神戸百姓の負担軽減措置であった。予てより伊勢国内でも百姓らが「部内に浮宕していた」^{（七九二）}という社会的状況の背景には、過重負担を強いられた神郡神戸を含む百姓らの窮状の一端をも反映しているに違いない。

すでに八世紀代から畿内村落には逃亡者^{（七九二）}が多く、また九世紀初頭には伊賀をはじめ十五国に京畿内の百姓が居住し「調徭を闕かざるといへども、臨時の徴発には名有れど身なし」^{（七九二）}との状況にあったことも、親王家や権門勢家による大土地所有の進行^{（七九二）}を背景にしたこの時代の社会情勢を物語っている。ともかく、延暦十一年に出たこの措置から五年後（延暦十六年）に離宮自体が宮川左岸側の洪積台地へと移転している。

その移転から四年後の延暦廿（八〇二）年には連続して伊勢神宮の神戸百姓に関わる官符等が出る。いまその概略を左に列挙（A～D）してみる。

(A) 四月十四日の符「今より以後。神戸の限りは二町を以てし、田租は十五束と定むてへり。丁減ずれば物少なく。祭に供するにまさに乏しかるべし。天下の諸社は同じく共に丁並びに租数の改張には一に旧例に依れ。」及び格「大神宮の封戸は改減の限りに非ざれ」^{モモ}

(B) 五月十四日の太政官符。「大祓く下祓の料物と違犯を定め」(略)それ毆傷することもし重き者は。祓い淨むるのほか法に依りて罪に科せよ。斎外にて闘打せし者には律に依りて科決し。祓の限りに在(おか)ざれ。又祝祢宜等の人と闘打し及び他に犯事有る者には先ずその任を解きて即ち決罰せよ。神戸の百姓にして犯失すること有る者には行斎の外に罪を決すること法の如くせよ。(略)」^{モム}

(C) 七月二日の格。去る四月十四日の太政官符で丁並びに租数を定めた(A参照)。しかし「件の国の神戸百姓愁ひて云ふ。神戸に死有れば実に依りて帳より除くべし。而るに国司勘返するに帳より除かず。名は帳に附くと雖も実は其身無し。茲に因りて丁の数空しく五、六丁に過ぎず。爰に国司は除丁と号し即ち神戸より出して官戸に貫き(人別し)、課役に至るもみな悉く徴納せり。もし延怠を致さば遂に決罰を加へたり。神事の済まし難きはもはらかくの由なり。(略)大神宮封戸の丁は余剰あると雖も永く減省することなく以て神宮に供せしものなり。謹んで官裁を請うてへり。」^{モモ}

(D) 十月戊申(十九日)。「伊勢国言さく。多気度会の二郡司らは。言を神事に託して。常に關怠すること多し。伏して望むらくは郡界の外に於いて。まさに決罰を行はむことを。之を許す。」^{ハコ}↓「(国司、百姓に犯あれば界外に決罰することこれより行来十六箇年なり」と弘仁八年十二月廿五日の官符にあり。)

永年、神宮祭祀を支える封戸の丁数は余剰があつても減じなかつた。ここに来て死者が出て国司は帳から除かず、勝手に神戸より除丁をして官戸に入れるが課役徴納は免れず、これでは神事に支障を来たと神宮側から訴えられた(C)。すると今度は伊勢国司側から神事に託けて業務を關怠する神郡司らを郡界の外で決罰を加えたいと応酬する(D)など、神郡内行政の難渋さを垣間見せる。この前年の延暦十九年十一月三日付太政官符で、漸く「斎宮の主神司を神祇官に管摂せしむ」^{ハコ}ことになったが、斎宮寮をはさんで伊勢国司と多気・度会二神郡司、神官や神戸百姓らの間に複雑に絡む争い事や行政処理上の軋轢・障害などが、神事と徴税とにかかわる二重支配的構造下で一層神戸百姓らへのしわ寄せとなり不満が鬱積していった。一方では軽減策を施しつつも、神事と行政の間に生じる対立軸的な構造と諸矛盾は嵯峨朝にかけて徐々に鮮明化して行かざるを得なかつた。それがまた伊勢斎宮の経営にも大きく影響したであろう。引き続き関連史料を追ってみよう。

(E) 弘仁二(八一二)年十一月庚子(九日)。「伊勢の国頃年事多くして。百姓勞擾せり。往年は大嘗に供奉し。頗る転運するに疲る。重ねて兵革にも属ひ。共に農畝を廢せり。今亦神宮を营造し。未だ肩を息むるに遑あらざるに。尋いで斎内親王の相替迎送に縁りて。祇供を息まず。その労止を念へば。殊に懷ひに病めり。(略)宜しく今年の田租は。悉く免して徴ること勿れ。」^{ハコ}

(F) 弘仁三(八一二)年五月辛酉(四日)。勅。「伊勢国多気度会及び飯高飯野等七郡の神戸百姓等は。正税を徴るに縁りて。必ずや刑罰を加へらる。

已に斎事を乱し。或いは逃散を致せり。是を以て昔年出挙を停めたり。茲より以後。富民より借り求めて。報償に至りては。利を加ふこと数倍なり。挙する者に罪有り。償ふ者は弊を受くなり。宜しく明年よりはじめて。神税の外。正税十三萬三千束を挙して。其の利息を以て。斎宮の用に充つべし。」^{八三}

(G) 去年(弘仁七年?)十二月廿一日太政官符。「神祇官の解に称く。十二月の御卜に祟りあるに依りて。当国司の多気度会二神郡に。正税を出挙する符并びに刑罰を行ふ事旧例に依りて停止すべしてへり。(略)」^{八四}

大同三(八〇八)年の大嘗祭に伊勢国は悠紀を務め、兵革(葉子の変)にも従い農業が出来なかった。また遷宮(弘仁元年・三年)、斎王の交代(大同四年帰京、弘仁二年群行)で疲弊しきった伊勢の田租を免じた(E)。疲弊労擾した神戸百姓らは、正税徴収時に違犯を咎められ必ずや刑罰を加えられ、正税出挙も実施できない現実であったが、神税の外に正税十三萬三千束を出挙し、その利息を伊勢斎宮の用度に充てようとした(F)。このような状況下で、神郡の田租検校等の雑務の主導権をめぐり国司と大神宮司との間で綱引きの経年繰り返されていたことが、次の諸史料(ア〜カ)から読み取れるのである。

(ア) 延暦廿(八〇二)年七月一日太政官下諸国符に称ふ。「今神祇令を案じて曰く。神戸の庸調及び田租はみな神宮を造り及び仏神に供ふる調度にあてよ。それ神税はもはら義倉に准じてみな国司検校せよてへり。(略)宜しく国司郡司神主等は祭料を支度し。并びに其の残を注して申上し裁を聴くべしてへり。」^{八五}…荒井秀規氏は、「これより延暦廿四年まで神郡内民戸の口分田田租は国司の検校を受けた」^{八六}とする。

(イ) 延暦廿四年四月七日太政官下伊勢国符に称く。(略)「国司等の用帳を勘知して神物を報収するは既にして旧例に違へり。凡そ此の大神は天下の貴き社なり。是の如きの類は元来は禁じらるる所なり。而るに今諸神に准じて国司の検収するは。事に於いて穏やかならざるてへり。右大臣宣すらく。宜しく旧例に依りて国司に預くること勿るべしてへり。厥より而後は宮司検納して祭料に充て用いたり。但し物は神宮及び離宮を造るの用に充てられ。残る所の数少なきが祭用にて欠有りと。(略)」^{八七}

(ウ) 弘仁六(八一五)年六月九日太政官下神宮并国司符に称く。「年中の神事は。みな欠くべきこと難けれど。当国の神税の残る所数少なし。望み請ふらくは。他国の神税を欠く所の料に充て用ひむことをてへり。(略)宜しく他国の神税を以てもはら年中の雑用の料に充てるべし。それ当国の神税は年毎に儲け置き。もし已むを得ざるときに必ず用ふべきものなれば。先に申して後に用ひよてへり。此れより国司始めて亦預かり納むなり。符の旨に依りて之を充て用ひしむるべし。」^{八八}

(エ) 弘仁八(八一七)年十二月廿五日。「伊勢の国多気度会二郡の雑務を。悉く到大神宮司に預くなり。交替付領は。一に国司に同じい。国司の決罰を行ふこと獲ざるを以てなり。」^{八九}。「今此の符(延暦廿年五月十四日符)に依れば、宮司は雑務を預からずして決罰することを得。国司は決罰することを得ずして。雑務を預かりぬ。(略)遂に国司をして威無く百姓に怠有らしめたり。(略)望み請ふらくは今より以後。二郡の雑

務を。永く大神宮司に預けむことを。(略)」^{九〇}

(才) 弘仁十二(八二二)年八月廿二日太政官符。「承前の例は。大神宮司は伊勢国多氣度会両郡神田の租及び七処神戸の田等の租を検納して。祭祀に支用せしは。もとより尚きものなり。なまごころ国司預かりて以て検納したり。仍て案内を検するに。太政官去る延暦廿四年四月七日に伊勢国に下したる符に称く。(略)宜しく旧例に依り国司に預けること勿るべしてへり。それより而後は宮司検納して祭料に充て用ひたり。(略)太政官去る弘仁六年六月九日神宮并国司に下したる符に称く。此れより国司始めて亦預かり納むなり。(略)望み請ふらくは。煩わしくも国司に預くることを止め。神宮司をして旧に依りて検納せしめ。預かりて以て支用し其の祭事を済まさむことを。但し正税を借り請ひて欠料に充つることは永く停止に従はむ。謹みて官裁を請ふてへり。(略)請ひに依れ。」^{九一}

(力) 承和十二(八四五)年六月八日。「勅すらく。斎宮寮頭並びに助をして大神宮ならびに多氣度会両神郡の雑務を検校せしむこと。今より以後。立てて恒例となせよ。」^{九二}

このように多氣・度会両郡の田租検納等をはじめとする神郡雑務の行政主管をめぐる攻防^{九三}は二転三転し、朝廷側の方針も一定しなかったのである。いまその変遷を時系列でみると、(大神宮司)(A)↓(国司)(ア)↓(C)(D)↓(大神宮司)(イ)↓(E)・(F)↓(国司)(ウ)↓(G)↓(大神宮司)(エ)・(才)↓(この間に斎宮の度会郡移転・焼亡・多氣郡旧地復帰)↓(斎宮寮)(力)、という流れになる。(ア)にも引くとおり神戸から徴収する神税は「みな国司檢校して所司に申し送る」^{九四}のが『神祇令』の定めであつたが、それを支障なく執行出来なかつたのが多氣・度会二神郡の実状であつた。紆余曲折の経緯の中で、(才)から(力)に至る九世紀中葉への時期は、「伊勢斎宮の離宮移転から焼亡・多氣復帰」までの期間に概ね重なっている。山中章氏の所論では「古代王権による伊勢神宮統治の四つの画期」のうち、「緊張関係が最高潮に達する」という③伊勢斎宮の展開^{第三}期^{九五}に相当する。これをはさんで従来になく新しい変化(力)が起きた。多氣・度会二神郡の田租檢校等諸雑務を「国司に預けるか宮司に預けるか」という桓武朝以来の慢性的でもあつた懸案事項が始めて斎宮寮(頭と助)に預ける展開になつた。即ち、伊勢斎宮寮の政治的な位置付けに明確な変化が生じた。稲本紀昭氏は「斎宮寮Ⅱ伊勢国衙による太神宮抑圧策と位置づけ」^{九六}を述べている。見方を変えればその前年(承和十一年)に天長期以来やく二十年ぶりの班田が下命された事で生じた対神郡をめぐる収取対策も現実的契機の一つであつたかも知れない。一時的には、神郡雑務及び田租検納権が太神宮司に付与される(イ・エ・才)ことがあつたものの、平安時代初期に神郡内に成立していた東寺領荘園の問題もあつて、「九く十世紀前半においては太神宮司の支配権は未だ確立されておらず、斎宮寮が神郡国務に關与する体制が存続」^{九七}していたという。

もっともその前哨戦ともいふべき施策は当の桓武朝において始まつた。それが斎宮寮頭を以て伊勢国司(守・介)を兼務^{九八}させる人事で、延暦十年以降弘仁年間にかけて顕著である。延暦十年正月(寮頭賀茂朝臣人麻呂為兼伊勢守)、大同元年正月(寮頭中臣丸朝臣豊国為兼伊勢介)、弘仁三年正月(寮頭小野朝臣真野為兼伊勢権介)、弘仁五年七月(寮頭阿倍朝臣寛麻呂為兼伊勢権介)等の記事がある。これらの兼官人事は神郡司や太神宮司に対処

する国側の方針（施策）が反映されていよう。しかし問題解決は容易ではなかった。伊勢神郡に限らず奈良時代以来朝廷が頭を悩ませて来た大きな政治課題だが、数多の国郡司等の日常的な関念・不正行為には酷い状態が続いてもいたからである（九）。それゆえ弘仁十二年に（才）大神宮司に預けることになったことを受けて、次の氏子内親王の卜定を機に新たな方策が打ち出された。それが淳和天皇の斎宮廃止案とその撤回（堀前掲久禮氏論考）を契機として実現する天長元年の伊勢斎宮の離宮移転だったのではないか。それにより、神宮及び神郡行政機構への監視体制を地理的に強化した、と解される。すでに寮頭と国司等の兼務体制で国衙機能の一部を担う出先機関の経験をして来た伊勢斎宮寮の度会離宮内部への突然の移転には、現地でも憶測を呼んだに相違なく、一見もつともらしい理由（遠く不便・斎王病弱）を必要とした所以であろう。

伊勢斎宮の度会離宮への移転やそこでの焼失があった当時の社会情勢下では、「自然災害による不作と飢饉などが原因で村落秩序の解体が進行し、弘仁九（八一八）年末以降、藤原冬嗣指導のもとにそれまでの土地政策に大きな変更が加えられた」（一〇）という。すなわちそれは「権勢家等による墾田獲得・経営拡大に対する従来の抑圧策から、免租等の施策を伴う積極的な開墾奨励策」（一一）への転換であった。その結果、伊勢国内にも政治・経済的变化が起きるのは自明の理で、伊勢斎宮寮は国衙機能の一部を代行するより重要な政治・行政的役割を担うことになったのである。長岑宿禰高名の伊勢国司着任はまさにそのような時期における優秀な人材が要請された結果であつたろう。

焼け出された伊勢斎宮が多氣の旧地へ復帰した直後に、（力）「斎宮寮頭並びに助をして大神宮ならびに多氣度会両神郡の雑務を檢校せし」めることになった背景には、その長岑宿禰高名の行政手腕があつたと考える。承和遣唐使の一員として文宗の拝謁も得た高名は九世紀前半代に活躍したとされる典型的な「良吏」（一二）であろう。彼がはじめて伊勢国権介となつた承和六（八三五）年は、正に離宮の伊勢斎宮が火災を受け官舎一百餘宇を焼亡した年である。その結果、伊勢斎宮が再び多氣に戻らざるを得なかつたのは対「太神宮司」との間の政治的緊張関係の中での地理的退却であつた。高名が改めて伊勢国守となつたのは承和十年のこと、ついでの翌年（承和十一年）には斎宮寮の権頭を兼務した。前記延暦・弘仁年間の例では寮頭による国守・介の兼務であつたのが、ここに来て国守による寮頭（しかも権頭）の兼務になった事も注目される。ともあれ、上述（力）の決定が高名が兼務した翌年の承和十二年であつた事実は、現地の実情を熟知した国守高名の上奏建言によつたものに違いないと考える。距離的にも遠い鈴鹿の国司が兼務するのではなく、常に神郡内に在つて神事を通じて最も関わりの深い伊勢斎宮寮（頭と助）自体に「神郡雑務檢校」の行政的権限をもたせる行政改革であつた（一三）。伊勢斎宮の地理的退却を補うに新たな政治的権限の付与でもあつたといえよう。

承和六年十一月癸未の離宮斎宮の焼失を単なる失火とみるか、放火（神火）とみるかはなお見解の分かれるところであろう。事はしかし、前引山中氏の論考等にもある「勢力圏をめぐる伊勢太神宮との緊張関係」が「最高潮に達する」時期に起きた焼亡事件である。時代の趨勢（一四）、あるいは当時の社会情勢からみても「神火」とするに足る要因が内在していた蓋然性は極めて高い。村尾次郎氏は、「多くの場合、火災は政治情勢の陰悪なとき起こっていることを見逃してはなら」（一五）と、官倉の火災は常に何等かの作為的原因を背景にしていると思われ（同上）、「地方史的には重要なあ

る種の過程に生起する事件として考えねばならないであろう」(同上)とされ、なおかつ「史にあらわれない失火、放火がいに多かったかは想像に難くないであろう」(同上)とも述べている。次節ではその点をさらに別の角度から考えてみたい。

(五) 九世紀前半代の火災と社会情勢

(a) 火災記事の類型的整理

九世紀前半代(一部八世紀末も含む)に限定して正史中にある火災記事の分類(イ・ホ)を試みた。するとその表記の仕方にもある種の傾向がうかがえるのである。そこから度会離宮での伊勢斎宮の火災事件はどのように意味づけられるだろうか。

(イ) 天長七(八三〇)年七月戊子「申刻雷雨。酉刻。霹靂内裏西北角曹司。左右近衛騎乘御馬。馳入内裏。撲滅神火。」¹¹⁰⁸

(ロ) 弘仁十一(八二〇)年十一月庚申「近江國言。国分僧寺延暦四年火災燒盡。」¹¹⁰⁹

天長九(八三二)年五月丁未「賑給近江國滋賀浅井両郡。遭火災。」¹¹¹⁰

天長九(八三二)年五月己酉「勅。去年秋稼不稔。諸国告飢。今茲疫旱相起。仍人物夭折。加以往往火災。民或失所。(略)」¹¹¹¹

(ハ) 延暦三(七八四)年十月丁酉「勅曰。如聞。比来。京中盜賊稍多。掠物街路。放火人家。良由職司不能肅清。令彼凶徒生茲賊害。」¹¹¹²

延暦十(七九二)年八月辛卯「夜有盜。燒伊勢太神宮正殿一字。財殿二字。御門三間。瑞籬一重。壬寅。奉幣帛以謝神宮被焚焉。」¹¹¹³

弘仁九(八一九)年正月甲寅「遣使檢出雲国賊燒官物。兼賑給百姓。」¹¹¹⁴

承和五(八三八)年二月丁酉「畿内諸国。群盜公行。放火殺人。下知國司。令以糾勸。」¹¹¹⁵

天安元(八五七)年六月庚寅「大宰府飛驒言上。對馬嶋上縣郡擬主帳卜部川知麻呂。下縣郡擬大領直浦主等。率黨類三百許人。圍守正七位下立

野正岑館。行火射殺正岑并從者十人防人六人。」¹¹¹⁶

(ニ) 延暦十一(七九二)年三月戊寅「造伊勢国天照大神宮。以遭失火也。」¹¹¹⁷

弘仁十四(八二三)年十月丁亥戌刻「失火内裏延政門北掖。(略)火不大延。辛丑亥刻。失火大藏十四間長殿。(略)盛火飛揚。・・」¹¹¹⁸

弘仁十四(八二三)年十一月壬申亥刻「巡大倉舍人等。呼失火於大藏省。(略)有人持炭火。挿東十四間長殿東面長押。且撲火。且出物。優婆塞三人藏部一人。親入盜物。即著縛優婆塞一人。先申云。己等所謀。騒動之間。雜衆取物。去十月廿日夜失火。

亦己等所為。」¹¹¹⁹

(ホ) 承和二(八三五)年三月庚戌「出雲國言。灾于官舍。」¹¹²⁰

承和二(八三五)年三月己未「甲斐國言。灾于不動倉二字及器仗屋一字。皆悉煨燼。」¹¹²¹

承和六(八三九)年閏正月戊戌「織部司織手町灾。燒百姓廬舍數烟。」¹¹²²

承和六（八三九）年十一月癸未「灾于伊勢齋宮。燒官舎一百餘宇。」^(三三)

天安二（八五八）年六月己酉「肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。」^(三四)

これらのうち、最初の（イ）にみえる「神火」は原因が雷雨霹靂（雷火）による火災で、天武紀朱鳥元年七月戊申条の天災と同じ原因によるもので、中国ならば「天火」とする所である。ここに言及する余裕はないが、これまで数々の研究成果^(三三)にもあるように、ある種の目的をもった「政治的な動機による放火」を偽って称した「神火」とは明らかに異なる。第二節に述べたように、日本では「天火」の語を避けたのである。

つぎに（ロ）の事例はいずれも単に「火災」と記す。これだけでは原因不明である。ただ、国郡司らによる政治的目的をもった正倉や官物への放火ばかりが「神火」ではない。時代や社会の変遷に伴い、「神火」にも質的な転化があり、地域の実情に応じてその対象物も画一的ではない。すでに佐伯有清氏の先駆的研究^(三三)にあるように、「八世紀末をもって神火はなくなったわけではなく、九世紀に入っても依然としておこっていたのである」（同上）とされる。しかも、やがてそれは「国分寺への放火に発展し、さらには国の官舎を焼き、国司の館を襲撃放火する動きにつながっていくもの」（同上）であった。従って、（ロ）の「火災」にも「放火＝神火」を含む可能性は十分にあり、見過ごすべきではない。

（ハ）の事例は、基本的に盗賊らによる放火殺人の類である。出雲国では官物が狙われている点、また対馬の擬郡司らが国守の館を襲撃放火したのは、佐伯氏の言われたように、八世紀後半に頻発した「神火」が発展的に転化した別形態の放火と捉えることができる。

（ニ）は「失火」と表記された事例である。しかし弘仁十四（八三三）年の二例の内容は、優婆塞らによる大蔵への窃盗にともなう放火であり、真の「失火」ではない。延暦十一（七九二）年にみえる「天照大神宮」の「失火」による造営は、それが前年（ハ）の夜盗による火災の結果なれば、単なる「失火」では済まされないはずである。

最後に（ホ）の事例中の四例は、「災于○○」「○○倉火」という書式に定型化されている。これは基本的に八世紀後半以降に顕在化したいわゆる「神火」と同様の表記である。対象が「正倉・穀物」から「不動倉」や「官舎」に変ったのは、政治的目的を持った放火の質的な変化や多様化の時代的流れに沿うもので本質的には同じである。従ってこれら（ホ）の記事も奈良時代の「神火」の延長線上に位置づけて理解するのが自然である。実際、先の佐伯氏の論考では、この承和二（八三五）年三月の出雲国や甲斐國で発生した火災記事を「神火」史料として認定、使用されている。であれば、それらと類型的にまったく同じ表記をする伊勢齋宮の官舎一百餘宇の焼亡記事だけを例外とみるのは考え難いのである。伊勢太神宮（大神宮司）との緊張関係が最高潮であったとされる当時の度会離宮内における伊勢齋宮での火災であればこそ、これを「人火＝神火」の一類型として解釈することに何ら違和感はない。ただ伊勢齋宮での火災であっただけに「神火」の表記はことさらに憚られもしたのであろう。

加えて、奈良時代の「神火」事件との間には、その背景に通底する社会情勢（災害による不安・疲弊）を読み取ることができる。最後にその点も明らかにしておきたい。

(b) 神火の社会的背景

国史上「神火」の初見記事が現れる天平宝字七年九月当時は、果たしてどのような社会情勢にあったのかに言及した研究は意外にも少ない^(二五)。それに先立つ天平宝字五(七六一)年は「五穀不登」で飢饉者を多数出し、翌六年三月に参河国以下九国に旱があつた。それ以降神護景雲元(七六七)年頃に至るまでの間、北は陸奥国から南は多岐嶋までおおむね日本全土がすさまじい旱魃・飢饉と疫病等に見舞われた^(二六)。しかるに天平宝字七年三月に政府は「天下諸国の不動倉の鈎匙」を中央に回収せしめた^(二七)。その理由を「国司の交替茲に因りて煩ひ多きを以てなり」(同上)とするが、この緊急事態時に本来は「時の非常に備える為に穀物を貯蔵する」^(二八)べく設置されたはずの不動倉の扉の鍵(鈎匙)を国司の手から回収したのは、まさかそれだけの理由からではなからう。鈎匙の管理つまり不動倉の管理を国司ら地方官吏に委ねたままでは到底放置できぬ緊迫した社会情勢にあったからである。餓えた賊徒によつて官物(ここでは不動倉の穀類)が狙われることが警戒されていたに相違ない。通常、その貯蔵は「義倉や常平倉の其れに比して豊富であつた」^(二九)からである。しかし、そのような回収措置が逆に放火という非常手段を更に誘発した可能性もまた否定できない。いわゆる「神火」事件は地方官吏が自らの不正や失態を隠すため、あるいは現任国・郡司らの失脚・交替等を目論んだ何者かによる放火だというのが、そもそも当初はこのような非常事態を背景として発生したのである。郡司や土豪層らが自らの立場を死守すべく政治的な意図をもつて放火したばかりではなかったと推測する。実態として多くの百姓たちが凄まじく餓えていた。賊徒と化した百姓に倉が狙われるのは当然の理である。従つて、天平宝字七年九月勅の「神火屢至る」との初見記事において、なぜか具体的な国郡名が記されなかったのは、それが東国に限らずより広範囲に相前後して規模の大小を問わず多発していたからに他ならない。そういう予断を許さない社会的状況下のゆえに、政府はその災火の拠つて来た原因を国郡司らの不道・不徳に帰するいわば日本的災異説に基づき対処したのではないだろうか。

その初見記事から三年後の天平神護二(七六六)年九月戊午条の勅は、恐らく台風害で倒壊した官舎修理についての対応だが、伊勢・美濃等の国々に対し「事を神異に仮て人の耳目を驚かすことを得ざれ」^(三〇)という所をみれば、当時の国郡司らの報告に対し朝廷がどのような視点で見定めようとしていたかが窺える。ことは伊勢・美濃国等の東国^(三一)のみならず、神異(時に神火)に名をかりて虚偽を重ねる悪弊はどここの国にもありえた。事実、『続日本紀』宝龜四(七七三)年にも「諸国郡司。焼官物者。主帳已上皆解見任。其從政入京。及獲放火之賊。功効可稱者。量事處分。」^(三二)とした。「諸国郡司」とあれば誰も「東国」に限定はしていない。下つて『小右記』の永祚元(九八九)年四月五日条^(三三)には、尾張国守の藤原元命が百姓の愁訴によつて停任せられたことを記すが、その苛政の実状を伝える永延二(九八八)年十一月八日の「尾張国郡司百姓等解」^(三四)には国分尼寺が「神火」によつて焼亡した事も記す。尾張は坂東に非ず、ならば伊勢にあつても何ら不思議ではないのである。

また、『小右記』治安三(一〇二三)年十二月廿三日壬午条の記事にはなるが、「子刻許に丹波守資業の中御門の宅焼亡す。騎兵十余人来たりて放火す。宅人相挑めり、而れども群盜の力強になせる所なりと云々。国司は在国と云々。任終の務め苛酷極まり無しと云々。州民の愁い多くして、凶黨

を結ぶの類犯を成したるか。抑も洛中の坂東に異ならざれば、朝憲も誰が人に之を憑まんや」(二五三)とみえている。ここに「洛中の坂東に異ならざれば」とは何も放火だけを捉えているのではない、盗賊の横行するさまをいっただのである。地方行政の長官たる国守が農民を搾取対象として酷使していた様が窺える。すでにその時代にもなると抑圧に堪えかねた農民たちが結党をなして都の私宅を攻撃目標として押しかけ放火するという事件に発展していた。時代こそ違え、これに相似たような不正搾取―被抑圧という違法な官民間の基本的構造は齋宮寮官人にもありえただろう。彼らは神郡内における特権階級でもあったからである。ちょうど、神戸百姓らが神事への奉仕を楯に労働を拒否ないし遅延させるように、齋宮寮官人もまた逆の立場から神事を根拠に私腹を肥やすなど、立場を利用して威圧的に悪事を重ねることも可能であった。宇多天皇がいみじくも「齋宮ハ。出デテ外国ニ在リ。用途繁シト雖モ。料物ハ足ラズ。其ノ申請ニ隨ヒ宜シキヲ量リテ進止セヨ。タダ寮司ニハヨクヨク之ヲ選ビ任ズベシ。」(二五三)と訓戒したのが想い合われる。実際よりも水増しして農民や政府に申告・要求するのは日本だけではなく、中国でも一般的にあったことである(二五三)。公務関係者の不正の歴史もまた古い。仮に放火を生む原因が齋宮寮官人の側にあったとしても何ら怪しむには足りない。

旱魃・飢饉と疫病等が国土を覆った八世紀の「神火」事件発生当時の状況と同じ社会情勢は九世紀前半代にもあった。天長四(八二七)年四月戊申条の「地震」からはじまり同七(八三〇)年四月戊辰条にかけての三年間に、凄まじい地震記録(併せて七十五回)が残る。それは恐らく各地を襲い、得体の知れぬ恐怖と不安が諸国の民草を覆ったであろう(二五三)。しかもその後、今度は承和三(八三六)年二月戊戌条の伊勢国からはじまって、同五(八三八)年七月丙寅条は大和国に至るまで、ふたたび絶望的な飢饉が余震とともに全国を席卷したのであった(二五三)。前の(イ)(ロ)(ハ)(ホ)に掲げた火災記事の大半は、そのような混沌と不安に満ちた社会的情勢を背景にしていたことを認識しなければならない。時に極度の災害は反乱やある種の終末観をもたらすことを、例えば佐藤智水氏が北魏における大乘の乱の社会的背景の考察(二四〇)において明らかにしている。そこではとりわけ「足掛け五年にわたって頻発」(同上)した「地震」が「延昌改元の直接の契機」(同上)となるなど、大きな要因になっていたことを知る。わが国の九世紀前半代に頻発したこの地震が人々に与えた影響も計り知れないものがあつたであろう。

すでに「神火」事件の正体が露見し(二四二)、為政者に把握されて以降の記事になると、実質的には同じ性格の放火事件であっても、それを指してもはや「神火」の名では呼ばなかった。しかし、八世紀後半代に東国を中心に頻発した「神火」事件と九世紀前半代に在った「火災」記事の背景には、通底する極めて類似した社会情勢があつた訳である。そういう点からも、上掲九世紀前半代の火災記事(イ・ホ)の中には、政治的な意図をもった所謂「神火(＝放火)」も当然含まれていたと考えるべきではないだろうか。

ましてや、神郡内でのさまざまな政治的軋轢や矛盾の陰に立ち、疲弊の極限に追い込まれていた神戸百姓らの実態からは、伊勢太神宮(大神宮司)と国衙(朝廷)との緊張関係は覆うべくもない。承和六(八三九)年段階において、度会離宮に在った伊勢齋宮の焼亡には、利害・立場を異にする何者かが秘かに放った「放火＝神火」であつた可能性は最早否定し難いと考ええる。それを裏付ける出来事として、私は焼亡直後の承和六(八三九)年十

二月丙辰条(二四三)にみえる奏言と勅とを指摘しておきたいと思う。それは、伊勢斎宮の「神火」事件が天皇にとっていかに衝撃的であったのかを逆に物語っているものである。

すなわち、時の左大臣藤原緒嗣以下、右大臣、大納言、中納言、権中納言、参議に至るまで太政官の要職に在る臣下全員がそろって奏上したもので、昨年十一月に参河国に五色の瑞雲が出現したこと、去る六月には越中国でも慶雲が現れたことを取り上げ、それが古典に叶うものであり、「夫自非道格區宇。仁覃海隅。何亦降斯玄符。錫彼景福(夫レモシ道ノ区宇ニ格ルモ。仁ノ海隅ニオヨブニ非ザレバ。何ゾ亦タ斯ノ玄符ヲ降シテ。彼ノ景福ヲ錫ハンヤ)。(同上)」として天皇の徳政が天下に行き渡っていることの証拠だとして最大限の賛辞を献じて言祝いだのであった(二四三)。天皇は当然ながら謙遜を以て応え、「古人否云乎。見祥増戒。則休徵應機至也。人貢忠誠。以輔不逮。重賀之事。都所不允(古人モ云ハザルカ。祥ヲ見レバ戒ヲ増セト。則チ休徵ハマサニ機ニ応ジテ至ルモノナリ。人ゴトニ忠誠ヲ貢メテ。以テ不逮ナルヲ輔ケヨ。重ネテ賀スル事ハ。都テ允サザル所ナリ)。(同上)」と表面上は沈着冷静に応じた。ここに火災の力の字はもとより、伊勢のイの字も斎宮のイの字も一切出てこないのは、むしろ彼らの動揺の程を顕著に表現しているだけでなく、離宮への移転が淳和朝の事でもあったゆえ、先帝への気遣いをも表明している。

これは天武紀十二年正月丙午の詔(二四四)と通底するところがある。その詔の前年(十年、十一年)に九度にわたる群発地震(余震)に襲われたほか、旱天による雨乞い、日蝕、さらに信濃国や吉備国などでは「霜降り」や「大風」により五穀は稔らなかった。旱天に加えてうちつづく地震による世情の不安感も増幅していたところ、正月ゆえ人臣の動揺を抑えるためにも天武は、それまでもたらされたとされる瑞鶏や嘉禾などの「天瑞」を以て自らが新年を寿ぐ姿勢を見せたのである(二四五)。天武が示した「天瑞」の強調は、立場こそ違えども緒嗣らによる慶雲賛辞と同じ性格をもつものである。いずれもその大仰な慶賀の裏側に「畏れ戦く」悲惨な事実のあったことが匿されている。伊勢斎宮の場合はそれが単なる「失火」に非ざることをはしなくも露呈することになったと言えよう。およそ半年後の翌承和七年五月、後太上天皇は淳和院に崩御したのであった。

概ね十世紀代には所謂「神火」が話題に上らなくなるのは恐らく、既に義江彰夫氏が明確に論じたように、「十世紀の間に諸国一般に郡倉が無実化し消滅するに至った」(二四六)ことの反映でもあった。ただ、言葉としては残存したのである。倉を有した東大寺では承平四(九三四)年に至っても「神火」の語を使用しているし(二四七)、尾張国の郡司百姓等が国守藤原元命の三か年にわたる非法の実情を愁訴した解文(二四八)に国分尼寺が「神火の為に焼亡してしまった」(二四九)事は前述したとおりである(二五〇)。ここに、政府としては「神火」事件の正体が露見して以降は一貫して「神火」の表記は(少なくとも正史上には)しなかったのであって、それとは政治的立場の異なる東大寺や尾張国分尼寺の場合にはなお従来どおりの表記を慣用的に用いたものと推察される。いずれも人火であることに違いはなかった。

(六) まとめ

輸入漢語の天火や神火の足跡を追うと、奈良時代に初出する「神火」は自らの不正を隠ぺいし、その責を逃れるべく地方官吏が案出した揚言であ

ったと判る。報告を受けた朝廷の側も国つ神の神事を怠る地方官吏の咎を責める日本的災異説による対応をとった。いずれにしても、政治的利害のからむ人為的火災（放火）であった。平安時代に入っても、実質的に同じ「神火」は各地に発生していた。佐伯有清氏の言うように、「神火」は時代や社会の変遷に伴い質的に転化し、「国分寺への放火に発展し、さらには国の官舎を焼き、国司の館を襲撃放火する動き」へと展開した。本稿で検討した伊勢斎宮の官舎一百餘宇の焼亡（承和六年）もそのような変遷過程のなかで起きた放火（＝神火）の一例であった。

伊勢斎宮の度会離宮への移転を告げる天長元年九月乙卯の詔は、久禮旦雄氏の論考を踏まえると、淳和天皇による斎宮廃止の意向が撤廃された後に、いわば「斎宮存続」と引き換えに決定されたものであった。度会離宮への移転理由にあるもっともらしい口実にはそのまま信じられない疑念があり、斎内親王氏子の健康問題にも虚構性を指摘できる。そこで、移転そのものの背景にある現地の政治的状況に目を向けて関連史料を整理・検討した結果を大づかみに言えば、伊勢斎宮を接点とした伊勢国司（国衙）と宮司・祢宜ら神官（大神宮司）及び多気・度会二神郡司らの間にあった慢性的な闘争や利権をめぐる違法行為、更には相互の主導権争いの下で常態化した神戸百姓らの疲弊する姿を垣間見ることができた。その諸矛盾が記録上に表面化する延暦十年代から弘仁年間にかけては、「神火問題の処理に政府が頭を悩めていた時期」（佐伯氏）に重複・連続し、延暦末年には諸国の生産に被害多く国家財政も窮乏を来していたのである。『神祇令』どおりの神税徴納も困難で、特に多気・度会をめぐる神郡雑務の執行権限が国衙と大神宮司との間で執拗に争われた。

弘仁十二年に二神郡の雑務を永く大神宮司に預けることになったのを受け、遂には伊勢斎宮を大神宮司所在の離宮に移転させる措置をとる。移転は大神宮司（神宮）への監視体制の地理的強化でもあった。山中章氏の所論にいう両者の「緊張関係が最高潮に達する、伊勢斎宮の展開第三期」に相当する。そこで起きた先の火災は、利害を異にする者が放火しうる内的条件は既に十分だった上に、八世紀後半代の神火事件発生当時（早魃・飢饉・疫病）と比較して①通底する社会情勢（凄まじい地震と飢饉）が同質であったこと、②他の神火事件と同じ類型化された書式で書かれていることも有力な傍証の一つとして推定した。

焼け出された伊勢斎宮は多気の旧地に戻らざるをえなかったが、それは政治上の地理的撤退でもあった。承和十二年、遂には「斎宮寮頭並びに助をして大神宮ならびに多気度会両神郡の雑務を檢校せしむ」という新たな措置に転じた。それはかつて指摘したように^(二五)、斎宮寮に国衙機能の一部を代替させる行政改革で、伊勢斎宮の政治的位置付けを転換させたものであった。これは承和十年に伊勢国守、翌十一年には斎宮権頭を兼務した良吏長岑宿禰高名の建言に拠るものであり、当時の朝廷が受けた衝撃の大きさからみても、現地の事情を熟知する高名の提案が異論なく採用、施行されたことは想像に難くないところであった。

昭和五四（一九七九）年に離宮院跡の発掘調査で八脚門が検出された。その門を構成する「北側の控柱は根元まで炭化した状態で残っており、火災のはげしさを物語る」^(二五)もので、承和六年の伊勢斎宮官舎一百餘宇の火災の事実を証言する遺物であるという。ただ、康和四（一一〇二）年七月十

六日にも離宮院官舎に放火があつたので^(二五)、それとどう関わるのかはまた将来に残された課題のひとつである。

【註】

- (一) 山本章「齋宮・離宮院変遷の歴史的背景―離宮院遷宮にみる古代王権と伊勢太神宮」『仁明朝史の研究』思文閣出版、二〇一一年）は、従来の「齋宮土器編年表」の基準資料を考古学的に批判し、その「編年表」にいう「齋宮第一期第一段階」の土器群には大来皇女段階の資料はなく、「持統朝末から文武朝に過ぎない」（二九六頁）とした。氏に従えば天武朝の伊勢齋宮は現状では所在不明ということになる。
- (二) 本稿では齋内親王の宮殿と齋宮寮とを包括的に伊勢齋宮と表記し、事に応じて齋宮寮も使う。
- (三) 新訂増補国史大系『類聚国史』第一（吉川弘文館、一九八一年）、巻四、四五頁、天長元年九月乙卯条。新訂増補国史大系『日本紀略』第二（同上、一九八五年）、前篇十四、三一九～三二〇頁、天長元年九月乙卯条。
- (四) 山中氏前掲論文、三二三～三二四頁（『園太暦』は洪水被害による破損の多さを移転理由の一要因に挙げており、氏の構想にその観点が欠落するのは承服し難い）。
- (五) 御巫清直「離宮院考證」（神宮司庁編『神宮神事考證』一九三六年）。大西源一「史跡離宮院址」『三重県に於ける主務大臣指定史跡名勝天然記念物』第一冊史蹟、三重県、一九三六年。
- (六) 日原利国著『春秋公羊傳の研究』（創文社、一九七六年）、二六三～二六五頁。他にも東野治之「飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想」『日本歴史』吉川弘文館、二五九号、一九六九年所収）や松本卓哉「律令国家における災異思想―その政治批判の要素の分析―」（『黨弘道編』古代王権と祭儀、吉川弘文館、一九九〇年所収）なども併せ参照されるべし。なお災異説の初歩的な説明は拙稿「不改常典の典拠と公羊傳」『應陵史学』第三九号、二〇一三年）、三一～三三頁にも述べたことがある。
- (七) 鎌田正著『春秋左氏伝』二（明治書院、一九九三年一五版）、六六〇～六六一頁（氏は宣榭を成周、即ち洛陽の演武堂とし、周宣王の廟（公羊傳）や樂器を蔵する所（穀梁傳）という別の説も紹介している）。
- (八) 『漢書』五（中華書局、一九八三年第四次印刷）、巻二十七上、志第七上、一三三三頁。
- (九) 『淮南子 孔子家語』（富山房、二〇〇四年増補版第七刷）、巻第一、四二頁。但し、孔子家語は王肅の偽作という（服部宇之吉氏解題）。劉向の『説苑』には「故妖孽者、天所以警天子、諸侯也」とし異同あり（趙善詒『説苑疏證』華東師範大学出版社、一九八五年、巻十、二七九頁参照）。
- (一〇) 日原利国著『春秋公羊傳の研究』（創文社、一九七六年）、六・特異な夷狄論、（五）夷狄存在の意義、二六三頁参照。
- (一一) 『史記』二二（中華書局一九八九年第十一次印刷）、巻十一、孝景本紀第十一、四四〇頁。
- (一二) 前掲『漢書』五、巻二十七上、五行志第七上、一三二〇頁。『後漢書』一一（『統漢書』中華書局、一九九一年第五次印刷）、志第十四、五行二、三三九頁。
- (一三) 前掲『後漢書』一一、志第十四、三三九頁（『統漢書』）。
- (一四) 塙保己一編『群書類従』第二十八輯、雑部（統群書類従完成会、一九八二年訂正三版第五刷）、巻第五百六・雑部六十一所収、『曆林問答集・上』釋五行第二、六九

一頁。中村璋八著『日本陰陽道書の研究』（汲古書院、一九八五年）、三五九頁。文中「垂拱無為」の句は天平五年七月の策問（経国集）にも見える虞舜の政治姿勢を評す言葉で、恐らく『漢書』董仲舒伝に基づくと思はる。

- (一五) 顧炎武著・黄汝成集釋『日知錄集釋』（上海掃葉山房、民国十三年・一九二四年石印）、卷三十、八葉に「淮南王安以客言。彗星長竟天。天下兵當大起。謀為畔逆。而自劉國除。」という。

- (一六) 前掲拙稿「不改常典の典拠と公羊傳」、二六頁。因みに、「謀反」は反逆行為の未遂段階をいう（富谷至「謀反―秦漢刑罰思想の展開」『東洋史研究』四二卷一号、一九八三年所収、三頁参照）。

- (一七) 前掲『後漢書』一〇、卷八十二下、列伝第七十二下、二七三四頁。吉川忠夫訓注『後漢書』第九冊（岩波書店、二〇〇五年）、四九四～四九五頁参照。

- (一八) 前掲『後漢書』九、卷七十五、列伝第六十五、二四三三頁。『三国志』四、蜀書（中華書局、一九九二年第一次印刷）、卷三十一、劉二牧傳第一、八六七頁。

- (一九) 『華陽国志』はこれを「既痛二子、又感祲災、疽發背卒。」として、天火を祲災の謂に解している（晉・常璩著、任乃強校注『華陽国志校補図註』（上海古籍出版社、二〇〇九年第四次印刷）、三四〇～三四一頁、三四六頁参照）。

- (二〇) 清・萬斯同撰「魏將相大臣年表」第四頁（『二十五史補編』二、中華書局、一九八九年第五次印刷所収、二六一〇頁）。

- (二一) 因みに、高堂隆の名は『日本三代実録』卷二十、貞觀十三年十月廿一日癸亥条に、焼失した応天門の改名に関する議論の中にも登場している（二一九頁）。

- (二二) 前掲『三国志』一、魏書、卷三、明帝紀第三、一〇一頁。

- (二三) 前掲『三国志』三、魏書、卷二十五、高堂隆傳、七〇九～七一〇頁。

- (二四) 前掲『晋書』五（中華書局、一九九一年第四次印刷）、卷五一、一四一〇頁、および『梁書』三（中華書局、一九八七年第三次印刷）、卷五十、七〇一頁。

- (二五) 皇甫謐撰・陸吉點校『帝王世紀』（清南齋魯書社、二〇一〇年『帝王世紀・世本・逸周書・古本竹書紀年』一～九二頁所収）、第四、三三三～三四頁。

- (二六) 円仁著・足立喜六訳注・塩入良道補注『入唐求法巡礼行記2』（平凡社、一九九四年第八刷）、一〇〇頁。

- (二七) 前掲『入唐求法巡礼行記2』、一一五頁。

- (二八) 鎌田茂雄他編『大藏經全解説大事典』（雄山閣出版、一九九八年初版第二刷）、三四六頁による。

- (二九) 前掲『大正新修大藏經』第十一冊、密教部下、一二五一・吽迦陀野儀軌卷中、二四三頁下段。『大正新修大藏經索引』全四八冊（新文豐出版公司影印、中華民國八一年第一版）に拠り検索すると、「神火」はこの『吽迦陀野儀軌』と二一四五・『出三藏記集』に、また「天火」は『吽迦陀野儀軌』の他、七二二『正法念處經』や一七五三『觀無量壽佛經疏』等に見える。

- (三〇) 前掲『晋書』七、卷七十五、一九八九頁。

- (三一) 武徳七（六二四）年奏上の『芸文類聚』（上海古籍出版社、一九九九年）、卷九七、一六八五頁。

- (三二) …『大正新修大藏經』、第五十五卷、目錄部全に所収。
- (三三) …前掲『晋書』卷七十五、一九八五頁に「(略)頃之、徵拜中書侍郎。在職多所獻替、有益政道。時更營新廟、博求辟雍、明堂之制、甯據經傳奏上、皆有典證。孝武帝雅好文学、甚被親愛、朝廷疑議、輒諮訪之。甯指斥朝士、直言無諱。」とあるに拠る。
- (三四) …『アジア歴史事典』5 (平凡社、一九七一年八版)、五二〇五三頁、河地重造氏執筆「晋書」の項。前掲『晋書』第一冊巻頭「出版説明」にも、「晋書の修撰、從貞觀二十年(公元六四六年)開始、二十二年(公元六四八年)成書、歷時不到三年。」という。
- (三五) …矢島玄亮著『日本国見在書目錄―集証と研究―』汲古書院、一九八四年、八七頁、一三四頁、一三八三頁。
- (三六) …前掲『大藏經全解説大事典』、六三〇頁。『アジア歴史事典』4 (前掲第六版)、三三三頁、塚本善隆氏執筆「出三藏記集」の項。
- (三七) …前掲『大正新修大藏經』、第五十五卷、目錄部全、五十七頁中段。
- (三八) …『国訳一切經』(大東出版社、一九五八年)、和漢撰述部六九、史傳部一、林屋友次郎訳「出三藏記集序卷」第八、二二四頁。中島隆藏編『出三藏記集序卷訳注』(平楽寺書店、一九九七年)は、「霜」を光の比喩と見、「神妙な火をかざして霜のように照らし出し」(二二八頁)と訳す。
- (三九) …木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(国書刊行会、一九八九年)、一九二頁上段。
- (四〇) …『大日本古文书』編年之一〇二五(東大出版会、一九七七―一九七八年覆刻)を使用。編年之九、三九三頁、編年之十二、二二六頁、五六二頁。
- (四一) …吉井巖著『萬葉集全注』卷第十五(有斐閣、一九八八年)、二七六―二七八頁。欽明紀二十三年六月馬飼首歌依の話の条、孝徳即位前紀の群臣会盟の条、天武紀朱鳥元年七月の火災(雷火である)の条。観念的には三記事共に天火の謂だが「天火」の表記はない。吉井論文を奈良女子大学文学部教授奥村和美先生の「指示により知った。記して謝意を表します」。
- (四二) …応天門に火災のあった貞観三年の九月廿五日丁卯條で伴善男の配流を深草山陵に告げる告文や同十三年十月廿一日癸亥条の応天門の改名議論にも天災と人火の表記があり、また同十八年四月十日夜の大極殿火災後、五月八日に柏原山稜に灾火の由を告げる告文では明確に天火と人火の表記を用う『日本三代実録』卷十三・卷二十・卷廿八)。『續左丞抄』第一(新訂増補国史大系第二十七卷、吉川弘文館、一九九九年)、長治二(一一〇五)年三月三日條(六三三頁)にも天火の語は見える。
- (四三) …『続日本紀』後篇(吉川弘文館、一九八四年)、卷二十四、二九五頁。『類聚三代格』前篇(吉川弘文館、一九八三年)、卷七・牧宰事、二九八頁。以下引用する場合には『三代格』と略記する。
- (四四) …前掲拙稿「不改常典の典拠と公羊傳」、三一―三三頁。
- (四五) …鎌田正著『春秋左氏伝』(明治書院、一九九三年十六版) 莊公十一年秋、宋の大水を弔問した魯使に対して「孤(国君)實に不敬にして、天に災を降せり(略)」(一八八頁)と言う。『韓詩外傳』(中華書局、二〇一二年第四次印刷、『韓詩外傳集釋』)には「寡人不仁、齋戒不修、使民不時。天加以災、(略)」(九九頁)とす。『説苑』(河東師範大学出版社、一九八五年、『説苑疏證』)も「仁作倭、修作謹、災作殃」(二二頁)と略同文を記す。「災」は天子不徳の故であった。

- (四六) 村井康彦著『律令制の虚実』(新書日本史2、講談社、一九八二年第六刷)、八三頁。
- (四七) 災害時の詔に下記の例がある。「朕以菲薄之身。託于王公之上。不能德感上天仁及黎庶(文武慶雲二年四月)。」、「民多入罪。責在(予)一人。非關兆庶(聖武天平六年六月)。」、「良由朕之不德致此災殃。仰天慚惶(聖武天平九年八月)。」、「朕以不德。(略)況復去歲無稔。懸磬之室稍多(桓武延暦元年七月)。」、「頃年天下諸国飢饉繁興。疫癘相尋。朕之不德。胥及黎元(平城大同三年五月)。」、「去年秋稼燹傷不收。朕之不德。百姓何辜(嵯峨弘仁九年四月)。」、「頃者坤德愆紘。山崩地震。(略)責在朕躬(淳和天長五年七月)。」など。
- (四八) 上山春平著『埋もれた巨象』(岩波書店、一九九七年)、序章(特に十七頁)参照。
- (四九) 石母田正著『日本古代国家論―官僚制と法の問題―』第一部(岩波書店、一九七三年)所収、「古代法小史」、二二〇頁。
- (五〇) 薮内清著『中国文明の形成』(岩波書店、一九九四年第五刷)、一〇七頁参照。
- (五一) 馮友蘭著『中国哲学史』(香港太平洋圖書公司、一九五九年)、第二章、(一)陰陽家与今文經學家、四九八頁。
- (五二) 前掲吉川忠夫氏訓注『後漢書』第六冊、四〇四頁および四二八頁に拠る。仲長統撰『昌言』卷上(玉函山房輯佚書、光緒壬辰湖南思賢書局印行所収)、法誠篇、十葉ノ十一葉。前掲『後漢書』六、卷四十九、列伝第三十九、一六五七頁、また王先謙撰『後漢書集解』上(中華書局、一九九一年第二次印刷)では五八二頁上段に見え、この集解中には「漢世三公以災異死者至多不可枚挙(漢ノ世、三公ノ災異ヲ以テ死免セラルル者、多ニ至リテ枚挙ス可カラズ)」「(五八一頁下段)という。仲長統は後漢末期の献帝に仕えた人物で、散齋期間中の宴樂を可とした言を『通典』が伝えており、本論文第一部第二章第二節「齋戒とその場所」ではその議論にも言及した。
- (五三) 『続日本後紀』(吉川弘文館、一九八七年)卷六、七〇頁、承和四(八三七)年十二月丁酉条。『日本三代実録』前篇(吉川弘文館、一九八三年)、卷三、三四頁。
- (五四) 前掲『類聚国史』第一、卷四、四五頁。前掲『日本紀略』第二、前篇十四、三一九ノ三二〇頁。黒板伸夫・森田悌編『訳註日本史料 日本後紀』(集英社、二〇〇三年)、卷第三十二(逸文)、八七八ノ八七九頁。
- (五五) 拙稿「伊勢斎宮の立地とその歴史的背景」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四二号、二〇一四年所収)。
- (五六) 田村圓澄著「古代の遷宮」『飛鳥・白鳳仏教論』雄山閣、一九七五年)、三三三ノ三三四頁。
- (五七) 井上 薫「神々の世界と仏の世界」(亀田隆之編『古代の地方史』第三卷畿内編、朝倉書房、一九七九年所収)二〇六ノ二〇七頁。
- (五八) 榎村寛之「斎宮をめぐる七つの謎」(『斎宮歴史博物館研究紀要』四、一九九五年所収)、二二頁。既に中国の皇帝祭祀にも類似の指摘がある。梅原郁「皇帝・祭祀・国都」三〇三頁(中村賢二郎編『歴史の中の都市』ミネルヴァ書房、一九八六年所収)。
- (五九) 久禮旦雄「賀茂斎院・伊勢斎宮の淳和天皇朝における存廃について―狩野本『類聚三代格』天長元年十二月二十九日太政官符の評価をめぐって―」『続日本紀研究』第四〇九号、二〇一四年四月所収(一ノ一四頁)。

(六〇) …久禮氏前掲論文、九頁上段。

(六一) …前掲『類聚国史』巻三、神祇三、伊勢大神、三三頁。

(六二) …後の『塩囊鈔』巻八にも、「天長元甲辰年ノ春大ニ旱シテ。農民耕作ノ用水ヲ失ヒケリ仍テ大師ニ勅シテ雩アルベカリケルニ。」とある（復刻日本古典全集、オンデマンド版。現代思潮新社、二〇〇六年、巻第八、二九三頁）。空海をして「神泉苑に請雨經法を修せしめ」ている『群書類従』第五輯、巻第六十八所収『明匠略伝』日本上、四七七頁上段。また『続群書類従』第八輯下、巻第二百七所収『弘法大師御傳』巻下、五四七頁、及び同巻第二百八所収『弘法大師行化記』、五九三〜五九五頁等参照）。

(六三) …久禮氏前掲論文、九頁上段。

(六四) …『群書類従』第一輯神祇部（続群書類従完成会、一九八三年）巻第四所収『神宮雜例集』巻第一、一四二〜一四三頁。但し「撰定勝地於多氣郡。始建齋宮寮院。于時氏子内親王群行。」とある「多氣郡」は「度会郡」の間違いである。

(六五) …前掲『日本紀略』前篇十四、日本後紀巻三十四、天長三年五月丁卯朔条、三三二頁。

(六六) …前掲『日本紀略』前篇十四、三三四頁。前掲『訳注日本史料・日本後紀』、九四〇〜九四三頁（以下『日本後紀』からの引用は本書に依拠する）。

(六七) …『三代実録』後篇（吉川弘文館、一九八三年）巻四十七、五八六頁、仁和元年夏四月二日丙辰条。

(六八) …山中智恵子著『齋宮志』大和書房、一九八六年、二二〇頁。

(六九) …佐伯有清「神火と国分寺の焼失」（同氏著『新撰姓氏録の研究』研究篇、吉川弘文館、昭和四六年）、二九一頁参照。

(七〇) …村尾次郎著『律令財政史の研究』（吉川弘文館、一九六四年再版）第二章第五節、一〇二〜一三〇頁。時野谷滋著『律令封禄制度史の研究』（吉川弘文館、一九七七年）第一篇第六章、一九七〜一九八頁。氏はこの桓武末年の凶作による国庫欠乏時に職封削減措置があったとする（一九七頁）。

(七一) …前掲『三代格』前篇、巻一、齋王事、一三三頁。

(七二) …『延喜式』前篇（吉川弘文館、一九八三年）、巻五、神祇五齋宮、一一八頁。

(七三) …前掲『続日本紀』後篇、巻三十六、四六三〜四六四頁、宝龜十一年十月丙辰条。『三代格』巻十二、三八四頁、宝龜十一年十月二十六日太政官符「應京職畿内七道諸国括部内浮宕百姓事」。

(七四) …門脇禎二「古代畿内村落の崩壊過程―山城国愛宕郡出雲郷について―」（『歴史評論』第五巻第二号、一九五一年所収）、二六頁。

(七五) …『三代格』巻十五、四二八頁、大同四年九月十六日太政官符「應授居住外国京畿内百姓口分田事」。

(七六) …石母田正「延喜の莊園整理令について」（同氏著『石母田正著作集』第七巻、古代末期政治史論、岩波書店、一九八九年所収）、特に四〜六頁参照。

(七七) …前掲『三代格』巻一、一六頁、貞觀二年十一月九日太政官符「不可割取伊勢大神宮神戸百姓事」所引。

- (七八) …前掲『三代格』卷一、三二〇三五頁、延暦廿年五月十四日太政官符「定准犯科祓例事」。
- (七九) …前掲『三代格』、貞觀二年十一月九日太政官符「不可割取伊勢大神宮神戶百姓事」所引。
- (八〇) …前掲『類聚国史』卷四、五三頁。前掲『三代格』卷一、延暦廿年十月十九日太政官符「應加決罰神郡司事」、三五〇三六頁。
- (八一) …前掲『三代格』卷一、二四頁。および同書卷四、一四七頁。
- (八二) …前掲訳注日本史料『日本後紀』卷廿一、五八二〇五八五頁。
- (八三) …前掲訳注日本史料『日本後紀』卷廿二、六〇八〇九頁。
- (八四) …前掲『三代格』卷一、弘仁八年十二月廿五日太政官符「應多氣度会両郡雜務預大神宮司事」一應修理神社玖拾參前に所引の官符、三六〇四〇頁。
- (八五) …前掲『三代格』卷一、一五〇一六頁。弘仁十二年八月廿二日太政官符「應令伊勢大神宮司檢納神郡田租事」所引。
- (八六) …荒井秀規「神郡の田租をめぐる―伊勢国神郡を中心に―」（『地方史研究協議会編『三重―その歴史と交流』雄山閣、一九八九年所収）、二三〇頁。
- (八七) …前掲、弘仁十二年八月廿二日太政官符「應令伊勢大神宮司檢納神郡田租事」所引。
- (八八) …前掲、弘仁十二年八月廿二日太政官符「應令伊勢大神宮司檢納神郡田租事」所引。
- (八九) …前掲『類聚国史』第一、卷四、五四頁。
- (九〇) …前掲『三代格』前篇、卷一、三六〇四〇頁、弘仁八年十二月廿五日太政官符「應多氣度会両郡雜務預大神宮司事」所引。
- (九一) …前掲、弘仁十二年八月廿二日太政官符「應令伊勢大神宮司檢納神郡田租事」所引。
- (九二) …『続日本後紀』（吉川弘文館一九八七年）卷十五、一七八頁、承和十二年六月癸未条。
- (九三) …伊勢とは違うが、越前国では氣比大神宮の雜務所管をめぐる神祇官からの行政的介入もあつたかに見える記事がある（『続日本後紀』承和六年二月戊寅条。「氣比大神宮雜務、停預国司、隸神祇官」）。
- (九四) …『令集解』前篇（吉川弘文館、一九六六年）卷七、神祇令、二〇五〇二〇六頁。
- (九五) …前掲山中章氏論文「齋宮・離宮院変遷の歴史的背景―離宮院遷宮にみる古代王権と伊勢大神宮」、三二四〇三三六頁。
- (九六) …稲本紀昭「齋宮寮とその経済」（『三重大学教育学部研究紀要』第二十九卷三号、一九七八年所収）、二二二頁下段。
- (九七) …前掲稲本論文「齋宮寮とその経済」、二二二頁上段。
- (九八) …齋宮寮頭と國司との兼務事例の初見は、『続日本紀』大宝三（七〇三）年六月乙丑条に「從五位上引田朝臣廣目為齋宮寮頭兼伊勢守」があるが、以後そのような兼務は途絶えていた。
- (九九) …一例には、前掲『続日本紀』後篇、卷三十九、五一九頁、延暦五年夏四月庚午条には「詔曰。諸國所貢。庸調支度等物。每有未納。交關國用。積習稍久。為弊已深。

良由國宰郡司遞相怠慢。遂使物漏民間用乏官庫。又其位政治民。多乖朝委。廉平稱職。百不聞一。侵漁潤身。十室而九。忝曰官司。豈合如此。(略)」という。

- (二〇〇) … 森田悌著『平安時代政治史研究』(吉川弘文館、一九七八年) 所収、第一部第三章「地方行政機構についての考察」(特に六三〜六六頁) および第二部第一章「平安初期政治の考察」(特に一二三頁) など。

- (二〇一) … 前掲森田悌氏著書『平安時代政治史研究』所収、「平安初期政治の考察」(一二三〜一二四頁)。

- (二〇二) … 佐藤宗諱「平安初期の官人と律令政治の変質」『史林』第四七巻第五号、昭和三九年所収。「良吏」に関して森田悌氏は前掲論文「平安初期政治の考察」(一〇六〜一〇八頁) や同書第三章「九世紀中期の政治について」(二五六〜二五八頁) において少し異論を述べている。

- (二〇三) … 伊勢斎宮跡の発掘調査で出土の「目代」墨書土器はこの一連の動きと関連すると今は考えるが、考察は改めて別稿「九世紀斎宮寮における目代再考」に譲りたい。

- (二〇四) … 前掲、佐伯氏論文「神火と国分寺の焼失」二九四〜二九五頁参照。

- (二〇五) … 村尾次郎氏前掲著書『律令財政史の研究 増訂版』第三章第三節、二五九頁及び二六三頁。

- (二〇六) … 前掲『日本後紀』(集英社) 巻第三十八(逸文)、九九八〜九九九頁。

- (二〇七) … 前掲『日本後紀』(集英社) 巻第三十九(逸文)、七九四〜七九五頁。

- (二〇八) … 前掲『日本後紀』(集英社) 巻第四十(逸文)、一〇三六〜一〇三七頁。

- (二〇九) … 前掲『日本後紀』(集英社) 巻第四十(逸文)、一〇三六〜一〇三七頁。

- (二一〇) … 前掲『続日本紀』巻三十八、五〇二頁。

- (二一一) … 前掲『続日本紀』巻四十、五五五頁。

- (二一二) … 前掲『日本後紀』(集英社) 巻第二十六(逸文)。七五〇〜七五一頁。

- (二一三) … 前掲『続日本後紀』巻七、七四頁。

- (二一四) … 『日本文徳天皇実録』(吉川弘文館、一九八四年) 巻九、一〇〇頁。前掲『三代実録』前篇、巻一、一二頁、天安二年十二月八日乙未、太政官論奏。

- (二一五) … 前掲『日本後紀』(集英社) 巻第一(逸文)、一二〜一三頁。

- (二一六) … 前掲『日本後紀』(集英社) 巻第三十一(逸文)、八五四〜八五五頁。

- (二一七) … 前掲『日本後紀』(集英社) 巻第三十一(逸文)、八六〇〜八六一頁。

- (二一八) … 前掲『続日本後紀』巻四、三七頁。

- (二一九) … 前掲『続日本後紀』巻四、三八頁。

- (二二〇) … 前掲『続日本後紀』巻八、八四頁。

(一二一) …前掲『続日本後紀』巻八、九四頁。

(一二二) …前掲『文徳天皇実録』巻十、一一七頁。

(一二三) …古代の「神火」事件には、夙に川上多助氏、西岡虎之助氏、角田文衛氏らに言及があり、戦後は塩澤君夫氏『古代専制国家の構造』、新野直吉氏『日本古代地方制度の研究』、吉村茂樹氏『国司制度崩壊に関する研究』、佐伯有清氏『新撰姓氏録の研究』、富山博氏『正倉建築の構造と変遷』などの他、近年では矢野建一氏（「神火」の再検討）、渡部育子氏（「神火事件についての管見」）、武蔵国入間郡の事件を詳細に考察した大山誠一氏（「武蔵国入間郡の神火をめぐる諸問題―道鏡政権と地方豪族の選択―」）、羽床正明氏（「神火についての一考察―武蔵国入間郡の神火を中心に―」）、森田 悌氏（「入間郡司と神火」）、小池栄一氏（「神火についての一考察」）など多数の研究成果がある（順不同）。

(一二四) …佐伯氏「神火についての二・三の問題」『研究と評論』第七号、昭和三七年三月。及び前掲「神火と国分寺の焼失」『新撰姓氏録の研究』研究篇所収。

(一二五) …塩澤君夫氏が「神火」の初現記事の背景に飢饉や疾病による百姓の飢窮のあったことをまず捉え、エゾ問題に関連した負担加重に対する農民の抵抗の一環として論じている（『古代専制国家の構造』一九六二年増補版、二六四～二六五頁）。

(一二六) …『続日本紀』後編、二八六～三四〇頁。相互に関連する亢旱、不登、飢饉、疫病等の事象を問わず、年毎に記事の見える国名（記事順）の重複を避けて列挙する。

天平寶字六年…参河・尾張・遠江・下総・美濃・能登・備中・備後・讃岐・京師及畿内・伊勢・近江・若狭・越前・飛騨・信濃・石見・備前。

天平寶字七年…出羽・信濃・壹岐嶋・陸奥・伊賀・河内・尾張・越前・能登・大和・美濃・摂津・山背・備前・阿波・近江・備中・備後・丹波・伊豫・山陽南海道諸国・丹後・但馬・伯耆・出雲・石見・淡路・摂津・播磨。

天平寶字八年…播磨・備前・備中・備後・石見・志摩・摂津・淡路・出雲・美作・阿波・讃岐・伊豫・山陽南海二道諸国・多櫛嶋。

天平神護元年…和泉・山背・石見・美作・紀伊・讃岐・淡路・壹岐・多櫛・相模・下野・伊豫・隠岐・備前・備中・備後・伯耆・参河・下総・常陸・上野・伊賀・出雲・左右京・美濃・越中・能登・武蔵・駿河・丹波・甲斐。

天平神護二年…河内・志摩

神護景雲元年…尾張・淡路・山背・和泉。

(一二七) …前掲『続日本紀』後篇、巻二十四、二九三頁、天平寶字七年三月丁卯条。

(一二八) …瀧川政次郎著『律令時代の農民生活』（刀江書院、一九六九年）第二章第十二節、二〇六頁。

(一二九) …前掲瀧川氏著書、第二章第十二節、二〇七頁。

(一三〇) …前掲『続日本紀』後篇、巻二十七、三三四頁、天平神護二年九月戊午条。

(一三一) …「東国」をあたかも関東地方と同義に捉え、神火は東国のことゆえ伊勢斎宮は関係ないとする乱暴な意見もあったが異な事である。『日本書紀』天武天皇十四年秋

七月辛未条の詔に「東山道美濃以東、東海道伊勢以東・・・」とあり、伊勢国は東国の入り口と解釈するのが妥当である（日本古典文学大系六八、岩波書店、一九七〇年第六刷、四七〇～四七一頁参照）。

(一二二) 前掲『続日本紀』後篇、卷三十二、光仁天皇宝龜四年八月庚午条（四一一頁）。

(一二三) 大日本古記録『小右記』一（岩波書店、一九八七年第二刷）、永祚元年四月（廣本）、一七二頁、五日乙卯条。『小右記』全冊の長期借用を許された元同僚の梅澤裕氏の厚意に感謝申し上げたい。

(一二四) 竹内理三編『平安遺文』（東京堂出版、一九七九年新訂三版）、古文書編第二卷、三三九「尾張国郡司百姓等解」（二十四、「請被裁断不下行国分尼寺修理料稻万八千束事」。なお、滝川政次郎氏前掲書『律令時代の農民生活』、後編第二章第十節「国司の荒政」（四九六～五一〇頁）に詳説されている。

(一二五) 前掲『小右記』六、治安三年十二月（廣本）、二五一頁、治安三年十二月廿三日壬午、子刻許条。

(一二六) 『群書類従』第二十七輯、雑部（続君所類従完成会、一九八三年訂正三版第五刷）、卷第四百七十五所収『寛平御遺誠』、百三十三頁下段。

(一二七) その種の問題は、例えば国司らの解文に不実報告（弘仁十年五月二日太政官符）などがあり、虚偽報告による不必要な支出もあり得た。中国でも蠲免政策に乗じた中央・地方官人の水増し請求など、本論中第Ⅱ部第二章、註（四六）に紹介した。

(一二八) 前掲『日本後紀』（集英社）卷第三十五（逸文）、九四四～九九五頁。逸文のためか、出羽国以外の具体的な地名は不詳。地震記事の回数を年月毎に拾うと、天長四年四月（一回）、七月（十九回）、八月（十四回）、九月（八回）、十月（五回）、十一月（四回）、十二月（五回）、天長五年二月（三回）、三月（二回）、六月（三回）、七月（一回）、十月（三回）、十一月（一回）、天長六年三月（一回）、九月（一回）、十月（一回）、天長七年正月（三回）などである。天長七年正月の出羽国のはマグニチュード七・〇～七・五と推定されるという（同書九八九頁頭注）。

(一二九) 前掲『続日本後紀』卷五、四八頁～卷七、七七頁。国名を掲げると、承和三年には、伊勢・尾張・石見・備中・加賀・伯耆・若狭・薩摩・能登・因幡、地震一回、承和四年には、備前・和泉・淡路・美作・伊豫・その他、地震三回、承和五年には、筑前・筑後・肥前・豊後・太宰府管内諸国・備前・山城・大和、地震一回などである。

(一四〇) 佐藤智水著『北魏佛教史論考』岡山大学文学部、一九九八年（特に、一七八～一九六頁参照）。

(一四一) 宝龜四年八月庚午。諸国郡司。官物ヲ焼ク者ハ。主帳已上皆見任ヲ解ケ。其政ニ從テ入京シ。及ヒ放火ノ賊ヲ獲テ。功效稱ス可キ者ハ。事ヲ量テ處分ス。又譜第ノ徒。情覬覦（きゆ）ヲ挾テ。事サラニ焼クニ渉ル者ハ。一切ニ銓擬ヲ得ルコト勿レ（続日本紀）。宝龜十年十月十六日。太政官符。（略）水旱時ナラズシテ。神火シバシバ發リヌ。寔ニ國郡司等職務ヲ脩メザルニ縁テナリ。是ヲ以テ寶字七年九月一日拙ヲ却シ良ヲ用フ之格ヲ頒チ下セリ。今聞。姦枉之輩郡任ヲ奪ハント謀リ。言ヲ神火ニ寄セ。多ク官物ヲ損ヘリト。若シ此ノ類ヒノコト有ラバ。首從ヲ論ゼズモハラ皆打チ殺セ（三代格）。延暦五年六月己未朔。百姓ヲ撫育シ部内ヲ糾察スルコトハ。国郡ノ官司職掌ヲ同ジクス也。（略）而ルニ頃年正倉ヲ焼クコト有レバ。獨リ郡司ヲ罪シテ國守ヲ坐セザルハ。事ヤヤ理ニ乖ケリ。（略）宜ク國司

等ノ公廨ヲ奪テ。惣テ焼失ノ官物ヲ填スベシ。其ノ郡司ハ赦ニ會フノ限ニ在ラズ。」(続日本紀)。延暦五年八月甲子。正倉焼カルルコト。未ダ必ズシモ神ニ由ラズ。何トナレバ譜第之徒ハ。傍人ヲ害シテ相焼キ。監主之司ハ。虚納ヲ避ケントシテ以テ放火スナリ。自今以後。神災火ヲ問ハズ。宜シク當時ノ國郡司ヲシテ之ヲ填備セシメ。仍テ見任ヲ解キ譜第ヲ絶ツコト勿ルベシ矣。(続日本紀) などがある。「不問神火人火」の文言は弘仁三年八月十六日官符(三代格卷十四、日本後紀第廿二、類聚国史第八十四) にもある。

(一四二) 続日本後紀(吉川弘文館、一九八七年)、卷八、九四〇九五頁。森田悌著『続日本後紀(上)』(講談社学術文庫、二〇一〇年第二刷)、三二四〇三二七頁。

(一四三) 前掲『続日本後紀』承和七年二月癸酉条(九九頁)によると、この承和六年には「炎旱による穀物被害で百姓は飢え苦しみ、国用にも事欠く事態であった」ことを天皇自らが陳べている。この点から推しても、緒嗣らの奏言が「炎旱飢饉」を憂慮しておこなわれたものではないことが逆に窺えるのである。

(一四四) 『日本書紀』下(岩波書店日本古典文学大系六八、一九七〇年第六刷)、四五六〇四五七頁。

(一四五) 拙稿「天武紀七年の斎宮について」(本論文第二部第二章、第四節「早魃下における天武親祭」、②天武朝から文武朝にかけての「災異」と対応)を参照されたい。

(一四六) 義江彰夫「国衙支配の展開」(岩波講座『日本歴史4』古代4、一九八〇年第二次発行所収)、五六〇五七頁。

(一四七) 筒井英俊校訂『東大寺要録』(国書刊行会、一九七七年第二刷)、卷第七雜事章第十、二七五頁、延喜十八年八月十五日条に「承平四年十月十九日今夜雨降。又有東大寺西塔并廊等。為神火烧亡事」と引用あり。

(一四八) 北山茂夫「撰関政治」(岩波講座『日本歴史4』古代4、岩波書店、一九七一年第四次発行所収)、二四頁。村井康彦著『古代国家解体過程の研究』(岩波書店、一九七六年第六刷発行)、第一章、二七頁。

(一四九) 前掲同解文「尾張国郡司百姓等解」第十八条(四八〇頁)には、同国丹羽郡の産物であった漆の菌地が荒廃し「野火の為に焼亡」したと記して明らかに「神火」とは区別している。従ってここに言う「神火」は当時周知の「人火(放火)」の謂であることは間違いないのである。

(一五〇) 通例「神火」は十世紀で終わるとされる。例えば前掲『東大寺要録』所引承平四(九三四)年十月十九日条などである。しかし「神火」の語自体は十三世紀にもあることを忘れてはならない。前掲『続左丞抄』第一、「神祇権大副卜部兼文諸社神宝紛失盗失及焼亡等勘例」六四頁、安貞二(一二二八)年十二月二日條や『吾妻鏡』寶治元(一二四七)年七月小十日辛酉條(永原慶二監修・貴志正造訳注『全譯吾妻鏡四』新人物往来社、一九七九年、四七八頁参照)などである。

(一五一) 旧稿「九世紀齋宮寮における目代の可能性」(『佛教大学史学科三十周年記念論集』、一九九九年)、四頁上段。なお「目代」に関しては旧稿を改訂している(本論文第四部第五章)。

(一二二) 小俣町教育委員会編『離宮院跡発掘調査報告』一九八〇年、七頁および一七頁(執筆は御村精治・榎本義讓氏による)。

(一二三) 『百鍊抄』第五、堀河天皇康和四年七月十六日条(四五頁)。

第五章 九世紀齋宮寮における「目代」再考

(一) はじめに

平成元(一九八九)年度に実施した国史跡齋宮跡の第八十三次計画調査で井戸SE5850の埋土中から「目代」墨書土器^③が出土し、齋宮寮における「目代」を考える契機になった。ただ、後に紹介するように、それが書かれた灰釉陶器それ自体の考古学的な年代観には当時の研究者間でも諸説があった。調査担当者の一人でもあった私は、他の共伴遺物との関係からそれを平安時代前I期(旧編年案による)、おおよそ九世紀前半代とした上で、「目代」に関して十分な歴史的見識もないままに簡略な概報を書き、後年、調査に携わった一人としての責任もあり、門外漢ながらも個人的見解としての旧稿^④をしたため公にした。

それは、九世紀前半代における齋宮寮の政治的機能ないし位置づけの変換期に前後して顕著になる寮頭と国司の兼官事例に着目し、「私的代官」との認識に基づきいくつか想定される「目代」の可能性の一つを推定しようとしたものであった。その際、『大神宮諸雑事記』には奈良時代の「志摩国守目代」^⑤が見えているので、齋宮寮頭にも同等の目代を想定する事は必ずしも無効ではないと考えたからであった。そして、もつとも蓋然性の高い第一候補を伊勢国守兼齋宮寮権頭であった長峯宿禰高名の「目代」だと推定したのである。しかし九世紀代の「目代」をもって、通常は十世紀以降に現れる「国守(受領)の私吏」としての代官たる「目代」とを同列に扱う筆者の不用意さに対して、早くから内容を見直すべきだ(目代と受領とを切り離すか、土器の年代を下げるか)とのご忠告^⑥を受けていたが、怠慢にして今日に至ったことを深くお詫びしなければならない。

最近、「八・九世紀の目代」と題する吉永壮志氏の緻密な基礎作業に基づく説得力に富む論考^⑦に接したのを機に、認識も新たに改めて旧稿を見直し、ここに再考を試みることにした次第である。

(二) 墨書の积文と土器の年代

旧稿とも一部重なるが、最初に当該「①墨書の积文」とその「②墨書土器の考古学的な年代観」について再確認をしておきたい。その際、旧稿には触れ得なかった高橋照彦氏の研究成果にも依拠して進めたいと思う。

【①墨書の积文】問題の「目代」墨書土器は、井戸SE5850から出土した。いま手続き上、再度その墨書文字を確認しておく。底部外面に書かれたその文字の积文については、これを「目代」と読むことに異論はないであろう(第七図)。底部外面の中央よりやや左上方に寄って書かれているのは、おそらく書き手が右利きだったからであると推測する。文字自体は、齋宮跡で出土する他の墨書土器の文字に比べてかなり小さく、伸びやかさや大胆さはまったく感じられず、どちらかと言えば几帳面な印象を受ける。この筆跡が後代にいわゆる「目代手」^⑧と称される書体の系統に連なっていくような、その先蹤をなすものに当たるとはどうかは、類例の増加と専門家の鑑定に俟たねばならない。

また、清水みき氏のいうように、「所管の官司が多数の土器を機能的に管理する目的」^⑨で官司名や人名などを墨書したのであれば、この「目代」

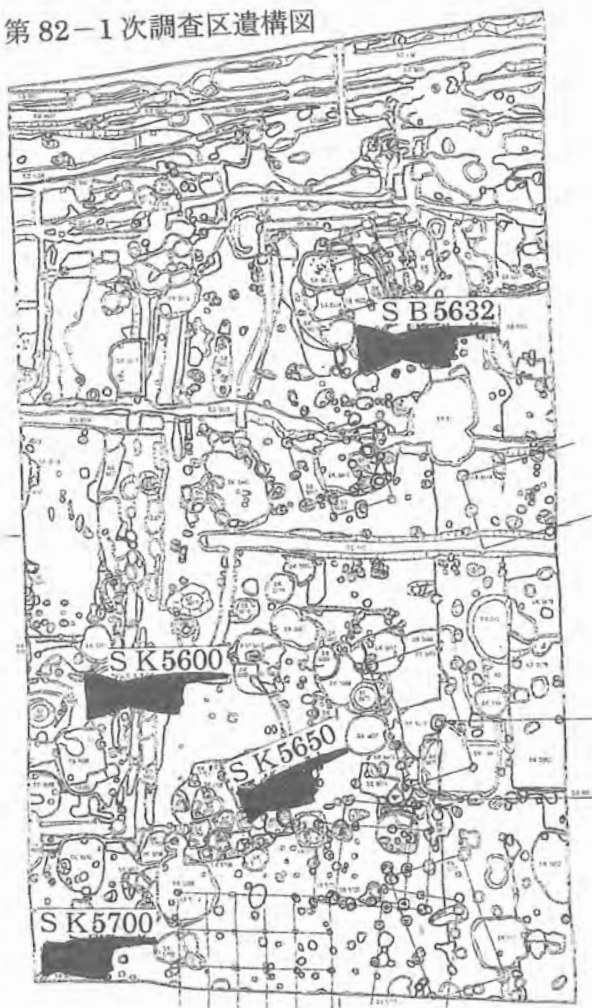
墨書も恐らくは斎宮寮でのそういう土器（供膳具）管理上の必要性からでたものに相違ない。だとすると、本人自らが書した可能性はあるいは少ないのかも知れない。これと同じ井戸の埋土中から出土した別の墨書土器「少允殿」⁸をみれば、その観は強くなる（第七図）。器の管理者側で筆を持たないかぎり、「殿」づけで書す必然性はないと思われるからである。延いてはこの「目代」たる人物の地位的な問題にも関心は向く。

ではなぜ「目代」には「殿」がついていないのだろうか。一律には扱えないが、仮に両土器が斎宮寮で並行使用される時期があったとすれば、墨書「少允殿」は食器を管理する側の立場を表明している。それに対して、「目代」の方はもし仮にその職掌者本人が書いたのであれば、器の管理者側からみて「殿」を付す必要性のない地位の者だったのではないかと想像される。即ち、この「目代」は「少允殿」より下位の者だった可能性がある。両墨書文字の大きさの違いのみならず、後述するようにそれぞれの土器自体の考古学的な年代差もこれあり、直ちには結論の出しにくい問題で、目代本人の手による可能性も含め今後の課題としなければならない。

【②土器の年代観】次に、最も重要かつ基本的な前提条件になるこの土器の法量と製作技法上の特徴にもとづく考古学的年代観について述べる。この土器の部位計測結果は、口径一六・四センチメートル、器高二・四センチメートル、高台径八・〇センチメートルであった。施釉陶器の一種で、特に灰釉陶器とよばれる。器種は供膳具としての皿である。出土時点ですでに口縁端部を約五センチメートルほど欠失していた。（実測図の断面からも判るように）器の体部は肉厚で口縁部は外反している。付け高台の断面形はまだ三日月形（いわゆる三日月高台）にはなっておらず、方形に近い形状を保っている。また、底部外面には回転ヘラケズリを施し、器壁の内外面には灰釉をハケ塗りしている。これは、愛知県猿投山西南麓古窯跡群における黒笹十四号窯式の灰釉陶器（碗・皿）に特有の形状、製作技法を示しており⁹、斎宮跡の旧来の土器編年案では平安時代前Ⅰ期に、また現行の編年体系では斎宮第Ⅱ期第Ⅱ段階に属している¹⁰。しかし、この編年案に対しては専門家からの異論も出ており、取り扱いには注意を要することになった。それが、都の土器を熟知した山中章氏からの警鐘¹¹であるため無視することの出来ない問題である。

ところで、解決の鍵を握る猿投古窯跡群「黒笹十四号窯式（黒笹のイニシャルを取ってK十四とも略称）」の「操業開始」年代については、かつて斉藤孝正氏が「今日まだ問題点として残されているのは猿投窯Ⅴ期の開始、つまり黒笹十四号窯式の開始をいつに考えるかという点であり、これを九世紀前半（初頭）とする見解と後半（中頃）とする見解とがあり、両者では五〇年ほどの差がある」¹²とされてきた問題がある。そこで、旧稿作成の当時、前者に属していた見解を列挙すれば、西暦八一八年（向坂綱二氏）・八二〇年前後（森田稔氏）・八二五年前後（吉田恵二氏）、あるいは九世紀中葉以前（堀内明博氏）、九世紀前半（弘仁・天長年間／承和年間／板野和信氏）、九世紀前／中期（高橋一夫氏）などであった。また一方、後者に属していた見解には、西暦八七五年以前（服部敬史氏）・九世紀後半を中心とする（高島忠平氏）・九世紀後葉（斉藤孝正氏／寺島孝一氏）・九世紀後半代（檜崎彰一氏）などであった¹³。従って、なお黒笹十四号窯式の操業開始年代は厳密には確定しているとは言い難く、悩ましい状況が続いていたのであった。

第82-1次調査区遺構図



1. 実測図・斎宮跡出土「目代」墨書土器
(協力：斎宮歴史博物館)
(トレース：小林秀氏)



2. 写真・底部墨書「目代」
(協力：斎宮歴史博物館)



23 墨書土器「少允殿」(83次)

第七図：目代・少允殿墨書土器

斎宮歴史博物館編『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』及び
『斎宮跡発掘資料選Ⅱ』より複写転載した。

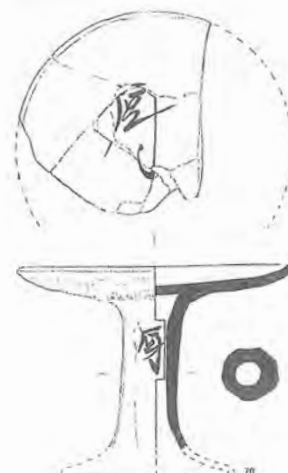


- ・左上下：記号+「掠人」墨書
- ・中下：「蔵長」墨書
- ・右上下：「厨」墨書



59

58



第九図：掠人・蔵長墨書土器と遺構図(第82-1次調査)

しかしその後、少し変化の兆しがみえた。それは斎藤氏がこの間の調査研究成果を踏まえて、改めて黒笹十四号窯式（Ⅱ型式）を西暦八二〇～八四〇年とする自らの修正案^{二四}を提出したからである。その後、「大勢論的には、K十四号式が九世紀前半、K九〇号式が九世紀後半、（中略）とする考え方が有力となりつつある」^{二五}との認識も研究者の間で共有されはじめたように受け止めている。加えて、近年の高橋照彦氏による施釉陶器に関する研究成果^{二六}を次に窺ってみたい。

それによると、唐風文物を志向した容器としての緑釉陶器生産が畿内（中央官営工房）から尾張・長門両国へと拡大した第一次拡散期を弘仁期頃（九世紀初めごろ）としてほぼ間違いないとする。根拠の一つは、『日本後紀』弘仁六（八一五）年正月丁丑条の「造瓷器生尾張国山田郡三人部乙麻呂ら三人が伝習を成しおえたので、雑生に准じて出身を聴す」^{二七}とした記事にある。それは、まさにその生産技術を中央官営工場で伝習した造瓷器生の乙麻呂らが長上工となって帰郷し、尾張（や長門）での操業開始のために教習にあたったことを裏付けるものと解釈されるからである。そして二つ目に、その考古学的な裏付け資料として、①旧平城宮城の井戸（SE311B）出土遺物群と②平安京出土の前期土器一括資料とを掲げている。前者は、「平城上皇が崩御する天長二（八二五）年後の短期間のうちに井戸に投入された」（同上）ものとみられ、かつ中から成立期段階に相当する山城産緑釉陶器と尾張産灰釉陶器が出土しているところから、それら施釉陶器が平城上皇の存命中に搬入されたと推定し、「尾張における施釉陶器生産の開始も九世紀第一・四半期に遡る可能性が強い」（同上）とした。また後者について平尾政幸氏の論考^{二八}を援用し、「尾張窯成立期の緑釉陶器」が平安京土師器編年という「Ⅰ期新段階（実年代で八一〇～八四〇年頃）」の土器一括資料からは出土するが、一段階前の「Ⅰ期中段階（七八〇～八一〇年頃）」の資料からは確認されていないという考古学的事実から、「弘仁六年に出身した工人の教習によって尾張在地での生産の開始を想定しても年代的に齟齬はない」（以上、前掲高橋氏の論文に拠る）としている。

かくて尾張国で最初に施釉陶器生産を開始した猿投古窯における黒笹十四号窯式の「操業」年代を九世紀前半代（八一五年以降）に位置づけるのが現今の日本考古学界においては共通認識を得ていると判断し、斎宮跡出土の「目代」墨書土器の年代観もそれにならっておきたいと考える。

ちなみに、この間に考古遺物に墨書された「目代」資料も増加している。すなわち、平城京右京一条三坊八坪の井戸SE950出土の「目代」木簡、および山田寺跡溝SD664B出土の「目代」木簡と平城京二条大路南端掘り状遺構SD5100出土の「目鯛」木簡、さらに群馬県新田郡の前六供遺跡（三号井戸）出土の木簡（曲物蓋）にある墨書「目代」、そして金沢市近岡遺跡出土の木簡にも「目代」と判読される文字があるなど、各地で発見が相次いだ^{二九}。しかしそれらはいずれも木簡史料である。管見では斎宮跡のように土器に墨書された「目代」資料はまだ外に類例がないように、墨書土器の「目代」資料としては、恐らくいまも最古に属しているものと考えている。

（三）「目代」墨書土器の使用実年代

上述したとおり、斎宮跡出土の「目代」墨書土器（猿投窯産灰釉陶器皿）、すなわち黒笹十四号窯式の操業年代が弘仁六（八一五）年を上限とする九

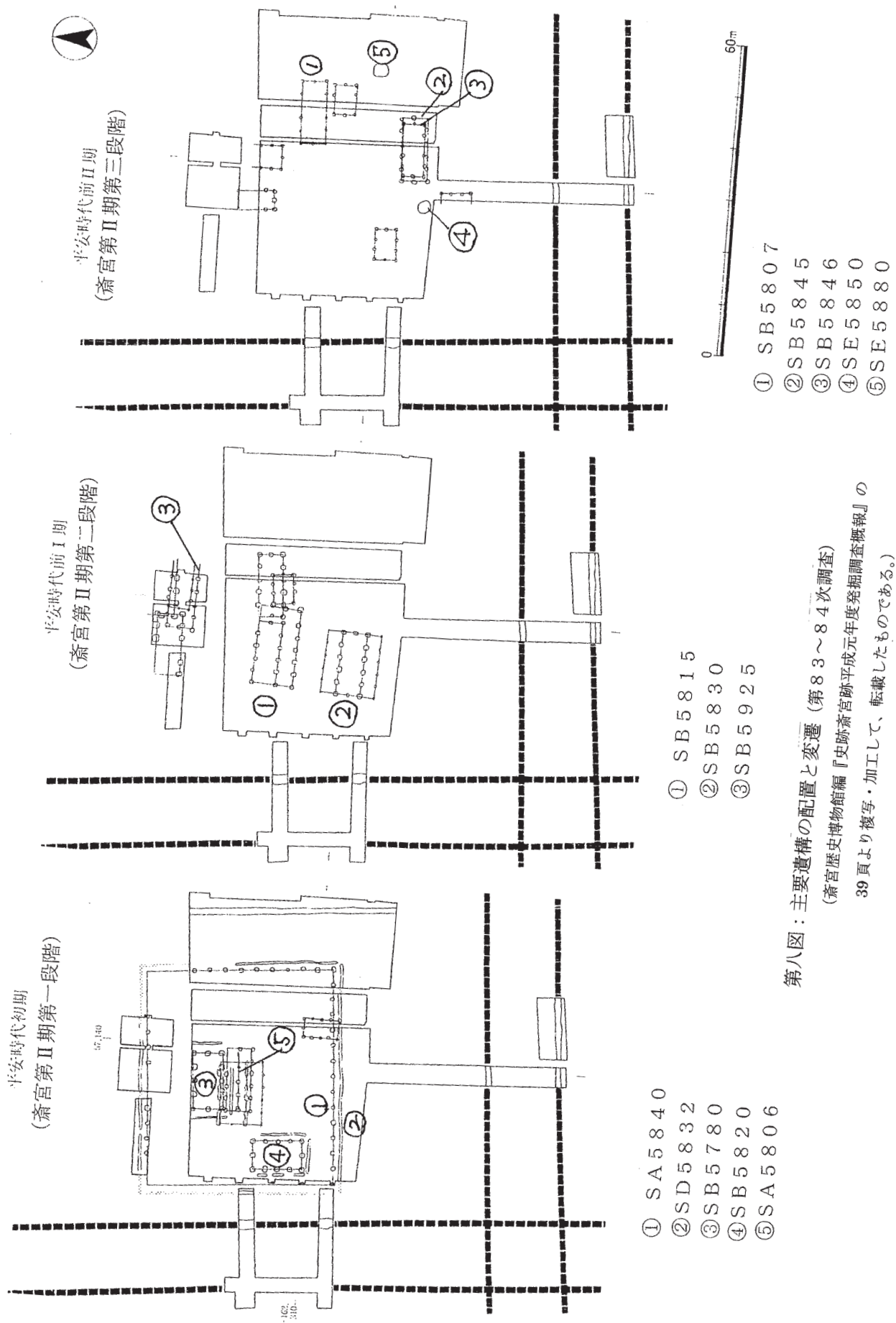
世紀前半代であったとしても、それはあくまで生産地における年代観である。消費地において出土する当該土器については、それ以後の実用に供された消費実年代を考えなければならぬ。すると次に問題とすべきは、天長元（八二四）年に詔が出て伊勢斎宮が多気から度会離宮へ移転したあと、承和六（八三九）年十一月癸未に火災（「神火」による）^{⑤⑥}に遭い、再び旧地に戻るまでの約十五年間、多気斎宮寮の地には文献史料上の空白期間があることである。従って、当該「目代」墨書土器が多気の斎宮寮において実際に使用されうる消費期間は二通りに分けて考えざるを得ない。つまり、（ア）黒笹十四号窯式生産開始の上限である弘仁六（八一五）年以降、斎王氏子内親王が度会斎宮へ下向する天長二（八二五）年までの間と、（イ）

この（ア）（イ）のいずれの時期にも斎宮寮に「目代」のいた、もしくは出入りしていた可能性は勿論否定はできない。伊勢神宮の神事等にかかわる大神宮司の存在もあり、『神祇令』の規定にもかかわらず神郡内における国衙行政（特に国司検校や違犯行為への処罰など）の難しさは別稿^{⑤⑦}において確認したところである。

それゆえ、直接的に神戸百姓らと接する神郡司（郡衙）の立場は重要で、その煩雑な事務を担う神郡司の代務者の存在は予想されてしかるべきところであろう。しかし問題は、当該墨書土器が当時の斎宮寮にしてみれば中心部に相当する方格地割内の井戸から出土した事実である。役職名を記すこの種の墨書とその供膳用の器具類管理上の視点に立つとき、この「目代」職務者は当然のことながら斎宮寮に常駐した人物とするのがまずは第一義であり、もしそうでない場合には、彼はかなり頻繁に出入りした、いわば常連の人物でかつそのような場所では何らかの饗応などを受けうる者と想定される。その場合、（ア）よりも（イ）の期間の方がより蓋然性は高いとみたい。その理由はおよそ次の三点にある。

まず第一に注目すべきは、多気の旧地に戻ったのちに承和十二（八四五）年の勅で「斎宮寮頭並びに助をして大神宮ならびに多気度会両神郡の雑務を檢校せしむ」^{⑤⑧}ことになった点をあげたい。これは延暦年間以来表面化していた神郡内行政の諸矛盾への対応策がいずれも功を奏さず、時の朝廷ないし国衙にとつてはほとんど慢性化していた懸案事項であったことである。この勅は、従来の斎宮寮に国衙機能の一部を代替させる現地対応策であり、斎宮寮の政治的位置付けを転換させる行政改革でもあった。この九世紀の半ばごろから以降は皇室や貴族層の大土地所有（墾田開発など）が盛んにおこなわれるようになった時期にもあたり、各地に庄園の開発があった^{⑤⑨}ことも無関係ではないかも知れない。あるいは、国衙Ⅱ斎宮寮VS伊勢神宮という単純な図式だけでなく、斎宮寮VS伊勢神宮の利害関係の衝突の結果、国衙側が牽制をすべく介入していったとも考えられる。斎宮寮の官人は基本的に現地滞在期間が限定される側面はあるが、寮運営業務を通じた皇室や寮頭らの官人による私利利潤の追求が背景に在った可能性も一概には否定できない。寮頭と国守の兼務事例は、単に神郡内部への行政監督の強化という側面だけではなく、彼らによる神郡内部での私利利権の追求という反律令制的な政治・経済活動が時に先鋭化しつつあった可能性をも考慮に入れておくべきであろう^{⑤⑩}。

別稿^{⑤⑪}ではその承和十二年の勅による新たな行政改革を時の良吏で伊勢守兼斎宮寮権頭であった長岑宿祢高名の建言によるものと推測したが、こ



第八図：主要遺構の配置と変遷（第83～84次調査）
 （斎宮歴史博物館編『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』の
 39頁より複写・加工して、転載したものである。）

のような行政改革に伴う齋宮寮の新たな政治的位置付けによって、その「神郡雑務檢校」実務の代務者としての「目代」の出現は十分に想定しうるからである。しかもそれは、消費地齋宮寮における当該灰釉陶器の使用実年代としても決して矛盾するものではない。

第二には、この遺物が出土した第八十三次調査区の井戸SE5850の使用年代である。この調査は齋宮跡の土地小字名を借りた方格地割の名称でいうと、西加座南地区内の南西エリアで実施したもので、東接する第八十四次調査区と一連の調査であった^{三六}。この調査で明らかになった主要遺構の配置と変遷は大きく三期にわたる(第八図)。まず、平安時代初期(齋宮第Ⅱ期第一段階…七八五〇年頃)には、東西十四間(四一・四四m)、南北十二間(三五・五一m)の規模の掘立柱塀SA5840及びその外周めぐる溝SD5832によって囲まれた二棟の掘立柱建物SB5780と5820―前者は南側を掘立柱塀SA5806で目隠しされていたか、または一面庇の建物^{三七}がある。これは特別な建物に違いないが、明らかに度会離宮へ移転する前段階の建物であり、次の第二期段階では廃絶している。

次の平安時代前Ⅰ期(齋宮第Ⅱ期第二段階…八二〇〇年頃)には、大型の掘立柱建物(SB5815・5830・5925―いずれも東西棟―)が出現する。SB5815は東西六間の南廂をもち、SB5830は同五間の南北両面廂をもつものである。これらは右記第一期段階の建物が廃絶した後の建築物になり、九世紀前半代でも承和六(八三九)年に度会離宮から再び当地に戻った際に出現した建物の可能性が高く、井戸SE5850はこの段階から使用されていた可能性がある。

また、平安時代前Ⅱ期(齋宮第Ⅱ期第三段階…八五〇〇年頃)には、やはり大型の掘立柱建物(SB5807・5845・5846)があり、この段階のいずれかの時期に井戸SE5850は埋没して、それに代わる新しい井戸SE5880の使用されたことが出土遺物から判明している。

以上の変遷過程で重要なのは、第二期段階と第三期段階の遺構には連続性が認められるが、第一期段階との間には大きな断絶のあったことである。従って、先の(イ)の時期に高い蓋然性を認めうるのは、当該井戸SE5850の確実な使用年代が初期(第一期段階)の建物の廃絶後、つまり九世紀前半代のうちでも、神火焼亡(八三九年)に遭った度会離宮の齋宮が多気へ復帰して以降のことに属すると思われるからである。

そして第三には、それは右記の二点とも相互に関連はするのだが、今問題の「目代」墨書土器と同じ井戸から出土の「少允殿」と書かれた墨書土器(黒笹九〇号窯式相当・齋宮第Ⅱ期第三段階)との関係である。端的にいえば、両者は一定期間ほぼ並行する時期に使用された可能性もあり得るのではないか、ということである。伊勢齋宮は窯業生産地に非ず、あくまでも消費地である以上、時間的にはある程度の限定幅はあるかも知れないが、前者は次の黒笹九〇号窯式(九世紀後半代)の古い段階の製品と多少とも重複使用された期間(生産地と消費地との間のタイムラグ)も考慮せねばならない。斎藤孝正氏の修正案に示された八四〇年というのはあくまで生産地(操業年代)での下限案であれば、現実的にはそれより多少遅れて八五〇〇年頃まで伊勢齋宮でその器が使用されていたとしても何ら問題はないからである。

以上、考察したところによれば、当該「目代」墨書土器の伊勢齋宮における使用年代は、度会離宮における齋宮官舎一百餘宇の火災―神火焼亡事

件によって、再び多氣の旧地に戻って以降、井戸SE5850の埋没時期までの間で、従ってそれは九世紀前半代でも承和六（八三九）年より以降、およそ九世紀の五十年代前後のころまでその使用・廃棄の中心的時期はあったと、今は提案せざるを得ない。それゆえ、「斎宮寮頭并びに助をして大神宮ならびに多氣度会兩神郡の雑務を檢校せしむ」という、本来は令外の官たる斎宮寮に国衙行政機能の一端を担わせることにもなった承和十二（八四五）年の勅による行政改革が、結果としてこの墨書土器にある「目代」出現の一つの契機にもなったと考える所以である。

（四）伊勢斎宮寮における「目代」

ではいったいどういう人物をその「目代」として想定しうるであろうか。『大日本古文書』や『平安遺文』あるいは出土木簡「目代」史料等を駆使して、八・九世紀代の「目代」について考察した吉永壮志氏が繰り返し強調されたことは、「目代は高い実務能力を有するばかりではなく、彼をその代理人とする本人と殆ど同等の階層、身分、つまり代理人となるに相応しい人物であった」²¹⁰という見解である。前述したとおり九世紀前半代―今回本稿ではあえて八三九年以降―八五〇年前後の頃と見当をつけたが―の伊勢斎宮における「目代」についても、特に吉永氏のその研究成果にそって考えてみたい。その場合に、承和十二（八四五）年の勅は勿論のことながら、同じ井戸から出土した「少允殿」墨書土器の存在は無視できないように思う。消費地における土器類の使用実年代を確定するのは至難の業で（従ってこの場合にも決して断定はできない）、時期的には限定されるかも知れないが、両墨書土器はある時期に斎宮寮で併行使用された可能性があり得ることは既に述べた通りで、当面はそれを前提に考えることにしたい。

斎宮寮官人の定数および官位相当を定めた神龜五（七二八）年七月廿一日の格²¹¹によれば、「頭・助・大少・少允・大屬・少屬・使部」とあり、「少允殿」と呼ばれたその官人は一人、従七位相当官である。冒頭の蒸し返しにはなるが、墨書の書き手が違うように見えるその供膳具を日常的に管理する側の人間からみて、やはり「殿」の付かない「目代」たる人物は、「少允」よりは下位の地位にある者とするのが妥当である。さもないければ、「目代」本人がそれを書いたか、あるいは斎宮寮より外部（大神宮司もしくは神郡司）の人間であった可能性もあろうと想定しておきたい。

承和十二（八四五）年の勅によって寮頭并びに助が神郡雑務を檢校することになったからといって、まさか寮頭や助本人が単独でその業務に直接出向くなどとは到底考えられない。遥任人事ならばなおさらである。従ってその実務には寮官人の下位の者が当たったとみるべきで、しかも「少允殿」より下位の者だともし解釈してもよいのであれば、従八位官相当の「大屬・少屬」がそれに相当するわけだが、この場合は更にその彼らの「目代」として相応（八位相当）の人物がいたことになる。あるいはまた、その「神郡雑務」との関係からいえば、郡衙所管の「神郡司の目代」が職務上、今や国衙機能の一部を担う代行機関の寮官人とは従来以上に頻繁に接触し職務に当たる必要性があったであろうから、そういう在地の人物と同様の理由から「大神宮司の目代」を想定する必要性も出てこよう²¹²。木簡史料のように、時に何らかの文面がたどれるわけではないので、いずれとも断定はできないが、仮に上述のようにその墨書土器の使用時期を絞り込むことが許されるとして、しかも実務上、承和十二年の勅に目代出現の一つの契機を見出せるとした場合には、右記二通り―寮官大屬・少屬の、または外部（郡司か大神宮司）―の目代という、あくまでもその可能性を卑見とし

てここに提案し直しておきたいと考える。

ところで、「目代」墨書土器に関連して、斎宮跡の発掘調査成果から、今あえて付け加えるべき点があるとすれば次の三点である。

① 同じ第八十三次・八十四次調査で斎宮跡では初例の緑釉陶器高坏・緑釉陰刻花文皿の他に「厨」墨書土器が出土^{三三〇}していること、

② 当該調査区に北接する場所（西加座北区画）でかつて数次にわたり実施した調査^{三三一}により、五間×二間という同一規模の東西棟が、同区画内中央部を南北に走る幅約十メートルの道路を挟んで東西に八棟ずつ計十六棟分、等間隔に規則正しく並ぶことが確認されている^{三三二}こと、

③ 上園北区画の第八十二・一二次調査で記号を伴う「惊人」墨書土器や「蔵」^{三三三}「蔵長」^{三三四}の墨書土器が出土している^{三三五}、という事実である（第九図）。

【「厨」墨書土器】右記①について言えば、平安初期以降に始まる「平安期緑釉陶器」の成立の背景に「国家的儀式あるいはその他の饗宴において階層性を明示する容器として緑釉陶器が着目され、唐風文化を体現化した高級容器としてその新たな生産が開始され」^{三三六}、「当該期に進められた全国的な儀式体系の整備の一環として、その用具の一部を構成する緑釉陶器が各地で必要になったであろう」（同上）とする高橋照彦氏の見解と関連させることができる。しかも、「厨」の文字が奈良・平安時代を通じて「役所的なものを指して使われている」^{三三七}とする福山敏男氏の指摘は、上記墨書土器を含むこれらの供膳具が九世紀前半以降のある時期における伊勢斎宮寮官人の生活意識をも反映していることを印象づけるように思える。そこではすでに、国衙等と変わらぬ饗宴の場になっていたことを窺わせる。なお、御館区画で平成二三年度に実施された第一七二次調査^{三三八}でも「厨」墨書土器が出土しており、今後の解明に有益な資料であろう。

【倉庫群】次に②については、その十六棟の掘立柱建物はそれぞれ東西に二棟、南北に四棟、それが十メートル幅の区画内の南北道路を挟んで東西に八棟ずつ（区画全体では四棟×四棟になる）並ぶわけで、それぞれ東西間は約十六メートル、南北間は約二十五メートル（棟間隔でみると約三十メートル離れている）^{三三九}の等間隔に建ち、伊勢斎宮の倉庫群（寮庫）と解されている。

ところで、斎宮寮頭賀茂朝臣人麻呂を伊勢守に任じたのは延暦十（七九一）年正月のことだったが、翌二月十二日の格で「新たに倉庫を造るときは、必ずや各相去ること十丈已上とすべし。地に寛狭あれば便に随い議して置け」^{三四〇}とし、更に四年後の延暦十四（七九五）年閏七月十五日に出された太政官符は「郷毎に更に倉院を置くべし」^{三四一}とするものだが、その末尾に去る十年の官符内容を繰り返して徹底を図ろうとしている。もとより、これは予てから「神火」問題に頭を悩ませていた^{三四二}当時の朝廷が、「諸国の倉庫は大牙のごとく相接していた」という現状から少しでも類焼を避けんとして打ち出した施策でもあった。

伊勢斎宮における先の倉庫群は従来から平安時代初期に位置付けられてきたが、それぞれの場所で少なくとも三回の建て替えがあったと確認されている。従って、斎宮跡にあった方格地割のうち西加座北区画にあった十六棟の寮庫は、延暦十年格の規制も受けつつ建てられたと推測され、途中で、度会離宮への移転という空白期間を挟むものの、復帰後にはまた元位置において建て替えなり修復なりをうけて、少なくとも平安時代前期ころ

までは存続はしていたのではないか、との想定も可能である。

前引吉永壮志氏の論考によれば、八・九世紀の目代職掌の特徴のひとつは、「倉での物品の出納に直接かわる」など、「移動性を伴う実務に関わることが多い」^②という。「目代」墨書土器の出土地点はもとより寮官人たちが出入りする建物のあった場所で、倉庫群（寮庫）のある区画にも南接していたのである。想像力をたくましくして言えば、当該墨書土器に記された「目代」も恐らくは、その寮庫の物品出納に直接かわる立場にあった人物だった蓋然性は高い、と推断できる。③「棕人」「蔵長」墨書土器等については次節で述べたい。

（五）「棕人」「蔵長」墨書土器

旧稿では言及し得なかったが、「目代」及び「少允殿」の墨書土器が出土した同じ平成元年度の第八十二―一次調査区（上園北地区）で、（ア）「棕人」・（イ）「棕？」・（ウ）「蔵」・（エ）「蔵長」という墨書土器が出土しことは、斎宮寮における蔵部司に蔵部六人^④がいたことや「目代」墨書土器の存在と併せ勘案すると、寮庫の物品管理とその役職（官吏）について考察するにも極めて重要である、と（吉永氏の論考に恩恵を得て）今は考えるようになった。第九図にはその遺物が出土した遺構平面図を示した。第八十三次調査地点から西北西にある第八十二次調査区までは直線距離にして約五百メートル余り隔たりがある（第三章第五図）。これらの墨書土器も「目代」同様それぞれの遺構に伴う出土遺物である点では、動産とはいえないの信憑性を保持するものである。時期別にまとめると左記のようになる。

ア…「記号＋棕人」（墨書）
↓土坑SK5650（奈良・前期）出土。

イ…「（同記号＋木（欠）」（墨書・二点）
↓竪穴住居SB5632（奈良・前期）出土。

↓土坑SK5640（奈良・前期）出土。

ウ…「蔵」（墨書）
↓土坑SK5600（平安・前Ⅱ期）出土。

エ…「蔵長」（墨書）
↓右記ウと同じ土坑SK5600出土

オ…「水司鴨三」（ヘラ描き）
↓土坑SK5700（奈良・後期）出土。

写真図版からも判るように、アとイは本来同じ内容の墨書が書かれていたと推測される。三点はともに土師器で、アの墨書は杯の底部外面、イの墨書は高杯脚部内面、および土師器杯（？）破片にそれぞれ書かれていた。付け加えれば、アと同じ土坑SK5650からは「坂己」と墨書された須恵器杯が、イと同じ竪穴住居SB5632から出土の須恵器杯にも「坂」の墨書があった。イ遺構の南側にある竪穴住居SB5679（奈良・前期）からも「坂己」墨書のある須恵器杯が出土している。

問題は、「坂」や「坂己」は人名かも知れないが、「棕人」をどう見るかである。結論を先に言えば、これは人名ではなく「官職号」であろう。書かれた土器自体の時期が異なるため、混同した議論は避けたいが、同じ発掘区内の別遺構からウ「蔵」、エ「蔵長」の墨書土器が出ているのは、遺物

編年でいう奈良時代前期と平安時代前期における齋宮寮の蔵部司の実務的な実態を解明する上で貴重な資料を提供していると理解したい（「棕人」がいつ「蔵人」に変わったかまでは筆者には判断できない）。

渡部武氏の訳注『四民月令』⁴⁴⁰にも紹介があるように、中国漢代の倉庫を詳細に分析・分類した秋山進午氏によれば、AⅠ式（円形縦長で屋根付き）の「困」、AⅡ式（円形縦長で屋根瓦なし）の「簀・箆」、BⅠ式（方形屋根付き縦長）の「倉」、BⅡ式（方形屋根付き縦長）の「廩」のほか、周囲に簡単な囲いをつけただけの「庾」や大型倉庫である「京」などがあつた⁴⁴⁵、という。詳細な経緯は判らないが、本来大型倉庫であつたこの「京」に「朝鮮で木篇を付した」⁴⁴⁶のが「棕」であるという。『古事類苑』にも、「棕人は蔵人にて、職の號なり、棕倉蔵の三は相通じてかけり」⁴⁴⁷といい、『続日本紀』文武紀と光仁紀の記事に「棕垣」氏を「倉垣・棕垣」「蔵垣」と記す⁴⁴⁸のを証左としている。つまり当時の用字例からみて、この「棕人」が「蔵（倉）人」であることは間違いなく、奈良時代前期の齋宮寮に「棕（蔵）人」が確かにいたことを現地で実証した貴重な遺物になるのである。平成元年当時に「棕人」を人名かと考えたのは筆者をはじめ現地で発掘調査を担当したわれわれ調査員の無知による間違いであつた。

次に、上園北区画の八十二次調査区内では奈良時代前期の掘立柱建物は検出されず、すべて堅穴住居であつた。齋宮跡では奈良時代後期に至つても、例えば東加座北②区画で実施した第六十六次調査では掘立柱建物とともにそれと同時期の堅穴住居も検出された⁴⁴⁹。一部には「堅穴住居では官衙遺跡には相応しくない」との意見もあるようだが、必ずしもそう考える必要はない。かつて三重県内の堅穴住居検出例を集成した個人的経験からいえば、弥生時代中期頃を中心に、平面プランが円形から方形へと移行する傾向にあり、飛鳥時代には一辺が十一メートルもある大型の方形プランも認められた。やがて奈良・平安時代へと時代の変遷を経るなかで、堅穴住居はそれまでの「専用住居」から「厨房施設」へと変貌を遂げると共に、平面規模も縮小の一途をたどり、鎌倉時代には一辺二・三メートル程度の厨房施設となつて、やがて姿を消す運命にあつた。後代の厨房機能に特化した堅穴住居の存在は、火気を避けるべき倉庫群との隣接同居は危険を伴うものであつたに違いない。

従つて、寮庫と目されている五間×二間（東西棟）の掘立柱建物が規則正しく建ち並ぶ西加座北区画や下園東区画から西方へ五百メートル余も離れた場所に、寮庫の物品出納に従事した「棕（蔵）人」らの厨房施設が仮にあつたと想定しても何ら不都合はないであろう。寮庫の火災を未然に防ぐためにも、また陸路・水路（伊勢湾く多気川）⁴⁵⁰で運ばれてくる様々な物資の搬入口にも一番近い場所として、伊勢齋宮寮の運営上も上園北区画の辺りはその最適地だつたのではないだろうか。

ともあれ、吉永氏が整理された東大寺寺院目代一覧（く900年）からも窺えるように、「倉人」は寺院目代や主典らとともに物品の出納に関与したのであれば、恐らくは齋宮寮においても同様に「棕人」「蔵長」らは寮庫の物品出納に関わる職務に就いていたに違いない。ただ、ここでは「目代」「墨書土器」との時期差があるため、現段階では実証も断言も出来ないが、平安時代前期の伊勢齋宮寮にあつて「目代」とも職務が密接な「蔵長」や「蔵（棕）人」らが共に物品出納の確認作業を担っていた可能性を殊更に排除する必要はない、と今は想定するにとどめておきたい。

因みに、中国にも「倉人」はあり、『周礼』地官司徒に「掌粟入之藏。辨九穀之物。以待邦用。若穀不足。則止餘瀆用。有餘則藏之。以待凶而頒之（粟ヲ藏ニ入ルルヲ掌リ。九穀ノ物ヲ辨ジテ。以テ邦用ニソナフナリ。若シ穀ノ不足スレバ。則チ余ノ法用ヲソギ。余アラバ則チ之ヲ藏シ。以テ凶ヒニソナヘテ而モ之ヲ頒ツモノナリ）。」^(五二)という。唐は戸部尚書に倉部郎中一員、員外郎一員以下掌固四人に至るまで三十九名の職員を置いたが^(五三)、『通典』にはその沿革を述べて「歴代ニ多ク倉部曹アリ。皆倉廩ノ事ヲ掌ル（以下略）」^(五四)と述べている。国情はまるで異なるが、「倉人」の基本的な職掌においては双方ともに通底する部分のあったことが推測される。

(六) むすび

以上、旧稿執筆時における私の基本的認識の欠如への反省を踏まえ、改めて斎宮跡出土の「目代」墨書土器をめぐる現在までの考えを述べてきたが、この再考で明らかにし得たことを箇条書きにして本改訂稿のむすびに代えたい。

○近年までの灰釉陶器に関する考古学的研究成果に依拠して、当該「目代」墨書土器（黒笹十四号窯式）の考古学的年代は九世紀前半代（上限を八一五年とする）であると改めて確認した。そして、伊勢斎宮の度会離宮への移転期間（八二四～八三九年）を挟む時期にあつて、当該墨書土器出土の井戸及びその周辺の遺構配置とその変遷などを第八十三・八十四次調査成果にもとづき検証するなかで、それが伊勢斎宮寮において使用された実年代を絞り込むことを試みてみた。

その結果、斎宮第Ⅱ期第一段階（七八五～八二〇年頃）の建物とその第二段階（八二〇～八五〇年頃）に属する建物との間に明らかな断絶が認められ、出土遺物から問題の井戸SE5850は少なくともこの第二段階には出現していたとして矛盾がないこと、従つて、当該井戸を含む第二期段階以降の遺構は、承和六（八三九）年の焼亡事件―神火に拠る―により再び旧地へ復帰して以降のものと判断した。その上で、土器生産地と消費地とのタイムラグも考慮して、同じ井戸から出土した「少允殿」墨書土器（黒笹九〇号窯式）とも限定的に並行使用の時期があつたと推定し、「目代」墨書土器の使用実年代を九世紀前半代でも八三九年以降およそ八五〇年代前後頃までの間と考えるに至つた。

○しかしその中で、実際に「目代」が出現しうる契機として最も蓋然性の高い象徴的な出来事は、承和一二（八四五）年の勅により神郡雑務検校を斎宮寮頭并びに助が担うことになった点に求めた。斎宮寮がそれまで国衙にあつた行政機能の一部を担う機関として位置付けられたとしても、寮頭や助が自ら直接的にその検校事務をこなすとは考え難く、当然その実務担当者は下位の寮官人に委ねられたはずで、そこに伊勢斎宮における「目代」出現の一つの契機を見出しうると考えた。その場合には、「少允殿」より下位となると、「大属・少属」の代務者としての「目代」がもつとも相応しい。しかし同時に神郡雑務担当者としての神郡司や同様に神事に関わつては大神宮司も不可避的で、あるいはその代務者としての神郡司ないし大神宮司の「目代」の存在もまたあり得るかと考えた。いずれとも決し難いが、いまは斎宮寮官人の代務者を第一案としておく。

○併せて、同じ調査区で出土していた「厨」墨書土器、緑釉陶器高坏（斎宮跡初例遺物）、緑釉陰刻花文皿についても触れた。奈良・平安時代には「役

所的なものを指して使われた」という「厨」文字の存在と階層性を明示する緑釉陶器の並存は、唐風文化の体現化を志向した当時の朝廷による儀式体系の整備などによって「平安期緑釉陶器」（高橋照彦氏）生産を促すと共に、当然その影響が直に斎宮寮にも伝わっていたことを物語るものである。少なくとも承和十二年を一つの契機として国衙と同質の饗宴の場をそこに想定することは許されよう。それはまた「目代」「少允殿」の両墨書土器の存在とも符合しうる現象ではないかと推測する。

○第八十三・八十四次両調査区に北接する西加座北区画でこれまでに明らかになっている十六棟の規格整然とした倉庫群（寮庫）は、少なくとも三回の建て替えが認められており、九世紀前半代にも機能していた可能性もあると推測できる。従って八・九世紀の目代が「倉庫での物品の出納に直接かわる」など「移動性を伴う実務担当者」（吉永壮志氏）であつてみれば、倉庫群に南接する寮官人の職掌執務的エリアで墨書土器とはいえ「目代」資料の出土した意味は大きく、かれは寮庫において物品の出納事務等にも関わる人物であつたと想定されるのである。

○最後に、同年度の第八十二次調査で出土した「棕人」や「蔵長」などの墨書土器については、それぞれ土器の考古学的年代観が異なるために、一元的に論じることが許されない。ただ、『古事類苑』にも「棕人は蔵人にて、職の號なり、棕倉蔵の三は相通じてかけり」というとおり、これらの墨書には共通項があり、それは八・九世紀「目代」が「倉庫での物品の出納に直接かわる」など「移動性を伴う実務担当者」（吉永壮志氏）であることを前提にしたとき、斎宮寮庫の実務に直接かわつた下級の役人が奈良時代の前期以降、すでに存在していたことを裏付ける貴重な遺物であると評価しうるものである。思えば、これらが揃つて同じ年度の発掘調査で出土していた幸運に改めて感謝しつつ禿筆を擱きたいと思う。

【註】

（一）…斎宮歴史博物館編『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』一九九〇年、二二～三〇頁、及び『斎宮跡発掘資料選Ⅱ』（平成二二年）図版九、一三～一五頁。また、『古代文化』第四三巻第四号（古代学協会、平成三年）の図版解説など。なお、当該井戸の埋土からは斎宮跡では初例となつた緑釉陶器高杯や「少允殿」と書された墨書土器（黒笹九〇号窯式相当・平安時代前Ⅱ期）などが出土したことも特筆される（後述）。

（二）…拙稿「九世紀斎宮寮における「目代」の可能性―兼官事例を手がかりにした場合―」（『史学論集』―佛教大学文学部史学科創設三十周年記念―一九九九年所収）。

（三）…弁解に過ぎないが、吉村茂樹氏は『国司制度崩壊に関する研究』（東京大学出版会、一九七八年復刻第一刷）において、奈良時代に見える「目代」を「留守所における国守の私吏としての目代とを同等に考えることは甚だ困難である」（四〇五頁）と前置した上で、「奈良時代に於てすでに国守目代の存在し得た状態であつた」とすれば、この記事は敢へて拒否する必要もなく、或は国守目代に關するものとも夙いものともいひ得るが如くである」（四三三頁）とされた。そのため、寮頭目代も可能ではないかと考えたことも事実であつた。

（四）…奈良教育大学（当時）の泉谷康夫先生からの私信（平成十一年六月一日付）による。

（五）…吉永壮志「八・九世紀の目代」（『続日本紀研究』第三八四号、二〇一〇年）。

- (六) … 棚橋光男著『王朝の社会』(大系日本の歴史4、小学館、一九八八年)、八五〜九〇頁。
- (七) … 清水みき「墨書土器の機能についてー都城(長岡京)の墨書土器を中心にー」(向日市文化資料館編『研究紀要』第二号、一九八七年所収)、同氏「食料供給官司名を記す墨書土器に関する一考察」(『京都考古』第五九号、一九九一年所収)。
- (八) … 註一前掲書および註一〇後掲報告書に紹介・報告がある。この墨書土器は黒笹九〇号窯式に相当するもので、斎宮跡では平安時代前Ⅱ期(現行編年表では斎宮第Ⅱ期第3段階。山中章氏の編年ではほぼ第Ⅳ期一〜二段階に相応)に分類される。実年代を九世紀後半代とするのが通説。
- (九) … 山下峰司「灰釉陶器・山茶碗」(中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』一九九一年所収)。
- (一〇) … 国史跡斎宮跡の現行土器編年表では、平安時代の土器を「初期(斎宮第Ⅱ期第1段階)・前Ⅰ期(同第2段階)・前Ⅱ期(同第3段階)・中期(同第4段階)・後Ⅰ期(斎宮第Ⅲ期第1段階)・後Ⅱ期(同第2段階)・末期(同第3段階)」に編年区分している。これは歴史学でいう「前期・中期・後期」(例えば『平安時代史事典』一九九四年参照)とは異なるので注意されたい。斎宮歴史博物館編『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』二〇〇一年、第四章第一節参照。
- (一一) … 山中章「斎宮・離宮院変遷の歴史的背景ー離宮院遷宮にみる古代王権と伊勢太神宮ー」のうち「一 考古資料からみた斎宮跡・離宮院跡の変遷(一九二〜三二三頁)」(角田文衛監修・財団法人古代学協会編『仁明朝史の研究ー承和転換期とその周辺』、思文閣出版、二〇一一年所収)。
- (一二) … 斉藤孝正「施釉陶器年代観」(櫻井清彦・坂詰秀一編『論争学説日本の考古学(六) 歴史時代』一九八七年所収)。
- (一三) … それぞれ諸氏の関係論文は、前掲斉藤氏の論文に掲載されており、ここでは省略に従う。
- (一四) … 斉藤孝正「東海地方の施釉陶器生産ー猿投窯を中心にー」(古代の土器研究会編『古代の土器研究ー律令的土器様式の西・東三 施釉陶器』、一九九四年所収)。斉藤氏は黒笹十四号窯式をⅠ型式とⅡ型式に分け、前者を井ヶ谷七八号窯式に含め、後者を更に型式細分する可能性をも指摘している。
- (一五) … 前掲山下氏論文。なお瀬戸市埋蔵文化財センター(当時)の藤沢良祐氏の電話によるご教示では、「下限をもう少し下げる見解もある」とのことだった。
- (一六) … 高橋照彦「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」(『史林』第七七巻第六号、一九九四年)、同氏「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第六〇集、一九九五年)、および「平安期施釉陶磁器研究の現状と課題ー緑釉・灰釉陶器を中心にー」(日本中世土器研究会編『中近世土器の基礎研究XV』二〇〇〇年)。後者二篇の論文につき、三重県埋蔵文化財センターの石井智大氏から情報の恵を受けた。ここに謝意を表したい。
- (一七) … 黒板伸夫・森田悌編『訳註日本史料 日本後紀』(集英社、二〇〇三年)、巻第二十四、六八六〜六八七頁(以下、『日本後紀』からの引用は当書による)。
- (一八) … 平尾政幸「平安時代前期の土器」(京都市埋蔵文化財研究所編『平安京右京三条三坊』一九九〇年)、同氏「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」(古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、一九九四年所収)。
- (一九) … (あ) 平城京右京一条三坊八坪の井戸(SE九五〇) 枠内埋土から四点の「目代」木簡出土。延暦十一(七九二)年をさほど下らない時期に一括投棄されたものといふ(奈良文化財研究所編『西大寺食堂院。右京北辺発掘調査報告』二〇〇七年)。

- (い) 山田寺跡溝SD664B出土の「目代」木簡。大同二年、弘仁二年の年紀をもつ、經典等の貸借につき記録した倉札木簡『木簡研究』二六、二〇〇四年。
- (う) 平城京二条大路南端掘り状遺構(SD5100)出土の「目鯛」木簡(典拠未詳)。(一) (二) (三) は吉永壮志氏前掲論文「八・九世紀の目代」に依拠した。
- (え) 群馬県新田郡の前六供遺跡(三号井戸)でも出土木簡(曲物蓋)に墨書された「目代」がある。年号部分に「貞」の残画と「観」の偏の部分が確認され、共に伴した土器の年代が九世紀後半のものであることから、貞観九(八六九)年のものとされる。「前六供遺跡」の情報は藤沢市教育委員会(当時)の荒井秀規氏からのご教示による。深謝申し上げたい。
- (お) 金沢市近岡遺跡出土の木簡にも「目代」と判読される文字があり、共伴遺物から十世紀初頭前後の年代が与えられている。戸潤幹夫「第三節 第六号溝出度異物」『近岡遺跡』一九八六年所収) 参照。これは石川県埋蔵文化財センター(当時)の垣内光次郎氏からご教示を戴いた。併せて謝意を表したい。
- (二〇) 拙稿「神火と伊勢斎宮の焼亡事件」『鷹陵史学』第四十号、二〇一四年)は、承和六年十一月癸未の火災で離宮斎宮が焼失したのを「神火」であると論証した。
- (二一) 前掲拙稿「神火と伊勢斎宮の焼亡事件」の第四節「伊勢神郡内の政治・社会的諸矛盾の表面化」(七三〜七九頁)でも詳述した。
- (二二) 新訂増補国史大系『続日本後紀』(吉川弘文館、一九八七年)、巻十五、一七八頁。
- (二三) 吉川真司「院宮王臣家」(同氏編『日本の時代史』5、平安京、吉川弘文館、二〇〇二年所収)。他に、赤松俊英「公宮田を通じて観たる初期荘園制の構造に就いて」『歴史学研究』第七巻第五号、一九三七年所収)、門脇禎二「古代畿内村落の崩壊過程―山城国愛宕郡出雲郷について―」『歴史評論』第五巻第二号、一九五一年所収)、竹内理三「藤原政権と荘園」『史淵』第六十輯、一九五四年所収)、戸田芳美「九世紀東国荘園とその交通形態―上総国藻原荘をめぐって―」(月刊『政治経済史学』第一一〇号、一九七五年所収) など参照。
- (二四) のちに宇多天皇が『寛平御遺誡』に、斎宮の「寮司にはよくよく之を選び任ずべし」と明確に注意を促したことが想起される『群書類従』第二十七輯、雑部、巻第四七五所収、一三三頁下段参照。
- (二五) 前掲拙稿「神火と伊勢斎宮の焼亡事件」、第四節「伊勢神郡内の政治・社会的諸矛盾の表面化」、七九頁。
- (二六) 註一前掲『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』。なお、土器編年表は今のところ『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』二〇〇一年、第四章第一節に拠った。
- (二七) 前掲『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』巻末の付図3「第八三・八四次調査区遺構実測図」を参照されたい。
- (二八) 吉永壮志氏前掲論文「八・九世紀の目代」(五頁、七頁、九頁、十一〜十二頁、十五〜十六頁) 参照。
- (二九) 改訂増補国史大系『類聚三代格』前篇(吉川弘文館、一九八三年)、巻四、一四五頁。関見監修・熊田亮介校注、解説、東北大学付属図書館蔵『狩野文庫本 類聚三代格』(吉川弘文館、一九八九年)、巻四、一二三頁。
- (三〇) 後代のことになるが、康和四(一一〇二)年七月十六日に離宮院に放火を疑わせる火災事件があり、焼失したのは属(さかん)の部屋であった。四等官の属である。斎内親王が恒例の三節祭に向うとき、必ず離宮院を中継地として参入する。普段から斎宮寮の属の部屋があったと想定される。これを踏まえると、斎宮寮に神郡司

または大神宮司の「目代」用に供膳用の器が常備されていたとしても、さして大きな問題ではないと思う。

(三二) … 註(一) 前掲『史跡斎宮跡平成元年度発掘調査概報』、第八三次調査(西加座地区)、三〇頁、写真図版P L 一九参照。

(三三) … 昭和五八年度第五次調査『史跡斎宮跡発掘調査概報』昭和五九年三月、二四〇三七頁。昭和六〇年度第六一次・六三次調査『史跡斎宮跡発掘調査概報』昭和六一年三月、三三〇四八頁。六一〇七八頁。昭和六二年度第七三次調査『史跡斎宮跡発掘調査概報』昭和六三年三月、四〇〇五二頁。昭和六三年度第八〇次調査『史跡斎宮跡発掘調査概報』平成元年三月、三五〇四四頁。平成三年度第九〇次調査『史跡斎宮跡平成三年度発掘調査概報』一九九二年三月、三〇二二頁。平成十二年度第一三〇次調査『史跡斎宮跡平成一二年度発掘調査概報』二〇〇二年三月、三〇三三頁。

(三四) … 明和町史編纂委員会編『明和町史 斎宮編』(明和町、二〇〇五年)第五章第四節、二四〇頁「四、寮庫」。

(三五) … 前掲『史跡斎宮跡 平成元年度発掘調査概報』、第八二次調査(上園地区)、一五〇一六頁、写真図版P L 一七参照。

(三六) … 高橋照彦氏前掲論文「平安初期における鉛釉陶器生産の変質」、八五〇八九頁。

(三七) … 福山敏男「斎王宮と離宮院の建築」(三重の文化財と自然を守る会編『伊勢斎王宮の歴史と保存Ⅱ』一九八二年)、第二章「文献史料上の殿舎」、一三九〇一四〇頁。

(三三) … その調査概報ではなぜか解らないがその墨書を「風?」と読み、「風」字を意識した実測図を載せるが、遺物写真で見ると「厨」としか読めない墨書である。大胆な筆跡だが、厂に豆を書き、寸を書いたのは明白で、寸の第二角終筆が内側にハネているのであるから、間違っても「風」であろうはずはなく、明らかに誤読報告である。恐らくは指示どおりに描かれた恣意的な実測図から直すべきだと思う(斎宮歴史博物館編『史跡斎宮跡平成三年度発掘調査概報』二〇一三年、一五・二二・二六頁)。なお近年、明治大学日本古代学研究所では全国の墨書土器などを順次集成、公開しており、再度、早急に訂正されることをお勧めする。

(三八) … 東西間十六メートルとは、平面上で左右に並ぶ二棟間の東側と西側とで向かい合う梁行きの柱通りを基準にした東西間隔をいい、南北間も同じく、北棟の南側桁行き柱通りから、向かい合う南棟の北側桁行き柱通りまでの南北の間隔をここでは言っている。『史跡斎宮跡平成三年度発掘調査概報』一九九二年、第九〇次調査、二一頁参照。なお、最近の調査でも同様規模の東西棟が西隣の区画から検出されているが、詳細は後日を期したい。

(三九) … 新訂増補国史大系『続日本紀』後篇(吉川弘文館、一九七二年)、巻四〇、五五二頁。同『類聚三代格』前篇、巻十二、「正倉官舎事」三八七頁。

(四〇) … 前掲『類聚三代格』前篇、巻十二、三八七〇三八八頁。

(四一) … 佐伯有清著『新撰姓氏録の研究』研究篇(吉川弘文館、一九七一年)所収、「神火と国分寺の焼失」二九二頁。

(四二) … 吉永氏前掲論文「八・九世紀の目代」、一五頁。

(四三) … 前掲『狩野文庫本 類聚三代格』、巻第四、廢置諸司事、斎宮寮、一二三頁。早川庄八「古代律令財政と斎王宮」(三重の文化財と自然を守る会編『伊勢斎王宮の歴史と保存Ⅱ』、一九八二年所収)、一四二頁。後に同氏「斎宮寮の成立とその財政」(『名古屋大学文学部研究論集』一六)史学三九、一九九三年所収。なお、令制の内藏寮「蔵部」や秦氏漢氏による蔵の管理などに関しては、平野邦男著『大化前代社会組織の研究』(吉川弘文館、一九六九年)、第三章「帰化系技術の二系統」(一

六二～一八二頁）に専述がある。

- (四四) 崔寔著・渡部武訳注『四民月令―漢代の歳時と農事』、平凡社東洋文庫、一九九六年第二刷、一二二頁参照。
- (四五) 秋山進午「漢代の倉庫について」『東方學報（京都）』第四六冊、一九七四年所収（二～三一頁）。
- (四六) 戸川芳郎監修・佐藤進、濱口富士雄編『全訳第三版 漢辞海』、三省堂、二〇一一年、七三三頁。
- (四七) 神宮司庁蔵版『古事類苑』官位部一（吉川弘文館、一九七七年）、七六～七七頁。
- (四八) 前掲『続日本紀』前篇、卷第三、大宝三年五月壬辰条（一八頁）「倉垣連子人」、慶雲四年二月辛卯条（二七頁）「棕垣直子人」および同『続日本紀』後篇、卷第三十二、宝龜三年四月庚午条（四〇三頁）「藏垣忌寸家麻呂」と見える。この事例をもつて倉・棕・藏は同じと見なされる。
- (四九) 三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所編『年報一九八六・史跡斎宮跡発掘調査概報』一九八七年、一六～二〇頁。
- (五〇) 拙稿「伊勢斎宮の立地とその歴史的背景」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』、第四十二号、二〇一四年、一二四～一二七頁参照。
- (五一) 『断句十三経經文』（台湾開明書店、民国六十一（一九七二）年五版、二七頁）。
- (五二) 劉昫等撰『旧唐書』六（中華書局、一九七五年）、卷四十三、志二十三、職官二、一八二八頁。
- (五三) 杜佑撰、王文錦・王永興ほか點校『通典』一（中華書局、一九八八年）、卷第三三、官職五、六三八頁。

終章 本研究の成果と今後の課題

以上、第一部第一章から第四部第五章にいたるまで計十三章にわたって考察してきた「伊勢斎宮の基礎的研究」によって、明らかにすることができた成果と、なお今後に残された課題について各部ごとにその概略をのべておきたい。

第一部…中国古代における「斎宮」の特質（一章～二章）

古代の日本人がみずからの国情に即して外来漢語をどのように受容・摂取したかを知るためには、中国本土でそれが本来はどのような意味を持って通行していたかを認識しておく必要がある。そのために、中国古代における民間信仰や皇帝祭祀における「斎宮」がどのような施設として機能していたのかを概観した。民・官の違いこそあれ、中国古代の「斎宮」はそれぞれに重要な神事に奉祀する主人公が事前の斎戒をおこなうために一定期間を俗界から隔離される専用施設であったことは諸事例から明らかにし得たと思う。そして同時に、皇帝においては自然災害等による人民の疲弊や危機的状况に直面した時に、災異説に基づきみずからへの戒めや譴責のほかに、臨時的に「斎宮」に斎居して神に祈ることを通じて天下に蠲免施策を施すという対処法をとった事例をも明らかにできた。このことは逆に、例えば皇極紀元年八月甲申朔条の南淵河の上に祈雨したという記事や天武紀七年夏四月に挙行せんとした倉梯斎宮での親祭においても、相互に通底しあう要素を指摘できるものであった。

もっとも、現在北京天壇公園にのこる清朝時代の「斎宮」はともかく、古代にあった複数個所の「斎宮」についてその規模や具体的な構造等については不明で、将来の発掘調査の成果をまつて再考しなければならない。併せて、小南一郎氏やアンネリーゼ・ビュリング氏らの研究に学んで、河伯祭祀をめぐる「西門豹故事」の具体的な画像の有無を含め、更に滑稽列伝の背景を究める必要もあると感じた。また、皇帝祭祀において道教の影響がどの程度あつて、それが斎宮での斎戒等にどう影響したのかという点についても解明すべき課題は多い。とりわけ、「斎宮」の語自体が果たしてどの時代まで遡りうるのかについてももう少し実証的な作業が必要ではないかと反省している。

第二部…「斎宮」の日本的受容と展開（一章～三章）

第一部の結果を受けて、ここでは古代の日本で使用された「斎宮」の語について、特に『日本書紀』を題材に再検討してみた。日本における「斎宮」の訓義についてはすでに国文学者西宮一民氏の研究成果があるため、当然本稿もそれに依拠する形で、改めて各条文を読解してみた。そこには、やがて徐々に「伊勢斎宮」を指す専用語として収斂されてしまう以前の「斎宮」の姿をみることもできた。ほとんどは西宮説を追認するような作業ではあったが、ただ垂仁紀二十五年の「斎宮」に関してはそれを「イツキノミヤ」と考えることはできなかった（第一章）。もし五十鈴川の上にたてられた件の「斎宮」を倭姫命の斎居する「イツキノミヤ」と解してしまうと、本文の分脈からはその「斎宮」へ天照大神がはじめて天下るということになり、それではその前にある「祠」は何だったのか解らなくなるという矛盾した結果になってしまうからである。垂仁紀（巻六）は「文武朝に選定され」、「元明朝に漢籍を使い潤色」が施されたという森博達氏の研究成果にもとづいて、当該二十五年紀の五十鈴川上「斎宮」については既成の先入観に囚われない新たな解釈が必要である。

また、天武紀七年の「倉梯齋宮」に関しては、それを十市皇女の赴く齋宮だとする江戸時代以来の根強い見解が一部には今もあり消えていない。本稿では「齋宮」Ⅱ「皇女」という固定観念にはとらわれずに、天武朝から文武朝にかけての気候学の成果やその間に生じた自然災害、飢饉と疫病などを時系列的に表にまとめ、文武天皇が中国皇帝に比擬しておこなった慶雲二年三月～四月の親祭と蠲免策の実施条文に天武紀七年の親祭を重ねて、それが当時の自然災害下における天武の蠲免施策の一環であったことを初めて明らかにし得たと考える。それには、災害時において皇帝自らが齋宮齋居して臨時の親祭を行い、その直後に蠲免施策を下すという事例を第一部で学んだ成果が生きたと考える。ただ、天武朝以降に進められた神祇制度の改革という大きな歴史的流れのなかに整合性をもって位置づけることが出来なかった点は今後の重要な課題の一つであろう。

わが国に「齋宮」の語が定着していった主要な流れを齋内親王の呼称の側面から考察したのが第三章である。榎村寛之氏の論文で初めて指摘された「齋内親王」と「齋（女）王」の根拠にもとづき、歴代齋内親王の呼称の変遷を平安時代には主として公家の日記を材料として一覽表に纏めた。本稿では、通称「齋王」の定着・変遷だけではなく、避称「齋宮」とも合わせてその並存時代から単独定着までを初めて通覧してみせた点は評価できると自負しているが、いかんせん呼称だけを追跡しただけに留まっているので、今後はそれらの呼称の変化を歴史的事象のなかに位置付けて、変化の背後にある政治・社会情勢との相関関係のなかで説明ができるかどうか、そういう側面からも深化させていく必要性があると思う。

第三部…伊勢齋宮史の基本的用語（一章～三章）

ここでは、伊勢齋宮史上における基本的用語（テクニカルターム）のうちから、「退下と帰京」の概念規定、「御汗殿」の訓みの問題、そして「別れの御櫛」の三件について問題点を整理し、卑見を述べた。かつては私の周囲にも「退下」と「帰京」とをほぼ同義語として使用される専門家もおられたのは事実であり、それも拙稿発表後は見かけなくなったが、将来の若い世代の方たちのために敢えて念を押すことにしたものである。

次に、「御汗殿」か「御汗殿」かは今もなお悩ましい問題で、卑見では従来どおり「汗（アセ）」ではなく「汗（ケガレ）」説を採ったが、『中右記』や『壬生家文書』に「汗」の字を使う記事があるため、断定は避けなければならなかった。これはもはや刊本の上であれこれ議論しても仕方のない限界性があり、それぞれの底本のレベルでの議論が今後も必要であるし、同時に都や伊勢などにおける発掘調査の出土遺物にも細心の注意をもって見守ることが求められている。ともあれ、問題の所在を明確にすることだけはできたかと考えている。

次に、いわゆる「別れの御櫛」という俗称が生まれたのは、『往生要集』などからの影響もあり、特に十一世紀初頭頃に注目されつつあった末法思想の影響を考慮すべきであろう。問題なのは、後代に普及したその俗称をもって齋宮制度の当初から櫛自体にそのような「別れ」とか「縁切り」とか「絶縁」などというような呪術的機能があつたかのごとくに錯覚してすべてを理解したような気になつてしまう危険性である。天武紀七年の齋宮の場合にもあつたように、先入主や固定観念によつて見えなくなつてしまう事柄は多い。そのために、有職故実の書によつて関係の記事を丁寧に読み解き、また考古遺物の助けも借りて誤解や錯誤のない齋内親王の小櫛（額櫛）の原初的な意味を提示し得たと考えている。併せて、折口信夫氏が提唱した沖縄先島辺りの婚礼習俗にみる「むらに別れの櫛」についても、はなはだ僭越ながら、最も隣接する中国大陸からの文化受容とその後の変容という

視点から考慮すべき余地のあることなど三点の問題を提言したつもりである。

第四部…伊勢斎宮史における諸問題（一章～五章）

最後に、斎宮史上における諸問題のうちから、五つのテーマを選んで考察した。その際に、できる限り考古学的な発掘調査成果の一部を生かせるように配慮した。第一章に取り組んだのは、伊勢斎宮の立地問題である。従来から、ややもすると形而上学的な観点からの論説が多かったので、形而下の問題として、（一）洪水被害のない安心して住める場所であること、（二）恒例の神事に必修の禊の出来る河川に近接していること、（三）斎宮寮の運営上、都のみならず、東海・関東方面からの物資の輸送上から発達した外港・要津に恵まれた水陸交通上の要衝の地である事、（四）ヤマトの王権による土地開発等で以前から政治的関係の深い土地であること等を実証し、伊勢斎宮とはそういう条件を全て備えた絶妙の位置に置かれたことを明らかにした。斎宮の設置には大鹿氏を介した舒明一族との政治的関係を抜きにしては考えられないことも併せて主張しておいた。

第二章では、伊勢河口頓宮の有力な候補地を提示した。従来からある諸説は例外なく奈良時代の伊勢「河口」を江戸時代に十七ヶ村が合併して成った近世以降の新しい川口村の範疇で考えて来たため、雲出川兩岸に隣接してあるべき「河口関」までも旧御城村の山の手に比定するなど、あり得ない推論に終始してきた。延べにして約六十余人もの斎内親王や前斎内親王がここを通り、その都度用意された頓宮用地は国衙―郡衙を通じて恒常的に管理されていたはずで、聖武行幸時の頓宮（関宮）も同所に置かれたものである。遺跡地図によって文化財保護法の網はかけられたので、今後は地元教育委員会を中心とする遺跡の保護と発掘調査の実施によりその確実な解明を期するばかりである。

第三章には、八世紀末から九世紀初頭の頃に造営事業がなされたはずの方格地割に関する初現的な全体計画案は以外にもはやく、聖武天皇の時代にはすでにあったのではなかったか、という問題を考察してみた。それは、判明している方格地割の北側から西側に接して大きくL字状に分布した古墳（六基ないし九基）の存在から導かれた試案である。その六基の古墳は既に破壊・削平を受けており、埋もれた周溝の埋土から出土した土器がどれも七世紀末～八世紀初頭（乃至前葉頃）のものに限られていて、ある目的を以てほぼ同時期に削平された想定できるものであった。問題は、それならばなぜ造営実現までに時間がかかったのか、その遅延した理由は何か、という未解決の課題が残っている。

第四章では伊勢斎宮が移転先の度会離宮で焼亡するという事態になったことを取り上げて、それがとりわけ延暦十年代から弘仁年間にかけて表面化していた神郡内部の諸矛盾を背景にした放火（神火）事件である蓋然性の極めて高いことを立証しようとした。そのため、神郡の田租検校等の雑務執行の主導権限を巡って太神宮司と伊勢国衙との間で攻防が繰り返されていた現状を太政官符などを使って明らかにした。両者には、神戸百姓と郡司とを間に挟んで利害の対立があったのであり、それが放火事件の引き金になったと考えられた。併せて、九世紀前半代を中心とした火災記事を整理し、承和六年の伊勢斎宮の火災記事の書き方が他の神火記事と同じ類型であること、および神火の頻発した天平宝字年間の社会情勢と九世紀前半代のそれとが実によく似ていて、いずれも「早魃・飢饉・疫病蔓延と地震」に見舞われていたこと等を傍証として提示した。

それでもなお、単なる失火か放火かの評価は分かれるだろう。従って、今後この問題に取り組む場合には、斎宮跡の発掘調査は言うに及ばず、国史

跡離宮院跡の発掘調査および郡衙跡の発見と解明とが今後に不可欠の課題になるだろう。焼け出された伊勢斎宮が旧地に戻った後の承和十二年六月八日の勅により改めて「斎宮寮頭と助に大神宮ならびに多気度会両神郡の雑務を検校させる」としたことの意義は大きく、それは神郡内における斎宮寮の政治的位置づけを大きく変換させる行政改革であった。従つてもはや、斎宮跡だけの解明ではこの問題は解決しそうにはない、そういうレベルの課題なのである。こういう勅が出された背景には神郡雑務をめぐる（恐らくは種々の不正問題も絡む）関係者間の利害の対立が根深いものであったことを裏付けてもいる。実態を知らなければ知るほど、離宮斎宮の火災が単なる失火程度の出来事ではなかったことが実感されるのである。

大神宮および神郡雑務を巡る承和十二年の行政改革は、当時伊勢国守兼斎宮権頭であった長峯宿祢高名の建言によるものと推断したが、その結果伊勢斎宮寮にも「目代」が登場することになったと推測される。九世紀伊勢斎宮寮における「目代」の人物像については、次章で取り扱った。

第五章は、斎宮跡第八十三次調査区の井戸（SE5850）から出土した「目代」墨書土器を題材にして、その墨書された灰釉陶器皿の考古学的年代観から九世紀前半代と確定するとともに、それが消費地である伊勢斎宮で使用された実年代を、調査区内の建物遺構の変遷過程を勘案して、神火事件（八三九年）に遭遇して多気の旧地に戻って以降九世紀の五十年代頃までの間と推測することができた。その場合、承和十二年の行政改革で伊勢斎宮寮の政治的位置づけが変わった時、即ち「大神宮および多気度会両神郡の雑務検校を寮頭と助が担う」ことになった段階で、新たに「目代」の出現を見た位置付けた。吉永壮志氏の論考「八・九世紀の目代」のお蔭で、この斎宮寮における「目代」が代務者として課された職掌も神郡雑務の検校に伴う「寮庫の物品出納」に関わるものであったと想定することができた。同じ井戸から出土した「少允殿」墨書土器の存在を勘案すると、一案としてはその墨書「目代」は大属・少属の代務者ではなかったかとも推測するに至った。

併せて、同年の第八十二次調査では「棕人」墨書土器（奈良時代前期）や「蔵長」墨書土器（平安前Ⅱ期）なども出土しており、出土地点も遺物の年代も異なるが、伊勢斎宮の寮庫の出納事務管理に携わる人物が奈良時代前期以降連綿と存在していたことを出土遺物によって初めて証明できたのであった。斎宮寮蔵部司の官人らとともに、神郡雑務等の検校事務にかかわって墨書「目代」も活動していたと想定される。

今後は、発掘調査によってもたらされる遺構・遺物の情報を承和十二年の勅を起点とした政治的変化のなかで有機的に捉える試みを続けていく必要がある。近年は、従来の倉庫群より西側の区画でも新たな倉庫群の検出があるようなので、その時代的な変遷を把握しつつ、墨書「目代」の人物像についての妥当性を更に検証していくことが残された課題の一つでもある。

